



ВОСКРЕСЕНИЕ
РОМАН

Л. Н. ТОЛСТОЙ



著イトスルト・フレ

活 復

譯 夢 曙 昇



イトスルトの中紙執「活復」

版 出 社 潮 新

非賣品

世界文學全集(23)

復活

第九回配本

昭和二年十一月一日印刷
昭和二年十一月十五日發行

翻譯者 昇 曙 夢

發行者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町三番地

發行所 新潮社

電話牛込

八八八八
二〇〇〇〇
四九八七六
番番番番番

振替東京 二二、四五〇番

序

トルストイの『復活』——それは帝政ロシアの峻厳なる否定であると同時に、新ロシアの偉大なる豫言である。そこには帝政ロシアが、その社會生活のあらゆる方面に互つて、痛烈に批判され、解剖されてゐるばかりでなく、その不完全なる社會制度の下に呻吟しつゝあるロシア國民の理想の悶えと良心の惱みとが、自由解放に對する熱烈なる雄叫びとなつて、凡てのページから響いてゐる。ロシアは今日革命に遭遇して、舊ロシアの罪惡は殆んど一掃されたかのやうであるが、然しロシアに革命の起らなければならなかつた原因の穿鑿に至つては、一に『復活』に俟たなければならぬのみならず、トルストイが本書に暗示した理想は未だ完全に實現されてゐない。人類の未來に對してなほ教へる所が多い。たとへ舊ロシアは亡び、凡ての著述はその價值を失ふ時があつても、ひとり『復活』のみはロシアの偉大なる悲劇的過去を記念する唯一の金字塔として、またロシアの革命を暗示した豫言の書として、永遠に残るであらう。

『復活』は帝政時代の横暴なる檢閲官の爲めに、殆んどその四分の一を削除されたばかりでなく、多數の作中人物が要路の人々をモデルに取つたので、ロシアでも忌憚なき批評と研究とが出来なかつた。ところが、革命後即ち一九一八年にポドナールスキイ氏によつて原作復興版が刊行されてから、ロシア國民は初めて『復活』の完本を手にして二十年來の渴を醫することが出来た。本譯本もこの復興版を臺本にしたのだから、初めて完全な原文直接譯が出来たわけである。原書には舊檢閲官の抹殺した箇所は特に傾斜體活字を使つて區別してあるが、本譯本では煩を厭うて區別しなかつた。書中の英佛語も種々の不便からこれを省いて、その代り譯文に點線を附しておいた。

附録の二篇『主人と下男』、『高架索の捕虜』は、一九一二年サブリン發行のモスクワ版全集から譯したものである。

一九一七年十月

昇 曙 夢 識

解 説

トルストイが晩年掉尾の大作として永遠に記念せらるべき『復活』は一八九九年に書かれ、最初雑誌『ニーツ』に連載されたもので、トルストイはこの時既に七十歳を過ぎてゐた。丁度『クロイツェル・ソナタ』を書いてから十年後、その偉大なる終焉から十一年前に當る。然しトルストイがこの作を思ひ立つたのは可なり早かつた。それは一八八〇年代の末頃のことであつたと思ふが、或る時偶然友人のコーニといふ法律家から、フィンランドの或る別荘番の娘でロザリヤといふ十六歳になる無垢の一處女が、大學を卒業したばかりの一青年の爲めに誘惑された結果、主人の家を追はれて賣笑婦に墮落し、遂に謀殺竊盜の罪に擬せられて入獄したといふ事實談を聞いて、トルストイは大に興味を催し、間もなく『復活』の著に着手したのである。が、別に急ぐやうな様子もなく、幾度か筆を取つてはまた放棄するといふ風であつた。然るに一八九五年、カフカズにドゥホポール教徒事件が起つた。ドゥホポールは十八世紀の中頃から、ロシアに發生した一宗派であつて、原始基督教の教義を嚴守し、徹底的に無抵抗主義と同胞主義を實行すると共に、一方には神の王國のみを認めて、國家、法律、兵役義務といふやうな地上一切の權威と掟とを認めまいとした團體である。即ち、トルストイの教義をそのままに實行してゐたもので、それが爲め政府はあらゆる迫害を彼等に加へ、一八九五年にはカザック兵をして彼等を殺戮せしめ、一千餘人の教徒は非業の最後を遂げた。然し彼等は堅く信仰を持って毫も態度を變へないので、政府でも持てあまして遂に彼等に國外追放を命じた。所が、彼等はそれに要する旅費を持つてゐなかつたので、既にこれまでも幾度か世の仁者に訴へて彼等を救助して來たトルストイは、豫て書きかけてゐた『復活』を急いで書き上げて、その原稿料の全部を彼等の北米カナダ移住費として提供した。『復活』の出版

は實にこの崇高なほど美しい人道的精神の發露から來たのである。

トルストイは『クロイツェル・ソナタ』を書いてから、宗教道德問題に没頭して、本書に附した『主人と下男』の外は久しく小説の筆を絶つてゐたので、彼の手から再び『復活』の如き大作が出ようとは何人も豫期してゐなかつた。それだけにこの作が一旦公けにされるや、國の内外に非常な反響を喚起したが、同時にこの一篇によつて、トルストイの創作力が従來に比して少しも衰へないばかりか、老來益々圓熟し充實して來たことを實證した。

トルストイはその晩年の藝術的努力を『復活』の一篇に傾注したとも言へる。この作は貴族と一娼婦の魂たまごの更生の歴史を主材として、作者の思想、精神、宗教、藝術のすべてを具現し、結晶したものである。従つて『復活』は單に一個の藝術品として優すぐれてゐるばかりでなく、この曠世の大偉人の主張のあらゆる方面を窺ふことの出来る點から言つても、最も重要な意義を有する代表的作品である。ロマン・ローランは言つてゐる、『復活』は或る意味でトルストイの藝術的聖書である。それは『戦争と平和』が生涯の成熟期を飾つた如く、生涯の終りを統治してゐる。それは最後の華であつて、恐らくは最高峰であり、——たとひ強大でないとしても、——その見えざる山嶺は雲霧の中に没してゐる。』と。クロボトキンクロボトキンは平素トルストイと説を異にしてゐたにも拘らず、『復活』に就いては斯う言つてゐる。「ヤコフ稀に達したこの作者が、この小説に於いて示した精力と若々しさを以て、單に驚歎すべきものと云つただけでは言ひ足りない。若しトルストイが、『復活』の他に何も書かなかつたとしても、仍且つ彼は大作家の一人として認められたであらうと思はれる程に、この作の絶對的な藝術性は高いものである。」

七十翁のトルストイは『復活』に於いて、自ら經驗した嵐の如き自己の生活、境遇、過去の過失、自己の信仰、道德、神聖なる憤怒、悲痛等、自己の廣い經驗を靜かに觀察して、高所より批判すると同時に、廣く現存の社會、政治、

經濟、法律、裁判、監獄、教育、宗教、革命、土地等に關する各種の問題に接觸して、峻嚴なる批評と深刻なる解剖とを加へてゐる。是等は勿論ロシアを舞臺としてはゐるが、世界各國に共通した問題であるから、その點から言つても、この一篇こそは正に現代文明の一大批評であり、現代社會の虚偽と偽善とに對する一大戰闘であり、人間生活の罪惡に對する恐るべき死の宣告である。而して小説の大半が罪人の歴史であるから、社會のどん底に潛んでゐる恐るべき罪惡の種々相を赤裸々に摘抉して、その原因を不完全なる社會組織と不合理なる裁判制度とに歸し、權力者にのみ必要なる法律、富豪にのみ有利なる經濟組織、生命なき宗教、藻脱もくけの殼か同様の道德觀が如何に健全なる人の子を齷こ毒どしつゝあるかを明確に暴露してゐる。而もそれが一國一社會に限らず、萬民に一樣に訴ふところがあり、何處に於いても同じ効果を齎らすべき普遍性と永遠性を持つてゐる。その中でも特に本篇の基調ともいふべき最も主要なる問題、「人は人を裁き且つ罰する權利を持つて居るか？ 裁判所及び監獄制度を保留することは合理的であるか？」——來るべき世紀が解決しなければならぬこの恐ろしい問題が、力強く讀者に印象される。で、少くとも吾々は今日の監獄制度乃至刑罰制度に對して深刻な疑問を抱かすには、この作を読むことが出来ない。「この書は世紀の良心の重荷となるだらう。」と言つたフランスの批評家の言葉は誠に適切である。

然し藝術家の精神は、『戰爭と平和』の場合と同じく、その題材を越えて先へ進んでゐる。この點に於いて『復活』は『イヴァン・イリイチの死』や『クロイツェル・ソナタ』の陰慘な皮肉や動亂せる内心に、宗教的の清朗さを加へた作品だと言へよう。そしてそれは實にトルストイ自身の内面世界から直接反映されたものである。若し『イヴァン・イリイチの死』と『クロイツェル・ソナタ』とが、トルストイの道德の發達及びその道德によつて指導された彼の藝術的經驗に於ける禁欲的時期を代表してゐるとすれば、その後數年を経過した一八九〇年代の中頃には、この峻嚴なる禁欲主義

は或る程度まで和なごげられ、當時トルストイが宣傳してゐた「無抵抗主義」は、幾分その否定の鋭い鋒芒を收めて餘程寛大になつてゐる。一八九五年の『主人と下男』は即ちトルストイが道德的に寛大になつたこの心持の表現であつた。その後更にトルストイの消極的の道德は、幾分別な、より多く合理的な地盤を攝取して、それが遂に『復活』となつて現れたのである。この點から言へば、『復活』は作者の道德的經驗の告白であるが、同時にこの作には『アンナ・カレーニナ』の後、トルストイが意圖して來た「全價値の轉倒」の總勘定が與へられてゐる。

『復活』は極めて複雑な性格を藝術的に解剖したもので、作者はこの場合、單に道德家乃至禁欲主義者としてばかりでなく、偉大なる諷刺家として立つてゐる。作の大半が諷刺的で、所々パンフレットの形さへ呈してゐる。而もトルストイの道德的教義はこの作に於て益々廣汎に、益々彈力性を増し、益々人道的になつてゐる。主人公ネフリュードフの進んでゐる道が必ずしも吾々の道ではないが、彼には吾々の共鳴するところが多い。彼の精神的苦惱乃至探求が如何にも人間的で、魅惑的ですらあるが爲め、吾々は彼の見解や判断の凡てを受け入れないまでも、彼を以て道德を創成する使命を帯びた眞の人類の友であると認めるに躊躇しない。トルストイは自分の複雑な本性の最も好い方面を彼に附與し、自己の思想が擴大し深化しつゝ、時代救済力の一つとなつた時期に於て、その宣傳を彼に一任してゐる。

トルストイがその作品の中で自分の思想感情を、少くともその一面を代表せしめようとする人物に、好んでネフリュードフの名を用ゐてゐることは、誰にも知られてゐる事實である。吾々は既に、初期の作品『地主の朝』及び『青年時代』に於いて、ドミートリイ・ネフリュードフなる人物を見る。これは既に作者自身の主觀的自叙傳的人物の一人であつて、トルストイの精神生活の或る一時期を代表してゐる。今またトルストイはその活動の晩年に『復活』といふ偉大なる藝術的經驗を統整するにあつて、再びドミートリイ・ネフリュードフの名前を思ひ出して、これを新しい主

人公の名にし、一八九〇年代に於ける自己の思想傾向を代表させてゐる。

ネフリユードフに於いては、トルストイの性格を多少具現してゐる他の作中人物に見るやうな、智的放縱や精神的我儘が殆どない。精神の均齊と合理性とがその特質である。ネフリユードフのこの特異性は『復活』に見るが如き道德的經驗の統整に、餘程適應してゐる。また、ネフリユードフには、イルテーニエフ（當時時代）の主人公や、オレーニン（カザツク）の主人公や、レーウイン（アナ・カレニ）の副主人公などがその向上の途上、苦闘を續けて來た精神的混亂も騷擾もない。ネフリユードフの内面世界は透明で、よく吾々の前に展開されてゐる。だから吾々はトルストイの直接の證明を俟つまでもなく、『復活』を一讀すれば、ネフリユードフに就いてかう云ふことが出来る。「ネフリユードフの内にも、すべての人々に於けるが如く、二つの自我があつた。一つは精神的の自我で、これは他人に取つても幸福となるやうな幸福のみを求めた。

もう一つは動物的の自我で、これは自分の幸福ばかり願つて、それが爲には萬人の幸福を犠牲にしても構はぬといふ代物であつた。」（第一編 十四章）それと同時に、最初の數章を讀めば、ネフリユードフに於ける第二の動物的自我が第一の精神的自我を壓倒してゐるのはほんの一時的事であることが明白になる。多くの關係に於いて規範的現象であるかのやうに見えるこの動物的自我の一時の勝利は、ネフリユードフにとつては變態的現象であり、その本性の惡化であり、更にトルストイの言葉に従へば利己主義の發作はっさくであると云はなければならぬ。ネフリユードフは本來「道德的要求の名に於いてする犠牲は高尚なる精神的悅樂を齎らすものであることを考へて」（第一編 十二章）ゐる人間である。

彼は既にその幸福なる青年時代に、大學の卒業論文に『土地私有論』を書いて、それを實證する爲めに父から相續した土地を百姓達に分配した時も（第一編 十二章）亦無邪氣な男としてカチューシャを愛し、その愛が彼にとつても彼女にとつても墮落からの唯一の救ひであつた時代にも（同）、彼は依然として今日と同じく高尚な精神の持主であつた。この高尚な

純潔な精神が「利己主義の發作」とトルストイが名づけた衝動によつて壓倒されたのはほんの一時であつた。で、ネフリードフがこの動物的自我の支配を脱する爲めには、單に彼の目を覺さしめる最初の強い印象だけで十分であつた。

この精神的自我の動物的自我に對する勝利、換言すれば彼の更生——即ち「復活」が、目覺めたる良心の影響のもとに如何に迅速に力強く行はれたかは驚くばかりである。その轉機を詳密に描いてゐるのが第一編の二十八章である。

同時にこれ迄ネフリードフの過して來た生活は、彼にとつて忽ち嫌惡すべきものとなり、青年時代の魅惑的な追憶がその心に蘇つた。彼は生に滿ちた爽かき、若々しさに包まれた。そして痛々しい程悲しくなつた。そこでトルストイは以前の純潔なアイデアリスチックなネフリードフと今の墮落したネフリードフとを比較してゐる。(第一編二十八章)

舊生活と新生活とのコントラストの強い意識は、マースロワに對する有罪の判決後、良心の強い叫びと相俟つてネフリードフに道徳的更生への途を示した。それは彼の精神的能力が一丸となつて働いたものではあつたが、特に吾々の注意を惹くのは、ネフリードフが慈悲と同情との感情を殆んど最高の徳義と見るに至つたことである。これまでとても幾度か彼はこの感情を體驗した。また、體驗しない時には、その缺如してゐることを悲しんで、努めて之を喚起しようとした。そしてこの精神の働きこそは最高の道徳的根源であつて、人間の精神世界に於いても、人と人との關係に於いても正に最高位を占むべきものと觀て居つた。想ふにそれは又、トルストイ自身の道徳的教義の發達に於いても新しい一步であつて、この「一步」は、彼の教義と時代の先驅的思想や運動とを結合したものであつた。この「一步」以前のトルストイの道徳は狹隘で、冷酷で、禁欲的な、謂はゞ「無慈悲な」ものであつた。それは人類愛を宣傳はしたが、あまりに要求高く峻厳であつた爲め、本當に人間に對する慈悲と憐憫の情に徹してゐなかつた。が、今やこの新しい時期は展開して、彼の道徳は貧しき弱き罪深き迷へる人間に對する生きた同情に貫かれ、最早「闇の力」の凄慘

や、『イワン・イリイチ』の陰惨な死の苦痛や、『クロイツェル・ソナタ』の恐るべき幻想を以て人々を責めるやうなことはしなかつた。この見地から考へて見ると、『復活』は『イワン・イリイチの死』、殊に『クロイツェル・ソナタ』に對する反駁の如き觀がある。

トルストイのかゝる慈悲への一轉化の鮮やかなる説明は第二編三十八章のうちに書いてある。この注意すべき一節は、その中の「愛」といふ語を「慈悲」といふ語に換へると、尙一層明瞭になる。而もそれは言葉の變更のみに止まらず、幾分異つた實際問題の提供となるであらう。即ち人は性の合はない嫌ひな者を強ひて愛することは出来ない、けれど斯くの如き者に對しても慈悲の情を喚び起すことは出来る。ネフリユードフは謂はゞこの慈悲の情を喚び起す修養をしたのだ。慈悲憐憫の修養こそは、雄辯なる説教や嚴めしき譴責にも増して、より大なる道德的價値を有つてゐる。第三編の五章に於いてネフリユードフは、シベリヤへの旅行中、マースロワに對して未だ曾て經驗したことのない深い情を懐くやうになるが、この感情こそは正に純真なる慈悲憐憫の情であらねばならない。何を考へてゐても、何をしてゐても、彼の支配的気分は、慈悲憐憫の感情であつて、それは單に彼女一人に對するばかりではなく、萬人に行き互る底のものであつた。この感情はまるでネフリユードフの心に今まで出口を得なかつた愛の泉を開いたも同然であつた。そして今やこの泉は會ふ限りの凡ての人々に向つて注がれた。

『復活』には主人公の外、あらゆる階級の典型的人物が無數に取扱はれてゐる。身分低き獄吏から政治界の巨頭、各種官吏のタイプ、裁判官、軍人、宗教家、貴族の代表者を、そのあらゆる微細さに互つて、くつきりと浮彫りやうに鮮かに描き分けた手腕は驚歎の外ない。そこには『クロイツェル・ソナタ』に見るやうな、精一杯に描かれた同じ強さの肖像畫があり、自然主義的精彩に充ちた野獸性の描寫がある。性格の理解、心理の解剖は、例によつて靈活を極めて

ゐると共に、一方作者の觀照は益々透明になり、健全になり、峻嚴になり、赤裸々な人間の肉を描寫して、驚くべき寫實主義の極致を示してゐる。而もそれ等の人物は、教務大臣トポロフ(第二卷 二十七章)の名を以て描かれてゐる當時政界の大立物であつた獨裁政治の擁護者ポベドノスツエフを初め、何れも皆現實社會から取つた人々であるから、それ等の人々を通して吾々の前には帝政ロシアの全姿態が、社會組織の缺陷に對する作者の勁烈な批評と共に、戰慄すべき形を取つて展開される。恐らく數千卷の書を繙くよりも、舊ロシアの姿は『復活』一篇に盡きてゐる、と言つても誣言でないと思ふ。

それからカテューシャを中心としての囚人の生活、シモンソン初め幾多の男女革命家の世界は、本篇の重要な部分を占めてゐるだけに、特に驚歎すべき精彩な描寫に充ちてゐる。それは何といふ豊富なる典型、何といふ公平な觀察、何といふ博大な理解であらう。トルストイは元來囚人や革命家には親しみと同情とを持ち得なかつた。寧ろ革命家を忌み嫌つてさへゐた。然し一旦彼等の世界に近づいて、彼等がかうならなければならなかつた原因に想到して行くと、今更のやうに彼等の境遇に同情せずにはゐられなかつた。そこに平靜なる理智と共に、人間の内に對する深い同感、慈悲と憐憫の情が働いてゐる。監獄内に於ける女囚達の荒みきつた生活と、（註）瘴気（註）の混み合ひとは恐ろしいほどであるが、トルストイは彼等各々の心に、「屈辱の下に隠れてゐる苦惱を見、厚顔の假面の下なる涙に曇る顔を見た」。マースロワの惡に染んだ心にだん／＼と溶け入つて、遂に犠牲の焰となつて彼女を輝かした純潔な愛の微光は、眞晝の太陽の光線のやうに周圍の者を温めずには措かなかつた。此處には殘忍な獄吏に對しても、刑の執行者に對してすらも殘酷な氣分がない。自然のやうに廣い温かい同情を以て、あらゆる物に接してゐる。トルストイの藝術の底を流るゝ温かい生命の力は、特にこの篇に於いて敘述の集中と對話の緊張味と共に、惻々として吾々に迫つて來る。自分の獄吏生活にも娘のピアノにも飽きてゐる一典獄の上にも、職務と良心との矛盾の惱みを僅かに酒に紛らしてゐるシベリヤの一總督の

上にも、監獄の精細を極めた描寫の上にも、ロマン・ローランが言つてゐるやうに、この作の凡てのページを通して「トルストイの輝ける灰青色の鋭い眼、人の心を直ちに見ぬき、あらゆる人の心に神を見る眼」を認めることが出来る。トルストイは『復活』を書くに當つて、幾度か監獄の視察を願つたけれど許されなかつたので、そのうちに監獄關係の官吏と知合ひになり、彼を時々自宅に呼んで食事を共にしながら、約一年間に亘つて精しく監獄の内部に關する話を聞いたと傳へられてゐるが、凡そ監獄を描いてこれ程眞に追つた作品は他に類が無からうと思ふ。

『復活』——それは人間苦惱の凄慘な描寫である。然しその中にも心を惹くやうな若々しい詩的な描寫が無いではない。本篇の初めに出て来る春の自然の鬱勃たる發育力を描いた一節、昇天祭の日の野遊びに、若い男女がライラックの叢の蔭で、無心の接吻を交はすあたり、初戀の思ひ出など、それは燃ゆるやうな青春の美と力とに溢れた美はしい詩の一つである。殊に若きネフリュードフが、處女カテューシャを強要する夜の描寫などには、七十翁の筆に成つたとは思へぬみづ／＼しさがある。單に藝術品として見ても、正に爛熟の限りに達したものであつて、トルストイ作中の最高位に在ることは素より言ふを待たない。

この作に對するたゞ一つの非難は、ロマン・ローランなども言つてゐるやうに、主人公ネフリュードフが十分に客觀的實在性を具備してゐない點である。それはトルストイ自身の理想を賦與した人物だからである。『戦争と平和』のアン・ドレイ公爵、ピエル・ベズィホフ、『アンナ・カレーニナ』のレーヴィンなど、同様に彼の分身と見るべき人物にも矢張りこの憾みがあつたが、ネフリュードフほど甚しくはなかつた。といふのは、是等の人物はその境遇及び年齢に於いて、トルストイのその時の心的状態に最も近かつたからである。然しネフリュードフに在つては、作者は三十五歳の享樂慾の強い一紳士に、七十翁の肉を離れた靈を宿らせてゐる。そこに著るしく不自然な點の見えるのは、この種の自叙傳

的人物に於いて止むを得ないことである。

その他この作に於ける性慾描寫も多少問題になつてゐる。殊にイギリスの或る貸出圖書館や書肆では、『復活』が女の情事を聖書の如くあからさまに取扱つてゐるといふ點から、これを不道德の書物として目錄の中から削除したことがあると傳へられてゐる。然しこの問題に就ては、イギリスの「反愛會」會員ジョン・ペロウズが『復活』の性慾描寫を非難した手紙に答へたトルストイ自身の手紙（一九〇一年）を擧げるだけに止めたい。同時にこの手紙は性慾問題以外に於ても、『復活』を讀む人々に取つて、多少參考になると思ふから、冒頭の數行を省いてその全文を掲げよう。

「私はあなたのお手紙を二度讀み返し、熟慮に熟慮を重ねましたが、遂に何等決定的な解決を見るに至りませんでした。あなたの仰しやることは、或は正しいかも知れません。併しそれは、この書物を讀むすべての人には當てはまらないだらうと思ひます。この書物を始めから終まで讀んでその意味をすっかり飲み込まない人達には、よくない感化を及ぼさないと限りません。併しました——私の聞ひ所はそこにあるのですが——それとは全く反對の感化を與へるかも知れません。私が自分を辯護するために云ひ得ることは唯これだけです、即ち書物を讀む時に私が主として興味を感じるものは、*Weltanschauung des Authors*（譯、ドイツ語で『著者の世界觀』といふ意味です）。言ひ換へるならば、著者が何を好き何を憎んでゐるかといふことです。そしてさういふ考へで私の書物を讀んだ人は、誰でも、著者が何を好み何を嫌つてゐるかといふことを知つて、著者の氣持に感化されることと思ひます。そして又私はかういふことを云ふことが出來ます、つまり私はこの書物を書く時、心の底から色慾を嫌つてゐたのであつて、その嫌惡の情を表現することが、この書物の主要な目的の一つだつたのです。若しその點で失敗してゐたとすれば甚だ残念です。そして若しあなたが御指摘下さいました場面に於て、不注意にも、あなた

の心にさういふ悪い印象を與へるやうな描寫をしたとすれば、罪は私にあると申し上げるより外ありません。思ふに吾々は、吾々の良心と神によつて、吾々の行爲の結果からではなく、その動機に溯つて、裁きを受けるでせう。そして私の動機は悪くなかつたことを望みます。」

『主人と下男』（一八九五年作）は前にも述べた通り、『クロイツェル・ソナタ』と『復活』との中間に位し、この十年間に於けるトルストイの思想及び道徳觀上の變遷の過程を示す重要な作品である。雪の曠野に途を失つて凍え行く主従の運命に作者の死生觀を披瀝して、人はその友の爲めに生命を失ふに至つて永久に生きるの道理を具現した名篇で、一面『イワン・イリイチの死』などと同じ心境を窺つたものであるが、その教訓的内容から言へば、寧ろ「通俗物語」に屬すべき作品である。物凄いい吹雪の夜の光景、その眞唯中で死の恐怖に驅られながらも利益と收入の計算を忘れない強慾な主人の不安と天命に安んじて靜かに死を待つ下男の忍従との驚くべき性格對照、最後に主人がその心の底に潜んでゐた慈悲の衝動の下に一身を犠牲にして下男を救ふに至る莊嚴なる心境の變化、是等の感動すべき場面がその精細なる寫實主義的描寫と共に、隨所に天成の美玉を見せてゐる。

『高架索の捕虜』（一八八五年作）は作者がその藝術論の中で特に普遍的藝術の一典型として、自ら推奨した名篇である。豪宕なるカフカズの自然と質朴なる部落の生活とを背景としたロンヤの若き將校の不自由勝なる捕虜生活の描寫は、到る處輝くばかりの美と同情と可笑味とに富んでゐる。特に後半に至り韃靼の一少女に救はれた將校が、薄闇の夜を通して途中のあらゆる危険と戦ひながら遂に味方の要塞まで逃げ延びる勇壯なる光景は、躍動せる敘述と共に一讀三歎を禁じ得ない魅力を持つてゐる。世界兒童文學中の白眉として最も有名である。

トルストイ年譜

一八二八年 八月二十八日、トゥーラ縣ヤースナヤ・ポリャナの村莊に生る。ロシヤ名門の出。姓はトルストイ、名はレフ、父稱ニコラーエウイチ。

一八二九年(二歳) 母マリヤ死す。

一八三六年(八歳) 父ニコライ死す。五人の兄弟と共に叔母オステン・サーケン夫人に養はる。

一八四一年(十三歳) オステン・サーケン夫人死す。他の叔母ユーシコフ夫人に養はるべく、カザンに移る。

一八四三年(十五歳) カザン大學に入る。最初東洋語學部を選びたるが、落第して法科に轉ぜり。この頃ルソウの書に讀み耽り、その感化を受く。

一八四七年(十九歳) 學業を廢して兄ニコライと共にヤースナヤ・ポリャナに歸る。寛仁なる地主として農奴の爲に盡さんとせしが、失敗に終る。『地主の朝』はこの間の消息を描く。

一八五一年(二十三歳) これより先ベテルブルグに赴き、自由放縱の日を送る。この年四月兄ニコライがカフカズの砲兵隊にあるを追うて、その地に至り、止まること三

年、青春の危機は去り、藝術的創作の意圖盛んに動き來る。

一八五二年(二十四歳) 『幼年時代』、『地主の朝』、『カザック』、『襲撃』等を書く。『幼年時代』は處女作にして、この年九月、雜誌『現代人』にLNTの匿名を以て發表す。

一八五三年(二十五歳) クリミヤ戦争起る。砲兵士官として従軍す。

一八五四年(二十六歳) セバストーポリ防禦軍に加はる。陣中にて『少年時代』を書く。

一八五五年(二十七歳) 『伐木』、『セバストーポリ物語』の作あり。この年八月セバストーポリ開城。兵役を棄つ。

ベテルブルグに上京し、『現代人』を中心とする中央文壇の人々に迎へらる。

一八五六年(二十八歳) ヤースナヤ・ポリャナに歸る。『戰場にてモスクワの知人と逢ふ』、『吹雪』、『二人の驃騎兵』、『玉突數取の備忘録』等の作あり。

一八五七年(二十九歳) 一月歐洲漫遊の途に就く。パリにて死刑を見、強き印象を受く。八月、ドイツを経て歸國す。『青年時代』、『リュセルン』、『アルバート』等の作あり。
一八五九年(三十一歳) 『三つの死』、『結婚の幸福』を書く。
一八六〇年(三十二歳) 兄ニコライ死す。その死に深き印

象を受けて思想の一轉化を來せり。この年『ポリクローシユカ』の作あり。外國を漫遊して、獨、佛、英等に於ける初等教育の制度を研究す。

一八六一年(三十三歳) 農奴解放令下る。トルストイは郷里の農民貴族間の仲裁者に任ぜられ、村莊に歸る。ツルゲーネフと激しく争ひ絶交す。ヤースナヤ・ポリャナに學校を開き、教育雜誌を發行し、『模範國民讀本』を出版す。又『國民教育を論ず』以下數篇の論文を發表す。

一八六二年(三十四歳) 肺部の疾患を感じ、草原地方に遊びて馬乳療法を試む。この頃より政府の彼に對する警戒漸く甚しく、留守宅は官憲の搜索するところとなる。この年九月宮廷醫ベルスの二女ソフィヤ・アンドレーエウナと婚す。この時ソフィヤ十八歳。

一八六四年(三十六歳) 『戦争と平和』の著に着手す。

一八六九年(四十一歳) 『戦争と平和』を完結す。この年ショウベンハウエルを讀んで大に感激す。

一八七三年(四十五歳) 『入門讀本』を書く。この年『アンナ・カレーニナ』の稿を起す。同年サマラ州の窮民救助に盡力し、救恤金二百萬ルーブリを得て之を施す。

一八七七年(四十九歳) 『アンナ・カレーニナ』を完成す。生涯の危機漸く迫る。

一八七八年(五十歳) 『十二月黨』の作あり。斷片なり。この年ツルゲーネフと和解す。

一八八一年(五十三歳) 民話『人は何によつて生くるか』、論文『獨斷的神學の批判』の著あり。『四福音書の統一と翻譯』の著に着手す。この年アレキサンドル二世の暗殺は、彼に深刻なる印象を與ふ。

一八八二年(五十四歳) 『我が懺悔』を公けにす。所謂「轉機」を告白せる書なり。この年の冬モスクワに民勢調査の企てあり。彼は窮民の慘狀を眼前に見、以後數ヶ月間全く絶望狀態に沈む。

一八八三年(五十五歳) 『我が宗教』を公けにす。この年ツルゲーネフ死す。死に臨み、トルストイに再び文藝に歸らんことを勧告す。

一八八四年(五十六歳) 『我等何を爲すべきか』を公けにす。これ第二の危機の表現なり。この年より年來の嗜好たる狩獵を廢す。

一八八五年(五十七歳) 『二老人』、『愛ある所に神あり』、『火を等閑にせば』等の通俗物語を書く。

一八八六年(五十八歳) 『イワン』、『馬鹿』、『人はどれだけの土地を要するか』、『三老人』、『疾い脚』、『馬の話』、『蠟燭』、『教子』、『イリアス』等を書く。何れも通俗物語に

して、ロマン・ローランが「藝術以上の藝術」と推賞せるもの。この年戯曲『闇の力』、小説『イワン・イリイチの死』を書く。

一八八七年(五十九歳) 通俗劇『最初の醸造者』、論文『人生論』を公けにす。十月銀婚式を舉ぐ。

一八八八年(六十歳) 『光あるうち光の中を歩め』を書く。

一八八九年(六十一歳) 論文『手の勞働と智的勞働』を公けにす。

一八九〇年(六十二歳) 小説『クロイツェル・ソナタ』を公けにす。

一八九八年(六十三歳) ロシヤ全土に大饑饉あり。大規模の救恤をなす。

一八九三年(六十五歳) 『神の國は汝の衷うちにあり』、『兩性論』、『汝の本心に歸れ』等を公けにす。

一八九五年(六十七歳) 『愛國と基督教』、小説『主人と下男』を公けにす。この年七月カフカズにドゥホポール教徒事件あり。

一八九六年(六十八歳) 小説『ハヂ・ムラート』を起稿す。

一八九八年(七十歳) 『藝術論』の著あり。

一八九九年(七十一歳) 『復活』を公けにす。

一九〇〇年(七十二歳) 『現代の奴隸制度』を書く。

一九〇一年(七十三歳) 正教會より破門せらる。内外に非常なる反響を喚起せり。破門の命令に對する教務省への答、『愛國と政府』、『唯一の手段』、『皇帝及びその輔弼者』等の諸論文を公けにす。この年危険なる疾患あり、クリミヤに轉地す。

一九〇二年(七十四歳) 『宗教とは何ぞや』、『勞働者へ』等を公けにす。

一九〇三年(七十五歳) 『シユクスビヤ論』を發表す。『舞踏會の後』、『贖造手形』等の作あり。

一九〇四年(七十六歳) 時恰も日露戰爭に際し、『汝自らを思へ』の一文を發表す。

一九〇六年(七十八歳) 『讀書の一周』を公けにす。一年三百六十五日に配したる賢哲の語録なり。

一九〇八年(八十歳) 『余は沈黙する能はず』を發表す。この年八十歳の誕生祝賀會あり。政府の干渉甚しかりしに拘らず、國民的祭日として異常の賑ひを呈す。

一九〇九年(八十一歳) トルストイ博物館ベテルブルグに開かる。『平和會議に與ふ』を公けにす。

一九一〇年(八十二歳) 十一月十日家出す。途中肺炎に罹り、十一月二十日アスターボウ驛に死す。

目次

復活……………一

第一編……………二

第二編……………二一

第三編……………三九

主人と下男……………四八

高架索の捕虜……………五三

カザールの繪は「復活」第一編法廷の場。

復

活

(ベ・ボドナールスキイ
氏の原作復興版)

レフ・トルストイ著
昇曙夢譯

緒言

約二十年の間、ロシアの社會はその國民的天才の一大作品——即ちレフ・トルストイの長篇小説『復活』——を、検閲局官吏の魔手に毀損されたまゝの刊行で讀むより外はなかつた。

本出版はこの著明なる長篇小説の完全な原作復興版を廣く普及すべき最初の試みである。で、原作を復興すると同時に、検閲局横暴の對象となつた箇所を一々明示することにした。

それがために舊ロシア版(検閲済のもの)の本文と、それから原書に最も近いチェルトコフ刊行のロンドン版の本文とを比較對照するの勞を取つた。この比較の結果として生れたのが本モスクワ版であつて、復興の箇所はすべて傾斜體の活字(譯者曰く、この譯本に於いては傾斜體の活字は煩を厭うて區別しない)を以て劃然と區

別することにした。

勿論吾々の爲す所は専門的研究家のそれに比べたら、その及ばざる事遙かに遠い。若し彼等にしてこれをしたら、あらゆる語法の異同を質し、更に作風にまで進んでその委曲を盡すことであらう。

だが、吾々の目的は検閲局の横暴の跡を發くに在る。隨つて全努力は主として、かの一大獨裁國の官憲を戰慄せしめたトルストイの性格的な言葉を、一語も漏らさぬやうに、たゞその事に集注されたのである。

希はくば、この偉大なる文學的傑作の讀者は、本書によつて、その藝術的満足を得らるゝと同時に、今日惱みに惱み抜いた露國民の魂が、切に渴望して止まない哲學者たり道徳家たり且つ偉大なる教師であるトルストイの思想を、一つ残さず吸收して戴きたい。

一九一八年　ベ・ボドナールスキイ

第一編

馬太傳一八章二一節。その時ペテロ、彼に來りて曰ひけるは、主よ幾次まで我兄弟の我に罪を犯すを赦すべきか、七次までか？ 二二節。イエス彼に曰ひけるは、爾に七次とは言はじ、七次を七十倍せよ。

馬太傳七章三節。なんぢ兄弟の目にある物屑を視て己が目にある梁木はりぎを知らざるは何ぞや。

約翰傳八章七節。……爾曹なんぢらのうち罪なき者まづ彼女に石を投ぜよ。

路加傳六章四〇節。弟子はその師に踰またらず、されど修養せば皆その師の如くなるべし。

幾十萬といふ人間が或る小さな場所へ集まつて、その寄集つた土地を改造しようとして如何に力糧りきりょうを入れたところで、またその土地に何も生はやさぬように如何に石を敷き詰めたところで、また萌もえ出て來る草を如何に片端かたはしから攪かきり取つたところで、如何に石炭や石油の煙で燻くしたところで、

如何に樹木を伐り拂つたところで、鳥獸を殘らず追ひ拂つたところで——春は都會の中でさへ矢張り春であつた。暖い日があたつて來ると、草は蘇よみがへつて、刮かき取られなかつた所なら何處にでも、遊園地の芝生の上は愚か、石壘いしりみの間にまでも、青々と生え出した。また樺の木や白楊や山櫻などはねばくするやうな芳なほばしい葉を擲なげ、菩提樹は燻くぜた若芽を脹ふりました。小鴉や雀や鳩などは如何にも春らしく喜んで、早くも巢の支度を始め、蠅も壁のあたりで日向ひなたぼつこをしながらぶんく唸なつた。かうして植物も鳥も蟲も子供も皆嬉々として喜んでゐたが、人々は——と言つても大人のことであるが——人々は自分を欺たぶしたり苦しめたり、また互に欺たぶし合つたり苦しめ合つたりして止まないものであつた。人々の考ふる所によれば、こんな美しい春の朝や、また一切生物の悅樂よろこびのために與へられ、平和と一致と愛とに導いてくれる自然界の美などは別に神聖なものでも貴重なものでもなかつた。彼等に取つて神聖で貴重なものと言へば、それはたゞ彼等が互に他を支配し合ふ爲めに自ら考へ出した企ねがらみばかりであつた。

そんなわけで、此處なる地方監獄の事務室に於いても重大視され神聖視されてゐたのは、すべての動物と人間とに春の感激と歡喜が與へられてゐるといふその事ではなかつ

た。寧ろその前後印證と頭書の附いた通告書が受付番號の中に這入つたといふ事が何より重大視され神聖視されてゐた。その通告書には、當四月二十八日午前九時、目下拘留中の三囚人——男囚一人、女囚二人を地方裁判所に出廷せしむべき事が記してあつた。而も女囚中の一人は主犯人として獨り別に送り届けなければならなかつた。そこでこの命令に基づいて、四月二十八日の朝八時になると、厭な臭ひのする薄暗い女囚監の廊下へ看守長が這入つて來たのである。と、すぐその後から一人の女がまた廊下に這入つて來た。顔は穢れ、灰色の髪は縮れ、金筋入りの袖のついたジャケツを着て、その上に青い縁のある帯を締めてゐた。それは女看守であつた。

「マースロワに御用なんですか？」廊下の方へ開いてゐる監房の扉の一つへ、當直の看守長と一緒に歩み寄りながら、彼女はかう訊ねた。

看守長は鐵の音をガチャツかせながら錠を外し、監房の扉を開くと、廊下よりも一層厭な臭ひがむつと溢れて來た。「マースロワ、出廷！」と、彼は一言呼んだきり、直ぐ又扉を閉めて、彼女の出て來るのを待つてゐた。いくら監獄でもその中庭には、風の媒介で町中へ齎される爽やかな生々した野邊の空氣があつた。けれど廊下に這入るとその

空氣は、もう糞便や樺油や腐敗物の臭を帯びた堪らない悪臭で重苦しく、初めて來た者は誰でも皆氣が鬱いで滅入つてしまふ。始終この悪い空氣に慣れてゐる女看守でさへ、今戶外から來てはそれをはつきり感ぜずにはゐられなかつた。彼女は廊下に這入ると、俄かに疲勞を感じて眠いやうな氣持になつた。

監房の中では、女のさゞめきや素足の音など慌たしさうな氣色がしてゐた。

「おいマースロワ、愚圖々々せず早く出て來たら何うだ！」と、看守長は監房の扉の内へ呼びかけた。

やがて二分間ばかり經つてから、元氣のよい步調で扉の外に出て、素早く身を蹴して、そして看守長の傍へ寄つて來たのは、中背の、ふつくりと太つた若い婦人で、白いジャケツと白い下袴の上に鼠色の上衣を着てゐた。足にはネルの靴下を穿き、その上に牢屋靴をつけてゐた。頭には白い頸巻が捲きつけられ、その下からは眞黒な縮毛の輪が故意とらしく喰み出してゐた。顔は長い間幽閉されてゐた者に特有な蒼白い色で、丁度穴倉の馬鈴薯の芽にそっくりであつた。小さくて幅の廣い手や、部屋衣の大きな襟の下から見えるその太い頸筋なども矢張り同じ白さであつた。たゞ眞黒な、輝かしい、心持ち脹んだ眼が、片方は少し斜視であ

つたが、ひどく生々としてゐて、その生氣のない青褪めた顔の中に一際目立つてゐた。彼女はふつくり太つた胸を突き出して、上體を眞直ぐにしてゐたが、廊下へ出ると、頭を少し背後へ反らして、看守長の眼を正面に見た。そして命ぜられることは何でもするといふ氣前を見せた。看守長が扉を閉めようとする、その途端毛の薄い白髪頭の婆さんが、中から青褪めたとげ／＼した皺くちやな顔をひよいと出した。婆さんはマースロワに何やら話しかけた。然し看守長がその婆さんの頭を扉で押したので、頭は忽ち引込んでしまつた。と、監房の中から女の高笑ひが聞えた。マースロワもにつこり笑つて、扉の小さな格子窓を振り返つて見た。婆さんは内側から小窓にびつたり寄つて、皺枯れ聲で言ひ放つた。

「何と訊かれたつて一つことを云ひ張るがえ、だよ、餘計なこたあ決してお饒舌りするでねえよ。」

「さうさ、何とか一つ片をつけて貰ひたいもんだ、何うせ之以上ブマな事にはなるまいから。」とマースロワが答へた。「勿論一つに決まつてるさ、二つつてことはないよ。」と、へたな頓智のうちにも役人らしい自信を以て看守長が言つた——「さア隨いて來るんだ！」

格子窓に見えてゐた婆さんの眼が失せると、マースロワ

は廊下の眞中に出て、素早い小刻みな步調で看守長の後から隨うて行つた。彼等は石段を降り、女囚監よりはもつと臭い騒々しい男囚監の前を、扉毎にその通風口から覗いてゐる多くの眼に見送られながら通り過ぎて、事務室に這入つた。見ると、其處にはもう二人の護送兵が銃を手にして立つてゐた。腰を据ゑてゐた書記が煙草の煙に煙つた紙片を兵士の一人に渡し、それから女囚を指して「連れて行け」と言つた。と、赤い痘痕面のニジエゴロド出の兵卒が、外套の袖口にその紙片を挟み込んで、にや／＼しながら女囚の方を見て、も一人の肩幅の廣いチュワシ人の同僚へ目配せした。かくて二人の兵卒と一人の女囚とは階段を降りて表出口の方へ出た。

表出口の扉はたゞ耳門だけが開かれてゐた。その耳門の鬮をまたいで庭に出ると、兵卒と女囚とは構内を突き抜けて、鋪道傳ひに街の眞中を通つて行つた。

辻馬車の馭者や、店員や、料理人や、勞働者や、官吏などが立ち止まつて、何れも好奇の眼を隨つてその女囚を見送つた。中には『あゝまでなるには餘程の悪事をしたに違ひない。俺達のするやうな生やさしい事ではあるまい。』と、頭を捻つて考へる者もあつた。子供達は怖れを感いて女囚を見てゐたが、彼女に兵卒がついてゐるので、これではど

んな悪黨でも手出しは出来まいと思つて、やつと安心した。また炭賣りに出て來ての歸りがけに茶店で茶を喫んでゐた田舎者は、彼女の傍へ近寄つて來て、十字を胸に切りながら一カペイカを惠んだ。女囚は顔を赧らめ、頭を傾けて、何か呟いた。

彼女は多くの視線が自分に集まつてゐるのを感じて、それ等の人々にそつと、首を動かさずに、横目をくれてやつた。そして自分がかうも人目を牽いてゐるかと思ふと、それが愉快でもあつた。それに又監獄の中とは違つて、生々した春の空氣が今更のやうに嬉しかつた。たゞ、暫く歩き馴れなかつた鋪石の上を、而も粗末な牢屋靴を穿いた足で歩いて行くのは苦痛だつた。で、出来るだけ軽く歩くことを心懸けた。粉屋の側を通りかゝると、數羽の鳩が誰にも叱られずによち／＼歩き廻つてゐたが、女囚は危くその青藍色した一羽に片足をかけようとした。と、鳩は舞ひ上つて、バタ／＼と羽搏きしながら、女囚の耳を掠めて、彼女を強く風で打つて飛び去つた。彼女は一寸微笑したが、やがて自分の今の身の上を思ひ出して深い溜息を吐いた。

二

女囚マースロワの閱歴は極めて平凡なものであつた。マ

ースロワはこれといふ亭主もない屋敷女(地主の屋敷に飼はれてゐる農家の女)の娘であつた。その屋敷女といふのは、二人姉妹の女地主の持村へ、母親の家畜番に連れられて住み込んだのであつた。この女は定つた亭主は無かつたが、毎年お産をした。そして、田舎者のする慣例のまゝに、出來た赤兒には洗禮を受けさせた。けれどそれから後は、頼みもしないのに生れてくる不要な子供を仕事の邪魔物扱ひにして、食事もあてがはず、見す／＼干乾しにしてつぶのであつた。

かうして死んだ子供が五人あつた。それらは皆洗禮を受けさせたゞけで、養育もせず死の手に渡してしまつたのだ。六番目の兒は、旅稼ぎのジブシイと關係して出來たので、これも亦同じ運命に葬り去られるところであつたのを、折よく二人の女主人の一人が、牛臭いクリームをよこした家畜番の女達を咎めようとして、家畜小舎へ遣つて來たのであつた。見ると、家畜小舎には一人の産婦が、可愛い丈夫さうな赤兒を抱いて寝てゐた。女主人はクリームのことや、産婦を家畜小舎へ入れたことなどを叱つて、立去らうとした途端、ふと赤兒を見ると、たまらなく可哀さうになつて來て、名付親(なづけおや)になつてやらうと云ひ出した。そして女の兒に洗禮を受けさせてからはそれを不憫がつて、母親に牛乳を與へたり、金を惠んでやつたりしたので、お蔭で女の

兒は命拾ひをした。それで女主人達は彼女を「スバションナヤ（教はれた）」と呼んでゐた。

赤兒が三歳の時に、その母親は病みついて死んだ。祖母の家番番は孫娘に手を焼いてゐるので、女主人達はその兒を手許に引取つて養つた。やがてその兒は黒眼がちな非常に元氣な可愛らしい少女になつて、女主人達は喜ばした。

二人の女主人のうち、妹の方は比較的氣質の優しい方で名をソフィヤ・イワノウナと呼び、少女の洗禮もこの人が世話をしてくれたのであつたが、姉は少々根性のきつい人で、名をマリヤ・イワノウナと言つた。ソフィヤ・イワノウナはこの娘に綺麗な着物を着せたり、讀み書きを教へたりして、行く／＼は彼女を令嬢風に仕立てようと思つてゐた。が、マリヤ・イワノウナは、この少女を穢（たぐ）ぎ人にして良い小間使に仕立てる方がよいと言つてゐた。その位だからなか／＼嚴重で、機嫌の悪い時は少女を（たぐ）めつたり打擲（うちなげ）したりすることさへあつた。かやうにこの少女は、二様の感化の間に生ひ立つて、大きくなつた時には半ば小間使、半ば養女といつた風になつた。彼女はカーチカでもなく、カーテニカでもなく、その中間をとつてカテューシャと呼ばれてゐた。（露西亜語では人の名前に、種々な語尾や附け足しを加へ）彼女は縫物をしたり、部屋を片づけたり、聖像を磨粉で磨いた

り、珈琲を炒つて粉にして煎じて出したり、ちよつとした洗ひ物をしたり、時には女主人達と一緒に坐つて、本を讀んで聞かせることもあつた。

彼女は幾度か縁談をかけられたけれども、何處にも嫁かうとは思はなかつた。それは、自分のやうにお邸生活の樂しさに甘やかされた者は、とても縁談を持ち込んで来るやうな勞働者達と一緒に暮らして行く事は出来まいと感じたからであつた。

かうして彼女は十六歳まで過して来たが、その十六の年が終つた時、彼女の主人達の所へ、甥に當る青年公爵の大學生がやつて来た。すると、カテューシャは、娘心に彼を戀してしまつたが、男には固（も）より、自分にさへも打明けることが出来なかつた。それから二ヶ年の後、丁度また同じ甥の人が、戰爭に行く途すが叔母達の家に立寄つて、其處で四日間滞在し、いよく出發といふその前夜カテューシャを誘惑して了つた。そして別れの日に百ルーブリの紙幣を一枚握らせたつたり、そのまゝ立去つてしまつた。彼の立去後五ヶ月を経て、彼女は確に自分が妊娠してゐる事を知つた。それからといふもの、彼女にはすべてのことが面白くないなり、たゞ何うしたら、やがて近づいて来る恥辱から逃れ得るだらうかと、そのことばかりが氣に懸かつた。それで、

主人達に仕へてゐるのも面白くなく、だん／＼憎け勝になつた。そればかりではない、一度などは、何うしてそんなことになつたのか自分にさへ解らぬうちに、突然烈しく怒つたこともあつた。彼女は、無論後では後悔したのであるが、主人達に向つて散々悪口を吐き、暇を呉れとまで言つたのであつた。

さすがに女主人達もこれには愛想をつかし、その言ふがまゝにすぐ暇をとらせた。彼女は此處を出ると、或る地方警察署長の家へ女中に住み込んだが、そこでは僅か三ヶ月より辛抱出来なかつた。それといふのは、署長が、もう五十歳の老人でありながら、頻りに言ひ寄つて来て、一度などは殊更猛烈に出たので、彼女も腹立ち紛れに彼を莫迦者と呼び、老耄れ色臙と罵り、その胸倉を取つてウンと云ふ程突き飛ばして、彼をころばしてしまつた。で、彼女は亂暴だといふので、直ぐ追ひ出された。と言つて、臨月も近づいてゐるので、他に口を探すわけにも行かず、據ろなく酒を商つてゐる田舎産婆の寡婦の家へ身を寄せた。お産は輕かつたが、産婆は村の或る病婦の所から背負つて来た産褥をカテューシャに傳染してしまひ、生れた男の兒は育兒院へ送られてしまつた。所がそれを連れて行つた産婆の話によると、赤兒は先方へ着くと直ぐ死んで了つたさうである。

カテューシャが産婆の家に身を寄せた時、その所持金はみんな百二十七ルーブリあつた。つまり働き溜めた二十ルーブリと、彼女を誘惑した男から貰つた百ルーブリとがそれであつた。所が彼女が其處を出た時には、僅か六ルーブリしか残つてゐなかつた。彼女は金を貯めることを知らなかつたので、自分で浪費したり、またはねだられるまゝに誰にでも呉れてやつた。産婆には先づ二ヶ月間の生活費——食費と茶代——として四十ルーブリ捲き取られ、二十五ルーブリは赤兒を委託した時に消えて了ひ、更に四十ルーブリは牡牛を買ふからとて産婆に借り取られ、別に二十ルーブリばかりは、着物代や小遣となつて散つてしまつた。だから全快した時には、カテューシャは金が無くなつて、直ぐ又奉公口を探さねばならなかつた。口は森林監視人の所にあつた。妻帯者ではあつたが、丁度また警察署長と同様、お目見えの日から早くも彼女に言ひ寄るのであつた。彼は頭からいけ好かない男であつたので、彼女は努めて之を避けてゐた。所がこの男は彼女以上に老練な狡い人間であつた。殊に彼は主人であるから、何處へなりと自分の思ふ所へ彼女を連れ出せるので、折を狙つては彼女を丸め込んだ。細君も感づいてゐた。そして丁度夫とカテューシャだけで一室に居る所をつきとめて、矢庭に彼女へ打

つてかゝつた。カテューシヤは負けてゐなかつた。で忽ち摺み合ひとなり、揚句の果は給金も貰はずにその家から追ひ出されたので、町へ出て行つて、伯母の家に止宿した。伯母の亭主といふのは製本職人で、以前はよい暮らしをしてゐたのだが、今はすつかり得意を失くし、手當り次第に何でも持ち出して行つて、それを酒代に飲んだくれてゐるのであつた。

それで伯母は自分で小さな洗濯屋を開き、これによつて自分と子供達とを養ひ、また落ちぶれた夫をも助けてゐた。で、カテューシヤにも洗濯女になつて手傳つては何うかと勧めたが、伯母の所にゐる洗濯女のみじめな生活を見ると、彼女はとてもその氣にはなれないので、遂々桂庵へ女中奉公の口を探しに行つた。すると、中學通ひの二人の子供のある貴婦人の家に口が見つかつた。けれど其處へ這入つて一週間經つと、もう總領の口髭を生やした中學六年級の青年が、勉強はそつちのけにして、マースロワの跡をつけ廻るので、少しの油斷もならなかつた。やがて母親は一切をマースロワの罪にして、彼女を解雇した。新しい口はなかく／＼出なかつたが、或る日また女中の世話をする桂庵へ行つて見ると、其處へ露はな、むつくり肥つた腕に腕輪を巻き、指にも指環を澤山はめた女が來合せてゐた。その女は、口を求め

てゐるマースロワの申出を聞くと、彼女に名刺を渡し、自分の家へ相談に來ては何うかと勧めた。で、マースロワは彼女の家へ行つて見た。するとその女は丁寧に迎へてくれ、菓子や甘い酒などを出して待遇したが、その間に何か手紙を認めて、召使にそれを持たせて、何處かへ出してやつた。夕方になつてからその室へ這入つて來たのは、髪の毛の長い胡麻鹽頭をして、白い頸髻を生やした、背の高い男であつた。その老人はいきなりマースロワの傍に坐り込んで、にこ／＼と眼を輝かしながら、彼女をしげ／＼見たり、彼女に巫山戯始めたりした。やがて女將はその男を次の間へ呼んだ。そしてあの娘は田舎から出たての、まだ初心な女だと言つてゐるのをマースロワは耳にした。それから今度はマースロワを女將が呼んで、あの旦那は小説家で、澤山お金があるから、氣に入りさへすれば惜氣なく出してくれる人だと話した。早速ながら彼女が氣に入つたといふので、小説家は、これから折々逢ふことを約束して、彼女に二十五ルーブリを與へた。でも、伯母に前借の支拂をつけ、着物や帽子やリボンなどを新しく買ったので、金は忽ち出てしまつた。數日の後小説家から迎ひが來た。これが二度目であつて、別の家へ引越せと言つた。

小説家の借りてくれた家に住んでゐるうちに、マースロワは同じ家にゐた氣さくな番頭と出来合つてしまつた。彼女はこの事を小説家に打明けて、別な小じんまりした家へ轉居した。所が、結婚すると約束したその番頭は、彼女に何とも云はず、無論彼女を捨て、ニージュニエイへ立去つてしまひ、マースロワはひとり置き去りを食つた。彼女はこれから獨立で世帯を續けようと思つたが、それは駄目だつた。彼女がさうした暮らしをし得る唯一の途は、黄色い鑑札を貰つて(なるほど)健康診断を受けるより外はないと、お巡りさんも彼女に言つてくれた。そこで彼女も仕方なくまた伯母の家へ轉げ込んだが、その流行服やオペラ外套や帽子などを見ると、伯母は腰を低くして彼女を迎へ、餘程いゝ生活をしてゐると見て取つて、最早洗濯女になれなどとは勧めなかつた。マースロワとても今度は、洗濯女にならうかなるまいかなどといふことは、てんで問題にしてゐなかつた。却つて彼女は、夏多窓を開け放したまゝ、三十度からの石險の湯氣の立ち罩めてゐる仕事部屋で、青褪めた顔と、細い腕をした洗濯女達が、中にはもう肺病に罹つてゐる者もあらうに、一生懸命洗濯したり熨斗をかけたたりしてゐるその牢獄のやうな生活を見ると、氣の毒でならなかつた。そして、自分もこんな牢屋に這入ることが無いとも限らぬと

思ふと、堪らなく恐ろしかつた。すると丁度この時、——一人の保護者も見當らないといふ、彼女に取つて特に悲惨な時に、遊女屋へ若い女を賣り込む女衛に見つかつてしまつた。

マースロワはもう餘程以前から煙草を喫んでゐた。然し例の番頭と關係した末頃から、捨てられた後にかけては、だん／＼酒の量も増して來た。彼女が酒に引寄せられたのは、酒を甘いと思つたためばかりではない。いやそんな事よりも、それが彼女の省めて來た一切の苦しみをきれいに忘れさせて、素面の時に持てないやうな解放された自由な氣持を與へ、自分の持前の値打を強く感じさせてくれるからであつた。で、酒の氣がないと彼女は常に憂鬱で、恥づかしさに堪へなかつた。

女衛は、伯母には手土産を持つて來てやり、マースロワにはたつぷり酒を飲まして、そして都會の大きな上等な商賣屋で稼ぐと収益が澤山ある上に、色々他で得られない特點があると説き立てた。マースロワはこの際二途の上に立つた。それは男の側から挑まれて時々こつそりと姦通する卑怯な女中奉公を選ぶか、それとも、法律で許され一般に公開されて、良い金儲けが出來、而も安全で確實で、法律の保護を受けてゐる不斷の姦通を取るか、何れその一を選ば

なければならぬこととなつた。そして彼女は後者を選んだ。そればかりではない。彼女はかうすることによつて、自分を誘惑した者や、番頭や、その他彼女によくないことをしたすべての人々に、復讐が出来ると思つたのである。それに又この際彼女の心を誘つて、惑々それと決心させるに至つた一因は、衣服の贅澤が思ふさま出来て、天鷲絨でも縞子でも絹でも、肩や腕を露はす舞踏服でも何でも誂へ得るといふ女衞の口車であつた。で、マースロワは黒天鷲絨の裝飾をしたピカ／＼する黄色い絹物の肌も露はな胸衣を纏うた自分を想像すると、もうとても堪らなくなつて、直ぐに籍を渡してしまつた。その晩、女衞は辻馬車を雇うて、彼女をキタエワの有名な遊女屋へ送り込んだ。

その日からマースロワは遂々神の誠と人の道に對する慢性的罪業の生活を始めるやうになつた。勿論それは公衆の幸福を慮る政府の許可ばかりか、その保護を受けて、幾百の、否幾十萬の女が營んでゐるものではあるが、一度足を入れた以上、十中の九までは悪性の病氣を得て、時ならぬ早老と早死に終る生活なのである。

朝から晝にかけては、夜の歡樂のあとを受けて深い睡眠が續く。三時か四時頃やつと汚らしい寢床から疲れ切つたやうに起きる。暴飲のあとの曹達水と珈琲、化粧着や下衣

や寝巻のまゝの懶けな室内漫步。カーテンの蔭から、窓越しに戶外を眺めるもの、互に譯もなく喧嘩するもの、様々である。それから體や髪を洗つたり、塗つたり、匂はしたり、衣服を吟味したりする。そのことから女將との間に口論が起る。鏡に向つて姿を映して、顔や眉を彩る。甘いこつてりした食事をとる。それから肉體を露はした華美な絹の衣裳をつけて、飾りたてた、眩しい大廣間へ出る。お客が見える。さうなると、音楽に、舞踏に、菓子に、酒に、煙草に、姦淫に、そして青年だらうが、中年だらうが、子供くさいのだらうが、よい／＼の老人だらうが、獨身者だらうが、女房持だらうが、商人だらうが、番頭だらうが、構はない。アルメニヤ人、ユダヤ人、驢韃人、金持、貧乏人、健康者、病弱者、醉漢、素面の者、亂暴者、優男、軍人、官吏、大學生、中學生等、ありとあらゆる階級、年齢、性質の者に身を任す——それからまた怒鳴る、巫山戯る、喧嘩する。そして酒、煙草、音楽、舞踏と、夕方から夜明けまで騒ぎ抜いて、更にまた菓子、酒、酒、煙草と来る。朝になつて漸く自由な體となつて、深い睡眠に入る。これが毎日、毎週、休みなしに繰返される。たゞ一週の終り目には國家の施設たる警察署へ行く。其處では官職に在る吏員であり醫師である男が、時には眞面目に嚴格に、時には巫山戯

半分に、人間にばかりか動物にさへその犯行を防ぐべく特に天から賦與された羞恥の念を無視しながら、それ等の女を檢査して、彼女等が過去一週日の間その相手と行つた犯罪の續行に對して許可を與へるのである。かくて又同様の一週間が繰返される。かくて又同様な日々々々が繰返される、夏でも冬でも、平日でも祭日でも。

一ノスロワはかうして七年を經過した。この間に彼女は抱へ主を二軒替へ、一度は入院もした。所が遊女屋生活の七年目、初回の墮落からは八年目、彼女が丁度二十六歳になつた時、端なくもその身の上に一事件が起つた。それのため獄に投ぜられ、女の人殺しや盗人などと同監すること六ヶ月後の今日、漸く法廷へ呼び出されたのである。

三

遠い道中に草臥れたマースロワが、二人の兵卒に護送されて、やつと地方裁判所の建物に近づいた時、最初彼女を誘惑した、彼女の養母達の甥、ドミートリイ・イワノウイチ・ネフリウドフ公爵は、まだ自分の家の、高い彈機仕掛の柔かい寢臺の上に、羽根布團を掛けて横たはつてゐた。そして胸の所に火鬘斗のかゝつた、小髷の取つてある、さつぱりとしたオランダ寢卷の襟を寬げて、紙巻煙草を喫して

ゐた。彼はじつと前方を見詰めたまゝ、今日しなればならぬ事や、昨日起つた事などを考へてゐた。

世間では、彼が金持貴族のゴルチャーギン家の令嬢と結婚するやうに専ら噂してゐるが、彼は丁度そのゴルチャーギン家で過した昨夕のことを思ひ出すと、ほつと溜息を吐き、煙草の吹殻をぼいと投げ捨て、又新たに銀製の莖函からもう一本取り出さうとした。が、ふと氣を變へて、滑らかな白い兩足を寢臺の上から仰し、足先でスリッパを探し當てる時、絹の部屋衣を肉つきのよい肩に羽織つたまゝ、どしん／＼と少し早めに歩いて、寢室の次の間のオデコロンやエリキシルや香油や香水など、人工的な香氣の漂うてゐる化粧室へ這入つた。そこで彼は特製の齒磨粉をとつて、所所頰め込みのしてある齒を磨き、香料入りの含嗽液でそれを嗽いだ。それから色々の部分を洗つては、一々異つたタオルで拭いた。そして好い香のする石鹸で兩手を洗ひ、伸びた爪を色々なブラシで念入りに磨き、大きな大理石の洗盤で、顔や太い頸筋を洗つて了ふと、今度は寢室から三つ目の室へ行つた。其處には灌水浴の支度がしてあつた。肥えた逞しい白い身體にざアつと冷水を浴び、粗い大タオルですつかり拭いてから、彼は鏡面のやうに滑らかな下衣を着、綺麗に磨いた靴を穿き、鏡臺の前に腰を掛けると、今

度は二つの刷毛をとつて、小さな黒い縮れ毛の鬚髻と前方の少々薄くなりかゝつてゐる捲れた頭髮に櫛を入れるのであつた。

彼の不斷使用してゐる身の廻りの物や、身嗜みの品々は、襦衣にしる、着物にしる、履物にしる、ネクタイにしる、ピンにしる、飾鈕釦にしる、すべて皆最上等、最高級の品で、滋味があつて、質實で、丈夫で、値の張つた物ばかりであつた。

十種もあるネクタイやピンの中から、どれでも構はず手當り次第に選り取つた——これ等のものは、今でこそ無頓着に扱はれてゐるけれど、嘗ては何れも眼新しく、彼の氣に入つたものばかりであつた。それから、彼は、刷毛をかけて、椅子の上にも、やんと置いてある衣服を着た。そしてまだ本當にすつきりとまでは行かないが、小ざつぱりとした香り高い男になりすまして食堂へと出て行つた。前の日に大の男三人で嵌木細工の床を拭き込んだと云ふ、細長いその食堂には、櫻製の巨大な食器棚と、それに適はしい大きな伸縮のできる食卓があつて、獅子の足に似せた彫刻のしてあるその脚が廣く張つたところは如何にも重々しく、どつしりとしたものであつた。大きな組合せ文字をあしらつた、優美な、糊の利いた卓布のかゝつたこの食卓の上に

は、香氣の高い珈琲を入れた銀製の珈琲急須や、これも亦銀製の砂糖壺や、暖かいジャムの入つたジャム容器や、出来立ての卷麵麩だの、小形の乾麵麩だの、ビスケットだのを盛つた麵麩籠などが置かれてあつた。一切揃つてゐるその傍には、受取つたばかりの手紙と新聞と、『兩世界評論』の新刊とがあつた。ネフリュードフが今しも手紙を取らうとした途端、廊下へ通ずる扉口から現はれたのは、喪服を着て、レースの頭飾を戴いて、髪に分け目を隠した、でつぶりした中年の婦人であつた。彼女は、この家で失くなつてまだ間もないネフリュードフの亡母の小間使であつたが、今は家政婦として彼の許に残つてゐるアグラフエナ・ペトロウナといふ女であつた。

アグラフエナ・ペトロウナは續けてゐるはないが、約十年ばかりネフリュードフの母親と一緒に外國で暮してゐた事もあり、貴婦人としての態度應待は何から何まで呑み込んでゐた。彼女はネフリュードフの幼い頃からこの家に住んでゐて、ドミートリイ・イワノウイチ(ネフリュー)をまだミーちゃんと呼んでゐた時分から知つてゐた。

「お早うございます、ドミートリイ様。」

「お早う、アグラフエナさん。何ぞ珍らしい事でも？」と、ネフリュードフは冗談交りに訊いた。

「はい、公爵様からお手紙でございます。奥様のお使ひですか、それともお嬢様のお使ひですか、女中の方が見えまして、もう久らく私の部屋で待つて居ります。」と言ひながら、アグラフェナ・ペトロウナは手紙を差出して、意味ありげに、につこりとした。

「よろしい、今讀みます」と言つて、ネフリュードフはその手紙を受取つた。そしてアグラフェナ・ペトロウナの微笑に氣がつくと、急に變め面をした。

アグラフェナ・ペトロウナの微笑の意味は他でもない。

この手紙は、今ネフリュードフがお嬢に貰はうとしてゐる公爵家の令嬢コルチャーギナ様から來たものであると、彼女には思はれたのであつた。しかしその微笑によつて表はされたこの假定は、ネフリュードフには不愉快なものであつた。

「では、もう少々待つてゐるやうに申しつきますでございます。」と、アグラフェナ・ペトロウナは、置場所を間違へてあつた卓子刷毛をとつて、それを他の位置に置き直して、それから食堂をすつと出て行つた。

ネフリュードフはアグラフェナ・ペトロウナの持つて來た驚りのする手紙を開封して、それを讀み始めた。

『失禮をも顧みず、あなた様の御記憶を呼び起す自分の役目として一言御注意申上げます。』——と、鼠色の端切らず

の厚紙の一片に、元氣のよい、然し間伸びのした筆蹟で書き出してあつた。——『本日、四月二十八日はあなた様には陪審員として裁判所へ御出頭になる筈でございます。それで、あなた様がいつもの安請合で昨日御約束なさいました、コロソフ様や私共を繪畫展覽會へ御同伴なさるお思召は、自然お流れといふ譯でございます。時刻を違へずお出でにならないと、いつそやあなた様が馬をお求めなさるにさへ御躊躇遊ばしたといふ三百ルーブリの大金を罰金として重罪裁判所へお納めにならねばなりませんよ。昨晚あなた様がお歸り遊ばしてから氣がつかましたので、取りあへずお知らせ致します。

公・エム・コルチャーギナ

裏面に追白があつて、

『今日の晩餐は夜分でもあなた様のお席はずつと取つて置きますからと、母の傳言でございました。何時になつても構ひませんから、是非々々お出で下さいまし、お待ち申して居ります。』

エム・ケ

ネフリュードフは厭な顔をした。この手紙は、コルチャーギン家の令嬢が、眼に見えない糸で、だん／＼きつく彼を搦めつけようとして、もう二ヶ月も彼を支配して來た巧み

な操縦の繼續であつた。ずつと若い者か、猛烈な戀愛に落ちてる者ならいざ知らず、さもない一般の人は兎角結婚の前には逡巡^{たぐひ}ひ勝ちなものであるが、殊更ネフリュードフには、たとへそれと決心したとしても、尙ほ結婚を申込むことの出来ない十分な理由があつた。それは十年以前彼がカテューシャを手籠めにして、そのまま見捨てゝ了つたことを、氣に病んでゐたからではない。そのことは、彼はもう全く忘れて了つてゐたから、それを結婚の妨げとは見なしてゐなかつた。理由といふのは他にあつた。彼は丁度この時亭主持の一婦人と關係してゐたのであるが、それも實は彼の方から斷つてしまつたつもりであつたけれど、むかうの婦人が抑々^{おさ}さう容易^{たやす}くは斷念^{たんねん}してくれなかつたのである。

ネフリュードフは女には極めて臆病^{おそ}な質^{しつ}であつた。その臆病なところがつまりこの亭主持の婦人に彼を生捕^{つか}る望みを起さしめたのである。それはネフリュードフが選挙の時に出張した郡の貴族長夫人であつた。この夫人にたらし込まれてからといふもの、その關係は日増しに深い仲へネフリュードフを引き摺^ずり込むのであつたが、彼としてはそれがだんだん厭^{いと}で堪^たらないものになつた。誘惑に逆らふことの出来なかつたのは最初の間だけで、後にはさすがに自らを罪深いものと思ふやうになつた。併し彼女の承諾なしにはこの

關係をきつぱり斷ることも出来なかつた。これが抑々、自分にはたとへその氣があつても、堂々とコルチャーギン家の令嬢へ結婚を申込むことの出来なかつた理由である。

卓上には丁度またこの婦人の夫からの手紙も置かれてあつた。その手蹟と消印とを見つけると直ぐに、ネフリュードフは顔を赤らめて、危険の瀬戸際に彼がいつも體験する一種の緊張を覺えた。しかしこの昂奮は無駄なものであつた。といふのは、ネフリュードフの一番大切な領地のあるその郡の貴族長であるこの夫の手紙は、たゞ五月の末頃臨時地方會議があるので、その時は、學校や道路等に關する重要問題が討議され、それに對して反對黨の猛烈な運動も期待されるから、是非會議に出席して、一と肌脱いで援助して貰ひたいと云ふ事を云つて來たゞけであつた。

貴族長は自由主義の人で、その同志と團結して、アレキサンドル三世の時代と共に擡頭した反動派と争ひ、この争闘に没頭してゐるので、自分の家庭の不始末などには全く氣づいてゐなかつた。

ネフリュードフは、この男との關係上随分と苦しい氣持を味つたことを一々思ひ浮べた。或る時は、この男が遂に二人の仲を感じて、決闘を申込んで來た場合などを考へ、その時は自分は空中へピストルを放たうと思つた事など想ひ起

した。又或る時は、彼女が失望落膽の餘り溺死しようと公園の池へ駆け出して行つたのを、自分が捜しに追つて行つたやうな怖ろしい場面をも想ひ起した。『さうだ、これはおいそれと出掛ける譯には行かない。あの女に一應問ひ合せなくては、何も計畫することが出来ない。』と、ネフリュードフは考へた。一週間前に、彼はきつぱりとした手切の手紙を女に送つた。それには、今迄のことはすべて自分の過失であるから、それに對しては如何なる責をも喜んで受けるが、同時に又、彼女自身の爲めでもあるから、この際二人の關係を綺麗さつぱりと片づけてしまひたいと言つてやつたのである。で彼はこの手紙の返事を待つてゐたのであるが、それは來なかつた。尤もその返事の來ないといふことが、幾分好い徴候でもあつた。といふのは、若し彼女が別れるのが不服ならば、もう疾うに返事を書くわけだし、さもなければ、この前のやうに自分で出掛けて來る筈である。近頃噂に聞くと、この女の身邊には或る士官が附纏うてゐるとか云ふことで、それを思ふと、ネフリュードフもさすがに少しは妬けるのであつたが、同時に又、彼を苛めて來た虚偽から愈々逃れることが出来るのだと思ふと、嬉しい氣もするのであつた。

も一つの手紙は土地管理人から來たものであつた。それ

には、先づ土地相續權を確定するために是非とも出向いて來て頂かねばならぬといふ事が書かれ、尙ほ、土地は母堂生存當時と同様に處理すべきか、それとも自分が豫て母堂生存中に獻策し、今又更めて新主人に對して提出してゐる方法によつて、財産目録を擴張し、これまで百姓に貸付けてあつた土地を悉く取り上げて、こちらの手で之を耕作すべきであるか、この問題を一つ解決して戴きたいと書いてあつた。更に管理人は、この直接經營の方がどれ程有利だか知れないと念を押し、序でに、月初めに届けることになつてゐた三千ルーブリの送達が若干後れたことを詫び、その金は次便で送ると記してある。延滞の理由は、近頃百姓がなか／＼横着になつて、お上の手を借りて強制しなければ、容易に金が集まらないからであるといふのだつた。この手紙は、ネフリュードフには愉快でもあり、また不愉快でもあつた。これだけ大きな土地を支配するのだと思ふと愉快であつた。が又、彼はずつと若い頃ハーバート・スペンサーの熱心な崇拜家であつたため、土地私有の不法なことを篤と承知してゐたので、今受取つた手紙が動機となつて、それを想ひ起すと、不愉快でもあつた。殊に今自分自身が大地主となつてみると、かの『社會平衡論』にある、正義は土地の私有を許さずといふ原則に、今更の如く打たれるので

あつた。青年時代の一本氣と果斷な氣質が手傳つたにせよ、彼はその當時、土地は私有制度の對象たるべきものに非ずと公言してゐたばかりでなく、また、大學の卒業論文にこのことを書いたばかりでなく、實際その頃（父から遺産として、彼の母にでなく、直接彼に譲られてゐた所の）土地の一部を百姓達に呉れてやつた。それといふのも、全く自分の所信に背いてまで土地を領有したくなかつたからである。所で、今相續により大地主になつてしまつては、十年前に父から貰つた土地二百デシヤチナ（二丁一反強に當る）に對して決行したやうに、この私有財産を捨て去るか、それとも自分の以前の思想は皆誤れる虚偽なものとして、そのまま、無言でをさまつて了ふか、二つに一つ、その何れかを選ばねばならなくなつた。

ところで前者を取るわけには行かなかつた。何故なら、彼の生活手段としては、この土地を外にしては何物もなかつたからである。官途に就くことは嫌ひであつた。それに最早自らも棄て難いものとしてゐる贅澤な生活の習慣が深くも滲み込んでゐたのみならず、青年時代のやうな信念も、決斷も、衆目を惹かうといふ野心も、希望も、最早持合せてゐなかつたので、何にもとりつくすべがなかつた。では後者を取つて、かくも明白な動かし難い土地占有不法論と

手を切つてしまふといふことは、あの當時既にスベンサーの『社會平衡論』に傾倒し、また後に至つて（それはずつと後のことであるが）、ヘンリー・ジョージの著作中之が立派な論證を見出してゐる以上——とても彼には出来ないことであつた。

こんなわけで管理人の手紙は彼に不快な感じを與へたのである。

四

珈琲を飲み終ると、ネフリュードフは、通告狀を調べて裁判所への出頭時刻をたゞすため、又一つには公爵令嬢への返事を認めよと思つて、書齋へ出かけて行つた。書齋へ行くには製作室を通り抜けなければならなかつた。製作室には畫架が立つてゐて、その上に未完成の畫が裏返しに置いてあり、またいろ／＼な習作が懸けつらねてあつた。既に二ケ年も努力してゐるその畫や、いろ／＼の習作や、製作室の中などを見ると、最近特に痛切に體驗してゐる、畫にはとても見込みがないといふ無力の感をまたも喚び起した。彼はこの感情を、餘りに繊細に發達した美感の所爲であると説明してゐた、が兎に角、この意識は不愉快なものであつた。

七年前彼は、自分に繪の天才があると決め込んで、斷然軍職を去り、そして藝術的活動の高所から、他の一切の仕事を幾分蔑視してゐた。ところが今にして見れば、彼にはそんな權利はなかつた。従つて之に關する思ひ出は何といふこともなく皆不愉快であつた。彼はがっかりしたやうな心持で製作室の贅澤な装置を見た。そしていやな氣分になつて書齋へ這入つた。書齋は廣々として天井が高く、ありとあらゆる裝飾、調度、便利を備へてゐた。

通知狀は大きな卓子の『期限もの』と記した部門の抽斗にあつて、それには、十一時に裁判所へ出頭するやう記されてあつた。で、ネフリードフは腰を下して、公爵令嬢あてに、招待のお禮と、晚餐にはなるべく行くようにするといふ意味の手紙を書きはじめた。終りまで書いてからそれを破つてしまつた。あまりに馴れくしい調子だつたからである。で、もう一枚書き直した——が、それはまだ冷やかで、殆んど侮辱的なものであつた。彼はまた破いて壁の釘を押した。扉口に這入つて來たのは、灰色のキャラコの前垂を着けた、中年の、陰氣な、頬鬚だけ残してあとと剃つてゐる召使の男であつた。

「辻馬車呼びにやつてくれ。」
「はい、畏りました。」

「それから、あのコルチャーギン家から來てゐる人に、有難うございます、今晚はなるべく出掛けるやうにしますと言つて呉れ。」

「畏りました。」

「認めてやらないのは失禮だが、何うも書けないのだから仕方がない。どうせ今日のうちに會ふのだ。」——と考へて、ネフリードフは着物を着換へるために出て行つた。

やがて着物を着て、支關へ出て見ると、そこにはもう見馴れた護謄輪の辻馬車が待つてゐた。

「昨晚は、コルチャーギン様のお邸で旦那と行き違ひになりました。」と、ルバーシユカの白襟に包まれた頑丈な日に焼けた頸を、心持ちねち向けながら、馭者は云つた。——「私が行つて見ましたら、支關番が『今お歸りになつた』と言ひました。」

「馭者まで自分とコルチャーギン家との關係を知つてゐるのだな。」と、ネフリードフは思つた。するとまた、コルチャーギン令嬢と結婚したものか何うしたものかといふ未決の問題が、目の前に頭を擡げて來たが、この解決は、現在彼の胸中に何れとも片つかずに蟠つてゐる幾多の諸問題と同様、なか／＼齒が立たなかつた。

結婚の利益と言へば、先づ第一が、家庭團樂の樂みは別

として、性的生活の不正を除き、道徳的生活の理想を與へるものである。これが、彼の謂ふ家庭生活であつた。第二は、殊にネフリュードフが望みをかけてゐたもので、家族即ち子供が彼の現在の空虚な生活に意味を與へるといふことに在る。そして結婚の不利益な點は、第一がすべての若くない獨身者に共通なもので、今迄の自由が剝奪されること、第二が、女性といふ不思議な存在に對する無意識的な恐怖であつた。

更に細かく考へて、今ミッシイ（コルチャーギナ令嬢の名はマリヤと云つたが、或る範圍の人々からはミッシイといふ呼名を與へられてゐた）と結婚すれば、その好い方面は、第一彼女が、上流の家庭に生ひ立つただけであつて、着物の着こなしから物の言ひ方、歩き方、笑ひ方まで、すべてのものごしが他の一般普通の者と違つてゐることである。特にこの點が何うといふのではなく、たゞ「上品」といふ一事がくつきり目立つてゐるのであつた。彼はこの特性を言ひ現はすのに、「上品」といふより外は知らなかつた。そしてこの特性を非常に重く考へてゐた。次には、彼女が他の何人にもまして彼をよく評價してゐること、従つて彼の見る所では、彼を最もよく理解してゐることである。そして彼に對するこの理解——即ち彼の高尚な資質を認めるとい

ふことが、彼女の見識や判斷の勝れてゐることを證據立てるのであると、ネフリュードフには思はれた。今度はこのミッシイとの結婚の厭な方面を仔細に考へて見ると、第一、世間にはまだミッシイよりもつと／＼素質のよい、従つてもつと彼に適はしい娘が居ないとも限らない。第二には、彼女が二十七歳であるから、これまでも既に幾度か心の動きがあつたに違ひない——この考はネフリュードフに取つては特に辛いものであつた。それはたとへ過去のことであつたにしても、彼女が彼以外の男を戀したことがあつたらうといふことは、彼の誇りが許さなかつた。固より彼女は自分と知り合ひにならうとは、最切から知つてゐる筈がない。けれど彼女がこれより先に他の男を戀したことがあるかも知れないといふ考だけは、彼にとつて一の侮辱であつた。

こんな次第で、二つの反對な考へが何れも相當な歸結を持つてゐた。少くともこれ等の推理はその力に於いて兩々相等しかつた。で、ネフリュードフも自分で自分が可笑しくなり、これではブリダンの驃馬（十四世紀の哲學者ブリダンの類型的な驃馬）だと思つてゐる。そして二束の秣のうちどちらを食つてやらうか、その選擇を決しかねて結局もとのまゝに残つた。

『何れにしても、貴族長夫人マリヤ・ワシリーエウナから返

事が来て、はつきり片がついて了はないうち、自分は何
をすることも出来ぬ。』と、彼は心の中で言つた。
すると、この決定を延ばし得る、また延ばさなければな
らないといふ意識が、却つて彼には楽しみのやうにも思は
れた。

『兎に角、この問題はあとでよく考へることにする。』と、
獨語つた時、彼の乗つてゐた四輪馬車はもう全く音も立て
ずに裁判所のアスファルトの車寄せに近寄つた。

『さアこれから、いつも自分がしてゐるやうに、又しなけ
ればならぬと思つてゐるやうに、誠實に社會的義務を履行
しよう。いやその方が多くの場合面白いのだ。』と、心の中
で言つて、彼は支關番の傍を過ぎて、裁判所の支關内へ這
入つて行つた。

五

ネフリュードフが裁判所に這入つた時、その廊下といふ
廊下は非常な混雑を呈してゐた。

廷丁等は或は早歩で或は駈足で、ろく／＼床から足も擡
げずに、そつと引き摺りながら、息を切らして、忙しなく往
きつ戻りつ馳せまはつて、委任状や書類を持ち歩いてゐた。
廷吏や、辯護士や、判事なども、あちらこちらと往來して

ゐた。また原告や監視を解かれた被告などは鬱ぎ込んで、
壁の傍をうろついたり、腰を掛けたりして開廷を待つてゐ
た。
「法廷は何處かね？」と、廷丁の一人にネフリュードフは尋
ねた。

「民事ですか、刑事ですか、どちらですか？」

「僕は陪審員だが。」

「では刑事ですね。早くさう仰しやつて下さればよいのに。
此處を右へお出でになつて、それから左に曲つて二番目の
扉口がさうです。」

ネフリュードフは教へられた通りに行つた。

教へられた扉口には二人の男が開廷を待ちながら立つて
ゐた。一人は背の高い、肥つた商人で、善良な人物、ウオーッ
カを一杯ひつけて來たと見え、頗る上機嫌であつた。も
一人はユダヤ系の店員であつた。彼等が丁度獸皮の相場に
就いて語り合つてゐるところへ、ネフリュードフが近づい
て、此處が陪審員の部屋かと尋ねた。

「え、さうです。且那も私達のお仲間で、陪審員でいら
つしやいますか？」と、善良な商人が愉快さうに目瞬きし
ながら尋ねた。——「では、御一緒にお願ひ致します。」ネ
フリュードフがたゞ軽く頷いたのに對し、彼はかう續けて

云つた——「私は第二同業組合の者で、バクラシヨフと申します。」彼は柔かい、幅の廣い、ちよつと握られさうもない手を出しながら云つた——「どうぞ宜しく。失禮ですがどんな様でいらつしやいますか。」

ネフリードフは自分の名を告げてから、陪審員の控所へ這入つた。

小さな陪審員控所にはいろんな種類の人達が彼是れ十人もゐた。皆着いたばかりのところらしく、或は腰を下し、或は歩き廻つて、互に顔を見交はしたり、近づきになつたりしてゐた。制服を着た退職軍人が一人居つたが、他の者はフロクコートや、背廣を着てゐた。たゞ一人だけ百姓服を着けた者があつた。

彼等の多くは仕事を擲つて來てゐた。そして何れも口々に愚痴をこぼしてはゐたが、その顔付を見ると皆、重要な公務を勤めるのだといふ意識によつて、幾分の嬉しさを印してゐた。

陪審員達は知り合ひになつた者も、さうでなくてはたゞ大方あの人だらう位に推察をつけた者も皆互に、天候の事や、春先の話や、目の前に迫つてゐる仕事のことなどを語り合つてゐた。ネフリードフが這入つて來ると、面識のない者は、さうするのが何か一種の禮儀でもあるやうに心

得てゐるらしく、急いで寄つて來て彼と近づきになつた。ネフリードフも亦、いつも未知の人々の仲へ這入つた時のやうに、之を當然なこととして受けた。何故彼は一般多數の人々よりも氣位を高くしてゐるかと問はれたら、恐らく彼には返答が出来なかつたであらう。何故なれば、彼の生活は別に取り立て、云ふべき程の特色を示してゐなかつたからである。成程彼は英語、フランス語、ドイツ語などをよくあやつつた。また彼の身につけてゐる襦袢や、着物や、ネクタイや、飾り鈕釦等は、是等商品の一流所の供給者の手から購入したものであるが、そんなことは——彼自身の見解によつても——何等彼の優越性を承認すべき理由とはなり得なかつた。それにも拘はらず、彼は自分の優越性を認めて疑はなかつた。そして彼に捧げられる尊敬の表示を當然のものとして受け、それが無い場合には非常な侮辱を感じた。ところが陪審員の控所に於いて彼は端なくもさうした不遜な目にあつたので、ひどく氣持を悪くすることになつた。陪審員の中に計らずもネフリードフの知人が一人ゐた。それはビートル・ゲラシモウイチ(尤もこのゲラシモウイチの苗字をネフリードフは知らなかつた、そしてその知らないといふことを一つの誇りにさへしてゐた。)と言つて、ネフリードフの姉の子供達の教師をしてゐた男だ。し

かしこのビートル・ゲラシモウィチも今では中等教員になつてゐた。ネフリュードフはかね／＼この男の慣れ／＼しい態度や、人もなげな高笑や、概して——ネフリュードフの姉の言ひ方をかりると——彼の『共産的』なところがたまらなく嫌ひであつた。

「やア、あなたも捕まりましたね！」と、破れるやうに笑ひながらネフリュードフを迎へて、ビートル・ゲラシモウィチは言つた。——「逃げられなかつたですな？」

「僕は逃げようなどとは思つてものませんよ。」と、ネフリュードフは嚴格に、しかし退屈さうに答へた。

「成程、それは公民としての美德ですな。だが一朝、食ふに物なく、寢るに處なしとなると、さうばかりも言つて居られませんぜ！」かう言つて、ビートル・ゲラシモウィチは更に大きな笑聲を立てた。

『この糞坊主の件めが、うかく／＼していると、今に「君、僕」で話し出すぞ。』と思ふと、ネフリュードフは、急に身内の者が皆死に絶えたといふ計に接した時でももなければ適はしくないやうな暗い陰鬱な顔をして、彼の傍を離れ、そして綺麗に鬚を剃つた背の高い容體振つた紳士が、何か盛んに氣焔をあげてゐるのを取り巻いてゐる團體の方へ近づいて行つた。その紳士は、今現に進行中の民事裁判に就いて、

裁判官や有名な辯護士などを名と父稱とで友達の如く呼びながら、如何にも物識り顔に話してゐた。それは、何でも一人の老婦人が、自分の方に十分の權利がありながら、有名な辯護士の奸計にかゝつて、却つて相手に大金を拂はねばならなくなるだらうといふ、驚くべき事件の成行きに就ての話であつた。

「何とえらい腕前ではありませんか！」とその紳士は言つた。

一同は敬服して聽いてゐた。中には何とか自分の意見を袂まうと力んだものもあつたが、彼はすべての者を押切つて、自分一人一切の真相を知つてるといつたやうな顔付をしてゐた。

ネフリュードフは比較的晩くやつて來たのであるが、それでも長いこと待たせられた。それは、何でも係りの裁判官がまだ一人來ないといふので、待ち合せてゐるのであつた。

六

裁判長は早くから出勤してゐた。背の高い、でつぷりした男で、灰白色の長い頬鬚を生やしてゐた。彼は妻帯者ではあるが、随分と放埒な生活をしてゐた。ところがその細君も同様に放蕩なのだから、お互ひに妨げ合ふやうなこと

はなかつた。今朝も彼は、過ぐる夏、自分の家に住んでゐた瑞西生れの女教師で、今は南からベテルブルグへ行つてゐる女から手紙を貰つたところであつた。それには、三時から六時までの間、市内の『イタリヤ』ホテルで彼を待つてゐるからと書いてあつた。そこで、今日の法廷は早く開いて早く閉ぢてしまひ、それから、去年の夏別荘で彼とロマンスを結んだあの赤い毛のクララ・ワシリーエウナを六時までに訪ねたいと思つてゐた。

彼は書齋に這入ると、戸に錠をかけ、書類の入れてある戸棚の下の棚から二個の啞鈴を出して、上へ、前へ、横へ、下へと、二十回の運動をなし、それから啞鈴を頭上高く差し上げたまゝ、三回軽く膝を折つた。

『冷水浴と體操ぐらゐ體を丈夫にするものは無い。』と考へながら、彼は無名指に金の指環の嵌つてゐる左の手で、右手の緊張した上膊筋を觸つて見た。彼はまだ旋回運動をする筈であつた。(長時間法廷に坐する前には、いつもこの二種の運動をしてゐた。)が、この時誰やら戸を敲く音がした。そして扉を開けようとするらしかつた。裁判長は急いで啞鈴を元の場所へしまひ、それから、扉を開いた。

「いや、失敬しました。」と彼は言つた。

部屋へ這入つて來たのは、同僚判事の一人で、金縁眼鏡

をかけた、背の低い、怒り肩の、いかつい顔をした男であつた。

「マトフェイ君はまだ出勤しません。」と、不満さうに判事が云つた。

「まだ來ない？」裁判長は制服を着けながら答へた。——「何時でも遅れるんだね。」

「圖々しいにも程がある。」同僚の男は、ぶん／＼怒りながら腰を下して紙巻煙草を取り出した。

この男は又、頗る几帳面な方で、今朝も細君が一ヶ月分としてあてがはれてゐる金を、期限の來ないうちに費ひ果したといふので、その細君と面白からぬいさかひをして來たのであつた。つまり、彼女が前渡を乞うたところ、彼は自分の約束から一步も退かないので、それで一と幕演じたのであつた。さういふ譯なら、食事の用意は出來ませんか、家では食事を攝らない積りでゐて貰ひたいといふのが、彼女の言草であつた。何ういふことでもし兼ねない女だから、本當に威嚇し文句通りにするかも知れないと、怯えを感じて、彼はそのまま家を出た。——「どうせ生きるなら、かういふ立派な眞面目な生活がしたい。」と、彼は晴れ晴れした健康な、快活な、そして悪氣のない裁判長を眺めながら考へた。裁判長は兩肘を廣く張つて、美しい白い兩

手で、濃い長い半白の頬鬚を、刺繍した襟の両方へと撫で分けてゐた。——「この人はいつも氣榮で愉快さうだが、それに引き換へ、自分は何かといふ慘めさであらう。」

この時書記が這入つて来て、一件書類やうのものを届け

た。「いや大きに有難う。」と言つて、裁判長は紙巻煙草に火をつけた。——「だが何の件から先にしたものかな。」

「毒殺事件がよいと思ひますが。」事もなげに書記は答へた。

「よからう、毒殺事件、それがよからう。」と裁判長はこれならば四時までに片づけられる、そしたら出かけるんだと、胸算用しながら言つた。——「時にマトフェイ君はまだ見えないかね?」

「まだでございます。」

「ではブレイウ君は來たのかな?」

「出勤して居ります。」と書記は答へた。

「ではね、ブレイウ君に逢つたら、毒殺事件から初めると云つてくれ給へ。」

ブレイウといふのは、この法廷で諭告の任に當る副検事であつた。

廊下に出ると、書記はブレイウに逢つた。彼は肩を聳

やかし、制服の鈕釦を外したまゝ、折靴を小脇にかゝへ、まるで走るやうに踵を叩きつけながら、また、空手の方はその平面が彼の進行してゐる方向に一直線になるやうに打ちふりながら、活潑な歩調で廊下を急いでゐた。

「あの裁判長が、もうお支度はよろしいですかと仰しやつてみました。」と書記は訊ねた。

「いゝとも。僕は何時でもいゝよ。」と副検事は言つた。——「で、どの件から初めるかね?」

「毒殺事件です。」

「結構々々。」と、副検事は言つた。然し實を言ふと、これではさつぱり結構でなかつた。といふのは、彼は夜前一睡もとらなかつたのだ。友達の送別會で二時まで飲んだり遊んだりした揚句、丁度六ヶ月以前にマースロワの居つたその遊女屋へ繰込んでしまつたので、生憎この毒殺事件だけは讀みきれなかつた。で、今急いで一通り眼を通さうと思つてゐた矢先であつた。一方、書記の方では、彼が毒殺事件を調べてゐないといふことを承知してゐるので、わざと裁判長に之から初めることを勧めたのであつた。書記は自由思想系の、といふよりは寧ろ急進思想系の男であつた。所がブレイウ(系の男)の方は保守主義で、殆どすべてのロシヤ在勤のドイツ人と同じく、正教を奉じてゐた。書記には

それが氣に入らず、又一つには彼の地位が嫉ましかつたのである。「で、あのスコベツ教徒事件は何うしませう?」と、書記が聞いた。(スコベツ教は去勢の方法によつて)

「あれは證人がないから駄目だと云つたぢやないか。」と副検事は答へた。——「法廷でもさう聲明しよう。」

「それにしても矢張り……」

「駄目さ、あれは。」と云ひ棄て、副検事はまた片手を打ち振り、自分の事務室の方へ駆けて行つた。

彼がスコベツ教徒事件を、あてもなくともいゝやうな、まるで不必要な證人がゐないからとて、遅延させてゐた理由は、この事件か、知識階級から成る陪審員の前で審議されると、免訴になつて了ひさうだつたからである。それで裁判長と相談の上、この事件は、百姓達の多い郡部の裁判所へ廻して、より多く有罪の機會を與ふべきことになつてゐた。

廊下の混雑は段々激しくなつて行つた。一番こつたかへしてゐたのはさすがに民事の法廷の附近で、其處では、今あの裁判好きな容體ぶつた紳士が陪審員達に話して聞かせた大事件が進行中であつた。休憩時間になると、法廷から老婦人が出て來たが、この婦人こそ、凄腕の辯護士の奸計にかゝつて、何等の權利もない仕事師の方へ、自分の財産を奪られてしまふといふ女であつた。その事情は、原告やそ

の辯護士は勿論のこと、裁判官なども皆よく解つてゐた。けれども原告側の者がうまく仕組んだので、どうしても老婦人の財産を奪ひ取つて、それを仕事師の手に渡すより外はなかつた。老婦人といふのは、立派な身装をした、でつぷりと肥つた女で、帽子には大きな花をつけてゐた。彼女は、扉の外に出ると、廊下に立止まつて、むつちりした短い兩手をふりながら、自分の頼んだ辯護士に向つて、「こんな事ツであるものでせうか? ほんとにまアこんなことツて?」と、頻りに繰返してゐた。辯護士は彼女の帽子の花を見詰めてゐた。そして何か考へてゐるらしく、その言葉は耳に這入らなかつた。

老婦人の後に續いて、民事の法廷の扉口へ、胸開きの大きい胸衣の白縁と得意な顔を輝かせながら、元氣よく現はれたのは、これぞ、花をつけた老婦人を眞裸にして、自分は一萬ルーブリを買ひ受け、仕事師に十萬ルーブリ以上をとらせるやうに企らんだ有名な辯護士であつた。すべての視線は辯護士の上に集まつた。彼はこれを感じてか、その外貌や舉動の上に、『何もビクつくには當らない。』と云つた風を示し、風を切つて皆のそばを通り抜けた。

やつとマトフエイ・ニキーテイチも出勤した。すると、瘦せた、頸の長い、下唇までが片方に突き出てゐる、片道寄りな歩き方をする廷吏が、陪審員の控室へ這入つて来た。

この廷吏は正直者で、大學教育を受けた男であるが、酒癖が悪いため、何處へ行つても長續きがしなかつた。それがつい三ヶ月前、彼の細君を鼻眞にする或る伯爵夫人の斡旋で、この職を得たのである。そして今日迄のところは後生大事に此處に嚙りついて、自分でも満足してゐる。

「皆さん、お揃ひになりましたか？」と、彼は鼻眼鏡をかけて、そして眼鏡越しに見廻しながら云つた。

「先づお揃ひのやうですな。」と云つたのは、快活な商人であつた。

「では、讀み上げて見ませう。」と、廷吏は言つて、ポケットから紙片をとり出した。そして、一人々々、名前を呼んで、その呼ばれた者を眼鏡越しに覗いたり、眼鏡の中から見たりした。

「參譯官、イ・エム・ニキフオロフ！」

「はい。」と、法廷のことには一切通じてゐる、容體振つた紳士が應へた。

「退職大佐、イワン・セミョーノウィチ・イワーノフ！」

「はい、此處です。」と返事をしたのは、退職士官の制服を

着た、瘦せた男であつた。

「第二同業組合員、ピョートル・パクラシヨフ！」

「はい。居りますよ。」氣さくな商人は口一杯にこくしながら言つた。——「待つてました。」

「近衛中尉、公爵、ドミートリイ・ネフリユドフ！」

「はい。」と、ネフリユドフは答へた。

廷吏は、鼻眼鏡の上からじつと見て、この人を他の人々から特別扱ひにするかの如く、特に恭しく、愛想よくお辭儀をした。

「大尉、ユーリイ・ドミトリエウィチ・ダンチェンコ！ 商人、グリゴリイ・エフィモウィチ・クレシヨフ！……」

二人の缺勤者があつただけで、他はすべて出席してゐた。

「では、どうか皆さん、法廷の方へ願ひます。」かう言ひながら、廷吏はしなやかな手付をして扉の方を示した。

皆動きだした。そして扉口の所で互に譲り合ひながら廊下へ出て、それから法廷へ行つた。

法廷は大きな、長い廣間であつた。その一端には、三段上ると高座があつて、高座の中央に一脚の卓子が立つてゐた。卓子は緑色の羅紗で覆はれ、同じ緑色のやゝ黒ずんだ房が垂れてゐた。卓子の蔭には、可なり高い、櫛製の、彫刻を施した背當のある肘掛椅子が三脚据多であつて、その

また脇掛椅子のうしろには、正装して綬を帯び、一脚を前へ踏み出して、劍の欄を握つた(三)元帥姿の(四)皇帝の燦然たる全身像が金襴の額に這入つて懸かつてゐた。右手の一隅には、荆冠姿の基督の像を入れた枠が懸かり、讀經臺も立つてゐた。同じく右手の方に檢事の書臺があつて、それと向ひ合つた左手の、奥まつたところに書記の卓子があり、やや傍聴席に近く、磨きのかゝつた檜製の欄柵があつた。そしてその欄柵の中にはまだ空席になつてゐる被告の腰掛があつた。高座の右手には、これまた高い背當のある椅子が二列に列んでゐて、それは陪審員の席であつた。その下の方の机が辯護士席になつてゐた。これ等のすべては、廣間の前部を占めてゐて、後部とは欄柵で以て區切られてゐた。後部はすべて腰掛に埋められてゐて、その腰掛は一列毎に段々と後上りになり、後方の壁際まで及んでゐた。廣間の後部の前方の席には、女工か下女と覺しき四人の女と、これ亦労働者らしい二人の男とが腰掛けてゐた。彼等は皆、この法廷の飾りつけの莊重さに威壓されて、ひそひそと囁き合つてゐるらしかつた。

陪審員が這入つて來ると間もなく、例の廷吏が片道寄り歩き方で現はれて、中程へ進み出ると、恰も列席の人達をびつくりさせてやらうといつたやうな大聲をあげて、

「開廷！」と叫んだ。

一同起立した。その時廣間の高座へ上つて來たのが裁判官の面々であつた。第一番が、逞しい筋骨と立派な鬚鬚をもつた裁判長、次が金襴眼鏡をかけた陰氣な裁判官であつた。彼は前よりは一層暗い顔をしてゐたが、それには譯があつた。開廷の直前、彼の義弟にあたる裁判所の書記生が彼の許へ來て、自分は今姉の所へ行つて見たのだが、家は今日は食事の用意は出來ないと言つてゐた、と傳へた。そして義弟はなほ附加へて、

「だからお茶屋でもお食んなさいといふんでせう。」と、笑ひながら言つた。

「笑ひ事ぢやない。」と、陰氣な裁判官は云つて、尙一層暗い顔になつた。

さて殿に這入つて來た三番目の裁判官は、これぞ何時でも遅刻をするマトフ・ニキーティチである。——彼は大きな、尻下りの温なしい眼を持つた鬚鬚であつた。ずつと胃加答兒に惱んでゐて、今朝からは醫師の勧めで新しい療法を始めたが、この新しい療法のためには更何時もより遅れたのであつた。ところで今、高座へ上つて來た彼を見ると、じつと精神を集中してゐるやうな様子であつた。それもその筈である。一體彼は、自分で判斷のつかない問題に

なると、出来るだけの方法を用ゐてこれを占つて見る癖があつた。今も今、事務室の扉から自分の席までの歩数を算へて、それが三で割り切れれば、今度の療法は成功するだらう、が、もし割り切れなければ利き目はないものと占つて来た。歩数は二十六歩であつた。けれども彼はわざと小さい一步を加へて、丁度二十七歩目に肘掛椅子に着いたのである。襟に金モールを縫ひつた制服を着て、高座に

現はれた裁判長及び裁判官の姿は、頗る威歴的なものであつた。彼等自身もこれを感じてゐたので、三人が三人共自分達のいかめしさを氣にしたらしく、慌て、つゝまじやかに眼を伏せて、卓子の蔭の彫刻のしてある肘掛椅子に腰を下した。卓子は緑色の羅紗に覆はれ、その上には、頭に鷲のついた三角形の文鎮と、食堂などならばよく菓子を入れてあるやうな硝子製の瓶が高く見えてゐて、なほインキ壺や、白紙や、いろ／＼な大きさの削りたての鉛筆が幾本も置かれてあつた。裁判官達と一緒に副検事も這入つて来た。彼は例の通り折靴を一方の小脇に抱へ、一方の手を打ち振りながら、急いで窓際の自分の席へ通つた。そして腰を下すと、一分の間も惜しまれるやうに、書類の素讀と調査に没頭して論告の用意をした。この検事はこれでやつと四度目の論告である。彼は頗る野心家で、何れこの道で出

世しようと思つて堅く決心してゐるのだから、自分の論告する事件は何が何でも有罪にしてはねばならぬものと決めてゐた。今度の毒殺事件に就いては、その大體の本質は承知してゐたし、既に辯論の腹案も出来てゐたが、尙ほ彼は若十の事實を加へようとして、今急いでそれを書き抜いてゐるところである。

書記は高座の反對側の端に控へて、朗讀に要すべき書類を全部整理して了つてから、昨日手に入れて讀みかけて置いた發賣禁止の論文を見てゐた。彼は自分と意見の一致してゐる齋達磨の裁判官とこの論文に就いて話して見たかつたので、話をする前にそれをよく吞込んで置く必要があつたのである。

八

裁判長は一通り書類に眼を通して、廷吏と書記とに二三の質問をしたが、合點が行くと、やがて被告の出廷を命じた。直ちに欄柵の背後の扉が開かれて、帽子を被つた抜劍の憲兵が二人出て来た。次いで赫ら顔の、雀斑だらけの男の被告が一人と、それから二人の女被告が現はれた。男の方は、その體に取つて餘りに大き過ぎ長過ぎるだぶ／＼の獄衣を着てゐた。法廷に出ると、兩腕を着物の縫目なりに

じつと押しつけ、突き出てゐる大きな指を悉く張つて、それで、長過ぎてずり落ちて来る袖を支へてゐた。彼は裁判官や傍聴人には眼もくれず、自分が今通つてゐる腰掛はかりを氣をつけて見てゐた。やがて通り終ると、彼は他の者が掛けられる餘地を残して、きちんとその一端に腰を下した。それから初めて裁判長の顔をじつと見て、何か囁くかの如く、頬の筋肉をピク／＼と動かしした。この男の後に就いて這入つて来たのは、矢張り獄衣を着てゐるやゝ年取つた女であつた。頭は囚人の頸巻で包まれ、顔は青白く、睫毛も眉毛もなく、眼は赤かつたが落ちつき拂つてゐた。自分の席へ通る途端、その着物が何かに引つ掛かつたが、少しもあわてないで、注意深くそれを外して、それから席に就いた。

三番目の被告がマースロワであつた。

彼女が出て来ると、廣間にゐたすべての男子の眼がそちらに向けられて、彼女の白い顔と艶々した黒い眼と獄衣の下からふつくりと盛り上つた胸とに、しばらくは吸ひつけられてゐた。憲兵ですら、彼女がその前を通ると、眼を離さずに眺め、その行き過ぎて坐りかゝるまで見入つてゐたが、やがて彼女が坐つてしまふと、急にこれはいけないと思つたらしく、急いで向きかへり、身を一と振りふつて、

それから正面の窓の方へ眼を据ゑた。

裁判長は、被告共がその席に着くのを待つてゐたが、マースロワが着座したのを見ると、書記の方を向いた。

いつもの通りの順序で愈々閉廷になつた。即ち陪審員の人數調べ、缺席者に關する判定、彼等に對する罰金附課、免官請願に關する裁可、缺席人員に對する補缺任命と進めて来て、その次に裁判長は小さな札を疊んで、それを硝子瓶の中へ入れ、金モールの飾のついた制服の袖を少しずりあげて、毛むくちやらかな手頸をぎゆつと露はし、手品師のやうな手つきで、一枚々々その札を取り出しては披いて讀んだ。やがて裁判長は兩袖を下して、司祭に陪審員の宣誓を執行するよう申出た。

脹んだやうな黄色がかつた蒼白い顔の老司祭は、薙色の法服を纏ひ、金の十字架を胸にかけ、少し脇に寄つた所へ何だか小さな勳章を吊してゐたが、法服の中でその脹んだ兩足を徐かに運びながら、聖像の下に立つてゐる讀經臺の方へ歩いて行つた。

陪審員等は起立して、ごた／＼しながら讀經臺の方へ進んだ。

「どうか、此方へ。」と云ひながら、司祭はその脹んだ片手で胸の十字架を押へて、陪審員が皆集つて来るのを待つて

ゐた。もと／＼福音書の中には明かに宣誓が禁じられてゐるのだが、その福音書の前に人々を誓はせるといふのが、裁判所に於ける司祭の役目であつて、この事のよろしくないのは明白なのに、彼は未だ曾てそんな事に拘泥したことが無かつた。で、彼はこれを苦に病んでゐないばかりか、寧ろこの際貴顯紳士の人々と近づきになれることが多いので、この手馴れた役目を好んでしてゐた。今も彼は、帽子に大きな花をつけた老婦人の事件一つで一萬ルーブリ取つたといふので多大の敬意を拂つてゐたその有名な辯護士と知り合ひになつて、内心悦んでゐたのである。

陪審員全部が段々を登つて高座に立つた時、司祭は禿げた白髪頭を片つ方に曲げて、その上から垢じみた袈裟を被るやうに着、それから稀薄な頭髪を直して陪審員の方へ向き直つた。

この司祭は四十六年間勤続し、もう四年経つと、ついこの間或る本山の主教が祝はれたやうに、自分の在職五十年の祝賀會も催されるので、内々それを待つてゐるのであつた。彼の裁判所勤務は、この裁判所の開かれた當時からであつて、既に數萬の人を宣誓せしめ、このやうな高齡にありながら、尙ほ教會と、祖國と、家庭の福祉のために勤勞を續け、その家族には家屋の外に三萬ルーブリ以上の金を利札

もろ共後へ遺してやるのだといふことを非常な誇りとしてゐた。

「さあ皆さん、右手を舉げて下さい、指はかういふ風に揃へて。」と徐ろに、如何にも年寄じみた聲で言ひながら、各各の指のつけ根の上に窪みの出来てゐる膨れた手を舉げ、拇指と第二指と第三指とで物を撮む時のやうな指の揃へ方をして見せた。「今度は私の言ふ通りにおつけないさい。」と云つて置いて、さて切り出した。

「聖なる福音書と生命を給ふ主の十字架の御前に、全能の神を指して誓言します、この裁判に於いて……」と、一句一句切りながら言つた。「手を下してはいけませんよ、ちやんと舉げてゐて下さい。」と、今しも手を下しかけた若い男に言つた……。「この裁判に於いて……」

頬鬚を生やした勿體ぶつた紳士や、大佐や、商人や、その他の或る者は、司祭の指圖通りに、恰もさうすることが面白いものゝ如く、指を揃へた手をちやんと高くさへ上げてゐたが、他の或る者はまるでいや／＼ながら上の空でやつてゐた。一人だけ度外れな高い聲をあげて、『でも俺は兎に角唱へてゐるんだ、唱へてゐるんだ。』とでも言はぬばかりの不満足な表情をまじへて、鸚鵡がへしに唱へてゐる者もあつた。が、他の多くは、低聲で囁いたり、司祭の言

葉に後れたり、又餘程た経つてから、まるで吃驚びっくりしたやうに、とんでもない時に後ればせに追ひついたりした。また或る者は、何かと逃すのを恐れるかのやうに、勢ひ込んだ手つきで、しつかり自分の揃へた指をそのまゝ抑へてゐる者もあつたが、中にはその指を離したり結んだりしてゐるものもあつた。何れにしても皆變にぎこちない心持であつた。たゞ一人老司祭だけは、自分が極めて必要な大切な事をしてゐるのだと、疑ひもなく信じてゐた。宣誓が終ると、裁判長は陪審員達に陪審員長の選舉を請求した。陪審員達は起つて、押し合ひながら會議室へ通つた。そして其處へ這入ると、殆んど全員が直ぐ紙卷煙草をとり出して、煙し始めた。誰だつたか、例の容體振ようたいびんつた紳士を陪審員長に推舉したので、皆異議なくそれに決めて了ひ、煙草の吸ひさしを消して、投り棄てながら法廷へ歸つて行つた。選出された陪審員長は、自分が選にあづかつたことを裁判長に報告し、それが濟むと、一同は再び背當せあての高い椅子へ二列に着座した。

すべてが滞りなく、はかばかしく、そして嚴おそかに進行した。かうした規律と秩序と嚴肅さとは、明らかに並み居る人人に満足を與へた。つまりそれによつて、自分達が眞面目な大切な公務を果してゐるといふ感銘を深めたわけである。

ネフリードも亦同じ感じであつた。

陪審員達が着席するや否や、裁判長は彼等の權利と義務と責任とに就いて一場の演説を試みた。その演説中、裁判長は始終自分の姿勢を變へてゐた。或は左の腕につき、或は右の腕にもたれ、背當せあてによりかゝつたり、腕掛椅子の腕にもたれたり、或は書類の端を揃へたり、小刀ナイフを撫でて見たり、鉛筆をいぢつたりした。

その言ふ所によると、陪審員の權利は、裁判長を通して、被告に質問を發する事、筆や紙を所持する事、證據物件を調べる事等が出来るのであつた。その義務は、偽りなく正當に審理することにあつた。そしてその責任といふのは、法廷審理の祕密を破つたり、局外者に洩らしたりする時は、懲罰に遇ふといふことであつた。

すべての人は靜肅に謹聽した。例の商人は酒の香をあたりに漂はし、うるさい吃逆いきさかを抑へつけながら、一句々々感歎したやうに頷いてゐた。

九

演説を終ると、裁判長は被告達の方へ向いて、

「シモン・カルティンキン、起立。」と云つた。

シモンは神經的に跳とび起つた。頬の筋肉が一層素早く動

き出した。

「名前は何？」

「シモン・ペトロフ・カルティンキン。」前以て返答の用意をしてゐたものと見え、彼は爆裂したやうな聲で早口に言ひ放つた。

「身分は何？」

「百姓でござえやす。」

「出生地は何？」

「トウーラ縣クラピウンスキイ郡、クピヤンスカヤ聯合村ポルカ村。」

「年齢は何？」

「三十四、生れやしたのは千八百……」

「宗旨は何？」

「ロシア正教。」

「妻はあるか？」

「まだでござえやす。」

「職業は何？」

「『マウリダニヤ』旅館の下働きをして居りやした。」

「前科は何？」

「決してそのやうなことは、手前これまで……」

「前科は無いと云ふのか？」

「飛んでもねえこと、それはもう決して。」

「起訴狀の謄本は受け取つたか？」

「受け取りやした。」

「着席。エウフイミヤ・イワーノワナ・ポーチョワ。」と、裁判長は次の被告へ移つた。

ところがシモンは立ち續けて、ポーチョワを遮つてゐた。

「カルティンキン、着席。」

カルティンキンはまだ立つてゐた。

「カルティンキン、着席。」

それでもカルティンキンは立つてゐた。遂々廷吏が、頭を横にねち、眼を不自然に見開きながら駆けて來た。そして悲劇じみた低聲を出して、「坐れ、坐れと言ふに！」と言つた。それで漸く腰を掛けた。

カルティンキンは起つ時と同様、腰の掛け方も素早かつた。彼は席につくと上衣を確り身に巻きつけて、またも靜かに頬肉をびく／＼と動かし始めた。

「名前は何？」と、大儀さうな溜息を吐いて、裁判長は顔も見ずに、たゞ眼前の書類について何やら調べながら、次なる被告に移つた。裁判長としてはこんな仕事に馴れきつてゐるので、事件を迅速に片つけるため一時に二た仕事する位のは易々たるものであつた。

ポーチョワは年齡四十三歳、身分はコロムナ市の町人で、矢張り『マウリタニヤ』旅館の使用人であつた。公判も豫審も受けたことは無かつた。彼女はその返答を極めて大膽に言ひ放つてゐたが、その語調には何となく、『さうですよ、エウフイミヤですよ、ポーチョワですよ。臆本は貰つてゐますとも。それが何うしたと云ふのです。あまり人を莫迦にするとは承知しませんよ。』とでも云つてゐるやうな調子が伴つてゐた。ポーチョワは着席と言はれるのも待たずに、訊問が終ると直ぐ腰を下してしまつた。

「氏名は？」と、女好きの裁判長は、第三番目の被告には何だか特に愛想よく言葉をかけた。——「起立するのです。」マースロワが坐つてゐるのを見て、彼は軟らかにまた優しくから附け加へた。

マースロワは活潑に立ち上つた。そしてさア何でも來いと言はぬばかりに自分の高い胸を張り、返答もせず、その微笑んでるやうなやゝ斜視の黒い眼で、じつと裁判長の顔を見つめた。

「名は何といふ？」

「リニポーヴィと申します。」彼女は活潑に言ひ放つた。

ネフリュードフはその訊問の間に鼻眼鏡をかけて、被告達の方を訊問される順に見て行つた。——「いや、そんな筈

はない」と、彼は今の女被告の顔から眼を離さずに考へた。——「だが、リニポーヴィとは一體何だ。」彼女の返答を耳にして彼は又かう考へた。

裁判長はそのまゝ訊問を続けようと思つたが、眼鏡をかけた同僚が、何だか怒つたやうに呟いて彼をとめた。裁判長は承諾の印に頷いて見せて、更に被告の方へ向き直つた。「何ッ、リニポーヴィだと？ 此處にはさうは書いてない。」と言つた。

被告は黙つてゐた。

「本名は何と言ふのか、それを訊いてゐるのだ。」

「洗禮を受けた時の名は何と言ふのだ？」怒つたやうな同僚も問ひ質した。

「以前はカテリーナと申しました。」

「いや、そんな筈はない。」と、ネフリュードフはわれとわが心に言ひ續けた。が、そのうちに彼は最早、それが彼女であるといふことを何の疑ふ所もなく知つた。それは正しく自分が曾て戀におちて、無我夢中に手籠めにした揚句、捨て、了つたあの令嬢風の小間使に違ひなかつた。實を言ふと、彼はこの娘のことを思ひ出すと餘りにも苦しく、あまりにもはつきりと良心に責められるばかりでなく、元來が上品を誇りとしてゐただけに、上品どころか、あんな淺

ましい猥らなことを彼女に爲出かしたといふ事が、明瞭に意識されるので、その後は決して思ひ出さないことにしてゐたのである。所が今端なくも此處にその女が現はれた。

正しく、それは彼女であつた。人はそれ／＼他と異なる神祕な特徴をもつてゐて、それによつて特異な唯一の、二つとなし者となるのであるが、今ネフリュードフの眼に映つたのは、つまりさうした一種特別の不可思議な特徴であつた。顔は不自然に白く肥つてゐても、あの可愛らしい一種獨特な特徴ばかりは、その顔に、唇に、心持ち斜視の眼に、わけてもその無邪氣なにかやかな眼眸に、また顔ばかりでなく全姿態に現はれるその性癖にあり／＼と讀めた。

「早くさう言へばよかつたのに。」と、それでも殊更言葉優しく裁判長は云つた。——「で、父稱は何といふか？」

(ロシア人には苗字と固有名の外に父の名から取つた父稱といふのが別にある)

「私、私生兒でございます。」マースロワは呟いた。

「でも、名付親があつたらう？」

「ミハイロワと申します。」

「一體、この女が何をしでかしたといふのだらう？」と、考へ續けながら、ネフリュードフは碌々息も吐けなかつた。「姓は何といふか？ 苗字は。」と、裁判長はなほ問ひ續けた。

「母方の苗字でマースロワと申します。」

「身分は？」

「平民。」

「宗旨は正教か？」

「正教でございます。」

「職業は？ 何をしてゐた？」

マースロワは黙つてゐた。

「何をしてゐたのか？」裁判長は繰返して問うた。

「商賣屋にゐました。」と、彼女は言つた。

「どんな商賣屋に？」眼鏡をかけた同僚が厳しく訊ねた。

「御存じのくせに。」と言つて、マースロワはにつこりしたが、急に慌しくあたりを見廻して、また裁判長の方へ眞直

に視線を向けた。

彼女の顔には、何だかたゞならぬ表情が動いて、その言つた言葉の意味にも、その微笑にも、また法廷をじろりと見廻したその素早い眼付にも、何だか恐ろしい傷ましい或物が潜んでゐた。裁判長もそれと氣がつくと、さすがに伏目になり、法廷もこの瞬間水を打つたやうに森然と靜まり返つた。が、この沈黙は、傍聴人の中の一人の笑聲で破られた。と、また誰かゞ叱つと言つてそれを制した。裁判長は頭を擡げて訊問を續けた。

「前科はないか？」

「ありません。」と、マースロワは溜息まじりにそつと言つた。

「起訴狀の謄本は受取つたか？」

「受取りました。」

「着席。」と、裁判長は言つた。

女被告は、貴婦人がその裳を直すやうな風に、後方から下袴を持ちあげて腰を掛け、それから上着の袖にくるまつた小さな白い兩手を組んだが、眼はいつも裁判長から離さなかつた。

次に證人の呼出、證人の退去、鑑定醫の選定、及びその呼出等が行はれ、その後で書記が起つて起訴狀を讀み始めた。彼の讀方は明瞭で高聲ではあつたが、その早いことと言つたら、まるでLもRも區別がつかず、その聲が一つの連續した眼氣を催させるやうな唸り聲であつた。裁判官達は肘掛椅子の右に肘をついたり、左についたり、前の卓子に凭れかゝつたり、後ろの背當に反り返つたり、眼をつぶつて見たり、開いて見たり、また互に囁き合つたりなどしてゐた。一人の憲兵は出かゝる欠伸を何遍か噛み潰してゐた。

被告の中のカルティンキンは相變らず頬肉をビク／＼動

かしてゐた。ポーチコフはちやんと姿勢正しく神妙に坐つてゐたが、それでも稀には被つてゐる頸卷の下へ一本指を入れて、頭を搔いたりした。

マースロワはじつと坐つたまゝ朗讀者を見詰めて聴き惚れたり、或は體を顫はして、さも反駁したさうに顔を赤くしたりしたが、やがて深い溜息を吐いて、兩手の位置を換へながら、あたりを見廻して、再び朗讀者に眼を据ゑたりした。

ネフリードフは前列の端から二番目の自分の高い椅子に坐つてゐた。そして鼻眼鏡をかけたたまゝ、じつとマースロワを見てゐたが、その心の中には複雑な、胸を剝られるやうな思ひがしてゐた。

一〇

起訴狀はこんなものであつた。——一八八八年一月十七日「マウリタニヤ」旅館に於いて、一人の泊り客が頓死した。それは第二同業組合に屬する南露の商人で、名前をフェラポント・エメリヤノウィチ・スメリコフと言つた。

第四區地方警察醫の認むるところでは、その死因はアルコール性飲料の過度な攝取から來た心臟破裂といふことであつた。

スメリコフの死骸は埋葬に附された。

數日經つてから、スメリコフの同郷人であり同業者であるテイモヒンといふ商人が、ペテルブルグから歸つて來て、スメリコフの最後に纏綿する種々の事情を探知し、彼の死にはその所持金奪取を目的とした毒殺の疑ひがあると云ひ出した。

この嫌疑は相當の根據があつたので、豫審が成立した。

豫審によつて判明した所は次の件々である。第一、スメリコフは死ぬ少し前に三千八百ルーブリといふ金を銀行から銀貨で引出してゐる。所が、故人の財産目録によつて見れば、現金は三百十二ルーブリ十六カペイカしかなかつた。

第二、スメリコフはその死する前日一杯とその夜一夜をリュブカ(即ちエカテリーナ・マースロワ)と共にキタエワ樓と『マウリタニヤ』旅館とに過した。そしてエカテリーナ・マースロワはスメリコフの不在中、同人の依頼によつてキタエワ樓から『マウリタニヤ』旅館へ金取りに來て、其處の下働きエウフイミヤ・ポーチコワとシモン・カルティンキンとの立會の上、メスリコフから預つて來た鍵で、彼の鞆をあけ、その中から金を出した。マースロワが鞆を開けた時、立會つてゐたポーチコワとカルティンキンは、その鞆の中に百ルーブリ紙幣と覺しき札の束を見た。第三、キタエワ

樓からスメリコフとリュブカと連れ立つて『マウリタニヤ』旅館に歸つた後、彼女はカルティンキンの勧めによつて、カルティンキンから貰つた白い散薬をブランデーの杯に入れてスメリコフに飲ました。第四、翌朝リュブカ(即ちエカテリーナ・マースロワ)はその抱主なる證人キタエワに、スメリコフの金剛石入の指環を、スメリコフから貰つたものだと言つて賣り拂つた。第五、『マウリタニヤ』旅館の下働き女、エウフイミヤ・ポーチコワは地方商業銀行へ當座預金として銀貨一千八百ルーブリを入れた。

裁判所附醫師の檢視と、死骸の發掘と、スメリコフの内臓に對する化學的研究とによつて、死體内に毒藥の存してゐたことは疑ひなき事實となつた。隨つて死因は毒殺であるといふ結論を作る根據となつた。

被告として引出されたリュブカ・ポーチコワも、ポーチコワも、カルティンキンも自分を有罪とは認めてゐなかつた。それでマースロワは、自分の稼いでゐたキタエワ樓でスメリコフといふ商人が遊興してゐる中に、彼女自身言つてゐる通り、事實『マウリタニヤ』旅館へお金を取りに、スメリコフから遣はされたものであると陳述した。また、彼女は其の旅館に於いて自分に預けられた鍵を用ひて、商人の鞆を開き、中から命じられた通りに銀貨四十ルーブリを

取出し、それ以上は手に觸れなかつたのであるが、それもポーチョワとカルティンキンとの立會の上で鞆を開閉し、金を取出したのであるから、この兩人もこのことは證明してくれる筈だと陳述した。更に彼女は再び商人スメリコフの部屋に充てられた旅館の一室に遣つて来た時、事實カルティンキンの燭燵に乗つて、何だか知らぬ散薬を催眠劑だと思つて、ブランドーに入れて彼に飲ましたが、それは全く商人を眠らして、一時も早く自由な身にならうといふ意向に外ならなかつたと陳述した。なほ、指環は、スメリコフが彼女を擲つたので、彼女が泣き出して歸らうとした時に、彼自ら彼女にくれたものであつた。

エウフイミヤ・ポーチョワはエウフイミヤ・ポーチョワで、紛失した金のは少しも知らない、商人の室へは這入らなかつた、あの室で何かしてゐたのはリユーブカ一人である、何か商人のものが盗まれたとしたならば、それはリユーブカが商人の鍵を持つて金を取りに来た時盗んだものであると陳述した。

このところが讀みあげられた時、マースロワは身を顫はし、口を開いたまゝポーチョワの方を顧みた。

書記はなほ讀み續けて行つた。

所が、エウフイミヤ・ポーチョワは、銀貨一千八百ルーブ

リの銀行受取證を突きつけられ、これだけの大金を何處から得たかと訊問された時、その金はシモン・カルティンキンと二人で十二ヶ年の長い歲月かゝつて働きの出したもので、結婚の準備金であると陳述した。さてシモン・カルティンキンの方では、最初の陳述に於いては、彼とポーチョワとが、旅館へ鍵を持つて来たマースロワの教唆によつて金を盗み、マースロワ並びにポーチョワと三人して之を分配したと自白した。なほ又、彼は商人を眠らせるためにマースロワへ散薬を與へたことも自白した。然るに二度目の陳述に於いては、自分が金員の盜取に加はつたといふことも、マースロワに散薬を渡したといふことも否定して、一切はマースロワの仕事であると言ひ換へた。またポーチョワが銀行に預け入れた金のことには、彼女は、彼女と同様、兩人の旅館に於ける十二ヶ年の奉公中親切にして上げた賞與として、且那衆から貰ひためたものであると陳述した。

それから起訴狀の中には、各被告の對質及び證人等の陳述が續いてゐた。

そして起訴狀の結論は左の通りであつた。

「第二同業組合ノ商人ハ豫テ飲酒遊蕩ニ耽リ居タル者ナルガ、一八八×年一月十七日キタエワ樓ニ於テリユーブカ事マースロワト關係ヲ結び、此ノ女ニ溺レタル餘リ自用鞆ノ

鍵ヲ預ケテ、前記リユーブカヲソノ宿泊セル旅館ノ自室ニ遣ハシ、遊興ニ要スル四十ルーブリヲ、鞆ノ中ヨリ取り出サシメントセリ。然ルニリユーブカ事マースロワハ旅館ニ着キシ後、ポーテコワ及ビカルティンキンノ教唆ニ同意シテ、スメリコフノ金員並ニ貴重品ヲ悉ク盜取シ、コレヲ五分タント欲シ、且之ヲ遂行セリ。『この時マースロワは再び身を頼はし、思はず飛びあがつて、眞赤になり、何か言ひ始めようとしたが、廷吏のために差止められて果さなかつた。——『此ノ時リユーブカニ與ヘラレシモノハ金剛石入ノ指環ト』と、書記は讀み續けて行つた。——『而シテ少額ノ金員ナリシガ、金員ハ隠匿シタルカ或ハ紛失シタルモノ、如シ、此ノ夜マースロワ(リユーブカ)ハ酩酊シ居リタレバナリ。一方犯跡ヲ晦マサンガ爲メニハ、彼等共謀ノ上、商人スメリコフヲ再ビ旅館ニ連レ來リ、然ル後カルティンキンノ所持セシ砒素ヲ用ヒテ之ヲ毒殺スルコトニ決セリ。此ノ目的ヲ以テマースロワハキタエウ樓ニ取ツテ返シ、彼處ニ於テスメリコフヲ説得シ同道シテ『マウリタニヤ』旅館ニ立戻レリ。スメリコフガ旅館ニ立戻リシ時、マースロワハカルティンキンノ持出シタル散藥ヲ同人ヨリ受取り、之ヲ酒ニ混ジテ、ソノ酒ヲスメリコフニ飲マシメタリ。スメリコフノ死ハ則チ之ニヨリテ生ゼシモノナ

リ。

以上述べシ所ニ依リテ見ルニ、ボルキ村ノ農民シモン・カルティンキン三十三歳、平民エウワイミヤ・イワーノウナ・ポーテコワ四十三歳、及ビ平民エカテリーナ・ミハイロワ・マースロワ二十七歳ハ、一八八×年一月十七日豫メ共謀ノ上商人スメリコフノ金員及ビ指環價格二千五百ルーブリニ値スルモノヲ盜取シ、殺害ノ意志ヲ以テスメリコフニ毒ヲ飲マシメ、遂ニ彼、スメリコフヲシテ死ニ至ラシメシモノナリ。

此ノ犯罪ハ刑法第一千四百五十三條第四及ビ第五項ニ於テ規定セラル、處ナリ。依テ刑事訴訟法第二百一條ニ照ラシ、農シモン・カルティンキン、平民エウワイミヤ・ポーテコワ、及ビ民平エカテリーナ・マースロワヲ地方裁判所ニ於ケル陪審員參加ノ公判ニ附スルモノトス。』

かくて書記はこの長たらしい起訴狀の朗讀を終ると、書類を疊み、兩手で長い髪の毛を直しながら自分の席に着いた。一同は、これから審理が初まり、直ぐにも一切の事が明白になつて、正義は最後の勝利を得るであらうと思ふと、何となく嬉しく、氣が軽くなつて、ほつと太息を吐いた。唯一人ネフリードフばかりはこの感じを味はなかつた。彼は、十年前のあの無邪氣な美しい少女として覺えてゐる

マースロワが、しでかしてくれた事に直面して、ただく恐怖の念に打たれるばかりであつた。

一一

起訴狀の朗讀が済んだ時、裁判長は他の同僚と協議した後、これから逐一吟味してやるぞと言はぬばかりの權幕で、カルティンキンの方へ向き直つた。

「農シモン・カルティンキン。」と、左に身をかしげながら彼は切り出した。

シモン・カルティンキンは起立して、びんと着物の縫目なりに兩腕を伸ばし、全身の重みを少々前にかけて、頬肉を音もなく動かし續けてゐた。

「其方は、一八八×年一月十七日にエウフィミヤ・ポーチコワ並にエカテリーナ・マースロワと共謀し、商人スメリコフの鞆から、彼の所有にかゝる金員を盜取し、尙ほ砒素を持來つて、エカテリーナ・マースロワを咬かし、その毒藥を酒に混じて商人スメリコフに飲ませ、遂に彼を死に至らしめたと起訴されてゐるが、其方はそれに服罪するか？」と、裁判長は言ひ切つて右の方へ身體を傾げた。

「飛んでもねえこつてござえやす。何しろ手前共の仕事はお客様のお世話を……」

「そんなことは後刻でよい。服罪するか何うか？」

「何う致しやして。手前はたゞ……」

「餘計な事は後刻でよい。服罪するかと言ふのだ」と、落着き拂つて、然しきつぱりと裁判長は繰返した。

「手前には左様なことは出来やせん。何故と申しやすと……」

「またも廷吏がシモン・カルティンキンの側へ駈け寄つて、例の芝居がかつた低聲で彼を制した。

裁判長は、これはこれで済んだと言はぬばかりに、書類を持つてゐた片手の肘を他の場所へ置きかへて、そしてエウフィミヤ・ポーチコワに向つた。

「エウフィミヤ・ポーチコワ、其方は一八八×年一月十七日に、『マウリタニヤ』旅館に於いて、シモン・カルティンキン並にエカテリーナ・マースロワと共謀し、商人スメリコフの鞆の中から金員及び指環を盜取し、それを互に分配した後、犯跡を掩はんが爲め商人スメリコフに毒藥を飲ませ、遂に彼を死に至らしめたと起訴されてゐるが、其方はこれに服罪するか？」

「私は何も悪いことは致しません。」と、元氣よくきつぱりと女被告は言ひ出した。「私はその部屋へ這入りもしませんでした……。這入つたのはこの莫運ですから、さういふ

事をしたのもこの……」

「それは後刻あとでよい。」と、裁判長は前と同様柔かく、而もきつぱりと言つた。「では其方は服罪しないといふのか？」

「お金を取つたのも、毒を飲ませたのも、部屋に居つたのも私ではございません。若し私がその部屋へ這入つてゐましたら、この女を掴み出したのですが。」

「では、服罪しないのか？」

「しませんとも。」

「よろしい。」

「エカテリーナ・マースロワ」と、裁判長は第三番目の女被告に向つた。「其方は、商人スメリコフの鞆の鍵を持つて、遊女屋から『マウリタニヤ』旅館の一室に来て、その鞆の中から金員と指環とを盗取し、」と、彼は宛らあた詰記した學課でも答へるやうに言つたが、さうする間にも耳は左手の同僚の方に寄せ、その同僚が、證據品目録中瓶が一つ不足してゐると話すのを聞きながら、「その鞆の中から金員と指環とを盗取し、」と裁判長は繰返して更に續けた。「之を分配し、その後で商人スメリコフと同道して再び『マウリタニヤ』旅館に行き、スメリコフに毒酒を飲ませて、遂に彼を死に至らしめたと起訴されてゐるが、其方はこれに服罪するか？」

「私は何も悪いことはして居りません。」と、彼女は口速くちやくに言ひかけた。「私は前にも申しました通りのことを今もお答へします。私は取りません、取りません、決して取りません、何も取りません。指環はあの人が自分で私にくれたものです。」

「其方は二千六百ルーブリ盗取したといふことに服罪しないのだな！」と、裁判長が云つた。

「何も取らないと言つてゐるではありませんか。四十ルーブリの外は何も取りません。」

「よろしい。では商人スメリコフに薬を入れた酒を飲ましたといふことは承認するか？」

「それは承認します。だけど私はそれが眠り薬であつて別に何でもないと言はれましたので、全くさう思つてゐました。人を殺すことになるなどは思ひも寄りませんでした。神様の前に誓つて申します。それは全く思ひも寄りませんでした。」と、彼女は言つた。

「さうすると、其方は商人スメリコフの金員と指環を盗取したことに服罪しないが、」と、裁判長は言つた。「しかし薬を與へたことは認めるといふのだな？」

「ですから認めてゐると申してゐます。だけど、私は眠り薬だとばかり思つてゐました。私はあの人を寢させたいば

かりにそれを飲ませました。決してあんなことにならうとは思ひも寄りませんでした。」

「よろしい。」と、裁判長はつきとめた結果に満足を感じてゐるらしく言つた。「では事の次第を詳しく話すがい。」と言つて、彼は椅子の背に凭れかかり、兩の手を卓子の上にのせた。「何もかも有り體に話すがい。潔白な申立によつて自分の罪を軽減することが出来るのだ。」

マースロワは、矢張り裁判長を眞正面に見詰めたまゝ黙つてゐた。

「さあその時の事情を述べるがよい。」

「事情ツてかうなんです。」と、矢庭に早口でマースロワは言ひ始めた。「私が宿屋へ着いて、一室に案内されますと、あの人がありましたがもう大層酔つてゐました。(彼女は『あの人』といふ一語を發する時、眼を瞪つて、如何にも怖ろしさうな表情をした。)私が歸らうとしますと、あの人を放して呉れません。」

彼女は急に記憶の墓を失つたのか、それとも他の事を思ひ出したのか、黙つてしまつた。

「で、それから？」

「それから何です。それから一寸の間ゐて、家へ歸りました。」

この時、副検事が妙な格好で片附を突きながら、半身を擡げた。

「質問があるのでですか？」と、裁判長が言ふ。それに對して副検事がさうだと頷いたので、裁判長は身振で以て、質問してもよろしいといふことを示した。

「質問したいのは、被告とシモン・カルティンキンとが以前から知り合ひであつたか何うかといふ事です。副検事はマースロワの方を見もしないで質問した。」

そして、質問が終ると、彼は唇を堅く結んでむづかしい顔付をした。

裁判長はその質問を更に繰り返した。マースロワは呆れたやうに副検事に眼を据ゑた。

「シモンさんですか？ それは知り合ひでした。」と彼女は答へた。

「そこで私の知りたいのは、被告とカルティンキンとの関係がどんなものであつたか？ 彼等は屢々面會してゐたか何うかといふ點です。」

「關係ですか？ 私はお客のある時呼んで貰つただけです。關係なんていふ程のものはありません。」と答へて、マースロワは不安さうに副検事の方から、もとの裁判長の方へと視線を移した。

「では、カルティンキンは何故マースロワにばかりお客を周旋して、他の女へ周旋しなかつたか、その譯が聞きたいのです。」と、眼を細くして、そのくせ微妙な、悪魔のやうに狡猾な薄ら笑ひを湛へて副検事は質問した。

「それは知りません。何故だか私には判りません。」と、マースロワは吃驚したやうにあたりを見廻しながら、その時一寸ネフリニードフに視線をとどめて答へた。「呼びたいと思ふ者を呼んだのでせう。」

「氣がついたかしら？」はつと思ふと、ネフリニードフは、顔へ血の逆流するのを感じた。然しマースロワは、彼を特に他の者から切り離して見た様子もなく、直ぐに眼を反らして、再び驚いたやうな眼付を副検事の上に据ゑた。

「すると、被告はカルティンキンと別段親密な關係は無かつたといふんですな？ よろしい。ではもう質問することはありません。」

そこで副検事は直ぐ様卓子の上から肘を外して何やら書きつけた。が、實は何も書いたのではなく、たゞペンを手帳の文字の上に走らせただけであつた。それは他の検事や辯護士などが、巧い質問を掛けした後で、尙ほ相手を遣り込める名文句を自分の手帳に記入するのを見てゐるので、その眞似をしたのであつた。

裁判長はそれから直ぐには、被告の訊問にかゝらなかつた。といふのは、丁度この時同僚の眼鏡をかけた判事に向つて、豫め協議の上、書きつけてある質問を出さうか出さないかと、相談してゐたところであつた。

「それで、それから何うした？」と、裁判長は訊問をつゞけた。

「家に歸りました。」マースロワももう餘程大膽になつて、裁判長だけを見成りながら答を續けた。「そしてお金は女將さんに渡して、やすみました。とろ／＼としたかと思ふと、内のベルタといふ娘が来て私を起すのです。『行つておやんなさいよ、あなたのお客がまた來ましたよ』つて言ふのです。私はいやでしたけど、主人の言ひついですから出ました。するとあの人は——」と、彼女は又もこの『あの人』といふ言葉を出す時、如何にも怖ろしさうであつた。「あの人は、他に大勢の女をあげて、もつと酒を持つて來いと言つておりました。だけどあの人のお金はもうなくなりまして、女將さんの信用もありませんでしたから、あの人は私を自分の宿へ使ひにやつて、何處にお金があるから、幾ら幾ら持つて來いと言ふのです。そこで私が行きました。」

裁判長はこの時左隣の同僚と何かひそ／＼話してゐて、マースロワの陳述は耳にも這入らなかつた。けれども残ら

ず聞いてゐたといふことを示す爲めに、彼女の最後の言葉を繰返して、

「それで行つたといふんだね。それから何うした？」と彼は言つた。

「行つて、あの人の言ひつけた通りに何も彼も致しました。先づ部屋へ通して貰つて、と申しましたが一人て部屋に入つたのではなく、シモンさんとあの方を呼びました。」と言つて、彼女はボーチコワを指し示した。

「嘘うそばかりかし。わたし部屋なんかに入るもんですか……」ボーチコワはかう言ひ始めたが、すぐ止められた。

「それから二人の前で赤いお札（十ループリ）を四枚取りました。」と聲こゑめ面おもてをして、マースロワはボーチコワの方を見もしないで言ひ續けた。

「で、被告はその四十ループリを手を取る時、まだそこに金かどの位いあつたか氣がつかなかつたのか？」と、また檢事が質問した。

マースロワは檢事に聲をかけられると、思はず身震みぶるひした。何故なぜだか知らないが、どうもこの檢事は彼女に悪意を持つてゐるやうに感じられた。

「私、數へては見ませんでした。百ループリのお札さしが澤山あつたのを見ました。」

「うむ、被告は百ループリ紙幣を見たのか。私の質問はそれだけです。」

「で、何うした、金を持つて歸つたのか。」と、裁判長は時計を見ながら訊問を繼續した。

「持つて歸りました。」

「うむ、それから？」と裁判長は問うた。

「それから、あの人は私をつれて旅館へ參りました。」とマースロワが言つた。

「よろしい。では何ういふ風にして彼に藥の酒を飲ましたか？」と裁判長が訊いた。

「何ういふ風につて、お酒の中へ入れてあげました。」

「何のために飲ませたか？」

彼女は答へずに、重い深い溜息ため息を吐いた。

「あの人がなか／＼私を放してくれないものですから。」と言つて、彼女は一寸黙つてゐたが、「私はあの人の側そばにゐるのが堪たらなくなりました。で、廊下に出て、シモンさんに『私草臥たれてしまつたから、何とかして歸して貰ひたいのですけど。』と話しますと、シモンさんが、『あの人には私達も困り抜いてゐるので、あの人に眠り藥を飲ませたいと思つてゐるんだよ。寢さへすればお前さんだつて歸れるだらう。』と言ひました。それで私も『それがいゝわ。』と申し

ました。全く毒にならない薬だと私は思ひまして、シモンさんから紙包みを受取りました。私が中へ這入つて見ますと、あの人は簡立の向うに倒れてゐまして、直ぐにコニヤクを呉れつて言ひつけました。で、私は卓子の上から上等のシャンパンの瓶を取つて、一つはあの人の分、も一つは自分の分として二つのコップへお酒を注ぎ、あの人のコップに薬を入れて、それを差し上げました。若しそれが毒だと知つてましたら、何で差し上げるのですか。」

「よし／＼。ところで指環は何うしてお前の手にあつたのだ？」と、裁判長は訊ねた。

「指環は、あの人が自分で私に呉れました。」

「何時其方に呉れたか？」

「それは、私があの人に連れられて宿屋に行つた時でございます。私が歸らうとしますと、あの人は私の頭を擽つて、櫛を折つてしまひました。私は腹を立て、どうしても歸らうとしましたが、あの人が自分の手から指環を抜いて、これをやるから歸ると申しました。」と、彼女は述べた。

この時また副検事が少し起ちかけて、例の態とらしい無難作な風をしながら、なほ二三の質問をしたいと願ひ出た。そして許可を受けると、金モールの笹縁の上に首をかしげて、

「被告は商人スメリコフの部屋に何時間位居つたか、それを知りたい。」

又もマースロワは恐怖に襲はれた。それで彼女は落着きもなく副検事の方から裁判長の方へ眼を移して、早口に言つた。

「何時間か覚えて居りません。」

「よろしい。では被告は商人スメリコフの所を出てから、尙ほその旅館の何處か別な部屋へ行きはしなかつたか、覚えはないか？」

マースロワは暫らく考へてゐた。

「次の空いてる室へ立寄りました。」と彼女が言つた。

「何しに寄つたか？」副検事は我を忘れて直接彼女に訊ねてしまつた。

「身装を直すために寄りました。そして辻馬車の來るのを待つてゐました。」

「では、カルティンキンはその部屋で被告と一緒にならなかつたか、何うだ？」

「あの人も矢張り寄りました。」

「彼は何しに寄つたか？」

「あの商人の上等のシャンパンが残つてゐましたので、私達はそれを一緒に飲みました。」

「はゝあ！一緒に飲んだか、よし／＼。何れ被告とシモンとの間に話があつたやうが、どんなことを話した？」
マースロワは急に顔を曇めて、眞赤になり、早口に言つた。

「話と言つて、私これ以上何も存じません。私については何うなりとも御勝手になさいます。私は何も悪い事はしていませんから、それだけは申して置きます。私、何も話はしませんでした。これでありつたけ残らず申してしまひました。」と彼女が言つた。

「私も最早質問することはありません。」と、副検事は裁判長に言つた。そして妙に肩を聳やかして、被告がシモンと空室に立寄つたといふ彼女自身の告白を、自分の辯論の項目書きに手早く記入し始めた。

法廷は森然と静まつた。

「其方はもう言ふことは無いか？」

「もうすつかり申し上げました。」と言ひ切つて、彼女は太息を吐きながら着席した。

それから裁判長は書類へ何か記入してゐたが、左側の同僚が低聲で何か囁くと、それを聞きとめて、十分間の休憩を告げ、急いで起ち上つて退廷した。

裁判長と背の高い鬚の多い眼の大きく優しい左側の判事

との相談は、この判事が胃の腑の加減が一寸變になつて來たので、マッサージをしたり水薬を飲んだりしたいといふにあつた。このことを彼が裁判長に傳へたので、彼の願ひ通りにすぐ休憩となつたのである。

裁判官達に續いて、陪審員、辯護士、證人なども皆起ち上つて、何れも重大事件の一部が片づいたといふ快感を意識しながら、思ひ／＼に違つた方へ動きだした。

ネフリユードフは陪審員の部屋に這入つて、その窓際に腰を下した。

二二

『さうだ、あれはカテューシャであつた。』

ネフリユードフとカテューシャとの關係は次の通りであつた。

初めてネフリユードフがカテューシャに會つたのは、彼が大學の三年生の時、土地私有權に關する論文を書きあげる都合もあつて、暑中休暇を叔母達の家で送つた時であつた。普通なら、彼は母や姉と連れだつて、モスクワ近郊の母の大きな別荘で夏を暮らすのであつたが、この年には姉は他家へ嫁つき、母は母で外國の或る温泉場へ出掛けたし、自分としても論文を書かねばならなかつたので、それで遂々

この夏は叔母達の家で過すことになつたのである。其處は何しろ田舎も田舎、ほんの片田舎のことであるから、まことに閑靜で、氣を亂すやうなものは何もなかつた。叔母達もその相續者であるこの甥を優しく可愛がつてくれたし、彼も亦叔母達を愛し、その生活の舊式な點や質朴なところをも愛してゐた。

ネフリュードフがこの夏叔母達の所で味はつた歡喜の感は異常なものであつた。それは青年として初めて他人の示教を待たず、自分自らこの人生の美と價值とを完全に認識し、人生に於いて個人に與へらるゝ職分の意義を深く感得し、自己と世界との限りなき完成の可能を見、この完成に向つて、奮に希望をかけたばかりでなく、自分の胸中に描くその完全さに必ず到達するといふ確信を以て、全心を傾倒したのであつた。この年彼は尙ほ大學に於いてスペンサーの『社會平衡論』を讀んだのであるが、スペンサーの土地私有論は、彼自身が大きな女地主の子であつただけに殊更深い感銘を與へた。彼の父は別段富裕でもなかつたが、母は一萬デシヤチナの土地を持參して嫁に來たのであつた。彼はこの時初めて土地私有制の殘忍不正なことを、すつかり理解したのであつた。そして、道德的要求の名に於いてする犠牲は高尚なる精神的悅樂を齎すものであることを考

へて、彼は遂に土地の私有權を放棄することに決し、同時に父から遺産として與へられた土地を農民等に分配した。彼は即ちこれを主題として、自分の論文を書いてゐたのである。

この年田舎の叔母達の家に於ける彼の生活はざつとこんな風であつた。朝は随分早起の方で、時には三時頃起き出して、日の出前に山裾の小川へ水浴に行き、何うかするとまだ朝霧の立罩めてゐるうちに掛けて、草花の露の乾かない間に歸つて來るのであつた。偶には朝珈琲を飲み終ると論文を書いたり、参考書を讀んだりしたが、大概は讀み書きを止めて、邸内を抜け出しては、野や森をぶらつき歩くのであつた。中食前には植込みの中の何處かで睡眠を取り、それから食事の時には例の快活な調子で叔母達を娯ませたり笑はせたりして、それが済むと、乗馬かボート漕ぎに出かけ、夜は讀書するか、又は叔母達と一緒に骨牌の當物などをした。彼は殆んど每晚のやうに、殊に月の明るい夜などは、波打つやうな餘りにも大きな生の歡びを味はふので、たゞそれがために眠ることが出来なかつた、そして睡眠の代りに、時としては夜明まで空想したり、思索したりしながら庭を歩いてゐた。

かくて彼は、叔母達の家に於ける最初の一ヶ月間はたゞ

幸福に平安に暮して、小間使ともつかず養女ともつかない、黒腫勝くろつみかちの、素敵に足の早いカテューシヤには、少しも注意を拂はなかつた。

母親の膝下で養育されて来たネフリードフは、年もまだ十九歳で、全く初心な青年であつた。彼が女のことを想ふとすれば、それはたゞ妻として想ふのであつた。彼の考へによると、自分の妻になりさうもないすべての女は彼に取つては女でなく、たゞの人間であつた。所がその夏の昇天祭（復活祭後四十日、キリストが天に昇つたことを記念する祭日）に、叔母達の隣家の婦人が、その子供等——二人の娘と一人の中學生——と、もう一人その家に寄寓してゐた百姓上りの若い畫家とを連れて、叔母達の家へ遊びに來た。

お茶が済んで後、皆の者は家のすぐ前の、もう草を刈取つたあとの草地へ出て、ゴレールキ（鬼ごつこのやうな遊戯）をする段になつた。カテューシヤも仲間に加へられた。幾替りも進んだ後、ネフリードフはカテューシヤと組んで逃げることになつた。彼はカテューシヤを見るのがいつも愉快であつた。けれど彼と彼女との間に何等か特別な關係が生じようとは、つい思ひもしなかつたことである。

「さあ、この二人はとても捉まりつこないぞ」と、「鬼になつた」（活活）畫家は、その短い、曲つた、然し頑丈（くわんちやう）な百姓

足で随分早く走るくせにかう言つた。「轉ぶといふな。」
「あなたが鬼ですか、捉まりつこありませんよ。」

「一、二、三——」

皆の者が三度掌を拍つた。カテューシヤはやつと笑を耐へながら、ネフリードフと場所を替へた。そして、自分の硬いざら／＼した小さい手で男の大きな手を握つてから、左の方へ逃げ出した。糊の利いた下袴がばさ／＼云つた。

ネフリードフは足早に駆けてゐた。彼は畫家に負けたくなかつたので、全力を擧げて走つた。彼が一寸振返つて見ると、畫家がカテューシヤを追ひかけてゐた。カテューシヤはそれでも弾みのよい若々しい兩の足をはしつこく刻みながら、鬼に負けまいとして左の方へ遠ざかつてゐた。前方を見ると、まだ誰も駆け寄らないライラックの生ひ茂つた花壇があつた。カテューシヤはネフリードフを顧みて、その花壇の蔭で落合はうといふ印に頭を動かした。彼はそれと解つたので、茂みの蔭へ駆け込んだ。所が其處の茂みの蔭には彼のまだ知らない溝があつて、しかもそれが蕁麻（いんげん）に覆はれてゐた。彼は足をこらして其處へ落ち、兩手を蕁麻で引掻き、おまけに夕方近いためか最早降りてゐた露に濡れた。しかし直ぐに、自分の失策を笑ひながら、氣を取り直して、サッパリした場所へと跳び出した。

濡れた黒母のやうな黒い眼をしたカテューシャは微笑に顔を輝かせながら、彼に向つて飛んで来た。二人は互に走り寄つて手と手をとつた。

「手を引掻きはしなくつて？」と、別な片方の手で髪のはつれを直しながら、彼女は言つた。さうするうちにも息はずませながら、にこ／＼して、下から眞正面に男の顔を見上げてゐた。

「こんな處に溝があらうとは知らなかつた。」と、これも矢張りにな／＼しながら、女の手をとつたまゝ言つた。

彼女は男にびつたり寄り添つた。彼も何うしてそんなことになつたか知らないうちに女に顔を寄せた。女は顔をそむけもせず、じつとしてゐた。と、彼はぎゅつと女の手を握り締めて、その唇に接吻した。

「あらまあ！」と彼女は口を切つた。そして素早く自分の手を振りほどいて男の所から駆け去つた。

ライラックの茂みの所へ駆け寄ると、彼女は最早花の落ちた白いライラックの小枝を二つ取つて、それで自分の火照つた顔を煽きながら、男の方を振返つたが、直ぐにまた元氣よく兩手を振り／＼皆の所へ歸つて行つた。

このことあつて以來、ネフリュードフとカテューシャとの關係は一變してしまひ、それは初心な青年男女の間によく

あるやうな、互に思ひ思はれる一種特別なものになつた……。

たゞカテューシャが一寸部屋に這入つて来たばかりでも、又遠方から彼女の白いエプロンをチラと見たゞけでも、一切のものがネフリュードフには日光を浴びたやうに輝かしく、一切のものが今迄になく楽しく、愉快に且つ意味深くなつて、生活全部が悦びに満たされた。それは彼女としても同様であつた。然し、カテューシャと一緒に居るといふこと、又はその近くに居るといふ事だけが、ネフリュードフにこの感じを惹起さしたのではない。彼に取つては、單にカテューシャがこの世の中に存在してゐるといふこと、又彼女に取つては、ネフリュードフが存在してゐるといふこと、たゞさう考へるだけでも二人は樂しかつた。たとへばネフリュードフの許へ母親から不愉快な手紙が來ても、又は彼の論文が具合よく進行しないでも、或は又青年にあり勝ちな譯もない悲しさを感じても、カテューシャが居る、彼女を見ることが出る、といふことを想ひ出しさへすれば、それ等一切のことは忽ち煙と消え去つてしまふのであつた。

カテューシャには内の仕事が澤山あつた。けれど彼女ははき／＼と一切を片づけてしまつては、暇の時間に讀書してゐた。ネフリュードフは、自分が漸く讀み切つたばかりの、

ドストイェーフスキイや、ツルゲーニェフなどの小説を彼女に貸してやつた。何より彼女の氣に入つたのは、ツルゲーニェフの『静寂』であつた。二人の間の話は断片的なもので、それは廊下で出會した時とか、露臺とか、庭先とか、また偶にはカテューシャが一緒に住んでゐた老婢マトリョーナ・パーウロウナの部屋へ、何うかしてネフリュードフの方からお茶飲みに出かけて行つた折などに行はれた。しかもさうした話は、マトリョーナ・パーウロウナが居合せてゐる時に最も愉快であつた。それに反して二人きりの時に話し合ふとなると頗る具合が悪かつた。といふのは、直ぐに二人の眼は、口で言つて居ることゝは全く反對に、それよりはもつと／＼重大な何物かを語り始めるので、何だか妙にきまり悪くなつて来て、急いで立ち分れるのであつた。

ネフリュードフとカテューシャとのかうした關係は、叔母達の家に於ける彼の第一回の逗留中續いてゐた。叔母達も二人の關係に氣がつくと、驚いてこのことを外國に行つてゐるネフリュードフの母親、公爵夫人エレナ・イワーノウナの許へ手紙で知らしたりした。叔母の一人マリヤ・イワーノウナは、ドミートリイがカテューシャと最早關係をつけてしまつたのではないかと心配した。然しそれは取越苦勞に過ぎなかつた。ネフリュードフは自らそれとも知らずに、た

だカテューシャを愛してゐただけで、全く初心な人々の戀と變りはなかつた。だから彼の戀は却つて彼に取つても、彼女にとつても、墮落を防禦する主要な盾であつた。彼は曾て彼女の肉體を何うしようなどと、そんな心を懷いたことがないばかりか、萬一彼女に對するその様な關係のあり得るといふことを思つただけでも、戰慄する程であつた。それよりか、もう一人の詩人肌の叔母ソフィヤ・イワーノウナが、ドミートリイの例の一轍な性格から、カテューシャの素性も位置も構はずに、彼女と結婚するやうな氣を起しはしないかと心配したその不安の方が、餘程根據が深かつた。

若しもこの時ネフリュードフがカテューシャに對する自分の戀を明瞭に意識したならば、またそれよりも、あんな素性の女と運命を共にすることは、可けないと他から忠告されるやうなこともあつたならば、それこそ生一本な彼としては、たとへ相手がどのやうな女であらうと、之を愛してゐるからには、その女と結婚するのに何の妨げがあらうと、決め込んでしまはないとも限らなかつた。けれど叔母達は、その不安を彼には何とも言はなかつたので、彼は遂々カテューシャに對する自分の戀を意識しないで、そのまゝこの家を立ち去ることになつた。

彼の確信してゐる所によれば、カテューシャに對する自分

の心持も、要するにこの頃彼の全身に溢れてゐる生の歡喜の一表現に過ぎないもので、それを偶々可憐な快活な一少女が共に汲んでくれたのであつた。でもいよ／＼彼が出發することとなり、カテューシヤも叔母達と一緒に支關先に立つて、例の黒瞳勝な眼に一杯涙をためて、心持ち斜に見ながら、彼を見送つた時には、さすがに彼も二度と手に入らない何か美しい寶玉を置き去りにするやうな氣がした。そして彼はたまらなく胸が塞つた。

「さよなら、カテューシヤ、いろ／＼お世話でした。」とソフィヤ・イワーノワナの帽子越しに彼女へ言つて、ネフリュードフは馬車に乗り込んだ。

「さよなら、ドミートリイ様。」と、快活な優しい聲で云つて、彼女はせきくる涙を抑へながら、支關内に駆け込んだ。そして思ふ様そこで泣いた。

一三

その後三年の間、ネフリュードフはカテューシヤに會はなかつた。漸く彼女に再會する事が出来たのは、彼が士官に任官して、赴任の途中、叔母達の所へ立寄つた時であつた。然しこの時の彼は、三年前の夏を此處で送つた頃とはまるで別人の如く變つてゐた。

あの頃は、正直で、献身的で、如何なる善事にも身を犠牲にするといつた風の青年であつた。が今では墮落しきつた、にやけた自我主義者で、自分の快樂の外何物もないといふ人間になつてゐた。あの頃は周囲の世界を見て、それが一つの神祕に思はれ、狂喜してその奥へ分け入らうと努めたものであつたが、今では、世の中の一切が平凡で明瞭で何も彼も自分の生活要件から割出して決めてしまふのだつた。あの當時は、自然と同化し、また彼以前に生活し、思索し、感激してゐた人々(哲學者、詩人など)と親しむことが極めて重要なものであつたが、今は、人間的な制度とか、同輩との交際とかいふものゝ方が重要視された。あの當時、女を見ると、それは一の神祕的な魅惑的な——といふよりはそれが神祕的なるが故に魅惑的な——存在として眼に映ずるのであつた。が、今は女の價値を、と言つても自分の家族や親友の細君などは別として、他の凡ての女の價値を、頗る決定的に定義して、つまり女とは既に自分が試み來つた享樂機關のうち最も好いものゝ一つであるとして考へてゐた。あの當時は、金も要らず、母から與へられる三分の一も取らずに濟んだ。また父から譲られた地所をも拒んで、これを農夫達に分配してしまふことも出来たが、今では母から送られる月々千五百ルーブリでも足らず、その事に就いては

これまでに幾度か不愉快な押問答さへあつた位である。あの當時、自分の本然の自我と認めてゐたのは精神的實體であつたが、今彼が自分自身だと思つてゐるものは、強健な元氣な動物的自我に外ならなかつた。

このやうな怖ろしい變化が來たのは、全く自己を信じることを止めて、他人を信じ、世間に盲従するやうになつた、たゞその爲めであつた。然らば何故自己を信じることを止めて、他人を、世間を信じるやうになつたかといふに、それは自己を信じつゝ生活することは甚だ困難であつたからである。自己を信じる時は、すべての問題を、常に安價な快樂を求めつゝある動物的自我の爲めにでなく、却つてこれに逆つて解決しなければならなかつた。ところが他人を信じる時は、何も自ら解決するには及ばなかつた。一切萬事が既に精神的自我に反して、動物的自我の爲めに解決されてゐた。そればかりではない、自己を信じる時は、いつも人々の非難に會はねばならないが、之に反して他人を信じる時は、自分を取巻く人々の稱讃を博するのであつた。

早い話が、ネフリュードフが神のこと、眞實のこと、富のこと、貧のことなどを、考へたり、讀んだり、話したりしてゐた時には——彼を取巻くすべての人々は、これを目して柄にもないこと、可笑しなこととした。彼の母や叔母まで

が、厭味こそないが一種の皮肉を交へて、うちの哲學者先生と呼びなすのであつた。ところが、彼が小説を讀んだり、猥褻な挿話を話したり、フランス式の滑稽な茶番狂言を見に行つたり、それをまた面白可笑しく話したりすると、皆彼を賞めそやすのであつた。彼が自分の欲望を節制しなければならぬと思つて、古外套を着たり、禁酒したりすると、皆の者は之を不思議にして、一種の高慢ちきな獨りよがりだとした。が、狩獵の爲め、或は莫迦に贅澤な書齋を作る爲めに大金を費すと、皆の者は彼の趣味を褒め、彼に高價な品物を贈つたりした。彼が純潔の男として、結婚まではそのまゝで押し通さうとすれば、身内の人々は彼の健康を氣遣ひ、反對に彼がその同僚から或るフランス婦人を寢取つたと聞けば、母までがそれを悲しまないばかりか、一人前の男になつたと言つて寧ろ喜ぶ位であつた。尤もカテューシヤとの挿話に關しては、公爵夫人もさすがに、わが子が彼女と結婚する氣になりはしないかと、恐怖を禁ずることが出来なかつた。

ネフリュードフが丁年に達して、父から譲られた少しばかりの土地を、土地私有が不正であるといふ理由から、農夫達に分配してやつた時も、それと同じ具合で、母親を始め身内の人々はこの行爲に喫驚した。また親戚一同の者もこ

の行爲を擔ぎ出しては、彼に對する叱責嘲笑の種にした。土地を貰つた農夫等も皆に富裕にならないのみか、その邊に三軒の酒場を作り、全く勞働を廢して、却つて貧乏になつたとは、彼が繰返し々々話し聞かされるところであつた。然るにネフリュードフが近衛に入隊して、その同僚の貴族達と一緒に浪費したり、賭博に負けたりした時、母のエレナ・イワノウナは基本財産から引出して、やつと始末をつけたのであるが、それでも、そんな道樂は種痘と同じく、若い時分や上流社會には當然な、寧ろ結構なこととして、殆ど悲しみの色さへ現はさなかつた。

最初の間はネフリュードフも戰つた。併しその戦ひは餘りにも困難なものであつた。何故といふに、彼が自己を信じてゐた時、善と思つたものはすべて他の者からは惡と見られ、之に反して、彼が惡と見たものはみな、彼を取巻く人々からは善と目されたからである。で、結局ネフリュードフの降伏となり、彼は自己を信じることを止めて、他人を信じることになつた。さすがに最初の間は、自己と手を切ることは不愉快であつた。が、然しその不愉快な氣持の續いたのはほんの一吋の間であつた。そして忽ちのうちにネフリュードフは酒と煙草を始め、それと同時にこの不愉快な心持を感ずることがなくなり、剩へ非常な氣輕さを覺える

やうになつた。さうなると、その本性が熱情的であるだけに、この新しい、彼の周圍のすべての人々の是認する生活へと一氣に身を投じた。そして、他の何物かを要求する内心の聲を全部抑へつけてしまつた。これが始まつたのはベルブルグへ移つてから後のことであるが、軍務に就くに及んで、愈々その頂點に達した。

一體、軍隊勤務といふものは、これに入る人々に完全な遊惰の諸要件を當て嵌めて、といふのはつまり合理的な有益な勞働を無視して、それが爲めに彼等を普通一般の人間としての義務から解放し、その代りに聯隊、軍服、軍旗等の條件的尊敬のみを標榜し、一方からは他の人々の上に絶對の權力を振はせ、他の一方からは上官に對する奴隸的服従を強ひ、かくして人々を墮落させるものである。

ところが、この軍隊勤務の墮落と、軍服や軍旗に對する尊敬、並に横暴や殺人の公然の許可に加ふるに、更に富豪や貴族の將校ばかりが勤務してゐる選り抜き近衛聯隊の中で有り勝ちの、金力による墮落と皇室に親近することによつて生ずる墮落とが結びつけられる時には、こゝへ陥つた人々の墮落といふものは、遂に立派な驕慢病の状態にまで到達する。ネフリュードフも軍隊勤務に就いて、その同僚達と同様の生活を始めてからは、全くこのやうな驕慢

病に罹つてしまつたのである。

立派に縫ひあげられた制服、しかも自分自らでなく他の人々に刷毛をかけて貰つた制服を着け、軍帽を被り、これまた人手によつて作られ、磨かれ、差出される武器をつけ、これも同様他の人に育てられ、馴らされ、飼育される立派な馬に乗つて、自分と同様の人達と一緒に教練か視察に出て行く。そしてサーベルを振つたり、馬を飛ばしたり、射撃したり、それを他の人々に教へたりする以外には、別に仕事は無い。だから、最も高貴な人々は——若い者も、年老いた者も、王も、王の近侍の者も皆——この仕事をよい仕事と認める。嘗に認めるばかりではない、それを讚美し、感謝してゐるのである。その外に彼等の大切なよいことゝしてゐるのは、出所の知れない金を投げ出して、或は將校集會所へ、或は一番高級な料理屋へ、食事に、といふよりは酒飲みを集まることである。それから後は、芝居、舞踏、女——さうして又馬に乗り、サーベルを振り、疾驅して、又散財する。そして、酒、カルタ、女とつゞくのである。

かういふ生活は殊に軍人を墮落させる。何故なれば、軍人でない者がこのやうな生活をしたならば、深く心に恥ぢて、とても耐へられるものでない。然るに軍人は、これが當然の義務であると認め、このやうな生活を鼻にかけ、誇

りとしてゐるのである。殊にネフリエードフが軍務に就いた時は、恰もトルコに宣戦を布告して間もない頃で、かうした戦時に在つては、それが一層甚だしいのであつた。『吾吾はすぐにも戰場に屍を曝す身だ。だからこのやうな放縱な愉快な生活は許さるべきものである。否、吾々には必要なものである。それで吾々はさうやつてゐるのだ。』と云つた調子であつた。

ネフリエードフもその生涯のこの時期には、同じ様にほんやりと考へてゐた。そしてこれまで自らを律して來た道徳的規範から全く自由になつて、毎日々々現をぬかして浮かれ廻つてゐた。しかもそれが嵩じて慢性的な驕慢病者になつてゐた。

三年後に叔母達の家へ訪ねて來たネフリエードフは、實にかゝる淺ましい状態になつてゐたのであつた。

一四

ネフリエードフが叔母達の家へ立寄つたわけはかうである。一つには既に前進した彼の所屬聯隊へ追ひつくその途筋に當つてゐたからで、もう一つには、かねて叔母達からお客に來いと懇望されてゐたからであつた。けれど本當のところを言ふと、カテューシヤに會ふ爲めであつた。も

つと彼の心の奥を探つたならば、或は既にカテューシヤに對するよくない意圖が萌してゐたかも知れない。それは放縱な動物的な性慾によつて咬かされたものである。けれどもこの意圖を意識してはゐなかつた。たゞ單に、曾て氣持よく暮らしたところのあるところへ一寸立寄つて、幾分變挺なところはあつたが、然し懐しい親切な叔母達に會つて、常にそれとなく愛と喜びの雲圍氣で彼を包んでくれる彼等の溫容に接し、かたゞ心地よい思ひ出の種子を残してくれた可憐の少女カテューシヤにも逢ひたいといふつもりであつた。

彼が着いたのは三月も末の頃、受難週間(復活祭前の一週間、
けら最後の受難)の木曜日のことである。雪解の道は悪く、おまけに篠突く雨にづぶ濡れになつて、ひどい寒さを感じたが、その頃の彼はいつもの通り、非常な元氣で、勇み立つてゐた。「あの娘はまだゐるか知ら？」と考へながら、見覚えのある、屋根から下された雪に埋れた、古風な地主邸の、煉瓦塀で圍まれた叔母達の家の庭へ乗り込んで行つた。馬車の鈴の音を聞いて、彼女が駈け出して來るかと思ひ待ちに待つてゐたが、勝手口から出て來たのは、拭き掃除でもしてゐたらしくバケツを手にした二人の女中で、しかも既足で、裾をからげてゐた。彼女は正面の支關先にも居なかつた。

たゞ一人、下男のティーホンが、これ亦掃除に忙しいものと見え、エブロン姿で現はれた。應接間に這入ると、ソフィヤ・イワノフナが絹の着物に帽子を被つて出て來た。

「まアよく來てくれましたね！」と云つて、ソフィヤ・イワノフナは彼に接吻した。

「マーシエンカは一寸具合が悪くて。祈禱疲れですよ。家ではもう皆聖餐式(キリストがその弟子達と行つた最後の受難を記念する最も重要な莊重な儀式)を済ましたよ。」

「それはお目出度う、叔母様。」と言ひながら、ネフリュードフはソフィヤ・イワノフナの兩手に接吻した。「や、どうも失禮しました、叔母様の着物を濡らしちゃいましたね。」

「お前の部屋へいらつしやい。大層濡れたのねえ。おやもうお髭を生やして、……カテューシヤ！ カテューシヤ！早く珈琲をお上げ。」

「はい、唯今！」聞き覚えのある快活な聲が廊下の方から答へた。と、ネフリュードフの心臓は嬉しさに躍つた。「居るな！」と思ふと、まるで太陽が雲間から覗き出たやうな氣がした。そこで彼は愉快さうにティーホンと一緒に、自分の以前の部屋へ着物を着換へに行つた。

ネフリュードフはティーホンを捕へて、カテューシヤのことを、彼女は何うしてゐるか？ 如何に暮らしてゐるか？

お嫁に行くのではないか？などと訊きたかつたのである。が、ティーホンが莫迦丁寧に、鹿爪らしく、お手に水を掛けませうなどと固く畏まつてゐるので、カテューシヤの様子を訊くのが妙にはつが悪くなつて、たゞティーホンの孫共のことや、年老いた種馬のことや、ボルカンといふ番犬の消息などを尋ねて見ただけであつた。皆々變りなく達者であつたが、たゞボルカンだけは去年狂死してしまつたといふことである。

濡れた着物をすつかり脱いで、新しく着換へようとする時、活潑な足音を耳にしたと思ふと、早くも扉をノックするのであつた。この足音も、このノックも、ネフリュードフには分つてゐた。斯様に歩み、斯様にノックするのは、彼女の外にはなかつた。

彼は濡れてゐる外套を纏うて、扉に近づいた。

「お這入り！」
果して彼女であつた。カテューシヤであつた。相も變らぬ彼女ではあるが——以前よりは一層愛くるしくなつてゐた。矢張りにこやかな、無邪氣な、心持ち斜視の黒い眼が下から見上げるのであつた。そして以前と同じくさつぱりとした白いエブロンを掛けてゐた。彼女が叔母達の所から持つて來たのは、封を切つたばかりの香の高い一つの石鹼と

二枚のタオルであつた。その一枚は大きなロシヤ風のもう一枚はもぢや／＼とけば立つたものであつた。押した文字も鮮かな、また手のつけてない石鹼、タオル、さうして彼女自身——すべてが皆一様に清浄で、純潔で、無垢で、心地よかつた。愛らしい、引締つた、紅いその唇は、昔のやうに優しく、彼を見ると、包みきれない嬉しさにはころび

た。

「好うこそ、ドミートリイ様！」と、彼女は辛うじて口籠りながら、顔をさつと紅く染めた。

「やあ御機嫌よう……御機嫌よう。」彼は彼女に「お前」と話しかけたものか、それとも「あなた」と話しかけたものか、解らなかつた。自分も亦彼女と同じく赧くなつた。「お變りもなく、お達者ですね？」

「お蔭様で……これは叔母様から、あなたのお好きなローズ石鹼です。」と言つて、彼女は石鹼を卓子の上に置き、タオルを肘掛椅子の腕に載せた。

「何も彼も持つてゐらつしやるよ。」と、ティーホンはお客の用意のよいのを褒めるつもりか、誇り顔に、銀の蓋の開きかゝつたネフリュードフの大形の化粧匣を指さして言つた。成程その匣の中には瓶やブラシや香油や香水や、その他有りとも有らゆる化粧道具が澤山這入つてゐた。

「叔母さんにお禮を言つて下さい。あゝ本當にやつて来てよかつた。」と、以前と同様、氣が浮き立つやうに嬉しくなつて来るのを覺えて、ネフリュードフは言つた。

彼女はたゞこの言葉につこり微笑ほほえみんだだけで出て行つた。

常からネフリュードフを可愛がつてくれる叔母達は、今度は特にいつもに増して彼を歡待するのであつた。ドミートリイは生死も分らない戦地へ行くのだ、といふことが叔母達の心を動かしたのである。

ネフリュードフは、旅行日程の都合上、叔母達の家にはほんの一晝夜だけ逗留する筈であつたが、カテューシヤの顔を見ると、あと二日しか無い復活祭復活祭をこゝで迎へることに同意し、オデッサで一緒になる筈であつた同僚のシェンポークにも電報を打つて、この叔母達の家へ寄つて行かないかと言つてやつた。

ネフリュードフはカテューシヤに會つた最初の日から、彼女に對する以前の心持を覺え始めた。彼は又もやカテューシヤの白いエプロンを見ると、以前と同じく胸がわく／＼して来るのを抑へることが出来なかつた。彼女の足音、彼女の話聲、彼女の笑聲などを聞くと、とても歡喜せずにはゐられなかつた。彼女の濡ぬれた黒母おんぼのやうな黒い眼、殊に

その微笑ほほえみんだ時の顔は、感動なしには見る事が出来なかつた。それよりも、彼と出會つた時、さつと赤くなる彼女を目の前に見ても、もう惱ましさにじつとして居れなかつた。彼は自分が、戀してゐるなと感じたが、然しそれは、以前のそれとは全然性質が違つてゐた。以前の戀は、彼にとつては、一種神祕的なもので、隨つてまた彼自身も、そのことを自分にすらそれと打明ける氣にならなかつた。それに戀といふものは一生にたゞ一度しか出来ぬものだと思つてゐたのである。——ところが今の彼は、正しくそれと知りながら、それを喜びながら、更に突込んで言へば、今度の戀の如何なるものであるか、これより生ずる結果は何うであるかを自分には秘してゐても、それを、臆氣おそに知りながら、戀してゐるのであつた。

ネフリュードフの内にも、すべての人々に於けるが如く、二つの自我が在つた。一つは精神的の自我で、これは他人に取つても幸福となるやうな幸福のみを求めた。もう一つは動物的の自我で、これは自分の幸福をばかり願つて、それが爲めには萬人の幸福を犠牲にしても構はぬといふ代物ものであつた。ペテルブルグ生活と軍隊生活によつて、彼のうちに醸された、この利己主義熱時代の今日に於いては、動物的の自我が主權を執つて、精神的自我を全然壓倒してゐた。

も、カテューシヤに會つて、あの當時彼女に對して懐いてゐたものを再び感ずるやうになると、精神的自我が擡頭して、その權利を主張し始めた。かくて復活祭前の二日間、ネフリュードフの内心に於いては人知れず、又彼自身すらもそれと意識しない苦悶が間斷なく行はれてゐた。

心の奥底では、自分は早く立ち去らねばならぬと思つてゐた。また、今時かうして叔母達の家にべん／＼と逗留せねばならぬ等の理由も無いことを知つてゐた。のみならずこれが爲めに何等の好い結果が生れ出る筈も無いと承知してゐた。けれども何だか嬉しく愉快でたまらない爲めに、彼は自らの前に口を閉ぢて逗留したのである。

土曜日の晩、つまり光明なるキリスト復活祭の前夜、一人の司祭が補祭をつれて、早課禱(禮拜式の前)を修めるために叔母の家にやつて來たが、二人の話す所によると、教會から此處までの三ウエルスター(一ウエルスターは我が)といふものは、まるで水溜みづなみの中を泳ぐやうで、櫓かじを通らせるのに骨が折れたといふことである。

ネフリュードフは叔母達や召使などと一緒に、この早課禱に臨んだが、戸口の傍に立つてゐて、時折香爐を携へて來るカテューシヤの方ばかり見續けてゐるうちに式は濟んだ。そこで彼は司祭や叔母達と復活祭の接吻禮をして、もう寢室

に行かうと思つた。すると廊下の所でマリヤ・イワーノワナの老婢マトリョーナ・パウロワナがカテューシヤと一緒に教會へ行つて、クリイチヤパスハ(いづれもパン菓子)を聖めて貰つて來る支度をしてゐる様子であつた。で、『僕も行つて見よう。』と彼は思つた。

教會へ行く道は、馬車も櫓かじも利かなかつた。それで叔母達の家をわが家同様に振舞つてゐるネフリュードフは、『兄弟』と呼ばれた種馬に鞍を置くことを命じ、寢室に行く代りに、立派な軍服を着け、きちんとした乗馬ズボンを穿き、その上に外套を引掛けて、肥り過ぎて嘶ないてばかりゐる老馬に跨り、暗い夜路を、水溜や雪を冒しながら教會へと出て行つた。

一五

その後一生の間、この時の儀式は、ネフリュードフに取つて最も生彩ある最も強い思ひ出の一つとなつて残つた。

彼が、所々雪明りのする暗い夜路を辿つて、水をはねかへしながら、急に教會の周囲の燈火を見て耳を動かす馬を境内に乗り入れた時は、儀式は既に始まつてゐた。

農夫等は彼がマリヤ・イワーノワナの甥であると思つて、彼を地面の乾いてゐる所へ連れて行つて、そこで彼を降し、

馬を傍へ引張つて行つて鑿いでくれ、彼は會堂の中へ案内された。會堂は祭の人々で一杯であつた。

右側には男達がゐた。年寄は手織の上衣や草鞋をつけ、さつぱりした白い脚絆をあてゝゐた。若い者は新しい羅紗の上衣に、色の鮮やかな帯を締め、長靴を穿いてゐた。左側は女達で、赤い絹ハンカチで髪を包み、フラシテンの袖無服を着て、その下から眞紅な袖のシャツを着、青、緑、雑色などの下袴を着け、厚い皮の靴を穿いてゐた。それから白いハンカチで頭を包み、灰色の上衣を着、古めかしい下袴に靴か又は新しい草鞋を穿いてゐる物靜かな婆さん達は、若い者の後ろの方に立つてゐた。そしてその間には、綺麗に着飾つた子供等が、頭髮を油で澤々させながら立つてゐた。男達は十字を切つて、お辭儀をしては髪の毛を後ろへ振り撫でてゐた。女達——と言つても殊に老婆達は、艶の抜けた眼を一つの聖像とその傍の燈明に据ゑたまゝ、合掌した手の先を額のハンカチや胸や腹にしつかと押しつけて(十字を切る)何やら口には嘸きながら、立つたまゝ腰をまげたり、跪いて伏拜したりした。子供等も大人に倣つて、人の見てゐる時だけは努めてお祈りをした。金色燦然たる聖障(會堂の信徒席を隔てた壁。聖像が表面に張りつけられてゐる)は蠟燭の光で一入輝いてゐたが、さてそれ等の蠟燭は、また金色で螺旋狀に巻きつけられて

ゐる太い蠟燭を四方八方から取圍んでゐた。大きな吊燭臺には澤山の蠟燭が立てられ、聖歌班からは、はしやぎきつた歌の調子が、素人の歌ひ手の吼えるやうな低音や細いソプラノなどがごつちやになつて響いてゐた。

ネフリードフは前方へ抜けて行つた。會堂の中央には、地主の夫妻と水兵服を着たその子供や、警察官、電信局員や、鞆皮附の長靴を穿いた商人や、徽章を佩けた村長など村の貴族階級が立つてゐた。そして、法壇の右側の、丁度地主の細君の後ろに、雑色織の藤色の着物を着て、縁を取つた白いショールを掛けたマトリョーナ・パウロウナと、胴の邊りに髪を取つた白い着物を着、空色の帯を締めて、黒い頭髮に赤い蝶形のリボンをつけたカテューシャとが控へてゐた。

すべてが如何にもお祭らしく、賑やかで、楽しく、美しかつた。金色の十字を浮かした白い銀色の祭服を着た司祭も、祭日用の金銀色の法衣を着た補祭や讀經者も、頭髮にてか／＼油をつけた晴衣姿の素人歌ひ手等も、快活な舞踏曲のやうなお祭りの歌の調子も、司祭等が衆人に向つて斷えず、花で飾つた三本立ての蠟燭で祝福する有様も、それと同時に繰返し繰返し發せらるゝ、基督復活！ 基督復活！ といふ呼び聲も、すべてみな華かであつた。しかし

何より美しかつたのは、白い着物に空色の帯を締め、黒い頭髪に赤い蝶形のリボンをつけて、喜ばしさに眼を輝かしてゐるカテューシヤの姿であつた。

ネフリュードフは、カテューシヤが特に自分の方を振り向かなくとも、自分を見てゐるのだと感じた。それは、彼女が彼女のすぐそばを通つて祭壇の方へ歩いて行つた時見て取つたのである。彼は何も話しかけることはなかつたけれど、ふと思ひついたので、通り過ぎながら、

「叔母さんはおしまひの儀式が済んだら、ものいみ明けの御馳走をすと言つてたよ。」と言つた。

彼の顔を見ると何時もさうだが、カテューシヤはその愛くるしい顔に若々しい血汐を漲らして、その黒い眼は、微笑んでるやうに、嬉しさうに輝いて、無邪氣に下からじつと彼を見上げた。

「わたし存じてますわ。」と、につこりしながら彼女は言つた。

この時、銅の壺を携へた一人の讀經者が、人々の間を押分けながら、カテューシヤのそばを通つた。そして彼女には眼もくれず、法衣の裾を彼女に觸れた。見受ける所、讀經者はネフリュードフに敬意を拂ふ爲めに、道を避けようとして、彼女に觸れたのであつた。けれどネフリュードフにはそ

の仕打が承知出来なかつた。彼の考へでは、此處に在る一切のものは、いやこの世に在る一切のものは、たゞカテューシヤ一人の爲めに存在してゐるのである。従つてこの世に於ける一切のものはこれを蔑視してもよいが、彼女ばかりは蔑視してはならぬ。何故といふに、彼女は一切の中心であるからだ。この譯が何うしてあの讀經者には解らないのであらうかと、彼は思つた。聖障の金色も彼女の爲めに光り、大きな吊燭臺や、幾多の燭臺の上の蠟燭の火も、皆彼女の爲めに輝き、『主は復活し給へり、喜べや人の子等。』といふ楽しい讚美歌の調べも、彼女の爲めに歌はれてゐるのであつた。かくてこの世に在りと在らゆる一切の美しいものは、みな彼女の爲めに存在した。思ひなしのせゐるか、カテューシヤもこの一切のものが自分の爲めに存在してゐるといふことを得心してゐるらしかつた。ネフリュードフは髪を取つた白い着物を着た、すらりとした彼女の姿を見、うつとりとした嬉しさうな彼女の顔を眺め、その顔の表情によつて、自分の魂の中で歌つてゐるものと全く同じものが、彼女の魂の中でも歌つてゐると見て取つた時、彼には本當にかう思はれたのであつた。

始めと終りの儀式の間に、ネフリュードフは會堂の外へ出た。人々は彼の前に道をよけて腰を屈めた。中には、彼を

知つてゐる者もあつた。『何處のお方だべ？』と訊ね合ふ者もあつた。彼は入口の所に立ち止まつた。乞食の群が一時に彼を取巻いた。彼は財布にあつた小錢を分けて與へた。そして階段を降りて行つた。

見渡す限り夜は明けはなれてゐたが、それでもまだ太陽は昇つてゐなかつた。人々は會堂の周圍に在る墓地へ散つた。カテューシヤは會堂内に残つてゐたので、ネフリードフは立つて、彼女を待つてゐた。

人々は尚ほ續々と出て來た。そして靴の銚を鋪石に叩きながら、階段を降りて教會の境内や墓地へ散らばつて行つた。

マリヤ・イワノワナのコックをしてゐる古めかしい老人が頭を顛はしながらネフリードフを呼びとめて、互に接吻禮をした。とその妻の老婆も絹頸卷の下から皺くちやの喉佛を現はしながらネフリードフを見て、ハンカチの中から黄色いサフラン色の卵を一個取出してくれた。其處へ又、今度は新しい無袖服に緑色の帯を締めた、若い逞しい百姓がこゝろしながら寄つて來た。

『御復活お目出度う！』と言つて、眼で笑ひながらぐつとネフリードフに身を寄せて、一種特別な百姓らしい氣持のよい臭を浴せかけ、自分の縮れた頤髯で彼を擦りながら、

丁度彼の唇の眞中のところを、硬い清々しい唇で、三度接吻した。

ネフリードフがこの男と接吻し合つて、彼から暗褐色の卵を一つ貰つてゐる時、マトリョーナ・パウロワナの雑色織の着物と赤い蝶形のリボンをつけた愛らしい黒い頭とが見えて來た。

カテューシヤは自分の前を歩いて行く人々の頭越しに、直ぐネフリードフを見つけた。ネフリードフも彼女の顔がバツと輝いたのを見た。

彼女とマトリョーナ・パウロワナとは入口の所まで出ると、立ち止まつて乞食共に施してゐた。鼻の缺けた跡に赤い瘡りかゝつた疵のついてゐる一人の乞食が、カテューシヤのそばへ寄つて行つた。彼女はハンカチの中から何かとり出して彼に與へ、それから彼に接近して、少しも厭ふ氣色もなく、いつもの通り喜びの眼を輝かせながら、三度彼と接吻し合つた。乞食と接吻し合つてゐるその時に、彼女の眼はネフリードフの視線と出會した。こんなこととしてもよくつて？と、彼女は問うてゐるものゝやうであつた。

『さうだ、さうだ、可愛いお前のすることだ、皆結構だ、皆立派だ。僕は好きだ。』

二人が入口の所から降りて來たので、彼は彼女に寄つて

行つた。彼は接吻禮をしようとは思はなかつた。たゞ彼女のそば近くに居たかつたのである。

「御復活お目出度う！」と、マトリョーナ・パウロワは首を傾げてにこ／＼しながら、今日は皆平等よといったやうな調子を添へて言つた。そして、圓めたハンカチで口を拭いて、彼の方へ唇を突き出した。

「お目出度う！」と答へながら、ネフリユドフはマトリョーナと接吻し合つた。

彼はカテューシャを振返つた。彼女はぼつと顔を染めて、同時に彼に接近して來た。

「御復活お目出度う、ドミートリイ様。」

「お目出度う！」と彼は言つた。二人は二回接吻し合つた。そしてもう一度する必要があらうかと躊躇するものゝやうであつたが、必要だと決めたらしく、思ひ切つて三度目の接吻を交はした。そして一緒に笑つた。

「皆さん、司祭さんの所へは行かないのですか？」と、ネフリユドフは訊いた。

「え、私達此處で待つてゐますの。ドミートリイ様。」と言つて、カテューシャは何だか嬉しい仕事でも済ました時のやうに、胸一杯に深い溜息を吐き、例の溫柔しい、純真な、愛の籠つた、心持ち斜視の眼で眞正面から彼を見詰めるの

であつた。

男女間の戀愛には、必ずそれが頂點に達する瞬間がある。その瞬間には意識的な批判的な何ものもなく、また感覺的な何ものもない。この光明なる復活祭の夜こそネフリユドフに取つては實にかうした瞬間であつた。今にして彼がカテューシャのことを思ひ出して見ると、彼女に會つたあらゆる場合のうちで、この時のことだけが他のすべての場合を壓倒してしまふのであつた。黒い、滑らかな、つや／＼した頭、すつきりした體格とまだ發達しきらない胸を處女らしく被うてゐる鬘をとつた白い着物、ぼつと紅くなる頬、優しい、光澤のある黒い眼、すべて彼女の存在のうちには二つの主要な特徴がある。それは處女性の純潔さと愛の純潔さである。しかもこの愛は獨り彼に向けてゐるばかりでなく、——彼の知つてゐる通り——すべての人々、すべてのもの、この世にあらん限りの善いものばかりか、彼女と接吻し合つた乞食のやうなものにまで向けられた。

彼は彼女にこの愛のあつたことを知つてゐた。何故なれば彼は自分のうちにこの愛を、復活祭の夜と朝に意識してゐたからである。そしてこの愛のうちに彼と彼女とは一つに融け合つたことを意識してゐたからである。

あゝ、若し一切のことがこの夜にあつたやうな感じの上

に止まつてゐたならば！』ところが、さうでなくて、この恐ろしい事件はあの光明なる復活祭の直ぐ後に起つたことなのだ！』と。彼は今陪審員控所の窓際に坐つたまゝ考へてゐた。

一六

教會から戻ると、ネフリュードフは叔母達と一緒に大齋明け（復活祭前七週間を大齋）の御馳走をいたゞき、聯隊で出来た習慣によつて、氣つけにウォッカと葡萄酒とを飲み、それから自分の部屋へ引取ると、そのまゝ着換へもせずに寝入つてしまつた。と、扉をコト／＼叩く音に眼を覺まされた。その音で、これは彼女だと知ると、彼は眼を擦り、伸びをしながら、身を起した。

「カテューシヤかい？ お這入り。」と言つて起ち上つた。

彼女は扉を開けかけた。

「御飯でございます。」と彼女は言つた。

彼女は矢張り白い着物を着てゐた。けれど髪の毛にはリボンは無かつた。彼女は男の眼を見ると、何か非常に嬉しいことでも知らせに來たかのやうになつこりした。

「今行くよ。」と、髪の毛を梳く爲めに櫛をとりながら答へた。

彼女は一寸の間餘計に立止まつてゐた。それを見ると、彼は櫛を投げ棄て、その方へツカ／＼と歩み寄つた。けれど彼女はその瞬間に素早く身を翻して、例の輕やかな早い歩調で、廊下に敷いた細い絨毯を傳つて行つてしまつた。

「何んて間抜けなんだ、僕は。」と、ネフリュードフは自分に言つた。「何故彼女を押へなかつたのだらう？」かう考へて、彼は駈け出して廊下の途中で彼女に追ひついた。

彼女を何うしようといふのか、自分にも解らなかつた。然し折角彼女が彼の部屋に這入つて來たのに、かういふ時誰もがするやうなことを自分もすべきところを、遂にしなかつたのだと思つた。

「カテューシヤ、一寸お待ち！」と彼は言つた。

彼女は振返つた。

「なあに？」と、立止まりながら彼女は言つた。

「何でもないが、たゞ……」

彼はどぎまぎして、かうした場合一般に皆の者は、彼の位置に置かれたらどんなことをするかを思ひながら、カテューシヤの腰を抱いた。

彼女はじつと立つたまゝ、彼の眼を見入つた。

「いけません、ドミートリイ様、いけませんよ。」涙含む程

眞赤になつて、彼女は言つた。そして自分を抱きしめてゐた男の手を、自分の硬ばつた強い手で拂ひのけた。

ネフリードフは女を放してしまつたが、それと同時に氣拙く恥づかしくなつたばかりではない、自分自身に愛想をつかした。この時彼は自分を信じなければならなかつたのであるが、しかし彼はこの氣拙さと恥づかしさが、彼の本心から迷り出た最も善良な感情であることを悟らなかつた。却つてそれを自分の愚かさからだと思ひ、彼としては人並のことを爲すべきが至當だと考へた。

彼はもう一度彼女を追ひかけて再び抱きつき、頸の所へ接吻した。けれどこの接吻は最早最初の二つの接吻とは全く質の違つたものであつた。最初の二つの接吻とは他でもない、ライラックの茂みの蔭で無意識的にしたそれと、今朝教會でしたのとであるが、今度のは恐ろしい接吻であつた。彼女もこれを感じた。

「まア、何をなさるのです？」彼女はまるで何か限りなく貴重な寶を取り返しのつかぬ程毀されてしまつたかのやうな聲を出して叫んだ。そして一目散に彼のそばから駈け去つた。

彼は食堂へやつて來た。立派に着飾つた叔母達と、醫者と、隣家の婦人とが前菜を載せた卓子の傍に立つてゐた。

平生と別に變つたこともしなかつたが、ネフリードフの心の内だけは嵐が吹き荒んでゐた。彼は廊下でカテューシヤを捉へた時のあの最後の接吻の感觸を憶ひ浮べ、彼女のこゝばかり考へてゐたので、自分に話しかけられることは少しも解らなかつた。そして取つてもつかない返事をしてゐた。彼は他の何事も思ふことが出来なかつたのだ。やがて彼女が食堂へ來た時、彼は彼女を見なかつたが、その全身で彼女の來た事を感じたので、彼女を見ないよう大に努力しなければならなかつた。

食事の後彼は直ぐ自分の部屋に退つて、暫らくの間非常に興奮して部屋の中を往つたり來つたりしてゐたが、さうするうちにも家の中にかかる物音に聞き耳を立て、彼女の足音を心待ちに待つてゐた。彼の内に潜んでゐた動物的の自我は、今や頭を擡げたばかりでなく、彼が最初この家を訪れて來た時の、いや、つい今朝教會にゐる時まではまだ何處かに残つてゐた精神的自我を、すつかり脚下に踏み躪つてしまつた。そしてこの怖ろしい動物的の自我が、今や最上權を握つて、彼の心を支配してゐるのだつた。ネフリードフはこの日斷えずカテューシヤを狙つてゐたけれども、彼女と二人きりで會ふやうな機會が遂々得られなかつた。恐らく彼女は彼を避けてゐたのらしい。けれども夕方になつて、彼女

は彼の居室と隣り合つてゐる部屋へ來なければならなかつた。醫者がそのまゝ居残つて泊つたものだから、カチューシヤはお客の寢床を敷かねばならなかつたのである。彼女の足音を聞きつけると、ネフリュードフは、何か大罪でも犯さうとする時のやうに、息を漚め、足音を忍ばせて、その後から這入つて行つた。

彼女は兩手を綺麗なクッションの中に入れ、枕の角を持つたまゝ、彼を顧みてにつこり笑つた。しかし、それはもう以前のやうに快活な嬉しさうな微笑ではなく、驚いたやうな、憐れみを乞ふやうな微笑であつた。その微笑は何となく、彼が今爲しつゝあることは善くないと、彼に告げてゐるやうにも思はれた。彼は一寸立止まつた。この時はまだ悪と闘ふだけの可能性があつた。たとへば微かではあるが、彼女に對する眞實の愛の聲が、彼女のこと、彼女の様々な感情、彼女の生活などを、彼に告げてゐた。ところがもう一つ別な聲があつて、うっかりするな、お前の快樂を、お前の幸福を逸してしまふぞ、と言つてゐた。そして結局この第二の聲の方が第一の聲を壓倒してしまつた。彼は思ひ切つて彼女に進み寄つた。と、恐ろしい、制しきれない動物的の感情が彼を支配した。

ネフリュードフは、彼女をしつかと抱きかゝへたまゝ、寢

床の上に腰かけさせて、まだ何かしなければならぬと思ひながら、彼女と並んで腰をかけた。

「ドミートリイ様、後生ですから、どうぞ放して下さいまし。」と、彼女は訴へるやうな聲で言つた。「マトリョーナ婆さんが参ります！」彼女は聲高く叫んで、身をふり切つた。すると、本當に誰か扉口の所へ來た。

「では夜になつてからお前の所へ行くよ！」と、ネフリュードフは呟いた。「お前一人だらうね？」

「何を仰しやいますの？ そんなことを！ いけませんわ。」口でこそ彼女はかう言つてゐたが、その不安さうなどぎまぎした全體の様子は、全く別なことを語つてゐた。

扉口に寄つて來た者は、ほんとにマトリョーナ・パウロウナであつた。彼女は片手に毛布を抱へて這入つて來ると、ネフリュードフをたしなめるやうに睨みつけ、それからカテーシヤが毛布を間違へて持つて來たといつて、がみがみ叱りはじめた。

ネフリュードフはすく／＼抜け出した。彼は別段恥づかしいとも思はなかつた。彼はマトリョーナ・パウロウナの顔を見て、彼女が自分を非難してゐること、その非難の正當であることを知つた。又自分の行ひの悪かつたことも解つてゐた。然し彼女に對する以前の眞實な戀愛の感情から抜け

出してしまつた動物的感情は、今や彼の全心を占領し、ひとり専横を極めてゐるのであつた。この感情を満足せしめる爲めには何うすればよいかを、今の彼は知つてゐた。そして之を遂行する手段を探してゐた。

宵のうち彼は氣が氣でなかつた。叔母達の所へ行つて見たり、其處から自分の部屋へ戻つて見たり、玄關に出て見たり、さうして何うしたら彼女と二人きりで逢へるか、そのことばかり考へてゐた。然し彼女は彼を避けるやうにしてゐたし、マトリョーナ・パウロウナも彼女を監視の眼から見失はないやうに努めてゐた。

一七

かくて宵も過ぎ、夜となつた。醫者は寢室へ去つた。叔母達も寢支度を始めた。そしてマトリョーナ・パウロウナは今叔母達の寢室に行つてゐるので、女中部屋にはカテューシャが唯ひとり残つてゐることをネフリユードフは知つてゐた。彼は再び玄關先へ出て見た。戶外は眞暗で、濕つぽく、蒸し／＼してゐた。白い靄が春の残雪を溶かしたり、又は溶けゆく残雪の爲めに擴がつたりしながら、あたり一面に立ち罩めてゐた。家のすぐ前の坂下の、百歩ばかりの所に在る河からは、變な響きが聞えて來た。それは氷の破

れる音であつた。

ネフリユードフは玄關先から降りて、水溜りをまたぎ／＼凍てついた雪の上を踏んで、女中部屋の窓際（まどぎはら）に身を寄せた。心臓が胸の中で激しく鼓動して、自分の耳にも聞える位であつた。呼吸は止まつたり、重い溜息になつて迸つたりした。女中部屋には小さな洋燈が點つてゐた。カテューシャは獨り机に向つて、じつと考へ込んだまゝ、眼の前を見詰めてゐた。ネフリユードフは長い間、身じろぎもせずには彼女を見てゐた。獨りでゐる時に、彼女はどんなことをするであらうか、それが知りたかつたのである。約二分間彼女はじつと坐つてゐたが、やがて眼を上げて、につこり微笑したと思ふと、自分自身を叱りつけるやうに頭を振つて、そして身仕舞（みじまひ）を直し、急に兩手を机の上のせて、またもじつと眼の前を見詰めるのであつた。

彼は立つて、彼女を見てゐたが、それと同時に自分の心臓の鼓動にも、また河の面から聞えて來る變な響にも、聞くとはなしに耳を傾けた。あちらの河の面の、靄の中では、絶えず徐かに何事か營まれつゝあつた。或は何か軋（いび）をかくやうな、何かバリ／＼軋（いび）るやうな、又は何か砕けるやうな、或は硝子のやうに薄い氷が響くやうな音がした。

ネフリユードフは暫らくそこに佇んで、内心の苦悶に惱ま

されてゐるカテューシャの物思はしげな顔を眺めてゐた。と、彼は彼女が可哀相になつた。然し妙なことには、可哀相に思へば思ふ程、彼女に對する欲望が昂進して行くのであつた。

彼はコツ／＼と窓を敲いた。彼女はまるで電氣にでも打たれたやうに全身を顫はした。そしてその顔一杯に恐怖の色を浮べたが、やがて跳ね上つて、窓に近づき、その顔をびたりと硝子に押しつけた。更に兩掌を眼の上へ馬蹄形にかざして、彼をしかと見届けてからも、恐怖の色は去らなかつた。彼女の顔は非常に沈痛であつた、——彼は未だ曾てこのやうな彼女の顔を見たことが無かつた。彼女は、彼が微笑するのを見て、自分も漸く微笑した。と言つてもそれはほんの、彼に調子を合はせただけであつて、心の中は笑ふどころか、恐怖で一杯であつた。彼は女に庭へ出て来るやう手招きをしたが、女はいやだといふ印に頭を横に振つた。そして窓の邊りに立ち續けてゐた。男はもう一度顔を硝子に接近させて、出て来いと聲をかけようとしたが、この時、彼女は誰かに呼ばれたらしく、急に扉の方へ振り向いた。彼は窓から離れた。鶯が非常に深いので、家の傍から五歩も離れると、もうその眼には窓が見えなかつた。たゞ黒ずんだ塊のやうなものがあつて、その中から赤い、

ばかに大きく見えるランプの光が射してゐた。川の面では相變らず變な鳴び聲と、サラ／＼いふ音と、氷の裂けて響く音とが續いてゐた。邸内の何處かあまり遠くない鶯の中から、鶏が一羽鳴いた。と、その近くの鶏がこれに應じた。つゞいて村の遠くの方からも、互に競ひ合つたり混じ合つたりしながら多くの鶏の鳴聲が聞えて來た。川の外は、四邊は皆しんとしてゐた。もう二番鶏であつた。

ネフリードフは、家の角のあたりを二度ばかり前後へ往つたり來たりしてゐるうちに、數回水溜りへ足を踏込んだが、やがてまた女中部屋の窓へ寄つて行つた。ランプは元の通りに點つてゐた。カテューシャも亦何か決し兼ねてゐるらしく、机にしよんぼりと向つてゐたが、彼が窓に近寄ると、直ぐに視線を投げた。彼がコツ／＼叩くと、その音のする方をよく見もしないで、直ぐに女中部屋から出て行つた。彼は、出口の扉が開いて、また閉まる音を耳にした。早速玄關へ行つて、彼女の出て来るのを待ち受け、物をも言はず抱擁した。彼女もしつかと男に抱きついて、顔をあげながら、その接吻を唇で受けた。二人は玄關の隅の、雪の溶けた乾いた所に立つてゐたが、男は苦しい、満たされない欲求に全身がわく／＼するのを覺えた。すると亦俄かに出口の扉がかちりと鳴つて、同じやうな軋り音がする

と、マトリョーナ・パーウロウナの怒つたやうな聲が聞えた。

「カテューシヤ！」

彼女は男の抱擁から脱れて女中部屋へ戻つた。彼は、がちやつと鍵の閉まる音を聞いたが、あとは森然となつてしまつた。窓の赤い火も消え、たゞ一面の靄と川の面の音だけが残つた。

ネフリユードフは窓に寄つたが、誰も見えなかつた。コツ／＼叩いても答はなかつた。仕方なく表口から家の中へ歸つたけれども眠れなかつた。靴を脱ぎ、跣足になつて、廊下傳ひにマトリョーナ・パーウロウナの部屋と隣り合つてゐるカテューシヤの部屋の扉口に向つて行つた。最初は、マトリョーナ・パーウロウナの静かな鼻を耳にしたので、一と思ひに中へ這入らうと思つたが、丁度この時彼女が咳を شدして、軋むベットの上で寢返りを打つた。彼は吃驚したまゝ凡そ五分間は立ち竦んでゐた。やがて再びあたりが静まつて、またも穩やかな鼻が聞えて來たので、努めて音のしない床板を辿りながら、忍び足で、漸くカテューシヤの部屋のすぐ扉口の所まで來た。あたりはひっそりとしてゐた。彼女は確かに寢てはゐないらしく、その呼吸が聞えなかつた。そして彼が「カテューシヤ！」と囁くとすぐ起

きて來て扉口に近づき、彼の思ひなしか、怒つてゐるやうな調子で、彼方へ行つて下さいと勧めるのであつた。

「とんでもない。そんなことが出来るもんですか？ 叔母様達に聞えますよ。」彼女は口ではかう言つたが、全體の様子は、「わたし、もうすつかりあなたのものよ」と言つてゐた。

ネフリユードフはたゞそれだけのことが分つた。

「さア、一寸でいゝから開けておくれ。お願いだよ。」

彼は考へもなしに言つた。

彼女は黙つてしまつた。やがて鍵孔を探してゐる手の擦れる音がして、鍵がカチリと鳴つた。と直ぐ彼はその開かれた扉口へ這入つてしまつた。

そして黄色い硬ばつたルバーシユカ一枚になつてゐるカテューシヤの露はな腕を捉まへると、そのまゝ抱き上げて外へ伴れ出した。

「あれ、何うなさるの？」——彼女は低聲で言つた。

然し彼は、そんな言葉には耳を假さず、自分の部屋に彼女を抱へ込んだ。

「あれ、いけませんよ。放して頂戴！」彼女はかう言ひながら、しつかと男にしがみついた。

.....

彼女が身を慄はしながら黙つて、彼の言ふことには何も答へずに歸つて行つた時、彼はまた支關に出て行つた。そして今爲出来した事の結果を考へようと力めながら、そこに立ち止つた。

戸外は餘程明るくなつてゐた。下の川の面では、氷片の咽ぶやうな、軋むやうな、はじけるやうな響が一層強くなつて、その上に水のごぼく流れる音までが聞えて來た。識は漸く沈みかけて、その中から下弦の月が浮びあがり、何だか怖ろしい黒いものを陰鬱に照らしてゐた。

『一體これは何うした譯だ。大きな幸福に見舞はれたのか、それとも大きな不幸に出會したのか!』と、彼は自問した。『いや、これが世の中なんだ、誰でもやることなんだ。』かう獨語して、それから寢床へ行つて眠りに就いた。

一八

その翌日派手好きな快活なシェンボークがネフリエドフを訪ねて、叔母達の家へやつて來た。そして持前の上品さ、親切さ、快活さ、鷹揚さ、わけてもドミートリイに對するその愛情などで、叔母達をすつかり魅惑してしまつた。彼の鷹揚なことは、叔母達にひどく氣に入つたのであるが、

それがあまりに大袈裟なので、叔母達も幾分呆れ氣味であつた。彼は盲目の乞食の來たのに一ルーブリを惠んだり、召使ひ達に十五ルーブリの心付けをしたりした。又ソフイヤ・イワーノワナのシュゼトカ(スバニール種の犬)が彼の眼の前で脚に怪我して血を出した時は、之に繻帶をしてやらうと云ひながら、躊躇することなく、縁に縫飾りのしてある麻のハンカチ(ソフイヤ・イワーノワナの知つてゐる所では、その様なハンカチは廉く見積つても一ダース十五ルーブリは出る)を引き裂いて、シュゼトカの爲めに繻帶を作つたりした。叔母達は、今までにかうした種類の人間を見たことはなかつた。その癖この男は二十萬といふ借金を持つてゐて、自分もどうせ返済出来ないと諦めてゐたから、たかゞ二十五ルーブリやそこいらの金は、彼に取つては何でもなかつたのである。叔母達は無論そんな内幕は知つてゐなかつた。

シェンボークは僅か一日逗留しただけで、その翌晩にはネフリエドフと一緒に出立した。彼等は、二人とも聯隊へ出勤しなければならぬぎりぐりの期日に迫られてゐたので、もうこれ以上滞在することは出来なかつた。

ネフリエドフの心の中では、昨夜の思ひ出がまぎ／＼と鮮やかに残つてゐるこの叔母達の家での最後の一日は、二

つの感情が頭をあげて互に闘つてゐた。一つは燃えるやうな肉感的な慳慾の思ひ出で、それはまだ／＼食ひ足りないものではあつたが、兎に角目的を果したといふ満足も幾分伴つてゐた。もう一つは何だか大變悪いことをしたといふ自省で、この悪いことは矯めなければならぬ、彼女の爲めよりも、自分の爲めに矯めなければならぬといふ意識であつた。

ネフリエードフは現在利己主義に眼が昏んでゐたので、自分と彼女との關係が世間に知れたら非難されはしないか、餘程ひどく非難されはしないかといふやうな、自分勝手のことばかり考へて、彼女がどんなに苦しんでゐるか、今後どうなるかといふことに就いては少しも心配してゐなかつた。

彼は、シエンボークが彼とカテニョシヤとの關係を感じてゐると思つた。が、それを却つて自分の己惚れの種にしてゐた。

「成程、君が急に叔母様達を愛するやうになつたのも無理はない。」と、シエンボークはカテニョシヤを見た時に彼に言つた。——「これでは一週間も滞在したくなる譯さ。僕だつて君の位置に置かれたら、出發しにくいにきまつてゐる。まつたく美しいよ！」

けれどネフリエードフはまた、彼女との戀を十分に満足させないで今立去ることは残念だが、どうせ長持ちの出来なない關係ならば、今のうちにきつぱり手を切つた方が得策とも考へた。それで彼は、女に幾らか金を與へようと思つた。が、それは彼女の爲めを思つてとか、又はさうした金が先々必要になるからとかいふのではない。いつも人が斯うするから、彼としても彼女を利用した以上、それに對する報酬をしなかつたら體面に關はると思つたからである。で、彼は自分の地位と女の身分とに適はしいと思ふ金額を彼女に與へた。

出立の日の午後、彼は玄關で彼女を待つてゐた。彼女は彼を見ると、眞赤になつて、女中部屋の扉の開いてるのを眼付で知らせながら、行き過ぎようとした。そこで彼は女を引き止めた。

「いよ／＼お別れだ……」と、彼は百ルーブリ紙幣を一枚入れた状態を片手に握りながら言つた。「これはほんの……」

彼女は氣がついて、眉を顰め頭を横に振つて、男の手を押しつけた。

「まア、さう言はずに取つて呉れ。」と呟いて、彼女のポケットに状態を差込んだ。が、それでも何だか氣が替へてなら

ないので、彼は髪め面をしたまゝ、重い溜息を吐きながら、自分の部屋に駆け戻つた。

それから暫らくの間、彼は自分の部屋を歩き廻つてゐた。體を屈めたり、跳ねたりしたが、あの夜の場面を思ひ出すと、體に痛い所でもあるやうに、聲を揚げて、呻いたりした。

だつて仕方がないではないか？ 誰でもすることだ。シェンボークと、彼が話して聞かした女教師との間もかうであつた。グリーシヤ叔父さんだつてさうであつた。家の親父だつて、田舎にゐた頃、百姓女を孕ませて、今も生きてゐるあのミーテンカといふ私生兒を産ましたではないか。皆が斯うするのだとしたら、自分もやつぱり斯うしなきゃならないのだ。——などと彼は自ら辯解をして見たが、何うしても安心することが出来なかつた。この思ひ出は彼の良心を焼きつけるやうに苦しめた。

彼とても心の底では、その奥底では、自分のしたことが如何にも下劣で、卑怯で、残忍であつたことを知つてゐた。あの行爲を思ひ浮べると、彼は他人の缺點を責めることが出来ないばかりか、人々の眼を正視することすら出来ない。まして以前の如く、自分を立派な高尚な寛大な青年だと考へることなどは無論出来なかつた。けれど元氣よく愉快に

生き續ける爲めには、是非自分を以前のやうな人間だと考へなければならなかつた。ところで、これが爲めには唯一の方法しか無かつた。それは、あの一件を考へないといふことであつた。彼は本當にその通りにした。

彼が今入つて行かうとする生活——新しい地位、同僚、戦争など——がこの手段を助けてくれた。で、彼は日を経るにつれて、ますます、あの一件を忘れて行き、終には全く忘れてしまつた。

たゞ一度、戦争の後で、彼は彼女に逢はうと思つて、叔母達の家へ立寄り、カテューシヤがもうゐないことや、彼の出發後程なくお産をする爲めに暇を取つたといふことや、何處かでお産をしたといふことや、それから叔母達の耳に挟んだ所によると、彼女は全く墮落してしまつたといふやうなことなどを知つた時、彼の心臓は疼きはじめた。月日を勘定して見ると、彼女の産んだ兒は彼の兒のやうでもあり、またさうでないやうにも思はれた。そして叔母達は、彼女が墮落したのは、全くその母親から承繼いだ淫蕩性によるのだと言つた。叔母達のこの判断は、何だか彼を辯護してくれるやうで、彼には嬉しかつた。彼はとにかく彼女と赤ん坊とを捜し出さうと思つたが、それも最初のうちだけで、後にはそんなことを考へるのさへ、心中ひどく疚し

く且つ恥づかしかつたので、この捜索の爲めに必要な努力を用ひなかつた。そして益々自分の罪を忘れ、あのことを思はなくなつてしまつた。

ところが今度のこの驚くべき事件は、端なくも彼をして一切のことを憶ひ出さしめ、こゝ十年の間さうした罪を心に懐いたまゝ平氣で生活することの出来た自分の無情、残忍、卑劣さを承認するよう、彼に要求した。けれども彼はまだ／＼それを承認するところまで行かなかつた。今の彼としては、何うかこの際一切が暴露しなければよいが、そのことばかり考へてゐた。何うか彼女も、彼女の辯護士も、残らず一切を陳述してくれなければよいが、何うか衆目の前で自分の恥をさらしてくれなければよいが、とそのことばかりを祈つてゐた。

一九

こんな心持でネフリュードフは法廷を出て、陪審員の控室へ入つて行つた。彼は身のまはりに行はれてゐる色々な會話に耳を傾けながら、窓の傍に坐つて、絶えず眞を煉かしてゐた。

例の氣さくな商人はスメリコフの消閑法に心から共鳴してゐるらしかつた。

「ね、君、あの男も随分耽溺したもんだね。全くシベリヤ式だよ。女も悪くない、あれ位ゐの別嬪なら誰だつてのほせますよ。」

陪審員長は、すべての問題が鑑定の如何にあるといふやうな意見を陳べてゐた。ピートル・ゲラシモウィチはユダヤ人の店員と何か冗談を云ひ合つて、盛んに笑つてゐた。ネフリュードフは何を問ひかけられても、一寸答へるだけで、皆が自分に構はず、そつとして置いて呉れよと願つた。

片道寄りの歩き方をする廷吏が再び陪審員等を法廷へ呼び出しに來た時、ネフリュードフは自分が裁判しに行くのでなくて、寧ろ裁判されに引き出されるやうな恐怖を感じた。心の底では、自分はもう他の人と顔を合せるのも恥ぢねばならぬ悪漢であると感じてゐたが、習慣の惰性で、落ちつき拂つた何喰はぬ風をして高座に登つて行つた。そして陪審員長から二番目の自分の席に腰を下すと、足を組んで、鼻眼鏡を弄つてゐた。

被告も何處かへ連れ出されてゐたが、再び引き入れられたところであつた。

法廷には證人の新しい顔が見えた。その中の一人で、欄柵の前のおつづきの列に腰をかけてゐる肥満した女を、マ

ースロワが眼も離さずじつと見詰めてゐるのを、ネフリードフは気がついた。その女は絹と天鵝絨の華美な衣服を着て、頭には大きなリボンをついた深い帽子を被り、肘まで露はした腕には綺麗な手提をにかけてゐた。後で分つたことであるが、この女は、證人の一人でマースロワの勤めてゐた妓樓の女將であつた。

證人達の訊問が、名前、宗旨と云つた型の通りに始められた。それから證人等に宣誓せしむべきか否かに就いて協議があつて後、又も覺束なげに足を運びながら例の老司祭がやつて來た。そして又も以前と同様絹の法衣の胸にかゝつた黄金の十字架を直しながら、以前と同じ落ち着きと、全く有益な重要な仕事をしてゐるといふ確信とを以て、證人等と鑑定人とに宣誓させた。宣誓が済んだ時、すべての證人は退廷させられたが、一人の婦人だけは留め置かれた。

それは他でもない、カテューシヤの勤めてゐた妓樓の女將キターエワであつた。彼女はこの事件に就いて知つてゐるだけの事を訊ねられた。キターエワはわざとらしい微笑を浮べ、一句毎に帽子を被つた頭で顔をしながら、ドイツ流のアクセントで詳細に順序立つた陳述をした。

事の起りは彼女の許へ、豫て知つてゐる旅館の下働男シモンが來て、金持のシベリヤ商人に一人の女を見立てよく

れと言つたことから始まつた。そこで彼女はリュバシーヤ（マースロワ）を遣つた。暫くすると、リュバシーヤは商人と連れ立つて戻つて來た。「商人はもうその時は餘程いゝ氣持になつてゐたやうでした」と、心持ち笑顔を造つてキターエワは語つた。「が、家へ上ると又女達に馳走つたり、飲んだりしました。ところが商人はお金が足りなくなつたので、自分の鼻唄してゐる、このリュバシーヤを宿屋の自分の部屋へ使ひにやつたのでございます。」と言ひながら、彼女は被告席の方を顧みた。

ネフリードフは、この時マースロワが微笑したやうに見受けたが、そんな微笑は如何にも厭なものに思はれた。そして一種異様な名狀し難い嫌惡と同情との交つたやうな感じが彼の胸中に湧き起つた。

「ところで、マースロワに對するあなたの考はどんなものですか？」と、マースロワの辯護士に指定された判事補が、顔を赤くしながら恐るゝ訊ねた。

「それはよい女ですわ。」と、キターエワは答へた。「教育もあり、纏緻もよし、良い家庭に育つただけあつて、フランス語も讀めますし。時には一寸飲み過ぎることもありますが、前後を忘れるやうなことはありません。本當に好い女ですわ。」

カテリーシャは女將の方を見てゐたが、急に視線を陪審員達へ移し、更にネフリュードフの上じつと留めた。と思ふと彼女の顔は屹と眞面目に、といふよりも寧ろ險しくなつた。その険しい眼の一方は斜視であつた。變な見方をするこの二つの眼が可なり長い間ネフリュードフの上に向けられてゐた。彼は、はつと思つたが、それでも輝やかしい白眼を持つたその斜視の眼から、自分の視線をそらすことが出来なかつた。あの怖ろしい一夜のことが、氷の割れる音や、鶯や、殊に曉方近く昇つて來て何だか黒い怖ろしいものを照らした下弦の月などと一緒に、まざ／＼と彼の記憶に上つた。今、彼とその周圍とを見詰めてゐる二つの黒い眼が、あの時の黒い怖ろしい何物かを思ひ出させるのであつた。

『氣づいたな!』と彼は思つた。そして今に打撃の下るのを待つものゝ如く、身をすくめた。然し彼女は氣づかなかつた。穩やかな溜息を一つ吐いて、また裁判長の方を見はじめた。ネフリュードフは思はずはつとした。『あゝ、もつと速く進行して呉れたら』と思つた。彼は曾て穢に出て、負傷させた鳥を締め殺すとき、いつも厭な、不慣な、傷ましい感じに打たれたものであるが、今も全くこれと同じ感じを味はつたのである。死にきれない鳥が獲物袋の中で跳

いてゐるのは、それは厭な氣持がして可哀相であるが、同時にまた一刻も早く殺して、それを忘れてしまひたくなるものだ。

ネフリュードフは今、證人等の訊問を聞きながら、丁度そのやうな錯雜した感じを味つてゐた。

二〇

ところが生憎のことに、事件は長びくばかりであつた。證人も一人々々訊問され、鑑定人の訊問も濟み、更に例の通り副検事や辯護士等の鹿爪らしく發する無用な質問も試みられてから、裁判長は陪審員等に向つて、證據物件の閲覽を勧めた。證據物件といふのは、確か最も太い食指に差されてゐたらしいダイヤモンド入りの花彫のある大形の指環と、それから毒を分析した試験管とであつたが、それ等の物は何れも封印がしてあつて、その上に小さな貼紙が貼つてあつた。

陪審員達がその品々を檢分しようとした時、副検事が再び起立して、證據物件取調べの前に、醫師の検屍報告の朗讀を要求した。

出来るだけ早く仕事を片づけて、例の女教師の許へ急がうと思つてゐた裁判長は、こんな書類を朗讀したとて、退

屈を招き、食事の時間を遅らせる外に何等の効果も有り得ないことを知つてゐた。又副検事がこの朗讀を要求するのは、彼がこれを要求する権利を有つてゐることを知つてゐるといふだけの理由に過ぎないことも、よく知つてゐた。けれども拒絶するわけにも行かないので、屯に角承認の意を表はした。書記は書類を出して、又も例のLとRとをこつちやにした悔さうな聲で讀みはじめた。

身體外部の檢診によつて分つたのは次の通りである。

一、フェラポント・スメリコフの身長は六フィート五インチである。

「どうしてなか／＼の大男ですよ。」と、例の商人は興味を以てネフリエードフの耳元に囁いた。

二、外貌によつて年齢は四十歳前後と定められた。

三、死體は全身腫れ上つてゐた。

四、肉の色は緑色がかつて、所々黒い斑點が生じてゐた。

五、皮膚は大小種々の水腫で脹れあがり、所々裂けて、大きな布片のやうに垂れてゐた。

六、毛髮は黒亞麻色をして濃密である、手を觸れると容易に皮膚から脱離した。

七、眼は眼窩から飛び出し、角膜は朦朧となつてゐた。

八、鼻孔、兩耳、口腔からは泡立つた粘液が流れ出し

て、口は半ば開かれてゐた。

九、顔面も胸部も腫れ上つてゐた爲めに、頸は殆どなかつた。

尚、次々と種々あつた。

この町で遊蕩した一商人の怖ろしい、大きな、その上腫れ上つて頰れかゝつた死體に關して、このやうな検屍報告が、四ページ二十七項目に互つて詳細を盡してゐた。ネフリエードフが感じてゐた何とも言ひやうのない厭な氣持は、この検屍報告の朗讀によつて一層募つて來た。カテューシヤの生活も、死體の鼻孔から流れ出した血膿も、眼窩から飛び出した眼の玉も、彼と彼女との行爲も——それが皆同じ種類のものであるやうに、彼は思つた。そして自分までが四方八方からさうしたものに取巻かれて、全くその中に吸ひ込まれてゐるやうな氣持がした。やがて検屍報告の朗讀が終ると、裁判長はほつと深い溜息を洩らして、やれやれお終ひになつたと思ひながら顔を上げた。ところが書記は直ぐに又内部檢診の報告を讀みはじめた。

裁判長は再び頭を垂れ、片手を頰杖にして眼を閉ぢた。ネフリエードフの隣席に坐つてゐた商人は一生懸命眼氣を抑へてゐたが、それでも時々こくり／＼とやつてゐた。被告等はその背後の憲兵と同じやうに、じつと坐つてゐた。

内部の検診によつて次の事が分つた。

一、頭蓋骨の皮は容易に骨から剝離して、何處にも血液滲漏の跡はなかつた。

二、頭蓋骨は普通の厚味を有ち、損傷した所は無かつた。

三、硬い脳膜には、約四吋程の小さな變色した斑點が二箇所あつた。脳膜そのものは鈍い蒼白色を呈してゐた。

尙ほ他に十三項あつた。

それから立會人達の名前と、醫師の署名、及び検案書が讀み續けられたが、その検案書によつて見ると、死體解剖の際に發見され、そして調書の中へ記入された胃中の變化と、腸及び腎臓に於ける一部の變化とは、スメリコフの死が、酒と共に胃中に入つた毒に原因してゐることを、大なる確信を以て斷定せしめるものである。胃腸内に於ける變化によつて、その胃中へ入つた毒の何であるかを言明することは困難であるが、然し、この毒が酒と共に胃中へ入つたといふことは假定して差支へない。何故なれば、スメリコフの胃中には、多量の酒が見出されたからである。と大體こんなことであつた。

「して見ると、なか／＼の飲み手だつたのですね。」またかう低い聲で言つたのは、やつと眼を覺ました商人であつた。

この調書の朗讀は一時間近くもかゝつたのに、副検事はまだそれで満足しなかつた。調書を読み終ると、裁判長は彼に向つて、

「内臓解剖の報告は讀んでも仕方がないと思ふが。」と言つた。

「本職はその解剖の朗讀を願ひたいのです。」と、副検事は裁判長を振り向きもしないで、少し體を曲げて起ちかゝりながら、嚴としてかう言つた。その聲の調子には、さもこの朗讀を要求するのは自分の權利である、この權利は一步も譲らない、たつて拒絶すれば上告に及ぶといふ威勢が示されてゐた。

大きな顎髯を生やし、人の好さうな尻下りの眼をもつた、胃カタル病みの判事は、非常に疲勞を覺えて、裁判長に言つた。

「何だつてこれを讀むのかしら？ 時間がとれるばかりぢやないかね。あんな新米の筈なんか掃除の役には立ちやしない、ずる／＼引き摺るだけだ。」

金縁眼鏡の判事は何も言はずに、暗い面持をして、きちんと眼の前を見詰めながら、どうせ自分の妻にも、世の中にも、好い事は期待されないのだと思つてゐた。

報告書の朗讀が始まつた。

「千八百八十×年二月十五日下記署名ノ者ハ第六三八號ヲ以テ醫務局ヨリノ依囑ヲ受ケ、」と、さも列席の人々を惱ます睡魔を追ひ拂はうとするものゝ如く、一と際調子を張りあげて嚴然と讀み始めた。——「検屍官助手立會ノ上、内臟檢視調書ヲ作ルコト左ノ如シ。

一、右肺臟及ビ心臟（六フント硝子燻入）。

二、胃ノ内容物（六フント硝子燻入）。

三、胃腑（六フント硝子燻入）。

四、肝臟、脾臟、腎臟（三フント硝子燻入）。

五、腸（六フント陶製燻入）。

裁判長はこの朗讀の始まつた時、同僚の一人に體をまげかけて、何か囁き、それからもう一人の同僚にも耳打ちして、同意を得たので、こゝまで讀んで來ると、朗讀を中止させてしまつた。

「法廷はこの報告書の朗讀を無用と認める。」と、彼は言つた。

書記は直ちに朗讀を止めて、書類を片づけ、副檢事はむつとして何やら書きつけはじめた。

「陪審員諸君は證據物件を閲覽して頂きます。」と裁判長は言つた。

陪審員長初め一部の陪審員等は起ち上つて、兩手の遣り

場に困るやうな身振をしながら、卓子の方へ寄つて行つた。そして順次に指環や硝子燻や試験管などを見た。商人は指環を自分の指に嵌めて見たりして、

「やあ、こいつアでかい指だ。」と言つて、自席へ返りながら、「まるで胡瓜みたいだ。」と附け加へた。彼は毒殺された商人を昔話の勇士か何かのやうに想像して、獨りで面白がつてゐるらしかつた。

二

證據物件の閲覽が済むと、裁判長は審理の終結を報告し、早くけりをつけようと思つて、すかさず副檢事に論告を促した。副檢事も人間である以上、煙草も喫みながらうし、食事もしたからうから、他の者の心持ちを察して呉れるであらうと思つた。けれど副檢事は我をも人をも容赦しなかつた。この男は生來甚しい鈍物であつた上に、不幸にして中學を卒業する時金のメダルを貰ひ、また大學では羅馬法により土地使用權に關する論文を書いて、褒美を貰つたので、それでひどく増長してしまつた上に、女にもてたのが手傳つて、すつかり有頂天になりきつてゐた。その結果彼は大莫迦者になつてしまつた。

彼は論告を命じられた時、金モールの制服に自分の堂々

たる威儀を示しながら、やをら起ち上つて、兩の手を机の上に置き、心持ち首を傾げ、被告達の視線を避けるやうにして、法廷をぐるりと見廻し、それから愈々切り出した。「陪審員諸君、今諸君の前に提起された事件は」と、先刻報告書の朗讀中に準備して置いた自分の辯論を陳べはじめた。「本職をして言はしむれば、非常に特色的な犯罪であります。」

彼の考によると、自分の辯論は、後年名聲を馳せた幾多の辯護士等の有名な辯論と同じく社會的價値を有つてゐる積りであつた。ところが傍聽人と云つたら、裁縫女と、飯炊き女と、シモンの妹と、この三人の女ともう一人馬丁がゐるばかりであつたが、彼はそんな事には頓着しなかつた。實はこんなことで彼も漸く有名になりかけてゐた。ただこの副検事は、その地位に在つて最善を盡すといふのを、自分の信條としてゐた。それは犯罪の心理的意義を探り、社會の病弊を暴露することに在つた。

「陪審員諸君、諸君の眼前に横はつてゐる事件は、言ひ得べくんば、世紀末の特色的犯罪であります。つまり現代社會の各分子が、今日陥りつゝある悲惨なる頹廢的現象の特徴を帯びたもので、それが偶々この事件の息づまるやうな光の下に、生々と暴露されただけであります……」

副検事は隨分長い間喋つた、一面に於いては自分の考へついた巧妙な文句を一つも漏らさず憶ひ起さうと努めながら、又他の一面に於いては、殊に力を入れて、少時も停頓することなく、滔々と、淀みなく辯じ立てようと努めながら、一時間と十五分に互る長廣舌を揮つた。その中でたつた一回、ぐつと聞へて、可なり久しい間唾を呑み込んでゐたが、直ぐにまた氣を盛り返して猛烈な雄辯を揮ひ、この頓挫を償つた。彼は時には陪審員達の方を見て足を交る踏み交へながら、優しい媚びるやうな巧妙な語調で話したり、時には手帳を見ながら落ちついた事務的な調子になつたり、また時には傍聽人や陪審員に向ひながら大きな叱るやうな聲を張り揚げたりして論じ續けた。けれど彼は、三人の被告がじつと自分を見詰めてゐるに拘はらず、その被告達の方だけは一度も見なかつた。彼の辯論のうちには、その頃彼等の仲間に流行してゐた新しい言ひ方や、科學的知識の新語として、今も猶ほ持て囃されてゐるものなどが残らず取り入れてあつた。例へば、遺傳、先天的犯罪性、ロンブローゾー（一八三六年に生れたイタリヤの有名な犯罪學者、フランスの社）、進化、生存競争、催眠術、暗示、シャトルコ（一八二五年一八九三年の有名な催眠學者）、デカダン等次から次と出て來た。副検事の斷定によると、商人スメリコフは大まかな天性

を備へた力強い野性的なロシア人の典型で、その騰揚たげあがりな、人を信じ易い寛大な性質の爲めに、深く墮落し果てた人々に左右され、その犠牲となつて斃れたものである。

シモン・カルティンキンは農奴制の因襲的産物で、腑抜けで、無學で、主義もなく、宗教さへない人間であつた。エウフィミヤはその情婦で、遺傳の犠牲であつた。彼女のうちには悪化した人間の特徴が悉く認められた。所でこの犯罪の主なる操縦者たるマースロワは何うかといふに、彼女は最も下劣なデカダンの代表者中でも、最もよくこのデカダンを代表してゐる者であつた。「この女は」と、副検事はマースロワを見向きもしないで言つた。「今この法廷でその抱主の陳述した通り、教育を受け、密に讀み書きを能くするばかりでなく、フランス語も知つてゐる。この女は孤兒であるから、或は生れながらにして犯罪性の萌芽を持つてゐたのかも知れない。然し知識階級の貴族の家庭に養育されたのだから、正直に働いてさへゐれば立派に生活が出来たのに、自分の恩人達をふり棄て、肉慾の囚となつて、それを満足させる爲めに妓樓へ這入つたのである。妓樓ではその教育によつて、いやそれよりも、今この場で彼女の抱主の口から、陪審員諸君も聞かれた通り、人を丸め込む不思議な魅力によつて、他の女達とは自ら違つてゐた。さ

てこの不思議な魅力こそ、輓近科學によつて、殊にシャーロコ一派の學者によつて研究された暗示と稱するものである。彼女は即ちこの暗示を用ひて、ロシアの勇士サゾコ(傳説中の主人公)にも比すべき、直ぐ他人の口に乗易い、お目出度い金持の客を籠絡し、その信用を得て、最初は金を捲き上げようと思つたが、後には無残にもその生命を奪つてしまつたのである。」

「いやどうも、夢中で喋り續けてゐるらしいね。」と、裁判長はにや／＼しながら、嚴しい顔付の同僚の方へ體を傾けて云つた。

「弱つた代物だ。」と、鹿爪らしい同僚が言つた。

「陪審員諸君！」と、副検事は細い腰をしなやかに扭りながらまだ言ひ續けた。「諸君の掌中には、この人達の運命が握られてゐます。そればかりでない、諸君の裁決如何は社會に影響する所が多いのでありますから、諸君の掌中には又、或る程度までは社會の運命も握られてゐます。そこで諸君は、この犯罪の意義を十分會得せられ、またマースロワの如き、謂はゞ病理學的個性によつて社會に與へらるべき危険をよく御考量あらんことを希望します。而して社會をかゝる傳染より防ぎ、健全無垢なる分子をして、かゝる病毒に感染し、破滅に陥らしむることの無いように

切望します。」

かう言つて、副検事は目前に迫れる判決の重大さに自ら撃たれた者の如く、自席にどつかと腰を下した^{おろ}が、その様子にはこの上なく自分の辯論に酔うてゐるらしい得意の色が見えた。

彼の辯論は、修飾たつぷりな雄辯振りとは別として、大體次の意味を持つてゐた。即ちマースロワは商人の信用につけ込んで、彼に催眠術をかけ、その金員を残らず捲き上げようと思ひ、鍵を持つて一人で旅館にやつて来たが、折悪しく、シモンとエウフイミヤとに見つけられたので、餘儀なく金は三人で分けることになつた。而もその後自分の犯跡を蔽はん爲めに、再び商人を連れて旅館へ歸り、さうして彼を毒殺してしまつた、と云ふのであつた。

副検事の辯論の後、辯護士席から立ち上つたのは、白い糊つきのワイシャツの胸を大きく半圓形に露はした燕尾服姿の中年の男であつた。彼はカルティンキンとポーチョワの爲めに元氣よく辯護した。それは三百ルーブリの約束で、彼等に依頼された辯護士であつた。彼は兩人の無罪を主張してマースロワ一人に罪を負はせた。

彼は、マースロワが金を取り出す時、ポーチョワとカルティンキンとが立會つたといふ彼女の陳述を否認し、毒殺の

嫌疑を受けた者の陳述は信ずることが出来ない」と主張した。またこの辯護士の言ふところによれば、二千五百ルーブリの金は、時として一日三ルーブリ乃至五ルーブリづつも客から貰ふ勤勉忠實な二人の者の稼ぎ方としては、容易に背つかれるものであつた。それなら商人の金は何うしたのかといふに、それはマースロワ一人で盗んで、誰かに渡したか、或は彼女が變態的な心理態度でゐた爲めに失くして了つたかである。毒殺に至つては固よりマースロワ一人の所爲であるといふのであつた。

それ故竊盜に關しては辯護士はカルティンキンとポーチョワとの無を罪承認するよう陪審員達に願つた。若し彼等が兩人の竊盜犯を認めるとしたならば、毒殺の共犯と、それに對する意志のなかつたことだけは認めて欲しいといふのであつた。

尙ほ辯護士はその結論に於いて、副検事の遺傳に關する卓論は、遺傳の科學的問題を説明してはゐるが、ポーチョワの如き兩親共に不明なる者には適當しないと、副検事の辯論に横鎗を入れて口を結んだ。

副検事はまるで苦蟲を嚙んだやうな顔付をして、ふり／＼しながら、何か自分の紙に書きつけると、さも呆れ返つたと言はぬばかりに肩をすぼめた。

次に起立したのはマースロワの辯護士であつた。彼はおど／＼と悶へ／＼その辯護を初めた。そして、マースロワが竊盜に加はつたといふことは少しも否定せずに、マースロワはスメリコフを眠らせたばかりに散薬を飲ましたので、スメリコフを毒殺する意志は毛頭なかつたといふことばかり主張した。こゝで彼は、マースロワを誘惑し墮落させた男は罰せられないで、獨り彼女ばかりがその墮落の一切の重荷を負はねばならないことになつたことを概説して、一番熱辯を揮つてやらうかとも思つたが、そんな心理學の範圍に渡る辯舌は、誰にも退屈なものであつたので、やめてしまつた。そして彼が男子の残忍性と女子の頼りなさに就いて何かも／＼言ひだした時、裁判長は彼を救つてやる積りで、この事件の本質から外れぬようにと注意した。

この辯護が終ると、再び副検事が起立した。そして第一の辯護士に對しては、たとへボーテコワの兩親が不明であつても、遺傳に關する學説はそれが爲めに少しも廢れない。何故なれば遺傳の法則はちやんと科學によつて證明されてゐるので、吾々はたゞに遺傳の中から犯罪を歸納し得るばかりでなく、犯罪の中から遺傳を歸納することが出来ると言つて、自分の遺傳説を辯護した。それからマースロワが

或る假想（この假想といふ語を特に毒々しく言つた）の男子によつて墮落させられたといふ辯護士の假定に對しては、寧ろ彼女の方が、その掌中に陥れた幾多犠牲者の誘惑者であつたことを、すべての調査資料が語つてゐると言つて、彼は勝ち誇つたやうに着席した。

次に被告等自身の供述が許された。

エウフイミヤ・ボーテコワは、依然として自分は何も知らない、何等の關係もないと繰り返して、一切の罪はマースロワに在るといふ點を執拗に指摘した。シモンはシモンで、

「何と思はつしやつても、へい、私に疚しいことはござえやせん、そりや御無體なこつてござえやす。」と、何回も繰り返して言つた。

マースロワは一言も發しなかつた。裁判長から、何か辯解することは無いかと言はれても、彼女はたゞ眼をあげて彼を見、それから逐ひ詰められた野獸のやうにすべての人を一瞥したゞけで、直ぐに眼を伏せて、ひどくしやくり上げながら泣き出した。

それを見ると、ネフリードフは急に變な聲を立てたので、それを聞きとめた隣席の商人が、「何うなさいました？」と訊いた。

けれどネフリードフ自身にも、自分の今の有様は一體何うしたのか分らなかつた。それで、今にも泣き出しさうになつたのと、眼に一杯涙の出で来たのを、自分の神經衰弱の所爲だと決め込んで了つた。彼はこの涙をかくす爲めに鼻眼鏡をかけ、それからハンカチをとり出して、涙をかみはじめた。

今この場で、この法廷で、彼の昔の不行跡が皆の者に知られたら、堪らない恥曝しだといふ恐怖心が、彼のうちに起つて来た折角の良心の覺醒を揉み潰して了つた。この恐怖心は、この裁判の初期に於いては、他の何よりも強いものであつた。

三三

被告等の最終の陳述が終り、それから陪審院の審理に移す諸問事項の形式に就いて雙方の協議が、可なり長い時間に亘つて行はれたが、いよ／＼それが成立すると、裁判長はその大要を説明しはじめた。

彼は事件の説明に先立つて、強盗は強盗であり、竊盜は竊盜であるといふこと、それから閉鎖された場所からの奪取は閉鎖された場所からの奪取であり、閉鎖されない場所からの奪取は閉鎖されない場所からの奪取であるといふこと

を、随分長い間、快活な打ち寛いだ親しげな語調で陪審員達に説明した。そしてこの説明中に、彼は特に屢々ネフリードフの方を見るのであつた。それは何だか、彼だけに特にこの大切な事情を會得さして、彼の口から更に之を他の陪審員達にも説明して欲しいといつた風であつた。それから、陪審員達がもうよくこれ等の道理を會得したと假定して、次に、人を死に至らしむるやうな行爲が殺人と稱せらるゝといふこと、従つて毒殺は亦殺人であるといふもう一つの眞理を説明しはじめた。この道理も陪審員達に呑込めたらしいと思ふと、今度は竊盜と殺人とが一緒に行はれた場合には、竊盜殺人罪といふ犯罪が構成されるといふことを、彼等に説いて聞かせた。

裁判長は出来るだけ早く審理を打ち切つたかつた。また例の女家庭教師も彼を待ち侘びてゐるのであつたが、それにも拘はらず、彼は一度喋りだしたが最後、とても停止する事が出来ない程よくその職務に狎れ切つてゐた。それで陪審員達に向つて、彼等が、若し被告を有罪と思つたら有罪と認定し、無罪と思つたら無罪と認定し、若しまた一方に於いては有罪だが他方に於いては無罪だと思つたら、その通りに一方に於いては有罪、他方に於いては無罪と認定する権利を持つてゐるといふことを、諄々と説いて聞か

せた。次に彼は、さうした権利は陪審員達に附與されてはゐるが、それは慎重に行使すべきものであると續け、なほ又例によつて、その附議された諮問に對し、陪審員が肯定的の回答を與へれば、それで諮問中に含まるゝ全條項を是認したことになるし、また諮問中に含まるゝ全條項を否認するならば、その否認した點を摘發しなければならぬと、細かに説明しようと思つたが、この時、時計を見上げると、もう三時に五分前なので、直ちに事件の叙述に移ることにした。

「この事件の真相は次の通りである。」と切り出して、彼は、既に辯護士や副検事や證人等によつて、幾回か述べ立てられたことを、またそのまま繰返した。

裁判長は語り續けた。と、その兩側に控へた面々は、考へ深さうな表情をして聽いてゐた。裁判長の辯舌は、いつになく大出来で、當然さうでなければならぬと思つたが、幾分長過ぎるやうに思はれて、時偶時計を覗くものもあつた。副検事とても、大體すべての裁判官やすべて法廷に居合した者と同感であつた。裁判長はやつとその概略を述べ終つた。

何も彼も云ひ盡されたやうな氣がした。然し裁判長はなか／＼自分の發言權を打切ることが出来なかつた。——そ

れ程に彼は人を感動させる調子を持つた自分の聲を聞くのが好きであつた。——で、尙ほ數言、陪審員達に與へられた權限の重大なことや、この權利を行使するには如何に細心の注意を要するかといふことや、之を濫用してはならぬこと、彼等は宣誓してゐるといふこと、彼等は取りも直さず社會の良心であるといふこと、會議室の祕密は神聖なるべきこと、その他いろ／＼のことに就いてまだ言つておかなければならぬ必要を感じた。

裁判長が語り出してから、マースロワはまるで一言も聞き漏らすまいとしてゐるものゝ如く、じつと彼に眼を据ゑて見てゐた。だからネフリードフは彼女の眼と打觸かる恐れがないので、飽かず彼女を見てゐた。と、彼の心象のうちにはいつもの面影が浮んで來た。長らく逢はなかつた愛しい人の顔は、最初は別れてゐる間に變つて了つた特徴がひどく眼につくのであるが、そのうちに段々と何年前の元の姿に返り、その間に生じた一切の變化は消えて、吾々の心の眼の前には、二つとない、その人特有の精神的個性の主なる表情だけが浮び出て來るものである。ネフリードフのうちにて起つてゐたのは、まさにこれであつた。

さうだ、獄衣を着てゐても、體が肥つて、胸が張つてゐても、顔が下脹れになつてゐても、額や額縁に小皺が出來

て、眼が腫れぼつたくなつてゐても、それは矢張りあの輝やかな復活祭に、生の歡喜と充實とで微笑んだ惚れ／＼するやうな眼眸で、自分の戀する男をじつといぢらしく下から見上げたカテューシャその者に違ひなかつた。

『それにしても、この事件が丁度自分の出廷日に廻り合せるとは、何といふ奇遇だらう。十年間何處へ行つても見かけなかつたのに、今此處で、被告席に彼女を見ようとは！そしてこの事件は全體何ういふ結末になるのか？ あゝ一時も早く、一時も早く片づけてしまひたいものだ！』

でも彼は、内心に起りかけて來た悔悟の念にはまだなかなか屈伏しなかつた。なにこんなことは時さへ経てばすぐ消えてしまふもので、彼の生活を覆すやうなことはない、全く偶然の出來事だと思つてゐた。例へば、小犬が室内へ入つて何か悪いことをすると、主人が犬の首筋をとつて、そのしでかした悪戯に鼻を擦りつけようとするが、小犬の方では自分のしたことの結果から出來るだけ遠ざかつて、これを忘れようと、きやん／＼鳴きながら後退りする。しかし主人はなかく容赦しない。かういふ光景はよくあるものだが、今のネフリウドフは丁度かうした小犬の情態に在る自分の身を痛切に感じてゐた。彼も既に自分のしでかしたことの悪いのは萬々承知してゐた。また主人の力強い

壓迫の手をも感じてゐた。しかも自分のしでかしたことの意義がまだすつかりは分らなかつた。第一「主人」その者を認めてゐなかつた。自分の眼前に置かれたものは、自分の仕業であるといふことを、彼は何うにも信じたくなかつた。然るに容赦ない見えざる手が彼を取り押へてゐるので、彼はもう何うしても逃れられまいと豫感してゐた。でも、彼は更に勇氣を鼓し、長い間の習慣によつて、足を組み合はせ、無雜作に鼻眼鏡を弄りながら、自信ある態度で第一列の二番目の椅子に坐つてゐた。けれども心の底では、自分のしでかしたこの行爲のみに限らず、一體に自分の遊惰な、放埒な、殘忍な、我儘な生活の見苦しさ、さもしさ、卑しさをしみ／＼感じてゐた。そして、この期間、まる十二年の間、自分のかうした犯行をも、自分のその後の生活をも、或る一種の奇蹟によつて彼の眼から隠してゐた怖ろしい幕が、今や捲ぎ出して、その蔭にあるものがち／＼と隠見されるやうな心持がして來た。

三三

やがて、裁判長はその説明が終ると、勿體振つた手付で詰問の項目書を取り上げ、それを受け取りに來た陪審員長に手渡した。陪審員達は退廷の出來るのを喜びながら起ち

上り、自分達の手を何うしていゝか分らないやうな恰好をしながら、何か恥づかしさうに、ぞろ／＼と會議室の方へ出て行つた。彼等の背後の扉が閉まると、それと同時に一人の憲兵がその扉のそばへ寄つて来て、サーベルを劍鞘からひき抜き、肩に構へて扉口に突つ立つた。裁判官も起つて退廷した。被告達も矢張り連れ出されてしまつた。

會議室に入ると、陪審員達は前同と同様、先づ第一に巻煙草をとり出して喫み始めた。彼等が法廷の自席にをさまりながら、多少興味つてゐた不自然な態とらしい態度は、この會議室に入つて巻煙草に火を入れると同時に拭ひ去られ、ほつと救はれたやうな氣になつて、思ひ／＼のところ陣取つた。と、忽ち賑やかな會話がはじまつた。

「あの女に罪はありませんな、あの女は巻添を食つたんですよ。」と、お人よしの商人が言ひだした。——「酌量してやる方がいゝですよ。」

「その所ですよ、審議しようといふのは。」と、陪審員長が言ひ返した。「吾々は決して個人々々の私情に囚はれてはいけません。」

「裁判長の説明は巧いものでしたな。」と大佐が言つた。「あれで巧いのかね。私は危く寝入つてしまふところでした。」

「つまりですな、マースロワが共謀してゐなかつたとすれば、あの旅館の雇人共が金の事を知らう筈がないぢやありませんか。」と、ユダヤ人の店員が言つた。

「では何ですな、あなたのお考ではあの女が盗つたといふのですな。」と、一人の陪審員が訊ねた。

「私は何うしたつてさうは思はない。」と、少し聲を高めて好人物の商人が言つた。——「なに、あれは皆あの赤眼の妖婆の指金ですよ。」

「揃ひも揃つたもんだね。」と、大佐が言つた。

「だけど、あの婆は部屋へは入らなかつたといふぢやありませんか。」

「あなたは、婆の方を餘計に信じてゐなさる。あんなやぐざ婆の言ふことを眞に受けてたまるもんですか。」

「だが、あなたが信じようと信じまいと、そんなことで問題が決まるわけぢやありませんよ。」と、ユダヤ人の店員が言つた。

「あの女が鍵を持つてゐたのだからね。」

「持つてゐたのが何です？」と商人が言ひ返した。

「では指環は？」

「それはあの女が逐一陳述しますよ。」と、再び商人が大きな聲を立てた。——「何しろその相手の男といふのが變

り者である上に、酒の勢ひであの女を癪つたんですな。すると直ぐあとから可哀相になつて来たものと見えます。で乾度、さア、これをやるから泣くなつてなわけだね。とても素敵な男なんですね。何せ、私の小耳に扶んだ所では、身の丈六尺五寸もあり、體重八ブードにも達してゐたといふ位でですかね。」

「そんなことは問題ぢやありませんよ。」と遮つたのは、ピョートル・ゲラシモウィチであつた。「問題はつまり、あの女が教唆して一切の事件を捲き起したのか、それとも旅館の女中がしたのかといふ所にあるのです。」

「女中一人には出来ない仕事ですよ。何しろ鍵がああ女の手にあつたのですからね。」

取り止めもない評定が可なり長く続いた。

「失禮ですが皆さん、卓子に着いて討議しませう。」と、陪審員長が言つた。「さアどうぞ。」彼はかう言ひながら、自ら議長席に腰を据ゑた。

「あゝ、いつた女は皆曲者なんですよ。」と言つて、ユダヤ人の店員は、主犯がマースロワであるといふ意見を裏書きするのために、曾て彼の友人がある遊園地でかうした女に時計を盗られたことを話した。

すると大佐もそれを機に、それよりもつと酷い、銀のサ

モワルの盗難話をしだした。

「皆さん、どうかこの詰問事項について御討議を願ひます。」と、陪審員長は鉛筆で卓子の上を叩きながら言つた。皆黙つた。その詰問事項といふのは大體次のやうであつた。

一、クラビウエンスキイ郡バルコウオ村の農、シモン・ベトロフ・カルティンキン三十三歳は一八八×年一月十七日N町に於いて、商人スメリコフの所持品を奪はんがため、他の人々と共に彼を殺害せんと謀り、彼に毒酒を與へて、終にスメリコフを死に至らしめ、その所持金約二千五百ルーブリとダイヤモンドの指環とを盗取したが、同人は有罪であるか？

二、平民エウフイミヤ・イワノウナ・ポーチコワ四十三歳は第一項記載の犯罪と同罪であるか？

三、平民エカテリーナ・ミハイロワ・マースロワ二十七歳は第一項記載の犯罪と同罪であるか？

四、被告エウフイミヤ・ポーチコワは、假りに第一項に於いては無罪としても、一八八×年一月十七日N町の『マウリタニヤ』旅館に奉公中、宿泊の旅客商人スメリコフ所有の鍵のかけである鞆を、彼の私室内に於いて、彼女の持つて来た合鍵で開き、その中から二千五百ルーブリを竊取し

たことに於いて、罪は無いか？

陪審員長は第一項を読み上げて、

「さて皆さん、如何ですか？」と問うた。

これは即座に決つた。カルティンキンは毒殺にも竊盜にも關係したものと認めて、『有罪』といふことに異議なく一致した。たゞ一人年老いた職工組合長だけが、カルティンキンの有罪に不服を申し出で、すべての問題に就いて辯明のやうなことをした。

陪審員長は、この老人がまだよく理解してゐないのだと思つて、カルティンキンとポーチョワの有罪なことは何う見ても疑ひの餘地がないといふことを説明してやつた。けれども職工組合長は、自分はよく分つてゐるが慈悲をかけてやる方が一層善いことだからと答へ、『私共はお互に皆聖人ではありませんか。』と言つて、なかなか／＼自説を曲げなかつた。

ポーチョワに關する第二項に就いては、いろ／＼と長い議論が出た後、毒殺に對する證據不十分といふので、『無罪』と決つた。それは彼女の辯護士が法廷で特に主張した所であつた。

商人はマースロワを放免にしたいばかりに、ポーチョワが一切の主謀者であると主張した。陪審員達の多數はこれ

に賛成した。然し陪審員長は、何處までも厳正公平といふことを楯に取つて、彼女を毒殺共犯者と認める何等の根據が無いと言ひ張つた。かくて長い議論を鬧はした揚句、陪審員長の意見が遂に勝を占めた。

ポーチョワに關する第四項は『有罪』と決定したが、職工組合長の主張によつて、『但、寛大なる處置を取ること。』といふ一句を特に加へた。

ところで、マースロワに關する第三項は激しい論争を喚起した。陪審員長は毒殺竊盜共に彼女が有罪なることを主張したが、商人は反對した。大佐とユダヤ人の店員と職工組合長もその味方になつた。が残りの者はどつちつかずに動揺してゐた。けれども陪審員長の説がだん／＼優勢になつて來た。といふのは、すべての陪審員達が疲れて了つて、なるべく早く早く總まるやうな、隨つて早く自由の體になるやうな意見に加擔する方が好いと思つたからであつた。

この事件の顛末から言つても、また以前知つてゐるマースロワの性質から言つても、ネフリュードフは、彼女が竊盜にも毒殺にも關係のないことを確信してゐた。そして最初の間は、誰しも斯く認めてくれるであらうと思ひ込んでゐた。ところが、商人の他愛のない辯護、それは彼が明らかにまに言うた通り、確かにマースロワが肉體的に彼の氣に入

つたといふ點に立脚した辯護と、それを忌々しく思つた陪審員長の駁論と、わけてもそれに飽き／＼したすべての陪審員達の倦怠とが、何でも彼でもマースロワを有罪にしさうな形勢に傾いて來たので、それを見たネフリュードフは此處で一番反駁してやらうかと思つたが、彼としてはマースロワの爲めに辯解の口を利くといふ事が何となく怖ろしかつた。そんなことをしたら、彼と彼女との關係が、直ちに皆の者に知られてしまふに違ひないと思はれた。と言つて、この事件をこの儘に見過すことも出來ないし、何でも反駁せずには置かれなれないと思つた。彼は赤くなつたり、青くなつたりして愈々口を切らうとした時、これまで黙り込んで、陪審員長の横暴な態度を憤つてゐたらしいピョートル・ゲラシモウィチが、俄かに彼に反旗を翻して、丁度ネフリュードフの言はうと思つたことを言ひ出した。

「一寸待つて貰ひます。」と彼は言つた。「あなたは、マースロワが鍵を持つてゐたからあの女が盗んだと言はれますが、然しあの女の歸つた後で、旅館の雇人共が合鍵で靴を開けることが出来るぢやありませんか。」

「さうですとも、さうですとも。」と之に應じたのは商人であつた。

「それにあの女は第一金を盗む筈がないです。あの場合あ

の女は何處へも金の隠し場がないのですから。」

「其處ですよ、私も言はうと思つてゐたのは。」と商人は相槌を打つた。

「手取り早く言へば、あの女が來たので、雇人共の頭に悪企みが浮んで、その機會を利用したのです。そしてあとで、一切の罪をあの女に負はせたのです。」

ピョートル・ゲラシモウィチは激昂した調子でかう云つたので、陪審員長も亦激昂し出し、片意地になつて自分の反對説を固持した。けれどピョートル・ゲラシモウィチの説は極めて適切であつたので、大多數の者が彼に賛意を表し、マースロワは金と指環の竊取に無關係なこと、指環は彼女に與へられたものであるといふことを承認した。それから又、彼女が毒殺に關係があるかどうかの問題に入ると、彼女の熱心な辯護者たる商人は、彼女に何も毒殺する必要がないから、當然彼女は無罪を承認せられねばならぬと言つた。けれど陪審員長は、彼女自ら散薬を與へたと自白してゐるのを以て見れば、彼女を無罪にする事は出來ぬと言ふのだつた。

「それは、やるにはやりましたが、阿片だと思つてゐたのですよ。」と商人が言つた。

「阿片だつて人命を絶つことが出來ますよ。」と反駁したの

は、兎角問題から外れたがる大佐であつた。彼れはそれを機會に、自分の義弟の妻が阿片に中てられた時のことを持ち出し、若し醫者がすぐ近くにゐなかつて、手遅れにでもなつたら、危く一命を落す所であつたといふことを話した。

それが如何にも勢ひ込んで、非常な自信と熱をもつて話すので、誰一人遮る勇氣が出なかつた。たゞユダヤ人の店員が彼の言ふことを止めようとしたが、それは大佐の話に釣り込まれて、自分の話をする爲めであつた。

「ですが、世間には阿片を喫みなれて」と、彼は言ひ出した。——「四十滴も攝つて平氣な者がありますよ。現に私の親戚で……」

が、大佐は止めるどころでなく、ますます自分の義弟の妻に及ぼした阿片の影響を喋り續けた。

「諸君、もう四時過ぎですよ。」と一人の陪審員が言つた。「で、皆さん何うしたものでせう？」と、陪審員長はすべての者に計つた。「マースロワの有罪は認めるが、竊み取る意志はなかつたこと、また何も盗まなかつたこと、かうしたら何うですか？」

ピョートル・ゲラシモウィチは、自説の勝利に満足して、直ぐに賛成した。

「だが寛大に取計らつてやらにやなりません。」と商人が附

けた。

皆それに賛成した。が、たゞ一人職工組合長だけは『無罪』を言ひ張つてきかなかつた。

「つまり同じ事になるのです。」と陪審員長は説明した。「盗む意志もなかつたし、また盗みもしなかつたとすれば、無罪といふことになりませんから。」

「結構、さういふ事にして、酌量して貰ふのです。つまり残る一滴まで綺麗さつぱりと片づけるですな。」と商人は嬉しがつて言つた。

皆波れきつて、論争に頭が混亂してゐたので、その答申に『毒薬を興へたのは事實だが、生命を取る意志はなかつた』といふ但書を附け加へることを誰も氣づかなかつた。

ネフリードフも、之をうつつかりしてゐた程興奮してゐた。そして答申はそのままの形式で法廷へ差出された。

ラベレー(十六世紀のフランスの有名な調作家)の物語のうち、一人の法律家があつて、判決をしようとする時、あらん限りの法文を引照し、無意味なラテン法文まで二十頁も讀み上げた後、さて訴訟者に向ひ、骰子をころがすやうに勧め、若し偶數が出たら原告の勝、奇數が出たら被告の勝だと申渡したといふ話がある。

今の場合が丁度それに似てゐる。裁決がこんな風になつ

たのは、皆がそれに一致したからではなく、第一には、陪審員達に向つてあれ程長い説明をした裁判長が、今度に眼つてつひうっかりして、何時も言つてゐる事を言ひ落してつたからである。それは他でもない、陪審員達が諸問に答へる時は、然り、有罪ではあるが、生命を取る意志はなかつたと、かう言ふことも出来るといふ注意であつた。それから第二には、大佐が自分の義弟の妻の話を莫迦に長たらしく退屈に話したからである。第三には、ネフリュードフまでが餘りに興奮してしまつて、生命を取る意志のなかつたといふ條項の洩れてゐるのに氣がつかず、『竊取の意志なく』といふ一句だけで犯罪を消滅させらうと思つたからである。なほ第四にはピョートル・ゲラシモウイチが、丁度この諸問事項と答申事項とが陪審員長によつて讀み上げられた時、室内に居らなかつたからである。——が、それにもまして肝要な點は、皆が皆疲れてしまつて、一時も早く自由な身になりたい、それには何とかして早く片のつくやうな裁決に賛成するに限ると思つたからであつた。

陪審員達はベルを鳴らした。扉口に抜き身を携へて立つてゐた憲兵は、刀を鞘に藏めて脇へ寄つた。裁判官等が席に着くと、陪審員達も一人々々法廷へ入つて行つた。

陪審員長は勿體ぶつた容子で書類を手にして、裁判長の

側へ行つてそれを渡した。裁判長はひと通り讀んで見て、さも怪訝さうに小首を傾げ、それから同僚達の方を向いて相談をかけた。裁判長の驚いたのは、矢張り陪審員達が『竊取する意志なく』といふ第一の但書をしながら、第二の『生命を取る意志なく』といふ但書をしなかつた點であつた。陪審員達の決定によると、マースロワは竊みもしないし、横領もしなかつたが、それでゐて何等明白なる目的もなく一人の人間を毒殺したことになるのであつた。

「まあ見給へ、何といふくだらないことをしたのだらう。」と、彼は左側の同僚に言つた。「これだと懲役になるぢやないか、あの女には罪は無いのに。」

「え、無罪だと云ふのかね？」と、厳格な同僚が言つた。「さうだよ、明らかに無罪だ。僕の考へだと、これは第八百十八條を適用すべき場合だ。」(その第八百十八條といふのは、法廷は陪審員の決定を不當と認めたまは、之を破棄することが出来るといふことを規定してゐる)。

「君は何う思ふ？」と、裁判長は一人のお人よしの同僚を顧みて言つた。

お人よしの同僚は直ぐには答へなかつた。彼は自分の前に置いてある書類の番號を見て、それに或る數字を加へて、三で割つたが割り切れなかつた。彼は、三で割り切れれば

賛成しようと思つたのだが、そこがお人よしなだけに、割り切れなかつたにも拘はらず、それに賛成した。

「僕も矢張りさうすべきものだと思ふね。」と彼は言つた。

「で、君は？」と、裁判長は厳格な顔付の同僚に向つた。

「断じていけない。」と彼はきつぱり答へた。「すべての新聞紙は陪審員が犯人を放免したがることを言つてゐるぢやないか。若し吾々がそんな事をしたら何といふだらう。僕は断じて賛成出来ない。」

裁判長は時計を見た。

「残念だが、仕方がない。」——といつて陪審員長に答申書を渡して朗讀させた。

皆起立した。陪審員長は足を交る／＼踏みしめながら、咳拂ひをして、それから諮問事項と答申書を讀み上げた。法廷の者は、書記も辯護士も、検事でさへも唖驚して了つた。

被告等は答申書の意味が何だか分らないと見えて、平氣で坐つてゐた。一同は再び着席した。すると、裁判長は檢事に向つて、被告等を如何なる刑に處すべきかを問うた。

副檢事は、マースロワの有罪に就いての思ひ設けぬ成功を喜んで、これは自分の雄辯の結果だと思ひ、何か調べてから、起立して言ひ出した。

「シモン・カルティンキンは第一千四百五十二條並に第一千四百五十三條第四項により、エウフィミヤ・ポーチコワは第一千六百五十九條により、エカテリーナ・マースロワは第一千四百五十四條によつて、各々處分すべきものと本職は信じます。」

是等の求刑は、何れも豫想し得る限りの最も重いものであつた。

「法廷はこの決定を議するため暫らく休憩する。」と裁判長は起立して言つた。

皆彼に續いて起ち上つた。そして何れも一と仕事終つたといふ晴れ／＼しい愉快な心持になつて、退廷しかゝつた。中には法廷の中をあちこち歩くものもあつた。

「ねえ君、僕等は飛んだ恥曝しをしたもんですな。」と、ビョートル・ゲラシモウィチは、陪審員長から何か話しかけられてゐるネフリュードフの傍に寄つて来て、かう言つた。

「とう／＼あの女を懲役にやつてしまつたぢやありませんか。」

「何ですつて？」——この時ばかりはネフリュードフも中等教員の不愉快な馴れ／＼しさを氣にも留めず、大きな聲を出した。

「だつてさうぢやないですか」と彼は言つた。——「僕等は

あの答申中へ、『有罪は認めるが、殺意なし。』といふ但書を抜かしてしまつたのですからな。僕は今書記から聞いて来たんですか、——何でも副検事の方ではあの女を十五年の徒刑に處するつもりださうですよ。』

「さうですよ、その通りに決まつたんですよ。」と、陪審員長も言つた。

ピョートル・ゲラシモウイチは、彼女が金を取らなかつた以上、彼女に殺意の有り得ない事は自明の理だと言つて、盛んに論じ出した。

「だが、私は法廷に出る前に、一應、あの答申書を読みあげたのでした。」と陪審員長は申譯を言つた。「誰も異議を唱へなかつたのでした。」

「その時僕は丁度室にあなかつたのです。」と、ピョートル・ゲラシモウイチは言つた。「君は何うでした、ぼんやりしてゐたんですね?」

「少しも氣がつかなかつた。」と、ネフリュードフは言つた。「氣がつかなかつた?」

「然し、それは訂正が出来る。」と、ネフリュードフが言つた。

「ところが駄目ですよ、もう濟んで了つたんですから。」ネフリュードフは被告等の方を見た。彼等は、もう自分達

の運命を決められてしまつたのに、背後から憲兵に見成られたまゝ、もとの通りにじつと欄柵の中に坐つてゐた。マースロワは何を思つたか微笑してゐた。と、ネフリュードフの心はむしやくしやに掻き亂されて來た。今までは、必ず彼女が放免になつて、この町に居残ることゝ見越し、何う彼女を始末すべきかを思ひ惑うてゐたし、第一、彼女との交渉が一寸困難であつた。ところが徒刑ときまり、シベリヤ送りとなれば、それでも、何もかも縁が切れて了ふのだ。そして手負ひの鳥は死に切れずに獲物袋の中で跳きながら、我身の不運を思ひ續けるであらう。

二四

ピョートル・ゲラシモウイチの豫想は中つた。

會議室から戻つて來ると、裁判長は宣告文を取つて次のやうに朗讀した。

『千八百八十×年四月二十八日、皇帝陛下ノ勅令ヲ奉ジテ、當N——地方裁判所ハ、刑事課並ニ陪審員諸官ノ決議ニ由リ、刑事訴訟法第七百七十一條第三項、第七百七十六條第三項、及ビ第七百七十七條ニ基キテ宣告スルコト左ノ如シ。農シモン・カルティンキン三十三歳、及ビ平民エカテリーナ・マースロワ二十七歳ノ兩名ハ刑法第二十五條ニ照シテ公權

及び財産權全部ヲ剝奪シ、カルティンキンハ徒刑八年、マースロワハ徒刑四年ニ處シ、各懲役ヲ課ス。」

『平民エウフイミヤ・ポーチコワ四十三歳ハ刑法第四十九條ニ照シテ公私ノ特權全部ヲ剝奪シ、禁錮三年ニ處ス。本事件ノ裁判費ハ被告各自平等ニ分擔スベキモノトス。若シ支辨シ能ハザル時は國庫ノ負擔トス。』

『本事件ニカ、ル證據物件ハ公賣ニ附シ、指環ハ還附シ、試験管ハ破棄ス。』

カルティンキンは矢張り體をびんと伸ばし、指をばらばらに擴げた兩腕を着物の縫目なりに押しつけ、頬肉をびくびく動かしながら立つてゐた。ポーチコワは全く平氣なやうに思はれた。マースロワは判決文を聞くと、顔を眞赤にした。そして、「冤罪です、私のは冤罪です。」と、俄に法廷中に響き渡るやうな聲を立てた。「それはあんまりです、罪のない私を。あんなことは、心にもなかつたことです、思ひもしなかつたことです。本當にさうなんです。本當に……」と言つて、腰掛に崩れかゝり、大聲を揚げて泣きだした。

カルティンキンとポーチコワが退廷しても、まだ彼女はその場に殘つて泣いてゐた。それで一人の憲兵が彼女の上衣の袖を引張らねばならなかつた。

『いや、とてもこの儘にはして置けない。』と、ネフリュードフは自分の悪い氣持などは打忘れて、獨語つた。そして自分でも何の譯とは知らずに、廊下の方へ急いで行つて、もう一遍彼女の姿を見ようとしたが、扉口は、一と仕事片づけてさも満足さうな陪審員達や辯護士等がどや／＼出てゆくので、彼は數分間その扉口の處に立止まつてゐた。やがて廊下へ出て見ると、マースロワはもうずつと遠くへ行つてゐた。彼は自分のことも忘れ、たゞ急ぎ足で後を追ひ彼女を追ひ越してから立止まつた。彼女は既に泣き止んでゐたが、それでもまた時々神經的に嘔り上げながら、所々赤みがゝつた顔を頸卷の端で拭いてゐた。さうして彼のすぐ側を、見向きもしないで通り過ぎた。彼は彼女を通してしまふと、今度は裁判長に面會しようと思つて急いで後へ引返した。けれども裁判長はもう立去つた後だつたので、漸く小使部屋の中で彼に追ひついた。

「裁判長さん、」と、この時早くも白つぽい外套を着て、給仕から差出された銀の頭の附いたステッキを手に取らうとしてゐた裁判長のそばに寄りながら、ネフリュードフは口を切つた。「私は只今判決になりました事件に就いて、一寸お話したいのですが、私は陪審員の一人です。」

「さうですか、何卒々々、ネフリュードフ公爵でしたか？」

「いつかお目にかゝつたこともあります。」と、裁判長は彼の手を握つて、彼が巧みに愉快さうにダンスしたことをさも満足氣に思ひ出しながら言つた。それは彼が初めてネフリュードフに逢つた晩のことであるが、その時彼はネフリュードフのダンスを、どの青年のよりもうまいと思つた。

「何ういふ御用ですか？」

「他でもございませんが、あのマースロワに關する答申に間違ひがあつたのです。あの女は毒殺の罪は無かつたのに、徒刑の宣告を受けました。」と、暗い面持をしながら、夢中になつて言つた。

「でも法廷はあなたの方の答申に基いて判決を下したのですよ。」と、裁判長は出口の方へ歩いて行きながら逆らつた。

「尤もあの答申は裁判官に取つては事件と一致しないやうに思はれましたが。」

彼は、自分が陪審員達に説明した時、『有罪』といふことだけの答申で、殺意の否定がなければ、謀殺の意味になるといふことを注意しようと思ひながら、先を急いだ爲めこれをしなかつたことを想ひ起した。

「さうです。然しあの間違ひは修正出来ないものでせうか？」

「上訴の理由は十分ありますよ。辯護士にお話しなされた

らいでせう。」と言つて、裁判長は帽子を一寸傾げて被り、そのまゝ出口の方へ進んでゐた。

「然し、それは困ります。」

「全體、マースロワは、二つのうちの何れかに決まる筈でした。」と、裁判長は、ネフリュードフに對して出来るだけ氣持よく、出来るだけ慇懃にしたいと望むものゝ如く、外套の襟の上の頬鬚を撫で直したり、軽く彼の腕をつたりして、だん／＼出口に近づきながら話し續けた。「あなたもお歸りでせう？」

「えゝ。」と言つて、ネフリュードフは、急いで外套を引つけて、彼と共に歩いて行つた。

二人は氣を引立てるやうな明るい日向に出た。すると舗道に當る車輪の音が喧しいので、聲を張り上げて話さなければならなかつた。

「何うも妙な具合になつたものですな。」と、裁判長は聲を高めて話し續けた。「あのマースロワの場合は、殆ど放免になつて、今迄の收監日數も加算した禁錮又はほんの拘留位るところか、でなければ徒刑になるべき性質のもので、その中間の處刑は考へられません。で、若し『殺害の意志なし』といふ言葉さへ附け加へられてゐたら、あの女は當然放免になつたのです。」

「それを落したのがこちらの大失策でした。」とネフリュードフが言つた。

「要點はそこに在るのです。」と、につこり笑つて、裁判長は時計を見た。

クララが指定した約束の時間までには、僅か四十五分しか残つてゐなかつた。

「この際若し何なら、辯護士に話をして御覽なさい。上訴の理由を見出さなければなりません、そんなものは直ぐ見つかりますよ。——ドゥウォリヤンスカヤまで」と彼は辻馬車の馭者を呼んだ。「三十コペイカ。それ以上はやらないよ。」

「よろしうございます、さあ旦那。」

「では、さやうなら。何ぞ御用がありましたら、私の宅はドゥウォリヤンスカヤ街のドゥウォルニコフですから、記憶し易いです。」

そして、彼は愛想よくお辭儀をして、行つてしまつた。

二五

裁判長の話と新鮮な外氣とが幾らか、ネフリュードフを落ち着かせた。彼が今まで味はつてゐた心持は、朝から色々と思ひがけない事情の下に置かれたので、あんなに誇張さ

れてゐたのだと分つた。

「言ふまでもなく、それは實に意外な驚くべき邂逅であつた。兎に角彼女の運命を軽くするために、出来るだけのことをしなければならぬ、そして一時も早くしなければならぬ。今直ぐに。さうだ、このまゝ裁判所へ行つて、ファナーリンかミキーシンの住所を訊いて置くことゝしよう。」と、彼は有名な辯護士を二人思ひ出した。

ネフリュードフは裁判所へ取つて返すと、外套を脱いで二階へ登つて行つた。すると、とつときの廊下で丁度ファナーリンに出會つたので、引止めて、用事のあることを告げた。ファナーリンは彼の顔も名前もよく知つてゐたので、何なりと喜んでお引受けすると言つた。

「私は少し疲れてゐますが……さう手間取れませんでしたら、今御用件を承はりませう。兎に角、こちらへいらして。」

と、ファナーリンはネフリュードフを連れて、或る法官の部屋らしい一室へ入つた。二人は卓子に着いた。

「で、御用件は何ですか？」

「それよりも先づお願ひしたいのは、この事件に私の關係してゐることを内密にして貰ひたいことです。」

「如何にも御尤もです。それで……」

「私は今日陪審員として出頭したのですが、私達は誤つて一人の婦人を徒刑に處してしまつたのです。——罪もない婦人を。それが何うも氣になつてなりません。」

ネフリュードフは我ながら思ひがけなく顔を赤らめて、どぎまぎした。

フナーリンはちらとその容子に眼を配つたが、直ぐ又俯向いて耳を傾けた。

「如何にも。」と彼は僅かにこれだけ言つた。

「無罪なものを處刑してしまつたのですから、私は、判決を覆へして、更に、上級の裁判に上訴したいと思ふのです。」

「元老院へですな。」

「えゝ。それで一つこの事件をあなたにお引き受けて戴きたいのです。」

ネフリュードフは一番厄介な問題を手早く片づけて了はうと思つて、直ぐその場で言つた。

「この事件に關する謝禮や費用は、幾らかゝつても皆私が支辨します。」と、顔を赤くしながら彼は言つた。

「では、さういふ約束でお引受け致します。」と、辯護士はネフリュードフの無經驗なのを見ると、懇懇に微笑を浮べながら言つた。

「一體どんな事件なんです？」

ネフリュードフは「伍」一什を話して聞かせた。

「宜しうございます。早速明日から取調べに着手させよう。そして明後日、いや木曜日の晩の六時頃私の宅まで来ていただきましたら御返事が出来ます。如何ですか御都合は？ではこれでお別れいたしませう。私はまだ數件取調べ物がありますから。」

ネフリュードフは彼に暇を告げて出た。

辯護士と會つて、マースロワの辯護を頼んだといふことが、一層彼を落ち着かせた。町へ出ると、うらゝかな天氣であつたので、いゝ氣持ちになつて春の空氣を吸ひ込んだ。辻馬車の馭者達がうるさく乗車を勧めたが、構はずてくゞ歩いて行つた。すると、カテューシヤのこと、彼と彼女にからまるいろんな考や思ひ出が、ごつちやになつて彼の頭の中で渦巻きはじめた。彼は哀愁に閉されて、急に何も彼も憂鬱に思はれた。「いけないく。こんなことは後で考へるとして、」と彼は獨語つた。——「今はこの重苦しい印象から遁れなければならぬ。」

彼はコルチャーギン家の晚餐會を思ひ出して時計を見た。まだ遅くはなかつた。晚餐に間に合はない事もなかつた。傍をチン／＼チン／＼と鐵道馬車が通りかゝつた。彼は走

り出してうまく跳び乗り、廣場まで行くと降りて綺麗な馬車を雇つた。十分の後にはもうコルチャーギン家の宏大な邸の玄關に着いた。

二六

「ようこそ、御前様。皆様がお待ちしていらつしやいます。」と、コルチャーギン邸のお愛想の好い、でつぶりした玄關番が、英國製の蝶番てふががの附いた、音のしない檜の木扉を開きながら言つた。——「唯今、御食事中でございますが、御前様だけは、お通し申すやう言ひつけられて居ります。」

玄關番は階段に近寄つて、二階へのベルを押した。

「誰か來てゐますか？」と、外套を脱ぎながら、ネフリュードフが訊いた。

「はい、コロソフさんとミハイル・セルゲーエウイチさんだけで、あとは御當家の方々でございます。」と玄關番が答へた。

階段からは燕尾服に白手袋を穿めた美男の家僕がこちらを覗いてゐた。

「ようこそ御前様。」と彼は言つた——「どうぞお上り下さいまし。」

ネフリュードフは階段を上り、お馴染の華麗な廣々した客間を通つて食堂へ入つた。見ると、自分の部屋から決して出たことのない侯爵夫人ソフィヤ・ワシリーエウナを除いた外は、一家族揃つて食卓に着いてゐた。食卓の上座には、コルチャーギン老人、その並びの左側には醫者、右側にはコルチャーギン老人の自由主義時代の友達で、以前は地方の貴族長、今は銀行の重役をしてゐるイワン・イワーノウイチ・コロソフといふお客がゐた。それよりなほ左側には、ミッシーの妹の、今年四歳になる女の兒とその保姆のレーデル嬢とがゐた。對ひ側の右手には、ミッシーの弟で、コルチャーギン家の一人息子の中學六年生であるペーチャがゐた。

この子の試験のために一家の者がかうして町に來てゐるのであつた。その次に家庭教師の大學生が坐つてゐた。左には、スラヴ主義者で今四十歳になる獨身婦人カテリーナ・アレクセーエウナ、その向ひがミッシーの従兄弟で、ミーシヤと呼ばれてゐるミハイル・セルゲーエウイチ・テレーギンであつた。そして食卓の末座にはミッシー自身が控へ、彼女の隣席は空けてあつた。

「おへ、こりや丁度好い所だつた。さアお掛けなさい。やつと今お魚にかゝつたばかりです。」と、コルチャーギン老人は臉のはつきりしない充血した眼をあげてネフリュード

フを眺め、義齒で念入りにやつと魚を噛みながらかう言つた。——「ステパン！」と、老公爵は口一杯頬張りながら、肥満した勿體振つた食堂掛の方へ向き、空いてゐる席を眼で指示した。ネフリュードフはコルチャーギン公爵をよく知つてゐた。また何回となく食事の席で見えてゐた。が、今日は何ういふものか、そのチョッキに扱まれたナブキンの上で卑しげにむしや／＼食べてゐる赭ら顔や、太つた頸筋や、またそれよりも全然將軍タイプに鍛へ上げられてゐる風采やが、特に不愉快な氣持を起させた。ネフリュードフは、この人が曾て地方長官の職にあつた時、何の理由もなしに——それは彼が貴族で金持で別に他人の歡心を買ふ必要がなかつたからだ——人民を管刑に處し、絞刑にさへ處したこともあつたといふその殘忍性に就いて、ふと思ひ起したのであつた。

「はい、只今。」と、ステパンは多くの銀の器で飾り立てられた戸棚の中から大形の匙を取り出しながら言つた。そして頬鬚の生えてゐる美男の家僕へ頷で合圖をすると、その男は直ちにミツシーの隣の席のところへ行き、手のつけてない食器を並べはじめた。その食器の上には糊のよくついた、紋章の浮織になつてゐるナブキンが巧みに疊んで被せてあつた。

ネフリュードフは食卓の周圍を廻つて皆の者に握手した。コルチャーギン老人と婦人達の外は皆、彼が近寄つて行くとき起ち上つた。かうして食卓を廻り歩くことや、これまで言葉を交したことの無い多くの人達と一々握手することが、今日は何だか莫迦々々しく思はれた。彼が遅刻したことを謝して卓子の端のミツシーとカテリーナ・アレクセーエウナとの間の空いてゐる席へ腰をかけようとする、コルチャーギン老人は、若しウォッカを飲らないのなら、せめて側の食卓へ行つて、ザクースカ（食前にウォッカと一緒に食べる料理、前菜のやうなもの）でも食べるやうに勧めた。その食卓の上には魚卵、海老、乾酪、鯨などが準備されてあつた。ネフリュードフはそれほど空腹だとも思はなかつたが、パンに乾酪をつけて口にしたらもう堪らなかつたので、貪るやうに食つた。

「如何でした、根柢から顛覆したでせう？」と、コロソフは陪審制を攻撃する保守主義新聞の口吻を借りて皮肉にかう言つた。——「大方有罪の者を放免し、無罪の者を處分したのでせうね？」

「根柢から顛覆か……根柢から顛覆か……」と、老公爵は、自分の自由主義の同僚であり親友であるコロソフの頭腦と博識には無限の信用を置いてゐたので、ほくそ笑みながらかう繰返した。

失禮だとは思つたが、ネフリュードフはコロソフの言葉には何にも答へず、折から出された湯氣の立ち上るスープに取附着いて、それを齧つてゐた。

「まあこの人には食べさせておきなさいよ。」と、ミッシーは、『この人』といふ代名詞一つで自分とネフリュードフとの昵懇さを思はせぶりに示しながら、につこりして言つた。コロソフはその間、自分の憤慨をそつた陪審制反對論の内容を元氣よく大聲に語つてゐた。これに相槌を打つたのがミハイル・セルゲーエウイチといふ甥で、彼も亦同じ新聞のもう一つの論文の内容を説いた。

ミッシーは相變らず、なか／＼派手にまた美しく——と言つても人目に立たぬやうに着飾つてゐた。

「さぞお疲れで、お腹がおすきになりましたでせう。」と、ネフリュードフが口の中のもの呑み込んでしまふのを待つて、彼女は言つた。

「いえ、さ程でもありません。あなたは何うでした？ 展覽會へ行きましたか？」と彼は訊いて見た。

「いえ、あれは延ばしました。そしてサラマートフさん處でテニスをしてましたの。あのクルルクスさんつて方は本當にお上手ですね。」

ネフリュードフは氣晴らしに此處へ來たのであつた。本當

にこの家へ來ると何時でも心持がよかつた。それは萬事があでやかで、彼の感じに心地よく働らきかけるからばかりでなく、彼をそつと取巻く媚びるやうな愛撫の雰圍氣のせみでもあつた。ところが、今日は不思議にもこの家の中にあるすべてのものが、彼に厭はしかつた——支關番、廣い階段、花、家僕達、食卓の飾付を始め、ミッシー自身に至るまで、今日は何だか空々しく、不自然なやうな氣がした。コロソフのいやに氣取つた、愚にもつかない、自由主義的な調子も不愉快だつた。コルチャーギン老人の牛みたいな下卑た恰好、スラヴ主義者カテリーナ・アレクセーエウナのフランス語、保姆や家庭教師の窮屈さうな顔付など、何もかも不愉快だつた。が、特に不愉快で堪らなかつたのは、彼を指して『この人』と言つたその代名詞であつた……。ネフリュードフはミッシーに對しては何時も二つの態度の間を往來してゐた。或時は眼をすぼめて、さもなくば月光の下で見るやうに、彼女のうちに美しいものばかり見た。さうするとき彼女はすつきりした、美しい賢い純な女に思はれた……。さうかと思ふと、或時は急に煌々と輝く日光の下に晒し出されたやうに、彼女の疵ばかりが眼に映つた——いや映らない譯に行かなかつた。今日は丁度その疵ばかり見える日であつた。彼は彼女の顔にある凡ての小皺を見た。

また髪の毛の亂れてるのや、脇の尖つてるのを見た。わけでも、彼女の父の爪を思ひ出させる拵指ののだゞつ廣い爪を見た。

「一問の抜けた遊戯ですよ。」と、コロソフはテニスのことを言つてゐた。「あんなものよりか、吾々の子供の時代にやつたラプタ(一種の打球)の方が餘程面白いです。」

「いゝえ、あなたはおやりにならないから解らないのです。それはとても面白いものですよ。」ミッシーはかう言つて反對したが、ネフリュードフの感じたところでは、彼女は『とても』といふ一語を莫迦に不自然に發音した。

そこで議論が始まつた。ミハイル・セルゲーウイチも、カテリーナ・アレクセーエウナも之に加はつた。たゞ保母と家庭教師と子供達だけは如何にも詰らなさうに黙つてゐた。

「議論してたら眼が無い！」と、高笑ひして、コルチャーギン老人はチョッキからナブキンを取りながら言つた。そして、椅子をかたつかせながら（家僕は直ぐその椅子を押へた）座を立つた。彼に次いで他の人達も起ち上り、それから別の卓子に行つた。卓子の上には指洗ひ鉢が置いてあつて、一々微温い香のよい水が注いであつた。彼等はそれで口を嗽くと、また面白くもない會話を續けた。

「ねえ、あなた、さうは思はなくつて？」と、ミッシーはネフリュードフに向つて、遊戯ほど人々の性格の表はれるものはないといふ自分の説に賛成して貰はうとした。が、氣がついて見ると、彼の顔には、彼女の怖れてゐる生眞面目な詰るやうな表情が出てゐたので、どうした譯か、それが知りたくなつた。

「僕には九つきり解りません。まださういふことを考へたことがないのですから。」と、ネフリュードフは答へた。

「お母様の處へいらつしやる？」とミッシーが訊いた。

「えゝ。」と言つたが、如何にも行きたくないやうな調子で巻返をとらだした。

彼女は無言のまま、探るやうに彼を見詰めてゐた。で、彼も極りが悪くなつた。「これでは全く人の家へ来て、たゞ不快を興へるばかりだ。」と考へた。それで愛想よくしようと思つながら、公爵夫人さへよければ、喜んで行くといふ意味のことを言つた。

「えゝ、お母様は屹度喜びますわ。あちらでお煙草を召し上つたつて構ひませんわ。イワン・イワーノウィチさんも行つてますよ。」

この家の主婦、公爵夫人ソフィヤ・ワシーリエウナは寢床に就きつきりの病人であつた。彼女がかうしてリースヤリ

ボンヤ、天鷲絨や鍍金物や、象牙細工や、青銅や、漆器や草花に取り圍まれたまゝ、お客があつても起き上がりず、横になつてゐるのは、彼れこれもう八年目であつた。彼女は何處へも出かけないで、たゞ彼女の所謂「自分のお友達」だけを引見してゐた、つまり彼女の考へから言つて、何等かの點で平民共から卓越してゐる人達だけに接してゐたのである。ネフリュードフはさうしたお友達の一入であつた。といふのは一つには、彼が惻巧な青年だと思はれてゐたからで、もう一つには彼の母親がこの家庭と毗睨の間柄であつたから、更にもう一つには、ミッシーと彼と結婚するやうになれば結構だと思つてゐたからである。

公爵夫人ソフイヤ・ワシリーエウナの居室は、大小二間續きの客間を通り越してその奥にあつた。ネフリュードフを案内して来たミッシーは、その大きな客間に入ると、突然決心したやうに立止まり、小さな金塗りの椅子の背當に手をかけて、屹と彼を見た。

ミッシーは甚く結婚を急いでゐた。彼女にとつてネフリュードフは丁度よい配偶であつたばかりでなく、彼女は彼を好いてゐた。そして近いうちに彼は自分のものになるとばかり思ひ込んでゐた、——彼女が彼のものになるのではなく、彼が彼女のものになるといふのであるが、彼女はこ

目的を達せんため、まるで精神病者に見受けるやうな無意識的な、然し執拗な手管を弄するのであつた。今度こそ彼女は、何うあつても彼に本首を吹かせようとして口を切つた。

「お見かけたところ、あなたには何事かお起りになつたらしいのね。」と彼女は言つた。「一體どんなことなの？」
彼は裁判所に於ける出来事を思ひ出して、顔を顰めて赤くなつた。

「えゝ、起りました。」と、彼は何處までも正直な人間でありたいと思ひながら言つた。——「それも不思議な、驚くべき重大事件なのです。」

「まあどんな事ですか。お話下さる譯には参りませんか？」
「今は出来ません。何うか訊かないで下さい。そのことに就いては私もまだよく熟考してゐませんから。」と言つて彼は益々赤くなつた。

「では、あなたは私にも話して下さいさらないのですわね。」彼女の顔面の筋肉がびく／＼と動いた。と同時にそのつかまつてゐた椅子が一寸迂つた。

「えゝ、話せません。」と言つたが、それは彼女に答へると共に自分にも答へてゐるのだと思つた。そして實際重大事件の起つたことを承認した。

「ではよございますわ。さあ参りませう。」
彼女は下らぬ考を拂ひ退けるかのやうに頭をふつて、いつもより足早に歩き出した。

彼女は口を不自然に引き結んでゐたが、それは涙をこらへるためだらうと、彼には思はれた。彼女の氣を損ねたことが、恥づかしくもあり、また痛々しくもあつたが、然し、彼としては、ふとした氣弱さが彼の身を破滅させることになるといふこと、つまり彼女と一生結びつかねばならぬといふことを危ぶんでゐた。今日の彼は何よりこのことばかり怖れてゐた。それで彼は默然として彼女と共に公爵夫人の部屋に行つた。

二七

公爵夫人ソフィヤ・ワシーリエウナは今甚だ贅澤な、遊養に富んだ食事を終へたところであつたが、彼女はその殺風景な食べ方を人に見られるのがいやで、何時も一人で食べてゐた。寢椅子の傍には珈琲の載つてゐる小さな卓があつて、彼女はバヒトスカといふ紙巻煙を喫つてゐた。ソフィヤ・ワシーリエウナは黒い髪の毛と長い齒と大きな黒い眼とをもつた、ひよろ長い瘦せた婦人で、まだ若がつゐた。

彼女と醫者との關係に就いてはよくない噂があつた。ネ

フリュードフはこれまでそんなことは忘れ勝ちであつたけれど、今日はそれを想ひ起したばかりではない、鬚鬚に油をてか／＼つけて、それを眞中から分けてゐる醫者が、彼女の寢椅子の傍にゐるのを目のあたり見て、ひどく厭な感じがした。

ソフィヤ・ワシーリエウナの並びに、低い柔らかな安樂椅子に腰掛けて、卓子の上の珈琲を攪き廻してゐたのはコロソフであつた。卓子の上にはリキニール酒のコップが載せてあつた。

ミッシェはネフリュードフと連れ立つて母の許へ來たが、自分はその間に留まらなかつた。

「お母様がお疲れになつて、あなたを逐ひ立てたら、私の處へいらつしやいね。」と、彼女は二人の間に何事もなかつたやうな調子でネフリュードフに言ふと、嬉しさうににっこりして、そのまま厚い絨毯に足音も立てず室内から出て行つた。

「御機嫌よう。さあお掛けなすつてお話し下さい。」と、ソフィヤ・ワシーリエウナは、例の巧みな、心にもない、しかし少しも無理のない作り笑ひをして、そしてまるで本物ではないかと思はれる位の素敵によく出來てゐる美しい長い入齒を露はしながら、かう言つた。「あなたは裁判所から大

層かさ疊かさぎ込んでいらしたさうぢやありませんか。情深たかひい人には苦くるしくて耐たりませんわね。」と、彼女はフランス語で言つた。

「え、それはまつたくです。」とネフリユードフは言つた。「往往自分の非……を感じさせられます。人は人を裁さく權利のないことを感じさせられますよ。」

「まつたくですわね。」と、夫人は此の言葉の眞實性に打たれたものゝ如く感歎しながら、例の通り自分の話相手にお世辭を云ふのであつた。

「それはさうと、あなた、繪の方は如何いかですか。繪には私も随分趣味をもつてゐますよ。」と彼女は附つけ足たした。「こんな不自由な身でなかつたら、わたし疾はやうに拜見はいけんに上つてゐたのですが。」

「僕、繪の方はすつかり見切りをつきました。」今日は何うしたわけか、彼女の押隠おしかくしてゐる老妾らうせつと同様、彼女の空々しいお世辭が、手にとるやうに見えすいてゐたので、ぶつきら棒ぼうにかう答へた。彼は何うしても、お愛相あいさうのよい人間になるべく氣分を取り直すことが出来なかつた。

「まあ惜しいことね。私、レーピン(ロシヤ近代の有名な畫家)さんから聞いたのですけれど、この方には、本當の天才がおありなさるさうですよ。」と、彼女はコロソフの方を向いて言つ

た。
「よくもあんな嘘うそを吐ついて恥はづかしくないものだ。」と思つて、顔を顰しめた。

ネフリユードフがひどく不機嫌で、どんなに調子よく、手際よく話しかけても、とてもそれに誘よひ込むことが出来ないと觀念すると、今度はソフィヤ・ワシーリエウナはコロソフの方へ向いて、新しいドラマのことで彼の意見を訊ねた。その調子は、まるでコロソフの意見が、一切の疑問を解決し、その一言一句が、永久的の價值を持つにきまつてゐるとでも言つた風であつた。コロソフはいゝ氣になつて、ドラマをこき下くだし、それを機會に自分の藝術論まで擔かぎ出した。公爵夫人ソフィヤ・ワシーリエウナは、先づ彼の議論の確實性に打たれ、次に一寸ドラマ作家の辯護をして見たが、直ぐ兜かぶとを脱ぬいだり、或は折衷説を見出したりしてゐた。ネフリユードフは見たり聞いたりしてゐたが、その眼に映り、耳に響いたものは、眼前のそれとは全然別なものであつた。ソフィヤ・ワシーリエウナの言ふ事や、コロソフの話す所を聞きながら、ネフリユードフの第一に氣づいたことは、ソフィヤ・ワシーリエウナにしても、コロソフにしても、ドラマの事なんかは何うでもよい、それを互に何うのからといふ必要もない、彼等の話はたゞ食後に舌や咽喉げんごの筋肉を

運動させたい生理的要求を充たす外の何物でもないといふことであつた。第二に彼が見て取つたのは、コロソフがウィツカヤ、葡萄酒や、リキエール酒を飲んで少し酔つてゐたことである。それも、たまに飲む百姓の酔拂つたやうな酔ひ方ではなく、始終飲みつけてゐる上戸のほろ酔ひ機嫌であつた。彼は別によるめくでもなし、管を巻くでもなく、たゞ病的な興奮した得意な状態にあつた。第三にネフリエードフの眼に映つたのは、公爵夫人ソフィヤ・ワシリエウナが會話の途中厩々不安さうに窓の方へ眼を配ることであつた。それもその筈、彼女の老衰を煌々と照らし出しさうな日光が、窓を透して、斜めに彼女へ中りかゝつてゐたから。

「それはさうでせうとも。」と、コロソフの或る言葉に調子を合せて、彼女は寝椅子の傍にある壁の上の電鈴の鈕釦を押した。

この時醫者は起ち上つて、家族の者と同じやうに、何も言はず、室の中から出て行つた。ソフィヤ・ワシリエウナは話を續けながら、彼を見送つた。

「フィリップや、そのカーテンを降しておくれ。」と言ひながら、呼鈴の音に應じて入つて來た美男の家僕に、窓のカーテンを眼付で知らせた。

「いゝえ、あなたが何と仰しやらうとも、あの作家には神秘的なところがあります。また神秘的なところが無かつたら詩とは言はれないでせう。」と、彼女は、カーテンを降してゐる家僕の舉動を、黒い片方の眼で腹立たしげに見ながら言つた。

「詩のない神秘主義は迷信で、神秘主義のない詩は散文です。」と言つて、彼女はカーテンを直してゐる家僕からまだ眼を離さずに、寂しげに微笑した。

「フィリップや、そのカーテンではありません、大きい窓の方だよ。」ソフィヤ・ワシリエウナは、こんな言葉を發するために、拂はねばならぬ自分の心遣ひを惜むものゝ如くかう言つたが、直ぐにまた氣を落ちつけるために、幾つも指環を嵌めた手で、香の好い煙を出してゐるバヒトスカを口許へ持つて行つた。

胸幅の廣い、筋骨の逞しい、美男のフィリップは詫びるやうに軽くお辭儀をして、裸の凸出してゐる頑丈な足でそつと絨毯を踏みながら、おとなしく黙つて他の窓の方へ行き、念入りに公爵夫人を窺ひながら、一寸の光線も彼女に當り得ないやうにカーテンを直しかけた。然しそれでもまだ思ふ通りでなかつたので、弱り果てたソフィヤ・ワシリエウナは神秘主義に關する自分の説を中絶して、氣のきかない、

人に氣骨ばかり折らせるフィリップを叱らなければならなかつた。その瞬間フィリップの眼から火が出た。

『畜生、いまくしい、何うすればいいんだ。——』とこの男は多分心の中で言つたに違ひない。』と、ネフリエドフはこの有様を眺めながら考へた。けれど頑強な美男のフィリップは直ちに痾瘻の表情を押し隠して、衰弱した力の無い嘘つきの公爵夫人ソフィヤ・ワシリエウナの命する通りにおとなしく仕事を始めた。

『勿論ダーウィンの説には多分の眞理があります。』と、コロソフは低い安樂椅子に埋まつたまゝ、どろんとした眼付で公爵夫人ソフィヤ・ワシリエウナを眺めながら、語つてゐた。『けれど彼は脱線してゐます。さうですよ。』

『時にあなたは遺傳説を信じていらつしやいますか?』と、公爵夫人ソフィヤ・ワシリエウナは、ネフリエドフの黙つてゐるのを氣にかけて、彼に訊ねた。

『遺傳説?』とネフリエドフは問ひ返してから、『いえ、信じません。』と、此の時の譯もなしに自分の想像裡に浮んでゐた奇怪な幻象に囚はれたまゝで言つた。彼は頑強な美男のフィリップをモデルに見立て、それと並べて、西瓜のやうな腹をした禿頭の、鞭のやうに瘦せた腕をもつたコロソフを裸體姿にして想像してゐたのである。それからまた

絹や天鵞絨で今は覆はれてゐるソフィヤ・ワシリエウナの肩を、ありのままに露き出したら何うであらうかと、ぼんやり考へて見たが、それは餘りにも無氣味なので、一生懸命この考へを追ひのけようとしてゐたのであつた。

ソフィヤ・ワシリエウナはまじく彼を見てゐたが、『それはさうと、ミッシェーがあなたを待つてゐるでせうよ。』と言つた。『行つてやつて下さいな、何でもグリークの新曲をお聞きに入りたいと言つてましたから……。随分面白いものですよ。』

『あの女が何を弾きたがつてゐるものか。何うしてからも嘘ばかり吐く女なのだらう。』と思ひながら、ネフリエドフは起ち上つて、透き通るやうな、骨ばつた、指環だらけのソフィヤ・ワシリエウナの手を握つた。

客間で彼はエカテリーナ・アレクセーエウナに迎へられ、直ぐ話しかけられた。

『お見受け申すところ、陪審官のお勤めにひどく當てられていらつしやるやうですわね。』と、彼女は例によつてフランス語で云つた。

『えゝさうです。失禮ですが、今日は氣分が勝れませんので、皆様に御心配をかけるのを面目なく思つてゐます。』とネフリエドフは答へた。

「まア、何うして御氣分がお悪いのですか？」

「そればかりは訊かないで置いて下さい。」と言つて、自分の帽子を探してゐた。

「だつて、いつかあなたは、何でも本當のことを言ふものだと言つたではありませんか。そしてあの時、私共に随分ひどい打明け話をして下さつたではありませんか。今日に限つて、何故何も仰しやいませんの？ ねえ、ミッシーさん、覺えてらつしやるでせう？」と丁度其處へ出て來たミッシーに向つて言つた。

「あれは遊戯の時でしたからねえ。」と、ネフリュードフは眞面目くさつて答へた。「遊戯の時は何でも言へますよ。だけれど現實に直面すると、僕等だから駄目になるのです。いや僕等はではありません、僕はです。少なくとも僕はそれがために本當のことが言へないのです。」

「まア、言ひ譯なんかおよし遊ばせ。それよりか、何うして私達はそんなに駄目な人間になるのでせうか、伺ひたいですわ。」と、エカテリーナ・アレクセーエウナは、まるでネフリュードフの眞面目さなどは氣にもとめないらしく巫山戯たやうに言つた。

「氣分が悪いなんて自白するくらゐ悪いことはありませんわ。」とミッシーが口を開いた。「私なんか決してそんなこと

を自白しなくつてよ。ですから何時でも機嫌よくかうしてゐられるのよ。——さア私の部屋へ參りませう。あなたのふさぎの蟲を追つ拂つて上げますから。」

ネフリュードフは、まるで馬が轡をはめられ、馬具を背負はざれようとして撫でられる時に感じなければならぬやうな氣持を味つたが、特に今日はいつともより荷を挽くのが不愉快であつた。彼は家へ歸らねばならぬ失禮を謝して、別れることにした。ミッシーは何時にもなく長いこと彼の手を抑へてゐた。

「あなたに取つて大事なことは、あなたの親友に取つても大事なんですからね、それをお忘れないように。」と彼女は言つた。「では、また明日いらつしやる？」

「さア、上れないかも知れません。」とネフリュードフは言つた。そして、自分に對してか、それともミッシーに對してか、どちらとも解らないけれど何だか恥づかしくなつて、顔を赤らめた。そして急いで戸外へ出た。

「まア何うしたのでせう？ 何だか氣懸りですわね。」と、ネフリュードフが立去つた時、エカテリーナ・アレクセーエウナが言つた。「私、きつと突きとめてあげますわ。ひよつとしたらこれは何か色っぽい事かも知れませんが、あの方は物に動かされ易いお坊ちやまでですからねえ。」

『色つばい事なんかよりもつと厭らしいことよ。』と言はうと思つたが、ミッシーは口に出さなかつた。そしてネフリュードフを見てゐた時とは、打つて變つたくすんだ顔付になつて、眼の前を見てゐた。彼女はこの下品な皮肉をカテリーナ・アレクセーエヴナにすらも口外しないで、たゞ「誰だつて調子のよい日もあれば、悪い日もあるものよ。」と吐いた。

『あの方までが矢張り欺すのかしら。』と彼女は思つた。『かうまでなつてしまつた後で、もしかさうだつたら、随分あの方も人が悪いわ。』

『かうまでなつてしまつた後で』といふ言葉の裏に彼女は何を言ひ含めたのか、それを説明しろと言はれたら、恐らく彼女も何等はつきりした事は言ひ得ないであらう。けれど、彼が彼女に氣をもたせたばかりでなく、殆んど約束をしないばかりのところまで來てゐることを、彼女はよく知つてゐた。それはすべて、はつきりした言葉ではなく、眼付とか、微笑とか、暗示とか、思はせぶりとかであつたが、それにしても彼女の方では既に彼を自分のものにきめ込んでゐたので、今となつて彼を失ふのは随分辛い事であつた。

二八

『あゝ恥づかしい、穢らはしい。何とも穢らはしい恥づかしいことだ。』と、一方、ネフリュードフは歩き慣れた街路をわが家へ歸る途すがら考へ續けた。ミッシーとの會話によつて得た重苦しい感じはなかく、彼の頭から離れなかつた。彼は形式的には——若しさういふことが言ひ得られるなら——彼女に對して何等疚しいところはなかつた。自分と彼女とを結びつけるやうな言葉を發した覺えもないし、彼女に結婚の申込みをしたこともないのであつた。けれども實際心の中では、彼女と一緒にならうと思ひ、もう彼女に約束をしてやつたやうに思はれた。ところが今日といふ今日は、何うしたつて彼女と結婚することは出来ない、全身に感じたのである。『あゝ恥づかしい、穢らはしいことだ。何とも穢らはしい恥づかしいことだ。』と、彼はミッシーとの關係ばかりでなく、一切のことに就いて、さう繰返してゐた。『あゝ何も彼も穢らはしい、恥づかしい!』と、彼はわが家の支關先へ登りながら、また獨り繰返した。

『晩飯は要らないよ。』彼の後から食堂へ入つて來たコルネイにかう言つた。食堂には、晚餐と茶の支度が整つてゐた。『——あちらに行つておいで。』

『はい。』とコルネイは言つたが、別に立去る様子もなく、卓上のものを片づけ初めた。ネフリュードフはコルネイを見

てみると、何だか忌々しくなつた。彼は昔の者から離れて一人静かにしてゐたかつたが、何故だか昔の者が慈とつらあてに自分に迫つて来るやうに思はれた。やがてコルネイが片づけ終つて立去つた時、ネフリュードフは茶を入れようとして、サモワルのそばへ寄つて行つた。ところがその時アグラフニナ・ペトロウナの足音を耳にしたので、急いで彼女に逢はぬやうにと客間へ出て、背後の扉を締めた。この室——客間——は、三ヶ月以前に彼の母が死んだ處であつた。反射鏡のついた二個のランプが照つて、一つは彼の父の肖像の處、もう一つは母の肖像の處に在つた。今此處へ来て見て、彼は母と自分との最後の係り合ひを思ひ浮べた。そして、その係り合ひはなんだか眞實を缺いた厭はしいものに思はれた。これも亦恥づべき穢らはしいことであつた。母が危篤に陥つた時、彼は只管母の死を願つたことを思ひ出した。それは母を早く苦痛から免れしめたいといふ心からであつたと、彼は自分に言つて見た。が、その實、彼は自分が母の苦痛を見るのを早く免れたいからであつた。

彼は母に關するよい思ひ出を喚び起さうとして、有名な畫伯が五千ルーブリで畫き上げた母の肖像をながめた。母は黒天鵝絨の着物を着て、胸を露はしてゐた。その乳や、

乳と乳との間の凹みや、艶やかな美しい肩や首などは、特に念を入れて畫伯が畫いたものであることは明かであつた。が、これも全く恥づべき穢らはしいものであつた。この半裸體美人の姿をした母の肖像畫には、何だか厭はしい胃潰的な或るものが藏されてゐた。況して三ヶ月前にこの同じ部屋に、この同じ母が木乃伊のやうに乾枯らびて、何うにも消すことの出来ないほど堪らない臭氣を、この部屋ばかりかこの家全體にまで漂はしてゐたことを思ふと、益益厭な氣持になつた。彼は今も尙ほその臭氣を嗅いでるやうな氣がした。と、彼は、あの死ぬる前の日に母が骨ばつた黒ずんだ小さな手で、彼の強い白い手を取り、彼の眼をじつと見詰めながら、『ミーテヤ、私の行届かなかつたことを、悪く思はないでお呉れ。』と言つて、病苦に萎びた雙眼からぼろ／＼と涙を零したことを想ひ出した。『あゝ穢らはしい！』と、半裸體婦人が麗しい大理石のやうな肩と腕とを露はし、誇りかな微笑を湛へてゐる肖像を見上げて、彼はもう一度獨語した。肖像畫のあらはな胸は、この間彼の見たもう一人の若い女の半裸體姿を思ひ出させた。その女といふのはミッシェで、彼女が自分の舞踏會へ着て行く舞踏服姿を彼に見せるため、一つの口實を考へ出して、彼を夕方招き寄せたのであつた。彼女の玉のやうな肩や腕

を思ひ出すと、彼は胸が悪くなつた。また野鄙な獸的な彼の父にしても、あゝいふ過去と、あゝいふ残忍性をもちつてゐるし、母も母で如何はしい噂の種子を蒔いた *jealousie* (精神が美しいの意、) のことを思ふと一切が厭はしく、亦恥づかしかつた。『あゝ恥かしい、穢らはしい。何とも穢らはしい、恥づかしいことだ。』

『いや〜』と彼は思つた。『僕は自由にならねばならぬ。コルチャーギン家とも、マリヤ・ワシリーエウナ(例の貴族)とも、また遺産の件とも、その他一切の虚偽な關係から自由にならねばならぬ。……そして自由な空気を吸はう。外國へ——ローマへ行かう、繪の修業に出掛けよう』……。ここで彼はまた自分の天分に就いてもつてゐる疑惑を想ひ起した。『なあに、そんなことは何うでもよい。たゞもう自由な空気を吸ひさへすればよいのだ。先づコンスタンチノーポリへ行き、それからローマへ行かう。だが、一刻も早く裁判の一件を片づけねばならぬ。それにはあの事件を辯護士と相談しなければならぬ。』

と思ふと、俄かに彼の想像の中へ、黒い斜視の眼をもつた女囚の姿が、いつになくまぎ／＼と浮び上つた。被告としての最後の言渡しを受けた時の彼女の泣き聲！ 彼はあわて、喫ひきつた巻煙草を灰皿の中で揉み消した。そし

て次の一つに火をつけ、部屋の中を往きつ戻りつし始めた。すると、彼女と一緒に味はつたあの時の光景が次から次と彼の想像に浮んで来た。彼女との最後の邂逅、その時彼を捉へた獸慾、それを満足させた後の幻滅などを想ひ起した。それから空色のリボンをつけた白衣の妻や早課の祈りを想ひ起した。『僕はこの女を戀してゐたのだ、あの夜は本當に美しい純な愛で戀してゐたのだ。いや、それよりも前、僕が初めて叔母達の家へ行つて論文を書いてゐた當時、既に戀してゐたのだ！』そこで彼はあの頃の自分を思ひ浮べた。生の鮮やかさ、若々しさ、充實さが匂うて来た。すると堪らなく胸が迫つて来た。

あの當時の彼と、今の彼との間には甚しい相違があつた。それは、會堂に於けるカテューシャと、商人を相手に酒を飲んで今朝裁判を受けた淫賣婦との差異以上ではなかつたにしても、先づそれと同等のものであつた。あの時の彼は前途に無限の希望が展げられてゐる、元氣な自由な人間であつた。——が、今の彼は愚かしい空虚な埒もない下らない生活の羅網に四方八方から捕はれて、而も何等解放の道を見出さない、いや、寧ろ見出さうとも思はない男であつた。以前の彼は自分の直情を誇り、常に眞實を口にするのを信条とせる、實際生一本の男であつたことを思ひ浮べた。然

るに今の彼はまるで虚偽づくめであつた、最も怖ろしい虚偽づくめであつた。彼を取巻く周囲の人々にはそれが却つて眞實と認められる虚偽に身を没してゐた。しかもこの虚偽から逃れ出づべき路とは無かつた——少なくとも彼にはそれが見えなかつた。そして彼は此の虚偽に耽り、これに慣れ、これに溺れてゐた。

マリヤ・ワシリーエウナと手を切り、又その夫とも話をつけて、そして少しも憚るところなく彼やその子供達と顔を合せられるやうにするには何うすればよいのか。偽りなしにミッシェーから身を引離すには何うすればよいのか。土地の私有を不正とする信念と、母から相續した所有地との間に横たはる矛盾から遁れ出るには何うすればよいのか。そしてカテューシャに對して犯した自分の罪を消すには何うすればよいのか。こればかりは放擲して置く譯には行かなかつた。『自分の戀してゐた女を棄て去ることは出来ない。辯護士に金をやつて、受くべき筈もない徒刑から彼女を救ひ出すといふこと位では満足出来ない。あの當時彼女に金をつかませて、自分のなすべき事はなし終つたと思つてゐたやうに、また金で罪が償ひ得らるゝものか！』

すると、彼はあの廊下で彼女に追ひ縋り、彼女に金をつかませて逃げ去つた時のことを、またあり／＼と想ひ起し

た。『あゝ、その金！』と思ふと、彼はあの時と同様の怖ろしさ厭はしさを覚え、あの瞬間をはつきりと想ひ起した。

『あゝ、あゝ、何といふ穢はらしいことだ！』彼は、あの時と同様に聲を出してかう云つた。『こんなことを爲し得る者は恥知らずの惡漢に限る！ 自分も、自分も——その惡漢なのだ、恥知らずなのだ！』と、彼は聲高く叫んだ。『だが本當に（と彼は歩くのを止めて立ちどまつた）、本當に僕は惡漢だらうか？ 惡漢でなくて何だ？』と、彼は自分に答へた。『而もたゞその事ばかりではあるまい？』と、彼は自分を責め續けた。——『マリヤ・ワシリーエウナやその夫との關係も何と云ふ穢らはしき、さもしさだらう？ それから財産に對する態度は何うだ？ 母から譲り受けたといふのを口實に、不正なものだと思ひながら、それを費つてゐるのは何うした事か？ また毎日々々の怠慢な、唾棄すべき生活、それから一切の結末としてのカテューシャとの行爲——自分は確かに惡漢だ、恥知らずだ！ 彼等（世間の人々）は思ふがまゝにこの自分を批判するが、彼等を欺くことは出来る、然し自分を欺くことは出来ない。』

そこまで考へて來ると、彼はこの頃人々に對して感じてゐる嫌惡——殊に今日公爵に對し、ソフイア・ワシリーエウナに對し、ミッシェーに對し、コルネイに對して懷いた嫌惡が

——實は自分自身に對する嫌悪であつたことを俄かに知つた。ところが不思議なことには、斯く自分の穢らはしさを是認する感情のうちにも、何だか惱ましい、同時に喜ばしい氣を落ち着ける或るものがあつた。

ネフリエードフはこれまでの生活に於いて一再ならず、『心の淨化』と自ら名づけてゐるところのものに逢着してゐた。『心の淨化』といふのは、内生活が長い間の眠りから覺めて、全然停止してゐたその活動を新たに始め、これまで彼の心に溜つてゐる眞の生活を妨げてゐた滓を殘らず一掃しようとする一種の精神状態のことであつた。

かうした覺醒のあつた後には何時でも、彼は今後永久に遵守すべき規箴を作り、日記を書き、今後決して變易しないつもりの新生活——自ら稱して新に頁を開くと云ふところのもの——を開始するのであつた。然しその度に、世間の誘惑に囚はれて、自分も氣づかないうちに、またも墮落するのであつた。而も以前に増したひどい墮落をするのであつた。

このやうに、彼は淨化し、奮起することが、既に數回に及んだ。が、それが初めて彼の身に起つたのは夏申叔母達の家へ行つた時のことであつた。この時は最も活き／＼した法悅的な覺醒であつた。その結果も可なり久しい間續

いた。その次に同様の覺醒が起つたのは、彼が文官の職を擲ち、生命を犠牲にする決心で、戦時中の軍務に就いた時である。然しこの時は滓の溜ることが極めて速かつた。その次のは、彼が退職して外國へ行き、繪の修業を始めた時に起つた覺醒であつた。

それ以來今日に至るまで、淨化をよそに長い期間が経過した。従つて亦その汚れ方といひ、良心の要求するところと彼が送つてゐる實生活との距離といひ、これまでにならない程度に達してゐた。彼もこの距離を見ては流石に慄然とした。

この距離の大きかつたこと、この汚れ方のひどかつたこととは、それは呆れるばかりで、彼も初めのうちは淨化の達成に絶望した。『向上しよう、より良くならうと試みたことは既に幾度かある。而も何等の結果も得られなかつたではないか？』と、心の中で誘惑者の聲が言ふのであつた。『今また更めて試みるがものはない。お前一人がさうなのではない。皆さうなのだ。それが人生だ。』と、その聲は語り續けた。然し、たゞそれのみが眞實であり、たゞそれのみが權能であり、たゞそれのみが悠久であるところの、自由な精神的存在が、ネフリエードフのうちに既に眼醒めてゐた。彼は之に信頼せざるを得なかつた。今まで在つたところと、

かうありたいと欲するところと、その間の距離が如何に廣大であつても、眼醒めた精神的人間に取つては、どんなことでも出来ないことはないと思はれた。

『如何に苦しくとも、この自分を束縛してゐる虚偽を打破しよう。何時でも凡ての者に眞實を語らう。そして眞實を行はう。』と、きつぱりした聲を發して彼は自分に言つた。

『さうだ、ミッシェにも僕は放蕩者である、彼女と結婚することは出来ない、今迄たゞ無益に彼女を苦しめてゐただのと、眞實を打明けよう。それからマリヤ・ワシーリエウナにも——いや彼女には何も言ふことはない、寧ろ彼女の夫に對して、僕は悪漢である、彼を欺いてゐたと告白しよう。

それから遺棄については、眞實の命ずる通りに處理してしまはう。カテューシヤに向つては、自分が破廉恥なばかりに、彼女を罪惡の淵に陥れたことを謝し、彼女の運命を軽くするために及ぶ限りのことをすると言はう。さうだ、彼女に逢つて詫びよう。さうだ、詫びよう、子供のやうに詫びよう。』

彼は立止まつた。

『若し、それが必要なら、彼女と結婚しよう。』

彼は、子供の時分よくしたやうに、胸に兩腕を組んで立止まつた。そして眼をあげ、何者かに呼びかけるやうにか

う言つた。

『主よ、私を助けて下さい、私に教へて下さい、私の心のうちに入つて来て、私を一切の不淨から淨めて下さい!』
彼は祈つた。助力と淨化を神に求めた。ところがさうしてゐるうちに、彼の求めたことは既に成就してしまつた。彼のうちに住んでゐた神は、彼の意識のうちに眼醒めた。彼は自分を神だと感じた。従つて、自由を、元氣を、生の歡喜を感じたばかりではない。善の權能を残りに感得した。今彼は、何に拘はらず人間として、爲し得る最善のこととはすべて之を爲し得るものと自ら感じた。

彼がわれとわが胸にかう言つてゐた時、その眼にけ涙が浮んだ。それは善い涙でもあり、また善くない涙でもあつた。善い涙といふのは、それが歡喜の涙であつたからである。この長い年月、彼のうちに眠つてゐた精神的存在の覺醒の涙であつたからである。善くない涙といふのは、それが自分自身と、自分の善行とに阿る涙であつたからである。蒸し熱くなつたので出窓に行つて窓を開いた。窓は植込に面してゐた。靜かな、すがすがしい月夜であつた。街路の上を車の音が軋つた。するとその後はほんとに森然とした。窓の直ぐ下には木肌を露はした高い白楊の枝が影を落し、掃き清められた小庭の砂の上に、その交錯し合つたまゝの

妻をはつきりと描いてゐた。左手には納屋なやの屋根があつて、それが皎々たる月光の下に白く見えてゐた。前方には樹立こたぢの枝がもつれ合ひ、そのむかうに垣根の黒い影が見られた。ネフリロードフは月に照らされた植込と屋根とを眺め、それから白楊の影を見て、人を蘇生せしめるやうな爽やかな空気を思ふさま吸ひ込んだ。

『好い氣持だ、好い氣持だ、あゝ何といふ好い氣持だ！』と彼は自分の心のうちに起つたことに就いて言つた。

二九

マースロワは夕方の六時にやつと自分の監房へ戻つて來たが、歩き馴れてゐないのに十五露里も歩いたため、體からだは疲れ、足は痛み、尙ほその上に思ひも寄らぬ重い宣告を受けたので、がつかりして了つた。腹も堪たらなく空すいてゐた。

でも、まだ最初の休憩時間に、護衛の兵士達へんたいだつが彼女の傍で麵包ぱんや茹卵ゆたまごを食つてゐる頃には、彼女の口にも唾液が溜つて來て、自分の空腹を感じたが、それでも彼等に物をねだるのは流石に卑しく思はれた。けれどそれから三時間も経つと、彼女は既に食欲を失つて、たゞ疲労を覺えるばかりであつた。思ひがけない宣告を聞きとめたのは、彼女がこんな状態にある時であつた。最初彼女は聞き違ひではな

いかと思つた。そして自分の耳にしたことをそのまま信ずることが出来なかつた。徒刑囚といふ概念と自分とを結びつけることが出来なかつた。然し裁判官達や陪審員達の平然とした事務的な顔付を見ると、何うもこの報告を全く當然なことのやうに受け取つてゐるらしいので、彼女はじつとして居られずに、自分の冤罪を法廷中に聞える程叫んだのである。ところが亦彼女の叫び聲までも當然さうありさうなこととして、又この事件を變更するだけの力の無いものとして受け取られてしまつたのを見て、彼女はいよいよ、自分の上に加へられた驚くべきむごたらしき不正に屈伏せねばならぬと感じて泣き出した。殊に彼女を驚かしたのは、彼女にこんな酷刑を課したのが男達——若い、老人でない男達、常々あれ程優しげに彼女を見てゐたその男達であつたといふ一事である。(たゞ一人副檢事については、彼女も全く別な氣分で見つてゐた。彼女が囚人室に腰掛けて閉廷を待つてゐた時や、數度の休憩時間中眼に觸れたところでは、その男達が、他の用事で來たやうなふりをして、扉口のところを通り過ぎたり、又はその部屋に入つて來たりしたのは、たゞもう彼女を眺めるためであつたのだ。しかも是等の男達は、彼女が起訴された事に於いて罪のないのにも拘はず、何ういふつもりか、突如として彼女に徒刑を宣告

してしまつたのであつた。彼女は泣いてゐた。然しやがて静まつて、全く腑抜けのやうな状態になつて囚人室に腰掛けて、出發を待つてゐた時、彼女の欲してゐるものがたゞ一つあつた。それは煙草を喫ふことである。こんな氣持でゐるところへ、ポーチョワとカルティンキンとが入つて來た。彼等も宣告を受けてから同じ室へ連れて來られたのであつた。來るが早いからポーチョワはマースロワに食つてかかり、無闇と徒刑囚呼はりをするのであつた。

「何うなつたね。身の潔白が立つたかね。矢つ張り遁れつこなかつたぢやないか、このすべた女が。それが本當の自業自得といふものさ。徒刑中はベタ／＼お洒落をしようたつてもう出來やしないよ。」

マースロワは兩手を上衣のポケットに突込んで、腰掛けてゐた。そして低く頭を垂れ、眼の前二歩ばかりの處の踏み汚された床をじつと見詰めてゐた。そしてたゞこれだけ言つた。

「私はお前さんに何も構つてやしないよ。お前さんも私に構はないでくれ。私何も構つてやしないよ。」彼女は何遍か繰返して、あとは全く黙つてしまつた。そして彼女が幾らか蘇生の思ひに返つたのは、ポーチョワとカルティンキンとが連れ出されると、入れ替つて一人の衛兵が彼女へ

三ルーブリの金を持つて來た時であつた。

「お前がマースロワか？」と衛兵は訊いた。

「さうか。ちやこれを取れ。何處かの奥さんが寄越したんだ。」と言つて金を差出した。

「どんな奥さん？」

「まあ受取ればいゝんだ。お前達と話なんかしてゐられないよ。」

その金を届けたのはキターエワ(例の女將)であつた。彼女は法廷から立去る時、廷吏に向つて、お金を少々マースロワに渡したいが、出來る事かと問うた。廷吏は出來ると言つたので、彼女は許可を得て、三つ錠鎖のついた羚羊皮の手套を脱ぎ、白いふつくらしした手で、絹の下袴の後方の衣囊から流行の紙入を取り出して、彼女の儲けた可なり澤山な、切り取つたばかりの利札のうちから、二ルーブリ五十コペイカの札を一枚抜き取り、それに二十コペイカの貨幣二個と十コペイカの貨幣一枚とを添へて廷吏に渡した。廷吏は衛兵を呼んで、差入人の眼の前でその金を衛兵に渡した。

「どうぞ間違ひなく渡して下さい。」と、キターエワは衛兵に言つた。

衛兵はこの疑ひ深い一言が續に障つてゐるので、それで

マースロワにも突慥貪つげんけんに當つたのである。

マースロワは金を受取つて喜んだ。といふのは、今彼女がたゞ一つ欲しいと思つてゐるものを與へてくれる金であつたからだ。

「煙草さへ手に入れて一服吸へたら。」と、彼女は思つてゐた。そしてすべての考は喫煙といふ一つの希望に集中されて、他の控室の扉口から廊下の方へ流れ出る煙草の匂ひがしてくると、その空氣を貪るやうに吸ひ込むほど欲しがつてゐた。然しまだ／＼長いこと待つてゐなければならなかつた。何故なぜといふに、彼女に退出命令を傳へる管の書記が、禁止された新聞の社説に就いて、一人の辯護士と話をはじめ、議論するほど夢中になつて、被告のことなどはすつかり忘れてゐたからである。

漸く四時過ぎになつて彼女は退出を許され、ニジエゴロド人とチウシ人との二人の護送兵に連れられて、裏口から裁判所を出た。まだ裁判所の出口にゐた時、彼女はこの二人の者に二十コペイカを渡して、卷麵まきうどんを二つと煙草とを買つてくれと頼んだ。チウシ人は笑ひながら、その金をとつて、「よし、買つてやらう。」と言つた。そしてまづたく正直に煙草と麵うどんとを買つて来て、お釣を戻した。途中では喫煙することは出来なかつたので、マースロワは依然とし

て満たされない喫煙慾を懷いだいたまゝ、監獄へ近づいた。いよ／＼入口の處まで連れて來られると、丁度その時汽車で送られて來た百人ばかりの囚徒が、ぞろ／＼と連れ込まれてゐるところであつた。入口を通過する際、彼女は彼等とぶつかつた。

囚徒達は——鬚ひげの生えてゐる者、剃つてゐる者、老年、青年、ロシア人、異種族人、中には頭を半分位のみまで剃りあげてゐる者などがあつた。彼等は何れも足の鎖くわをちや／＼云はせながら、埃と、足音と、話聲と、酸つばいやうな汗の匂ひとで監獄の控所を満たしてゐた。囚徒達はマースロワの側を通つて行く時、皆彼女を見上げ見下した。中には寄つて來て、體からだに觸ふつて行く者もあつた。

「いよ、別嬪べっぴんだな」と一人が言ふと、「姐さん、今日こんにちは！」と、もう一人が、片眼かためでめくばせしながら言ふのであつた。後頭部まで青々と剃りあげ、口髻くちげだけ残して、顔も綺麗に剃つた、一人の色の黒い男が、足を鎖くわにからませて、がちやく／＼鳴らしながら、飛びついて、彼女を抱いた。

「おい、昔の情夫こいづこを忘れちまつたのかい？ 氣取るのはいい加減にしろよ！」と、彼は彼女に突き飛ばされた時、齒をむき出し、眼をぎら／＼させながらかう叫んだ。

「何をする？ 莫迦！」と、典獄補が後から寄つて来て叱つた。

その男はすつかり縮み上つて、急いでそこを跳び離れた。今度は典獄補がマースロワに突掛かつて来た。

「お前は何でこんな處にまご／＼してゐるんだ？」

マースロワは、今裁判所から連れ戻されたところだと言ひたかつたが、ひどく疲れてゐるので、口をきくのが懶かつた。

「今裁判所から戻つて来たところです。」と、古參の護送兵が、通り抜けてゐる人々の蔭から出て来て、帽子の縁へ手を擧げて言つた。

「では、早く看守長に渡してしまへ。さうしないとあの通りの醜態が起る！」

「はい、畏りました。」

「ソコロフ！ この女を連れて行け。」と、典獄補は叫んだ。

看守長は寄つて来ると、荒々しくマースロワの肩をつつき、頤で指圖して、女囚監の廊下の方へつれて行つた。女囚監の廊下へ来ると、彼女の體を残らず觸つたり探つたりしたが、別に何も見當らないので（巻煙草の箱はパンの中へ突込んであつた）、そのまま今朝引き出された監房へ入れ

られてしまつた。

三〇

マースロワの收監されてゐた監房は、長さ二十一呎、幅十六呎といふ細長い部屋で、二つの窓と、壁から突出て漆喰の剝げ落ちた燧爐と、面積の三分の二を占めてゐる乾枯らびた板張りの床とがあつた。中央の、扉に面した處には、黒ずんだ聖像が掛かつてゐて、一本の蠟燭がつけてあり、下には埃だらけの菊の花束が下つてゐた。扉の蔭になる左手の處には黒くなつた床の一部があつて、そこには臭い桶が置いてあつた。點檢が今終つたばかりで、女達は既に一夜を眠るために閉ぢ込められてゐた。

この監房に收容されてゐる者は、合計十五名で、十二人が女、残る三人が男であつた。

まだ、すつかり明るかつたので、床に寝てゐるのは二人の女だけであつた。一人は上衣を頭から被つてゐたが、これは旅券が無くて拘留された白痴の女で（券がなければ浮浪罪に問はれる）大抵眠つてばかりゐた。——もう一人は竊盜犯の刑を果たしつゝある肺病の女であつた。この女は、眠つてはゐなかつたが、上衣を頭の下へ掻き込んで、大きな眼を見開いたまゝ、横になつてゐた。そして喉を擦つたくする、せ

き来る痰を抑へながら、なるだけ咳をすまいと苦しんでゐた。それ以外の女達は皆粗末な布のルバーハ(衣類)を着たまま、ぼかんとしてゐた——或るものは窓のところ立つて、庭を引いて行かるゝ男囚等を見、また或るものは板床に腰掛けながら、何か縫つてゐた。縫物をしてゐた三人の女の中の一人は、今朝マースロワを送り出した、ゴラブリヨウといふ皺の寄つた鬘め面の、くすんだ容子をした老婆で、顎の下にはだぶ／＼した袋のやうな肉塊が垂れてゐた。背の高い、力の強い女で、顚顚のところだけ白くなりかゝつた、亞麻色の髪の毛を小さく束ね、頬べたに毛の生えた疣を一つ持つてゐた。この老婆は手斧で夫を殺したといふ科で徒刑の宣告を受けたのだが、それは夫が彼女の娘に手を出してしかたかなかつた爲であつた。老婆はこの監房の囚徒頭でありながら、内密で酒を賣つてゐた。閑には眼鏡をかけて縫物をしてゐたが、その縫ひ方は百姓式で大きな勞働者染みだ手に三本指で針を持ち、針の尖端を自分の方に向けて運んでゐた。彼女と並んで、ズツの袋を縫つてゐたのは、背の低い、鼻のひしやげた、眼の小さく黒い、お人好しのお饒舌であつた。鐵道の踏切番をしてゐたのだが、汽車の來る時、旗を出さなかつたため、棒事が起つたといふ科で三ヶ月の禁錮に處せられてゐた。三番目の縫物をしてゐ

る女は、フォードシヤといふ名であるのに、仲間の者からはフォーネチカと呼びなされてゐた。色白の、ほんのりとした女で、小兒のやうにはれ／＼した碧い眼と、小さい頭の周圍に捲きつけられた二つの長い亞麻色の辮髪とを持つてゐた。まるで小娘のやうで、ひどく可愛らしい女であつたが、夫を毒殺しようとした科で入獄してゐるのであつた。彼女は十六歳の少女の時に嫁にやられたが、間もなく夫を毒殺しようとしたのである。八ヶ月の間保釋されて、裁判になるのを待つてゐたが、その間に夫と仲直りをしたばかりでなく、すつかり夫になづいて了ひ、愈々裁判に引出されることゝなつた時には、切つても切れないやうな間柄になつてゐた。裁判では、夫も、舅も、殊に彼女を可愛がつてゐた姑も、どうかして免訴にしようと思つたのであつたが、とう／＼シベリヤへ追放の上、苦役と宣告されたのであつた。氣質がよく、快活で、いつもにく／＼してゐるこのフォードシヤは、マースロワと板敷寢臺を隣り合はせてゐて、マースロワを愛してゐたばかりでなく、彼女のことに氣を配り、彼女の世話をすることを自分の勤めのやうに思つてゐた。尙ほ他に二人の女が何もせずに寢床に腰掛けてゐた。一人は四十格好の、顔の蒼白い瘦せた女で、もとはなか／＼の美人であつたらしいが、今は見る影もなかつた。そして兩

手に赤兎を抱いて、長く垂れた白い乳房をあてがつてゐた。彼女の犯罪といふのは、その村から一人の新兵が徴せられる時、村人がそれを不當な召集と思つて、警官を引留め、その新兵を奪ひ返したといふのである。ところで、この女は無法に引立てられる青年の伯母であつたので、甥の乗せられた馬の手綱に眞つ先に手をかけたと云ふのであつた。何もせずに寢床に坐つてゐたもう一人の女は、背の高くない、緻くちやの、人の好きさうな老婆で、もう髪の毛も白く、腰も曲つてゐた。この老婆は暖爐のそばの寢床に腰掛けてゐて、四歳位ゐの、稗栗頭の、腹の脹れた男の兒が笑聲を揚げながら側を駈けて通るのを、捕まへるふりをしてゐた。その男の兒は、一枚のルバーシユカを着たまゝ、彼女の側を駈け抜けたが、いつも「はら、捕まらない！」と同じことを繰返してゐた。放火犯でその息子と一緒に服罪してゐるこの老婆は、自分と同時に入獄してゐるわが子の身の上を悲しみながら、いや、それよりも残して來た爺さんのことを心配しながら、大層素直にその禁錮を忍んでゐた。自分の年老つた亭主について、氣がかりでならないのは、嫁が出て行つてしまつたので、自分がゐないと洗濯してくれるものがないから、さぞ虱が湧くであらうといふことであつた。

これ等七人の女の外に、まだ四人の者が開け放たれた窓の一つに倚つて、鐵の格子に縋つたまゝ、庭を通つて行く囚徒達と、相圖をしたり話しかけたりしてゐた。その囚徒達といふのは、今しがた入口のところでマースロワと出會した者共であつた。女達のうちの一人は、竊盜犯で服役してゐるのであつたが、それは柄の大きい、どつしりした、でぶ／＼の體を持つた、赤毛の女で、黄色が／＼つた白い顔は雀斑だらけで、手も同じく、黄色が／＼つた白い色をして、その太つた頸は、鈕釦の外れた、はだかつた襟の奥から抜け出してゐた。そして窓から囁れ聲をほりあげて、何か淫らなことを喚いてゐた、それと並んで立つてゐたのは、身の丈は十歳の少女位ゐで胸の長い割にひどく短い足を持つた不恰好な色の黒い女囚であつた。その赭ら顔は腫物の痕だらけで、黒い眼と眼の間が廣く離れ、唇は厚ぼつたく短かいので、白い出齒をかくし切れなかつた。そして庭で起つた何事かを見て、きやつ／＼言ひながら笑ひこけてゐた。お洒落が好きのため、ホロシヤフカ(お洒落)といふ諱名をつけられてゐたが、この女囚は放火竊盜犯に問はれてゐたのだつた。彼女等の背後にはひどく汚い灰色のルバーハを着、瘦せて筋ばつた哀れな様子をして、大きなお腹を抱へた孕み女が立つてゐた。贓品隠匿罪で裁かれたのであるが、黙

つてゐるけれど、絶えず面白さうに、また感じ入つた様に、その庭で起つてゐる事柄を見てにこ／＼してゐた。窓際に立つてゐた四番目の女は、酒の密賣をして罰された者であるが、背が低く、づんぐりした田舎女で、ひどく眼の飛び出した、人の好ささうな顔をしてゐた。この女は、老婆と遊んでゐる男の兒と、それから彼女と一緒に監獄にゐる七歳の女の兒との母親であつた。何故こんな小さい子供まで來てゐるかといふに、それは預けて置くべき身寄りの者が無かつたからであつた。この女も他の女達と同様窓を見てゐるが、靴下を編む手は休めなかつた。そして庭の方を歩いて行く男因達から放たれる言葉には眼を閉ぢながら、不承々々に顔を顰めてゐた。彼女の娘である七歳の少女は、

白つばい髪の毛をばら／＼に下げ、ルバーシユカ一枚着たゞけで、赤毛の女と並んで、その裾を瘦せ細つた小さい手で握んだまゝ、女因達と男因達と取り交す淫らな言葉を、眼を据ゑてじつと聴き入つてゐた。そしてそれ等の言葉を覚え込まうとするものらしく、低い聲で言ひ直して見るのであつた。自分の赤兒を井戸へ投げ込んだと云ふ十二番目の女因は、教會の執事の娘であつた。背の高い、すらつとした女で、短かく太く編んだ亞麻色の髪がほつれかゝつて亂れ、眼は脹れほつたく、眼玉も飛び出てゐた。周囲の出來事

には少しも注意しようとはせず、一枚の汚い灰色のルバーハを着たまゝ、跣足で監房の空いたところを往きつ戻りつしてゐた。そして壁のところまで行くと、くるりと素早く身を蘇すのであつた。

三

がちや／＼と錠の音がして、やがてマースロワが監房内に入れられた時、一同の者は皆そちらを振り向いた。教會の執事の娘までが、一寸立止まつて、眉根をつりあげて、入つて來たマースロワを見てゐるが、然し何も言はず、再び思ひ切つた大股で歩き出した。コラブリヨフは粗末なズックに針を刺して、何か聞きたげな様子で、眼鏡越しに見詰めてゐた。

「おやまあ、歸つて來たのけえ。お前さんは屹度放免になると思つてゐたに。」と、囁かれて低い、まるで男みたいな聲で言つた。——「して見ると、徒刑けえ?」

彼女は眼鏡を取りはづし、自分の縫物を寢床の並びへしまつた。

「今もお婆さんと噂してゐたよ、すぐに放免になるかも知れねえつて。そんなこともよくあるといふ話をしてゐただよ。間がよけれや、お金を貰ふかも知れねえつてね。」と、

踏切番は歌ふやうない、聲で早速話しかけた。「だけれんど、かうして歸つて来たよから、こつちの推量は外れたと見えるね。あゝ何うもさうらしいよ。」——と、彼女は立て續けに、その優しい調子の好い言葉を連ねた。

「本當にお前さん罪を受けて来たのかい？」と、例の子供染みた、はつきりした碧い眼でマースロワを見ながら、フォードシヤは同情の籠つた優しさで訊いた。と思ふと、彼女の晴れ々とした若々しい顔は、今にも泣き出しさうになつてしまつた。

マースロワは何とも答へないで、黙つたまゝ、コラブリョワの並びの端から二番目の自分の場所へ通つて、寢床の板敷に腰を下した。

「何も食へなかつたのかい？」と、フォードシヤは起つて、マースロワに近寄りながら言つた。

それでもマースロワは返事をしないで、巻麵麴の枕頭に投げ出し、着物を脱ぎかけた。そして埃のついた上衣を脱ぎ、黒い縮れ毛の頭から頸巻の布をとると、そのまゝ腰をかけた。

寢床の片端で男の兒と遊んでゐた、腰の曲つた老婆も亦寄つて来て、マースロワの向ひに立つた。

「ちッ、ちッ、ちッ！」と舌打ちして、彼女は可哀相にと

云つたやうに首を振つた。

男の兒も老婆の後からやつて来た。そして眼を大きく開いて、上唇を尖らしながら、マースロワの持つて来た巻麵麴を見詰めてゐた。今日自分の出會つたいろんなことの後にかうした同情深い皆の顔を見ると、マースロワはもう泣き出すばかりになつて、唇がわな／＼と震へて来たが、やつと慌へて、老婆と小兒とが寄つて来るまでは抑へてゐた。が、老婆の優しい勞はつてくれる舌打を耳にした時、殊に男の兒がその眞面目さうな眼付を巻麵麴から離して彼女に移したのを見た時にはもう堪らなかつた。彼女の顔全體が震へて来て、わつと泣き出した。

「だから、確りした辯護士をお頼みよつて、あれ程言つたぢやねえか。」と、コラブリョワは云つて、「本當に追放かい？」と訊いた。

マースロワは返事をしようと思つたけれど、出来なかつた。たゞ泣きながら、巻麵麴の中から巻煙草の紙函を取り出して、それをコラブリョワに渡した。紙函には、髪を高く束ね、三角形に胸を露はした、頬紅のさした婦人の繪が描いてあつた。コラブリョワはその繪を見て、といふよりはマースロワか下らないものに浪費したのを見て、咎めるやうに首を振つた。それから一本煙草を抜き出して、ランプの

火を點けながら、すうつと一服吸ひ込んで、そしてマースロワに渡した。マースロワはまだ泣き續けながら、貪るやうに一と吸ひまた一と吸ひと吸ひ込んで、煙を吐いてゐた。

「徒刑なのさ。」と、すゝり泣きながら彼女は呟いた。

「まあよくもそねえなことが。いま／＼しい鬼共だよ、穀潰しだよ。」と、コラブリヨワが言つた、「何でもねえのにこない、娘を罪に落すなんて。」

この時、窓際に立つてゐた女達の間から、けた／＼ましい笑聲が起つた。小さい女の兒までが笑ひ出した。彼女の細い子供らしい笑聲は、腹れた大人の金切聲と入り混つた。外の男囚の一人が何か變なまねをしたので、窓から見えてゐる者をかくも騒がしたのであつた。

「あら御覽よ、あのくり／＼坊主の犬奴、何をやつてるだ。」と、赤毛の女が言つた。そして肥滿してゐる體を揺りながら、顔を格子に壓しつけて、愚かしい猥らな言葉を喚き立てた。

「あれが本當の蓮葉阿魔つていふものだよ。何がそんなに可笑しいだ！」と、コラブリヨワは毛の赤い女を見て首を振りながら言つたが、再びマースロワに向つて、「何年だいな？」と訊いた。

「四年だよ。」とマースロワは言つた。と、涙がはら／＼とはふり落ちて来て、その一滴は巻煙草の上に落ちた。マースロワは腹立たしげにそれをもみくちやにして投げ棄て、新しく又一本取り出した。

踏切番は煙草喫ひではなかつたけれど、その吸殻をすぐ拾ひとつて、眞直に直しながら、また話を續けた。

「して見ると、やつぱし本當だね。」と彼女は言つた。「だけんど、今の世の中ちや眞實なんでものは疾うに豚が食べつちまつて、皆が好き勝手なことをやつてるのさ。だのにおし達は、きつと放免になるだらうつて推量してゐたよ。マトウエーエウナが助かるつて言ふから、わしはさうは行くめえ、わしの考へぢや、何うも彼奴等の食ひ者にされさうだつて言つてたのさ。やつぱしその通りになつちやつた。」と彼女はさも満足さうに、自分の聲に聞き惚れながら、かう言つた。

この時、男囚達が皆庭を通つてしまつたので、彼等と言葉を交してゐた女達も窓から離れて、マースロワの方へやつて來た。第一に來たのは女の兒を連れた、眼のぎよろぎよろした、酒の密賣で收監された女であつた。

「何うしてまあ、そんなひどい罪にしたよ？」と、彼女はマースロワの傍に腰を下して、せつせと編物をしながら訊

ねた。

「何うもかもねえだよ、お金が無えからさ、お金せえあれや、え、辯護士が雇へるだから、巧く言ひ聞いて貰へるだよ。」と、コラブリョワは言つた。「何と言つたつけない、あの髪の毛の長い、鼻の高い人さ。あの入ら、お前さん、水の中から乾いたものでも出して見せるだよ。あゝいふ人に頼みてえもんだ。」

「あの入ら頼んで見ただよ。」と、彼女等の側へ寄り添うて来た洒落女が、齒をむき出して言つた。「だけれど、あの人は千ルーブリ以下では、唾せえ吐きかけてくれねえだよ。」

「お前さんも悪い星に生れついたと見えるだよ。」と口を入れたのは放火犯で入つてゐる婆さんであつた。「だが、わしのことでも考へて諦めさせよ。俺の嫁はちよろまかされ、その上伴は虱の食物(虱の食物さば入)にぶち込まれてさ、このわしまでが、いゝ歳をして、こねえ處へ来てゐるだ。樂な話ぢやねえよ。」と、彼女はこれで百遍にもなる位、自分の身の上話をかつぎ出した。「牢屋と乞食からはとても通れつこねえと見えるだ。乞食でなきや牢屋さ。」

「誰でもみんな同じこんだと見える。」と、酒を密賣してゐた女が言つた。そして女の兒の頭を見入つてゐたが、靴下

を脇へ置いて、女の兒を股の間へ引き寄せて、素早い指先で彼女の頭の虱狩を始めた。「何だつて酒の密賣などするだ！」と言ふだが、そんだったら何うして子供を食はして行くだ？」と、彼女は慣れた仕事を続けながら言つた。

酒の密賣の話は、マースロワに酒のことを思ひ出させた。「お酒が欲しいね。」と、彼女はルバーハの袖で涙を拭ひながら、それでもまだ時折しやくくりあげながら、コラブリョワに言つた。

「ガムイルキ(ワオーツ)かい？ あゝ、いゝとも。」と、コラブリョワは言つた。

三三三

マースロワは卷麵麩の中から取出した利札をコラブリョワに渡した。コラブリョワはそれを取つて見てゐた。自分は文字が讀めなかつたけれど、何でも知つてゐる洒落女がこの利札は二ルーブリ五十コペイカだと言つたのを信用して、隠して置いた酒の瓶を出しに、通風口の處へ登つて行つた。それを見ると、女達は——寢床を隣り合はせてゐる者の外は別として——皆自分の場所に引きさがつた。マースロワは、その間に頸巻や上衣の埃を拂つて、寢床の上に入り、卷麵麩を食べはじめた。

「あんたにお茶をとつて置いたけど、もう屹度冷めつちまつてよ。」と、フードシヤは腰巻にくるんだブリキ製の薬罐かんと猪口ちぐくとを棚から取り下して言った。

お湯は全く冷め切つてゐた上に、お茶といふよりはブリッキの味がした。しかしマースロワは猪口に注いで、それに麵麩めんぼを浸しはじめた。

「フィナーシカ、さあ上げよう。」と、彼女は聲を揚げた。そして麵麩の一片を割いて、彼女の口を見てゐた男の兒に與へた。

コラブリョワは酒の瓶と猪口とを持つて來た。マースロワはコラブリョワと洒落女にも勧めた。この三人の女囚は監房での貴族といつた格であつた。それは金を持つてゐて、お互ひにその所持品を分け合つてゐたからだ。

數分経つと、マースロワは元氣をとり返して、檢事の眞似ねをしながら活潑に裁判の話をした。わけても裁判所で彼女を驚かしたことを話した。何が特に彼女を驚かしたかといふと、それは何處へ行つても、何處にゐても、彼女の觀たところでは、男達が彼女にまつはり來ることで、裁判所でも皆彼女を見てゐたし、態々これがために囚人の控室へのこゝく入つて來る者もあつたと、彼女は話してきかせた。

「護送の兵士でさへさう言つてゐたよ。あれはみんなお前を見に來るんだつてさ。ほんたうに、かういふ書類は來てゐないかとか何とか言つて來るけれど、どうも見たところ、その人達は何も書類などに用があるんぢやなくて、たゞもうその眼付は私に喰ひついてゐるんだよ。」と、彼女は微笑しながら、怪訝けつげんさうに首を振つて、かゝ言つた。「仕様のない奴等さ。」

「そりやアもう、どうせさうだつたらうとも。」と、踏切番が相繩あひなわを打つた。と思ふと、彼女の歌ふやうな言葉がまた流れ出した。「まるで砂糖に集る蠅はぶみてえなものさ。あつちあつちに集つてゐねえかと思ふと、こつちこつちに集つて來るだもの。あねえな奴等にや麵麩を食べさせて置くがものはねえだよ……」

「それから此處へ來ると、」と、彼女を遮つてマースロワが言ひ出した。「此處でまた私はつかまつたのさ。丁度此處へ歸つて來ると、汽車で着いた者が一塊ひとかたまりゐたんだよ。まア何うやつて切り抜けたらいか解らない程、皆てんでに勝手な熱を吹いてゐて、困つちまつたのさ。でも有難いことに典獄が來て、追拂つて呉れたからよかつたもの、一人の奴なんか、私にへたばりついてさ、なか／＼追つばらはれなかつたよ。」

「で、そいつはどんな風の男だった？」と、お洒落しゃれの女が訊きいた。

「色の黒い、口髭くちひげのある男だったよ。」

「ぢや、あいつに違ちがえねえ。」

「あいつツツて誰たれさ？」

「シチエグロフだよ。ほら今通つて行つたさ。」

「シチエグロフつて一體何者なんものだ？」

「シチエグロフを知らねえ人があるかよう。シチエグロフつてば二度も懲役から逃げ出してさ、今度また捕つかまつただよ。だけれど、あいつのこんだで、また逃げつちまふよ。看守達もあいつにや一目置ひときいてみるだからね。」と語つた。この洒落女は、男囚達に手紙の取次ぎなどしてゐたので獄内ごく内のことは何でも知つてゐた。——「屹度また逃げるだよ。」
「いくら逃げたつて、私達と一緒に連れて行くわけでもねえだ。」とコラブリョウは言つたが、今度はマースロウに向つて、「だれどお前まへさんは、辯護士の人に上訴して貰もらふように、話して見るがえうだよ。それには今のうちでねえといけねえから。」

マースロウは、さういふことは何も知らないと答へた。

この時、赤い毛の女は、雀斑そばかすだらけの両手を、纏まとれきつた濃い赤い髪かみの毛の中へ突込んで、爪つまの先で頭を掻かきなが

ら、酒を飲んでゐる貴族達の方へ寄つて來た。

「そのこんだらわしがすつかり教へて上げるべえ。」と、彼女をはじめた。「先づ第一にさ、申渡まことしに不服だといふ書附を出して置くだ。それから後で檢事に譯を言ふだよ。」

「何しに來ただよ？」と、彼女に向つてコラブリョウが腹立たしげに低い聲を立てた。「酒の匂におを嗅かぎつけて來ただんべえ。だが、お前の口を入れる幕まくらぢやねえよ。お前に聞かないだつて、することは解つてゐるだ。お前には何の用も無なえだよ。」

「誰もお前と話をしぢやみねえよ。何を餘計な口叩くちくた。」
「酒でも欲ほしんだべえ、のこ／＼寄つて來てさ。」

「ぢや、少しおやりよ。」と、いつも持つてるものは何でも皆に分けてやるマースロウが言つた。

「ぢや、一つ呉れてやるからな……」

「さア、呉れるなら呉れて見ろ！」と、コラブリョウに突掛かりながら、赤い毛が言つた。「お前なんか、ちつとも怖こがつてやしねえよ。」

「牢屋らうごの穀潰あし奴めが！」

「そりや手前てまへのこつだ。」

「この腐くされ女郎めらう奴めが！」

「なに腐くされ女郎めらうだど？ 手前てまへこそ穀潰あしだ、人殺ひところしだ！」

と赤い毛が大聲を立てた。

「失せあがれと云ふに。」とコラブリョウはひどい權棒で言つた。然し赤い毛は益々詰め寄つてくるので、コラブリョウは彼女のはだかつた太つた胸を突き飛ばした。赤い毛は、待つてゐたとはかりに、素早くコラブリョウの髪の毛を片手に掴み、片手でその顔を擲らうとしたが、生憎その手はコラブリョウに掴まれてしまつた。マースロワと、洒落女とは赤い毛の手に取り纏つて、引き離さうとしたが、婆さんの辮髪を緊と引つ掴んだ赤い毛は、なか／＼離さない。一寸弛めたが、それもつとひどく拳のまはりに毛を巻きつけるためであつた。コラブリョウは頭を一方へ傾げて、片手で赤い毛の體を矢鱈に殴りつけ、その上相手の片手に噛みついた。女囚達は喧嘩のそばへ群つて、引き分けようとして喚きちらした。肺病の女までがそこへ寄つて来て咳をしなから、絡まり合つた二人を見てゐた。子供達は互に抱き合つて泣いてゐた。女看守と男の看守が騒ぎを聞きつけて入つて來たので、取組み合つた二人は、引き分けられた。コラブリョウは白毛の辮髪を解いて、その中から引き抜かれた毛のかたまりを選び出しながら、又赤い毛はぼろ／＼にされたルバーハを黄色い胸にかき合せながら、共に大聲あげて言譯やら苦情やらを訴へた。

「分つてるよ、皆これはお酒の所爲だらう。明日典獄さんにお話して裁いていただくことにしよう。匂ひがするから私はちやんと解つてるよ。」と女看守は言つた。「たがい、かね、そんなものは何處かにかくして置かないと、ひどい目に逢ふよ。私達は一々お前達の喧嘩を裁いてゐる暇なんかないんだからね。さアみんな自分々々の席に行つて、静かにしておいで。」

然しなか／＼静まらなかつた。長いことまだ女達は罵り合つたり、始まりが何うの、どちらが悪いのと互に鏡舌り立てゝゐた。やがて看守と女看守とが出て行くと、女囚達も漸く静かになつて床に就いた。老婆は聖像の前に立つて祈禱を始めた。

「穀潰し奴が二人揃つてやがる。」と、不意に喫れ聲を揚げながら、その一語々々に變にとげ／＼しい嘲笑を交へて、寢床の一方の端から赤い毛が言ひだした。

「また飛びつかれねえやうに氣を附けろ。」コラブリョウも同じやうな悪口をついて直に應酬したが、やかて兩方とも静かになつた。

「止め手がなかつたら、手前の眼玉は何處かへふつ飛んぢまつたに……」また赤い毛が言ひ出した。と、コラブリョウもすかさず同じやうな返答を送つた。

沈黙の間が少し續くと、また毒口がはじまつたが、その間がだん／＼遠のいて行つて、とう／＼すつかりをさまつた。

皆寢靜まつた。中には躰をかく者もあつた。何時も長いことお祈りをする婆さんだけは、まだ／＼聖像の前に跪拜し續けてゐた。教會の執事の娘は看守が立去つてしまふと、起き出して、また監房の中を往きつ戻りつし始めた。

マースロワは寢つかれなかつた。彼女は絶えず、自分が徒刑囚であるといふことを考へてゐた。もう二回もさう呼ばれた。一度はポーチョワに、次は赤い毛に言はれた。けれど彼女は何うもその氣になれなかつた。彼女に背を向けてゐたコラブリョワが寢返りを打つた。

「こんなにされようとは全く思ひも寄らなかつた。」とマースロワは低聲に言つた。「随分いろんなことをしてゐながら、何ともない者もあるし、私みたいに何もしないのにひどい目に逢ふ者もあるし。」

「さう心配することあねえよ、シベリヤにだつて人が住んでゐるだからね。あちらさ行つたからつてお前さん、すぐにおつ死ぬわけでもあるめえ。」と、コラブリョワは彼女を慰めた。

「それは、死なうとは思はないけど、矢つ張りたまらない

わ。そんな辛いこたあ私、眞平よ、これまで氣樂に暮して来たんだからね。」

「誰だつて神様には逆らはれねえだよ。」とコラブリョワは溜息を吐きながら言つた。「神様のお思召には逆らはれねえだよ。」

「分つてゐるよお母さん。でも矢つ張りたまらないわ。」二人は一寸押し黙つた。

「お聞きよ、ありやあのすべたゞよ。」と、寢床の向うの方から聞えて来る妙な音に、マースロワの注意を誘ひながら、コラブリョワが言つた。

その音といふのは、赤い毛の女の忍び泣きであつた。彼女は何を泣いてゐたかといふに、それは罵られ、打たれた上に、あれ程欲しがつた酒が貰へなかつたのが口惜しかつたからだ。また、自分がこれまでの全生涯を通じて罵詈雑言と嘲笑と醜弄と毆打の外、何物も無かつたと云ふことに就いても泣いたのである。彼女はフエーチカ・モロデンコフといふ職工との初戀を思ひ浮べて、自ら慰めようと思つた。ところがそれを思ふと、戀の破滅のことも心に浮んで来た。そのモロデンコフが酔つて来て、冗談半分に、彼女の最も大切な處へ硫酸を塗つて、痛さに身悶えする様を眺めながら友達と一緒に笑つたといふのが、その戀の終局であつた。

彼女はそれを思ひ出して、自分といふものが可哀相になつて来た。それで、誰も聞いてる者が無いと思つて、泣き出したのである。そして、まるで子供のやうに唸つたり、鼻を鳴らしたり、鹽辛しほかつたい涙を呑んだりしながら泣いてゐた。

「可哀相だわ。」とマースロワが言つた。

「そりやア可哀相だけど、構ふんぢやねえよ。」

三三

翌朝、眼の醒めた時、ネフリュードフの體驗した第一の感じは、彼の身に何事か起つたといふ意識であつた。が、實を言ふと、何か起つたといふことを想ひ出す前に、彼は何か重大な、そして良いことが起つたことを既に知つてゐた。『カテューシャ。再審。』さうだ、もう偽ることは止めにして残らず本當のことを言はねばならない。また何といふ不思議な暗合であらう。時も時、丁度この朝、貴族長夫人マリヤ・ワシリエウナから、長いこと待ち侘びてゐた、そしてこの際特に必要に迫られてゐた返信が、漸く届いたのである。彼女はネフリュードフと手を切つて、彼の豫期してゐるミッシーとの結婚の幸福を祈つて来た。

「結婚！」と、彼は皮肉な心持で言ひ放つた。「そんなことは、現在の自分に何の交渉があるのか！」

と、こゝで彼は、彼女の夫に一切をぶちまけて懺悔し、先方の満足するためには何でも爲し兼ねない意氣込みを表白しようと決めた昨夜の決心を想ひ起した。然し今朝になつて見ると、それは昨夜思つた程に容易いものではなかつた。『濟んだことなんだ。何も知つてゐないのに、こちらから進んで人を不幸な者にする必要はあるまい。先方から訊いて来たなら、それは何でも話してやる。然し態々知らせに行く必要があるか？ 否、そんな必要はない。』

ミッシーに一切の眞實を打明けけることも亦、今朝になつて見ると困難なやうに思はれた。これも言ひ出すべき性質のものではなかつた——若しさうしたら侮辱を加へることになるであらう。世間の色々な關係に於けると同じく、不徹底な點は何うしたつて残つてゐなければならぬ。たゞ一つ今朝になつて彼の決めたことは、それは彼等の許へ行かないこと、そして訊かれたら本當の事を話してやるといふことであつた。

その代りカテューシャとの關係に於いては、聊かも不徹底なことを残してはならない。

『監獄へ行かう。彼女に打明けよう。そして許して貰はう。それから若し必要だつたら、さうだ、若し必要だつたら彼女と結婚しよう。』と彼は考へた。

道徳的満足のために、一切を犠牲にして彼女と結婚しようといふこの考は、今朝特に彼の氣持を和らげた。

こんな氣力を以て朝を迎へたことは、こゝ暫らく無かつたことだつた。

彼の室へ入つて來たアグラフェーナ・ペトロウナに對しても、直ちに自分でさへ豫期しなかつたほどの決斷力を出して、この邸宅も、彼女のお世話も最早要らなくなつたと告げた。彼がこんな大きな警澤な邸宅を構へてゐるのは、此處で結婚するためであるといふことが、暗黙の裡に決められてあつた。だから邸宅を人手に渡すといふ事は特別な意義を持つものであつた。アグラフェーナ・ペトロウナは驚いて彼を見た。

「アグラフェーナさん、いろ／＼お世話になつて、有難う存じます。然し僕にはもうこんな大きな邸や、多勢の奉公人は全く要らなくなりました。若しあなたがまだ僕のお手傳ひをして下さるんでしたら、家財道具を整理して、お母様ののめらした時のやうに、片づけて下さいませんか。何れナターシャも來て整理しますが。(ナターシャはネフリュードフの姉であつた。)」

アグラフェーナ・ペトロウナは首を振つた。

「何だつて整理なんかなさるんです。また直ぐ必要になる

ではありませんか。」と、彼女は言つた。

「いゝえ、もう必要はありません。アグラフェーナさん、大丈夫必要はありません。」と、彼女が首を振つたのに答へながら言つた。「どうかユルネイにも二ヶ月分の手當をして暇をやると、言つて下さい。」

「ドミートリイ様、そんなことなざつても詰りませんよ。」と彼女は反對した。「外國へでもお出でなさるお考へでせうけれど、それにしてもお邸は必要でございますよ。」

「それは見當が違ひます、アグラフェーナさん。僕は外國へ行くんぢやありません。行くとすれば全く方角違ひの處へ出かけます。」

彼は俄かに顔を眞赤にした。

『さうだ、これは打ち明けてやらねばならん。』と、彼は思つた。『何も秘すには當らない。さうだ、誰にでもすつかり話さなければならぬ。』

「實はね、僕には昨日大變なことが起つたのです。あなたは覺えてるでせう、カテューシャといふ娘を、マリヤ叔母様の處にゐた？」

「え、覺えてゐますとも。私はお針を教へてやりましたのですもの。」

「それでね、昨日の裁判といふのはあのカテューシャが調

べられたのですよ。僕は陪審員でした。」

「あれまア、何て可哀相なことせう！」と、アグラフェーナ・ペトロウナは言つた。「一體どんな事を調べられたのですか？」

「人殺しですがね、——それはみんな僕から出たことなのです。」

「御前様から、——そんなことがございませうか？ 何だか大層變なお言葉でございますわ。」と、アグラフェーナ・ペトロウナは言つた。そして老いの眼をきらりと光らした。

彼女はカテューシャとの一件を知つてゐた。

「いや、何も彼も僕が原因になつてゐるんです。それでこの通り僕の一切の計畫はがらりと變つてしまつたのです。」

「それだからつて、何も御前様までそんなにお變りなざらなくとも宜しいではありませんか？」と、微笑を抑へて、アグラフェーナ・ペトロウナは言つた。

「それがかうなんです。ね、あの女があんな道に入つた原因はこの僕にあるのですから、僕としては、あの女を助ける爲に、出来るだけのことをしなければなりません。」

「それは結構なお心懸でございます。ただどあの場合、特に御前様の罪ばかり取り上げることが出来ませぬまい。どなた様にもあり勝ちなことで、話さへ解れば、圓くをさまつ

て、忘れてしまふことなのですもの。そして何のこともなく生きて行かれるのですわ。」と、アグラフェーナ・ペトロウナは鹿爪らしく眞面目な態度で言つた。「それに、御前様ばかりが、その責を負はなければならぬといふわけはございませぬまい。私がずつと以前に聞きましたところでは、あの娘は、道に外れた渡世をしてゐたといふぢやございませぬか。さうして見ると、誰の罪といふことはありません。」

「それが僕の罪なんです。だから僕は眞人間にしてやりたいのです。」

「ですけれど、眞人間になさるなんて、とても大變なことでございますよ。」

「其處が僕の仕事なのです。ところで、あなたの身の振り方に就いては、お考へもありませんが、お母様の遺言で……。」

「私は身の振り方など考へては居りません。私はお亡くなりになつた奥様から、身に餘る御恩を受けてゐますから、この上何のお願がございませう。リーザンカ（これは他へ縁づいてゐる彼女の姪であつた）が、かねてから引き取るやうに申してゐますから、愈々お暇を戴かなければならない時は、私は其處へ参ります。ですけど、御前様がそのやう

なことにお氣を病やまれますのは、何としても詰らないこと
でございます。——どなた様でもあり勝ちなことござい
ますもの。」

「でも、僕はさうは思はないんです。まア兎に角お願ひで
すから、邸を人手に譲り、家財道具を片づけのお手傳ひを
して下さい。そして僕に腹を立てないで下さい。僕は何に
つけ彼かにつけ、あなたには心から感謝してゐるのですか
ら。」

不思議なことに、ネフリエードフは、世の中で最も憎むべ
き厭ふべきものは自分自身であると、氣が附いた時から、
他の人々を嫌ふ心がなくなつてしまつた。それどころでは
ない、アグラフィーナ・ペトロウナや、コルネイに對して
も優しい、尊敬の情が湧いて來た。彼はコルネイの前に自
分の非を告白したかつたけれど、コルネイの態度が、ひど
く自分に恐縮し過ぎてゐたので、何うも思ひ切つてそれが
出來なかつた。

裁判所へ行く途中、同じ街路を同じ辻馬車で通りながら
も、ネフリエードフは、今日の自分といふものを、昨日に變
る全然別個の者と感じて、その變り方の激しいのに、我な
がら驚いてゐた。

昨日はまだあれ程懐なつかかしいものに思はれてゐたミッシー

との結婚が、今は全く不可能なものになつた。昨日のうち
は、彼女に取つても自分と結婚するのが確かに幸福である
といふことに疑ひを挟まなかつた程、自分の地位を重く見
てゐた。が、今日は結婚するところではない、彼女と親し
くする資格さへ無い者だと自分を感じてゐた。『若しも彼
女にして、僕の何者であるかを知つたならば、何が何でも
僕を寄せつけないであらう。それなのに、僕は彼女が他の
紳士といちやつくのを見ると、それを咎め立てしようとし
てゐたのだ。いや、それどころではない。假りに彼女が今
僕と一緒にゐても、一方には今一人の女が監獄に
繋つながれてゐて、明日か明後日にも途中舎せう營しながら流され
て行くのだと知つてゐては、とても僕は幸福にはなれない、
幸福は勿論のこと、安心も出來まい。僕のために身を誤つ
た女が流刑にされようとしてゐるのに、僕はこちらで若い妻
と一緒に祝ひを受けたり、披露の訪問をしたりすることが
出來ようか。或は又、自分がその夫人と破廉恥なことをし
ながら騙だましてゐるあの貴族長と一緒に會議に列席して、地
方視學や學校などの決議案に對する賛否の投票を檢しらべたり
その後から彼の妻君へ密會の謀し合せをしたりすることが
出來ようか(何といふ下劣さだ!)。或は又、いつ物になる
か分わからないやうな繪の修業を續けようとしてそんなつまら

ないことに何時までも没頭してゐられようか。今の場合そんな暢氣のんきなことは、一切してはゐられない。」と、彼は獨語した。そして自分の感じてゐる内心の變化をとめどなく悦んだのであつた。

『何はともあれ、』と彼は思つた。『今は辯護士に逢つて意見を聞かなければならぬ。それから……それから監獄へ行つて、あの昨日の女囚に面會して、一切を打ち明ければならぬ。』

さうして、ネフリュードフは、彼女に逢つて、一切を語り、彼女に自分の罪を詫び、その罪を償ふためには出来るだけのことを盡し、場合によつては彼女と結婚してもよい、といふことを話す時の光景を胸に描いて見た。すると、何とも言へない歡喜の情が湧いて來て、思はず涙が眼に滲にじみ出すのであつた。

三四

裁判所へ着くと、ネフリュードフは、早くも廊下で昨日の廷吏に出會したので、宣告済みの囚徒は何處に收容されてゐるか、それに面會するには誰の許可が要るかなどと、いろいろ訊いた。廷吏の説明によると、囚徒は諸方に收監されてゐる。そして更に確定した宣告が言ひ渡されるまでは、

面會の許可は檢事から出るといふ。——「裁判が済んだら私が呼びに参りませう、そして御案内しませう。檢事は今此處にはゐません。裁判が済んでからです。どうぞもう法廷の方へ。直ぐ始まりますから。」

ネフリュードフは廷吏に禮を述べた。親切にしてくれるこの廷吏が、今日は特に氣の毒に思はれたのであつた。それから彼は陪審員の控室へ行つて見た。

彼がこの室に近づいて行つた時は、陪審員達はもうそこから出て、法廷へ行くところであつた。例の商人は相變らず少し飲んでゐて、昨日と同じ御機嫌であつた。ネフリュードフに會ふと、まるで舊友のやうに迎へた。ピョートル・デラシモウィチも今日はその慣れ／＼しさや高笑ひで、ネフリュードフに聊かも不快の感を起させなかつた。

ネフリュードフはすべての陪審員達の前で、自分と昨日の一被告との關係を話しかつた。『本當のことを言ふと、』と彼は思つた。『昨日裁判中に起立して、自分の罪を公然と發表すべきであつた。』然しながら、大勢の陪審員達と一緒に法廷に入つて、昨日と同じプログラムが始まり、同じ『開廷』か宣言され、同じ金モールの襟飾襟飾の裁判官が三人高座に上り、同じ沈黙のひと時があり、同じ陪審員達が背當背當の高い椅子に着き、憲兵が來て、それから司祭が現はれると、

——彼は、告白をしなければならぬと思つてゐても、昨日と同じやうにこの莊嚴さを破ることは出来ないやうに感じられた。

裁判の準備は昨日の通りであつた。(尤も陪審員の宣誓と、裁判長の彼等に對する説明とは省かれた。)

今日の事件は侵入竊盜犯に關するものであつた。拔刀した二人の憲兵に護られた被告は、灰色の上衣を着、血の氣のない灰色の顔をして、肩をすぼめてゐる瘦せ細つた二十歳の若者であつた。彼はひとり被告席に坐つてゐて、入つて來る人達を偷み見してゐた。この若者は、もう一人の相棒と、物置小屋の鏡前を破つて、その中から價が三ルーブリ六十七コペイカに當る古席を盗んだ科によつて、告發されたのであつた。告訴狀によつて見ると、席を擔いだ相棒と一緒に歩いてゐるところを巡查に呼び止められ、そして兩人共直ちに白狀して牢屋に打ち込まれてしまつた。が、相棒の鏡前職は牢死したので、若者一人だけ調べられることになつたのだつた。卓子の上には古席が證據物件として載せてあつた。

審問は丁度昨日の通り、證據書類、證據物件、證人、宣誓、訊問、鑑定人、對審と云つた順序であつた。證人の巡查は、裁判長や、檢事や、辯護士などの質問に對して、「さ

うであります。」「知りません。」「また」「さうであります」などどぶつきら棒に言ひ放つてゐた。……然しその兵隊染みた遲鈍さの上に、一體がでくの棒のやうな男であつたにも拘はらず、彼がこの若者を不憫がり、その捕縛の話もいやながらしてゐることは推測に難くなかつた。

もう一人の證人は病みほうけた老人で、家主でもあり、その古席の所有者でもあり、如何にも癡癡らしい人であつたが、この席はお前のものかと訊かれた時、ひどく澁々とそれを自分の物と承認した。ところが、副檢事が彼に向つて、この席を如何なる使用に供する積りであつたか、またそれはお前にとつて非常な大切なものであつたかと訊問すると、彼はかん／＼に怒つて、「篋棒め、こんな席などは何うならうと構ふもんか。まるつきり要りもしないものだ。こんな席きれのためにこれ程の面倒臭いことが起ると知つてたら探すんぢやなかつた。それどころではない、こんなところへ引張り出されて調べられないやうに、こちらから赤札(十ルーブリ)の一枚や二枚は附けてやりたかつた。俺は馬車賃に五ルーブリばかり取られてしまつた。それに體が悪いんだ。脱腸とリウマチスで困つてるんだ。」と述べた。

證人達の陳述はこんな風であつたが、本人の被告はすべ

てを自分の罪にして、まるで捕はれた獸のやうに、無意味にきよとく四邊を見廻しながら、途切れくに一伍一什を有りのまゝに物語つた。

事件ははつきりしてゐたが、然し副検事は昨日と同じやうに肩を聳やかして、どんな狡猾な犯人でも眞に陥め込まねばやまないやうな鋭い質問を發するのであつた。

彼はその辯論に於いて、この竊盜は人家に侵入して行はれたものであるから、最も重い刑に處せられねばならぬと立論した。

ところが裁判所指定の辯護士は、この竊盜は人家で行はれたのではないから、犯行そのものを否定することは出来ないが、被告は、今副検事の論告したやうな危険性を社會に對して持つてゐるのではないと證言した。

裁判長は昨日の通り、無私と公平とを標榜し、陪審員達に向つて、既に知つてゐること、當然知らなければならぬことを、くどくどと説き聞かせた。昨日の通り幾度か休憩が宣せられ、昨日の通り喫煙し、昨日の通り廷吏が『開廷』を喚き立て、犯人を威嚇するために抜刀して坐つてゐる二人の憲兵も、同じやうに居眠りをすまいと努めてゐた。調書によると、この若者はまだ子供の時、父から煙草工場へ小僧にやられ、そこに五ヶ年奉公してゐた。ところが本

年工場主と労働者側との間に生じたいざこざの後、彼も雇主から解雇され、それから仕事の手が無く、たゞぶら／＼となけなしの金を酒にかへながら町を歩き廻つてゐた。そのうちに或る居酒屋で、自分と同じやうに、いや、もつと以前から職を失つて、ひどく飲み歩いてゐた錠前職の男と一緒にあつた。そこで或る晩二人は酔つた勢で、とある物置小屋の錠前を壊して、手當り次第に何か持ち出したのであつた。二人は捕まると残らず白状して、監獄に入られたが、錠前職は公判を待たずに其處で死んでしまつた。で、若者ひとり今このやうに、社會から隔離しなければならぬ危険な代物として裁きを受けるのであつた。

『これも昨日の女犯人と同じ程度の危険人物なんだ。』と、ネフリネードフは自分の前に進行してゐる一切の事に耳を傾けながら考へた。——『彼等が危険人物で、僕等は危険人物でないのかしら？……僕は放蕩者である、ペテン師である。一體僕等は何だ？ それから僕の何者であるかを知りながら、たゞに輕蔑しないばかりか、寧ろ尊敬してゐるそれ等の人々は何だ？』

この若者が取りたてゝ云ふ程の惡黨ではなく誰もの眼に映する通り、最もありふれた人間であつて、かうした人々を生み出すやうな環境に置かれたからこそ、現在の如き状態

になつたといふことは明白ではないか。それ故にかうした若者を無くなすためには、かうした不幸な人間を産み出すやうな環境を作らぬように努力せねばならぬといふことも明白だ。

『この若者が貧困のために田舎から都會へ奉公に出される時、彼を憐れんで、その貧困を救つてくれるやうな人間が出さへすればよかつたのである。』と、ネフリュードフは、若者の病みほゝけたやうな、きよとくした顔を見ながら考へた。『いや、都會に出てしまつてからでも遅くはなかつた。彼が、工場で十二時間の労働を終つてから、年上の仲間と連れられて、居酒屋へ足を運び出した時、ワーニャよ、そんな處へ行くな、ためにならない。』と一言云つてくれる者が出ればよかつたのだ。——さうしたら若者も行かなかつたに違ひない。従つて横道にも外れず、悪事もしなかつたであらう。』

『然るに、彼を憐んでくれるやうな人間が出なかつた。彼がその年期奉公中、都會で小さな動物みたいな生活を送り、虱の湧かないようにと頭の毛を短く刈り込まれて、他の職人達の走り使ひなどしてゐたその間、情をかけて呉れる人間はたゞの一人もなかつた。ないばかりか、あへてこゝに、彼が都會生活をするやうになつて以來、年上の職人や仲間

から聞かされるところは皆人を嘔したり、酒を飲んだり、悪口を吐いたり、喧嘩をしたり、道楽をしたりする者が多いのだといふことであつた。』

『更にまた、彼が健康を損ねる労働や飲酒や放蕩に身を持ち崩して、阿呆みたいに、氣違ひみたいに、夢遊病者みたいに、あてもなく町をうろついて、つひうか／＼と物置か何かへ忍び込み、何の役にも立たない蓆ぎれをそこから引摺り出したこの場合に、僕等は、この若者を現在の状態にまでこき落した原因を除くことに就いては少しも考へないで、寧ろこの若者を罰することによつてその場を繕はうと思つてゐるのだ！』

困つた事だ！

ネフリュードフは、裁判の進行などにはもう耳も假さず、たゞ／＼この事ばかり考へてゐた。そして實例を眼の前に示されて、恐怖に打たれた。何うして彼はこれまでこんなことを目にとめないで居られたらう、何うして他の皆の者は之を見ないで居れるのだらうと、それが怪しまれてならなかつた。

三五

最初の休憩時間になると、ネフリュードフは起ち上つて、

もう二度と法廷へ歸らぬつもりで廊下へ出た。自分の處置については、彼等の好きなやうにさせて置けばよい。然し自分はこんな喜劇のお仲間入りは、これ以上出来ないと思つた。

ネフリュードフは、検事室のありかを尋ねて、其處へ行つた。小使は、検事は今忙しいからと云つて、取次がうともしなかつた。然しそれを押切つて扉を開けた。すると、一人の役人がゐたので、自分が陪審員であることゝ、甚だ緊急な用事で是非検事に面會したいといふ意味を、取次いでくれるやうにと頼み込んだ。公爵の肩書と、立派な服装とのお蔭で、ネフリュードフは大に助かつた。役人が検事に取次いでくれたので、わけなく通されたのである。検事は、ネフリュードフが執拗く面會を求めたのを、さも迷惑さうにしながら、立つたまゝ彼に接した。

「何ういふ御用件ですか？」と、検事は嚴格に問うた。「私は陪審員の一人で、ネフリュードフと申しますが、是非被告のマースロワに面會しなければならぬのです。」と、自分の生涯に決定的な變動を齎らさうとしてゐる行動に出たことを感じ、顔を赧らめて、早口にきつぱりと言ひ切つた。

検事は背の低い、色の淺黒い男で、白くなりかゝつた髪

の毛は短かく、動きの早い眼は光つて、しやくれた下顎には、刈り込んだ濃い髯を貯へてゐた。

「マースロワに？ うむ、承知して居ります。あの、毒殺で訴へられた？」と、検事は落ちついて言つた。「で、あなたは全體何のために面會なさるのでですか？」と言つたが、やかて氣を和らげるつもりらしく、「御用事の向きがわからないと、私は許可するわけに参りません。」と附け加へた。

「實は私一個にとつて頗る重大な用件がありますので。」と、ネフリュードフは、ぼつとなつて言ひ始めた。

「左様ですか。」と検事は云つた。そして眼を釣り上げて、つく／＼とネフリュードフを見つめた。「で、その事件はもう公判に附されたのですか、それともまだですか？」

「昨日公判がありました、徒刑四ヶ年といふ全く不當な宣告を受けましたが、その女は實は無罪なのです。」

「さうですか。昨日宣告を受けたばかりとすれば。」と、検事は、ネフリュードフがマースロワの冤罪を聲明してゐるのには何等の注意も拂はず、――「正式の宣告を發表する前ですから、まだ未決監に居る筈です。あすこは面會日が決つてゐます。あなたはそちらへお出でになる方がよいでせう。」

「しかし私は一刻も早く面會したいのです。」と、下顎をわな／＼慄はせながら、ネフリードフはいよいよ最後の瞬間の迫つたことを感じて言つた。

「何うしてそんなにお急ぎになるのです？」と、やゝ不安さうに眉を釣り上げて、検事は訊いた。

「それは、あの女が罪もないのに徒刑の宣告を受けたからです。そして、その事は一切の責任は、この私に在るのです。」と、ネフリードフは言はないでもよいことだと思ひながら、震へ聲で言つた。

「それはまた何ういふ譯です？」と検事は訊ねた。

「實は私があゝの女を騙して、今のやうな状態に陥れたからです。若しあゝの女が私に誘惑されなかつたら、こんな告訴にも遭はなかつたと思ひます。」

「その事と面會とが何ういふ關係をもつてゐるのか、何うも私にはわかり兼ねます。」

「それは何です、實は私もあゝの女の後を追つて行きたいのです……そしてあゝの女と結婚したいのです。」ネフリードフは途々言つてしまつた。そして例によつて、彼かこの事とに言及しかゝると、その眼には涙が滲み出した。

「へエツ？ それは何うも！」と検事は言つた。「頗る突飛なことですな。たしかあなたはクラスノペルスク地方自治

會の議員でしたかね？」検事は以前噂に聞いてゐたネフリードフと、今このやうな奇怪な決意を表明してゐるネフリードフとを思ひ較べようとするものゝ如く、かう言つて訊ねた。

「失禮ながら、それは私のお願ひとは關係のないやうに思はれますが。」と、ネフリードフはかつとなつていまくしげに答へた。

「勿論、關係はありません。」と、ほんの心持ち微笑を含みながら、しやくとして検事は言つた。「しかしあなたの御希望は何とも意外で、普通の型からは餘程飛び放れて居ります……」

「それで、面會を許して頂けないでせうか？」

「面會ですか？ 只今認可證を差上げます。まあどうぞお掛け下さい。」

彼は卓子に近づいて、腰を下して、それから書き始めた。

「どうぞまあお掛け下さい。」
ネフリードフは立つてゐた。

認可證を書きあげると、検事はその書附を渡しながら、物珍らしげに彼を眺めた。

「私はもう一つ申上げねばならないことがあります。」と、ネフリードフは言つた。「それは、私はもう出廷を續ける

ことが出来なくなりました。」

「それでは、御存じの通りに、然るべき理由を具して、法廷へ届けなければなりません。」

「理由と申せば、私が一切の裁判を無益なものと思つてゐるばかりでなく、寧ろ不道徳なものと認めてゐることがそれなんです。」

「成程、」と言ひながら、検事は矢張りほんの心持ちばかりの微笑を浮べてゐたが、その微笑で以て、そんな言ひ草は珍らしくもない、誰でも知つてゐる笑止千萬なことであるといふことを示してゐるらしかつた。「成程御尤もですが、然し私は検事としての職掌上、あなたのお説に賛成出来ないことを御諒察下さい。ですから、これは一應法廷の方へお出しになるようお勧めします。さうすれば法廷の方ではあなたの申出を正當なものとか、又は不正當なものとか何れかに解決します。そして後の場合だとあなたに罰金を課するでせう。兎に角まア法廷へお出し下さい。」

「私はもうこゝでお話しましたから、これ以上何處へも持つて行きません。」と、腹立たしげに、ネフリュードフは言ひ放つた。

「では、左様なら。」と、検事は首を下げ、こんな變な訪問者からは一刻も早く遁れようとするものらしく、かう言つ

た。

「今、君と話してゐたのは誰だい？」と、ネフリュードフの出した後で、その検事室へ入つて来た同僚が訊いた。

「あれが君、ネフリュードフだよ。知つてゐるだらう、ほらあのクラスノベルスク郡にゐる頃、よく地方自治會でいろいろな風變りな説ばかり持ち出してゐた男さ。何うだい、あれで陪審員だよ。話によると、徒刑の宣告を受けた女だか、娘だか被告の中にあるさうだが、そいつが、昔あの男にだまされた女なんださうだ。それであの男は今からその女と結婚しようつてんだよ。」

「そんな馬鹿なことがあるもんか？」

「だつて、本人がさう言つて話したんだよ……。實に奇抜な興奮のしかただね。」

「いや、現代の青年には何だか、どうも非常識なところがあるて。」

「だが、あの男はもうそんな青年でもないぜ。」

「それはさうと君、あの有名なイワシエンコフにも弱るね。全くうんざりしてしまふよ。饒舌りだと限りがないんだからね。」

「なあに、あんな奴等は頭から差止めてしまふさ。でない」と、あれでは議事の邪魔になつて仕様がなない。」

三六

檢事のところから、ネフリードフは眞直ぐに未決監へ行つた。しかし行つて見ると、そこにはマースロワはゐなかつた。屹度舊い移送監獄の方にゐるであらうと、典獄はネフリードフに話した。で、彼はそちらへ行つた。

果して、エカテリーナ・マースロワは其處にゐた。

未決監から移送監までの距離は随分あつたので、ネフリードフがそこへ着いた時にはもう夕方近かつた。大きな陰氣臭い建物の門を入らうとすると、門衛が聞きとめて、ベルを鳴らした。すると、それに應じて看守が出て來た。ネフリードフが面會認可證を出して見せると、看守は、典獄の許可がなくては通すことが出來ないと言つた。で、ネフリードフは典獄の處へ向つた。また階段を上つてゐるうちから、扉のむかうにピアノの音がして何だか複雑な面白い曲を奏しているのが聞えた。やがて、片眼に繻帶した小間使が、扉を開けてくれた時、そのピアノの音は部屋の中から迸り出たやうな氣がして、また彼の聴覺を驚かした。それはもう聞き飽きてゐるリストの狂躁曲で、なか／＼手際よく弾かれてゐたが、しかしたゞ一節だけに止まつてゐた。或る厄介なところまで來ると、また初めから繰返されるの

であつた。ネフリードフは繻帶した小間使に、典獄が在宅か何うかを訊ねた。

小間使は不在だと言つた。

「すぐお歸りになりますか？」

狂躁曲は忽ち止まつたが、またさつきの呪はしいところの前まで、鮮やかに賑やかに繰返された。

「伺つて參りませう。」と、小間使は出て行つた。

狂躁曲がまたあはれ出したかと思ふと、突然その呪はしいところまで行かない前に、ハタと止んで、人聲が聞えて來た。

「お留守で、今日はお歸りが無いつて言つておやり。お客に行つてるんだから。ほんとにうるさいことね。」と、扉のむかうから女性の聲がした。そしてまた狂躁曲が聞えて來たが、それもすぐ止んだと思ふと、今度は椅子を押しつける音がした。それは明らかに氣をくさしたピアノリストが、時ならぬ厄介な訪問者に、自分から小言を言つてやらうと思つたのであつた。

「お父様は留守ですよ。」と、出て來ながら突慥言に言ひ放つたのは、どんよりした眼の下に痣のある、顔の青褪めた、縮れ毛の弱々しい娘であつた。が、立派な外套を着てゐる若い男を見ると、彼女は急に顔色を和らげた。——「まあど

うぞお入り下さい……どんな御用でございませうか？」

「監獄にゐる囚人に面會したいのですが。」

「それは國事犯でせうね？」

「いえ、國事犯ではありません。私は檢事の認可を買つて來てゐるのです。」

「ですが、私には分りません。お父様がゐませんから。でもまあどうぞお入り下さいまし。」再び彼女は、小さい玄關の間へ招じた。「何でしたら、典獄補にお話しなされて御覽なさいまし。まだ役所に居りませうから。あのお名前は何？」

「有難う。」と言つて、ネフリードフは間には答へずに、さつさと出て行つた。

彼の背後で扉の閉まらないうちから、またもや、あの陽氣な賑やかな曲が響き出した。が、それは、こんな場所柄にも、またそれを熱心におさらひしてゐる、いたゞしい娘の顔色にも、不似合なものであつた。庭へ出ると、ネフリードフは、染毛した短かい口髭のある、青年將校に逢つたので、典獄補のことを訊ねた。と、彼は認可證を手にとつて見て、未決監への認可證では、そこへ行けると極つてゐない、それに、もう時刻が遅いから、明日來た方がよいと言つた。

「明日の十時には一般に面會が許されます。その時には典獄も居りますから、お出で下さい。さうすれば一般面會所でなり、また典獄の許可さへあれば事務室でなり、面會が出來ます。」

こんな風で、ネフリードフは、その日は遂々目的を果さずに家へ歸つた。彼は彼女に會ひたいといふ考で一杯だつたので、歸る道すがら、裁判所のことなどはもう念頭になく、檢事や典獄補の交渉ばかりが憶ひ出された。それに、彼女と面會するための手段を捜し廻り、自分の意圖を檢事に告げ、彼女に會ひたいばかりに二ヶ所の監獄へ行つて見たことによつて、彼はすつかり興奮して了ひ、容易には落ちつけなかつた。歸ると直ぐ、長いこと手に觸れなかつた日記を出して、そのうちの或る箇所を拾ひ讀みしてから、次のやうに書きつけた。

「二年間自分は日記をつけなかつた。そして再びこんな兒戲を繰返すまいと思つた。が、これは決して兒戲ではない。自己との對話だ。人々のうちに生きてゐる神聖な眞の自我との對話だ。が、この二年間自分の自我は眠つてゐたので、自分には話相手がなかつた。之を呼び醒ましたのは、四月二十八日、自分が陪審員として出頭した裁判所に於ける意外の事件であつた。曾て僕に騙された彼女が、カチューシャ

が囚人服を着て被告席にゐた。妙な行き違ひと自分の誤りから彼女は徒刑を宣告された。僕は直ちに検事を訪ね、監獄へ行つた。面會は許されなかつた。しかし僕は、彼女に會つて彼女の前に懺悔し、結婚してゞも自分の罪を贖ひ、それがためには、何でもすることに決めた。神よ、どうぞお助け下さい！ あゝこれで氣持がよくなつた、心は歡びて一杯だ。』

三七

その夜マースロワは長いこと寢つかれなかつた。眼を開けたまゝ、教會執事の娘が往つたり來たりしてゐる扉を見ながら考へてゐた。

彼女の考へてゐたのは次のやうなことであつた。自分はどうなことがあつても、サガレンの囚徒とは一緒にならぬ。何とかして役人か、書記か、さもなければ看守か、看守見習でもよい、さうした者と出來合ふやうにしよう。これにはあの男達は皆飢ゑてゐる。そして『それにしても瘦せたくないものだ。瘦せたらおしまひだから。』と思ふと、辯護士が彼女をよく見てゐたことや、裁判長がよく見てゐたことや、また會ふ人會ふ人、態々彼女のそばを通つて行く裁判所の人々などが、よく自分を見てゐたことを憶ひ浮べ

た。又、監獄へ會ひに來てくれた朋輩のベルタの話で、自分がキターエワにゐた時の馴染客の一大學生が、態々訪ねて來て安否を聞き、ひどく氣の毒がつてゐたといふことを思ひ出した。それから赤毛の女と喧嘩して、却つてその女が氣の毒になつて來たことや、麵麩屋が卷麵麩をまけてくれたことなど、色々様々の記憶を喚び起したが、ネフリユードフのことだけは少しも憶ひ出さなかつた。尤もマースロワは、少女時代の事や、娘盛りの事や、殊にネフリユードフとの戀に就いては、少しも憶ひ出したことがなかつた。それは餘りにも悲痛であつたからだ。是等の想ひ出は魂の何處か深いところにそつと觸らぬやうにしまひ込んであつた。夢にさへもネフリユードフのことを見たことはなかつた。裁判所で彼女が彼に氣づかなかつたのは、最後の會見の時、彼が軍服を着てゐて、頸鞆もなく、たゞちよつぱりと口髭を生やしてゐただけで、頭の毛も短く刈り込んであつたが濃く波打つてゐたのに、今はもう一見して青年ではなく、頸鞆まで貯へてゐたからだといふばかりではない、實はてんで彼の事を思つてゐなかつたからであつた。彼が出征軍からの歸途、叔母達の家へ立ち寄らずに、素通りしてしまつたあの眞暗な怖ろしい晩に、彼女は自分と彼との間の過去の思ひ出をすつかり葬つてしまつたのであつ

た。

あの晩までは、彼女は彼の歸りをあてにしてゐた。そして腹の中の胎兒をも別に苦にしなかつた。苦しなかつたばかりではない、時々不意に自分の體のうちに柔かい塊りの動き出すのを感じる、妙に心が和むのであつた。けれどその夜を境としてすべてが一變してしまつた。そして未來の嬰兒はたゞ一つの厄介物になつてしまつた。

叔母達もネフリードフの歸りを待つてゐた。是非立ち寄るようにと云つてやつた。然し彼は期日までにペテルブルグへ行かねばならぬから、立ち寄ることは出来ない、電報で斷つて來た。それを聞くと、彼女は停車場まで出かけて行つて、彼に會はうと決心した。汽車は夜の二時に其處を通ることになつてゐた。カテューシャは二人の老主人を寢床へ就かせてから、賭方の小娘のマーシユカを誘つて、古靴を履き、被布をすつぽりと頭からかぶり、裾を端折つて停車場へ急いだ。

秋の荒れ模様、暗い夜の夜であつた。雨はなまぬるい大粒のが一としきり降つては又止んだ。足もとの野路は見えなかつた。林の中は燠爐の中のやうに眞暗だつた。それでよく知つた道ではあつたが、カテューシャは森の中で踏み迷ひ、漸く小さな停車場へ辿りついた時は、汽車は其處に三

分停車したゞけで、彼女の燃ゆる思ひも待たずに、もう第二のベルが鳴り止んだところであつた。カテューシャはプラットホームに駆け込み、直ぐに一等室の窓のところへ行つて、彼の姿を見つけた。その室には特に煌々たる燈火が點いてゐた。天鵞絨張りの安樂椅子には二人の將校が差し向ひに坐つて、トランプをしてゐた。机の上には窓によせて、熔け流れる太い蠟燭が何本か點いてゐた。彼はきちんとした乗馬ズボンに白のルバーシユカといふ身装で、安樂椅子の腕に腰をかけ、その背當に凭れかゝつて、何か笑つてゐた。その顔を見るや否や、彼女は凍えた手で窓を叩いた。然し丁度この途端、第三のベルが鳴つて、汽車はがたりと一と揺れ後へ下つて、やがて車と車とが衝突かりながらしづくと一輛づゝ動きはじめた。トランプをしてゐた一方の將校が、そのトランプを手にしたまゝ立ち上つて、窓を覗いてくれた。彼女はもう一としきり叩いて顔を窓硝子に觸れた。この時彼女の立つてる前の輻に當りが來て、動き出した。彼女は窓を見ながらそれにつれて歩き出した。將校は窓を降ろさうとしたが、なか／＼出来なかつた。ネフリードフは立つて來て、その將校を押し除けて、自分が降ろし初めた。汽車が速力を加へて來たので、カテューシャも急ぎ足で歩いてゐた。いよ／＼汽車が早くなつた時、窓が降りた。

と、丁度この時、車掌が彼女を押しつけて、車に飛び乗つた。彼女は後れかゝつたが、それでもブラットホームの濡れた板張の上を駈けてゐた。やがてブラットホームは盡きた。カテューシヤは辛うじて轉ばないように調子をとつて階段から地面に駈け降りた。彼女は駈けつゞけてゐた。しかし一等車はもう前方遠く行つてしまつて、二等車がその側を早く通過すると、續いて三等車が更に速く過ぎて行つた。それでも彼女は走り續けてゐた。やがて最後の給水タンクの前まで來てゐた。風がひゆう／＼吹きつけて、彼女は頭からとれかゝり、着物の裾は片側から彼女の馳せ行く兩足にはりついた。被布はとう／＼風のために吹き飛ばされてしまつた。それでも猶ほ彼女は駈け續けてゐた。「小母さん！」と、どうにか彼女の後からついて來た小娘が叫んだ。「被布が飛んでよ！」

カテューシヤは立止まつた。そしてふり返りざま、彼女を抱いて、わつと泣き出した。

「行つてしまつたわ！」と彼女は叫んだ。

『あの人はあんな眩しいやうな一等車で、天鷲絨の安樂椅子に腰掛けて、巫山戯たりお酒を飲んだりしてゐる。——だのには私は此處にかうして暗闇に、泥だらけになつて、雨

風にさらされながら、立つて泣いてゐる。』と、心のうちで思ひながら、地べたに坐つた。そして大きな聲で泣き出したので、小娘はびつくりして、彼女を濡れた着物の上からかき抱いた。

「小母さん、歸らうよ。」

『今に汽車が通りかゝつたら——車の下へ。さうだ、それでいゝんだ。』カテューシヤはこんなことを考へてゐて、小娘には返事もしなかつた。

さうしようと彼女は決めた。ところが丁度その時、興奮後の落ちついた瞬間にはよくあることだが、胎兒が、彼女のうちに在る彼の兒が、急に身慄ひして、こつんと當り、それから徐かに伸びをし、そして又何か細い、しなやかな尖つたものでチク／＼つゞくのであつた。すると、一分前まではとても生きて居られないと思ふほど辛く感じたことも、男に對する憎惡も、せめては面當に死んで復讐しようと思ひつめた念ひも、——すつかり何處へか行つて了つた。彼女は落ちついて、起ち上つて、身裝を直し、頭に被布をかぶつて歩きだした。

草臥れて、びしょ濡れになつて、泥にまみれたまゝ家へ戻つたが、その日から彼女の心の中には一種の變化が起つて、そのために今見るやうな境遇になつて了つたのである。そ

の怖ろしい夜から、彼女は神をも善をも信じなくなつた。それまでは彼女自らも神を信じ、また人々も神を信じてゐると思つてゐた。しかしその夜以來、誰一人それを信じてゐる者は無い、神に就いて、神の掟おきてに就いて言はれてゐることは、みんな出鱈目であり虚偽であると思ひ込んでしまつた。彼女から愛され、自らも彼女を愛してゐた（それは彼女もよく分つてゐた）彼は、一旦彼女を弄もてあそんだ後は彼女を捨て、振向きもしなかつた。けれど彼こそは、彼女の知つてゐる限りのすべての人々の中で最も立派な人であつた。その他の人々はすべて彼よりも劣つてゐた。それは彼女の出會であつたした一切の事によつて一々裏書きされるのであつた。彼の叔母の、あれほど信心深い老婆達さへも、彼女が今まで通りに奉公が出来なくなると、彼女を追い出してしまつた。彼女の出會つた女といふ女は皆、彼女を金儲けの道具に使はうと努めた。――また男といふ男も皆、老聾長をはじめ、監獄の看守に至るまで、彼女を快樂の目的物と考へた。誰にしてもこの世の中では快樂以外に何物も無かつた。この確信は、嘗て彼女が自由な生活の第二年目に同棲してゐた老小説家によつて、一層強められた。彼は、一切の幸福は快樂に在ると明言し、之を名づけて詩と呼び美と稱したのであつた。

人は皆自分のために、自分の快樂のために生きてゐるのであつて、神とか、善とかいふ言ひ草は皆欺瞞であると思つた。若し何うかした時、何故なぜすべての者が互に悪い事を合つて共々に苦しまなければならぬやうに、世の中の一切がまづく出来てゐるのであらうといふやうな疑問が起つたならば、そんな問題は深く考へない方がよいと思つた。若し世の中が詰らなくなれば、煙草を喫くむか、酒でもあふるか、さもなれば、男と好い仲になつてゐるのが一番で、さうしてゐるうちにすべては過ぎ行くのであつた。

三八

そのあくる日、日曜の朝五時に、女囚監房の廊下でいつもの笛が鳴ると、早くから目を覺ましてゐたコラブリョロワはマースロワを喚び起した。

『徒刑囚』と、マースロワは心中ぞつとしながら、眼を擦り、明方のいやに臭い空氣を思はず吸ひ入れた。と、もう一度ぐつすり寝入つて、忘却の世界へ行きたかつたけれど、情氣じやうきの癖くせがついてゐるので、もう眠れなかつた。で、とうとう起きることにし、足を揃へてあたりを見廻しながら坐つてゐた。女囚達はもう起きたが、たゞ子供等だけはまだ眠つてゐた。酒の密賣で捕へられてゐた出目でめの女は、子供

等の眼を醒まさないやうにして、彼等の下から上衣をそつと取つた。夫を殺した線路番の女房は、煖爐のところで、襦袢おむつにしてゐる襦袢じゆんぱんを擲なげてゐたが、赤兒あかごの方は碧い眼のフードシヤに抱かれて、火のついたやうな泣聲を揚げてゐた。フードシヤは優しい聲を出してそれを謙かたじけなくしながら、自分の體からだと一緒に揺ゆつてゐた。肺病はいびょうの女は、胸をかゝへ、顔を血だらけにして、咳せき入つてゐたが、その途切れ目には殆んど泣きながら大きな溜息を吐くのであつた。赤毛の女は眼を醒ましなから、仰あやむけけになつて、太い兩足を折り曲げ、そして大聲に面白おもしろさうに今見た夢の話をしてゐた。放火犯の老婆はまた聖像の前に立つて、同じことを繰返し／＼囁ささやきながら、十字を切つては跪拜くわいはいしてゐた。教會執事の娘は寢床の上にじつと坐つてまだ醒めきらぬ、どんよりした眼付で、すぐ眼の前を見詰めてゐた。洒落女は、油光りのする硬かたい、黒髪を指に捲まきつけてゐた。

廊下には百姓靴をひき摺る蹠音あしなが聞えて、錠前かぎまへのがちやがちやいふ音がした。そして、二人の囚人の肥取りが入つて來た。何れもジャケツを着て、足首までは餘程隔たりのある短い灰色のズボンを穿き、眞面目まじめ臭つた氣難きがたかしい顔をして、臭い桶を天秤棒てんびんぼうで擔かいで、監房の外へ持ち出した。女囚達は廊下の水槽すいそうのところへ顔を洗ひに行つた。其處で

また、赤毛の女と、隣の監房から出て來た女と喧嘩をはじめた、又しても毒づいたり、叫んだり、泣きわめいたりした。「懲罰所へでも入りたいのか！」と、看守は怒鳴りつけて、赤毛の女の肥ふつた背をびしやりと毆うつたが、その音は廊下中へ反響する位くらいであつた。「騒さわいぢやいかん！」「まあお爺おやさんのいたづらつたら。」赤い毛の女は、打たれたのをお愛想だと思つてかう言つた。

「さあ早く！ お詣りの支度をしないか。」

マースロワが髪を梳としきらないのに、もう典獄が部下を連れてやつて來た。

「點呼てんこに出るんだ！」と看守が叫んだ。

方々の監房から女囚達が出た。一同は廊下なりに二列に並び、後列の者は前列の者の肩へ兩手を掛けた。そして點呼を受けた。

點呼が濟むと、女看守が來て女囚達を教會堂へ引率した。マースロワとフードシヤとは、すべての監房から出拂つた百人以上もある女囚の行列の中行程にゐた。皆、白い頸巻くびまきに、白いジャケツ、白いスカートを着けてゐた。が、中には思ひ思ひの色物いろものを着てゐる者も偶にはあつた。それはシベリヤの夫の處へ行く子持ちの女達であつた。階段はこの行列で埋つた。百姓靴を履いてゐる柔かい蹠音あしなや、話聲わしやうや、時には笑

聲などが聞えた。曲り角でマースロワは前方を歩いて行く自分の敵のボーチコワの憎々しい顔を見かけて、それをワードシヤに教へた。下へ降りると、女囚達は黙つてしまつた。そして十字を切つたり、禮拜したりしてから、まだ誰もゐない金色燦然たる會堂の開け放たれた扉の中へ入つて行つた。彼女等の場所は右側であつたので、一方へどや／＼と押し合ひへし合ひしながら整列した。女囚達の後から、灰色の上衣を着た男囚達が入つて來た。移送される者、居残る者、宣告によつて追放される者などであつた。彼等は大きな咳拂ひをしながら、一團となつて、會堂の左側と中程に席を取つた。上手のコーラスのところには、一足先に引率されて來た者が立つてゐた。片側には頭を半分剃つた徒刑囚が、鎖の音をがちやつかせながら、自分達の參列してゐることを見せてゐた。又片側には頭も剃られない、鎖もつけられてゐない未決犯の人々がゐた。

監獄の禮拜堂は、數萬金を寄附した或る豪商の力で新築修飾されたものだけあつて、明るい色彩と金色とに照り輝いてゐた。

暫くの間、會堂の内部は森然としてゐた、たゞ涙をかむ音と咳拂ひの聲と赤兒の叫びと、それから何うかすると鎖の響だけが聞えてゐた。と、やがて中程に立つてゐた囚人

等が動き出し、互にくつつき合つて、まん中に一條の道を作つた。するとその道を通つて、典獄がやつて來て、會堂のまん中の、衆人の前方に立つた。

三九

禮拜式が始まつた。

禮拜式は次のやうな順序で行はれた。先づ司祭が一種奇妙な、頗る勝手の悪さうな金襴の衣を着て、様々な人名や祈禱文を唱へながら、皿の上の麵麴を刻み、その細かい斷片を並べ、それから、之を葡萄酒の入つてゐる盃の中へ入れた。讀經者はその間休むことなく、初めは讀みあげ、次には囚人から組織されたコーラスと代る／＼歌つた。ところがその様々な祈禱の文句は解りにくいスラヴ語である上に、讀み方や歌ひ方の早口な爲に一層分らなかつた。祈禱文の内容は専ら、皇帝と皇族の安泰を祈願するに在つた。これに就いての祈禱文は、他の文句と合したり、離れたりして、何回となく跪ついたまゝ讀み上げられた。その外に、讀經者によつて、使徒行傳中の數節が朗讀されたが、その讀方が變に緊張した聲であつたため、何が何だか少しも解らなかつた。次に司祭が、マルコ傳の中から一ヶ所を抜いて、極めて明瞭に讀み上げた。そこには次のやうな事

が述べられてゐた。キリストは復活した後、天に昇つて、父の右に坐する前、この地上に於いて、最初はマグダラのマリヤに現はれ、彼女から七つの魔鬼を追ひ出し、次には十一人の弟子達に現はれて、福音を一切の萬物に傳へよと命じ、且つ、信じない者は滅び、信じて洗禮を受ける者は救はれると宣ふ、更に又救はれるばかりでなく、魔鬼を追ひ出し、病人に手をのせるだけでその人の病氣を治し、色の新しい異邦の言葉語り、蛇を操り、毒を飲んでも死なず、健康者として残るであらう、と告げたといふやうなことがある。

禮拜式の本質は、司祭の刻んだ麴の細片が葡萄酒の中へ入れられ、之に一定の所作と祈禱とを加へると、それが神様の肉と血に變るといふに在つた。そしてその所作は、司祭が自分の着けてゐる金襴の袋のやうな法衣が邪魔さうに纏はる兩腕を同じ高さに持ちあげ、そのまゝ一寸支へてゐて、それから膝をついて坐り、再び起つて祭壇とその上のものに接吻するといふだけのことであるが、最も大切な所作は、司祭が兩手に布片を取つて、それを靜かに拍子を取つて皿と金の盃の上方で動かすところである。この時麴と葡萄酒がキリストの肉と血に變ると云ふので、禮拜式の中でも此處は特に嚴かに仕組まれてゐる。

『殊に至聖、至純、至福なる聖母のため。』と、司祭は、その後で、聖障の彼方から大聲に叫んだ。するとコーラスが嚴かな調子で歌ひ出した。讚美歌の意味は、貞操を破らずしてキリストを生んだ處女マリヤを讚美するのは至當なことであつて、彼女はそれがためヘルヴィム(天使のこゝ)よりも大なる尊敬と、セラフイム(上同)よりも大なる榮譽とを受くる資格があるといふのであつた。いよ／＼聖餐の奇蹟は完成されたものとして、司祭は布片を皿の上からとり、眞中の一塊を四つに切り、先づそれを葡萄酒に入れ、次にそれを口に入れた。これで以て彼は神様の肉の一片を食ひ、神様の血を一口飲んだといふことに假定されてゐた。次に司祭は至聖所(會堂の奥、祭壇)の幕を開き、中央の扉を開いて、兩手に鍍金された盃をとり、聖障の中央の門の處へ持ち出して、盃の中に在る神様の肉と血を食べたい者は來いと云つて招いた。

希望者として現はれたのは數名の小兒であつた。

司祭は豫め小兒等の名前を訊いてから、慎重に盃の中のものを匙で拵ひ出し、一人一人の小兒へ、葡萄酒に浸した麴の薄片一個づゝを、順々に口の奥深く入れてやつた。一方讀經者はその場についてゐて、小兒等の口を拭ひながら、彼等が神様の肉を食べ、神様の血を飲んでゐるといふ

ことを、節面白く歌つてゐた。それが濟むと、司祭は盃を聖障の彼方へ持ち去つて、盃の中にある限りの血を飲み乾し、神様の肉の細片を食ひ盡すと、念入りに口髭を紙り、口と盃とをよく拭ひ、ひどくいゝ氣持になつて、犢皮の靴の薄い踵を鳴らしながら、元氣のよい歩調で聖障の彼方から出て來た。

これで主要な基督教の禮拜式は終つたのであつたが、司祭はなほ不幸な囚徒達を慰めようとして、普通の禮拜式よりもつと別なものを附け加へた。その特別な儀式といふのは、司祭が、今自分の食べた神様の象となつてゐる延金の製の金ピカの聖像へと言つても顔と兩手は黒い」と、蠟燭の十本も點つてゐる前に立つて、歌ふともつかず、話すともつかない奇態な作り聲で次の言葉を唱へたのであつた。「いと慕はしきイエス、使徒の榮ある者よ、殉教者によつて頌へられる全能の主イエスよ、われ等を救ひ給へ。わが救ひ主なるイエス、いと美はしきわがイエスよ、爾に慕ひ寄る者を救ひ給へ。わが救ひ主なるイエスよ、爾を生みし者と諸々の聖者預言者の祈禱によりてわれ等を憐み給へ。わが救ひ主なるイエスよ、人を愛し給ふイエスよ、天國の喜びを與へ給へ！」(ロシヤではイエスをこゝで彼は言葉を斷つて、息をつき、十字を切つて伏し拜

んだ。皆もその通りにした。典獄も、看守達も囚人達もお辭儀をした。殊に上座の方では頻りに鎖の音がした。——『諸天使の創造者、あらゆる權威の神よ。』と、司祭は更に續けた。『諸天使の驚異、いと奇しきイエスよ、我が祖先の救ひなるいと強きイエスよ、諸族長の崇敬なるいと慕はしきイエスよ、諸國王の堅めなるいと榮あるイエスよ。諸預言者の實證なるいと善なるイエスよ、諸殉教者の力なるいと奇しきイエスよ、諸修道者の喜びなるいと謙遜なるイエスよ、諸長老の憧憬なるいと恵み深きイエスよ、諸持戒者の自制なるいと寛仁なるイエスよ、諸聖者の樂しみなるいと慕はしきイエスよ、諸童貞者の節操なるいと純潔なるイエスよ、諸罪人の救ひなる萬世無窮のイエスよ、神の子なるイエスよ、われ等を憐み給へ。』

漸く司祭は切れ目の所まで漕ぎつけたが、イエスといふ一語は繰返す毎にだん／＼大きな嘯音になつて行つたのであつた。彼は片手で絹裏のついてゐる法衣を抑へ、片膝をついて伏拜した。コーラスの方では、『神の子イエスよわれ等を憐み給へ。』といふ最後の祈りを歌ひ出した。囚徒等は跪伏しては起ち上つたが、その度に頭の途中に刈り残されてゐる髪の毛を後ろへ振り、瘦せた足に喰ひ入る

鎖をぢやら／＼と響かせた。

このやうにして禮拜式は随分長いこと續いた。最初は、『われ等を憐み給へ』といふ言葉で結ぶ讚美歌が歌はれ、それから更に『ハレルヤ』といふ言葉で結ぶ新しい讚美歌が歌はれた。囚人達は切れ日毎に十字を切つてはお辭儀をしてゐたが、あとでは一つ置きにお辭儀をするやうになり、更に二つ置きにするやうになつた。やがて讚美歌がすつかり終つた時は皆大喜びであつた。司祭もほつと息を入れて祈禱本を閉ぢ、それから聖障の奥へ立去つた。残るところは最後のひとと草であつた。それは、司祭が、端に七寶の飾りのついた鍍金の十字架を大きな祭壇の上からとつて、會堂のまん中へそれを持ち出したのであつた。最初に寄つて行つて、十字架に接吻したのは典獄であつた。それから看守達、その後で囚徒が互に身を擦り合つて、低聲で罵りながら寄つて來た。司祭は、典獄と何か話をしてゐたので、彼の許へ近寄つて行つた囚人達の口へ、十字架と自分の手を差し出したり、また時には鼻へ突きつけたりしてゐた。けれど囚人達は努めて十字架と司祭の手に接吻しようとした。かうして、迷へる同胞の慰安と教化のために執行される基督教の禮拜式は終りを告げたのである。

四〇

司祭や典獄を始め、マースロワに至るまで、凡そこの會堂に列席した者のうち、誰一人として、司祭が何回も何回も囁くやうにその名を繰返し、あらん限りの奇怪な言葉で讚め稱へたイイスその人は、實はこの場で行はれたやうな一切の儀式を禁じてゐたといふことには氣がつかなかつた。彼は、麴麴と葡萄酒を種としたかういふ無意味な、出鱈目な、變質的な妖術を禁じたばかりでなく、他の者をわが師と呼ぶことさへ極めてはつきりと禁じてゐる。また、會堂に於ける祈禱を禁じ、人は誰でもたゞ自分一人で祈らなければならぬことを教へた。また、彼は神殿を毀つたために來たのたと言ひ、祈禱は神殿に於いてはなく、精神と眞實に於いてすべきであると言つて、神殿そのものを禁じた。殊に彼は此處で行はるゝが如く人々を裁いたり、監禁したり、苦しめたり、辱しめたり、罰したりすることを禁じたばかりではない、彼は囚はれ人を自由に放たんが爲めに來たと言つて、すべて人の上に加へらるゝ強制を禁じたのであつた。

また、此處に行はれたすべてのことは、キリストの名によつて行はれてゐながら、實はキリストその者に對する最大

の贅漬であり嘲笑であることを、列席者中の誰も氣づかなかつた。また、司祭が持ち出して人々に接吻さした、端に七寶の飾りのある鍍金の十字架は、今此處で彼の名によつて行はれたやうなことを禁じたがために、キリストが處刑された刑具の象に外ならぬものであつた。けれども誰一人これに氣づかなかつた。また、麵麩と葡萄酒の形でキリストの肉と血を食つてゐるのだと空想してゐる司祭は、麵麩の細片や葡萄酒でキリストの肉を食ひ、彼の血を飲んでゐるのではなく、キリストが自分と同格の者にしてゐた「これ等の人の子」を籠絡するばかりか、彼等の最大幸福を奪ひ去り、キリストが彼等に齎らした福音そのものを人々から隠して、最も慘酷なる苦痛に陥れてゐるといふことによつて、本當にキリストの肉を食みその血を吸つてゐるのだつた。けれどもこんな考は誰の頭にも浮んで來なかつた。司祭は平氣で、今のやうな一切のことを行つてゐた。何故といふに、幼時から、これが彼の唯一の眞の信仰であつて、昔の聖者達も之を信じ、今の教役者も官憲も之を信じてゐるといふことによつて、養育されて來たからである。彼が信じてゐたのは、麵麩が肉に變ずるとか、言葉數を澤山並べると魂のためになるとか、自分が實際に神様の一片を食べたとかいふことではなかつた、——これは亦誰にも

信じられるものではない、——彼の信じてゐたのは、この信仰を信じねばならぬといふことであつた。殊に彼をしてこの信仰に固着せしめたものは、この信仰の要求を實行してゐたお蔭で、十八年の間一家を支へて、息子を中學に、娘を神學校に遣つて置くだけの収入が得られたといふ一事であつた。讀經者も同じ意味で司祭よりはもつと固く信じてゐた。それは外でもない。この男は、信仰教理の實質などは忘れて了つてゐたが、葬式にも、供養にも、禮拜式にも、普通の感謝禱にも、聖母禮讚の感謝禱にも、一々定まつたお布施があつて、本當の基督者は喜んでそれを施與するものだといふことだけは知つてゐた。それ故彼は、恰も商人が薪や粉や馬鈴薯を賣ると同様、これが是非必要なのだといふ落ちつき拂つた確信を以て、「憐み給へ、憐み給へ」を喚き立て、おきまりの文句を歌つたり讀み上げたりしてゐたのである。それから、典獄や看守などは、信仰教理とは何であるか、また教會堂で行はれる一切のことが何ういふ意味のものか、曾て知つたこともなければ突込んで研究したことも無かつた。けれども上官や皇帝御自身が信じてゐるのだから、自分達も無論この信仰を信じなければならぬといふことを信じてゐた。そればかりではない、漠然とではあるが（彼等自身にも何うしてさうなるのか、

説明は到底出来なかつたが、この信仰によつて自分達の殘忍な職務も言譯が立つやうな感じがしてゐた。若しこの信仰が無かつたなら、彼等が今現に全く平氣で行つてゐるやうに、人々を苦しめることにはばかり全力を傾注することは頗る困難である。甞に困難であるばかりでない、恐らくは不可能であるかも知れない。殊に典獄は心の優しい人なので、もしもかうした信仰に支へられてゐなかつたならば、今生きてゐるやうな生活は到底出来ないのであつた。その位だから、彼は身動きもせず眞直に突立つたまゝ、お辭儀をしたり、十字を切つたりして、『ヘルヴィム』の歌が歌はれた時は、ひどく感動しようとする、子供達が聖餐を受け始めた時は、自ら進んで行つてその一人を抱き、自分の手で司祭の方へ差し出してやつたりした。

囚徒の大多數は、これ等の鍍金の聖像や、蠟燭や聖杯や、法衣や十字架や、『いと美はしきイイス』とか、『憐み給へ』とかいふ譯のわからぬ言葉の反復のうちに、現世及び來世に於いて得らるべき澤山の御利益が授かるものと信じてゐた。たゞ僅かの人だけか、この信仰の歸依者の上に施される欺瞞を明かに見抜いて、心竊かに笑つてゐた。が、多數の者は、祈禱とか、感謝禱とか、蠟燭とかいふものに依つて御利益を授けて貰はうと、種々の試みをして、而もそ

の御利益にありつかないでも、——彼等の祈禱は何時も成就したことはなかつた——御利益のないのは偶然の事で、教育のある人達や司教などが有難がるこの制度は、よしやこの世では御利益がなくとも、兎に角來世の功德になる重大な肝腎なものに違ひないと、銘々に固く信じてゐた。

マースロワも亦そんな風に信じてゐた。そして儀式中は、他の者と同じやうに、敬虔と退屈との一緒になつたやうな氣持を感じてゐた。始めは勾欄の後の群集の中に立つてゐて、自分達仲間同志の外誰も見えなかつたが、やがて聖餐を受けるために群集が動き出して、フォードシヤと一緒に前の方へ押し出されると、彼女の目にふと典獄の姿が見えたが、そのまた背後に、看守達の中に混つて、白っぽい鬚を生やした、亞麻色の髪の毛をした、ちつぽけな百姓が立つてゐるのが見えた。それはフォードシヤの亭主であつて、彼は自分の妻の顔を穴のあく程見詰めてゐた。マースロワは聖母讚歌の折に、その男をしげ／＼と眺めたり、小聲でフォードシヤに耳打ちしたりしてゐた。それでも皆の者がする時には、矢張り十字も切り、禮拜もした。

四一

ネフリュードフは朝早く家を出た。近在から出て來た百

姓か、横町を荷馬車で通りながら、一種妙な聲をあげて、「牛乳、牛乳、牛乳！」と叫んでゐた。

昨夜初めて生暖い春雨が降つたので、敷石のない處は何處にでも、草が青々と萌え出した。どこの庭の樺の樹もまるで緑の綿でも打ち掛けられたやうに見え、山櫻や白楊もその長い芳しい葉を開き、そここの店や住宅などの窓は、二重の窓枠を取り外して、綺麗に拭いてあつた。ネフリードフが、通り道にある露店市場のそばまで来ると、立並んだ露店のほとりに、夥しい人の群が動いてゐて、汚い扮装の人々が、小脇に長靴を抱へたり、肩に火熨斗のかかつたズボンや胴着などを懸けて、歩き廻つてゐた。

この日は工場も休みなので、男達は瀟洒とした着物にて、か／＼光る長靴を履き、女達は派手な絹の被布を頭に巻き、硝子玉で飾つた外套を着て、もう居酒屋の邊にうろ／＼と集まつてゐた。ピストルの黄色い飾紐を佩けてゐる巡查達は、何か退屈紛れになる出来事でも起らないかと、處々に立つて見張つてゐた。並樹通りの小路や、新しく萌え出た緑色の草地には、子供や犬が戯れながら駆け廻り、附き添ひの保母達は、傍のベンチに凭つて楽しさうに喋つてゐた。

左側の日蔭の方はまだ冷え／＼と濕つてゐるが、中央のもう乾き切つてゐる街路には、絶え間なく、重い荷車が鋪

道にがたつき、馬車が震動を起し、鐵道馬車が鈴を鳴らしてゐた。遠近に鳴り響く様々な教會の鐘の音は、空氣を顫はせて、今監獄でも行はれてゐるやうな儀式に、人々を招き集めてゐた。そして、晴着を着飾つた人々は、思ひ思ひにその所屬の教會へ足を運んでゐた。

ネフリードフを乗せた辻馬車は、監獄のそばまで行かずに、監獄の見える曲り角で駐まつた。

男女數人の者か、大方皆小さい包みを小脇に抱へて、監獄から百歩ばかりのこの曲り角のところに立つてゐた。右側には、低い木造の家が數軒立並び、左側には何か看板をか、げた一軒の二階家があつた。宏大な煉瓦造りの監獄の建物は、正面に聳え、そこへは面會人を寄せつけもしなかつた。銃を持つた衛兵が始終その前を往つたり來たりしてゐて、萬一通り抜けようとする者があると、叱り飛ばしてゐた。

右側の木造家屋の耳門のわきに、丁度衛兵と向ひ合つて、金筋の入つた制服を着て、手に帳簿を持つた一人の看守が腰掛にをさまつてゐた。面會人達がその男の處へ行つて、會ひたいと思ふ人の名前を告げると、彼はそれを帳簿に記入してゐた。ネフリードフもその傍へ行つて、カテリーナ、マースロワの名前を言つた。金筋の看守はその名を書きつ

けた。「どうしてまだ入れないのですか？」と、ネフリュードフが訊ねた。

「今御祈禱の最中です。濟み次第、入れます。」

ネフリュードフは、そこを離れて、待つてゐる人々の群に投じた。ふと、群集の中から襦袢を着、皺くちやの帽子を被つて、素足にぢかにスリッパ形の靴を履いた、顔一面赤痣だらけの男が飛び出して来て、監獄の方へ向つた。

「こらッ、何處へ行く？」——と、銃を持つた衛兵が頭から怒鳴りつめた。

「手前こそ、何言つてやがるんだい？」と、その襦袢着物の男は衛兵の叱咤に少しも驚かずに答へた。そして引返して來ながら、「いゝよ、入れなきやア待つてゐるばかりさ。だが何も大將づらをしてほざくがものはねえや。」と言つた。

群集は、その通りよと言はぬばかりにとつと笑つた。面會人達は大方みすほらしい扮装をした者ばかりで、中には随分襦袢を着たものさへあつた。然しまた上品な扮装をした男や女もゐないではなかつた。ネフリュードフと並んで立つてゐるのは、よい着物を着た、顔を綺麗に剃つた、でつぶりした赤ら顔の人で、片手には下着でも入れてゐるらし

い包みを持つてゐた。ネフリュードフはその人に向つて、此處へは初めて來たのかと訊くと、日曜日毎に來てゐると答へた。それをきつかけに二人は色々話を交し始めた。彼は或る銀行の門番であるが、紙幣贋造で捕縛された兄弟を訊ねて來たのであつた。お人好しのこの男は、自分の色々な身の上を残らずネフリュードフに聞かせて、それから今度は、ネフリュードフのことを訊かうとした時、丁度、一人の大學生とヴェチルを被つた婦人とが、遅い純良種の栗毛の馬を驅つて護謨輪の馬車を進めて來たので、二人の注意はそれに引きつけられてしまつた。兩手に大きな包みを抱へてゐた大學生は、ネフリュードフの側へ近づいて來て、何うしたら囚人一同へこの持つて來た麵麩を差入れることが出来るかと訊ねた。「これは家内の希望なのです。あれが家内ですが、實はその兩親から囚人達に差入れをするように勧められましたので。」

「僕も初めてのことです、よくは存じませんが、あの人にお訊きになれば分ると思ひます。」と言つて、ネフリュードフは、右手の方に帳簿を持つて控へてゐる金筋の看守を指さした。

ネフリュードフと大學生とが話をしてゐる最中に、小窓のついてゐる大きな監獄の鐵門が開いて、制服を着た一人の

將校が、他の看守を連れて出て來た。帳簿を持つた看守は、これから面會人の入監が始まると皆の者に言ひ渡した。衛兵が道をあけると、すべての面會人は、遅れてはならぬと先きを争ひ、中には駈足で、門の方へ押し掛ける者もあつた。扉の處にも一人の看守が立つてゐて、面會人が入つて來るのを一人々々數へながら、十六、十七と聲高く叫んでゐた。建物の内側にも、一人の看守が立つてゐて、面會人が第二の扉を入つて行く時、一々、それに手を觸れて數へてゐた。それは面會人を退出させる時、またその數を調べて、一人でも監獄に居残らせないと、一人の囚人も逃げ出させないためであつた。人數を調べてゐる人は通つて行く者を見もしないで、ネフリードフの背中を片手で叩いたが、その看守の手の觸れた時、ネフリードフは、一寸侮辱を感じた。けれど直ぐ様此處へ來た目的を考へだすと、これを不満に思つて腹を立てたことが恥づかしかつた。

入口の扉から入つた、とつづきの部屋は、鐵格子の篋つた小さな窓の幾つもある、大きな圓天井の部屋であつた。集合室と名のついてゐるこの部屋に入ると、ネフリードフは、壁の凹みに大きなキリストの磔殺の聖像があるのを見た。

『これは何のためだらう?』と思ひながら、彼は胸の中で

知らず識らずキリストの像と解放された人々を結びつけてゐた。だが、監禁された人々とそれとを結びつけては考へられなかつた。

彼は、急いで行く面會人達を先へやつて、その後から徐かに歩いて行つたが、此處に收監されてゐる惡漢共に對する怖ろしさや、昨日の青年とか、カチューシャとかのやうに罪なくして此處に居らねばならぬ人々に對する憐憫や、それから愈々迫つて來た面會の前の恐ろしさ氣弱さなど、いろいろ混雜になつた感情を味はつてゐた。第一の室を出る時、その隅に立つてゐる看守が、何か言つたやうであつたが、自分自身の物思ひに氣を奪られてゐたネフリードフは、それに別段の注意も拂はずに、たゞ大勢の面會人のなだれ込む方へ歩き續けてゐるうちに、つひうか／＼と自分の行くべき女囚徒の方へでなく、男囚徒の方へ來てしまつた。

先を急ぐ人達をやり過して置いて、彼は一番後から面會所へ入つて行つた。扉を開けて、この部屋へ入つて、先づ驚いたのは、數百の聲々が、耳を聳せんばかりに、一つの大きな轟音となつてゐたことであつた。然し、近づいてよく／＼見ると、其處に集まつたすべてのものは、さながら砂糖にたかる蠅の群のやうに、この部屋を兩斷してゐる金

網へびたりと喰着いてゐるのであつた。それで始めてネフリュードフは、意味が分つた。後方の壁に幾つかの窓のあるこの部屋は、床から天井まで届く、一枚でなく二枚の金網で二つに區切られてゐた。金網と金網との間には幾人かの看守がゐた。そしてあちら側には監禁されてゐるものが居り、こちら側には面會人がゐた。兩者の間には二枚の金網と、七尺ばかりの隔りがあるので、物を手渡しすることも出来なければ、顔をつきり認めることも出来なかつた。殊に近視眼の者には全く不可能であつた。話をすることも亦困難で、よく聞きとつて貰ふには出来るだけの聲を出して叫ばねばならなかつた。兩側には、金網にびつたりと顔を押つけて、――妻や、夫や、父や、母や、子供などの顔が、お互に見合はうとし、又用談を話さうとあせつてゐた。

然し、皆が皆、自分の話相手に分らせようとし、その隣の者も亦同じやうにして、聲と聲とが互に妨げ合ふので、彼等は勢ひ聲を張り上げて、他人の聲を消さうとするのであつた。ネフリュードフがこの部屋へ入つたばかりで驚かさされたその喚き聲に湧き返る轟音は、つまり、かうして起つたのである。實際、相手の言つてゐることを聞きわけるのは不可能であつた。たゞその顔付によつて、言はれてゐることの大體と、お互の心持のあらましを推測するだけであつた。

つた。ネフリュードフの傍には、頭にハンカチを巻いた老婆が金網にびたりと喰着いて、顔を額はせながら、髪を半分剃り落された蒼白い顔色の若者に何か頻りと叫びかけてゐた。囚人は眉を上げ、顔を皺にして、熱心にそれを聞いてゐた。その老婆の並びには、百姓服を着た一人の若者がゐて、何だか不満さうにかぶりを振りながら、彼によく似た、面喰れのした、髯の白くなりかゝつた男囚の言ふことに耳を傾けてゐた。その次には、襦袢を纏うた男が、腕を振つたり笑つたりして叫んでゐた。その並びには、立派な毛の被布をかけた女が、赤兒を抱へたまゝ、床の上に泣き崩れてゐた。彼女はたしか初めて面會に来て、獄衣を着せられ、髪の手を剃り落され、鎖をつけられてゐる變り果てた男の姿を向う側に見出したものらしかつた。その女の頭の上から、今しがたネフリュードフに話をしかけた銀行の門番が、向う側の灰色頭の、眼玉のぎら／＼した囚人に、精一杯の聲で何か叫んでゐた。

ネフリュードフは、自分もかういふ状態のもとに話をしなければならぬかと思ふと、かゝる状態を作り、且つこれを強ひる人々に對する反感がむら／＼と起つて來たが、然しかうした恐ろしい状態に置かれても、かうした人情に對する暴虐に會つても、誰一人これを憤つてゐる者がなかつた。

つたので、彼は少なからず驚いた。兵士も、典獄も、面會人も、そして囚徒自身までも、さながらこれが當然であるかの如く認めて、振舞つてゐるのであつた。

ネフリユードフは、つくづく自分の胼甲斐ないこと、世の中と相容れないことなどを思つて、妙に氣が減入り込むやうに感じながら、約五分間ばかりこの部屋に留まつてゐた。そして丁度、船に酔つたやうな一種不思議な精神的嘔吐の感に充たされた。

四二

『だが、此處へ來た用事は濟まさなければならぬ。』と、彼は氣を引きたてゝかう言つた、『さて何うしよう?』

彼は、誰か獄吏はゐないかとあたりを見廻した。すると、將校の制服を着た、口髭のある一人の瘦せた小柄な男が、群集の背後を往つたり來たりしてゐるのを見つけたので、そのそばへ寄つて行つた。

『少々お訊ねしますが。』と、彼は特に丁寧なものごしで云つた。『女囚はどちらに置いてありますか、そして面會は何處で出来ませうか?』

『女囚にですか?』

『え、女囚の一人に會ひに來たのです。』と、ネフリユード

フは矢張り丁寧に言つた。

『それは集合室にいらつしやる時、仰しやるとよかつたのです。然し誰ですか、面會なさるその女は?』

『カテリーナ・マースロワといふ者です。』

『國事犯ですか?』と、典獄補は訊いた。

『いえ、たゞ——』

『何ですか? 宣告済みですか?』

『え、一昨日宣告されたのです。』ネフリユードフは、彼に好意を寄せてくれるこの獄吏の機嫌を、間違つても損ねまいとして、物柔らかに答へた。

『では、女囚の方へなら何うか此方へ。』と言ひながら、その獄吏は、ネフリユードフの様子から推して屹度立派な人に相違ないと心に決めたらしかつた。『シードロフ君。』と、彼は胸に勳章をつけた髭の太い下士に言葉をかけた。『この方を女囚の方へ案内して呉れ給へ。』

『はい、畏りました。』

この時、金網のところから、胸の裂けるやうな聲で、誰か泣き出したのが聞えて來た。

ネフリユードフには、此處の何も彼もが一種異様なものと思はれるのであつたが、何よりも不思議に感じたのは、典獄や看守長や、すべてこの建物の中で慘酷な行爲をしてゐ

る者に對して、恩を感じ、且つ感謝せねばならぬといふことであつた。

看守はネフリュードフを案内して、男囚面會所から廊下へ出ると、すぐ向ひ側の扉を開けて、女囚の面會所へと連れ込んだ。

この部屋も、同じく二重の金網で區切られてゐたが、男囚の面會所よりはずつと手狭であつた。そして面會人や囚徒の數も遙かに少なかつた。が、叫びたてる騒ぎは、男囚の面會所と少しも異ならなかつた。金網と金網の間を、矢張り同じやうに看守が歩いてゐた。こゝの監督は、袖に金筋と青い縁のついたジャケットを着て、男看守と同様の青い帯を締めてゐる女看守であつた。此處でも、男囚の面會所と同様、面會人と囚人とがその兩側の金網に密着してゐた。こちら側は、種々な扮装をした町の人々、あちら側は、白い獄衣を着たのや、自分の衣服を着た囚人であつた。金網はもうすつかり人で埋まつてゐた。中には他の者の頭越しに聞いて貰はうとして爪立ちしてゐる者もあり、床にしゃがんで話し合つてゐる者もあつた。

一風變つた聲と風采で、最も目に立つた女囚は、瘦せてけて髪を振り亂してゐるジブシーの女であつた。それは縮れ毛の頭から頸巻をずり落して、囚人側の中央の柱の近く

に立ちながら、面會人側の、低く又堅く帯を締めた、青い上衣を着てゐるジブシーの男に素早い身振をして何か叫んでゐた。ジブシーの男の並びには、一人の兵卒がしゃがんで何か女囚と話をしてゐた。その兵卒の次には、金網にびつたり身を寄せて、白つばい顎髯を少々はやしした、草鞋履きの百姓が、顔を眞赤にして、涙をじつと恸へながら立つてゐた。毛の薄い顔の美しい女囚が青い眼を光らして彼と話をしてゐたが、それはフォードシヤとその夫であつた。彼等の傍には、一人の襤褸着物の男か顔の大きい髪をふり亂した女と話してゐた。その次は二人の女、その次は男、それからまた女で、各自の前には、一人づゝの囚人が向ひ合つてゐた。マースロワはその中にはゐなかつたが、向う側の女囚達の後ろに尙ほ一人の女が立つてゐた。ネフリュードフは一と目見るなり、それが彼女であることを知つた。すると忽ち心臓が早鐘のやうに打ち出して、息が塞つてしまふやうな氣がした。いよ／＼絶體絶命の時が近づいて來たのであつた。金網のところへ密つて行つて見ると、それは正しくカテューシヤであつた。

彼女は、碧い眼のフォードシヤの背後に立つて、彼女の話ししてゐることを聞きながら、にこ／＼してゐた。カテューシヤは、一昨日のやうに獄衣を着てゐないで、腰をきつ

く引きしほり、胸を高く脹らました白い衣服を着てゐた。そして、頸卷の下からは、法廷で見た時と同じやうに、眞黒な縮れ髪がはみ出してゐた。

「もう直ぐ會へるんだ。」と彼は思つた。「何と言つて呼ばうか？ それとも向うから寄つてくるかしら？」

然し彼女は寄つて來なかつた。彼女はクララを待つてゐるのだつた。それで男の人が訊ねて來ようなどとは思ひもしなかつた。

「あなたは誰に面會なさるのですか？」と、金網の間を歩いてゐた女看守が、ネフリュードフの側へ來て訊ねた。

「カテリーナ・マースロワにです。」と、ネフリュードフはやつとの思ひで言ひ切つた。

「マースロワ！ 面會だよ。」と、女看守は叫んだ。マースロワは振り向いた。そして頭を上げて、胸を突き出し、見覚えのある落着いた表情をしながら、二人の囚人の間へ割り込んで、金網の傍にやつて來た。が、全く氣づかないらしく、怪訝さうな顔をして、じつとネフリュードフを見詰めた。

然し、その服装から推して、彼が金持であるといふことを知ると、彼女はにつこりした。

「あなたですの？」と、彼女は金網の近くへ、少し斜視の

眼をした笑顔で近づけて言つた。

「私は會ひたかつたのです……。」と言ひかけて、ネフリュードフは、「あなたに」と言はうか、「お前に」としよるか、分らなくなつた。が、「あなたに」といふことに決め、聲を上げずに、平常の調子で言つた。「あなたに會ひたかつたのです……私です……。」

「馬鹿なことを言ふなッ。」と、彼の傍で襤褸を着た男が怒鳴つた。「取つたのか、取らねえのか？」

「まるで死にかゝつてゐるんだよ、弱つて……。」と、あちら側から誰だか叫んだ。

マースロワには、ネフリュードフの言つたことが聞きとれなかつた。然し彼が物を言つた時のその顔の表情は、彼女がこれまで思ひ出すまいとしてゐたことを、ふと思ひ出させたのであつた。すると彼女の顔から忽ち微笑が消えて、苦悶の皺が額に寄つて來た。

「何を仰しやつてるのか聞えませんか。」と、彼女は顔をしかめ、額を一層皺にしなが大聲で言ひ放つた。

「私が來たのは……。」

「さうだ、自分は今當然爲すべきことをしてゐるのだ、後悔してゐるのだ。」と、ネフリュードフは思つた。かう思ふと同時に眼に涙が込み上げて來て、咽喉が塞つてしまつた。

で、彼は格子に指をかけたまま、泣き出すまいと力を入れて黙つてゐた。

「あいつが達者なら、俺は來やしねえよ。」と一方から叫ぶ者があつた。

「ほんとに私は、何も知らないよ。」と、あちら側から女囚の一人が叫んだ。

マースロワは彼が興奮してゐるのを見てとると、その興奮が自分にも傳はつて來て、眼は輝きを増し、白い豐滿な顔には紅みがさして來た。けれどもその顔付は相變らずきつとして、斜視の眼はじつと脇の方を見つめてゐた。

「何處か見覚えはあるやうですが、わたし思ひ出せません！」と、彼女は、彼を見ないで言つた。と思ふと一旦紅くなつたその顔は急に曇つて來た。そして前よりもくすんで見えた。

「私は、あなたに許して貰ひに來たのです。」と、まるで詰記した日課でも答へるやうに、大きな聲で、率直に彼は叫んだ。

が、かう叫んだ時、彼は恥づかしくなつて顔をそむけた。けれど直ぐまた、自分が恥を感じるのには當然のことだ、それでよいのだ、と思ひ直して、更に高い聲で言葉をつづけた。

「私のしたことがよくなかつたのです、全く悪かつたのです。どうか許して貰ひたい。」彼はかう叫び足した。

彼女はじつと立つてゐた。そして彼の顔からその斜視の眼眸を外らさないでゐた。

彼はこれ以上口をきくことが出来なかつたので、こみ上げて來る涙を抑へるのに骨を折りながら、金網の傍を離れた。

先刻ネフリュードフを女囚面會所に廻してくれたその典獄は、彼に興味をそゝられたものと見えて、この面會所へやつて來た。そして、ネフリュードフを見ると、彼が金網の處から離れてゐるので、何故話をしに來た人と話をしないのかと彼に訊ねた。ネフリュードフは涙を飲んでゐたか、身震ひして、つとめて平氣を装ひながら、返事をした。

「この金網が邪魔になつて話が出来ません。何も聞えませんが。」

典獄は一寸考へてゐた。

「ではかうしてあげませう。少時の間、あの女をこゝへ出してでもよろしいですから。」

「マリヤ・カルロウナ！」と、彼は女看守に言葉をかけた。「マースロワを外へお出し。」

四三

間もなく横合の扉口からマースロワが現はれた。柔らかな歩調でネフリュードフのそばへびつたり寄つて来ると、上眼をつかつて彼を見上げた。一昨日と同じく、黒い髪の毛が輪形に波打つてこぼれ出してゐた。顔は病人らしく脹んで白かつたが、矢張り愛くるしく、落ちつきがあつた。たゞ艶々しい斜視の黒い眼だけは心持ち脹れぼつたい眼瞼の下から特に輝きを見せてゐた。

「こゝでお話しない。」と言つて、典獄は脇へ退いた。

ネフリュードフは壁ぎはの腰掛のそばへ寄つた。

マースロワは何か問ひたげに典獄を一瞥したが、やがて訝かしげに肩をすくめて、それからネフリュードフに跟いて腰掛の方へ行き、彼と並んで坐りながら、裾捌きを直した。

「あなたとしては、この私は許し難い人間に違ひありません。それは私も承知してゐますが。」と言ひかけて、ネフリュードフは、またも涙の込みあげて来るのを感じて、ちよつと口を噤んだが、また續けた。「しかし過去のことはもう何うにも出来ませんから、この上は自分に出来るだけのことをする積りで、如何でせう……」

「何うして私の居所を突きとめたんですか？」と、マース

ロワは彼の問には答へもしないで、から訝返ししながら、例の斜視の眼で彼の方を見るやうな、また見ないやうな風をした。

『おゝ神よ、私を助けて下さい。何うすればいいのか教へて下さい！』彼女の變り果てた顔を見成りながら、ネフリュードフは獨語した。

「私は一昨日陪審員として出てゐましたよ。」と、彼は言つた。「あなたの裁判のあつた時居たのですが、私に気がつきませんでしたか？」

「えゝ、気がつきませんでした。それどころではなかつたのです。私は見ようともしませんでした。」と彼女は答へた。

「赤ん坊が出来たといふぢやありませんか？」と訝ねて、思はず自分の顔の赤くなるのを感じた。

「えゝ出来ましたけど、幸ひ、直ぐに死んぢまひました。」彼女は彼から眼を外らして、簡単にまた突慥に答へた。

「ふふ、何うして？」

「私も病気で、死ぬか生きるかの界でした。」と、眼を伏せたまゝ、彼女は言つた。

「叔母さん達は何故あなたに暇を出したのですか？」

「何故つて、誰が身持ちの小間使なんか置くのですか？」

感づかれると、すぐ出されました。ですけど、私、そんな話は出来ませんわ——何も覚えてやしません、みんな忘れちまひました。あれはもう済んでしまつたことなんですよ。」

「いや、まだ済んではひませんよ。私としてはこのまゝに棄て置くことは出来ません。今からでも私は自分の罪を贖ひたいと思つてゐるんです。」

「贖ひようがありませんよ。あつたことはあつたことで、もう過ぎ去つてしまひましたわ。」と、彼女は言つた。そして思ひがけなく、急に眼をあげて、彼を見ながら、無氣味に誘惑的な、また哀訴するやうな微笑を洩らした。

マースロワは二度と再び、殊に今、こんな處で彼と邂逅はうとは、夢にも思はなかつた。だから彼を見た瞬間、彼女は全く度膽を抜かれ、つひぞ思つても見なかつたそのことを、うつかり思ひ浮べてしまつた。最初彼女は、互に想ひ想はれた美しい青年によつて開かれた、あの新らしい思想と感情との不可思議な世界をほんやりと思ひ出した。その次には、男といふものゝ解しがたない無情を思ひ、又あの夢の様な幸福に次いで、その幸福から流れ出した屈辱と苦痛の數々を思ひ出すと、胸が張り裂けるやうになつた。けれども彼女はそれを解くことが出来ないで、いつも爲憤

れて来たやうに、此等の思ひ出を墮落した生活の霧の中に封じ込んで了つて、それによつてその思ひ出から遁れようとするのであつた。最初彼女は、眼前に坐つてゐる人間を、嘗て自分の戀した一青年と結びつけた。けれどこれは餘りにも苦痛に思はれたので、引き離して了つた。今やこの清楚とした着物を着た、垢抜けのした、そして髻にまで香料を施した紳士は、彼女に取つては、昔の戀人ネフリュードフではなくて、彼女のやうな人間を必要に應じて使用してゐた、また彼女のやうな人間に出来るだけ有利に利用されてゐた人々の一人たるに過ぎなかつた。彼女が彼に誘惑的な微笑を與へたのは全くこの故であつた。彼女はこの男の何處を利用してやらうかと思つて、少時黙つてゐた。

「あれはすつかり済んだことなのです。」と、彼女は言つた。「今度は私、徒刑に決められましたの。」

彼女がこの怖ろしい一語を發する時、その唇は震へてゐた。

「それは知つてゐます。だがあなたの無罪なことは信じてゐますよ。」

「無罪は知れたことですわ。私、泥棒でも追剥でもありませんからね。かうなつたのもみんな辯護士の所爲だといふ話ですけど。」と、彼女は言ひ續けた。「でも、一應は願ひ

を出して見る方がよいさうですね。随分高いお金をとられるつていふ話だけ……」

「さうです、屹度上訴はします。」と、ネフリュードフは言つた。「私はもう辯護士にかけ合つて來ました。」

「いゝ辯護士ならお金を惜まないで下さいね。」と彼女が言つた。

「私は、出來るだけのことは皆してあげます。」

沈黙の一と時が來た。

彼女は再び同様の微笑を洩らした。

「あの、一寸お願ひがあるんですが……もし何ならお金を少し。幾らでも……十ルーブリでも。」と唐突に云つた。

「よし〜。」と、ネフリュードフはどきまぎしながら言つて紙入に手をかけた。

彼女は、部屋の中を往つたり來たりしてゐる典獄をじろりと見た。

「あの人の前では出さないやうにして下さい。あちらへ行つた時ね。さもないと取り上げられてしまひますから。」

ネフリュードフは紙入をとり出し、典獄があちらへ行つたのを見すまして、今や十ルーブリ紙幣を渡さうとすると、その途端典獄はくるりとこちらへ顔を向けた。彼は手の中へ金を握み込んでしまつた。

「いや、この女はもう死んでゐる。」曾ては可憐であつたが、今は汚れて脹んだやうなその顔を眺めながら、ネフリュードフはかう思つた。彼女の斜視の黒い眼も、今は鋭い厭らしい光を放つて、典獄の様子と、札の揉み込まれたネフリュードフの手とを狙つてゐるのだつた。それを見ると、躊躇の一と時が彼を襲つた。

またしても、昨夜彼の耳に囁いたあの誘惑者が、いつものやうに、ネフリュードフの心の中に聲を揚げて、何を爲すべきかといふ問題から、その結果は何うなるか、何うするのが利益になるかといふ問題へ彼を引摺り込まうとした。

『お前がこの女を何うにかしようつたつて、それは駄目だ。』と、その聲は言ふのであつた。『こんなものに手を出すのは自分の頸へ石を吊るやうなものだ。その石のためにお前も溺れて了つて、他の人々のためにもつと有益なものになるべき希望を失ふだけのことだ。だから今、有金を殘らず彼女にくれてやつて、彼女と別れるがよい。そして永久に一切の覺をつけるがよい。』かう考へられた。

けれどもまたそれと同時に、今こそ彼の心のうちに最も重大な事が行はれてゐるので、この際一步を誤れば右か左かどちらへでも引込まれるやうな境界線に、彼の内面生活が置かれてゐるのだと感ぜられた。そこで、彼は、昨日自

分の心の中に感得したところの神を呼び求めながら、新生の一步に向つて努力した。すると、神は即座に之に應へてくれた。彼は今、一切を彼女に打明けようと決心した。

「カテューシャ！ 僕がお前を訪ねて来たのは許して貰ふためであつた。それなのに、お前は、許したとも、許さうとも答へてくれないのたね。」と、彼は何時しか『お前』と言ひ換へてしまつて、かう言つた。

彼女は彼の言葉には耳を假さうとはせずに、その手許を見たり、典獄を見たりしてゐた。典獄がやがて、あちらに遠ざかつた時、彼女は素早く兩手を伸べて、ネフリュードフの掌中の札を奪ひ、それを帯の間に隠してしまつた。

「變なことがかり仰しやいますのね。」と言つて、彼女は何か人を馬鹿にしたやうな微笑を洩らした。

ネフリュードフはその時、彼女のうちには何だか彼に反抗するやうなものがあつて、それが彼女を現在のまゝに護らうとし、また彼をして彼女の心の中に立入らせないのだと感じた。

然し、不思議なことには、それがために彼女から遠ざからうとはしないで、却つて新しい特殊な力で彼女に引き寄せられるのであつた。彼は何うあつても彼女を精神的に覺醒せしめなければならぬと感じた。それは頗る難事である。

けれどもその難事であることが、彼の感興を喫つた。彼はこれまで彼女に對しても、亦他のどんな人に對しても、決して味つたことのない感じを今味つてゐるのであつた。この感情の中には、聊も利己的なものは無かつた。彼は自分のために彼女から何を求めるのでもなく、たゞ／＼彼女が今までの状態から離れ、再び眼を醒して昔のやうな女になつてくれることをのみ願つてゐたのである。

「カテューシャ、何故お前はそんなことを言ふのだ？ 僕はお前をよく知つてゐるよ、バノーウ村にゐた昔のことをよく覚えてゐる……」

併し彼女は降服しなかつた、降服しようともしなかつた。「今更昔の事なんか言つたつて、仕様がないうですもの。」と、更にひどく顰め面をして、素氣なく言つた。

「僕は自分の罪を贖はうとして、そのために思ひ出してゐるんだよ。カテューシャ！」と言ひかけた。そして彼は彼女と結婚しようと思つてゐることを話さうとしたが、その時彼女の眼眸に出會ふと、その中には怖ろしい、亂暴な、反抗的なものが見えたので、もう後を云ひ續けることが出来なかつた。

この時面會の人々はそろ／＼歸りかけた。典獄はネフリュードフのそばへ寄つて来て、もう面會時間が切れたことを

告げた。マースロワはこの場から解放される時をひたすら待つてゐたものゝ如く、起ち上つた。

「失禮した。僕はまだお前に話したいことが澤山あるが、こんな風で、今は駄目だ。」と言つて、手を差しのべた。「何れまた来るよ。」

「すつかりお話しになつたぢやありませんか……」

彼女は手を差出したが、しかし握り締めなかつた。

「いや、僕はお前に折入つて相談したいことがあるんだ。だからまた會ふやうに盡力するよ。そしてその時は、是非お前に聞いて貰はんければならない大切なことを話したいんだ。」と、ネフリードフは言ひ切つた。

「では、またいらつしやい。」と言つて、彼女は、氣に入つて貰ひたいと思ふ男達へするやうな愛想笑ひをした。

「お前は私にとつては妹よりも親近しいんだよ。」と、ネフリードフは言つた。

「何だか變ですわね。」と繰返したが、やがて頭を傾げながら金網の蔭へ立去つた。

四四

ネフリードフは、カテューシヤが最初の面會から、自分を理解し、自分の好意と懺悔とを知つて呉れたら、喜んで、

心から感動して、再びもとのカテューシヤになるであらうと思つてゐた。ところが驚いたことには、カテューシヤはもう存在せずに、たゞマースロワだけが残つてゐたことを見せつけられた。これは彼に取つては實に恐ろしい事實であつた。

殊に彼を驚かしたのは、マースロワが自分の境遇を——と言つても囚人としての境遇ではない（これは彼女も恥ぢてゐた）、醜業婦としての境遇を——少しも恥ぢてゐないばかりか、却つてそれに満足し、殆んど誇り顔にしてゐたことであつた。尤もそれは無理もなかつた。どんな人間でも、何かしら働くには、その仕事を大切なもの、結構なものと思はなければ出来ない。従つて、どんな境遇の者でも、大體に於いて自分の仕事が大切な結構なものに思へるやうな人生觀を作るのである。

普通の考へから行くと、盜賊や、殺人者や、間諜や、醜業婦などは、自分の職業を悪いものと認めて、心にはそれを恥ぢてゐる筈だが、事實は全くそれに反してゐる。運命のために、また自分の罪や過失のために、或る一つの境遇に置かれた人々は、その境遇が如何に正しくないものであつても、やはり自分達の境遇が結構なもの、尊むべきものと思へるやうな人生觀を作るものである。而もこの人生觀を

保持せんがために、人々は、本能的に彼等の人生觀や、彼等自身の人生に於ける位置に對する見解を同じうする人々と一緒に結合するものである。盜賊がその機敏を誇り、醜業婦がその自墮落を鼻にかけ、或は殺人者がその慘酷を自慢すると聞いたら、人々は驚くであらう。然し吾々が驚くといふのは、さうした人々の仲間が限られてゐるから、といふよりも、吾々がその圏外にゐるからである。けれども、世の富豪がその富——即ち強奪——を誇り、軍隊指揮官がその勝利——即ち殺人——を鼻にかけ、また爲政者がその權力——即ち壓制を自慢するのは、それと同じ現象ではあるまいか？ たゞ吾々がこの人達の自己辯護に用ひる、誤まれる人生觀や善惡觀に就いて少しも怪しまないのは、さうした邪^{よこ}また觀念を持つてゐる人々の社會が比較的大きくて、吾々もそれに屬してゐるからなのである。

自分の生活に對し、自分の地位に對して作り上げてゐたマースロワの見解も亦この通りのものであつた。彼女は徒刑の宣告を受けた醜業婦であつたが、それにも拘はらず、自分自身を是認し、且つその境遇を人前に誇り得るやうな人生觀を獨りで拵へ上げてゐたのである。

その人生觀の内容はかうである。例外なしにすべての男性——老人、青年、中學生、將軍、教養ある者、無教育の者

——の主要なる幸福は、魅惑的な女との性的交渉にある。だからすべての男子は、他の用事で忙しいやうな風をしてゐても、實はたゞこの一事を願つてゐるばかりである。ところで彼女は、魅惑的な女性であるから、彼等のこの欲望を満足させてやることも、満足させてやらないことも出来る。それ故に彼女は——大切な肝要な人間である。彼女のこれまでの生活も、今の生活も、皆この見解を裏書きするものであつた。

過去十年の間、彼女は到る處に於いて、あらゆる男子が——ネフリュードフや老警察官を始め、監獄の看守に至るまで——すべて彼女に或る種の必要を持つてゐるのを見た。そして彼女を必要としないやうな男子は一人も見受けなかつた、また氣がつかなかつた。それ故にこの世界は肉慾のほせきつてゐる人々の集合だと思はれた。四方八方から彼女を覬ひ、ありとあらゆる方法——欺瞞、腕力、金力、奇計など——を盡して彼女を手に入れようと努めてゐる人々の集合だと思はれた。

これがマースロワの解する人生であつた。かうした人生觀から見ると、彼女はたゞに最下等でないばかりか、甚だ重要な人物であつた。で、マースロワは、かうした人生觀をこの世で一番大切なものと尊んでゐた、——また之を尊ば

ない譯には行かなかつた。何故なげといふに、この人生觀が變つては、これによつて人々の間に得てゐる自分の價値が失はれるからであつた。そこで、人生に於ける自分の價値を失はないように、彼女は、自分と同じやうに人生を觀てゐる人々の社會を本能的に擁護してゐた。ところが、ネフリュードフは彼女を導いて他の世界へ連れ去らうといふのであるから、これを感じた彼女は、彼の誘ふがまゝに他の世界へ行つては、折角確信と自尊とを得るに至つたこの人生に於ける自分の地位を失はねばならないのだと見越しをつけて、彼に反抗したのである。かうした理由によつて、彼女は處女時代の思ひ出やネフリュードフとの初戀などを念頭から追拂つてゐた。それ等は今の人生觀と相容れないものであつたから、すつかりその記憶から抹殺されてゐた。抹殺されてゐたといふよりは、彼女の記憶の何處かにかそつとしまひ込まれてゐたのだ。しかし間違つてそれが出て來るのを恐れて、まるで蜜蜂がその巢の中へ小蟲を封じ込むやうに、よく塗りふさいで、どうしてもそれ等に手の届かぬようにしてあつた。それ故に今のネフリュードフは、彼女にとつては、昔、純な心で愛した戀人ではなくて、彼女の利用し得る、また利用しなければならぬ一個の金持紳士に過ぎなかつた。すべての男子に對する關係以上には關係

を結び得ない一個の男性であつた。

『いや、とう／＼肝腎なことを打明けることが出来なかつた。』ネフリュードフは、人込みに混まつて、出口の方へ行きながら考へた。『結婚するといふことを言はなかつた。言はなかつたけれど、何うしても結婚しよう。』彼はかう思つた。

扉口とびの處にはまだ看守達が立つてゐて、面會人を出しながら、彼等を兩手で數へてゐた。それは餘計な人が出ないように、また餘計な人が監獄に居残らないようにしてゐるのであつた。今度は背中を叩かれても、彼は侮辱を感じなかつた。——いや叩かれたのに氣もつかなかつた。

四五

ネフリュードフは、大きな邸宅を入手に渡し、召使の者を解雇し、自分は下宿に引移つて、自分の外面生活を一變しようと思つてゐた。然し、アグラフェーナ・ペトロウナが反對して、冬も來ないうちに生活の様式を變へようつたつてそれは駄目だ、夏のうちは誰も借り手はない、また何處で生活するにしても家具調度は持つてゐなければならぬといふことを、證據立てゝ話したので、ネフリュードフの外面生活一變の努力は（彼はもつと簡単に、書生風に生活する

積りであつたが、悉く駄目になつた。かくて何もかも従前通りに残されたばかりでなく、却つて活氣づいた仕事が一家のうちに始まつた。即ち毛織類毛皮類は蟲干をして、風にあて、埃を拂ふ事となり、門番も、その助手も、賄方^{まわら}も、コルネイ自身も之を手傳つたのである。最初は、まだ誰も袖を通した事のない禮服や、妙な毛皮製のものなどを抱へ出して、繩に掛けた。それから今度は、靴物や家具の類を擔ぎ出し、門番とその助手とは甲斐々々しく袖をまくつて逞しい腕を露はし、丹念に拍子を取りながらそれ等の物を叩き出した。そしてどの部屋もどの部屋もナフタリンの香で一杯になつた。ネフリユードフは、庭を廻つたり、窓から覗いたりして見てゐたが、いろ／＼の品物の莫迦に多いのに驚いた。而もまたさうした品物が皆役に立たないから、くたであるのには一層呆れ返つた。『是等の品物の唯一の使用乃至使命といへば、』と、ネフリユードフは考へた。『アグラフエーナ、ペトローウナや、コルネイや、門番や、その助手や、賄方の者に、運動の機會を提供するだけのことだ。』

『それにしても、マースロワの事件が片づくまでは、當分生活様式を變更する必要はない。』と、ネフリユードフは考へつづけた。『それに今やつては骨が折れ過ぎる、何れ彼女が放免になつても、或はまた追放になつて自分がその後を

追うて行つても、どつち道一切は變更してしまふのだ。』辯護士ファナーリンの決めてくれた日に、ネフリユードフは彼の家を訪れた。素晴らしい彼の邸宅へ入つて行きながら、見るとそこには大きな樹木が色々と植ゑてあり、窓といふ窓には素敵に立派なカーテンが掛けてあり、一體にその贅澤な裝飾は俄か成金特有のものであつて、莫迦々々しい——といふのは勞せずして得たところの——遊金のあることを證するものであつた。やがて、ネフリユードフが應接間へ入ると、そこには、まるで醫者の控室のやうに順番を待つてゐる大勢の依頼人は、彼等の無聊を紛らす爲の繪入雜誌の載つてゐる卓子のまはりに、氣の抜けたやうな顔をしてゐた。その室の高い卓子に着いてゐた書記は、ネフリユードフの來たのを見ると、彼のところへ來て挨拶して、直ぐ先生に取り次ぐからと言つた。然しその書記がまだ書齋の扉へ近づかないうちに、扉が開いて、顔の赤い、髭の濃い、新調の着物を着た、中年のづんぐりした男と、ファナーリンとの、高調子の賑やかな聲が聞えた。二人の顔には、何か、あまり性質のよくない金儲け仕事をしたばかりの人人によく見るやうな表情があつた。

「それは君の方が悪いよ。」と、にこ／＼しながらファナーリンが言つた。

「全く、天国へは行きたいが、どうも罪障が許して呉れないのでね。」

「尤もだ、それは分つてゐるよ。」

と、兩人はまた態とらしく笑つた。

「やア、ネフリュードフ公爵、さアどうぞ。」ネフリュードフを見ると、フナーリンはかう言つた。そしてもう一度出て行く商人に會釋して、ネフリュードフを自分のよく整つた事務室へ案内した。「どうぞ、お煙草を。」と言ひながら、辯護士はネフリュードフの向ひに座を占めたが、今濟ましたばかりの事件の成功によつて喚び起される微笑を包み切れない様子であつた。

「有難う。私はあのマースロワの事件でまゐつたのです。」

「は、は、直ぐ取りかゝりませう。然し何うです、今のでつぷりした悪黨は。」と彼は云つた。「御覽になつたでせう？ あの男は千二百萬からの財産を持ちながら、口のきき方も心得てゐないんです。たゞもう金あるのみで、あなたから二十五ルーブリ札の一枚でもちよろまかされるものなら、口で啣へてどもすりとりといふ代物でしてね。」

「成程、あの男は口のきゝ方を心得てゐないかも知れぬが、君も二十五ルーブリ札の一枚でもちよろまかすなんていふ

言葉を使つてゐるではないか。」と、ネフリュードフは思つた。そしてこの男はいやに打解けたやうな調子をとつて、他の依頼人達とは地位を異にしてゐるが、ネフリュードフとは地位を一つにしてゐるといふ意味を仄めかさうとしてゐるので、もう堪らない嫌惡の情を懷かしめた。

「いやはや、あんな奴にかゝつては、飛んだ目に遭ひますよ。怒つてやらうかと思ひました。」と辯護士は、餘計なことばかり饒舌つてゐたのを辯解するかの如く、かう言つた。「さア、あなたの事件に取りかゝりませう……。あれは私も篤と調べて見ました。然しツルゲーニエフの言葉ではないが、『その内容には賛成出来ない』ですな。つまり辯護士先生が青二才だつたので、上訴の動機を悉くとり逃してしまつたのです。」

「で、あなたは何うなさる積りでですか？」

「ちよつとお待ち下さい。」と云つて、彼は今其處へ入つて來た書記に向ひ、「かう言ひたまへ。僕の言つた通りにする、それでよければ可し、不承知なら止すつて。」と言つた。

「ところが不承知なんです。」

「では止めるさ。」と辯護士は言つたが、見る／＼その顔色は晴々とした嬉しさうな表情から、曇つた腹立たしげなも

のに變つてしまつた。

「厭になつてしまひますよ。辯護士つて者はたゞ金を取る
とばかり思つてる奴があるんですから。」と言ひながら、彼
は再び以前の笑顔に返つた。「實は、私がある破産の宣告を
受けた男を、免訴にしてやりましたものですから、さうし
た連中がぞろ／＼押掛けて来るんです。然しかうした事件
に限つてまた多大の努力を要しますのでね。誰だつたか或
る作家の言つた通り、僕等にしてもインク壺の中へ肉の一
片を落してゐるのですからね——ところであなたの事件で
すな。イヤ、あなたが興味を持つて居られる事件ですな。」
と彼は言ひ續けた。「下手なことをやつちまつたので、上訴
すべき適當な理由が無いのです。然し兎に角上訴を試みる
ことは出来ます。で、この通り書き上げて置きました。」
彼は一杯書き散らしてある一枚の紙を取つた。そして、
面白くもない形式的な言葉は呑むやうにして、その他のと
ころを特に嚙んで含めるやうに發音しながら讀み出した。
『元老院刑事部ニ對シテ云々、斯クノ如キ云々、上告……
成立セル云々、判決云々、ソノ判決書ニ據レバ、マースロ
ワナル者は商人スメリコフヲ毒殺シタル廉ニ依リ、有罪ト
認メラレ、刑法一千四百五十四條ニ照シテ云々、徒刑服役
ニ宣告サレタリ云々。』

彼はもう慣れきつてゐるにも拘はらず、自分の文案をさ
も面白さうに聴きながら、一寸こゝで言葉を切つた。

『此ノ宣告ハ頗ル重大ナル司法上ノ非違及ビ錯誤ノ結果
ニシテ、』と彼は力を入れて讀み續けた。『當然廢棄スベキ
モノナリ。第一、スメリコフノ内臟解剖ニ關スル報告書審
理ノ際、ソノ朗讀ヲ始ムルヤ否ヤ、裁判長ハ之ヲ中止シタ
リ。』と、これが一つです。」

「けれどその朗讀を要求したのは檢事側でしたよ。」と、ネ
フリードフは變に思ひながら言つた。

「それは構ひません。辯護士側にも同様の要求をする根據
があつたかも知れませんか。」

「しかしあの朗讀は全く何の必要もなかつたのですよ。」

「それでも構ひません。これが上告の理由になります。次
に、『第二、マースロワノ辯護士ガ』と彼は讀み續けた。

『マースロワノ辯護士ガ、辯論ニ際シテ、彼女ノ墮落シタル
原因ニ關シ、ソノ性格ヲ説明セントシタル時、裁判長ハ、
直接ノ問題外ニ互ルモノトシテ、コレヲ中止セシメタリ。

然レドモ、元老院側ニテ屢々訓示セラレタル如ク、性格並
ニソノ一般道德的人格ニ關スル説明ハ、刑事上重大ナル意
義ヲ有スルモノニシテ、單ニ責任問題ヲ決定スルガ爲メニ
モ尙且重大ナル意義ヲ有ス。』——これが第二點です。」と

言つて、彼はネフリュードフを見上げた。
「けれども辯護士の言ひ方が實際まづかつたので、さつぱり解らなかつたのです。」と、更に驚いて、ネフリュードフは言つた。

「全く氣のきかない胄二才ですから、條理の立つたことは言ひ得なかつたでせうとも。」と、フナーリンは笑ひながら言つた。——「けれども兎に角これは動機になります。では、その次を。『第三、裁判長ハ其ノ結論ニ於イテ、刑事訴訟法第八百一條第一項ノ必然的要求ニ反シ、有罪ノ概念ヲ構成スベキ法律上ノ要素ヲ陪審員ニ説明セズ、又、マースロワガスメリコフニ毒ヲ與ヘタル事實ハ承認スベキモ、彼女ニ殺害ノ意志無キ時ハ、此ノ行爲ノミヲ以テ彼女ニ罪ヲ歸スルノ權利ヲ有セザルコト、隨ツテ斯カル場合ニハ、刑事的犯罪トシテ彼女ヲ罪セズ、唯彼女ニ取リテ意外ナル商人ノ死ヲ誘致シタルソノ不注意ノ一行爲ニ於テノミ罪ヲ問フベキコト、コレヲ陪審員ニ注意スルコトヲ忘レタリ。』こゝが最も肝腎な點です。」「さうです。それは私達も直ぐさう思つたのでした。これが私達陪審員の誤りでした。」「『最後ノ第四點』と、辯護士は續けた。『マースロワノ有罪ニ關スル法廷ノ諮問ニ對シ、陪審員ノ提出セシ答申ニ

ハ、明白ナル矛盾ヲ含メリ。マースロワハ専ラ貪慾ノタメニ、故意ニスメリコフヲ毒殺シタルモノトシテ求刑セラレ、而モソノ殺人ノ動機ハタダ此ノ一事ニ在リトチセリ。然ルニ陪審員ハソノ答申ニ於テ、マースロワニ竊盜ノ意志ナキコトト、貴重品竊取ニ加ハラザリシコトヲ是認セリ。之ニヨリテ觀レバ彼等ハ亦、被告ニ殺害ノ意志ナカリシコトヲモ是認セントシタルモノナリ。タダ裁判長ノ説明ノ不完全ニ起因スル誤解ノタメ、之ヲソノ答申中ニ書キ漏ラシタルモノナリ。故ニ斯ノ如キ陪審員ノ答申書ハ、刑事訴訟法第八百十六條及ビ第八百八條ノ適用ト、ソノ誤謬ニ對スル裁判長ノ釋明ト、更ニ被告ノ犯罪ニ關スル新ナル討議ト新ナル答申トヲ要スルモノトス。』と、フナーリンは讀み上げた。

「では、何故裁判長はその手続きをしなかつたのでせうか？」

「何故でせうね、——それは私も知りたいところですが。」と笑ひながら、フナーリンが言つた。

「さうすると、元老院でこの誤謬を正してくれるのですね。」

「さあ、それはその時の擔任者次第です。それで、尙ほかう書いて置きました。『斯クノ如キ裁決ハ、マースロワヲ處

罰シ、又彼女ニ刑法第七百七十一條第三項ヲ適用スベキ權利ヲ法廷ニ與フルモノニアラズ。是レ明カニ我が刑法ノ根本原則ニ對スル一大違反ナレバナリ。以上ノ理由ニヨリ、余ハ刑事訴訟法第九百九條、第九百十條、第九百十二條第二項及び第九百二十八條ニ照シテ……廢棄ノ上告ヲナシ云云。更ニ此ノ件ハ同法廷ノ他ノ部ニ移シ、再審センコトヲ請求スル者ナリ。』これで、書けるだけのことはすつかり書いたつもりです。然しぶちまけて申せば、成功の見込は少ないのです。尤も元老院の擔當者の如何にもありますが、もしあなたの勢力が元老院に幾らかでもおありでしたら、お骨折なさるがいゝでせう。』

「それは知つた人も居ります。」

「では、一時も早い方が結構です。でない、先生方は皆夏休みになつて湯治に出掛けてしまひます。さうなると三ヶ月も待たなければなりません。……それでも失敗しましたら、最後の手段として皇帝陛下に請願するまでのことです。これとても亦裏面運動次第ですがね。その場合にはまたお力添へ致しますせう。と言つても、その裏面運動の方でなく、つまり請願書の草案のことです。』

「有難う。それでお手数料は……」

「それは書記の方から上告書の淨書を差し上げる時、申し

上げる筈です。』

「もう一つお尋ねします。私は検事からこの收監人に面會する認可證を買つてゐるのですが、監獄では、普通面會日以外に、普通面會所の外で面會するには、縣知事の許可が要るといふのです。本當に要りませうか？」

「えゝ、さうだと思ひます。然し知事は今居りません。副知事が代理をしてゐます。けれど此奴と來ては、とてもとほけた莫迦者ですから、これに掛け合つても恐らく六かしいでせう。』

「それはマースレンニコフのことですか？……」

「さうです。』

「あの人なら知つてゐます。』と言つて、ネフリニードフは歸らうとして座を立つた。

この時、急ぎ足でこの室へ飛び込んで來たのは、小柄な、恐ろしい醜い獅子鼻の、骨張つた、顔色の黄ろい女であつた。これが辯護士の細君だつたが、その醜いことを少しも悲觀してゐないらしく、天鵝絨、絹などの鮮やかな黄色や綠色など取りませたものを體につけて、人並以上に凝つた身装をしてゐたばかりでなく、薄い髪の毛を縮らせてゐた。そして得意な顔をして受付へ飛び込んで來たのであつたがその後から、背の高い、土色の男が、絹縁つきのフロックに白

ネクタイといふ扮装いでたちで、こゝしなから跟ついてて来た。これは作家の一人で、ネフリュードフもその顔を見知つてゐた。「アナトリー(フアナリ)。」と、彼女は扉かどをあけながら言つた。「さア、いらつしやいな。これからセミョーン・イワノウイチさんが自作の詩をお讀みになるさうですから、あなたはせめてガルシンのものでも讀まなくてははいけませんよ。」ネフリュードフは出ようと思つた。けれども、辯護士の妻がその夫と何か囁ささやいてゐて、それが濟んだと思ふと、直ぐ又彼に言葉ことばをかけた。

「ようこそ、公爵様——私、よくあなたを存じあげて居ります。餘計なお引き合せなんかよしにしまして、私共の文學の會へいらしつて下さいませんか。大變面白うございませよ。良人たくもこれでなか／＼朗讀の名人なんです。」

「何うです。私も随分多藝多能たぎたぎでせう。」と、アナトリーは、にこ／＼しながら兩手を擴ひろげて、細君を指さし、恰もかうした可愛い者の言ふことには逆さかはれないと云はぬばかりの様子をした。

ネフリュードフは、困つたやうな鹿爪しかづめらしい顔付をして、最大の敬意を込めて、辯護士の細君に招待のお禮を述べ、都合が付き兼ねるからと辭退して、受付室へさがつた。

「何て氣取屋きとりやさんでせう！」と、彼が出た時、辯護士の細

君は彼のことをから言つた。

受付室で書記から、出来上つた上告書を渡された。そこで、手数料のことを訊ねると、その書記は、アナトリー・セミョーノウイチが一千ルーブリに決めて置いたと告げ、更にアナトリー・セミョーノウイチは、平素はかういふ事件は引受けないのであるが、特に今回は公爵のために爲したのだと説明した。

「それでこの上告書には誰が署名するのですか？」と、ネフリュードフは訊ねた。

「被告自身が署名するのです。けれど都合が悪ければ、本人の委任狀を貰つて、こちらのアナトリー・セミョーノウイチがしてもよいのです。」

「さうですか。では直接被告に持つて行つて署名をさせませう。」と言つた。ネフリュードフは、實は決つた面會日以前にカテューシヤに會へる機會を得たので、それを喜んだのだつた。

四六

いつもの時間に、看守の呼子よびこが監獄の廊下で響き渡ると、各廊下や監房の扉がごと／＼鳴つて、素足すあしの音かばたばたしたり、靴の踵かかとの音がごと／＼聞えたりして来た。掃

除番の者が厭な臭氣をあたり一杯に漂はせながら廊下を通つて行つた。男囚達は既に顔を洗ひ、着物を着てゐた。女囚達も點頭のため廊下に出て、それが済むとお茶の湯をとりに行つた。

何處の監房でも朝飯時の會話は賑はつてゐた。この日は二人の男囚が答刑に處せられると云ふので、その話がはずんだ。一人はワシリーエフと言つて、なか／＼讀み書きも出来る青年で、何處かの店員をしてゐたのだが、嫉妬の餘り自分の情婦を殺したのであつた。快活で、鷹揚で、而も監獄の役人に對しては強く當るので、囚人仲間からは好かれてゐたが、獄則をよく知つてゐて、その通り實行せよと迫るので、監獄の役人側からは嫌はれてゐた。三週間以前に、掃除番の一囚徒が、看守の新しい制服に汚い汗をかけたといふので、その看守から毆られると、ワシリーエフは、囚人を撲つ規則は無いと言つて、掃除番の肩を持つた。すると、『規則が無いものか——』と云つて、看守はワシリーエフを罵つた。けれどもワシリーエフが同じ調子で受け答へをするので、看守は彼を毆らうとした。が、ワシリーエフは彼の兩手を握んで、三分間ばかりそのまゝ押へてゐたが、やがて相手の體をぐるりと廻して扉の外へ突き出してしまつた。看守の訴へによつて、典獄はワシリーエフを懲

罰所に入れることを命じた。

懲罰所といふのは、外から門で締め固めた、暗い獨房の並んだものであつた。暗い冷たい懲罰所の中には、寢臺も、机も、椅子も無いので、そこへ入つた者は汚い床の上に坐つたり寝たりしなければならなかつた。すると、かうした懲罰所に夥しく棲んでゐた鼠が出て來て、體を飛び越えたり、その上を駆け抜いたり、暗に乗じて大膽にも囚人等の麵麴を竊みに來たりして仕方がなかつた。彼等は麵麴を食べるばかりか、寢靜まつて動かなくなると、彼等を襲撃することさへもあつた。ワシリーエフは、何も悪いことをした覚えはないから、懲罰所に入らないと言つたけれども、無理矢理に引張られてしまつた。それでも彼は猶ほ振り切らうとしたので、二人の囚人がワシリーエフに加勢して、看守達の手から彼をもぎ取らうとした。するとそこへ大勢の看守が集つて來たが、中にペトロフといふ鬪抜けて力の強い奴がゐた。そのために囚人等は撲りつけられ、遂に懲罰所へ突き込まれてしまつた。直ぐ何か暴動でも起つたやうに報告されると、知事からは、二人の巨魁——ワシリーエフと浮浪漢のネボムニヤシチイと——に三十づゝの答刑を加へよといふ命令が下つた。

答刑は女囚の面會所で行はれる筈であつた。

前夜からこの噂が監獄内のすべての住人に知れ渡つてゐて、各監房ともまさに行はれようとする體罰の話で持ち切つてゐた。

コラブリョワと、洒落女と、フォードシヤとマースロワとは、隅つこの方に坐つてゐた。そしてこの頃では切れたことのないマースロワのウォッカを、三人でひつかけてゐたので、皆赤い、景氣のいゝ顔をしてゐた。マースロワは惜し氣もなく、仲間の者にウォッカを振舞つてゐた。で、彼等は今お着代りにその問題を持ち出してゐたのである。

「何も亂暴した譯でもねえのにな。」と、コラブリョワは、丈夫な齒で砂糖の小さい塊をがり／＼噛み碎きながら、ワシリエフのことを言つてゐた。「仲間に加勢したばかりぢやねえか。囚人だからつて、さう無闇に打つわけには、もう今日日はいかねえからね。」

「もと／＼好い若者だつていふことだよ。」と、素性のよい手を長く編み下げてゐるフォードシヤが、急須の置いてある寢臺の向うの、丸太の上へ腰を掛けながら言つた。

「かういふことこそ、あの方へ話すといふだよ。」と、それとなくネフリユードフのことを指しながら、踏切番の女がマースロワに言葉をかけた。

「私、話すわ。あの方は私のためなら何でもしてくれらん

だから。」と、にこ／＼して頭を振りながら言つた。

「だけど、何時來て下さるだね、あの人達は今にも引立てられて行くつていふに。」と、フォードシヤは言つて、「あゝ私怖いわ。」と溜息をついた。

「わしねえ昔、村で或る百姓が棒敲きにされるのを見たことがあるだよ。それは何でも、良人の親父の使で、村長さんの處さ行く時だつたよ、見ると、」と言つて、踏切番の女が長い物語をはじめた。

彼女の話は二階の廊下に起つた人聲と足音のために中絶された。

女達は皆押しだまつて、聴き耳をたてた。

「あれは引立てゝゐるとこだよ、畜生共が。」と、洒落女が言つた。「屹度酷いことをするだよ。素直にしてゐねえものだから、看守共もあれにや弱り切つてるだからね。」

上の方がひつそりすると、踏切番の女はまたその物語を續けた。そして村長の邸の納屋で、百姓が敵かれた時には、彼女も膽が潰れてしまふほど驚いたといふところまで話しきつた。すると今度は、洒落女が、シチュエロフといふ男は笞で打たれたけれど、聲も出さなかつたといふ話をした。やがてフォードシヤはお茶を片づけ、コラブリョワと踏切番とは縫物にかゝり、マースロワは寢床にかけた兩足

の膝を抱へて、蹲うつまつたまゝ詰まりなごうに鬱おさき込んでゐた。やがて彼女が横になつて、眠らうとすると、そこへ女看守が呼びに来て、彼女への面會人が事務室へ來てゐると知らせた。

「わし共のことを忘れずに話しておくれよ。」と、メニシワ婆さんは、半ば水銀の剝はけ落ちた鏡の前で頸卷を直してゐるマースロワに言つた。「わし共が火くわい放けたでねえだ、あの野郎が自分で放けたよ。それは奉公人も見て知つてるだよ。いくら奉公人だつて、嘘うそついて自分の魂たまを穢たすやうなことはなかつべえよ。だからお前さん、その方にね、ミトリイを呼んで訊きいてくらしやるように言つてお呉れ。さうしたらミトリイが手にとつて見せるやうに何も彼もぶちまけて申し上げるだんべえ。あんでも身に覺えもねえわし共、かかうして牢屋へ打ち込まれてさ、あの野郎は人の鼻はなと一緒にくつゝきやあがつて酒場にをさまつてるでねえか。本當にまアあんちふこんだべ。」

「そんな法はつて無なえもんだ。」とコラブリョーワが聲こゑ援えんした。「話して上げるよ、屹度話すわ。」とマースロワは答へた。「さう／＼氣きつけに一杯。」と、片眼を瞬瞬いて、彼女は附つけ加へた。

コラブリョーワが杯こに半分ばかり注ついでやると、マースロ

ワはそれをぐつと飲み干し、口を拭ぬいで、「氣きつけ／＼」と今言つた言葉を繰返しつゝ、快活な氣分きぶんで、にこ／＼しながら、頭を振り／＼、女看守に跟ついていて、廊下を歩いて行つた。

四七

ネフリユードフはもう長いこと女關で待つてゐた。

彼は監獄へ着くと、入口の呼鈴よびかねを鳴らし、出て來た當番の看守に檢事の認可證を渡した。

「誰に面會なさるんです？」

「女囚のマースロワにです。」

「今典獄は御用中ですから駄目です。」

「事務室に居られるんですか？」と、ネフリユードフは訊きいた。

「いゝえ、この面會所に居ります。」と、答へながらも看守が、どきどきしてゐるやうに、ネフリユードフには思おもはれた。

「今日は面會日なんですか？」

「いゝえ、特別の用事で。」と看守は言つた。

「では、何うしたら典獄に面會出來るでせうか？」

「今出て來ますから、さうしたらお話し下さい。少々お待ちを願ひます。」

この時、顔のてか／＼した、煙草の煙で、口髭を燻ぶらした曹長が、軍服の金筋をびか／＼光らしながら、傍らの扉口から出て来たが、嚴然とした態度で、その看守に言った。

「何故こんな處へ人を通すのだ？……どうぞ事務室へ。」

「典獄が此處にゐられると聞きましたので。」と、ネフリュードフは、曹長の様子に何處となくそは／＼した所があつたので變だと思ひながら答へた。

この時、内側の戸が開いて、汗みどろになつた、暑さうなベトロフが出て来た。

「今度は思ひ知つたでせう。」と曹長に向つて、彼はかう言ひ放つた。

曹長が眼配せしてネフリュードフの居ることを知らせたので、ベトロフも口を閉ぢ、鑿め面をして背後の扉口から出て行つた。

「誰が思ひ知つたのだらう？ 何故今日は皆かうもそはそはしてゐるのだらう？ 何故曹長はあの男に眼配せなんかしたのだらう？」と、ネフリュードフは考へた。

「此處では面會出来ませんから、どうぞ事務室の方へ願ひます。」と、再び曹長はネフリュードフに言葉をかけた。それで、ネフリュードフが行かうとすると、背後の扉口から下

役共よりも、もつと困つたやうな顔付をして、典獄が現はれた。彼は絶えず溜息を吐いてゐた。ネフリュードフを見ると、看守に向つて、「フレドトフ、女囚監第五號室のマースロワを事務所へ連れて來い。」と言つて、「さアどうぞこちらへ。」と、ネフリュードフの方に向いた。

彼等は急な階段を昇つて、窓が一つ、卓子が一つ、そして數脚の椅子が置いてある小さな部屋へ入つた。先づ典獄か腰を下した。

「私の役目も並大抵ではありませんよ。」と、ネフリュードフに話しかけながら、彼は太卷の紙巻煙草をとり出した。

「大層お疲れのやうに見受けませんが。」と、ネフリュードフは言つた。

「さうです、これが職務疲れと云ふやつです。——何とも骨の折れる役目でしたな。荷を軽くしようとするれば、尙更よくない結果になります。私はもう、何うかして此處を去りたいと思つてゐます。實に辛い役目ですよ……」

何かさう特別に典獄にとつて苦しいのであるか、ネフリュードフには分らなかつた。然し今日は何うも一種特別な、氣の毒なほど悄氣きつた、頼りない氣持でゐるのを見た。

「成程、あなたの御職掌は並大抵ではありませんまい。それはお察しします。」と、ネフリュードフは言つた。「が、何故

あなたはかういふお勤めをなさつてゐるのですか？」

「他に仕様がないからです、家族がありますので。」

「だつて、それ程お辛いことなら。」

「それはさうですが、これでも相當役には立つてゐますよ。兎に角、出来るだけは優しくして居るのです。若し誰か他の者がこの地位にありましたら、全然やり方を違へるでせう。何しろ口で言つてしまへば何でもないやうなものの、二千人も越してゐますからね。そのまた人間が人間ですし！ 先づ扱ひ方から心得なければなりません。矢張り人間なんですから、不憫にも思はれますが、と言つて弛める譯にもまゐりませんしね。」

典獄は、この間、囚徒間に喧嘩が起つて、遂々人殺しにまでなつて覺がついた事件を話しはじめた。

そこへ、看守に案内されてマースロワが入つて來たので、話は中絶された。

ネフリュードフは、マースロワが此處に典獄の居るのを氣づかないで、扉口を入つて來るのを見た。彼女の顔は赤かつた。元氣よく看守の後から跟いて來たが、絶えず頭を振りながら、にこ／＼してゐた。典獄を見ると、びつくりしたやうな顔で、きつと彼を見つめたが、直ぐまた氣を取り直して、元氣さうに氣持よくネフリュードフに聲をかけた。

た。

「御機嫌よう。」と徐かに言つて、彼女はにつこりした。そして前とは打つて變つて、彼の手を強く握つた。

「今日は上告書に署名して貰ひに來たよ。」と言つたが、流石にネフリュードフも今日の彼女の元氣のよい應待振りには少々驚いたやうであつた。「辯護士の上告書が出來たから、署名してお呉れ。早速ペテルブルグへ發送することにするから。」

「さうですか、署名でも何でも致します。」と、片眼を瞬いてにつこりしながら、彼女は言つた。

ネフリュードフは、懷中から一綴の書類を取り出して、卓子のそばへ寄つた。

「此處で署名しても構ひませんか？」と、ネフリュードフは典獄に訊いた。

「此處へ來て坐るがよい。」と典獄は言つた。「さあ、ペンもある。字は書けるね？」

「昔は書けましたけど。」と彼女は言つて微笑しながら、スカートと上衣の袖を正して、卓子に着き、小さな引き締まつた手で不器用にペンを執つた。そして自分でもをかしくなつてネフリュードフを顧みた。

彼は彼女に何處に何を書くべきかを教へた。

念入りにインクをつけ、ペンをよく振つて見てから、彼女はその名を書きつけた。

「これで好いんですの？」と彼女は、ネフリユードフを見、それから典獄を見て、ペンをインク壺の上へ置いたり、紙の上へ置いたりしながら、訊ねた。

「私は少々お前に話したいことがある。」と、ネフリユードフは、彼女の手からペンをとつて言つた。

「さうですか、伺ひませう。」と彼女は言つた。そして俄かに何か考へ込んだやうに、でなければ睡氣でもさして來た時のやうに、眞面目な顔になつた。

典獄は起つて外へ出た。ネフリユードフは彼女と向ひ合つたまゝそこに残つた。

四八

マースロフを連れて來た看守は、卓子の處から少し離れて、窓の闕に腰を寄せてゐた。ネフリユードフにとつては愈々決定的の時が來た。彼は最初の面會に、彼女に肝要なことを——言ひそびれて、絶えず心に責められてゐたが、今日こそは、必ず彼女に打明けようとして堅く決心したのであつた。彼女は卓子の片側に坐つてゐた。ネフリユードフはそれに向

ひ合つて、他の側に坐つたが、室内が明るかつたので、初めて近くしげじげと彼女の顔を見ることが出來た。眼や唇のほとりの小皺も、腫れぼつたい臉もはつきりと見た。そして彼は、以前より一層彼女を可哀相に思ふやうになつた。

看守に——窓側に坐つてゐる、半白の頬鬚を生やした、ユダヤ型の男に——聞きとれないやうに、たゞ彼女にだけ聞えるやうに、卓上に頬杖をついて口を開いた。

「若しこの上告が駄目だつたら、今度は皇帝陛下に請願しよう。出來る限りのことはすべてやつて見るからね。」

「前のやうなことにならないといふのですがね。よい辯護士であつて呉れれば……。」と、彼女は口を入れた。「この前の辯護士と來たら、まるで莫迦みたいな男でしたもの。私にお愛想のやうなことばかり云つて。」と言つて、笑ひ出した。「もしあの時、私があなたと御懇意だといふことが知れてゐたら、こんなことにはならなかつたでせうけど、あの人は皆、私を泥棒だとばかり思つてゐるのですから、堪りませんわ。」

「この女は今日は何うも變だ。」と、ネフリユードフは考へた。そして今度こそ自分の思つてゐることを打明けようとしてゐると、また彼女が話し出した。

「私、一寸聞いていたゞきたいことがありますのよ。私達

と一緒に一人のお婆さんがゐますが、それは本當に好い人で、みんな驚いてゐますわ。そんな珍らしいお婆さんだのに息子と二人、やつぱり何の罪もないのに收監いれられてゐるんです。放火の嫌疑なんですよ。そのお婆さんが、實は、私があなたと御懇意な事を聞き込んで、」と言つて、マースロワは首を廻して、彼をチラと見た。「それで私に、そのお方に話しておくれ、そのお方が件を呼び出して、みんな聞いて下さるようにつて言ふのです。苗字はメニシヨーフつてんですが、どうでせう、聞いて下さいますか？　それは本當に好いお婆さんですよ。何の咎とがもないのに牢屋に入れられてゐるつてことは、すぐ分りますわ。ねえあなた、面倒を見てやつて下さらない？」と言つて、彼女は彼を見上げたが、またその眼を伏せて、につと笑つた。

「よし、よく聞いて見よう。」とは言つたが、ネフリエドフは彼女の打ち解けた様子に益々驚き入るばかりであつた。「しかし私は自分のことでお前に話かしたいのだ。あの時私の話したことを覚えてゐるかね？」と、彼は言つた。「随分いろ／＼とお話になりましたわね、あれは一體何のことなの？」と、矢張り、こ／＼ながら、また頭を右に傾げたり左に傾げたりしながら、言つた。

「お前に許して貰ひに來たと言つたのだよ。」と彼が言つ

た。

「まア何時いつまで許せ／＼つて仰しやるの、許すも許さないも……それよりかあなた……」

「私が自分の罪を消したいといふのは、」と、ネフリエドフは言ひ續けた。「言葉の上で消すのではない、實際の行ひで消すのだ。私はお前と結婚することに決心したんだよ。」彼女の顔はさつと驚愕の色を表はした。その斜視やぶにらみの眼は、じつと動かなくなつて、彼を見詰めてゐるやうでもあり、また見詰めてゐないやうでもあつた。

「何うして又そんな必要があるのです？」と、腹立たしげに顔を顰しかめて、彼女は言つた。

「私はさうしなければ、神様に對して濟まないと思つてゐるんだ。」

「まア、飛んでもないところへ、神様などを持ち出すものね？　あなたは腹にもないことを仰しやつてゐるのですわ。神様？　何が神様でせう？　あなたが神様を思ひ出さすのは、あの時でなければなりませんでしたわ。」と言つて、彼女は口をあけたまゝ言葉を切つた。

ネフリエドフはやう／＼、彼女の口から洩れる強烈な酒氣を感じた。そして彼女の興奮の理由を解した。

「まア氣を落ちつけないさい。」と彼が言つた。

「私、これ以上落ちつくことは出来ませんわ。私が酔つて
ると思つてるのでせう？ それは酔つてゐますとも、しか
し言ふことはよく分つてゐるんですからね。」彼女は急に
口早に言ひはじめ、顔を眞赤にした。「私はたかゞ徒刑囚の
淫賣……、あなたは貴族の公爵様ぢやありませんか。何も
こんな私と一緒になつて、體を汚すがるものはないでせう。
立派なお姫様方のところへさつさといらしつたらいいでせ
う。私の相場は十ルーブリ一枚に定つてますよ。」

「お前がどんなひどいことを言つても、僕の思つてゐるこ
とは、とても分るまい。」と、全身を顫はしながら、靜か
にネフリュードフはかう言つた。「僕が、お前に對してどれ
ほど自分の罪を感じてゐるか、到底想像もつくまい！ ……」

「罪を感じる……と憎さげに彼女はそのまま眞似して、
「ちエ！あの時は感じなかつたのですね。そして百ルーブ
リ札一枚を押しつけたんですね。あれがほんとの玉代つて
ものよ……」

「それは分つてゐる、分つてゐる。けれど今更何らにもな
らないぢやないか？」と、ネフリュードフは言つた。「だから
僕は今後お前を見捨てないと決めたのだ。」と、繰返して、
「そして一旦口に出したことは必ず實行すると決めたの

だ。」と言つた。

「何が實行出来るもんですか！」と言ひ切つて、彼女はか
らくくと打ち笑つた。

「カテューシヤ！」と、彼が言ひかけた。

「もう歸つて下さい。私は徒刑囚、あなたは公爵様です。
何もこんなところに御用はない筈です。」と、怒りに形相を
變へて大聲を立て、男から自分の手を引き離した。「あなた
は私をダシに使つて救はれようといふのでせう。」と、腹に
有ることを言ひ盡してはうとあせりながら、言葉を繼いで
だ。「いゝ加減この世で私を玩弄あそぶして置いて、又あの世で
も同じ私を使つて罪を免れようなんて！ あゝ見るのも厭
らしい。その眼鏡も、そのぶく／＼肥つた汚らしい面も。
歸つて下さい。もう歸つて下さい。」と、勢ひ込んでぐいと
突立ちながら叫んだ。

看守は彼等のところへ近寄つて來た。

「これ／＼。何を騒ぐ？ そんなことつてあるものかね……」

「構はないで置いて下さい。」と、ネフリュードフが言つた。
「増長する程があるぞ。」と、看守は言つた。

「まア／＼暫く待つて下さい。」とネフリュードフは言つた。
看守はまた窓の方へ寄つた。

マースロワは再び腰を下して、眼を伏せたまま、小さな両手の指をしっかりと組合せてゐた。ネフリュードフは、女の上へ屈みかゝつてゐたが、その實、何うして好いか分らなかつた。

「お前は私の私を信じてくれないのかい？」と彼は言つた。「結婚なさらうといふことですか。その話なら眞ツ平です、一層首でも縊つて死んだ方が増しですからね。どうかそのお積りで。」

「さうか。それにしても僕はお前のために骨を折らうと思ふよ。」

「それはあなたの御勝手ですわ。だけど私はあなたにそんなお願ひなどは致しませんからね。これが本當の私の心です。」と彼女は言つた。が、急に、「あゝ、何故あの時私は死ななかつたのだらう？」と言ひ足して、しく／＼泣き出した。

ネフリュードフも言葉が出ず、彼女の涙が自分にも傳はつて來るのを覺えた。

彼女は眼をあげて、ふと彼を見ると、驚いて、頸卷で頬に流れる涙を拭きはじめた。

この時看守がまた寄つて來て、時間の切れたことを告げた。マースロワは起ち上つた。

「お前は今興奮してゐる。都合出來たら又明日來るから、——よく考へて置きなさい。」と、ネフリュードフは言つた。彼女は返事もせず、又見向きもしないで、看守の後について出て行つた。

「何うだつたね、お前さん、もう直ぐ出られるだべえ。」と、マースロワが監房へ戻つた時、コラブリョフが彼女に言つた。「その方は大分お前さんに打ち込んでゐるやうだね。今のうちにうんと油をかけておやりよ。屹度救ひ出してくらしやるから。お金のある人はどねえなことでも出來るだからね。」

「それは、全くさうだよ。」と、踏切番の女が歌ふやうな聲を出して言つた。「貧乏人が婚禮するの？アなか／＼何うして大變なことだけど、お金持だと、氣の向き次第、すぐ出來るだからね。わしにもさういつた方が一人あつてね、それは……」

「それはさうと、わしのこと話してくれたかねえ？」と、老婆が訊ねた。

然しマースロワは、これ等の仲間達には何も返事をしないで、寢床の上へ横になつた。そして斜視の眼を部屋の隅へ据ゑたまゝ、日の暮れるまでさうしてゐた。苦しい争闘が今彼女の心のうちに行はれてゐた。ネフリュードフの言葉

は、曾て自分が苦しんだあまり、分らなくなつて、そのまま嫌つて棄て、了つた世界をまた新たに思ひ出さしたのであつた。今彼女は、これまで自分が生きてゐた夢幻の境地から覺めたのであつたが、然しまさ／＼とはつきりした過去の記憶を抱いて生きて行くのは、あまりにも苦しいことであつた。日が暮れると、彼女はまた酒を買つて、仲間の女囚達と一緒に飲んだ。

四九

『つまり、かうなるのが當然なのだ、當然なのだ。』と思ひながら、監獄を出る時、ネフリュードフは今にして漸く自分の罪の全部を理解することが出来た。若し彼が自分の非行を償はうとしなかつたならば、何時まで経つてもその罪の全部は感じられなかつたであらう。そればかりでなく、マースロワも亦自分の行つた不善の全部を感じることはなかつたであらう。今にして彼は女の魂に加へた自分の行ひをはつきりと見た。彼女も亦自分に何が爲されたかを見、且これを解した。今までネフリュードフは自分の感情を弄び、自己そのものと自己の懺悔とを楽しんでゐたのであつたが、今はたゞ恐怖に満たされた。彼はもう愈々彼女を棄てる譯に行かないことを感じたが、然しこの先き彼と彼女との關

係が何うなつて行くか、まるつきり想像が出来なかつた。

丁度監獄を出ようとしてゐる時、胸に十字架とメタルとを佩けた、媚びるやうな不愉快な顔付の一看守が、ネフリュードフのところへ寄つて来て、「これは或る一人の者から閣下へ差上げる手紙です……」と言つて、こつそり彼に一通の封書を渡した。

「どういふお方ですか？」

「お讀みになれば分りますが、それは國事犯で收監されてゐる女です。私はその監房の掛りでございますので、かうして頼まれました。實は規則違反ですけれど、人情として……」と、看守は態わざとらしい言ひ方をした。

ネフリュードフは、人もあらうに國事犯掛りの看守が、しかも監獄の中で、殆ど白晝公然と手紙の取次をするのには一驚を喫した。その時はまだネフリュードフもこれが看守兼間諜であるとは知らなかつた。けれども、兎に角手紙を受取つて、監獄を出ながら、それを讀んだ。手紙には、語尾の硬記號（ロシア語には語尾に硬記號と軟記號とがあつて、硬記號は略すのことが出来る。現に新ロシアの文法ではこれを削除してゐる）を略した鉛筆の走り書きで、次のやうに認めてあつた。

『突然ながら、あなたが或る刑事犯人に興味を持たれ、時時この監獄を訪問されることを聞きまして、私もあなたに面會したくなりました。どうか私の處へもおいで下さいま

し。面會は許されると思ひます。あなたの保護される方に取つても、私達國事犯の者に取つても、重要な材料を澤山差上げます。あなたに感謝を捧げつゝ、ウエーラ・ボゴドフ・ホーフスカヤより。』

『ボゴドフ・ホーフスカヤ！ 誰だらう一體ボゴドフ・ホーフスカヤとは？』と、ネフリユードフはマースロワに會つた印象で頭が一杯になつてゐて、はじめは如何なる思ひ出もこの名や筆蹟と結びつけることが出来ないので暫らく考へてゐた。——『あ、さうだ。』と、俄かに思ひ出した。『熊狩に行つた時の輔祭(僧侶の階級 司祭の次位)さんの娘だ。』

ウエーラ・ボゴドフ・ホーフスカヤは、ノウゴロド縣の片田舎で女教師をしてゐた。そこへネフリユードフの一行が熊狩に行つて立寄つたことがある。この女教師は勉強に出たいからと云つてネフリユードフに學資金の無心をした。ネフリユードフは彼女にその金を出してやつて、後はけろりと忘れてしまつてゐた。その婦人が今、國事犯で收監されてゐて、大方彼の噂を聞き込み、何とかして彼に恩返しでもしたいといふのらしかつた。あの當時は何も彼も手輕で單純であつたのに、今はまた何うしてかうも萬事小六(こむづ)かしく複雑なのであらう。ネフリユードフはその頃の事やウエーラ・ボゴドフ・ホーフスカヤと知り合つた事などを、はつきりと嬉しさ

うに想ひ浮べた。それは乾酪週間(ロシアのカ)の前で、鐵道から六十露里も奥まつた僻遠の地であつた。獵は大成功で二頭の熊を殺し、さアこれから歸り支度だと云ふので中食を攝つてゐると、宿泊所として借りてゐた家の主人が出て来て、輔祭の娘がネフリユードフ公爵様に御面會したいと訪ねて来たことを告げたのであつた。

「美人かい？」と、誰だか訊いた。

「おい、止せよ。」と、ネフリユードフは言つた。そして食卓から立ち上つて、輔祭の娘が何の用があるかしらと怪しみながら、眞面目な顔をして、主人の家へ行つた。

部屋の中には、フェルトの帽子を被り、毛皮の外套を着た、醜い細面の、がつしりした娘があつた。彼女の顔立のうちで、これはと思ふものは、たゞ眼と、眼の上に持ちあがつた三日月形の眉毛だけであつた。

「さア、ウエーラさん、この方が公爵様ですよ。お話しなさい。」と、年寄りの主婦が言つた。「わしはちよつくら出て來ますで。」

「何か御用ですか？」と、ネフリユードフは言つた。

「わたし、あの、……あなた様はお金持で、そしてあんな詰らない熊狩などにお金をかけていらつしやいますか、わたしはたゞ一つ」と、ひどくはにかみながら、娘は何か言

ひかけた。「わたしはたゞ一つ望みがあるのです。人様の爲めになる女になりたいと思つてゐるのですが、何も出来ませんし、何も存じませんので。」

「すると、何うして上げればよいのですか？」

「わたし、女教員をしますけれど、これから大學へ入りたいたいのです。が、さうも行きませんで、と申しても家を出さないからではありません。家では出しますのですが、たゞ學資が無いのですから。それで、お願ひに上つたんです。暫く學資を出して頂けないでせうか。卒業したらお返し致しますが。」

眼付が如何にも誠實で正直さうで、その屹としたうちにもおおづ／＼した初なところが、人を動かすものがあつたので、ネフリードフは、例によつて彼女の境遇に心を惹かれ彼女を理解して、深い同情を寄せた。

「わたしは、お金持の人達が熊を殺して、百姓にお酒を飲ませるのは、みんな悪いことだと思つてゐます。何故あの人は善いことをしないのでせう？ わたしは、たゞ八十ルーブリだけあればよいのです。だけど思召がなければ、何うでもよろしうございます。」と、彼女は脹れ面になつて言つた。といふのは、ネフリードフが目隠きもせずじつと執拗に彼女を凝視してゐたのを、彼女の方では自分に不利益

に解釋したからであつた。

「いや何うしまして、こんな機會を與へて下さつたことを嬉しく思ひます。……」

彼が承諾したことが分ると、彼女は眞赤になつて押し黙つた。

「直ぐ持つて來ます。」と、ネフリードフが言つた。

彼が廊下へ出ると、そこには二人の話を立ち聞きしてゐた一人の同僚がゐた。けれどその男のからかふのには取り合はずに、自分の財布から金を取出して、彼女の許へ持つて來た。

「どうぞ、どうぞ。いや、お禮には及びません。お禮は僕の方から言はなければなりません。」

かうしたことを思ひ浮べるのは、今の場合ネフリードフとして愉快なことだつた。そのことが原因で、善くない冗談を言ひかけた同僚の一將校と危く喧嘩をしようとしたことや、も一人の將校が彼の肩を持つてくれたことや、そのために二人が更に仲好くなつたことや、あの時の熊狩の莫迦に運よく面白かつたことや、あの晩鐵道の停車場へ歸つた時の氣持のよかつたことなどを思ひ出すと、愉快で堪らなかつた。一列の櫓が、一聯の雁のやうに、高い低い杜の細道を、音もなく疾走して行つた。その杜にはたゞ一面に

雪の褥に埋れた椈の樹々があつた。闇の中で、誰だか赤い火を光らして、香のよい煙草を燻らした。案内人のオシツプが、膝までも雪に没して、橈から橈と駈けめぐり、やがて橈の中へ乗り込むと、曠は今深い雪の中を歩きまはつて、白楊の樹皮を噛んでゐるのだとか、熊は今茂みの中の穴に潜んでゐて、息抜孔に暖い息を吐きかけてゐるなどいふ話をしてくれたのであつた。

これ等のことがすべて皆楽しく思ひ出さるゝ中にも、ネフリニードフの最も幸福に感じたのは、それは自らの健康と、體力と、氣樂さの意識であつた。肺臓は外套を脱らまして、凍つた空気を呼吸する。顔には、馬の頸木に引つかゝつた枝から雪が降りかゝる。體は暖く、顔は爽やかに、魂には何の煩惱も、苛責も、恐怖も、欲望もなかつた。何と愉快なことであつたらう！ 所が今は如何だ？ あゝ、何うしてかうも何から何まで苦しいのだらう、辛いのだらう！……正しく、ウエーラ・エフレモワナ（ボゴドウホ）は革命家であつた。そして今は革命事件のために囚はれの身となつてゐる。是非彼女に會はねばならぬ。と言つても、それは専ら、マースロワの境遇を好くならしめることに就いて警告したと、彼女が言つて寄越したからであつた。

五〇

翌朝眼が醒めると、ネフリニードフは、昨日の出來事を残らず思ひ出して、ぞつとした。

然し彼は、このやりかけた事を續行すべく、前よりも一層固い決心をした。

かうした義務の意識を感じながら、彼は家を出た。そしてマースレンニコフのところへ車を向けてゐた。それは、マースロワの外に、尙ほマースロワが懇願したメニシヨフ母子にも面會する認可證を貰ふためであつた。又一つには何かとマースロワの爲めになつてくれるかも知れないボゴドフ・ホーフスカヤとの會見に就いても、願つて見る積りであつた。

ネフリニードフは、マースレンニコフとは軍隊の方の關係上、古くからの知り合ひであつた。當時マースレンニコフは主計であつた。頗る氣質の優しい、實行的な質で、皇室と聯隊の外は世間のことを何も知らない、また知らうともしない男であつた。今ネフリニードフは、聯隊から縣の行政に移つて行政官となつてゐたマースレンニコフを訪ねて行つたのであつた。彼は金持で氣象の勝つた女と結婚し、實はその妻に強ひられて、軍職から文官へ轉じたのである。

彼女は夫を莫迦にしてゐた。そして手飼ひの動物かなんぞのやうに彼を可愛がつてゐた。ネフリュードフは昨年の冬一回訪ねて行つたことがあつた。けれどもこの夫婦は何うも面白くないやうに思へたので、それつきり二度と足を運ばなかつた。

マースレンニコフは、ネフリュードフを見ると、満面に喜色を湛へた。軍務に就いてゐた時と同様、でつぷり肥つて、艶々した赭色の立派な風采をしてゐた。もとから、いつもさつぱりとした、最新流行型の、胸にも肩にもしつくりと合つた制服や平服を着けてゐたのであるが、今でも矢張り最新流行型に仕立てられた文官服を着、これ亦同様彼の肉づきのよい體にキチンと合つて、胸の邊りもグツと廣くふつくりとしてゐた。年齢の隔りはあつたけれど（マースレンニコフは四十歳に近かつた）、二人は「君、僕」の間柄であつた。

「やア、よく来てくれたね。先づ家内のところへ行かう。僕はもう十分ばかり経つと會議に行かなけりやあならないんだ。知事が不在なので、縣廳の方は僕がやつてゐるんだよ。」と、包みきれない得意の色を浮べてかう言つた。

「僕、一寸用事があつて来たんだがね。」
「どんな用事だい？」と、マースレンニコフは、忽ち警戒

でもするやうに、驚いたやうな、また幾分嚴肅味を加へた調子で言つた。

「實は監獄に、監獄といふ言葉を聞くと、マースレンニコフの顔は愈々以て嚴格になつた。非常に僕の興味をそゝる人間が入つてゐるので、普通の面會所でなく、事務室で、面會日以外の日にも時々面會したいのだ。聞けば、これは君の職權で、何うにでもなるといふぢやないか。」

「それはさうさ君。君のためなら何でもしてやるよ。」と、マースレンニコフは、自分の威儀を和らげようとするかのやうに、ネフリュードフの膝に手をかけて言つた。「それなら引受けた。だがね、いゝかい、僕は一寸の間の支配者だからね。」

「では、その女に會へるやうに認可證を渡してくれる？」

「それは女かい？」

「うむ。」

「何をしたんだい？」

「毒殺だよ。然しそれは不當な宣告なんだ。」

「そうら見給へ。それが謂ゆる陪審裁判なるものだ。その位みの事が關の山さ」と、彼は何のためかフランス語で言つた。——「君と僕と意見の一致しないことは分つてゐる。だがそれは止むを得ないさ。ね、僕の定見なんだから」と、

彼は一ヶ年の間保守主義新聞で拾ひ讀みをした意見を麗々しくも附け加へた。「君は自由主義者にきまつてるよ。」

「僕は自由主義者だか何だか、自分でも分らないよ。」と、ネフリードフは微笑しながら答へたが、ほんとによく彼は皆から政黨に關係してゐるやうに見られ、自由主義者だなどと呼ばなされるので、いつも不思議に思つてゐた。尤もそれには理由があつた。といふのは、彼が、人を裁くに當つて先づ十分調査しなければならぬとか、裁判の前へ出ては一切の人は平等であるとか、又すべて人を虐げるものではない、殊にまだ判決されない者を虐げてはならぬとか主張するからであつた。「僕は自由主義者だか何だか、それは知らないよ。だけどたゞ一つ知つてることがある。それは今の裁判制度が如何に悪いにしても、昔のそれよりは矢張りよいつてことさ。」とネフリードフは言つた。

「それはさうと、辯護士は誰を頼んだ？」

「ファナーリンに相談したよ。」

「なに、ファナーリン！」マースレンニコフは、昨年證人として法廷に召喚された時、このファナーリンに訊問され、莫迦丁寧に小半時間も抑縮はれたことを思ひ出し、顔を變めてかう言つた。「あんな人間とか、り合ふのは止めた方がいいね。ファナーリンは——いけない人間だ。」

「もう一つお願いがある。」と、ネフリードフは彼の言葉には答へもせず、重ねて言つた。「ずつと以前に知つてゐた一人の若い女教員があるんだが、——それはとても氣の毒な女だけれど、今矢張り監獄に入れられてゐて、僕に會ひたいといふのだ。それにも面會認可證が貰へるかね？」

マースレンニコフはやゝ頭を傾げて考へてゐた。

「それは國事犯だらう？」

「さうだ。そんな話だ。」

「ところがね、國事犯だと、親戚の者の外は面會出来ないことになつてゐる。然し君のことだ、特に認可證を出すよ。君なら濫用すまいから……。何んて名前だね、君の庇つてる女は？……え、ボゴドフスカヤ？ 美人かい？」

「醜婦さ。」

マースレンニコフは不承々々に頭を揺りながら、卓子の方へ寄つて行つた。そして冒頭だけ印刷してある一枚の紙にぐんぐん次のことを書きつけた。「此ノ書ノ持參者、ドミトリー・イワイノウイチ・ネフリードフ公爵ニ、監獄事務室ニ於テ收監中ノ平民マースロワ、並ニ看護婦ボゴドフスカヤト面會スルコトヲ認可ス」と、書き終つて、彼は更に達筆な署名をした。

「これで、あすこの秩序がどんなものか、君にも見られる

わけだ。ところがあの通り澤山ゐて、殊に徒刑囚が多いものだから、なか／＼秩序を保つことは困難だ。だが僕は嚴重に監督してゐるし、またあの仕事は好きだ。君、行つて見れば分るが、彼等はあの中で非常に喜んでゐるよ、満足してゐるよ。たゞ彼等の取扱ひ方を心得てゐなさいやあならん。現にこなひだも面白くないことが——反抗が持ち上つたのさ。他の者なら暴動呼ばはりをして、澤山の氣の毒なものを作るのだが、然し僕等は何事もなく穩かに濟ましてやつたよ。一方からは、面倒を見てやり、他の一方からは嚴とした威力を示す必要があるね。」かう言つて彼は、金の飾鈕釦の附いた白いコチ／＼の袖口から突き出てゐるトルコ玉の指環を嵌めた、むつちりした白い拳を握りしめた。——「さうだ。面倒を見ること、そして嚴とした威力だ。」

「さうかい。それは知らなかつた。」と、ネフリュードフは言つた。「僕は二度監獄へ行つて見たが、ひどく陰鬱な感じがしたね。」

「あのね君、君は一つパーセク伯爵夫人と昵懇になつて置くといふ。」と、話に實が入つて来て、マースレンニコフは尙も言ひ續けた。「あの夫人は、この種の事業に全く身を委ねてゐる。なか／＼貢獻するところが多いよ。あの女の努力と、それから、これはまがひもの、謙遜なんか拔きにし

ての話だが、一つは僕のお蔭で、何も彼も一新することが出来たよ。以前とは變つて、昔のやうな慘酷なことはすつかり跡を絶つて、囚徒達も喜んでゐるよ。まあ行つて見てくれ給へ……。それからフナーリンだがね、僕も個人的にはよく知らないが、また社交的地位の上から段違ひなんだが、しかしあの男は確かに善くない人間だよ。それだから、法廷などでは岡々しくもいろんな出放題を何だ彼だと抜かし居る……」

「いや、いろ／＼有難う。」と、ネフリュードフは書附をとつて言つた。そして話を聞き終らずに、その舊友に暇乞をした。

「家内に會つてくれないのか？」

「いや今日は失敬する、時間がないから。」

「ぢや據らないが、僕が恨まれるなア。」と、言ひながらマースレンニコフは舊友を送つて、階段の最初のところまで來た。この送り出し方は彼の家では一等格の客にするものではなく、二等格の客にする方式になつてゐた。彼はネフリュードフをその二等客に編入してゐたのであつた。「さう言はずに、ほんの一寸でも會つて行かないか。」

然しネフリュードフは動かされなかつた。そして、家僕や支關番が駈け寄つて、外套やステッキを差出し、外側に巡查

の立つてゐる扉を開けてくれる間に、今日だけは何うにもゆつくりしてゐられないといふことを述べた。

「では、木曜日に来給へ。木曜日が家内の接待日になつてゐるから。僕から話して置かう！」階段の途中で、マースレンニコフはまた大聲を出した。

五一

この日、ネフリユードフは、マースレンニコフの家から直ぐその足で監獄へ行き、既に勝手を知つてゐる典獄の家へ向つた。またもや前回と同様、安ピアノの音が、矢張り力強く、冴えた早調子で響いてゐた。扉を開けてくれた、片眼を纏帯した小間使が、典獄は在宅だと言つて、小さな客間に案内した。そこには長椅子と卓子とがあつて、毛糸編みのランプ敷の上には、片側の焦げた桃色の紙笠をかけた大ランプが立つてゐた。やがて出て來た典獄は弱りきつたやうな、情けない顔をしてゐた。

「さア何卒、何ういふ御用件ですか？」と、彼は制服のまん中の鈕釦をかけたから言つた。

「只今、副知事のところへ行きまして、この認可證を買つて來ました。」と、書附を差出しながら、ネフリユードフが言つた。「マースロワに面會したいのですか。」

「マールコワ？」と、典獄は音楽の爲めに聞きとり兼ねて、問ひ返した。

「マースロワです。」

「あゝ、さうですか、さうですか！」

典獄は起つて、扉の方へ寄つて行つた。向うからはクレマンチの狂躁曲が聞えてゐた。

「マルーシヤ、一寸止めてくれ。」と言つたが、その聲によつて察すると、この音楽が彼の壽命を縮めるものらしくつた。「何も聞えんから。」

ピアノははたと止んで、不機嫌さうな覚音あやぶみがした。と思ふと扉口から覗いたものがあつた。

典獄は、音楽が止まつたので氣輕になつたと見え、軟かい煙草の太卷とまきに火を點け、それからネフリユードフにも薦めた。ネフリユードフは辭退した。

「只今申しました通り、マースロワに面會したいのですか。」

「マースロワは、今日は面會出來ませんな。」と、典獄が言つた。

「何うしてですか？」

「それがその、あなたのやりそこなひでして。」と、軽く微笑しながら、典獄が言つた。「公爵、どうか直接に金をやら

ないで下さい。おやりになるなら、私に渡しして下さい。残らず彼女のものになります。それをあなたは、昨日ぢかにおやりになつたらしいので、彼女は酒を手に入れましたな、——この酒の密賣つてことが善くないのですが、いくら骨を折つても根絶し出来ませんので——今日はまるで酔つぱらつてしまつて、ひどい亂暴をしでかしましたよ。」

「それは本當ですか？」

「まつたくですとも。で、據ろなく非常制裁を加へて獨房へ移しました。元來は極く物靜かな方ですが、何うかまあ金はやらないで下さい。あゝいふ人間は……」

ネフリュードフは、昨日のことをまぎ／＼と思ひ起して、またぞつとした。

「それでは、國事犯のボゴドフホーフスカヤには面會出来ますか？」と、やゝあつて、ネフリュードフは訊ねた。

「そりやア出来ませぬ。」と、典獄は言つた。「おや、お前は何しに來たの。」と、部屋の中へ入つて來た五六歳の女の兒に言葉をかけた。その女の兒は、ネフリュードフから眼を離さずに、首を振りながら、父の方へ寄つて行つた。——「ほら、危い。」女の兒が足許を見ないで、絨毯に躓きながら、自分の許へ駆け寄るその様子に微笑を洩らしながら、典獄はかう言つた。

「では、面會出来ませぬなら、參りたいですが。」

「出来ませとも、出来ませとも。」典獄は、まだネフリュードフを見詰めてゐる女の兒を抱へて、かう言つた。「さア、どうぞ……」

典獄は起ち上つた。そして女の兒をそつと傍へよせて、玄關の間へ出た。

典獄が、繻帶した女中の差出す外套を着て、扉口へ出切らないうちに、またもクレマンチの齒切れのよい狂躁曲が流れ出した。

「音樂學校へ出してゐましたが、あそこは校紀が紊れてゐましてね。でも、なか／＼天分はあるやうです。」と、階段を降りながら、典獄は話した。「演奏會へ出る氣なんです。」

典獄とネフリュードフとは監獄へ向つた。典獄が近づくと、忽ち耳門の扉が開いた。看守達は擧手の禮をして、彼を目送した。髪の毛を半分剥り落した四人の男が、何か入つてゐる桶を擔いで來たが、受付のところ、二人に出會すと、皆典獄を見て竦み上つた。一人などは殊更腰を曲げて、黒い眼を光らしながら顔を曇らせ、口を歪めた位みであつた。

「申すまでもありませんが、才能はよく伸ばしてやることです。埋れさしてはなりませんからね。然し、あの通りの

小さな住居すまひでは、困ることがよくありますよ。」と、その囚人等には何の注意も拂はず、頻りに話を續けてゐた。そして草臥くたびれたやうな歩調で足を引き摺りながら、ネフリエードフと一緒に集合室へ通つた。

「面會まひしたいと仰しやつたのは、誰でしたかね？」と、典獄が訊いた。

「ボゴドゥーフスカヤです。」

「それは塔たかにゐる女ですね。では暫らく待つていたゞきます。」と、彼はネフリエードフに言つた。

「ではその間に、メニシヨーフ母子おやこに面會出来ないでせうか？ あの放火犯の。」

「それは二十一號室のですね？ ようございます。呼び出してでも差支へありません。」

「いや、メニシヨーフの監房へ行つて會ひたいと思ひますか？」

「然しこの集合室の方が落ちついて話せますよ。」

「いゝえ、行つて見る方が興味がありますから。」

この時、横手の扉口とらぎから出て來たのは、めかしやの典獄補であつた。

「あのね、公爵をメニシヨーフの監房へ案内して呉れ給へ。二十一號室だ。」と、典獄は典獄補に言つた、——「それか

らあとで事務室の方へお連れ申して呉れ給へ。それでは、その間に私はあの女を呼んでおきますから。何といふ名前でしたかね？」

「ウエーラ・ボゴドゥーフスカヤです。」と、ネフリエードフが言つた。

典獄補は、口髻くちびりを染め、花香水の匂ひをあたりにふんふんさせた、白つばい髪の毛の青年將校であつた。

「どうぞこちらへ。」と、氣持よい微笑を浮べながら、彼はネフリエードフに言葉をかけた。「かうした制度に興味をお持ちなのですか？」

「それもさうですが、私は、まるつきり罪もない人達が、此處へ入つてゐると聞いて大に心を打たれたのです。」

典獄補は肩をすぼめた。

「成程、さういふことも間々まゝあります。」と、彼は恭しく引きさがつて、廣い、臭い廊下へ訪問者を入れて、自分のさきに立たせながら、平氣でかう言つた。「ですが又彼等は嘘うそを言つてることもよくありますよ。さア、どうぞ。」

監房の扉は皆鍵かぎが外されて、數名の囚人が廊下に出てゐた。典獄補は、ほんのちよつと看守達に會あひまひしながら、壁

にくつゝくやうにして自分の監房へ逃げ込む者や、兩腕を着物の縫目なりに伸ばして、兵隊流に上官を目送しながら

扉に立止まつてゐる囚人達を流眇に見て、一つの廊下を通り過ぎ、左へ折れて、鐵の扉で閉されてゐる、もう一つの廊下へ、ネフリユードフを案内した。

その廊下は前の廊下よりも更に暗く、更に臭かつた。廊下の左右には錠前のかゝつた扉がずらりと並んでゐた。扉といふ扉には、目と云はれてゐる、直径一吋ほどの孔があつた。廊下には、皺くちやの顔をした哀れつばい老看守が一人ゐただけで、その外には誰もゐなかつた。

「メニシヨーフは何處だ？」と、典獄補が訊いた。

「左側の八號です。」

「この監房は皆塞がつてゐるのですか？」と、ネフリユードフは訊いて見た。

「えゝ、一つ空いてゐるばかりで、皆塞がつて居ります。」

五二

「覗いてもいいですか。」と、ネフリユードフは訊いた。

「どうぞ御覽になつて下さい。」と、典獄補は快い微笑を浮かべながら言つた。そして看守に何か問ひはじめた。ネフリユードフが一つの孔から中を覗き込むと、黒い鬚を少し生やした背の高い若い男が、シャツ一枚になつて急ぎ足であちこち歩き廻つてゐた。扉口の蹙音を耳にしたその男は、ち

よつとこちらを見たが、顔に皺を寄せてまた歩き續けた。

ネフリユードフは、他の孔を覗き込んだ。すると、臍を潰したやうにじつと孔の方を見てゐる大きな眼とぶつかつたので、彼は急いで脇へ寄つた。三番目の孔を覗き込むと、彼の眼に映つたのは、極く背の低い男が、體を縮め、頭から獄衣を被つて寢臺の上に寝てゐる姿であつた。四番目の監房には、顔の廣い蒼白めた男が、頭を低く下げて膝に兩肘を置いて坐つてゐた。物音を聞くと、頭を上げてそちらを見た、その顔全體、殊に大きな眼の中には、一切の希望を失つたやうな悲しい表情が浮んでゐた。彼はもう誰が自分の監房を覗いてゐるか、それを知りたくもなさうであつた。誰が見に来たつて、決してその人から好ましい便りを待つてゐないといふ様子をしてみた。ネフリユードフは、恐ろしくなつて來た。彼は監房を覗き込むのを止してメニシヨーフのゐる第二十一號室に近づいて行つた。看守は錠を外して扉を開いた。首の長い肉づきのいゝ、人の好ささうな圓い眼つきをした、鬚の少い若い男が、釣床の傍に立つてゐたが、吃驚したやうな顔つきで、あわてゝ獄衣を着て、今入つて來た人々を眺めてゐた。訝かしげに、驚いた様子で、ネフリユードフや、看守や、典獄補を見廻してゐるその圓い、人の好ささうな眼付には、ネフリユードフもひどく

動かされた。

「このお方が、お前の事に就いていろ／＼訊きたいと仰しやつてゐられるんだ。」

「そいつは有難うござえやす。」

「僕は他(ほか)の人から君の話の聞いたんだが。」と、ネフリエードフは、監房の中を通つて、向うの格子の嵌つた汚い窓際に行きながら言つた。「一つ直接に君から聞いて見たいと思つてね。」

メニシヨーフはやはり窓際に近づいて来てすぐに話をはじめた。初めのうちは典獄の方に眼をやつて、こは／＼話をしてゐたが、段々平氣で喋り出して來た。そして典獄が何か言ひつけるために室から廊下へ出てしまふと、彼はすつかり大膽になつた。その話は言葉遣ひといひ、調子といひ、ほんとに普通の出舎の若者らしく、こんな話を監獄で、忌はしい獄衣を着た囚人の口から聞くことは、ネフリエードフには不思議でならなかつた。ネフリエードフは話を聞きながらそこらを見廻すと、藥蒲團を敷いた低い寢臺や、太い鐵格子の嵌つた窓や、汚れたじめ／＼した壁や、大きい上靴を穿き獄衣を着けた不幸な醜い百姓の悲しげな顔や姿を眼にしたので、段々沈んだ氣持になつて來た。この善良な男の言つたことが、眞實であらうとは信じたくないやうな氣

がした。それは一體人間が何の爲めでもなく、たゞ他人を辱しめるだけの爲めに、彼を捕へて獄衣を着せ、かういふひどい場所に閉ぢ込めることが出来るかと思ふさへ、恐ろしい氣がするからだ。然しこんな人の好きさうな顔をして話すこのほんたうの話を、嘘や偽であると考へるのは、それよりも一層恐ろしいことであつた。話の筋といふのは、かうであつた。彼が、結婚して間もなく、酒場の主人が彼の女房を横取りしたので、彼はいろ／＼のところへ訴へて見たが、亭主が役人を買収した爲めに、いつも相手の方が正しいと云ふことになつた。一度彼は腕づくで女房を家に連れ戻したが、翌日また逃げられてしまつた。そこで彼は女房を返せと怒鳴り込んだが、酒場の主人は白ばくれて自分の處にはゐないから(彼は酒場に入る時女房の姿を見た)歸れと言つた。彼はそれでも歸らなかつた。で、酒場の主人は雇男達と一緒にやつて、彼を血塗れになるほど叩きつけた。その翌日酒場から火事を出した。彼と母とは放火の嫌疑者として告發されたが、放火したのは彼ではなかつた。彼は火の出た時は神父の家にあつたのだ。

「實際君は火をつけはしなかつたのだね。」

「旦那、全く思ひもよらねえこんでござえやす。あの悪黨野郎が自分で放火をしたに違えねえでがす。奴アこなひだ

保険をつけたばかりだつていふこんでがすから。そいだのに俺と阿母が奴の處さ行つて放火するつて嚇したつて、訴へやがつた。尤も俺だつて腹の蟲が納まらねえから、うんと悪口を叩いてやりました。だけんど放火だけはやりましねえだ。それに火事のおつ始まつた時にや俺ア其處にゐなかつただから。そいだのに奴ア故意と、俺と阿母が奴の家に行つた時に火い出たやうに、仕組んだでがすよ。奴ア保険の金が取りでえので自分で放火しやがつて、それを俺等のせむにしやがつたでがす。」

「それに違ひないかね。」

「旦那、ほんとでがすとも、神様が證人でがす。どうぞお助け下せえやし。」と、彼が床に頭をすりつけようとしたのを、ネフリードフは無理に止めた。「お願ひでござえやす。何の罪もねえのに殺されるでがす。」と、なほも言葉を續けた。と、俄かにその頬が顫へて、涙がぼろ／＼落ちて來た。そして上衣の袖をまくつて、汚いルバーシユカの袖で眼を拭き始めた。

「お話は濟みましたか。」と、典獄補は訊いた。

「はあ、まあそんなに悲觀しなくともいい、出來るだけの事はして上げるから。」と、ネフリードフはかう言つて外に出た。メニショーフは扉のところにくつついてゐたが、看

守は扉を閉める時、態と彼にぶつつけるやうにひどい閉め方をした。看守が錠をかける間、メニショーフは扉の孔から、覗いてゐた。

五三

廣い廊下を後退りして（丁度晝食時だつたので監房は開かれてゐた）、淡黄色の上衣に短い大きなズボン、上靴といふ服装をした囚人が、貪るやうに見てゐる間を通つて行くと、ネフリードフは妙な感じがした。其處に入れられてゐる者に對する同情と彼等を押込めておく者に對する恐怖と疑惑、それから何故かそれらを平氣で見歩いてゐる自分に對する恥づかしさを感じた。

或る廊下では、誰かが大きな靴の音をたて、監房の中へ駆け込んだが、そのうちに中からぞろ／＼囚人が出て來て、ネフリードフにお辭儀をしなから行手を塞いだ。

「誰方様か存じましねえが、偉え旦那様、俺等に何とか裁きをつけるよう、お指圖をお願いしたうござえやす。」

「僕は役人ぢやないんだ、何も知らないんだよ。」

「誰方でも構ひましねえ。お上の偉えお役人様に話して下せえまし。」と、怒つた聲で言つた。「何の科もねえのに、二月もかうして苦しい目に遭つてゐやす。」

「何？ それはまた何ういふ譯だ？」と、ネフリユードフは訊いた。

「唯かうして監獄に押込んでおくんでござえます。二月も経ちやすが、俺等にもどうしたかわかんねえでござえます。」

「實際さうなんですが、ほんの偶然の事からして、」と、典獄補は言つた。「この男達は旅行券を持たない爲めに捕まつたのです。それで本籍地へ送り還す筈なんですが、丁度其處の監獄が焼けましたので、縣廳からそれを斷つて來たのです。で、同じ罪でも他縣の者は皆送り還しましたが、この連中だけはまだその儘置いてあるのです。(ロシヤでは内にも旅行券を要する。身元證明書のやうなものだ)」

「唯それだけの理由なんですか。」と、ネフリユードフは扉口に立つて訊いた。

獄衣を着た四十人ばかりの群集は、ネフリユードフと典獄補とを取巻いて、一度にがや／＼言ひ出した。典獄補はそれを制した。

「誰か一人で言へ。」

すると大勢の中から五十ばかりの背の高い、風采のいゝ百姓が進み出た。彼がネフリユードフに説明したところによると、彼等は他處へ仕事に出たのだが、唯旅行券が無い

爲めに收監されたのであつた。それも旅行券が全く無いのではなく、唯期限が二週間ばかり切れてゐたのだ。こんな期限の切れる例は毎年あるので、別に大した事にもならないのだが、今年に限つて捕縛され、二月も罪人のやうに此處に置かれてゐたのである。

「俺等は石工で、みんな同じ組合の者でござえやす。俺等の田舎にある監獄が焼けたつてえこたあ聞きやしたが、何も俺等のせゐぢやござえましねえ。どうぞお助け下せえまし。」

ネフリユードフは話を聞くには聞いたが、この風采のいゝ老爺の言つたことは殆んど了解が出来なかつた。それは、大きな暗灰色の脚の澤山ある風が、石工の頬の毛の間を這ひ廻つてゐるのに氣を取られてゐたからである。

「どうしてさうなんだらう、たゞそれだけの理由で？」と、ネフリユードフは典獄補の方を向いて言つた。

「さうです。皆郷里に還して落着かせてやらなければならぬのです。」と、典獄補は言つた。

典獄補が言ひ終るや否や、大勢の中から、やはり獄衣を着た背の低い男が飛び出して、妙に口を歪めながら、此處で何の理由もないのに、ひどい目に遭はされてることを訴へ出した。「そりやあ犬よりもひどいんで……」と、彼は言ひ

掛けた。

「おい／＼餘計なことを言ふな、黙つて居れ。でない、と、あつがひどいぞ……」

「何がひどいんでえ。」と、小男は自棄になつて言つた。「俺等に何の罪があるだ？」

「黙れ。」と、典獄補は怒鳴つた。小男は仕方なく黙つてしまつた。

『一體どうした譯だらう。』と、ネフリュードフは監房を出ながら獨り考へた。彼は扉の中から覗いてゐる囚徒や途中で出會つた囚徒達の數知れない眼で、尻をはたかれるやうな氣持がした。

「實際、罪科の無い者をよくもかうして收監しておかれたものですね。」と、ネフリュードフは廊下から外に出る時に言つた。

「では、どうしろと仰しやるんですか。囚徒はなか／＼嘘を言ふことが多いですからね。彼等の言分ばかり聞いてゐたらみんな無罪になりますよ。」と、典獄補は言つた。

「だが、今の石工達は何の罪もありませんな。」

「まあ、さうとしておきませう。然し手におへない奴等ばかりで、うんと締めつけたい譯には行きません。どうにもならない亂暴者が居りますから警戒を要します。昨日もそ

んなのを已むを得ず罰しました。」

「どんな罰を？」と、ネフリュードフは訊いた。

「命令に依つて、棒で打つたのです。」

「體刑は廢止された筈ですが。」

「それは普通の人の話で、あんな權利を剝奪された者に對してはまだ適用されてゐます。」

ネフリュードフは昨日支關で待つてゐる間に見たことを逐一思ひ出した。そして、彼が待つてゐたその時は丁度刑罰が加へられてゐたのだなと、始めて事情が分つて來た。すると好奇心や、憂悶や、困惑や、それに精神的嘔吐が昂じて、實際に嘔吐を催しさうな氣持ちなど、みんなごつちやにした感じが、ぐつと込み上げて來た。尤も前にもこんな事があつたが、これ程ひどく感じたことは一度もなかつた。

彼は、典獄に構はずに、脇目も振らず大急ぎで廊下を出て、事務室に行つた。典獄は廊下に立つてゐたが、他の事務が忙しかつたので、ボゴドッフホフスカヤを呼ぶのを忘れてゐた。彼はネフリュードフが事務室に入つて來た時、始めて彼女を呼ぶ約束を思ひ出した。

「直ぐにあの女を呼びにやります。まあそこにお掛け下さい。」と、彼は言つた。

五四

事務室は二間から成つてゐた。手前の室には、大きく突き出てゐる燵と、汚い窓が二つ附いてゐた。室の一隅には囚人の身長を計る器械があり、他の隅には、人を苛める場所に付き物のキリストの大きな聖像が掛けてあつた。そしてこの室には數名の看守が立つてゐた。次の室には二十人ばかりの男と女が、壁に沿うて幾人かかたまり合つたり、二人づゝになつたりして小聲で話をしてゐた。窓際には事務用の卓子が置いてあつた。

典獄はその卓子に向つて腰掛けてゐた。そしてネフリュードフにそこにある椅子を薦めた。ネフリュードフは腰を下して室にゐる人々を見廻した。

第一に眼についたのは、短い上衣を着た、にこ／＼してゐる若者で、眉の黒い、可なり年老つた婦人を對手に、色の手ぶりをしながら、熱心に話しかけてゐた。その隣に腰を下してゐる、青い眼鏡をかけた老人は、獄衣を着た若い女の手をとつて、身動きもせず、その話に聞き入つてゐた。驚いたやうな顔つきをした小學校の生徒が、またその老人を一心に見つめてゐた。その人たちから近い一方の隅には、戀し合つてゐる二人の男女が腰掛けてゐた。女は

薄白い髪の毛を短くして、締つた顔付をした、愛嬌のある、まだ極く若い娘で、流行の衣服を身に付けてゐた。男は顔の輪廓の上品な、髪の毛を縮らした美しい青年で、護謨引の上衣を着てゐた。二人は室の隅へ行つて腰を下し、ひそ／＼語り合ひながら、戀に酔うてゐるらしかつた。卓子の一番近くにゐたのは、黒い衣服を着た母親らしい白髪の婦人であつた。彼女は、前の青年と同じやうな上衣を着てゐる肺病やみの若い男をじつと見て、何か言ひたいらしかつたが、涙のために口をきくことが出来ず、言ひかけては止めてゐた。息子らしい若い男は手に紙を持つてゐたが、どうしてよいか分らない風で、腹立たしげな顔つきをして、それを疊んだり、揉んだりしてゐた。彼等の傍には、肥つた、頬の赤い、眼の飛び出た美しい娘が、灰色の着物に細い襟巻を掛けて坐つてゐた。彼女は泣いてゐる母と列んで坐りながら、優しく母の肩を撫で、慰めてゐた。この娘は何から何まで美しく、大きな白い手、縮れた短い髪、それに引締つた鼻と唇、どこも點の打ちどころはなかつたが、顔の中で殊に目立つて美しいのは、暗褐色の仔羊のやうな、優しい整つた眼もであつた。彼女の美しい眼は、ネフリュードフが入つて來た瞬間、母の顔から離れて、彼と視線を合したが、直ぐその眼を離して、何か母に話し

かけた。戀人同志の近くには、黒い髪をもちやく／＼生やした、暗い顔つきの男が、ぶり／＼しながら、スコベツ教徒らしい鬚のない訪問者と何か話をしてゐた。ネフリュードフは典獄と列んで腰を下し、張りつめた好奇心を以て、あたりを見廻した。すると、髪を短く剃つた小さい男の兒が來て、黄色い聲で尋ねた。

「小父さんは誰を待つてるの？」

かう訊かれて、ネフリュードフは一寸驚いたが、その小兒の注意深い生々した眼や、眞面目くさつた伶俐さうな顔付を見ると、彼もやはり眞面目に、知り合ひの女を待つてゐるのだと答へた。

「そんなら小父さんの妹なの？」と、小兒は訊いた。

「違ふよ、妹ぢやないよ。」と、ネフリュードフは驚き氣味で答へた。「だが、君は誰と一緒に此處へ來たの？」と、今度はこちらから訊いた。

「僕、お母さんと一緒に、お母さんは國事犯なの。」と、小兒は云つた。

「マリヤ・パウロウナ、このコーリヤをあつちに連れて行け。」と、典獄は言つた。彼はネフリュードフが小兒と話をするのは違法だと考へたのである。

マリヤ・パウロウナ——さつき、ネフリュードフの注意

を惹いたあの仔羊のやうな眼をした美しい娘——は、ぬつと立上つて、しつかりした男のやうな大股で、ネフリュードフや小兒のある方に近づいた。

「この兒はあなたに何をお訊きしたのでせうか、あなたは誰方だとお尋ねしたのですか。」と、彼女は軽く微笑んで親しみ深い眼でネフリュードフを見つめながら訊いた。その様子は、彼女が今迄誰にでも素直に優しく兄弟のやうに接して來たこと、又現にさうであり、必ずさうに違ひないといふことを確信させた。「この兒は何でも聞きたがつてゐるんですの。」と、彼女はこぼれるばかりの優しい笑顔で小兒の顔を眺めながら言つた。これを見た小兒も、ネフリュードフも思はず微笑ますにはゐられなかつた。

「さうですよ、私が誰に會ひに來たかと尋ねられたのですよ。」

「マリヤ・パウロウナ、知らない方と話してはいかん。そんなことは分つてゐるだらう。」と典獄は言つた。

「はい／＼。」と彼女は言つて、大きな白い手で、彼女の顔ばかり見詰めてゐたコーリヤの手を取りながら、肺病の若い男の母親の處に歸つて行つた。

「あの兒は誰の子なんですか。」とネフリュードフは、こんなことを典獄に訊いた。

「或る國事犯の子で、監獄で生れたのです。」と、典獄は自分の監獄のやうな處は他で一寸見られないと云ふことを、満足さうに話した。

「さうですか。」

「さうなんですよ、今度母親と一緒にはペリヤに行くのです。」

「それからあの娘は？」

「それは申し上げられません。」と、典獄は肩を揺りながら言つた。「あ、ポゴドゥホーフスカヤが來ました。」

五五

後ろの扉を開けてウエーラ・エフレモウナ(ポゴドゥホーフスカヤ)が軽い足どりで出て來た。彼女は瘦せた小柄な女で、毛を短く刈り、顔の黄色い、大きな、人の好きさうな眼をしてゐた。

「おや、よくお出で下さいましたね。」と、彼女はネフリュードフと握手しながら言つた。「私を覚えてお出でになつて？ さあ掛けませう。」

「こんなところでお目に懸らうとは意外でした。」

「私、大層嬉しいですわ。ほんたうに何て嬉しいんでせう。私、この上の望みはありませんわ。」と、ウエーラ・エフレモウナは、いつもの通りに、大きな圓い眼で吃驚したやうに

ネフリュードフを見ながら言つた。彼女は、相變らず黄色い皺だらけの汚れた短い上衣の襟の中から、黄色い細く筋ばつた頸を振り／＼話をした。

ネフリュードフは彼女の收監された経緯を訊ねた。彼女は、それに答へて、ひどく興奮した様子で、入獄の顛末を語り出した。彼女の話の中には、宣傳、階級打破、團體、本部、支部など、いふ學術上の外國語が澤山に入つてゐた。彼女はこんな言葉は誰でも知つてゐるやうに信じてゐたらしかつたが、ネフリュードフは今まで一度も聞いたことのない言葉であつた。

彼女は、ネフリュードフが非常な興味を喚び起すであらうと信じたらしく、革命運動の祕密を皆話してしまつた。ネフリュードフは彼女の黄色い頸筋や、薄い纏れた髪の毛を眺めながら、何の爲めに彼女がそんな突飛な事をしたのだから、そして又何の爲めに自分にそれを打明けたのだからと少からず驚いた。彼は彼女を可哀相に思つたが、あの百姓のメニショーフが、馬鈴薯の新芽みたやうに青白い手や顔をして、何の罪もないのに臭い監獄に監禁されてゐるのを憐れむのとは全く違つてゐた。彼女に就いて第一に可哀相に思はれたのは、彼女の頭の中がすつかり混亂してゐることであつた。彼女は明かに女丈夫を以て自ら任じ、自己の事業を

有利に展開する爲めには、生命を犠牲にする覺悟を持つてゐた。然し彼女の事業がどんなことであり、如何にすれば形勢を有利に導き得るかに就いての説明は極めて曖昧なものであつた。それだのに彼の前に、得意になつて説明した。このことも彼が彼女を不憫に思ふ一つであつた。ネフリニードフは、こんな氣取つた態度を、彼女の外この室にゐた數名の人々のうちにも見ることが出来た。彼がこの室に來たことが彼等の注意を惹いたので、自分が此處にゐるから彼等は今までの態度を少し變へたと思つた。こんな點は、護謨引（まもひき）の上衣（うへぎ）を着た若者にも、獄衣（ごくい）を着た婦人にも、また戀し合つてゐる二人の男女にもあつたが、たゞ肺病やみの若い男と、仔羊（こやぎ）のやうな眼をした娘と、スコペツ教徒らしい髻（こむぎ）のない瘦せた男と話をしてゐた黒い髪の毛のもちやもちやした、眼の凹（ぼく）んだ男だけには見られなかつた。

ウエーラ・エフレモウナのネフリニードフに話したいと思つてゐる用件は次のやうなことであつた。彼女の友達（とも）のシューストワといふ女が、彼女の言ふ所によると、支部にさへ屬してゐないのに、たゞ彼女が保管を頼まれた書籍や書類がシューストワの手許で發見されたといふ廉（ゆゑ）で、五ヶ月以前にウエーラ・エフレモウナと一緒に捕へられて、ペトロパウロフスクの要塞監獄に收監されてゐるのであつた。シュー

ストワの收監に就いては、ウエーラ・エフレモウナも自分に多少の責があると考へてゐたので、知合ひであるネフリニードフを煩はして、友達（とも）の放免されるよう出来るだけの盡力をして貰ひたいと懇願したのであつた。もう一つの用件は、やはりペトロパウロフスクの要塞監獄に收容されてゐるグレウイチといふ男が、兩親と面會が出来るように、また彼の研究に必要な學問上の書籍を手に入れることが許されるように斡旋して貰ひたいといふのであつた。

ネフリニードフは、此處では一寸難（むづか）しいから、ペテルブルグに行つた時出来るだけのことをしようと約束した。

ウエーラ・エフレモウナが自分の通つて來た經路に就いて語つたところに依ると、彼女は産婆學校を了へてから革命運動者と交際をはじめ、一緒に仕事をやるやうになつた。初めのうちはずべてが順調に運んで、宣言書を書いたり、工場（こうじやう）で宣傳をしたりしてゐたが、後になつて幹部の一人が捕縛され、祕密文書が官憲の手に入ると、同志がすべて逮捕されて了つた。

「私もそれで捕（とら）まつたんですが、今度態々流刑にされるんです……」と、彼女の身上話（みづかひ）は終りを告げた。「だけど、こんなことは何でもありませんわ。私は嬉しいんです、オリムピアの神々のやうな自信を持つてますわ。」と、彼女は寂

しい微笑を洩らした。

ネフリュードフは仔羊のやうな眼をした娘のことを訊ねると、ウエーラ・エフレモワナのいふには、あれは或る將軍の娘で、もう餘程前から革命黨に入つてゐた。彼女が收監されたのは、憲兵を狙撃した罪を背負ひ込んだ爲めであつた。彼女は、祕密印刷所になつてゐた家に住んでゐたが、或る夜官憲の自宅搜索が行はれた時、居合はした同志の人は自衛の手段を執ることに決めて、燈火を消し、證據物を破棄しはじめた。警官は家の中に侵入して來た。すると同志の一人が憲兵を狙撃して致命傷を負はした。狙撃犯人を調べられた時、彼女は今まで一度も拳銃を手にしたこともなく、蜘蛛一匹殺したこともなかつたのに、下手人は自分だと名乗つた。それでさう決つて、彼女は苦役にやられることになつたのである。

「愛他的な、立派な人格ですわ……」と、ウエーラ・エフレモワナは褒めた。

更にウエーラ・エフレモワナの言はうとする用件は、マースロワのことであつた。彼女はマースロワの事件と、ネフリュードフとの關係に就いての話を知つてゐた。——この話は監獄の中ではよく知れ渡つてゐた——それで、彼女を國事犯人の方に移すか、さもなければ、今監獄の病舎には患者

が非常に多くて臨時の看護婦が要るから、せめてその方へでも廻して貰ふように骨を折られては何うかと勧めた。ネフリュードフは彼女の助言を感謝した。そしてその通りに盡力してみようと言つた。

五六

典獄が立上つて、もう面會時間が終つたから、みんな別れねばならぬと言ひ渡した爲めに、話はそれで切れてしまつた。ネフリュードフは椅子から腰を上げて、ウエーラ・エフレモワナに別れを告げ、扉口まで行つてあたりを見ながら立止まつた。

「皆さん、時間です、時間です。」と、典獄は立ち上つたり、坐つたりして言つた。

典獄の言葉は、たゞ室にゐた囚人や、面會人を異常に興奮させただけで、誰一人別れようとする者はなかつた。或る者は腰を上げてその儘立ち話をしてみたり、或る者は坐つたまゝ話を續けてゐた。中には別れを告げながら泣いてゐる者もあつた。殊に可哀相に思はれたのは、肺病の息子と話をしてみた母親であつた。息子は絶えず紙をひねくり廻してゐたが、顔には段々苦しさうな表情が浮び、母の悲しみに動かされまいと頻りに努めてゐるのが随分辛いらし

かつた。母は、もはや別れる時が来たのを知つて、息子の肩に頭を凭せかけ、涙を潑りながら聲を揚げて泣いた。仔羊のやうな眼をした娘は——ネフリュードフは思はず彼女に視線を向けた——泣きじやくる母親の前に立つて、何か慰めの言葉を述べてゐた。青い眼鏡を掛けた老人は、自分の娘の手を取つて、その言ふことに頷いてゐた。若い戀人同志は、立上つて手に手を取り、無言の儘お互に眼をじつと見入つた。

「あすこだけが愉快さうですね。」と、ネフリュードフの傍で彼と同じく別れを告げてゐる人々の有様を見てゐた短いジャケットの青年は、戀人同志の方を指さしながら言つた。

ネフリュードフと青年とが自分達の方を見てゐるのを感じた戀人同志——護謨引の上衣を着た男と、髪の薄白い、眼に愛嬌のある娘——は驚いた手を伸ばしたり、後に體を反らしたりしては、また笑ひながらぐる／＼踊り廻つた。「今夜二人は監獄で結婚して、女は男と一緒にシベリヤに行くのです。」と、青年は言つた。

「男は何者ですか。」

「徒刑囚ですよ。二人は楽しさうですが、あれを聞くと随分可哀相です。」と、肺病患者の母親の泣聲に聞き入りながら、ジャケットを着た青年は附け加へた。

「皆さん、どうぞ、どうぞお早く。でないと厳しい處置を取らなければならなりません。」と、典獄は同じ言葉を幾度も繰返した。「さあ、どうぞ。」と、彼ははつきり言ひ兼ねてゐた。「どうしたんですか。もうとつくに時間が來てゐるんですよ。もうこれ以上は猶豫出來ません。これが最後ですよ。」と、彼は巻煙草に火を點けたり、消したりしながら、弱り切つた調子で言つた。人を無暗に苦しめても構はない監獄の制度に、奮くから慣れ切つて珍らしくも思はぬやうになり、大して責任も感じなくなつてゐても、さすがに典獄は、自分が、今此處で起つてゐるその悲しみを起させた罪造りの一人だと思はずにはゐられなかつた。それが爲め彼が非常に心苦しう感じてゐるのが、あり／＼と見えた。

遂々囚人と面會人とは分れ／＼になつた。一方は内側の扉の中へ、また一方は外側の扉の中へ。護謨引の上衣を着た若者も、肺病やみの若い男も、黒い髪の毛のちや／＼した男も、監獄で生れた小兒を連れだマリヤ・パウロウナも——みんななくなつた。

面會人も外に出はじめた。青い眼鏡の老人は重い足どりで歩いて行つた。ネフリュードフもその後を續いた。

「實に驚くべきことです。」と、話好きの青年はネフリュー

ドフと列んで階段を降りながら、先刻ときれた話を續けるやうに言つた。「でも典獄はいゝ人です。規則を楯にやかましく言はないだけ有難い。少しでも餘計話が出来れば、みんなの氣が晴々しますからね。」

ネフリュードフが、自分からメドウィンツェフと名乗つた話好きの青年と話しながら支關に出た時、彼等の後から、疲れた様子をして典獄が近づいて來た。

「マースロワとお會ひになりたいのでしたら、どうぞ明日お出で下さい。」と、典獄は、ネフリュードフには努めて親切にしようといふ様子で言つた。

「承知しました。」と言つて、ネフリュードフは急ぎ足で外に出た。

メニショーフの苦しみは確かに驚くべきものでつた。肉體の苦しみよりは、寧ろ善や神に對する信仰のぐらつき出すのが恐ろしいものであるが、彼は、何の理由もなしに彼を苦しめてゐる人々の残酷なのを見ては、この懷疑を體驗しなければならなかつた。又旅行券が規定通りに書かれてゐないと云ふだけの理由で、他に何の罪もない數百人の人々に侮辱や苦痛を加へるのも恐ろしいことであつた。更に又、自分の同胞に責苦を加へる職業にありながら、重要な善いことでもしてゐるかのやうに信じてゐる、神經の癱痺した

看守達の存在も恐ろしい事であつた。然し何よりも、あの老年で、病身で、お人好しの典獄か、自分の家族と比べて同じやうに思はれる母と息子とを引離し、父と娘とを別れさせねばならぬ立場にあるのは、最も恐ろしいことであつた。『これは一體何の爲めだらう』と、ネフリュードフは自分の心に問うた。が、彼は今、いつも監獄を訪問する毎に起る精神的より肉體的に移つて行く嘔吐く感じを、強く味はつてゐたので、この質問に答へることが出来なかつた。

五七

翌日ネフリュードフは辯護士を訪ねて、メニショーフの一件を話し、辯護の勞を依頼した。辯護士はそれを聞き取つてから、兎に角一應調べて見て、若しネフリュードフの話の通りならば、無報酬で辯護を引受けようと言つた。ネフリュードフは更に、一寸した行き違ひから百三十人の石工が收監されてゐる顛末を辯護士に話して、これは誰の責任だらうか、誰が悪いのだらうかと、質問した。辯護士は確かな返答をしようと思つたらしく、暫く黙つてゐたが、やがてはつきり答へた。

「誰が悪いつて、そりやあ誰が悪いのでもありませんよ。檢事に言へば知事が悪いと言ふでせうし、知事に話せば檢

事が悪いと言ふでせう。結局悪い者は誰もい譯になりませんよ。」

「私は直ぐにマースレンニコフのところへ行つて話して見ませう。」

「そりや無駄なことですよ。」と、辯護士は反對した。「あんな奴は——あれはあなたの御親戚でも、御友人でもないでせうね——露骨にいへば、没分曉漢ですよ。それに狡猾いと来てますからね。」

ネフリュードフは、マースレンニコフが辯護士の事に就いて言つた言葉を思ひ出して、何とも答へずに暇を告げて、その儘マースレンニコフの處に馬車を走らせた。

ネフリュードフはマースレンニコフに二つのことを頼まねばならなかつた。それは、マースロワを病院に移すことと、旅行券を持たない爲めに何の罪も無くして收監されてゐる百三十人の石工を、出来るならば助けてやることであつた。自分の尊敬しない人に物を頼むのは、彼に取つて心苦しくはあつたが、目的を達成するためには、これが唯一の手段なので、止むを得ないことであつた。

マースレンニコフの家に近づいた時、階段の傍に數臺の馬車——幌馬車や箱馬車——のあるのが、ネフリュードフの眼についた。それで彼は、今日は丁度マースレンニコフ夫

人の接待日で、自分も招待客の一人であつたことを思ひ出した。ネフリュードフが玄關先に乗着けた時、入口には一臺の箱馬車が止つてゐて、短い上衣に前立の附いた帽子を被つた家僕が、階段の下から一人の貴婦人を馬車に乗せてゐるところであつた。貴婦人は後ろの裳をからげて、黒い靴下を穿いた細い足首を見せてゐた。先着の馬車の中には、彼が見覚えのあるコルチャーギン家の幌馬車もあつた。頬の赤い白髮頭の馭者は、顔馴染の旦那であるネフリュードフに對して、鄭重に愛想よく帽子を取つてお辭儀をした。ネフリュードフがミハイル・イワーノウィチ(マースレ)の所在を召使に訊ねる間もないうちに、マースレンニコフ自身が、大切なお客、——階段の中途までとなく下まで送つて來ねばならぬいやうなお客を伴つて、敷物を敷いた階段の上に顔を見せた。その極めて大切なお客といふのは軍人で、歩きながら、今度市に建てる育児院の慈善金を募る爲めに催される富籤のことをフランス語で話してゐた。そして、今度の催しが貴婦人達のためには良い仕事であるといふ意見を述べ立ててゐた。「婦人達には面白い仕事だし、お金も集りますよ。楽しんでやるがえい、さうすると自然御利益もあるんでさ。」と軍人は言つて、「やあ、ネフリュードフ君、御機嫌よう。大分久しくお目にかゝらなかつたですな。」と、彼

は挨拶した。「さあ、副知事夫人に挨拶して来たまへ。コルチャーギン令嬢も見えてますよ、ナディネ・ブクスヘウデンの令嬢も、町中の別嬪さんは残らずお揃ひになつてますよ。」と、彼は、金ピカの美しい禮服を着た従者に外套を掛けさせ、その下から少しばかり肩をいからせて言つた。「さよなら！」彼はまたマースレンニコフの手を握つた。

「さあ、上へ行かう。よく来て呉れたねえ。」と、マースレンニコフは元氣ついで言つた。彼は、でぶ／＼と肥つてゐるにも拘はらず、ネフリユードフの手をとつて、ぐん／＼二階へ引つづつて行つた。

マースレンニコフのひどく愉快さうに元氣ついでゐるのは、高官や貴族の訪問にあづかつた爲めで、そんな人達の訪問を受けると、彼は無性に嬉しがつた。それは丁度、人馴れた犬が主人に愛撫されたり、曳廻されたり、耳を引張られたりすると、尾を掉つたり、蹲つたり、體を曲げたり、耳を擦りつけたたり、夢中でぐる／＼跳ね廻つたりするのと同じであつた。マースレンニコフは、そんなことをやり兼ねない男だつた。彼はネフリユードフが生眞面目な顔つきをしてゐるのには眼も呉れず、言ふことも碌に聞きもしないで、無理に彼を客間に引入れた。ネフリユードフはどうにもならないので彼に續いて行つた。

「用談は後にしよう。何でも君の言ふ通りにするよ。」と、マースレンニコフはネフリユードフと一緒に廣間を通りながら言つた。「おい、ネフリユードフ公爵がおいでになつたと、奥さんに知らせるんだ。」と、彼は歩きながら家僕に言つた。家僕は急ぎ足で彼等の前を通り過ぎて、先に走つた。「何でも君の言ひなり次第だ。だが、妻には是非會つて呉れ給へ。この前はとう／＼會はせずにしまつたからね。」

二人が客間に這入つた時には、もう家僕が傳へた後だったので、副知事夫人のアンナ・イゲナーチエウナ（彼女は自分のことを將軍夫人と呼んでゐた）は、長椅子に居並ぶ多くのボンネットや頭の間から、ネフリユードフに對して、輝かしい微笑を浮べながら頭を下げた。客間の一隅には、茶卓を圍んで貴婦人達が腰を下し、軍人や文官がその傍に立つてゐた。そして男女の話聲や笑聲が絶え間なく聞えた。

「まあお珍しいこと、どうして私達の仲間にお入りになるのがお嫌ひなんでしょうか、何か失禮なことでも致しましたんでせうか？」と、これまで少しも親しくしてゐないのに、さも馴染でもあるかのやうな挨拶振りで、アンナ・イゲナーチエウナはネフリユードフを歓迎した。

「皆さん、お近づきでいらつしやいますか？　こちらは、

ベリヤトフスカヤ夫人、それからミハイル・イワノウイチ・チェルノフさん。もつと近くにお寄んなさいまし。」

「ミッシーさん、この卓子にいらつしやいよ。お茶を上げますから。それから、あなたもね……」と、彼女は多分名前を忘れたのであらう、ミッシーと話をしてゐた軍人に向つて言つた。「さあどうぞこちらへ。公爵、お茶は如何ですか。」

「どうしても、どうしても、それには賛成が出来ませんわ。あの方は少しも愛してゐらつしやらないのですから。たゞそれだけのことですわ。」と、女の聲かした。

「でも、あの方はピロシキ(肉や菓物の入つたパン)を愛してゐらつしやるわ。」

「いつも馬鹿な冗談(じよぶな)はつかりおつしやるのね。」と、絹や、黄金や、寶石でびか／＼してゐる帽子を被つたもう一人の婦人が笑ひながら云つた。

「これは上等ですね、このワッフルは、そして軽い味ね、もつと頂戴よ。」

「あら、もう直きにお發ちですつて。」

「え、當地(このち)にゐるのは今日(けふ)ぎりですよ。それで今日伺つたんですの。」

「丁度今、春の眞盛り(まぢま)ですから、田舎はどんなにいゝでせ

うね。」

帽子を被り、黒味が、つた縞の着物を着てゐるミッシーは殊(こと)に美しかつた。それは彼女のすらつとした體(からだ)に、一分の隙もなくよく合つてゐて、丁度彼女はそれを着たまゝ生れて來たやうであつた。彼女はネフリユードフを見て、顔を赤くした。

「あなたはもうお發ちになつたのだとばかり思つてゐましたわ。」と、彼女は彼に言つた。

「殆ど發つばかりになつてゐたんですが、」と、ネフリユードフは言つた。「急に用事が出來たので延ばしたのです。ここへ來たのも、實はその用事の爲めなんです。」

「母の處へもお寄り下さいましな。母は大變お會ひしたがつてゐるんですよ。」と、彼女は言つたが、嘘をついたことが勘づかれたと思つて、一層顔を赤くした。

「一寸お伺ひ出來ないかも知れません。」と、ネフリユードフは彼女の顔を赧(かたじけなく)らめたのを氣づかない振りをして、暗い顔で答へた。

ミッシーは、腹立たしげに顔を顰(しん)めて、氣取つた風をしてゐる將校の方を振り向いた。將校は彼女の手から空虚(くわく)の茶碗を取つて、安樂椅子に劍をぶつけながら、さも勇敢さうに茶碗を他の卓子(たふし)に持つて行つた。

「あなたにも是非育児院に御寄附をお願いしますよ。」

「はい、致しますよ。ですが、私は富籤の方だけにしておいて、それにうんと力癪ちからこぼを入れませう。」

「確かに承つておきますよ。」と、作り笑ひの聲が聞えた。

自分の接待日が大成功だったので、アンナ・イグナーチエウナは有頂天になつて喜んだ。

「あなたは監獄のことで大層御盡力なすつてゐらつしやるさうですね、ミカ(彼女の夫マースレンニコフのこと)がさう申しましたわ。」と、彼女はネフリュードフに言つた。「ミカにはいろ／＼缺點もありますが、人は極く善いのですよ。可哀相な囚人達を、自分の子供のやうにしてをりますの。あの人はさうしないではゐられない質ちかでしてね。その親切なことつたら……」

彼女は、夫が囚人を管刑にするやうに命じたのを知つてゐるので、夫が親切であるといふことをどんな風な言ひ廻して云つてよいか分らなくなつて、言葉を送切とぎやらした。そして、丁度室に入つて来た、薄紫のリボンをつけた皺しわくちやな老婦人の方に笑顔おほほを向けた。

儀禮上必要な、あたりさほりのない通り一遍のお世辭や挨拶を述べて了ふと、ネフリュードフは立上つて、マースレンニコフに近づいた。

「君、僕の話聞いて呉れるかい。」

「あゝ、さうだつた。どんな話かね。」

「こちらへ來給へ。」

彼等は日本式の小さな書齋しよさいに入つて窓際に腰掛けた。

五八

「さあ、何でも話し給へ、煙草はどうだ？ 一寸待つて呉れ給へ、灰だらけにするといけないから。」と、マースレンニコフは言つた。そして灰皿を持つて來た。「さあ、話といふのは？」

「二つお願ひがあるんだが。」

「さうか、それで。」

マースレンニコフの顔は忽ち曇つて來て、憂鬱ううつさうになつた。先刻さつぎの犬が主人に耳を引張られて、夢中になつて喜んでゐたやうな様子は、まるで無くなつてしまつた。

と、女の聲がして「いゝえ、いゝえ、決してそんなことはありませんわ。」と言つてゐるのが聞えて來た。すると今度は男の聲で「ウォロンツォフ伯爵夫人とウィクトル・アブラクシン」を幾度も繰返すのが聞えた。更に別の方からも話聲と笑聲とが一緒になつて聞えて來た。マースレンニコフは客間の方にも耳を使ひながら、ネフリュードフの話も聞いて

みた。

「僕はまたあの女のことであつたんだが。」と、ネフリュードフは言つた。

「あゝ、この間判決のあつたあれだらう、知つてるよ。」

「あの女を病舎勤務の方に移して貰ひたいんだが、話によると、さう出来るさうぢやないか。」

マースレンニコフは唇を噛んで一寸頭を傾けた。

「さあ、それは一寸難かしいかも知れん。」と、彼は言つた。

「兎に角話して見て、明日何とか君に電報を打つよ。」

「僕が聞いたのでは、病舎には患者が多くて看護婦の助手が要るといふぢやないか。」

「さうだ、何れにしても、後で返事をすることにしよう。」

「ぢやあ頼むよ。」と、ネフリュードフは言つた。

客間からは皆がをかしさうに笑つてるのか聞えた。

「笑はしてるのはウイクトルだな。」と、マースレンニコフは微笑しながら言つた。「氣の向いた時には、あの男はなかなか痛烈な警句を吐くからね。」

「それからもう一つは」と、ネフリュードフが言つた。「今監獄には百三十人の石工が收監されてゐるが、それはたゞ旅行券の期限が切れたといふ理由だけなんだ。それにもう

一月もそのまま放つて置かれてゐるんだ。」

それから彼は、彼等が收監された顛末を説明した。

「君はどうしてそのことを知つてゐるんだ？」と、マースレンニコフは問ひ返した。彼の顔には忽ち不安と不快の色が現はれた。

「或る囚人に面會に行つた歸りに、石工たちが廊下で僕を取巻いて頼んだのさ。」

「どんな囚人のところへ君は行つたのだ？」

「冤罪で收監されてゐる百姓のところだよ。それでその男には辯護士をつけてやつたんだが、僕の言ふのはそのことぢやないんだ。一體石工達は何の罪もないのに、たゞ旅行券の期限が切れたといふだけで收監されてゐるのかね、そして……」

「そんなことは検事のやる仕事だ。」と、マースレンニコフは怒つたやうにネフリュードフに言つた。「これが君の言ふ、公平にして迅速を尊ぶ裁判の眞相さ。一體副検事の職責は監獄を訪問して、囚徒が法律の條文通りに正當な取扱ひを受けてゐるかどうかを確めるものなのに、彼等は一向そんなことはしないで、骨牌遊びに夜も日もないのだ。」

「それで、君は今の一件をどうにも出来ないといふのかね。」と、ネフリュードフは訊いて、辯護士が知事は屹度検事

の責任に押しつけてしまふだらうと言つた言葉を思ひ出して、暗い表情をした。

「いや、僕は何とかするよ、早速調べることにしよう。」

「それぢや、あの方がお氣の毒ね、悪いことを一人で引受けて」と、客間から女の聲が聞えて來た。然し口先ばかりで、内心は少しも同情してゐる様子がなかつた。

「益々結構です、これを頂戴しますよ。」と、他の方から、何か遣り取りでもしてゐるやうな、男の聲と女の巫山戯た笑聲とが聞えて來た。

「いけません、いけません、どうしても駄目よ。」と、女の聲がした。

「では宜しい、何とか盡力しよう。」と、マースレンニコフは繰返した。そして、トルコ玉の指環の光つた白い手で、巻煙草を消した。「さあ、あちらの仲間入りをしようぢやないか。」

「えゝと、それからもう一つ、」と、ネフリュードフは客間に行かないで「扉口とらぐちのところに立止まつた。「昨日監獄で體刑を加へたと云ふ話だが、本當かね。」

これを聞いたマースレンニコフは顔を赤くした。

「あゝ、君はそれを言ふのか。それだと、君を監獄に出入させるわけには行かんよ。何でもかんでも探し出すんだか

らね。さあ、あつちへ行かう、家内が呼んでゐるよ。」と、ネフリュードフの手を引張つて言つた。彼は再び貴賓が來訪した時のやうな嬉はなき方をしたが、今度のは喜んだのではなくて、幾分てれ隠しの氣味があつた。

ネフリュードフは、誰にも挨拶をせず、一言も言はないで客間から廣間を通つて、飛んで來た家僕には眼もくれずに、玄關から街へ出た。彼の顔は暗かつた。

「あの方はどうなさいましたの？ あなたが何かなさつたんですか。」と、アンナは夫に訊いた。

「あれがフランス流ですよ」と、誰か言つた。

「あれがフランス流ですつて、嘘よ、スウルウ流ズウだわ（ズウはアフリカの名）」

「だけど、あの方はいつもあんなよ。」

客の出入りが絶え間なく、饒舌おしゃべりはいつまでも續いた。それからは都合のいゝ話題として、ネフリュードフの事が言ひ囃された。

その翌日、ネフリュードフは、マースレンニコフから、紋章入りの厚いすべくした紙に、堅苦しい字で綺麗に書かれた手紙を受取つた。それにはマースロワを病舎勤務に移すように、醫者に手紙を送つたから多分ネフリュードフの希望は實現するだらうと書いてあつた。末尾に『君の親愛な

る舊友」として、『マースレンニコフ』と署名した下に、吃驚する程立派に、しかも大きな確りした花押があつた。

「莫迦！」と、ネフリュードフは思はず叫ばずにはゐられなかつた。殊に『友』と云ふ字を見ると、マースレンニコフが彼に對して謙遜してゐるやうに思はれた。つまり、彼が道徳上最も汚はしく且つ恥づべき職務にありながら、却つて自分を重要な人物であると心得、ネフリュードフに阿諛ふといふ程でなくとも、ネフリュードフを友と呼ぶのは、自分がその重要な地位にあるのをあまり誇つてゐないといふことを示す爲めに、書いたやうに思はれた。

五九

最も廣く世の中に行はれてゐる迷信の一つは、人間はそれ／＼一定の性質を持つてゐるといふことである。例へば、あの人は、善人だとか悪人だとか、柄巧だとか莫迦だとか、或はまた、熱心家だとか不熱心家だとか、一概に定めてしまふことである。然し人間はそんなものではない。それで、あの人は悪いところよりも善いところが多いとか、あの人は莫迦なところよりも柄巧なところが多いとか、或はあの人は冷淡よりも熱心な場合が多いとか、又は、その反對であるとか、といふことは出来る。然し或人を指して、彼は

いつも善人で柄巧だといひ、他の人を指して、彼はいつも悪人で莫迦だとかいふのは、間違つたことである。ところが我々はいつてもかういふ風に人間を分類する。これは甚だ正しくないことだ。人間は河のやうなもので、水は何處でも同じ水だが、河には細流があり、急流があり、或は大河があり、緩流がある。更に水の清い河もあれば冷たい河もあり、水の濁つたのもあれば温いものもある。人間もその通りで、各人は皆人間としてのさまざまの性質の萌芽を持つてゐる。そして或る場合にはその一つの性質が現はれ、他の場合には、他の性質が現はれる。だから、同一の人間でありながら全く似ても似つかない性質を屢々現はすことがある。人に依つてはこの變り方が極く際立つて見えるものもある。ネフリュードフはこの種の人であつた。彼のかうした變化は、精神的原因からも、肉體的原因からも來てゐた。今は丁度、彼にこの變化が起つたのである。

裁判が済んで、それからカテューシャと初めて會つた後に體驗したあの新生活の勝利と歡喜の感情は、今は全く消え去つて、最近にカテューシャと會つて後は、彼女に對する恐怖と、嫌惡と、更に緊張した義務の意識とに變つて了つた。彼は、決して彼女を棄てまい、彼女が望むならば結婚をするといふ自分の決心を變へまいと、固く覺悟を定めた。然

しそれは彼に取つて、なか／＼困難で、苦しいことであつた。

彼は、マースレンニコフを訪れた翌日、彼女に會ふ爲めにまた監獄に行つた。

典獄は面會を許したが、面會所は、事務室でも、辯護士室でもなく、婦人面會所であつた。典獄は親切にして呉れたが、以前のやうには打解けなかつた。これは恐らく、ネフリュードフがマースレンニコフと會談したので、その結果、監獄ではネフリュードフを嚴重に警戒するやうになつたものであらう。

「御面會は差支ありません。」と、典獄は言つた。「然しお金だけは、どうぞ、前にお願ひしてある通りに、……それから、あの女を病舎勤務に移しますことは、知事の御書面にもあります通り、出来ることになつてゐます。それに醫者も承諾しました。たゞ本人がそれを嫌がつて、疥癬かきに粉をつけてやるなんて、厭なこつたと申して居ります。公爵、あんな手合には全く困りますよ。」と、彼は言ひ添へた。

ネフリュードフは何とも答へずに、早く面會のお許しが願ひたいと言つた。典獄は看守を遣つて彼女を呼ばした。ネフリュードフは典獄の後について、がらんとした婦人面會所

に入つた。

マースロワはもう先に來てゐて、おづ／＼と静かな足どりで格子の向うから出て來た。彼女はネフリュードフに近づいて、あたりを見廻しながら靜かに口を開いた。

「ドミートリイ・イワーノウィチ様、一昨日はあんな失禮なことを申し上げて済みませんでした。どうぞ勘忍して下さいな。」

「僕がお前に勘忍するなんて……」と、ネフリュードフは言ひかけた。

「ですけど、兎に角わたしを打棄つちまつて下さいまし。」と、彼女は更に言葉を附け足した。ネフリュードフは、彼女が彼を見詰めてゐるひどい斜視の眼のうちに、矢張り緊張した意地悪い表情を見て取つた。

「何故、僕がお前を見捨てなければならんのだ。」

「何故つて、もうさういふ風になつてゐるんですもの。」

「どうして、さうなんだ。」

彼女はまた彼の顔を見たが、その眸のうちにはやはり憎しみか現はれてゐるやうに思はれた。

「どう、でもかうしても。」と、彼女は言つた。「お見捨て下さい、私は眞面目にお話し申してゐるのですよ。私はどうしても出来ないのです。このことはすつかり諦めて下さい。」

「はいまし。」と、彼女は唇を震はせて、暫く口を開かずにはゐたが、「ほんとにさうなんです。無理を仰しやると、わたし寧ろそ首でも縊つて死んで了ひますわ。」

ネフリエードフは、彼女がかうして拒絶するのは、自分を憎み、自分を怨んでゐるからであらうが、その外に何か重要な立派な考が含まれてゐるやうにも思はれた。かうした全く平靜な状態になつてから、尙ほ前の通りに拒絶したいふことが、ネフリエードフの心に蠕まつてゐた一切の疑惑を全く齟らして、また嚴肅な、優しい歡喜の状態に立返らしめた。

「カテューシャ、僕は前に言つたことをまた繰返すよ。」と、彼は極めて嚴肅な口調で言つた。「どうか僕と結婚してくれ。お前が嫌だと言ふのなら、お前が承知するまで、前と同じやうに何處までも一緒に跟いて行くよ。お前が何處に送られようと、僕は必ず其處へ行くよ。」

「では、御勝手になさいまし、私はもう何も申上げません。」と言つたが、彼女の唇は、また震へだした。

ネフリエードフも亦、口を利く元氣がなくなつて、黙つてしまつた。

「僕は一旦田舎に行つて、それからペテルブルグに行くつもりだよ。」と、彼は心を靜めてさう言つた。「お前の、い

や私達の事件に就いて奔走するためだ。屹度前の判決は取消しになるよ。」

「判決は取消されなくとも構ひません。今度のことでもなくとも、他に罪なことをして居りますから。」と、彼女は言つた。彼には、彼女が湧き出る涙を抑へるのに、非常に苦心してゐるのが見えた。「あの、メニシヨーフにお會ひ下さいましたか。」と、彼女は突然かう言つて、自分の取亂したのを隠さうとした。「あの母子はほんとに冤罪なんぞせう。」

「あゝさうだよ、さう思ふね。」

「あのお婆さんはほんとに好い人ですよ。」と、彼女は言つた。

彼はメニシヨーフから聞いたことを残らず話した。そして彼女に何か入用な物はないかと尋ねた。彼女は何も要らな

いと答へた。

二人はまた黙り込んだ。

「あの病舎へ行くことはどうなりましたの？」と、彼女は斜視の眼で、彼を見詰めた。あなたがそれがいいと思ひになるなら、私、參りますわ。そしてお酒はもう飲みませんわ……」

ネフリエードフは黙つて彼女の眼を見た。彼女の眼には微笑が浮んでゐた。

「それは大變結構なことだ。」と、彼は漸くそれだけ言つた。

「この女は全く別の人間になつた」と、ネフリニードフは考へた。そして、前の疑ひがすつかり霽れて、今度は曾て経験しなかつた或る物を感じた。それは彼が今まで一度も味つたことのない、愛は打ち勝ち難いものであるといふ信念であつた。

マースロワは面會を済ますと、悪臭のする自分の監房に歸つて、獄衣を脱ぎ、兩手を膝の上に置いたまゝ寢臺の自分の場所に腰掛けた。監房には、肺病の女と、赤兒を連れてウシヂーミルスカヤと、メニシヨフの母親と、二人の子供を連れて踏切番の女房があるだけであつた。教會執事の娘は昨日氣違ひときまつて病院に送られた。他の女囚達は洗濯をしてゐた。婆さんは寢臺の上で寝てゐた。踏切番の子供達は廊下で遊んでゐたので、廊下への扉は開放になつてゐた。赤兒を抱いたウラヂーミルスカヤと、器用な手付で靴下を編んでゐる踏切番の女房は、マースロワの傍にやつて來た。

「會つて來たのかい。」と、二人は訊いた。

マースロワは、床まで届かない足をぶら／＼させながら、

高い寢臺に腰掛けたまゝ何とも答へなかつた。

「何を泣いてゐるのさ。」と、踏切番の女房が言つた。「鬱ぐの、か一番毒だよ。どうしただ、カテューシヤ、えゝ？」と、彼女は編物の手を急がせながら言つた。

マースロワはやはり黙つてゐた。

「みんな洗濯に行つたよ。今日は、うんと施し物があるつてさ。澤山持込んだ様子だよ。」と、ウラヂーミルスカヤが言つた。

「フィナシユカ！」と、踏切番の女房は扉の外に向つて怒鳴つた。「あの餓鬼、何處へ行つたよか。」

彼女は、編針を糸毬と靴下に刺し込んで、廊下に出て行つた。

この時廊下で大きな足音と女の聲が聞えて、この室の女囚達が素足に上靴をつゝかけながら入つて來た。みんな白麵麴を一つづゝ持つてゐたが、中には二つ持つてゐる者もあつた。フォードシヤは直ぐにマースロワの傍に來て、「どうしたの、何か具合の悪いことでもあつて？」と、ぼつちりした碧い眼で優しくマースロワを見ながら訊いた。「これを貰つたのよ。」と、彼女は白麵麴を棚の上に置いた。

「どうしただ、あの方、婚禮を遊つてゐるだか？」と、コラブリヨワは訊いた。

「いゝえ、そんなことはないわ。私が斷つたのさ。」とマースロワは答へた。「私は厭だつて言つてやつたのさ。」
「まあ、何て莫迦な娘だ。」とコラブリョワは持前の低音で言つた。

「一緒に暮せねえのなら、結婚したつて初まらねえわね。」と、フォードシヤが言つた。

「だつてお前さんの亭主は、始終一緒にくつゝいてくるぢやねえか。」と、踏切番の女房が言つた。

「そりやさうさ、わし等は正式に結婚しただもの。」と、フォードシヤが言つた。「一緒に暮せねえのに、何で正式に結婚するだ？」

「何て莫迦だべ、正式も何もいつたもんけえ。あの方と結婚すりやア、お金がたんまり出来るぢやねえか。」

「あの人は、私の行くところへは、何處までも跟いて來るつて云つたんだよ。」と、マースロワは言つた。「來たければ來てもよし、來たくなけりや來ないでもよし、勝手にするがいゝさ。私は何も頼みはしないから。今度あの方はベテルブルグに行つて色々骨折るんだつてよ。あの方は大臣さんなどは親類みたやうにしてゐるんだからね。」と彼女は言葉を續けた。「私は何にしたつて、あの人には用がないんだから、同じことさ。」

「極り切つたこんだよ。」と、突然コラブリョワが合槌を打つた。彼女は自分の袋の中を探しながら、他のことを考へてゐたらしく、「どうだ、一杯ひつかけようぢやねえか。」と言つた。

「私は止すよ。」と、マースロワは答へた。「お前さん達だけでお飲み。」

第二編

マースロワの再審は二週間の後に元老院で開かれるといふことだつたので、ネフリュードフはそれまでにペテルブルグへ行きたいと思つた。そして元老院でも不成功に終つた場合には、上訴状を作製した辯護士が教へてくれたやうに、陛下に請願しようと考えた。が、辯護士が言つたやうに、上訴の理由が極めて薄弱で、取りあげられないとすれば、前以て、その用意をして置かなければならない。それは、マースロワの加はつてゐる囚徒の一隊は、六月初旬に護送(シベリア)されるに違ひないから、マースロワの後をおつかけて行く支度に取り掛るが爲めには——さうネフリュードフは固く決心してゐた——今のうちに持ち村をひと巡りして、自分の仕事の處置をつけて置かなければならないと云ふことだつた。

先づ初めにネフリュードフは、その収入の大部分を獲てゐた、一番近いところにある、面積の廣大な、黒土質地帯の領地であるクヂミンスコエへ行つた。彼は子供の時分と青

年時代とをこの領地で送つたのであるが、その後大きくなつてからも二度ほど其處へ行つたことがあつた。一度は母の頼みで管理人であるドイツ人を其處へ伴つて行つて、一緒に財産を檢べたので、彼はずつと以前から、領地の事情や、百姓と管理事務所との關係、つまり彼等が地主に對する關係などを知つてゐた。その關係といふのは外でもない、農民が管理事務所に對して全く從屬關係に置かれてゐたといふことであつた。彼はそのことを、彼がヘンリー・チャージの學説を奉じ且つ宣傳した時代、そしてこの學説に基いて父から承繼ついでした土地を百姓達に分配したことのある大學生時代から知つてゐた。ところがその後軍隊勤務に就いて、一年に二萬ルーブリあまりの金錢を浪費する習慣がついてからは、これ等の知識は、彼の生活に取つて不必要なものとなつて、忘れられてしまつた。さうなつてからは、彼はたゞの一度だつて、母から送つて來る金の出處に就いて尋ねようとしたことがなく、寧ろそんなことは考へまいとさへ努めた。けれども、母が死んでから、財産を相続することゝなつて、自分の財産である土地を處理する必要に迫られてから、土地私有に對して、自分の態度を決めなければならぬ問題が再び起つて來た。もしこれが一ヶ月も前だつたら、ネフリュードフは現在の遣方やりかたを變へることは出

來ないし、又土地を管理してゐるのも自分ではないなど、言つてゐられたであらう。そして領地から遠く離れたところに住んで、金だけ送つて貰つて、多少安心してゐられたことでもあらう。然るに今はシベリヤ行きも目前に迫り、監獄との關係も複雑で面倒になつて來たので、それが爲めには社會的地位と、殊に金が必要なのであるが、いづれにしても土地問題を以前のまゝに抛つて置く譯に行かず、たとへ自分が不利益になつても、それを改革しなければならぬと決心した。それが爲めに彼は土地を自分で耕作するやうなことをせずに、それを賤い地代で百姓に貸付けて、百姓達が地主から獨立して働くことの出来るやうにしてやらうと考へた。だが、ネフリュードフは地主と農奴所有者との地位を比較して、土地を小作人に耕作させる代りに、百姓達に貸與することは、農奴所有者が、農奴の勞働を搾取する代りに、年貢を納めさせたのと同じやうなものであると幾度か考へた。さうしたことは固より問題の根本的解決ではないが、それでも解決への第一歩ではあつた。人間支配のより殘酷なる形式から、より穩健なる形式への過程ではあつた。で、彼はさうすることに決めた。

ネフリュードフは正午時分にクヂミンスコエへ到着した。萬事に互つて簡單な生活をしようとして考へて、彼は電報も打

たずに、停車場で二頭立の旅用馬車を雇つた。馭者は小柄の若者で、南京更紗の短衣を着て、腰よりも下についてゐる襷の上に帯を締めてゐた。よく馭者に見かけるやうに、馭者臺の上に斜めに腰かけながら、いかにも話し好きらしく、地主と話を交はした。二人が話に注意を奪はれてゐるうち、ひどくやつれた、跛の白い主馬と、息を切らした、ひよろ／＼の副馬とは、步調をゆるめて行くことが出來た。それを馬共はいつも望んでゐたのだ。

馭者は今自分がこの土地の主人を乗せてゐるとは知らずに、クヂミンスコエ村の管理人の話をした。が、ネフリュードフは態とそしらぬ顔をしてゐた。

「恐ろしく見榮坊なドイツ人奴でござえやすよ。」と、都に住んでゐたこともあり、小説なども讀んだことのある馭者は言つた。彼は半ば體をひねつてお客の方を向き、長い鞭の先や柄の方を持ち換へながら腰掛けてゐた。大方、自分の熟練した様子を見せるつもりなのであらう。「彼奴三頭馬車に栗毛の馬を買ひ込んで、女房と二人で乗廻してゐやすぜ。何處さでも行き放題でがすよ！ 冬のクリスマスの時なんざ、立派な家の中きクリスマスツリーが飾つてありやしたよ。俺アかうしてお客を運んで行きやしたよが、素敵に立派でしたぜ。こゝへらちう探したつて、あねえこた

あ見られましねえよ！ 彼奴アお金を掠奪つてさ——ひでえ欲張りでがすぜ！ 彼奴何をしようと、勝手にござえやすからな。立派な土地を買つたつてえ、人さまの評判でがすよ。」

ネフリュードフはどんな風にドイツ人が自分の土地を管理しようが、又どんな風にそれを利用してゐようが、そんなことにはもう平氣であると思つてゐた。ところが、この胸の長い駁者の話は、彼に不快な感を懐かしめた。彼は道を進みながら、麗らかな日や、時々太陽を隠すもく／＼した黒雲や、あちらこちらに百姓達が燕麥畑を耕しながら犂の傍に附いて歩いてゐる野原や、空高く雲雀が舞ひ上つてゐる青々とした野菜畑や、もう上から下まで新緑に包まれた森や、牛や馬が放たれてゐる牧場や、耕夫がチラホラしてゐる耕地などに見惚れた。けれども時々、彼にはそれとはなしに一種の不愉快な思ひがしてならなかつた。で、彼はそれが何んであるかを自分に問うてみた——するとクヂミンスコエではドイツ人が勝手氣儘なことをしてゐるといふ駁者の話が頭に浮んだ。

クヂミンスコエに着いて、仕事に取掛つて見ると、ネフリュードフはその感じを何時の間にか忘れてしまつた。

事務所の帳簿を調べ、それから管理人の話を書いて見る

と、百姓達の小さな耕地が地主の土地に取圍まれてゐるのが何より有利だといふことを露骨に述べ立てたので、ネフリュードフは益々厭になつて了ひ、いつそ自分で經營するのを止めて、土地を全部百姓達に貸與しようといふ決心を固めた。彼は帳簿や管理人の話によつて、優良な耕地の三分の二は、以前のやうにこちらで直接雇つた労働者に完全な農具を使用せしめて耕やさせ、残りの三分の一だけを一デシャチーナ(我が一町一)につき五ルーブリの賃銀で百姓達に耕させてゐたことが分つた。つまり五ルーブリの爲めに百姓は三度耕し、三度耙を入れ、そして種を蒔いたり刈り入れたりして、それを束ねて穀倉へ運搬しなければならなかつた。早い話が、やすい臨時雇にも、少なくとも一デシャチーナに對して十ルーブリの賃銀を支拂ふべき仕事を百姓は五ルーブリでしなければならなかつたのである。また百姓は自分達が事務所から都合して貰つたものに對しては、全部勞働で支拂ふのだが、それはこの上ない高價なものについた。牧場の草を貰ふにも森から薪木を貰ふにも、馬鈴薯の葉を貰ふにも一々勞働で辨償しなければならなかつたので、事務所に對して負債の無いものは殆んど一人も無かつた。そんな風で、耕地以外の土地は、代價の勞働で耕されるから、假りに一デシャチーナが五分の利を産むも

のとすれば、その約四倍を百姓から取り立てたのである。ネフリユードフは以前から知つてゐたのであるが、今それを新しいことでともあるかのやうに聞いて見ると、自分をはじめ、自分と同じ地位に在るすべての人々がさうした不條理を何うして全然氣づかずにゐることが出来たのであらうと、驚かすにはゐられなかつた。管理人は、もしネフリユードフが農民に土地を譲渡すれば、農具一切はまるで不用になつて了ひ、それを賣るとしても原價の四分の一にもならないこと、又百姓達が土地を荒して了ふこと、つまりネフリユードフが土地を百姓に譲渡すればいかに多大の損をしなければならぬかといふ理由を述べたが、それは却つてネフリユードフをして、百姓達に土地を貸與し、自分の収入の大部分を犠牲にして、善事を行はねばならぬといふ確信を固めしめたに過ぎなかつた。で、彼は今度の自分の滞在中に、手つ取り早くその始末をつけて了はうと決心した。本年の作物の收穫や、賣方や、また農具や、不用な建物の賣却などのことは、彼の留守中に管理人が一切片づけなければならぬことになつた。そこで彼は明日クヂミンスコエの領地を圍んでゐる三ヶ村の百姓の集會を開くことを管理人に頼んだ。それは自分の考へを一應百姓達に告げて、土地の貸付條件を協定する爲めであつた。

斯くて自分が管理人の説に反對して確乎たる考へを持ち通したといふ意識、また百姓の爲めに犠牲となるべき準備が出来上つたといふ意識に満足を感じつゝ、ネフリユードフは事務所を出た。そして今後の成行を考へながら、家の周圍をぶらついた。荒れ放題になつてゐる花園（管理人の住居の前には花壇が設けられてあつた）や、蒲公英が一面生ひ茂つてゐるテニスコートや、いつも彼が煙草を喫みに行つたことのある、そして三年前に泊りがてら遊びに來た美しいキリーモワと巫山戯たことのある、その菩提樹の並木道などをめぐり歩いた。彼は明日百姓達に語らうとする話の要點を考へて、また管理人のところへ行つた。そして茶を飲みながら、もう一度經營全部を止めてしまふことに就いての話を管理人と取交した後、自分が百姓の爲めに決行しようとする善行に全く安心と満足とを感じながら、彼の爲めに用意された母屋の中の一室に姿を消した。そこはいつも客を接見する爲めに使はれてゐる部屋であつた。

あまり大きくない小ざつぱりとしたその部屋には、ヴェニス風景畫が飾られ、二つの窓の間には姿見があつて、綺麗な彈條入りの寢臺と硝子製の水差とマッチと消燈器が置いてある小卓があつた。姿見のそばにある大きな卓子の上には、彼の鞆が開けつ放しのまゝ置いてあつて、その中

からは化粧箱と彼が持つて来た書籍とが顔を出してゐた。それは露文の刑法研究の實驗といふ本で、他に同じ題目に就いて獨語と英語で書かれたものも各一冊づゝあつた。彼はそれを、この田舎への旅行中、ひま／＼に讀まうと思つてゐたのであつたが、今それを見るにつけて彼は自分がこれ等の問題から非常に縁遠いものであることを感じた。彼は全く別なことに熱中してゐたのだ。

部屋の間隔には崑崙細工の施してあるマホガニ製の古風の脇掛椅子があつた。それは母の寢室にあつたもので、それを見ると、突然彼の心に全く思ひもよらない感じが起つた。いつかこの家も取り毀され、庭園も荒れ果て、森林も伐り倒されてしまふかと思ふと、そして又たとへ自分は關係しなかつたにしても——彼が知つてゐる通り——餘程の資力を費して殖し且つ維持して来た馬や牛や、農具や、農具を納める物置や、厩や、家畜の放牧場や一切のものを失くして了ふかと思ふと、急に惜しい、やうな氣がした。それまではこれらのもの一切を棄てることは容易なことやうに思はれてゐた。が、今はそればかりでなく、土地も惜しく、またこれから必要になつて來さうな収入の半減することも、彼に取つては惜しくなつて來た。すると、彼の頭の中には、土地を百姓に貸與して自分の財産を失くすに

は及ばないではないか、それは輕卒といふものであるといふ打算的な判断が浮んで來た。

『俺は土地を所有してはならないのだ。ところが土地を所有しないでは、俺は一切の經濟を支へて行くことが出來ない。けれども俺はこれからシベリヤへ行くのだから家も土地も俺には不用である』と、或る聲が言つた。すると他の聲が言つた。『それはさうだ。だが、第一お前はシベリヤで一生を送るのではあるまい。もしお前が結婚すれば、子供を持つやうになる。それでお前が整然と土地を譲り受けたやうに、そのやうにお前もそれを子孫に傳へなければならぬ。これは土地に對する義務である。與へたり失くしたりすることは譯もないことだが、手に入れることは非常に困難である。そこで、お前は自分の生涯を考慮し、この先きお前が何をしようとするのであるかをよく見極めて、それによつて自分の財産を處理しなければならぬ。それから——お前がしようと思つてゐることは、眞に自分の良心に従つて行つてゐるのであるか、それとも世間に矜りたいために行つてゐるのであるか？』——ネフリユードフはかう自問自答してみたが、何となく自分は矢張り世間の思ほくに動かされてゐるとしか受けとれなかつた。そして考へれば考へるほど益々疑問が起つて來て、いよく解決し難いも

のとなつて行くのであつた。これ等の考へから逃れる爲めに、彼は新しい寢床の中へ入つて、明日さつぱりした頭で、今迷つてゐる疑問を解決しようと思つたが、長いこと眠れなかつた。開け放たれた窓からは、すが／＼しい空氣や月光と一緒に、蛙の聲が流れ込んで來た。それに交つて遠い公園の方からと、一羽はすぐ窓の下にある花盛りのライラックの茂みの中からと、夜鶯の啼聲が聞えて來た。蛙と夜鶯の聲に聞きとれながら、ネフリュードフは典獄の娘の音楽や、典獄の事を思ひ出した。それから又マースロワが唇を顫はして、蛙の鳴くやうな聲で、『あなたそんなことはちつとも構はないでゐて下さい』と言つたことなどを思ひ出した。するとドイツ人の管理人が蛙の鳴く方へ下りて行くので、彼を呼び止めなければならなかつたが、彼はその儘下りて行つたばかりでなく、同時にマースロワの顔に早變りして、ネフリュードフを責めはじめた。そして『わたしは懲役人で、あなたは公爵です。』と言つた。『いや、俺は俺の考へ通りやり通すことにしよう。』と、ネフリュードフは考へて、ふと目を覺した。そして自分に問うた、『一體俺のしようとするのは善いことか、悪いことか？ 今は分らないが、明日になれば分るだらう。』それからまた、と／＼として、彼自身も管理人とマースロワが下りて行つた後から

跟いて行かうとしたが、そこで夢はばつたり止んで、そのまゝ眠りに落ちた。

二

翌日ネフリュードフは朝の九時に目を覺した。主人の身のまはりの世話を焼いてゐる若い事務員は、彼がこそ／＼音を立てゝゐるのを聞きつけて、今までにない位みひどく磨き立てた靴と、冷たい澄み透つた水とを持つて來た。そして百姓達はもう集つてゐると告げた。ネフリュードフは、彼等のことを思ひ出して飛び起きた。彼が土地を貸し與へて、財産を失くしてしまふことを悲しんだ昨日の心持は、もう痕跡も無かつた。彼は昨日のことを考へると、不思議で堪らなかつた位で、今は目前に迫つてゐる事件に喜びを覺え、知らず／＼誇りを感じながら、急いで衣服を着た。部屋の窓からは、一面に蒲公英の生ひ茂つたテニスコートの廣場が見え、そこには管理人の指圖を受けながら百姓達が集つてゐた。昨夜蛙が鳴いたが、果して天氣はどんよりした曇り日であつた。朝から風も無く、靜かな、生温かい小雨が降つて、木の葉や枝や草には雨滴がかゝつてゐた。窓ぎには新緑の香の外に、更に雨を欲しがつてゐる土地の匂ひも漂つてゐた。ネフリュードフは衣服を着ながら幾度

も窓から覗いて、廣場に集つてゐる百姓達の様子を見た。彼等は次から次と寄つて来て、挨拶を交してゐたが、やがて圓く輪になつて、杖に凭れながら話し合つた。大きな鈕釦のついた、たけの短かい緑の立襟の上を着た、どつしりした、筋肉の逞しい管理人が、ネフリュードフのところへやつて来て、百姓達は集つてゐるが、待たして置いても差支ないから、先づ珈琲なり紅茶なり——雙方とも支度が出来てゐるから——飲んでからにしてはどうかと言つた。

「いや、とにかく僕は百姓達のところへ行くことにしよう」と、ネフリュードフは言つたが、目前に迫つてゐる百姓達との話のことを思ひ出すと、全く豫想だもしてゐなかつた怖氣と氣恥づかしさとを急に感じた。

彼は百姓達がその實現を夢想だもすることの出来なかつた彼等の希望——廉い價格で土地を百姓達に貸與することを叶へてやる爲めに來たのであつた。つまり百姓達に恩恵を施しに來たのであつた。ところが、彼は何んだか良心に恥ぢるやうな氣がしてならなかつた。集つてゐる百姓達のところへ近づいて、彼等が亚麻色や、縮れ毛や、禿げたのや、白髪の頭から一齊に帽子を脱つた時、變にどぎまぎして、暫らくの間一ことも喋れずにゐた。小雨はしとく／＼降り續いて、頭髮や、鬚や、百姓の長い外套の綿毛の上に

水玉を作つた。百姓達は主人を見つめて、一體、自分達に何を言はうとしてゐるのであらうと待ちかまへてゐた。だが、ネフリュードフは胸騒ぎに驅られて、一言も發することが出来なかつた。すると、自らロシヤ農民通を以て任じ、且つ巧みに正しくロシヤ語で喋ることの出来る、落着き拂つた、自信の強いドイツ人の管理人が、不安の沈黙を破つた。頑丈な、肉付のいいこの男とネフリュードフとの二人は、瘦せこけた皺だらけの顔と外套の下から骨ばつた肩を怒らしてゐる百姓達とは、頗る振つた對照であつた。

「今、公爵様はお前たちにお恵みを施されようとしてゐるさるのだ。土地を分けて下さるのだ。何といふ勿體ない話だらう。」と、ドイツ人は言つた。

「どうして勿體ねえだ、ワシリーイ・カルルイチ様、俺等、おめえ様の爲めに働かねえとでも言はつしやるのか？ 俺等お亡くなりになつた奥様にや、うんと御恩になりやしただ。後生を祈つて居りやすだ。若主人様も、俺等をお見捨てなさらねえで有難てえこんでござえやす。」と、人參色のお喋りの百姓は言つた。

「俺等、御主人様に不満を言ふぢやねえんのかすが、たゞ地面の狭く苦しいのだけを、どうかして貰えてえもんでかすよ。」と、顔のだゞつ廣い、鬚の大きな、も一人の百姓が言

つた。「生活に困つてゐやすだ。」

「實はそのことで、私はお前達に集つて貰つたんだよ。私はもうお前達が望むなら、土地を残らずお前達に分けたいと思つてゐるんだが」と、ネフリリウドフは言つた。

百姓達は黙つてゐた。分らないやうでもあり、信じられないやうでもあつた。

「土地を下さるちふなあ、どねえな意味で言はつしやるでがすか？」と、一人の中年の袖無の外套を着た百姓は言つた。

「お前達に土地を貸してやらうといふんだ、それはお前達が賤い地代で使用が出来るやうにさ。」

「なんて有難てえことなんだべ」と、一人の老人は言つた。「地代せえ俺達の支拂ひが出来るやうにしてくださりや」と、も一人が言つた。

「貸して下さるつてえのに、借りねえ奴があるもんぢやねえ！」

「そりや、俺達にや當り前のこんだ——土地で食べて生きてるだから！」

「地主様にやアその方が安心でがすよ。たゞ地代せえ集めておみでりや、それで濟むこんだから。でねえといろんな厄介ごとが起りやすすからの！」と言ふ聲が聞えた。

「厄介なのはお前達のことだ。」と、ドイツ人は言つた。「もしお前達が働いて、きちんとしまりをつけてゐさへすりやア……」

「ワシリーイ・カルルイチ様、そねえなことを俺等に言はしやつても無理でがすよ。」と、鼻の尖つた、瘦せた老人は言つた。「お前様は、何故馬を麥畑さおつ放したんかと言はつしやるだが、誰がそねえなものおつ放すべえよ。俺ア朝から晩まで、一年よか長え氣のするこの一日中、鎌を振り廻してゐるだから、夜番の時うつかり寝込んだのさ。だのに馬の奴めがお前様とこの燕麥畑さ、へえり込んだといつちやア、お前様俺にがみく言はつしやるだ……」

「だからお前達に締りをつけて置けと言ふんぢやないか。」
「お前様は締りしろと一口に言はつしやるだが、俺等の力ではさうちよつくら行かねえだよ。」と、背の高い、髪の毛の黒い、毛むくぢやらの、中年輩の百姓が逆らつた。

「だから言はないことぢやない、柵をしろつてことよ。」

「ふんなら材木をおくんせえ」と、貧相な小ぼけな百姓が後の方から口をつゝ込んだ。俺ア夏柵を造らうと思つて、若木を伐つたら、お前様俺を三月も虱の餌にする爲めに、牢の中さぶつ込みやしたぢやねえか。柵をこさへようとすりやあそんなもんでがさ。」

「あの男は何を言つてゐるんだね？」と、ネフリードフは管理人に質した。

「彼奴は村一番の大泥棒で」と、管理人はドイツ語で言つた。「毎年森で木を盗んで捕まる奴です。」それから百姓の方を向いて「ときに、これ、お前は他人様の所有を大切に心がけるやうにしなければいけないぞ。」と、管理人は言つた。

「俺等お前様を大切にしてゐるねえかよ？」と、老人は言つた。「俺等お前様を大切にしねえ譯にやいかねえだ。俺等のお前様のしたい放題になつて居りやすだ。お前様は俺等の體で繩を絞ふことも出来やすだもの。」

「おい、冗談ぢやないよ。お前達が俺を困らせるんぢやないか。お前達を苛めるなんて、以ての外だ。」

「なんですと、苛めやしたでねえか！この夏、俺の面をぶん擲つたでねえか。だけど、俺アそのまゝ泣き寝入りで、何うにも出来ねえかつたぞ。金持と裁判したつて始まりねえからな。」

「愚圖々々言はないで、提通りちやんとするんだよ。」

かうして口争ひが續いたが、争つてゐる當人達は何故争つてゐるのか、何を喋つてゐるのか、よく分つてゐないらしくつた。たゞ、一方からは恐怖に抑へられた憤怒と、一

方には自己の權力と優越感の意識だけが、明かに認められた。ネフリードフはそれを見つてゐるのが心苦しくてならなかつたので、本来の問題に立返らうと努めた。それは地代と支拂期限とを決定することであつた。

「一體土地のことはどうしたんだね？ お前達はどうなんだ？ もし土地全部を貸すとなれば、地代を幾何程にしたらいゝのかね。」

「旦那様の土地ぢやねえですか、旦那様の方でお決めなされたがようがすべえ。」

ネフリードフは價格を決めた。その決めた地代は、この界限で納めてゐる値段よりも餘程廉かつたのに、百姓達は例によつて、餘りに高いと言つて、懸引きし始めた。ネフリードフは、自分の言ふことが喜んで聞き入れられることだらうと期待してゐたのであるが、満足の氣色は毛ほども見られなかつた。たゞその言ひ出したことが、彼等に取つて有利であるといふことは、話が偶々誰が土地を借りるか——百姓全體か、それとも組合か——の問題に觸れたとき、支拂並びに勞働能力の覺東ない者を、土地契約から除けようといふ百姓と、その除け者にされる百姓との間に激しい争論が起つたので首肯することが出来た。最後に、ドイツ人のとりなしによつて、價格と支拂期限とが決められる

と、百姓達はがや／＼話し合ひながら、丘を下りて、村の方へ歸つて行つた。で、ネフリユードフは管理人と二人で契約書を作る爲めに事務所へ行つた。

萬事はネフリユードフが欲し、且つ望んでゐた通りに運んだ。百姓達はこの地方一帶の借地料よりも三割方廉い地代で土地を借り受けることが出来た。で、土地から入るネフリユードフの収入は殆ど半減されたのであるが、それでも彼に取つては十分であつた。殊に森林を賣つた代として受取つた金額や、農具の拂下げ料として入つて来る管の金額を加へたら、有り餘るほどであつた。斯様に萬事が豫期の通り首尾よく片づいたのに、ネフリユードフは何となく悲しくもあり、淋しくもあり、殊に心に恥ぢるやうな氣がしてならなかつた。彼は、數名の百姓が彼に對してお禮の言葉述べたけれども、あとの百姓達は不満な顔付をして、何かもつと大きなものを期待してゐたらしい様子を見て取つた。結局、彼は多大な犠牲を拂つたが、農民達には彼等が期待してゐたことをしてやらなかつたといふやうな結果になつてしまつたのである。

翌日ネフリユードフは、假誓約書の署名を濟ますと、總代に選ばれて來た年寄りの百姓達に見送られ、何となく爲し足りないやうな不快な感じを味ひながら、停車場から來る

時、馭者から聞いた、素敵な三頭立の管理人の馬車に乗つた。そして腑に落ちない顔付をしながら、不満足さうに頭を振つてゐた總代の百姓達に別れを告げて、停車場へ向つた。ネフリユードフも、自分ながら不満であつた。一體彼は何か不満なのか、自分では分らなかつたが、絶えず何となく心苦しく、何となく恥づかしい思ひがしてならなかつた。

三

クヂミンスコエからネフリユードフは、叔母達から相續した領地——それは彼が初めてカテューシャを見染めた處である——へ出立した。彼はこの領地でもクヂミンスコエで處理したと同じやうにやるつもりであつた。その他にもまた彼はカテューシャのことや、彼女と自分との間に出來た子供のことなどを、自分が知つてゐる以上に知ることが出來れば、この際残らず聞きたいと思つてゐた。子供は死んだといふが本當だらうか、どうして死んだのだらうか？ 彼は朝早くバノーウ村へ着いて、叔母の家へ乗り込んだ時、第一に彼が驚かされたのは、あたりが荒廢して、古びはててゐる光景であつた。建物といふ建物はどれもこれもだが、殊に母屋がひどかつた。久しく塗り換へたことのない亞鉛

屋根は赤く錆びてゐて、數枚の亜鉛板は、多分暴風雨の爲めであらう、上の方へめくられてゐた。母屋の周圍に張りめぐらしてある薄板は、ところどころ、何者かの爲めに引つ剝されてあつた。剃きとり易い場所から剃き取つたと見えて、赤錆になつた釘が曲つてゐた。玄關——表玄關と殊に彼にとつて懐しい裏玄關——は雙方とも朽ち毀れ、ほんの根太だけが残つてゐるに過ぎなかつた。幾つかの窓は玻璃の代りに薄板が打着けられてあつて、管理人の住んでゐる住宅も、厨房も、既も——古びて灰色になつてゐた。ただ庭だけは荒れてゐないばかりか、草や木が生ひ茂つて、今は一面の花盛りであり、垣根の彼方には、満開の櫻や林檎や桃が、白雲のやうに見えてゐた。ライラックの籬は、丁度十一年前、その蔭でネフリニードフが十六になるカテューシヤと鬼ごっこをして遊んだ時、ころんで蕁麻に刺されたことのある、その時分と同じやうに咲き誇つてゐた。ソフイヤ・イワーノウナが母屋のそばに植ゑた落葉松は、その頃は棒杭ほどのものであつたが、今は丸太になるくらゐの大木になつて、黄色が、つた緑の、柔らかな産毛のやうな針葉で蔽はれてゐた。河は底面を流れて、水車の設けられてゐる堰のところ、騒々しい音を立てゝゐた。河の彼方の牧場には農家の家畜が點々と入り亂れて、草を食べてゐた。

神學校を中途で止めた學生あがりの管理人は、にこ／＼しながら中庭に出てネフリニードフを迎へた。そして一種意味ありげな微笑を口もとに湛へながらネフリニードフを事務所へ案内して、仕切壁の蔭に姿を消した。其處で何やら囁く聲がしたが、直ぐに黙つてしまつた。取者が酒代を貰つて、中庭から馬車を驅つて出て行くと、あたりは水を打つたやうに静まつた。間もなく刺繍のしてある襦袢を着て、兩耳に飾房を垂らした素足の小娘が窓側を走つて通ると、その後からだぶ／＼の長靴を穿いた男が續いて走つて行つた。

ネフリニードフは密際に腰かけて庭先を打ち眺めながら耳を敬てた。すが／＼しい春の大氣と、掘り返された土地の香りとが、小刀の刃跡だらけの窓圍の上に載せてある紙片や、汗ばんだ彼の額に垂れかゝつてゐる髪の毛を心持ちゆるがせながら、小さな兩開きの窓の中へ流れ込んだ。河では女達の洗濯物を打棒で叩く音が「トッラ・パ・タブ、トッラ・パ・タブ」と、互ひに競ひながら聞えてゐた。そしてその音響は太陽の光線を浴びてギラ／＼光る堰きとめられた河の水面に擴がつて行つた。水車の水の落ちる音も調子よく耳に響いた。

すると突然ネフリニードフは、嘗て久しい以前、自分がま

だ若い無邪氣な時分、丁度この河の方で、水車の調子よい水音の彼方から、今のやうな濡れた洗濯物を打棒で叩く音が聞えて来たことを思ひ出すともなく思ひ出した。そして又十八歳の子供であつたその頃の自分を思ひ出すともなく思ひ出すと、彼は丁度その頃の若々しさと、純潔さと、偉大な理想に充ちた、限らない未來を抱いてゐた時のやうな心持になつた。が、それと同時に、何だか夢でも見てゐたやうな氣がして、現實でないことが分ると、彼は堪らなく悲しくなつた。

「お食事は何時頃なさいますか？」と、にこ／＼しながら管理人は訊ねた。

「いつでも君の都合のよい時で構はない——僕はまださう腹が空つてゐないから、これからひとつ出掛けて行つて、村を一めぐりして来よう。」

「どうか母屋の方へお出で下さいませんか。室内はすつかりきちんと片づけてありますから、御覽になつていただきたく存じます。外側の方は……何んですけど。」

「いや、後ほどにしよう。ときに、この村にマトリョーナ・ハリナといふ女はゐるのかね？」

これはカテューシャの叔母であつた。

「確かにこの村に居ります。あの女と來ては手のつけやう

もない、しやうのない婆でして、悪いウオーツカを密賣してゐます。私は知つてゐるので、小言を云つてやりますが、訴へるのも可哀相でしてね。あの年で小さな孫共を養つてゐるもんですから。」と、管理人は主人の御機嫌をとりたい考へと、ネフリードフも自分と同じやうに何事も呑み込んでゐるといふ確信とを表はした微笑を、しつきりなしに浮べながら言つた。

「その婆さんほどの邊に住んでゐるかね？　僕は會つてみたいのだが。」

「村端れの、一番しまひから三軒目です。左手に煉瓦造りの小屋があつて、その裏手に婆さんのぼろ小屋があるんです。では、私が御案内申上げることになませう。」と、嬉しさに微笑みながら管理人は言つた。

「いや、有難う。僕だけでも分るだらう。ときに濟まないが、君は百姓達が集るやうに手配して呉れ給へ。土地の事に就いて話したいことがあるから。」と、ネフリードフは言つた。そしてクジミンスコエと同様、こゝでも出來れば今日一晩で百姓達と片をつけてしまはうと考へた。

四

門を出てからネフリードフは、雑色模様のエプロンを掛

けて耳に飾房を附けた百姓娘が、おほばことまんねんろうの生茂おほばつた牧場の間をうねつてゐる道を、肥つた素足すあしでさつさと歩きながら歸つて来るのに出會つた。彼女は左手を體の前の方で斜めにすばしつこく振つて、右手には赤い羽根の雄鷄おんどりをしつかとお腹はらの處へ抱へてゐた。雄鷄の赤い鷄冠けりをぶら／＼顔はせながらじつと抱かれてゐたが、時々一本の黒い脚を伸したり縮めたりして、娘のエプロンを爪の先でかきむしつた。娘は旦那のところへ近づくと、最初歩調を緩めてから早足を並足に變じたが、彼とすれ違ひになつた時は、立止まつてぐつと頭を後方へ反つてからお辭儀をした。彼が通り過ぎるや否や、また雄鷄をひつ抱へて、ずん／＼先へ駆けて行つた。ネフリードフは井戸のある方へ下りて行くと、又一人の粗末な汚れたシャツを着た老婆に出會つた。彼女は背中を曲げて、水の一杯入つた重たさうな水桶おけを擔いでゐたが、そつとそれを置いて、同じやうに後方へ頭を反つてから、ネフリードフにお辭儀をした。井戸のあるところから向うは村になつてゐた。晴れ渡つた、蒸し暑い日であつた。朝の十時といふに、もうぢりぢりと蒸しはじめ、雲が密集して來ては、時々太陽を隠した。ぎら／＼光つた平坦な道を山の方へ並んで行く荷車からは、鼻を突くやうな鋭い不快な肥料の臭氣が、通り一面に

放たれた。殊に、ネフリードフが通り過ぎようとした門の、開放ひらしになつてゐる屋敷内の掘り返された肥料の臭ひは際立はつて酷かつた。肥料の液汁をベト／＼にくつ／＼けたズボンやシャツを着て、肥料車の後からついて山の方へ行く素足の百姓達は、背の高い肥つた旦那が、日向ひなたに輝やく絹のリボンを附けた鼠色の帽子を被つて、一步ごとにぎら／＼光る柄頭ていりの附いたしなやかなステッキを、地に觸れるか觸れないくらゐに突きながら、村の中を上手へ歩いてゐるのをちよい／＼振返つて見てゐた。野良から戻つて來た百姓達は、空荷車を走らせながら、がたつく馭者臺の上で、帽子を手にとつて、會釋して呆氣にとられながら自分達の道路を歩いてゐる、つい見かけたことのない旦那を不思議さうに見やつてゐた。女達は門の外や、玄關先に出ばつて、ネフリードフを指さしながら目送してゐた。

ネフリードフが、四軒目の門の前を通り過ぎた時、門の中から見上げるやうに肥料を堆うたかく積み重ね、その上に腰掛ける爲めに席せきを敷いてある荷車が、軋こ音をたてながら出て來て、彼の歩みを止めさせた。六つばかりの男の子が裸足はだかあしでその後から跟ついてて來た。木の皮で編んだ草鞋わらじを穿はいてゐる若者は、大股で歩きながら、馬を門の外へ追ひ立てた。すると脚のひよろ長い灰色の仔馬こまが門の中から飛び出して來

た。が、ネフリュードフを見ると吃驚して荷車の方へ身を寄せた。そして車輪に脚をぶつつけると飛び上つて、丁度門の中から、軽く嘶きながら重い肥料を引いて来た母馬を追ひ越して駆け出した。その後からまた汚らしい、長いシャツと縞ズボンとを穿いてゐる瘦せぎすのびん／＼した、背には肩骨の突出した、裸足の老人が一匹の馬を引いて出て来た。そして馬共が燃え滓みたいな灰色の肥料が散らばつてゐる平坦な道路まで行き着くと、老人は門の方へ引返して来て、ネフリュードフにお辭儀をした。

「お前様は、先の地主様の奥様の甥御様でござえやすか？」

「さうだ、さうだ。」

「ようまあ来て下さりやした。では、俺等を訪ねて来てくらしやつた譯でござえやすか。」と、老人は話好きらしく喋りだした。

「ああ、さうだよ、ときにお前達は變りはないかね？」と、ネフリュードフは何う言つていゝか分らないので、さう言つた。

「變りがねえどころぢやありませんねえ！ 俺等の暮しぐれえみじめなものア、外にやねえでござえやすよ。」と、話好きの老人は、さも得意さうに、だら／＼言葉を引きつばつ

た。

「なんだつて、そんなに酷いのだね？」と、門をくゞりながら訊ねた。

「暮しも何にもあつたもんぢやねえでござえやすよ、一番みじめな暮しをしてゐやすだ。」と、老人はネフリュードフの後からついて、小屋のきれいに掃除してある軒下の隅の方へ足を運びながら言つた。

ネフリュードフは彼の後からついて軒下へ入つた。

「俺のところぢや、それ、あすこにやすが、十二人の暮しでござえやすよ。」と、老人は、二人の女を指さしながら、言葉を續けた。彼女達は汗だらけになつて、頭巾をすり落し、裾をまくり上げ、脹脛の半分まで肥料の液汁で汚しながら、熊手をかざして、まだとり除かれずにある肥料の堆積の上に突つ立つてゐた。「六ブードの麥を買つても、ひと月とはありましねえが、そのお金を誰がくれやすか？」

「お前の畑だけでは足りないのかね？」

「俺の畑がすかえ！」と、老人は莫迦にするやうな笑ひ方をして反問した。「俺等の畑は三人分にしか當らねえでがすよ、去年はたつた八堆しか獲れましねえでした——降誕祭までもたねえでがしたよ。」

「では、お前たちはどうしてゐるんだね？」

「仕様がねえでがすから、一人の件を日儲取りにやりやして、旦那様の事務所からお金を借りやしただ。それも大齋期までにすつかり費つちまひやして、まだ年貢も納めねえやうな始末でござえやす。」

「年貢はどのくらゐだね？」

「俺の家は四月に十七ループリ納めることになつとるでがすよ。あゝ、何んてえ生活だべ。どうしたらいゝだか、俺にも分んねえでがすよ！」

「お前のとこへお邪魔してもいゝかね？」と、ネフリュードフは訊ねて、中庭を通つて、掃除のすんでゐる場所から、熊手でひつ掻きまはしたまゝまだ手もつけてない黄ばんだサフラン色をした、臭氣の強い肥料の層のある方へ進んで行つた。

「いゝどころぢやござえましねえ、どうぞ、ござらつしやつて下せえまし。」と、老人は言つて、その裸足の指の又から肥料の液汁をふみ出しながら、早足でネフリュードフを追ひ越して、小屋の扉口を開けてやつた。

女達は頭巾を直したり、リンネルの下袴の裾を下したりしながら、驚きの眼を睜つて、自分達の家の中へ、袖に金のカフス鈕釦をつけた立派な旦那が入つて来るのを見やつた。

小屋の中から襦袢を着た小娘が二人飛び出して来た。ネフリュードフは前屈みになつて、帽子を脱りながら入口を潜つて、饅えた食物の臭ひでむつとしてゐる、不潔な、せまくるしい、そして二脚の織機が据ゑてある小屋の中へ入つて行つた。小屋の中には、燵の傍に、瘦せ細つて筋ばつた、日焼けのした兩腕を出した老婆が突つ立つてゐた。

「俺等の旦那様がおいでやしたよ、俺等のとこさお客においでやしただよ。」と、老人は言つた。

「ようまア、ござらつしやつて下せえまし。」と、老婆は捲くつてゐた袖を下しながら、丁寧な言葉遣ひで言つた。

「お前達がどんなに暮してゐるか、見たいと思つて。」と、ネフリュードフは言つた。

「さうでがすか、この通りの生活でござえやすよ。小屋は倒れかゝつてゐやすで、いつ死人が出来やすか知れねえでがすよ。だけんど爺さまは、心配なこたあ無えと言ひやすで、それで俺等も王様のやうに平氣で住んでゐやすよ。」と、勝氣な老婆は頭をびく／＼動かしながら言つた。「今、御飯の支度にとりかゝるところでがすよ、働いてる衆におまんまを食べさしてやらにやなんねえだから。」

「お前達はどんな物を食べてるんだね？」

「どんなもの食べるつて言はつしやるのけえ？」

俺等の食

物は上等でがすよ。初めに麵麩と裸麥酒を食べて、次に裸麥酒と麵麩を食べやすだ。」と、老婆は半ば腐れ落ちた齒を露き出しながら言つた。

「いや、冗談は止しにして、お前達がどんなものをこれから食べようとしてゐるか、見せておくれ。」

「どんなものを食べるつて言はつしやるのけえ？」と、老人は笑ひながら言つた。「俺等の食物は手のかゝらねえ、あつさりしたものがすよ。婆さん、見せてあげたらよかんべえ。」

老婆は頭を振つた。

「旦那様、俺等百姓の食ふ物を見てえと言はつしやるのけえ？ 旦那様もよつぽど物好きだんべえ、俺さう思ひやすだ。何から何まで御覽なさらねえぢや氣が濟まねえでがすな。今申しやした通り麵麩と裸麥酒でござえやすよ、それにお汁でさ。昨日女子たちがうぐいを持って來やしたで、それで、汁をこせえやした。それから馬鈴薯がござえやすよ。」

「それつきりかね。」

「もつと無えかと仰しやるだか。あとそれに牛乳を入れて白くするくれえが關の山でござえやすよ。」と、老婆は言ひながら、にや／＼笑つて扉口の方を見た。扉は開け放たれ

てあつた。入口には一ぱい人がたかつてゐた。男の子や、女の子や、乳呑兒を抱いた女達やが、扉のところに構めき合ひながら、百姓の食べ物を見てゐる珍らしい旦那を見てゐた。老婆は、自分が旦那のお相手をするのを得意がつてゐるらしかつた。

「なア、旦那さま、俺等の生活はみじめなもんでさ、お話にならねえほどみじめなもんでござえやすよ。」と、老人は言つて、入口に集つてゐる者達に向つて叫んだ。「何處さへえり込むだよ？」

「では、左様なら。」と、ネフリュードフは言つた。彼はきまり悪さと氣恥づかしさを感じたのであるが、それが何故であるか分らなかつた。

「俺等の處へ來てくれやして、どうも有難うござえやした。」と、老人は言つた。

扉口の處にゐた人の群は互ひに詰め寄つて、ネフリュードフに道を開けた。ネフリュードフは屋外へ出て、道路を上の方へ歩いて行つた。すると扉口の處から彼の後に跟いて二人の裸足の男の子が出來た。年上の方は、着たてには白かつたのだが、今は汚れてゐるルバーシユカを着、一人は色の褪めた粗悪な薔薇色のルバーシユカを着てゐた。ネフリュードフは二人を見返つた。

「こんどは何處さ行くの？」と、白いルバーシユカを着た子供が訊ねた。

「マトリヨナ・ハリーナのところへ行くんだがね。」と、彼は言つた。「お前達は知つてゐないか？」

薔薇色のルバーシユカを着た小さな男の子は、何故だか笑ひ出したが、年とつた方は眞面目くさつて問ひ返した。

「どのマトリヨナだい？ お前さんの言ふなアお婆さんかね？」

「さうだ、年寄りだ。」

「あゝ、そんぢや、セミョーニハ婆さんだ。村端れの家だんべえ。おいら一緒に行つて上げるべえ。おい、フェーディカ、一緒に行つて上げるべえよ。」

「馬はどうしるだ？」

「大丈夫だべえ！」

フェーディカは同意した。そして彼等は三人一緒に村の街道を上手へ歩いて行つた。

五

ネフリユードフは、大人よりも子供と一緒にの方が氣輕であつた。で、彼は途中歩きながら彼等というく話をした。薔薇色のルバーシユカを着た子供も笑ふのを止めて、年上の

子と同様柄巧さうに、てきばきと話した。

「この村で一番貧乏なのは誰かね？」と、ネフリユードフは訊ねた。

「誰が貧乏だつて？ ミハイラが貧乏だべ。せいからセミョン・マカロフ。もつと一番に貧乏なのあマルファだんべえ。」

「いや、アニーシヤの方がずつと貧乏だよ。アニーシヤは牝牛も持つてゐねえだもの、そいで乞食してゐるでねえか。」

と、小さいフェーディカが言つた。

「アニーシヤは牝牛を持つてゐねえけど、そのかはり家の者ア三人きやるねえぢやねえか。マルファのところは五人居るぜ。」と、年上の方は反對し出した。

「だけんどアニーシヤは寡婦でねえか。」と、薔薇色の子供はアニーシヤに味方した。

「お前はアニーシヤが寡婦だと言ふが、マルファだつて寡婦も同じこんでねえか。」と、年上の子は續けた。「亭主があつても家に居ねえだもの、同じこんだ。」

「亭主は何處へ行つたんだね？」と、ネフリユードフは訊ねた。

「牢屋で虱を飼つてゐるだ。」と、年上の子は言つた。それは

一般に通用されてゐる言葉であつた。

「去年、地主様の森の白樺を二本伐つて」と、薔薇色のル
バーシユカが急いで説明した。「それで、牢屋さ打ち込まれ
た。もう今日で六ヶ月になるべえ。マルファは乞食して
歩いてるだよ。三人の子供と病人の婆さんがゐるでなア。」
と、子供は詳しく話した。

「その女は何處に住んでゐるかね？」と、ネフリユードフは
訊いた。

「それは、あの家だよ。」と、指さしながら答へた。その家
の前には頭髮の白いこまちやくれた子供が、膝の曲つた足
で、やつと體を支へながら、通りの人道の上に突立つてゐ
た。ネフリユードフはその人道を歩いて行つた。

「ワシシカ、まアこの餓鬼奴、何處さ行くだー」と、叫び
ながら、灰でもひつかけたやうな、汚ない鼠色の襦袢を着た
女が、小舎から駈け出して來た。そして吃驚したやうな顔
をして、ネフリユードフの鼻先に飛んで來て、子供をひつさ
らつて小舎の中へ抱いて行つた。彼女はネフリユードフが
自分の子供を何うかしはしまいかと怖れたらしいのであつ
た。

これはネフリユードフの森から白樺の樹を伐つて、牢に入
られたといふ男の女房であつた。

「それから、マトリョーナも貧乏なのかね？」三人が既にマ

トリョーナの小舎の近くに來た時、ネフリユードフは訊ねた。
「あの女は貧乏なもんかね、酒を賣つてゐるだよ。」と、薔
薇色の、瘦せぎすな子供は、きつぱりと答へた。

マトリョーナの小舎まで來ると、ネフリユードフは子供達
を歸して、入口から小舎に入つて行つた。マトリョーナ婆さ
んの小舎は二間半足らずの廣さであつた。それで、燵の
向うに置いてある寢臺の上では、大きな人は體を伸ばすこ
とも出來ない程であつた。「多分、この寢臺の上で」と、ネ
フリユードフは思つた。「カテューシヤは赤ん坊を産んだん
だな、そして産後の肥立ちが悪くて病氣してゐたんだな。」
殆ど小舎全體が織機で埋つてゐた。それは丁度ネフリユード
フが低い扉口に頭をぶつたながら入つた時に、老婆が年上
の方の孫娘と二人して据ゑつけたばかりであつた。もう二
人の孫はネフリユードフの後からついて、勢ひよく小舎の中
へ駈け込んだが、兩手で鴨居に掴まりながら、ネフリユード
フの後ろに立止まつてゐた。

「誰に用があるだか？」織機の調子が悪いので不機嫌な老
婆は、おまけに酒を密賣してゐる女として、かねてから知
らない人の入つて來るのを恐れてゐたので、突慥にかう
訊ねた。

「私はこの邊の地主だが、お前に少し聞きたいことがあつ

て来たんだ。」

老婆は黙つて、じつと視詰めてゐたが、俄かにけろりと様子を變へた。

「まあ、旦那さままでござらしたか。俺は何てえ阿呆者でござえませう、ついそれとは氣が付きまじねえでがした。どこかの通りがりの人とべえ思ひやしたよ。」と、彼女は故意に愛想のよい聲を作つて言つた。「どうか勘辨して下さいまし。」

「實は人のゐないところで話したいんだが。」と、開け放たれた扉口の方を見ながら言つた。其處には子供達が集つてゐた。そしてその後ろには、瘦せこけた女が、病氣の爲めに蒼ざめた赤兒を擁へてゐた。襦袢を纏ぎ合せて拵へた帽子を被つてゐた赤兒は、瘦せ衰へてはゐるが、始終にこにこしてゐた。

「何が珍らしいだ。そこにまご／＼してると、酷い目に遭はしてやるぞ。さアこつちさ棒を寄越した！」と、老婆は扉口に集つてゐるもの達に怒鳴つた。「扉を閉めるだよ、何うしたよ。」

子供達は逃げ散つた。赤兒を擁へてゐる女が扉口を閉めた。

「俺はまた誰方かと思つてゐやしたよ。それが旦那様でござえませうか。」と、老婆は言つた。「よくまあ訪ねて来ておくんせえやした。汚らしいとも思ひなはらんで。ダイヤモンドのやうな旦那様！ どうぞ、こちらへお掛け下せえまし、さアこちらの椅子の方へ。」と、彼女はエプロンで椅子を拭きながら言つた。「俺、どこの奴めか、へえつて来たかと思つてゐやしたら、旦那様でござらした。立派な旦那様、お慈悲深えお方、俺どもの生命の親でござらした。どうぞ旦那様、勘辨なすつて下せえまし、この老婆れの阿呆者を——眼が見えなくなりやしたよ。」

ネフリユードフは腰かけた。老婆は彼の前に立つて、右手で頬を支へ、左手で右手の尖つた腕を握んで、歌ふ時のやうな聲を出して言つた。

「旦那様、あなた様もお年をお召しになりやしたのう。雛菊のやうに綺麗な若えお方でござらつしやつたが、それが今ちやどうでござえやせう！ やつばし御心配ごとがおあんなしたと見えますだ。」

「私は實は、お前がカテリーシャ・マースロワを憶えてゐやしないかと思つて、それを訊きに來たんだがね。」

「カテリーナでがすかね？ 知らねえどころぢやありませんねえ——あれは俺の姪でがすからね。憶えてゐねえで、ど

うしやすべ。俺はあれの爲めにや、どのくれえ涙をこぼしたか知れねえですよ。あれのこんだらなんでも知つてゐやすだ。ほんに、旦那様、神様の前に罪のねえものアありましねえだ。天子様の前に悪いことしねえものアありましねえだ。わけえ時のこんだで、お茶や珈琲は誰でも好きでござえやす。そんで魔がさしたとべ。悪魔の奴めなか／＼強えもんで、そんで罪を造つてしまつたべ。どうしようもねえでがさ！旦那様があれを捨てたちうても、旦那様はあれに百ルーブリをおやんなさいやしたで、帳消しになつてゐやすだ。ところが、あの女は何てえこんだべえ！無分別なことをしやしたと。俺の言ふことせえ聞いてれば、人間らしく暮らせたと。俺の姪だけんど、かくさず言やあ、ろくでなしの女でござえやすよ。俺アあとで好え口を見つけてやつたに、言ふことを聞かうともしねえでがすよ。旦那様の悪口を散々言つてやしたと。旦那様の悪口を言ふてえ法があるもんでねえ。そんで追ん出されつちまひやしただ。それから山林の監理人のとこさ奉公しやしたけん、やつげし辛抱出来ねえでがしたよ。」

「私は赤ん坊のことを聞きたいのだが、あの女はお前のとこでお産をしたといふぢやないか？子供はどこにゐるかね？」

「赤ん坊がすかね、旦那様。俺イその時よいことを考へやしたと。あの女の産後の肥立ちが、ひどく悪うござえやして、てつきり枕も上りさうにねえでがしたから、俺イ型の通り赤ん坊に洗禮を受けさせて、育兒院へ送りやしたでござえやす。阿母がおつ死にさうな時、罪もねえ赤ん坊を苦しめる法がどこにありやすだ。世間ぢやよくそねえなことして、子供を抛つたらかして、乳もやらねえで、そのまゝ見殺しにしやすだ。俺の考へぢや、そねえなことしねえで、よく面倒見て、育兒院に送つた方がよつほど増しでがさ。そんでお金もありやしたで、さつそく連れてつて貰えやしたとよ。」

「では、番號があるだらう？」

「番號はありやしたが、赤ん坊はその時、死んぢまひやした。あの女の話ぢやア、連れて行くと直ぐ死んぢまつたさうでがすよ。」

「あの女とは誰だね？」

「それはスコロドノエ村に住んでゐやした女で、赤ん坊を預つて養ふ商賣をしてゐやしたと。マラニヤといふ名前でがしたが、それももう死んぢまつたでござえやすよ。柄巧な女でがしてな——まアあの女がどねえなことしたと思ひやすか。その女のとこさ赤ん坊を伴れて行きやすと、それ

を引受けやして、自分の家さ預つて、上手に育てやすだ。まあお聞きなせえやし、旦那様、かうして赤ん坊を、自分の家で育てゝゝゝ三四人になりやすと、一度に育児院、送つてしまふんでござえやすよ。それに赤ん坊を育てるにや、そりやまたうめえ工夫をしたもんでがすよ。二人用の寢臺のやうなでつかい揺籃ゆらんがありやして、そんな中に赤ん坊を幾人も入れやすだ。それにや把手てもありやしてな。それに四人も一緒に入れて、頭はかち合はねえやうに別々に離して、足は一緒にくつゝけ合はしたもんでさ。かうして一度に四人の赤ん坊の守してゐやすだ。乳首ちちをあてがつてせえおきやア、黙つてゐやすで、溫和わんわしいもんでさ。」

「むゝ、それから何うした？」

「それで、カテリーナの赤ん坊もやつばしこねえな風に育てられやすだ。かうして二週間ほど置いときやすだべ。赤ん坊はまだその女の家こゝにゐた時分から病みついてゐやすだよ。」

「赤ん坊は好い兒だつたかね？」と、ネフリエードフは訊ねた。

「そりや、へえ、いゝ赤ん坊でござりやすだ。あねえな兒ほどこ探したつて外にはゐねえでがすよ。旦那様そつくりでがしたよ。」と、ぼけた眼をパチクリさせながら附け加

へた。

「どうして病みついたのか。大方、食べ物でも悪かつたんだらう？」

「食べものも何にもあつたもんでねえでがさ！ 一つものばつかし食べさしてゐやすだ。自分の兒でねえだからな。たゞ育児院へつれてゆくまで、生きてせえゐりやいゝといつたあんべえでさ。その女の話ぢや、やつとモスタワまで連れて來たと思ふと、もうおつ死んじまつたと云ふこととでがした。お醫者様の證明書かきつけをもつて來やして、何から何まで手ぬかりはありましねえだ。抜け目のねえ女でがしたよ。」

ネフリエードフが自分の兒に就いて知り得たことは、これだけであつた。

六

ネフリエードフは又もや小屋と入口との鴨居に頭を打ちながら往來へ出た。白と灰白色と薔薇色のルバーシユカを着た三人の子供は、彼の出てくるのを待つてゐた。それに又新しい顔の子供が數名加はつた。赤兒を抱いた女も數人ゐた。その中には、ネフリエードフがマトリョーナの小屋に入る時に見た、例の襦袢じゆばんを纏まとひ合せて拵ごしらへた帽子を被つた血

の氣のない赤兒を、輕やかに兩手に抱いてゐる、瘦せこけた女もゐた。赤兒は絶えずその萎びきつた顔を變ににこにこさせながら曲つた太い指先を一生懸命に動かしてゐた。ネフリユードフはそれが苦痛を現はす微笑であるのだと思つた。で、その女が何者であるかを訊れた。

「あれがおいらの話したアニーシヤだよ。」と、年上の子供が言つた。

ネフリユードフはアニーシヤの方を向いた。

「お前はどんなに暮してゐるのか。」と、彼は言つた。「どんなものを食べてゐるのか?」

「どうして暮してゐるかつてえ? お貰えしてゐやすだ。」と、アニーシヤは答へて、そして泣き出した。

萎びきつた顔をした赤兒は顔一面に笑ひを浮べて、その蚯蚓のやうなほつそりした足を折曲げた。

ネフリユードフは紙入れを出して、女に十ループリを與へた。すると彼が二足も歩くか歩かないうちに、子供を抱いたもう一人の女が追かけて来て彼に纏つた。續いて老婆、それから別の女がやつて来た。皆自分達の貧困を訴へて、憐れみを乞うた。ネフリユードフは紙入れの中に小札を持つてゐた六十ループリをすつかり與へてしまつた。そして深い憂愁に沈みながら家へ、つまり管理人の住宅へ戻つた。

管理人はにこ／＼笑ひながらネフリユードフを迎へて、晩方百姓達が集まるといふことを告げた。ネフリユードフは禮を言つて、部屋へは入らずに、庭先へ出て、白い林檎の花弁の散つた小徑を散歩しながら、自分が目撃した一切のことを考へて見た。『農民は皆死に絶えて行く、そして自分達の死を何とも思はなくなつてしまつた。彼等の間には死に適はしいやうな生活態度が作り上げられてしまつた。子供の死亡、女達の過度の勞働、そしてすべての人々、殊に老人に取つて食物の不足——かうして、農民はだん／＼窮境に陥つて、自分ではその悲惨な境遇に氣づかず、又その不幸を訴へようと思はない。だから吾々もこの状態を自然のこととして、當然さうでなければならぬかのやうに思つてゐる。』これ等のことが今やつと彼には明瞭になつた。で、彼はどうして世間の人々が氣づかずにあるのであるか、そして又彼自身このやうに分りきつた明白なことをどうしてかうも長い間氣づかずにあつたのであるか、驚かすにはゐられなかつた。國民自身が自覺して常に問題としなければならぬ國民的貧苦の主なる原因は、國民が生活して行くべき土地を、地主から取上げられてしまつたことである、といふことが、今、彼には眞晝のやうに明かになつた。又一面に於いて、子供や老人達が、牛乳が無い爲め

に死んでゐることも全く分りきつたことだが、その牛乳が無いといふことは家畜を飼つたり、穀物や牧草を集めたりする土地が無いからである。國民の窮乏、少なくともその窮乏の主なる直接の原因は、國民を養ふところの土地が、國民の手になくして、土地に對する權利を利用して、國民の勞力によつて生きてゐる人々の掌中に在るからだといふことも全く明白なことである。土地が無ければ人間は生きてゐられない。それほどにまで人間に取つて大切な土地は、地主の手によつて、その收穫を外國へ賣拂はれ、帽子や、ステッキや、馬車や、青銅ブロンズやその他の代價に費され、それが爲め農民は貧窮に追はれながら、せつせつと耕作しなければならぬのだ。それは丁度圍ひのうちに閉籠とらこめられた馬が、其處にある足許あしあとの草をすつかり食べ盡してしまつた時、他に飼料を自由に見出すことの出來得るやうな土地を與へない限り、彼等は瘦せ衰へ、遂に饑餓の爲めに死んで了ふと同じ状態である。……ネフリエドフは今はずきりとそれを諒解することが出來た。これは恐るべきことであり、有り得べからざることであり、また有つてはならないことである。それでかうしたことを無くする爲めに、或は少なくとも自分自身がかうしたことに加はらないやうにする爲め的手段を發見することが必要であつた。『俺はきつとそ

れを見出して見せる』と、彼は一番近いところに在る白樺の並木道を、上手うまてへ行つたり戻つたりしながら考へた。『俺は、學術社會や、政治社會や、新聞などで、百姓の貧困の原因、及びその救済策に就いて説明してやらう。單に百姓を救済し得る一つの確かな手段に就いてばかりでなく、百姓から取上げたところの、彼等に必要な土地を百姓に返す爲めに努力しよう。』すると、彼はヘンリイ・デョーリの根本思想や、自分がそれに心酔してゐたことを生々なまと憶おぼひ出して、どうして自分がこれ等のことをすつかり忘れてしまふことが出來たかを考へて、驚いた。『土地は私有財産にすることは出來ない。又土地は水や、空氣や、日光のやうなもので、賣買することの出來ないものである。萬民は土地及び土地が人々に與へるところの凡ゆる便宜に對しては平等の權利を有する。』

彼は、クヂミンスコエで行つた自分の處置を思ひ出すのが何故な恥づかしいのか、今やつとその理由が分つた。彼は自分自身を欺いてゐたのだ。人間は土地に對する權利を持つことが出來ないのであることを知りながら、彼はその權利を自分に認めて、僅かにその一部分を百姓達に與へたのであるが、然し心の底では自分に土地所有の權利のない事を百も承知してゐたのである。この度こそ彼はそんな

事をしないであらう。そしてクヂミンスコエで爲したことを改めるであらう。そこで彼は頭の中で、百姓達に土地を貸し與へて、その地代を、税金や公共事業の爲めに使用するといふ條件の下に、これ等農民の財産として認めるといふ自分の考案を編み出した。これはまだ單稅制度ではなかつたが、現在の狀態に於ては、これ以上望むことの出来ない程その制度に近いものであつた。要は、彼が土地所有權を利用することを斷然辭退したといふ點に在る。

ネフリユードフが家に戻つた時、管理人は殊更嬉しげな顔に、こゝ顔をしながら食事をすゝめた。彼の顔には、自分の妻が、飾り房を耳に垂らした小娘に手傳つて貰つて拵へた料理が、煮え過ぎたり、焼け過ぎたりしてゐはしまいかといふ心配が表はれてゐた。

食卓は粗末な卓布で覆はれて、ナブキンのかわりに刺繡の施した手拭が置かれ、卓子の上の柄の取れた大きなソップ皿には馬鈴薯で造つたソップが盛られ、その中には先程二本の黒い脚を伸してゐた鶏が、今は切り裂かれて、それも細切に刻まれて、ところ／＼羽毛を捲らずに入れられてあつた。ソップの後も、同じ鶏を羽毛のついたまゝ揚げたものと、バターと砂糖を多量に混ぜた、トウオロジニク(牛乳のしぼり糖)で造つた饅頭(クッキー)が出た。どれもこれも大して旨いものではなかつた。

だが、ネフリユードフは何か何やら氣づかずに食べた。それ程まで自分の考へに氣を奪はれてゐた。そしてその考へのために、彼が村から歸つて來る時の苦悶は一掃されてゐた。

おど／＼した、飾り房を耳に垂らした小娘が皿を選んでゐる間、管理人の妻は扉口から覗いてゐた。管理人は自分の妻の手際を鼻にかけながら、益々嬉しげに微笑むのであつた。

食事の後ネフリユードフは無理矢理に管理人を席に着かせた。そして自分の考へを確める爲めに、同時にまた自分が没頭してゐる問題を他の者にも打明けけるために、農民に土地を貸し與へる自分の考へを彼に告げ、それに就いて彼の意見を訊ねた。管理人は笑ひながら、さうしたことは久しい前から自分も考へてゐたことであつて、それを聞くのは非常に愉快であるといつたやうな態度を見せた。が、實のところ、何にも分らなかつた。それは大方、ネフリユードフの説明がはつきりしなかつた爲めではなくて、その考へによると、結局ネフリユードフは自分の利益を捨て、他人の利益のみ計ることになつて了ふからであつた。つまりすべての人間は、他人に損害を與へても、自分の利益のことばかりを考へる者であるといふ眞理が、管理人の頭に深

く染み込んでゐたので、ネフリュードフの土地から得た収入の全部を農民の共同財産にしなければならぬといふ言葉が、彼によくのみ込めなかつたのは當然であつた。

「さうですか。では、あなたはその資産の歩合をお取立てになると仰しやるのですか？」と、管理人はすつかり分つたやうに、晴々しく言つた。

「いや、さうぢやないよ。私は土地を全然やつてしまふのだ。」

「そんなことをなさいますと、あなたの収入が全くなくなるぢやありませんか？」と、管理人は笑顔を止めて訊ねた。「さうだ、私は土地をやつてしまふのだ。」

管理人は重苦しさうな溜息を吐いたが、やがて又、こゝこし出した。彼は始めて分つたのである。これはてつきりネフリュードフが氣が狂つたのだと思つて、土地を捨て、しまはうとする彼の計畫を利用して、自分も一儲けしてやらうと考へ出したのである。そしてネフリュードフの計畫を、自分がその土地を利用する上に、都合のいゝやうに解釋しようとした。

だが、さうは容易く行かないことが分ると、彼は失望して、この計畫に興味を失つてしまつた。そしてたゞ地主の機嫌を取りたいばかりに絶えず笑顔を造つてゐた。ネフ

リュードフは、管理人には自分の考へが分らないのだといふことを見て取るや、彼を部屋から退けて、小刀の跡や、インキの染みだらけになつた卓子に向つて、自分の計畫を紙に認めはじめた。

夕陽は、やつと芽を吹き出したばかりの菩提樹の彼方に沈んでしまつた。蚊の群がぶん／＼唸りながら部屋の中へ舞ひ込んで來て、ネフリュードフを螫し初めた。彼が書き物を了へる時分に、村の方からは牛の群の鳴き聲や、門を開ける軋り音や、今夜の集會に集つて來る百姓達の話聲などが聞えて來た。ネフリュードフは管理人を呼んで、百姓達を事務所へ集めるには及ばない、自分が村へ出掛けて百姓達が集まる屋敷へ行くからと言つて注意した。そして彼は管理人が持つて來たお茶を大急ぎに飲み干して、村へ出掛け行つた。

七

村長の家の中庭に集つた百姓達は喋り合つてゐたが、ネフリュードフが來ると、びつたり黙つてしまひ、クヂミンスコエでのやうにわれ先にと帽子を脱いだ。この地方の百姓達は、クヂミンスコエ村の者よりもひどく貧乏であつた。娘や女達は耳に飾り房を垂らし、男は大抵樹の皮の草鞋や

手織りのシャツやカフタン(外套のやうな上衣)を着てゐた。中には野良歸りのまゝらしく、シャツ一枚で、裸足の者もゐた。

ネフリュードフは勇氣を出して話し出し、百姓達に全然土地を分配してしまふといふ自分の考へを發表した。百姓達は黙つてゐた。彼等の顔の表情には、別段變つた様子も見えなかつた。

「なぜなら。」と、ネフリュードフは顔を赤らめながら言つた。「人間は誰でも皆土地を使用しなければならぬからである。」

「當り前のこつてがすよ。ほんとにさうでなきアなんねえだ。」と言ふ百姓達の聲がした。

ネフリュードフは話を續けて、土地からの収入は皆の間に平等に分配されねばならぬこと、そしてそれが爲めに自分は百姓達に土地を提供するものであること、地代としては一定の價格を協定し、これを共同財産に繰入れること、共同財産は各自が利用し得べきことなどを話して聞かせた。感服したり、賛成したりする聲が絶えず聞えた。が、百姓達の生眞面目な顔付は愈々生眞面目になり、今まで地主を見詰めてゐた眼を伏せてしまつた。それは恰も、ネフリュードフの瞞着手段を見抜いて了つて、誰もその手には乗らないといふ様子を眞正面から見せて、彼を辱かしたくない

からといふやうであつた。

ネフリュードフは極めて明瞭に説明した。百姓達も相當理解力に富んでゐるが、管理人がどうしても分り兼ねたと同じやうな意味で、彼が何を言つてゐるのであるかど分らないし、又理解することも出来なかつた。彼等は言ふまでもなく、人間は誰でも自分の利益を考へるといふ天性を持つものであることを固く信じてゐた。地主に就いても、彼等は代々の實際經驗によつて、常に百姓達に損をさせても自分の利益のみを考へるものであるといふことを既に久しい以前から知つてゐた。それで、地主が百姓達を集めて、何か耳新しいことを言ひ出すのは、きつと、これまでよりも一層狡猾な方法で何んとかして百姓達をだまぐらかしてやらうとするのだと思つてゐた。

「それなら、お前達は地代をどのくらゐにして貰ひたいといふんだね？」と、ネフリュードフは言つた。

「俺等か地代を定めるつて法はありませぬえ、俺等には出来ねえです。土地は旦那様のもんでござえやすから、旦那様の仰しやる通りになりやすだ。」と、群衆の中から答へた。

「いや、さうぢやない。共同財産に入る金はお前達自身で利用するんではないか。」

「俺等そねえなこたあ出来ましねえだ。共同財産は共同財産、土地は土地で別物でがす。」

「お前達は分らんのだな。」と、事の次第を分り易く説明しようとして、にこ／＼しながら、ネフリュードフに隨いて来た管理人は言つた。「公爵様は地代をお取立てになつて、土地をお前達にお貸しになるのだよ。してその地代は、またお前達の財産、つまり公共團體にお下げになるのだ。」

「俺等、てえへんによく分りやしたぞ」と、齒のない、怒りつばい老人が、眼を伏せたまゝ言つた。「つまり、銀行のやうなもんだべえ。たゞ俺等が期限を定めてお金を拂ひ込むだけの話でがせう。そねえなこたあ、俺等眞平でござえやす。でなくてせえ、俺等困つてゐやすだ。この上、そねえなことしたら、まるで浮ばれねえでがすよ。」

「そねえなこたア何にもならねえでがすよ。俺等もと通りの方がよつほどえゝでがす。」と、不満らしい、荒つばい聲さへした。

ネフリュードフか、契約書を作つて、それに雙方で記名捺印しようと言ひ出した時には、彼等は、極力反對しはじめた。

「何だつて印を捺きやすだ？ 俺等今まで通り働させえすりや、それでえゝでがす。そねえなこたしたつて、何にな

りやすだ？ 俺等字が讀めねえだもの。」

「そねえなこたあ初めて聞いたこんだで、俺等厭でがす。まア今まで通りにして貰えやすべえ。たゞ種だけ改へてもれえてえもんでがす。」といふ小聲が聞えた。

現在の制度では小作人の種は百姓持ちとされてゐたので、彼等はこれからは種を地主に持つて貰ひたいといふのであつた。

「それでは、お前達は土地を貰ふのが厭だといふのだね？」と、ネフリュードフは、快活な顔をした、若い裸足の百姓に向つて訊ねた。その百姓は、ぼろ／＼の上衣を着て、丁度兵卒が脱帽の命令を受けた時のやうな直立不動の姿勢をして、曲つた左手に、破れた帽子を持つてゐた。

「左様であります。」と、確かにまだ軍隊生活の催眠術から醒めないらしいその百姓は言つた。

「それでは、お前達は十分土地を持つてゐるといふのだね？」と、ネフリュードフは言つた。

「決してさうではありません。」と、ぼろ／＼に破れた帽子を、誰でも欲しい人にはやつてもよいといつた風に體の前に念入りに捧げながら、態とらしい快活な顔をしてその除隊兵は答へた。

「では、とにかく私の言つた事をよく考へて見たらよから

う。」と、ネフリュードフは、その分らなき加減に呆れ返つて言つた。そして同じことを何遍か繰返した。

「俺等考へるも考へねえもありましねえ。何うせ仰しやる通りにしかなんねえがすから。」と、ぶり／＼しながら、齒のない、陰鬱な老人は言つた。

「私は明日一杯こゝにゐるから——考へ直したら、私に知らせてくるがいゝ。」

百姓達は一言も答へなかつた。

こんな調子で、ネフリュードフは思つたやうな結果を得ることが出来なかつた。彼は事務所へ歸つて來た。

「旦那様、お聞き下さいまし。」と、家へ戻つてから、管理人は言つた。「旦那様がいくら百姓達に仰しやつたつて、とても駄目でございます。百姓どもは剛情ですからね。彼奴等は集會に出たとすると、頑張り出して、桿でも動かなくなつてしまひます。それはすべてのことに怖氣づいてゐるからです。さつき反對した白髪の老人や、色のどす黒い百姓など々來ては、眼から鼻にぬけるやうな精巧者ですよ。事務所に來た時など、お茶でも飲ませようものなら——管理人は笑ひながら語つた——そりやとてもうまい事を言ふんですからねえ。大臣もかなひませんよ。何にかけても人一倍の判断力を持つてゐます。ところが、集會となると全

く變つた人間になつてしまつて、一つ事ばかり繰返してゐるんですからね……」

「では、その物事の分る百姓達を五六人呼んで貰ふ譯には行かないかね」と、ネフリュードフは言つた。「私はその百姓達に詳しく事情を話して聞かせたいんだが。」

「それは容易いことです。」と、笑顔の管理人は言つた。

「それなら、濟まないが、明日呼んで貰はう。」

「そんなことは何でもありません。では、明日呼ぶことに致します。」と、管理人は言つて、益々にこゝ／＼しながら、入口に立つてゐる二人の女に視線を向け、何か合圖をした。そして一緒に裏口の方へ行つた。ネフリュードフは事務所に入らずに、入口の階段に腰を下して、夕立前に密集して來て人間にたかりたがる蚊を兩手で打ち殺しながら、自分の計畫を練つてゐた。すると、管理人の靜かな聲を遮りながら、忿怒を帯びた女達の聲がした。ネフリュードフは好奇心を唆られて、その聲に耳を傾けた。

「お前さんは頭に懸けた十字架までひつたくらう(最後の時捲き上げる)といふだね。たまつたもんでねえ。」と、一人のぶん／＼怒つた女の聲がした。

「ほんのちよつくら迷ひ込んだばかりぢやねえか。」と、別の聲がした。「早く牛イ返して呉れさせえ。なんでさう動

物を苦しめやすだ、餓鬼どもは牛乳がねえで、困つてるだよ。」

「だから金をお出しつたら、でなけりや働いて返すがいい。」と、管理人の冷静な聲がした。

ネフリードフは家を出て、裏口の方へ廻つた。其處には髪を振亂した二人の女が立つてゐて、その中の一人は確かに妊娠してゐるらしかつた。管理人は入口の階段の上に立つて、雨外套のポケットの中に兩手を突込んでゐた。地主の姿を見ると、女達は黙つてしまつた。そして、ずりこけかかつた頭巾を直し始めた。管理人はポケットの中から兩手を出して、にこ／＼笑ひ出した。

事の起りは、管理人の言ふところによれば、百姓達が故意とその仔牛や親牛などを地主の牧場へ放つたといふこととで、今日も、この女達の牛が二頭も牧場で押へられてしまつたのであつた。管理人は牛一頭について三十コペイカづつの罰金を支拂ふか、それとも二日間の労働で辨償しろと要求してゐるのだつた。これに對する女達の言分は、第一、その牛はほんの一步牧場へ足を入れたばかりであること。第二、自分達には金が一文も無いこと。第三、とにかく労働するとして、その約束に對して、直ぐに牛を戻して貰ふといふことであつた。その牛は朝から飼餌も與へられ

ずに、炎天にさらされながら、頻りに、飢じさを訴へて、鳴いてゐた。

「いくら念を押して言つたか分りやしない。」と、笑顔の管理人は、ネフリードフを見やつて、その同意を求めようとしてもするやうな様子をして言つた。「もし晝食時に牛を伴れて家へ戻つたら、よく氣をつけて番をしろつて、あれ程言つておいたぢやないか。」

「ちよつくら赤ん坊を見に行つた留守中に、出て行つてしめえやしたよ。」

「だから、番をする時には、其處から離れないようにしなけりやいけぬ。」

「そんだら誰が赤ん坊に乳を吞ませてくれやすだ。」

「俺イ便所に行つてゐやしたよ。それもふんとに牧場を荒したんならとにかく、ほんのちよつくら入つたばかりでねえか。」と、別の女が言つた。

「牧場をすつかり食べ荒されてしまふんですからね。」と、管理人はネフリードフに向つて言つた。「放棄つて置いた日には、牧草がみんな無くなつて了ひますからね。」

「まア、嘘を吐くのもいゝかげんにするが、いゝだ。」と、妊娠の女は叫んだ。

「俺イとこの牛が、一度だつて入つたことがありやすか

ね。」

「この通り、入つたぢやないか。金で拂ふなり、働いて返すなりどうでもするがよい。」

「そんなら、働きやすべえ。牛を返しておくんせえ。そねえに慮めねえでもよかんべえ。」と、彼女はふくれ上つて叫んだ。「お蔭で、夜晝心配事のとれたこたアありやしねえだ。阿母は病んでるし、亭主は呑んだくれだし、何もかも俺イ一人で背負つてるだ。根氣も何にも盡きてしまひやしたよ。この上、お前さんの仕事までさせられちや、おつ死ぬばかりだよ。」と、彼女は叫んで泣き出した。

ネフリニードフは牛を返してやるやうに管理人に命じて、自分は家へ入つた。そして、殆ど考へる餘地のないまでに明白な事實に對して、人々が眼を塞いでゐるのを見て、今更のやうに驚いた。

「どうだねえ！ 何んてえ猪い奴だんべえ！」と、一度も梳かしたことの無いもぢや／＼の髯を生した色の黒い百姓が、喰ひ飽きて満腹した牝馬の上で揺られながら、彼と並んで鐵の馬槽の音を立てながら乗つて行く、も一人の、ぼろぼろに裂けたカフタンを着た、年上の瘦せこけた百姓に言つた。

この百姓達は、夜になると馬を伴れ出して、廣い街道の草を食べさせたり、或はこつそり地主の林の中へ伴れ込んたりするのであつた。

「印せえ擦れば口ハで土地をやるんだとよ。俺等の兄弟はその手にや何度もかゝつてゐるだから、さうはもう騙されねえだよ。今ぢや俺等は人様の頭を借りねえだつて分るやうになつたよからな。」と、彼は附け加へて、路にはぐれた當歳になる仔馬を呼びはじめた。「コニヤシー！ コニヤシー！」と、彼は親馬を止めて、後の方を振り向きながら叫んだ。仔馬は後方にゐるのではなくて、路傍から脇へそれて——牧場の方へ行つてしまつたのであつた。

「あれだ、地主様の牧場さ入りこんでけつかる。」と、もぢや／＼髯を生した、色の黒い百姓は、路をはぐれた仔馬が鳴きながら、露つばい泥地の香りの強い牧場の中から飛び出したあたりに、酸模の折れる音を聞きながら言つた。

「おい見ろよ、牧場にや草がさんざ生えてゐらあ。休み日に女子でもひつばつて来て、あの草を抜かせてしまふべえ」と、ずた／＼に裂けたカフタンを着た百姓は言つた。「でねえと、鎌の刃が鈍つちまふだ。」

「印を擦せて言ふだが。」と、髯もぢやの百姓は地主の話に對する自分の考へを述べ續けた。「印を擦して見ろ、彼奴

お前を生きたまんまで丸呑みにしちゃふだ。」
「違えねえ。」と、年寄りの方が答へた。

それつきり話はびつたり止んでしまつた。たゞ硬い道を歩いて行く蹄の音だけが聞えてゐた。

八

家に入つてから、ネフリニードフは彼の寢室として定められた事務所の寢室に、羽蒲團と、二つの枕とを見た。ベッドには、精巧な花模様刺繡の襪の附いてゐる、眞紅なごはくした二人用の絹の褥——確かに細君の嫁入の時の持參であらう——がかけてあつた。管理人はネフリニードフに午餐の残りを持つて来てすゝめたが、斷られたので、粗末な食事と設備の不行届とを詫びながら、ネフリニードフを一人残して、其處を出て行つた。

百姓達の拒絶は少しもネフリニードフに不快の感を起させなかつた。クヂミンスコエで、自分の提案が受け入れられ、しつきりなしに有難がられたよりも、この村で不信用と敵意とを以て迎へられたのを、彼は却つて満足にも愉快にも思ふのであつた。事務所は息苦しく、その上不潔であつた。屋外に出て、庭園へ行かうと思つたが、ふとあの晩のこと、女中部屋の窓、裏支關などを思ひ出したので、――

彼は罪の記憶に汚された場所を歩くのが厭な感じがした。そして支關先に腰を下して、白樺の若葉の強い香りに満ちた生温かい空気を呼吸しながら、眞暗がりの庭園をじつと見つめてゐた。水車の音や、夜鷺や、支關のほとりにある灌木の茂みの中で單調な聲で囀つてゐる名も知らぬ小鳥の啼き聲などに耳を澄ましてゐた。やがて管理人の部屋の窓の灯が消えると、東の方の物置小屋のあたりは、次第に昇つてくる月の光りで明るくなつた。電光がだん／＼輝きを増して来て、花盛りの、こんもり茂つた庭園や朽ちはじめた家をばつと照し出した。遠くで雷鳴がすると、どす黒い雲が空の三分の一ほどを蔽うてしまつた。夜鷺や小鳥の啼き聲は止んでしまひ、騒々しい水車の音に交つて鷺鳥の囀り啼く聲が聞えた。すると、村の方からと管理人の家の庭からと一番鶏が啼きはじめた。暑い日や、雷雨の夜などには平常よりも早く鶏が啼くものだが、鶏が早く啼く夜は楽しみのある兆だといふ諺がある。

ネフリニードフに取つては、今宵は楽しみ以上の日であつた。嬉しい幸福な夜であつた。想像は彼の前に、彼が無邪氣な青年であつた時、此處で過した幸福な夏の日のことを新たに思ひ出させた。それで彼は今、たゞにあの時ばかりでなく、自分の生涯を通じての最も幸福な瞬間にあるも

のと感じた。彼は單に思ひ出したばかりではなく、嘗て自分が十四歳の少年であつた時、眞理を示して下さるようと神様にお祈りを捧げたことのある頃や、まだ子供の時、母親の許を離れる折など、いつも自分は善良な人間となつて母に心配をかけさせるやうなことは決してしないと誓つて、その膝の上に泣き崩れた頃の自分と同じであることを感じた——又ニコレンカ・イルテニーエフと一緒に、お互ひに援け合つて善良な生活を送り、すべての人々を幸福にしてやるやうにしようではないかと誓つた頃の自分と、全く同じであることを感じた。

彼は今、クヂミンスコエで何故、心がくらくらつき出して、家や森林や財産や土地などを惜しんだかを思ひ出して、今でも惜しんでゐないか何うかを、自分自身に訊ねて見た。そして、あの時自分が惜しんだことが不思議にさへ思はれるのだつた。それから彼は今日目撃したことを残らず思ひ浮べた。亭主が自分(ネドフ)の森林から樹を伐つた廉で牢獄に投ぜられてゐるといふ子持の女や、また自分達のやうな境遇の女は、且那方に身賣りするのを當然であるかのやうに思ひ、少くともさう話したあの恐ろしいマトリョーナのことを思ひ出した。それに彼女の子供達に對する態度や、子供達を育児院へ送る方法や、十分食べさせられないで死に

かゝつてゐる、あの不幸な、萎び切つた顔をして、笑つてばかりゐる、ぼろ／＼の帽子を被つた赤兒のことや、過度の勞働に疲れ切つて、自分の牛の見張りをつひ怠つた爲めに、管理人から勞働を強ひられ、しかもその日の麵麩にも有りつけずにゐる、あの妊娠した、體の弱々しい女のことなどを、それからそれと思ひ出した。すると、今度は突然まのあたりに牢獄や、きれいに髪を剃り落された頭や、監房や、嘔吐を催させる臭氣や、鎖などの光景と竝んで、一方自分達の都會に於ける金持連の營んでゐる莫迦莫迦しいほど營澤な生活振りが思ひ浮んだ。これ等は、悉く明白なことであり、考へる餘地すらない事實であつた。

満月に近い、輝かしい月が物置小屋の彼方から昇つた。黒い影が中庭に落ちて、毀れかゝつた家の亞鉛屋根がキラキラ光つた。

すると、この月明りをそのままに過すのを惜むかのやうに、今まで黙つてゐた夜鶯が、庭園の中で聲を頼はしながら啼きはじめた。

ネフリネドフは前日クヂミンスコエで、熟々自分の生涯について考へて、今後どうすればいゝかの問題を解決しようとした時、自分がひとく思ひ惑うたことや、どうしてもその解決がつかかなかつたことや、どの問題にも多くの困

難が伴つてゐたことなどを心に思ひ浮べて見た。所が今改めてこれ等の問題を自分に課して見ると、すべてがいかにも單純であるのに驚いた。何故單純であるか。それは外でもない、彼は今、自分の身に振りかゝつて來る結果のことなどを考へずに、寧ろそんなことは閑却し去つて、たゞ一心に、自分の爲すべきことを考へたからである。不思議なことは、自分の爲めにしなければならぬことが決定しないのに、他人の爲めに爲すべきことが瞭り分つて來たことである。彼は今、百姓達に土地を分配してやらなければならぬことを確かに知つてゐた。又カテューシヤを見捨てることはよくないことである、彼女を助けてやらなければならぬ、彼女に對する自分の罪を償ふが爲めにはすべてを犠牲にする覺悟でゐなければならぬことなどを瞭りと知つてゐた。更に又自分が他の人々と見解を異にしてゐるらしい裁判や刑罰に關するすべての事柄を研究し、解剖し、立證し、理解しなければならぬ事も、確かに知つてゐた。が、これ等のことをした曉は何ういふ結果を生むであらうか——彼は判断出來なかつた。けれどもこれもこれも是非爲なければならぬことであるのを確かに知つてゐた。そして、この健氣な覺悟が彼には嬉しかつた。

どす黒い雲が空一面を蔽うてしまつた。遠い處でピカピ

カしてゐた電光が、近くで光りはじめて、屋敷を照し、玄關の朽ちかゝつた破れ家を照した。雷鳴は早や頭上でごろごろし出してゐた。小鳥は皆聲を潜めてしまつたが、その代り木の葉がざわつき出した。風はネフリュードフが腰かけてゐる支關を吹きまくつて、彼の髪の毛を弄つた。雨がぼつ／＼落ちて來て、酸模や亞鉛屋根をバラ／＼叩いた。すると空ちうが明るくなり、あたりは森然となつた。ネフリュードフが數を三つと算へきらないうちに、腦天で何か恐ろしい劈くやうな音がしたかと思ふと、急に空を傳つて轉がつた。

ネフリュードフは家のなかへ入つた。

『さうだ、さうだ』と、彼は考へた。『吾々の生活上に起るすべての事件、その事件の一切の意義は、自分に取つては不可解なことで、到底理解出來ないものである。何故伯母達は生きてゐたのであるか、何故ニコレンカ・イルテニーエフは死んで、俺は生きてゐるのであるか？ 何故カテューシヤは生れて來たのであるか？ 何故俺は狂氣じみたことをしたのであるか？ 何故あの戦争が起つたのであるか？』そして、それから後の自分の放縱な生活は何の爲めであるか？ これ等の事を理解し、造物主のすべての攝理を理解することは、到底自分の力に及ばないところである。だが、

俺の良心に刻まれてある造物主の意志を行ふことは——それは俺の力で出来ることである。又それが考へる餘地のないほど明白なものであることを——俺は知つてゐる。それを實行する時こそ、俺は確實に安心立命を得ることが出来るのだ。』

雨は篠つくやうに降りしきつて、屋根の上から川のやうな音をたて、桶の中へ注がれてゐた。電光は間を置いて屋敷や家を照した。ネフリユードフは居間へ戻つて、衣服を脱いで、寢臺の上へ身を横たへた。ガバ／＼に剝けてゐる汚ならしい壁紙を見ると、南京蟲がゐるはしないかといふ恐れを抱かずにはゐられなかつた。

『さうだ、主人ではなく、下男であると考へてゐなくてはいけない。』彼はかう思ひながら、その考に嬉しさを感じた。

彼の恐れた通りだつた。蠟燭を消したかと思ふと、蟲が體ぢうを節ひ廻つて食ひはじめた。

『土地を興へて、シベリヤへ行つたら、それこそ蚤や、南京蟲や、不潔が……だが、それがなんだ、もしそれが我慢しなければならぬものであるならば——我慢しよう。』——だが、さうしなければならぬといふ希望に驅られながらも、尙ほ彼はそれを忍ぶ氣にはなれなかつた。彼は開

放たれた窓際に腰かけて、逃げ行く雨雲や、再び輝き出した月を心ゆくばかり眺めてゐた。

九

明け方近くなつて、やつとネフリユードフは睡つた。それ翌日は寢過してしまつた。

管理人に呼ばれた七人の百姓達の總代は、正午頃林檎畑の林檎の木の下に集つた。其處には管理人が地に杖を打ち込んで、その上に卓子を据え、形ばかりの腰掛が設けられてあつた。百姓達に、脱いだ帽子を被らせて、腰掛に着かせるまでには可なりの時間かゝつた。殊に今日は樹の皮で造つた草鞋と清楚とした脚絆とを纏うて來た兵隊上りの男は、『葬式』に列する時の軍隊の禮式に従つて、自分のぼろ／＼に破れた帽子を手に持つたまゝ始めから終ひまで堅くなつてゐた。やがてその中の一人で、ミケロ・アンジエロの描いたモーゼのやうな、半ば白くなつた髯を波立たせ、日に焼けた、つる／＼した褐色の額のほとりに濃い白髪の縮れ毛を持つた威嚴のある肩巾の廣い老人は、その大きな帽子を被つて、新調の手織のカフタンを端折りながら腰掛の方へ進んで行つて、それへ掛けた。と、他の連中もそれに習つて、腰掛けはじめた。

百姓達が席に着いてしまふのを待つて、ネフリュードフは、彼等と向ひ合つて腰かけた。そして、計畫の要領の書き込んである紙片を卓子の上に擴げて、頬杖をつきながらそれを説明しはじめた。

百姓の数が少なかつた爲めか、それとも自分を忘れて、計畫のことがかり思ひ詰めてゐた爲めか、ネフリュードフは今日は少しの不安も感じなかつた。彼は知らず／＼、縮れた髻の、肩巾の廣い老人に、特別の注意を向けて、その賛否を質した。だが、ネフリュードフの、その老人に對する觀察は違つてゐた。この風采の立派な老人は、一々合點が行つたやうにその見事な長老然とした頭を頷かせたり、振つたりしたけれども、他の者の反對の聲を聞くと顔を顰めた。それも他の者達がネフリュードフの説明を彼等の言葉に言ひ直した時に限るのであるから、確かにネフリュードフの言つてゐることを理解するのは困難であつたに違ひない。ネフリュードフの言ふことをもつとよく理解することの出來たのは、その長老然とした老人と並んで腰掛けてゐた、小柄で、片眼の、補綴だらけな南京木綿の上衣を着、片方の磨り減つた古い長靴を穿いた無髻の老人であつた。ネフリュードフは後で知つたのであるが、彼は宦職であつた。この男は、熱心に聞き取らうとしてピク／＼肩を動かしてゐ

た。そして、ネフリュードフの言つたことをすぐに自分達の言葉で他の者に話して聞かせた。背の高くない、づんぐりした、髻の白い、ギョロ／＼した伶俐さうな眼をした男も、相當に諒解が早かつた。彼はさも見せかけるやうに、ネフリュードフの言葉尻を一々捕へては、皮肉な冗談を浴せかけてゐた。兵隊上りの男も、もし軍隊生活の爲めに愚鈍化されなかつたら、そして莫迦げた兵隊式用語にまぎらはされる習慣がついてゐなかつたら、同じく物事を理解することが出來たであらう。中でも一番眞劍になつて聞いてゐたのは、小ざつぱりした手織の衣服に、新調の樹の皮の草鞋を穿いた、小つぽけな頸髻を生した、鼻の高い、底力のあるベース聲の、背の高い男であつた。この男は何でもよく分つてゐたのであるが、必要な時だけしか口を利かなかつた。あとの二人の老人——一人は昨日の集會の時、ネフリュードフの申出に對して徹頭徹尾大聲を出して決定的に反對した、齒の無い老人で、も一人は瘦せ細つた脛を白い布でぎつしり巻いて、靴を穿いてゐる、人の好きさうな、背の高い、色白の跛の老人であつた——二人共注意深く聞耳を立てゝはゐるが、始めから終ひまで殆ど一言も物言はなかつた。

先づ最初にネフリュードフは土地私有に關する自分の意

見を述べた。

「土地といふものは、私の考へるには、賣つたり、買つたりすることの出来ないものである。なぜといふに、もしも土地を賣ることが出来るとすれば、金持はどしどしそれを買占めるであらう。さうして必要なだけの土地を持たない者に貸付けて、その使用權に對して金を搾り取るであらう。最後には人がその土地の上に立つてゐるからといつてその料金までも取り立てるやうになるであらう。」と、彼はスペンサーの議論まで擴げ出した。

「そんな體に翼を縛りつけて飛んで歩く外にや方法がねえだ。」と、髯の白い老人は眼で笑ひながら言つた。

「違えねえだ。」と、天狗鼻の老人が底力のあるペースで言つた。

「確かにさうであります。」と、兵隊上りの男が言つた。

「女つ子が仔牛へやるべえと思つて、草をちつとばつか引つこ抜いたら、ぶん縛つて、牢さ打ち込んぢまひやしたよ。」と、人の好まうな跛の老人は言つた。

「俺等の畑は五里も先にあるんで、地面を借りてえだが、べら棒に高げえんで、地代なんか拂えたもんでねえだ。」と、齒の抜けた、氣短かな老人が附け加へた。「俺等の體で勝手（動の意）に繩を纏うてゐるだ。あの奴隷時分よかよつほど

悪りいや。」

「私もお前達と同じ考へなんだ。」と、ネフリュードフは言つた。「土地を所有する事は罪惡だと考へてゐるんだ。それで私はお前達に土地を上げてしまひたいと思つてゐるんだ。」

「成程、そりや結構なことでごぜえやす。」と、捲髮の老人は言つたが、ネフリュードフの意向は確かに土地を貸し付ける考へであると早合點してゐるらしかつた。

「私は今後土地を占有したくないから、その處分をつける爲めに、此處にやつて來てるんだ。一體どんな風に處置をしたらいゝものか、考へて見てくれなにかね。」

「百姓達に與つて下さりや、それでよかんべえ。」と、齒の抜けた、氣短かな老人が言つた。

ネフリュードフは、最初この言葉を聞いて、百姓達が自分の誠意ある計畫を疑つてゐるのであると感じて、心をいらだゝせた。が、直ぐに又心を取直して、さう言はれたのを幸ひに、自分の言はうと思つてゐたことを説明した。

「私は喜んで土地を上げるよ。」と、彼は言つた。「誰に何うしてやつたらいいか？ どの村の人にやつたらいいか？ お前達の仲間にはかりやつて、デミンスコエ村（これは乏しい土地をもつた隣村のことである）には、やらなくともいいものか。」

一同は黙つてゐた。兵隊上りの男だけが口を利いた。「確かにさうであります。」

「そこでだ、」と、ネフリュードフは言つた。「もしお前達が自分で土地を分配するとしたら……お前達はどんな風にやるか、一つ聞かしてくれないか？」

「どんな風にしやすとかえ？ みんな頭割に同じやうに分けやすだ。」と、眉を上下へピク／＼動かしながら籠職は言つた。

「他にえゝ方法も無かんべえ、頭割に分けるがえゝだよ。」と、白い布を脛すねに巻いた人のいゝ跛びこの老人は言つた。

一同はこの説に満足して賛成した。

「何うして頭割にするんだ？」と、ネフリュードフは問うた。

「さうすると、屋敷番のやうな者にも矢張り分配するんだね？」

「さうではないんであります。」と、兵隊上りの男は顔中に快活な元氣さを表はしながら言つた。だが、背の高い物事の分りの早い百姓は、それに同意しなかつた。

「分ける段になりや皆なに同じやうに分けにやなんねえだ。」と、彼は一寸考へた後、持前の底力のあるペースで答へた。

「さうは出来ない。」と、ネフリュードフは前以てその反駁を

考へてゐたので、かう言つた。「もしみんなに同じやうに分けるとなると、自分で働くことが嫌ひな者は皆自分で耕さずに、その割前たけを買つて、それを金持に賣つてしまふに違ひない。それで、土地はまた金持の手もとに集つてしまふ。そして、自分の割前で働いてゐる者のところでは、たとへ人数が殖かえても、土地は既に買ひ占められて残つてゐない。そこで金持はまた土地の無いものを、勝手にこき使ふことになるんだ。」

「確かにその通りであります。」と、兵隊上りの男は早口に言つた。

「土地を賣ることを禁じたらよかんべえ。自分で鋤すき取つて耕やす者だけに分けりやえゝだよ。」と、腹立はらだしさうに兵隊の言葉を遮りながら籠職は言つた。

それに對してネフリュードフは、誰が自分で耕やし、又誰が他人の爲めに働くかを今から見透すことは出来ない、と、反對した。

すると、背の高い、物事の分りのよい百姓は、皆で組合を造つて耕作するやうにしてはどうかと言ひ出した。「それで耕やすものには分けてやり、耕やさねえものには何にもやらねえことにしたらどうだべ。」と、彼はそのはき／＼したペースで言つた。

この共産的な考へに對しても、ネフリュードフは矢張り自分の言ふべきことを用意しておいた。それで彼は、さういふ方法を探るには皆が一樣に犁や馬を持ち、又各自他の者に遅れないやうにする爲めに、馬、犁、耨器、農具一切のものを共有にしなければならぬ。さうするにはすべての人々の一致が必要であると言つた。

「百姓なんてえものは、おつ死ぬまで一致べえ出来るもんでねえ。」と、氣短かの老人は言つた。

「しつかりなしに喧嘩ばかりするだべ。」と、白い髯の老人が眼で笑ひながら言つた。「女つちよは女つちよでおたげえに糺り合ふだべ。」

「次に肝腎なことは、土地を分配するには、地質のことも考へなければなるまい。」と、ネフリュードフは言つた。「でないと、或る者には黒土質の土地がわたり、他の者は粘土質や砂地ばかりを貰ふことになるだらう。」

「みんな同じやうに割當てりやよかんべえ。」と、籠職は言つた。

ネフリュードフはこれに答へて、單に一村一組合の土地分配の問題でなく、數縣にわたる問題である。もし土地を無代償で、百姓達に與へるとすれば、或る者は好い土地を持つことになり、他の者は瘠地を當てがはれるやうなこと

になる。誰だつて、好い土地が欲しいに違ひない、と反駁した。

「確かにその通りであります。」と、兵隊上りの男は言つた。他の者達は黙つてゐた。

「だから、そんなに簡單にやりのけられるものではないのだ。」と、ネフリュードフは言つた。「この問題に就いては、私達ばかりでなく、他の多くの人々も考へてゐるのだ。或る一人のアメリカ人で、ジョージといふ人も同じやうに考へてゐるのだ。私もそれに賛成だ。」

「なんて言つたつて、お前様が御主人様でござらつしやるから、お前様が分けてくらつしやればよかんべえ。他人がなんて言はうが、且那樣のものは且那樣のお好きなやうになさりやえよでがさ。」と、氣短かの老人は言つた。

この横鎗は、ネフリュードフをむつとさせたが、それに不快を感じたのは、自分ばかりでないのを見て、心を和らげた。

「まあ待ちねえ、セミョン小父さん、且那樣の言はつしやることを聞いてからにしたがよかんべえ。」と、物事の分りのよい百姓は壓へつけるやうなベースで言つた。

ネフリュードフはそれに勇氣を得て、ヘンリー・ジョージの單稅論の考案を百姓達に説明し出した。

「土地は何人のものでもなく、神様のものである。」と、彼は始めた。

「全くでさア。」「違えねえだ。」と、數人の聲が答へた。

「土地はすべて共有のものである。何人も土地に對しては平等の權利を持つてゐる。然し土地には肥えたのと瘠せたのとある。誰も瘠せた土地を欲しがる者はあるまい。然らば公平に分配するには何うしたらよいか？ それには好い土地を使用する者が、それを使用することの出来ない者に、その土地の使用代を支拂ふやうにしなければならぬ。」と、ネフレードフは自ら答へるやうに、その説明を進めた。「然し、その代金を、誰が誰に支拂ふべきかを定めることは困難なことである。が然し、又共同費用に金を集めることも必要であるから、つまり土地を使用した者は、その土地相當の使用代を共同費用に拂込むやうにすればよいのだ。さうすれば不公平の無いやうになるだらう。それで土地を使用したい者は、好い土地の爲めには多く拂ひ、悪い土地の爲めには少なく拂へばよいのだ。使用したくない者は——一文も拂ふ必要はない。つまり土地を使用する者が、共同財産へ税金を支拂ふことになるのだ。」

「全くその通りでござえやす」と、眉をピク／＼させながら籠職は言つた。「え、土地を持つものは、よけえに支拂ふ

ことにするがえゝだ。」

「そのジョージつて男はえれえ頭ぢやねえか。」と、代表者らしい捲髮の老人は言つた。

「たゞ金高が俺等の力で拂える位でねえと何にもならねえだ。」と、背の高い男はさういふやり方が、どんな結果に終るかをちやんと知つてよもゐるかのやうな顔付をしながら、ペースで言つた。

「金高は高過ぎたり、廉過ぎたりしちやアいけねえ……もし高けりや誰にも拂えねえから損が行くだべ。もし廉けりや——みんなおたげえに賣買するやうになつて、土地で儲ける奴が出来て來べえ。俺が旦那様に言つて置きてえと思つたことは其處んところがすよ。」

「さうでがすとも、それに違えねえだ。尤ものことでがす。」と、百姓達は話の意味が十分わかつたので、ネフレードフに賛成しながら言つた。

「なんて、えれえ頭なんだべえ！」と、捲髮の、肩の廣い老人は繰返した。「そのジョージつて男は！ なんてえことを考へ出したもんだべ！」

「ところで、私も土地が欲しいんですが、どんなもんでござりませう。」と、にこ／＼しながら管理人は言つた。

「餘分の土地が出たら、それでも貰つて耕したらいいだら

う。」と、ネフリュードフは言つた。

「お前様になんで土地が要るだ。お前様は、土地がなくなてもお腹がふくれてゐるでねえか。」と、笑つてゐるやうな眼をした老人が言つた。

これで集會は終つてしまつた。

ネフリュードフは自分の申出をもう一度繰返したが、今度も別に返答は要求しなかつた。けれども彼は、百姓達によく相談した上で、返答するように勧めた。

百姓達は、仲間と相談した上で、返答するからと言つた。

そして、興奮したまゝ別れを告げて歸つて行つた。道を歩いて行く間、彼等の次第に遠退いて行く大きな話聲が聞えてゐた。そしてその話聲は夜遅くまで、村の方から河の面を傳つて聞えて來た。

翌日、百姓達は仕事を休んで、地主の申出を協議した。

集會は二派に分れてしまつた。一派は、地主の申出は、危険のない有利なものだと言ひ、他の一派はその真相を理解することが出来ないで悪念みであると主張し、それに恐れを抱いてゐた。けれども三日目には村民一同申出を承認することに一致して、全體の決議をネフリュードフに報告する爲めに出掛けた。かうして一同の意見が纏まつたのは、一

人の老婆が話して聞かせたことが老人達の受け容れるところとなつたからである。つまり、地主の行爲のうちには人を欺すやうな恐れは少しもない、彼は靈魂のことを考へて、その救ひの爲めに行つてゐるのであると、老婆が説明したことが、この一致に効果を及ぼしたのである。そしてこの説明は、ネフリュードフがパノーヴォに滞在中、少なからぬ金を恵んだといふことによつて確證された。ネフリュードフが、こゝで金錢の施しをしたのは、初めて農民の營めてゐる貧苦と荒みきつた生活のどん底を目撃して、それに驚いたあまりで、豫て慈善といふことの無意義なことを知りつゝも、つい施しをせずにはゐられなかつたのである。殊に今彼は昨年クヂミンスコエの材木を賣つた代金を受取つてゐたし、それに農具を賣つた前金をも取つてゐたので、多額の金を持ち合はせてゐたのであつた。

地主が貧しい者達に金を恵んでゐるといふことを聞くと、多くの百姓達、殊に女達が方々から彼のところに押しかけて來て、憐みを乞うた。彼はこれ等の百姓を何うしてやつたらよいか、どれだけの額を誰にやつたらよいか、又それを決めるには何に基づいたらよいか、薩張り分らなかつた。彼は恵みを乞ふ貧しい者達に、自分が澤山持つてゐる金を與へない譯には行かないと思つた。だが、施し

を乞ふからといつて、無暗に與へることは無意味である。かうした状態から脱するにはたつた一つの方法よりない。それはこゝを逃げ出すことである。そして彼は早くもそれを實行した。

パノーヴェ村滞在の最後の日、ネフリュードフは母屋に行つて、其處に遺つてゐる色々な品物を調べて見た。調べてゐる中に、彼は伯母が持つてゐた、獅子の頭に青銅の環の附いてゐる、古風なロココ型の、マホガニ製の衣裳戸棚の抽斗の中に、澤山の手紙があるのを見出した。そしてその中にはまた一枚の寫眞が交つてゐた。それには二人の伯母ソフィヤ・イヴァーノウナ、カテリナ・イヴァーノウナと、大學生時代の自分と、無邪氣な生々とした美しい快活なカテューシャとが一緒に寫つてゐた。ネフリュードフは伯母の家にあつた品物の中から、手紙とその寫眞だけを持つて來た。そして残りのものは全部、にこ／＼笑つてばかりゐる管理人の周旋で、パノーヴェの家の取壊しと家具一切とを實價の十分の一で買ひ受けた水車屋の男に譲つてしまつた。

ネフリュードフは今、自分がクヂミンスコエで、財産を失くするのを惜しんだあの心持を思ひ出して、何うしてあの時はそんな氣分になつたかと、不思議でならなかつた。然るに今彼は、解放の限り無い悦びと、新陸地を發見した時

に探險家の必ず味はふやうな、すが／＼しい感じとを味はつた。

一〇

田舎から歸つて來ると、市の光景が不思議なくらゐ變つてゐたのにネフリュードフはひどく驚いた。彼は、夕方、街燈の灯が點つたころ、停車場から馬車で家へ歸つた。どの部屋もまだナフタリンの匂がしてゐた。アグラフェーナ・ペトローウナとコルネイとは二人ともぐつたり疲れて、不満さうな顔をしてゐた。それどころか、たゞ蟲干のために繩に吊したり、空氣に晒したり、藏ひ込んだりする外、何の用にも立たない品物の取片附けの事から喧嘩さへしてゐた。ネフリュードフの部屋は蟲干には使用されずにあつたが、片づけてはなかつた。然し衣匣がいくつも積んであつて、その部屋へ通る骨折は一通りでなかつた。そんな有様で、ネフリュードフの歸宅は、この家の中で一種の名狀し難いだらけた氣分で行はれてゐた仕事の邪魔になつたらしかつた。かうしたことは皆、村の貧困な有様を見て來た後のネフリュードフに取つては、如何にも莫迦げきつたことだ、(彼も曾てはその仲間であつた)不快に感じられた。それで彼は、アグラフェーナ・ペトローウナに、姉が來て家に

あるもの一切の後始末をするまでは、自分でよいと思つたやうに勝手に品物を片づけさせることゝして、自分はその翌日下宿へ移らうと決心した。

ネフリュードフは翌朝早く家を出て、監獄の近くにある、最初に目についた、非常に質素な、汚いくらゐの家具付き貸間の二間を借受けた。そして其處へ自分が選んだ品物を家から運んで置くように言ひつけて、辯護士のところへ出掛けた。

屋外は寒かつた。雷雨の後のことで、春には有りがちな寒さが時々襲うて來た。寒氣と身を切るやうな風が吹きまくつて、薄地の外套を着たネフリュードフはぞくぞくするほど冷たかつたので、一刻も早く温まらうとして一步毎に足を早めた。

彼の記憶には、村の人々が浮んだ。女、子供、老人——彼が今度初めて見たやうなそれ等の人々のみじめな貧困と苦痛、殊にこゝく笑ひながら、腓のない細い足を伸したり縮めたりしてゐた、萎び切つた顔の赤兒などを思ひ出して、彼は知らず／＼それ等の人々と市で逢つた人々を比べて見た。彼は肉屋や魚屋や、出来合ひの服を賣つてゐる呉服屋などの店先を通り過ぎながら、田舎では見たくても見られないやうな盛張りした服装の、脂肪きつた商人達が

有り餘る程——彼は始めてそれに氣がついた——ゐるのを見て驚いた。これ等の人々は、自分達の品物に就いて何等知るところのない人々を欺くの能としてゐる。しかもそれを無用なことではなく、商賣は非常に大事なことであると確信してゐるらしい。腰部のむつくり脹れ上つた、背に鈕釦の附いてゐる上衣を着た馭者や、金筋で縁を取つた帽子を被つた門番や、前垂を掛けてゐる縮れ毛の下女や、殊に馬車の中に納つて大の字に體を投げだしながら、人を莫迦にしたやうな、ぶしつけな恰好をして通行人を眺めてゐる、頸元を剃り込んだ辻馬車の馭者達も矢張り同じやうによく肥つてゐた。彼はこれ等の人々を見て、その多くが田舎で土地を失つて、都會へ追ひやられた百姓達であることに自然に悟つた。そして、これ等の都會へ追ひ立てられた者の中には、都會生活のあらゆる要件を利用して、旦那達と同じやうなものとなつて、自分の境遇に満足してゐるものもあり、中にはまた都會で、村にゐた時よりも一層不幸な境遇に置かれ、今迄よりも更に傷ましくなつたのもあつた。或る地下室の窓際で働いてゐた靴直しなどは、ネフリュードフにはさうした傷ましい一人のやうに思はれた。洗濯のシャボンの湯氣が立籠つてゐる開放たれた窓の前に立つて瘦せた胸を剥き出して鬨斗をかけてゐた、頭髮を振り亂

した、百姓達のやうに瘦せて、青白い顔をしてゐる洗濯女や、ネフリエードフが通りで會つた、前垂を掛けて、素足のまゝ靴を突つけて、頭のでつべんから足の爪先までペンキだらけになつた二人のペンキ屋なども、さうした連中であつた。彼等は日に焼けた背筋だらけの弱々しい腕をさし伸べて、肘の上まで袖をまくり上げながら、ペンキ桶を運んでゐたが、顔は痛々しく曇れ、始終ブリー／＼して罵り合つてゐた。馬車に揺れながら乗つて行く眞黒な顔の、埃だらけになつた取者達も、さうした顔をしてゐた。又街道の辻に立つて施物をねだつてゐる、ぼろ／＼に裂けた服を着た、顔のむくんだ男達や、子供を伴れた女達も、同じやうな顔をしてゐた。さうした顔は、ネフリエードフが、とある居酒屋の側を通り過ぎた時も、開け放された窓の中から見えてゐた。壺や茶器がずらりと並べてある、汚らしい卓子の間を、ふら／＼しながら、白い衣服を着た給仕が動き廻つてゐた。汗ばんだ、赭ら顔のお客達は、莫迦面をして叫んだり、聲を張り上げて、歌つたりしてゐた。窓際に腰かけてゐる一人の男は、眉を釣り上げ、唇を尖らせて、何か想ひ出さうとしてゐるかのやうに、自分の前を見詰めてゐた。

『彼等は何故こんなところ集つてゐるのであらう？』と、

ネフリエードフは冷たい風が吹きつけた埃と一緒に、あたり一杯に擴つてゐる塗り立てのペンキの厭らしい臭氣を、知らず／＼吸ひ込みながら考へた。

或る通りを歩いてゐると、鐵のやうなものを運搬してゐる荷馬車の一隊がやつて来て、ネフリエードフに追ひついて並行になると、凸凹した車道の上で恐ろしい程騒々しい鐵の響きを立てた。それが爲めネフリエードフは耳と頭が痛んで来た。彼は馬車の一隊を追ひ越さうと思つて足を早めると、突然鐵の響きの中から自分の名を呼ぶ聲が聞えたので、立止まつて見廻すと、すぐ眼の前に、チツクを塗つて、先をびんと尖らした口髭を生じた、てか／＼した顔の軍人がゐた。彼は辻馬車の上から、にこ／＼笑つて、いやに白い齒を出しながら、兩手を振つて言つた。

「ネフリエードフ君！ 君ぢやないか？」

ネフリエードフはふと見ると、最初は愉快に思つた。

「あ、シエンボーク君か！」と、ネフリエードフは嬉しさうに聲を出した。が、すぐさま、何にも喜ぶやうなことは全く無いと思つた。

このシエンボークは、以前伯母達の家にネフリエードフと一緒に泊つたことのあるその男であつた。ネフリエードフは長いこと彼に逢はなかつた。が、この男に就いては、彼が

借金を造つてゐたにも拘らず、聯隊を出て豫備騎兵の資格を失はずに、矢張りどうかかかうか或る種の手段で金持仲間と交際してゐるといふ噂を聞いてゐた。如何にも満足さうな快活なその様子は、これを證明するに十分であつた。

「いゝところで君とぶつかつたよ！ 市には誰も居なくなつちやつたからな。ときに、兄弟、君も大分老けたね。」と、彼は馬車から下りて、肩を眞直にしながら言つた。「僕は君の歩きつきを見たゞけで君だといふことが分つたよ。まア、それはそれとして、どうだね、一緒に食事でもやらうぢやないか？ 何處か旨い物を食べさせるところを知らんかね？」

「いや知らんよ。それに僕はさうしちやみられない。」と、ネフリードフは友の感情を害はないで、うまく逃げる工夫がないものかと、そのことばかりを考へながら答へた。「君は何んだつてこんなところに來たんだね？」と、ネフリードフは訊ねた。

「用事で來たんだよ、兄弟、後見人の用事でさ。僕はこれも後見人なんだ。サマノフの財産を管理してゐるよ。君も知つてゐるだらう、あの金持さ。彼奴は——毫碌しちやつたんだ。それでゐて五萬四千デシヤチナの土地を持つてゐるんだからね！」と、彼はこれ等の土地をさも自分自身が

造り上げたかのやうな、或る得意らしい様子をして言つた。「ところが、事務は手のつけやうもない程なげやりにしてあつたんだよ。土地は残らず百姓達に貸しつけてあるのだが、たゞの一匹だつて地代を拂ひ込む奴があゐないんで、八萬ルーブリ以上の滞納があつたやうな始末さ。それで僕が一年の間に全部改革して、七十パーセント以上も収入を増してやつたんだ。何うだい、僕の腕前は！」と、彼は得々として言つた。

ネフリードフは、このシエンボークが自分の財産をすっかり無くしてしまつてから、借金に首が廻らなくなつてゐたと聞いてゐた。ところが、運よく或る特別の世話で、自分の財産を浪費した或る金満家の老人の後見を託されたと云ふのだから、今は確かにこの後見で飯を食つてゐるのに相違なかつた。

『この男の感情を害はないで、うまく逃げる工夫は無いものかしら？』と、ネフリードフは考へながら、チックで塗りかためた口髭を生やした、てかくした蘇ら顔を見たり、また何處か旨い物を食べさせる所は無いかと言つたり、自分の後見の手際を自慢したりしてゐる、無邪氣な友のお喋りに耳を傾けたりした。

「おい君、何處で食事をしよう？」

「ほんたうに、僕はさうしちやみられないんだよ。」と、ネフリュードフは時計を見ながら言った。

「そんならしようがない。では今晚競馬があるんだが、君行くかね？」

「いや、僕は行けさうもない。」

「來給へよ。僕は今自分の馬は持つてゐないが、グリーンシヤの馬に賭けるんだ。君は、彼奴の素敵な馬を知つてるだらう？ やつて來給へよ、一緒に夕飯でも食べようぢやないか？」

「僕は夕飯も食べてゐる暇が無いんだよ。」と微笑みながらネフリュードフは言った。

「一體どうしたつて言ふんだね？ 君は今何處へ行くんだ。何なら馬車で送りとどけてやらうか？」

「僕は辯護士のところへ行くんだ。すぐその角のところさうなんだ。」と、ネフリュードフは言った。

「さういへば、君は監獄で何かやつてゐるさうぢやないか？ 囚徒の世話人にでもなつたのかね？ コルチャーギン家の人達が僕にさう言つてゐたつけ。」と笑ひながら、シエンポークは言った。「コルチャーギンの人たちは、もう引越してしまつたよ。一體、どんなことだね？ 僕に話したまへ。」

「うむ、さうだよ。それは本當だよ。」と、ネフリュードフは言った。「しかし、こんな往來で話も出来ないぢやないか。」

「うむ、それもさうだ。君は前から變り者だつたからな。ぢやア競馬に來るだらうね？」

「いや、行けない、又行く氣もしないね。だが君、どうか氣を悪くしないでくれ給へ。」

「氣を悪くするなつて、そんなことがあるものか！ 君は何處に住んでゐるんだね？」と彼は訊ねたが、急にその顔は眞面目臭くなつて、眼を据え、眉を釣り上げた。彼は確かに何か思ひ出さうとしたに違ひない。その時ネフリュードフは彼の顔に、居酒屋の窓で彼を驚かした所の、眉の釣り上つた、唇の尖つた人間と、そつくりな間の抜けた表情があるのに氣がついた。

「なんて寒いんだらう、君？」

「ほんたうにね。」

「買つた物は持つて來たかね？」と、シエンポークは馭者に向つて言った。

「ぢや、失敬しよう、君に逢つて本當に嬉しかつた。」と、シエンポークは言ひ乍ら、堅くネフリュードフの手を握つて、馬車の上に飛び乗つた。そして新調の白い羚羊の皮の手袋

をはめた、大きな手を、てか／＼した顔の前で振りながら、例によつてそのいやに白い歯を出して笑つた。

『自分もあんな風だつたのかしら？』と、ネフリュードフは辯護士の家へ歩みを続けながら考へた。『さうだ、自分はまるつきりあんな風でなかつたとしても、あんな風にならうと思つてゐたんだ。そして一生あんな調子に世を渡るつもりでゐたんだ。』

一

辯護士は順番に構はずにネフリュードフを通して。そして直ぐにメニシーフ事件に關する書類に眼を通してから、判決の理由の無いのにひどく憤慨して、語り出した。

「これは怪しからん事件です。」と、辯護士は言つた。「保険金が欲しさに、家主自身が放火したといふことは殆んど疑ふ餘地がありません。だが問題は、メニシーフの犯罪が全然證明されないことです。何等の證據も舉つてみないんです。これは豫審判事が變に力辯を入れて罪にしてつたのと副検事の不注意の結果です。たゞこの一件が郡の裁判所ではなくて、こゝで取扱はれることにでもなれば、私は無罪放免になることを請ひます。が、報酬は全然頂戴いたしません。それから次の件は——フォードシヤ・ピリユ

コフ名義の陛下への請願でしたが、これは書き上げて置きました。もしペテルブルグへお出でなら、これをお持ちになつて御自分でお渡しになり、嘆願されたがよいでせう。でないといふ、一回の審問だけで葬られて了ひますから。それであなたは請願委員會の有力な人々のところにまで手を廻すやうにした方がいゝです。では、御依頼の件はこれだけでしたか？」

「いえ、もう一つ私に手紙で言つてよこした事件が……」
「あなたはまるで漏斗か瓶の首にでもなつたやうですね。監獄内のすべての不平があなたを通して流れ出してくるんですから。」と、辯護士は笑ひながら言つた。「餘りに多過ぎますよ、終ひにはどうにも動きがとれなくなりませう。」

「いや、實際こんどのは驚くべき事件です。」と、ネフリュードフは言つて、事件の真相を簡単に物語つた。それはかうである。一人の讀み書きの出来る百姓が、村で聖書を読んで、自分の仲間とその講釋をして聞かせたところが、僧侶達はそれを犯罪であるとして、その筋へ訴へたのである。すると、副検事は取調べの上、起訴して豫審を請求し、豫審判事はこれを審理して有罪の決定を與へて裁判所の公判に附した……そして裁判所はこれに判決を與へたといふのであつた。

「無茶にも程があります。」と、ネフリユードフは言つた。
「果してこんなことがあり得べきことでせうか？」

「何にもそんなに驚くことは無いでせうか？」

「それが巡査なら命令によつて動くだけですから、まだしもですが、苟くも教養ある副検事が起訴するなんてことは……」

「そこです、そこに誤解があるのです。吾々は検事や裁判官を見ると、いつも或る何かの新しい自由思想を持つた人であるかのやうに考へる習慣がついてゐるのです。いつかは彼等もさうした人間であつた時代もありましたが、今は全くの別人ですよ。彼等も矢張り——普通の官吏で二十日といふ日(月給日)の事ばかり心配してゐるんです。彼等も月給を買つてゐる以上、餘計に貰ひたいのは山々なんです。彼等の主義なんてものは皆それによつて限定されてゐるのです。彼等は手當り次第、告訴し、裁判し、判決するでせう……」

「ですが、仲間と一緒に聖書を読んだ爲めにその人を流刑に處するなんていふ法律が實際あるものでせうか？」

「ありますとも。他の者達に聖書を読んで定つた解釋以外の解釋をしたとか、教會の解釋に批難を加へたとかいふことが證明されたら、その人は遠くへ流刑にやられるばかり

でなく、懲役に處せられるのです。公衆の前で正教を誹謗した者は、第百九十六條に依つて流刑に處せられることになつてゐるんです。」

「そんなことがあるんですか。」

「でも實際さうなんですから。」と辯護士は續けた。「私はいつも口癖のやうに裁判官達に言ふんですがね。あなた方を見ては感謝せずにはゐられませんがね。なぜなら、私にしろ、あなたにしろ、又その他の者にしろ、お互ひに監獄に入れられないでゐるのは、偏へに裁判官達のお情によるからです。實際吾々お互ひの公權を剝奪して、遠隔の地に送らうと思へば——雜作もないことですからね。」

「そんなふうに法律が、検事の勝手で、どうにでも適用することが出来るものなら、裁判の必要が、何處にあるんですか？」

辯護士は快活に聲を立て、笑つた。

「あなたは飛んでもない質問をされますね！ ネフリユードフさん、それは哲學ですよ。その問題に就いては議論の餘地は十分ありますよ。土曜日にお出でになりませんか。あなたはその日に私のところで學者、文學者、美術家などにお會ひになることが出来ますから。その時に抽象的な問題に就いて論じませう。」辯護士は特に「抽象的な問題」とい

ふ言葉に皮肉な力を入れて言った。「家内とはお近づきでしたね？是非お出で下さい。」

「有難う、何とか都合するやうにしませう。」と、ネフリュードフは、自分がいゝ加減なことを言つてゐることや、若し都合するとすれば、それは單に辯護士の處に晩に集る學者や文學者や美術家の仲間には交らないやうに都合するのであることを知りつゝ答へた。

もし裁判官達が自分勝手に法律の適用を決定することが出来るるとすれば、裁判の意義がないといつたネフリュードフの言葉に對して、辯護士が答へた嘲笑や、『哲學』とか『抽象的な問題』とかいふ言葉を發音した時の口調によつて、ネフリュードフは自分と辯護士とは、恐らく又この辯護士の友達仲間とも、萬事に對して全然異つた考へを持つてゐるだらうと思つた。そしてネフリュードフは今日シンボータとの間に見たやうに、自分が舊友達と遠く隔つてゐる事を感じたが、それよりもこの辯護士やその仲間の人々とはもつと大きな距離のあることを痛感したのであつた。

二二

監獄までは大分遠かつたし、それにもう時間も遅かつたので、ネフリュードフは辻馬車を雇つて、監獄へ行つた。中

年配の伶俐らしい、人の好きさうな顔付をした馭者は、とある街道にさしかゝると、ネフリュードフの方を振向きながら、建築中の宏壯な家を指さした。

「御覽なせえ、大した普請ぢやござえやせんかー」と、さも自分がいくらかその建物の關係者でもあるかのやうに、鼻にかけて言つた。

實際、建物は宏壯なもので、或る複雑な、奇抜な様式によつて建てられたのであつた。太い松丸太の、頑丈な材木を鐵で止めた足場で取圍まれて、更に薄板の圍で建物と往來とを仕切つてあつたが、足場の渡板の上を、石灰だらけになつた労働者達が、蟻のやうにあちこちと動いてゐた。煉瓦を積んでゐる者もあれば、石を切つてゐる者もあり、重たさうな桶や籠を、上の方へ運んで登つて行つたり、空箱や空籠を下の方へ持つて下りて來たりしてゐる者もあつた。

でつぶり肥つた、身装を綺麗に飾つた建築師らしい紳士は、足場の傍に立つて、上の方を指さしながら、畏つて聞いてゐるウラヂーミル縣出の請負師に何か喋つてゐた。請負師と建築師の立つてゐる側を通つて、空馬車や、荷を積んだ荷馬車が門を出たり入つたりしてゐた。

働いてゐる者も、働かしてゐる者も皆自分達の爲てゐる

ことは當然のことであるといふ風に信じきつてゐるのだ。ところが彼等の家では、お腹の大きな女房達は力に餘る仕事に骨身を碎き、襦袢を纏ぎ合して拵へた帽子を被つた、今にも餓死しさうな子供達は、老人のやうな姿びた笑顔をして、兩足をバタ／＼させてゐる。それなのに、彼等はこの莫迦げた、無用な建物を、自分達を掠め苦しめてゐる一人の、或る愚かしい無用な人間の爲めに建て、やらなければならぬのだ。」と、ネフリュードフは建物を眺めながら考へた。

「本當に莫迦げた建物だ。」と、ネフリュードフは自分の考へを聲に出して言つた。

「どうして莫迦げてゐやすだ。」と駁者は氣に障へたらしく反對した。「有難いこつてがすよ。お蔭でみんなが仕事に有りつけやすだ。莫迦げたこたアちつともねえでがさ。」

「だつて、あんな仕事は無駄ぢやないか。」

「どうして／＼必要でがすよ。」と、駁者は反對した。「普請があればこそ職人達が食べて行かれるでさ。」

ネフリュードフは黙つてゐた。車輪の喧しい音が聞き取れさうになかつたからであつた。監獄の近くへ來ると、駁者は鋪石道から砂利道へ馬車を外らしたので、話も容易に出来るやうになつた。すると駁者はまたネフリュードフに

向つて、

「今年田舎から都へ出てくる人間の多いこたあ——素暗らしいもんでござえやすよ。」と、駁者臺の上から體をひねりながら、鋸や斧を手に持つて、半外套を着、頭陀袋を背負つて、自分達の方へ進んで來る出稼ぎ百姓の一團を指さしながら言つた。

「いつもの年よりも、多いかね？」と、ネフリュードフは訊ねた。

「比べものになんねえでさ！ 近頃の殖え方ときちやア何處も一杯で、弱りきつてゐやすよ。雇ふ方では木片か何ぞのやうに放り出すくれえで、何處だつて一杯でさ。」

「どうしてさうなんだ？」

「人間が殖える一方で、手のつけやうがねえからでさ。」

「殖えるのは結構ぢやないか。どうして田舎にゐたがらないんだね？」

「田舎にゐたつて、することがねえんですもの、土地がてんでねえんですからな。」

ネフリュードフは痛いところに觸られたやうな感じがした。痛い個所を體に持つてゐる人は、いつも故意に其處を觸られるやうな氣のするものだが、それは觸られた時、特に鋭く痛さを感じるからに外ならない。

「何處も同じことなのかしら」と、ネフリエードフは考へて取者の村には幾許位みの土地があるか、取者自身はどれだけの土地を持つてゐるか、最後に、取者はどうして田舎を棄て、都に出て来たのかを、それからそれと訊き質した。「俺等の村では一人に一デシヤチナの土地と定つてゐやす。それで俺等は三人ですから三デシヤチナ持つてゐやすだ。」と、取者は乗り氣になつて喋り出した。「村には親父と弟がゐやすてな、も一人の弟は兵隊に行つてゐやすだよ。それで二人が百姓仕事をやつてゐやすが、仕事たつて何にもねえと同じこんで、弟の奴め、モスクワさ出たがつてゐやすだ。」

「土地を借りる譯には行かないのかね。」

「今時、誰が地所なんか貸してくれやすべえ。地主様達はみんな財産を無くしてしまひやすてな、土地は商人達の手にかゝつて始末されて了ひやすしただ。——商人達は自分の方で耕してゐやすで、誰も借りることあ出来ましねえだ。俺等んとこの地主はフランス人でござえやすして、先の地主様から買ったんですが、なか／＼貸すどころぢやありませんねえ——相談も何もあつたもんでねえでさ。」

「そのフランス人は、何者だね？」

「デニファーつてフランス人でござえやすが、旦那様は御存

知でござえやすべ。そのフランス人は、でけえ劇場の役者達の鬘をこしらへる男でさ、え、儲け仕事と見えやして、しこたまお金ができたでござえやすよ。それが俺等の女地主様の土地を残らず買ひ取りやすてな、今ぢや俺等の地主様でござえやすだ。俺等このフランス人の言ひなり放題になつてゐやすが、有難てえことにや、性根のえ、男でがす。たゞ女房のロシア女奴が、犬見てえな性質のわるい奴でがして、百姓達を虐めてばかりゐやすだ。ほんたうに困つた奴でさ！……さあ、もう監獄に來やした。どつちへ行きやせう。正門へ行きやすかな？ 通さねえかも知れねえでがすが。」

一三

ネフリエードフは正門の呼鈴を鳴らしながら、マースロワが今日どんな状態にあらうかといふ考へと、彼にとつてはマースロワのうちにも、また監獄にゐる他の囚人達のうちにも見出ださるゝ一種の暗い感じとに對して、妙に滅入るやうな心持と恐怖の念に打たれた。やがて中から出て來た看守にマースロワのことを訊ねると、看守はちよつと取調べた上で、彼女が病舎にゐることを告げた。で、ネフリエードフは其處へ行つた。受付にゐる、人の好きさうな老人は、

すぐに中の方へ通して、誰に面會を求めぬかを訊ねてから、小兒科病室の方へネフリュードフを案内した。

すると體ぢうに石炭酸の臭の染み込んだ若い醫員が、廊下に立つてゐるネフリュードフのところへ出て来て、何の用向で来たかを鹿爪らしく訊ねた。この醫員は囚徒達に對して出来るだけ寛大な態度を示してゐたので、その爲めにも監獄の役人や醫師長などゝ面白からぬ衝突ばかりしてゐた。彼はネフリュードフから何か規定外のことを要求されはしないかと氣遣つて、自分は何人に對しても例外なこととはしないといふことを見せようとして、殊更むつとした風を裝うた。

「こゝには女はゐません。こゝは小兒科の病室です。」と、彼は言つた。

「それは存じてゐます。でも、こゝには監獄からよこされて、看護婦の手傳ひをしてゐる女囚がある筈です。」

「さうです、こゝには二人ゐます。それで何か御用でもあるのですか？」

「私はその中のマースロワといふ女と近い關係のものですが。」と、ネフリュードフは言つた。「それでその女に會ひたいと思つてゐるんです。私はその女の事件に就いて、元老院に上訴する爲めにペテルブルグへ行かうと思つてゐま

すので、ちよつと面會してこれを渡したいのです。寫眞だけですよ。」と、ネフリュードフはポケットから封筒を抜き出した。「そんなことなら、雜作ないことです。」と、醫員は柔かく出はじめた。そして白いエプロンをかけた年寄の女に、看護婦のマースロワを呼んでくるように言ひつけた。

「あなたはこゝでお待ちになりますか、それとも應接室へおいでになりますか？」

「有難う。」と、ネフリュードフは言つて、自分に對する醫員の態度が變つて來たのを幸ひ、病舎内でのマースロワの評判はよいか、どうかを訊ねた。

「評判は悪くありません。以前の身分を考へて見ますと、今はよく働いてゐるやうに思はれます。」と醫員は答へた。

「ちよつと、マースロワが來ました。」

一つの扉が開いて、年寄りの看護婦が出て來ると、その後からマースロワが隨つて來た。彼女は縞の服の上に白いエプロンをかけて、髪を布片で包んでゐた。ネフリュードフを見ると、ばつと顔を赤くして、何うしようかとためらつてゐるかのやうに立止まつた。が、眉を擧げて眼を伏せながら廊下の眞中の細長い敷物の上を傳つて、早足でネフリュードフの方へやつて來た。彼女は握手しようとは考へてゐなかつたが、遅ればせに手を出して、以前よりも一層顔を赧

らめた。ネフリュードフは彼女が自分の情熱に驅られて怒つたのを詫びた、あの時以來マースロワに會はなかつた。それで彼は彼女が今も矢張りあの時と同じやうな態度であらうと豫期してゐた。ところが、今の彼女は、まるで別人のやうに變つて、その顔の表情にも何か新しい或ものがあつた。控へ目な、きまり悪るがつてゐるやうな、それでゐて、彼に對して悪意でも持つてゐるやうな表情であつた。ネフリュードフは醫員に言つたことゝ同じやうなことを彼女にも言つた。自分はベテルブルグへ行くのだと告げて、そしてパノワから持つて來た寫眞の入つてゐる封筒を手渡した。

「これは私がパノワで探し出したもので、随分古い時の寫眞だよ。お前が屹度喜ぶだらうと思つて持つて來たんだから、取つて置いてくれ。」

彼女は、怪訝さうに黒い眉を上げて、何んの爲めにそんな事をするかを問ふやうに斜視の眼で彼を見たが、やがて黙つて封筒を受取つて、それをエプロンの奥に納ひ込んだ。「私はパノワまでお前の伯母さんに會つて來たよ。」と、ネフリュードフは言つた。

「お會ひになつて？」と、彼女は冷かに言つた。

「此處は好いかね？」と、ネフリュードフは訊ねた、

「えゝ、結構ですわ。」と、彼女は答へた。

「辛くはないかね？」

「いゝえ別に。まだ私、慣れませんけど。」

「それは何より結構だ。兎に角彼處にゐるよりや好いさ。」

「彼處つて、何處？」彼女はかう言つて顔を赧らめた。

「監房のことさ。」と、ネフリュードフは早口に言つた。

「どうして好いんですの？」と、彼女は訊ねた。

「此處ぢや周囲の人間が好いからさ。彼處に居るやうな人間はゐないよ。」

「彼處にだつて好い人が澤山ゐましたわ。」と、彼女は言つた。

「メニシヨワの一件も奔走して見たよ。どうやら放免になりさうだ。」と、ネフリュードフは言つた。

「屹度神様のお救ひがありますわ。あんな好いお婆さんですもの。」と、彼女は婆さんのことをまたもや賞めて、心持ち微笑んだ。

「私は今日ベテルブルグに出發つつもりだよ。お前の再審も直き始まるだらうが、判決が取消しになると好いがね。」

「取消しにならうとなるまいと、今になつては同じことですわ。」と、彼女は言つた。

「どうしてだ？ 今になつてとは？」

「えゝ、それあね。」と、彼女は物問ひだけに彼の顔をチラ

と見た。

ネフリエードフはその言葉と今の眼付とを見て、自分から
からの決心を變へないでゐるか、それとも彼女が拒絶した
ので自分が決心を蹶へしたのではないか、それを彼女は知
りたがつてゐるのだな、といふ風に取つた。

「お前にとつて同じことだといふのは、どうも腑に落ちな
いね。」と、彼は言つた。「私に取つてこそ、お前が放免にな
つてもならなくても、實際同じ事なんだよ。何方へ轉んだ
つて、お前に言つといた通り、實行する決心なんだから。」
と、彼はキツバリ言つた。

彼女は顔をあげて、黒い斜視の眼でじつと彼の顔を覗め
たり、視線を外したりしたが、彼女の顔は喜ばしさに輝い
てゐた。けれどもその眼の語つてゐることゝは似ても似つ
かぬ事を口では言つてゐた。

「その事なら無駄でございますわ。」と、彼女は言つた。

「私はね、お前に分つて欲しいから言ふんだよ。」

「その事なら残らずお伺ひしました。この上、仰しやるこ
とはもうありませんわ。」ともすれば、洩れよとする微笑
を、無理に押しかくしながら、彼女はかう言つた。

病室の方で騒々しい音がして、子供の泣聲が聞えて來た。
「私を呼んでゐるらしいわ。」と、彼女はそはくして邊り

を見廻した。

「ぢや、これでお別れにしよう。」と、彼は言つた。

彼女は、彼が差し延べた手にわざと氣つかない振りを裝
うて握手もせず、クルリと身を返して、嬉しさを無理に押
しかくしながら、廊下の敷物を傳つて、急ぎ足で行つてし
まつた。

「何うした譯だらう？ 何を一體考へてゐるんだらう？

何を感じてゐるのかしら？ 私を試す氣なのか、それとも
心からどうしても許さない氣だらうか？ 自分で考へてゐ
ることや、感じてゐることを口に言ひ出せないのか、言ひ
たくないのか？ 氣持は幾らか和らいだのか、それとも餘
計にこじれて了つたのか知ら？」と、彼は自分に訊いて見
たが、自分でもハツキリした答へが出来なかつた。唯一つ彼
に分つてゐることは——彼女が變つて來たといふことであ
る。實際彼女に取つては容易ならぬ心の變化が起つた。こ
の變化のお蔭で、彼は彼女と結びついたばかりでなく、彼
女をかくまで變化させた。「そのもの（指す）とも亦結びつい
た。この結合のために、彼は喜びに胸を躍らして有頂天に
なつたのである。

子供用の寢臺が八つ並んでゐる病室へ歸ると、マースロ
ワは看護婦の言ひつけで寢臺を一つく整頓し始めたが、

餘り體を伸ばし過ぎたので、前へのめつて危く轉ぶところであつた。頸に繻帶してゐる襦袢りかけた子供がそれを見て噴き出した。するとマースロワも、怵へられなくなつて、傍の寢臺に腰を下しながら、他の人までも釣り込むやうな聲を立て、笑ひ出したので、子供達も一緒にきやつきや笑ひ出した。それで看護婦が腹を立て、彼女に怒鳴りつけた。「何をゲラ／＼笑ふんだね？ 今迄ゐた處とは場所が違ふよ。さつさと食べ物でも取つておいで。」

マースロワは黙り込んで、食器を手にすると、言はれた通り行かうとしたが、笑つては不可ないと叱られた繻帶の子供と眼を見合はせて、笑つても忍び笑ひをした。その時からマースロワは、自分獨りになると、日に何遍となく封筒から寫眞を一寸引き出しては倦かず眺めた。仕事が終へて晩方になると、もう一人の看護婦と一緒の寢室に充てられてゐる部屋に獨り残つて、封筒から寫眞を引き出して、暫らくは身動きもせず、ネフリュードフや自分やネフリュードフの伯母達の顔、着物、はては背景になつてゐるヴェランダや、庭の繁みなどを、懐しさうな眼付で、一つ／＼細かに見入つた。もう色がぼやけて黄色くなつた寫眞をかうして凝と見つめてゐると、殊に自分のまだ若かつた時の、額の捲髪に取りまかれてゐる美しい顔が、いつまでも見倦き

なかつた。餘りうつとりと餘念なく見入つてゐたので、朋輩の看護婦がその部屋に入つて来るのが分らないほどであつた。

「それ、一體何なの？ あの方が置いて行つたの？」と、肥つた、人の好い看護婦は寫眞を覗きながら訊ねた。「これあんたぢやないでせう？」

「あたしで無くて誰なんですか！」と、微笑んで友達顔を見ながらマースロワは言つた。

「ぢや、この人は？ あの方？ さう。ぢや、そつちの人はあの方のお母さんなの？」

「伯母さんよ。だけどこれが私だつてえことを何うして分らなかつたの？」と、マースロワは訊ねた。

「分るもんですか！ 何うしたつて分りやしないわ。まるで顔が違つちやつてるんだもの。大方十年も前の寫眞なんでせう。」

「十年どころか、一生涯も昔のことだわ。」と、マースロワは言つたが、過ぎ去つた昔のことがまぎ／＼と思ひ出され、彼女の顔は俄かに曇つて、眉の間に深い皺が刻まれた。

「何うしたの？ あんたは随分氣樂に暮して來たぢやないの。」

「えゝ氣樂に。」と、マースロワは鸚鵡返しに言つたが、眼

を閉ちて頭をゆつくり振つた。「でも、懲役よりア悪かつたわ。」

「ま、何うしてさうなの？」

「何うしてつて、夜の八時から朝の四時まで打つ通して、しかもそれが毎晩なんだから。」

「ぢや何うしてそんな仕事、止めつちまはなかつたの？」

「それア誰だつて止めたいけど、止める譯には行かないんだよ。あ、こんな話したつて何うにもなりやしないわー」

「マースロワはかう叫んで飛び起きると寫眞を卓子の抽斗の中へ投げ込んで、込み上げて来る口惜し涙を無理に抑へながら廊下へ駆け出すなり、直ぐに扉をばたんと閉めた。彼女は寫眞を見てゐる中に、曾て空想してゐたことが實現されたかのやうな氣がして、あの時分の幸福だつた思ひ出や、彼と一緒になつてもう一度あんな幸福が返つて來ないものかと夢みてゐたのである。ところが、朋輩の言葉で彼女は現在の自分の有様や昔の姿をあり／＼と思ひ出したのであつた——あの時分はハツキリとは感じなかつたし、また強ひて眼を瞑つて考へないようにしてゐたあの泥沼のやうな生活の怖しさが、今更のやうに思ひ起されたのである。毎夜の怖しい有様が、今までになくまざ／＼と描き出された中にも、わけて謝肉祭の或る晩、彼女を請け出すと約束し

た學生を待つてゐた時のことがはつきりと思ひ浮んだ。酒のかゝつた、赤い絹の、肌も露はな衣服を着、亂れた髪に赤いリボンをかけて、丁度朝の二時近くであつたが、舞踊の合間に、客を外して廣間へ出て來た。そして瘦せて骨ばつた吹出物のある、ピアノの伴奏をする女の傍の椅子に、酔つぱらつて。すつかり疲れ切つたマースロワは、どつかと腰を下した。そして辛い自分の身の上を、彼女に訴へたのである。するとその相手の女も今の惨めな境遇に苦しめられてゐるから、何とかこの苦境を遁れたいと言つてゐるところへ、朋輩のクララもやつて來たので、今度は三人の間に、こんな生活は振りすてゝ了はうといふ相談が、その場で直ぐ決つて了つた。彼女達は、もう今晚はこれでお終ひだらうと思つて、逃げ支度に取りかゝると、突然酔つ拂つた客が、や／＼と騒ぎ出した。ヴァイオリン弾きがアリアを弾きはじめていたので、ピアノ伴奏者が四組舞踏曲の第一節の、浮々としたロシヤの小唄に調子を取つて、ピアノの鍵盤を叩いた。第一節が終ると、燕尾服を着て、白いネクタイをつけた小柄な男が、酔つ拂つて、酒臭い息を吹いては吃逆しながらマースロワを抱きかゝへた。と、もう一人の肥つた、鬚のある、やはり燕尾服の男は（彼等は何處かの舞踏會の歸りであつた。）クララを抱へ込んだ。そしてみん

なはグル／＼廻つたり、踊つたり、喚いたり、飲んだりした……。それから一年経ち、二年経ち、三年経つてしまつた。その間どうして生活を變へなかつたのだらう！ かうなつたのも、元を糺せば、みんなあの人のお蔭だ。

かう思ふと、突然彼に對する昔の怨みが燃え上つて来て、彼を罵り責めてやりたくなつた。今日あの機會に、もう一度昔のことを繰返して、あなたのなさることはちやんと見抜いてみますから、仰しやる通りにはなりませんよ、たとへ體は自由にされたことがあつても、心まで自由にはさせませんよ、あなたが御自分の寛大な愛を示す道具に私を使ふなんてことは眞平ですと、何うして言つてやらなかつたらうかと彼女は口惜しがつた。するとまた自分の身を哀れんだり男を罵つたりするその苦しい氣分がとても堪らなくなつて、酒でも飲んで氣を紛らしたくなつた。これが監獄にでもゐるのであつたら、禁酒の誓ひを破つたかも知れない。しかし此處では、彼女にしよつちゆう言ひ寄つて來て、すつかり持て餘してゐる、あの助手にでも頼まなければ、酒を手に入れることは出来なかつた。男との關係ではもう／＼彼女は懲り抜いてゐた。廊下の腰掛に一寸腰を下してゐた彼女は、自分達の小さな部屋へ歸ると、明輩が何を訊ねても返事もせず、荒び果てた自分の生涯を悲しんで、

少時の間は泣き止まなかつた。

一四

ネフリードフがペテルブルグへ出掛けて行つてやらなければならぬ仕事は四つあつた。マースロワに關する元老院への上訴、フォードシヤ・ピリニコワの件に關して委員會へ歎願書を提出すること、ウエーラ・ポゴドゥホーフスカヤに依頼された件で、シュエストワの放免を憲兵隊本部又は第三課(治安の取締に當る役所)に運動すること及び要塞に監禁されてゐる息子と母親の面會許可の件——それに就いては矢張りウエーラ・ポゴトホーフスカヤから彼は手紙を預つて來てゐる——これは一つに纏めて第三の用件にして置いた。第四は聖書を讀んで議論したといふ咎で、家族から引き放されてカフカズへ流刑にされた異宗徒に關する件であつた。この件に就いては、その關係者よりも寧ろ自分から進んでやつて見たいといふ氣があつて、出来るだけ事件を明らかにしてやる積りであつた。

ネフリードフは最近マースレンニコフを訪ねて以來、わけて田舎へ行つてからといふもの、今まで自分が屬してゐた社會に對して、心から嫉妬の情を抱くやうになつた。それは彼の考へによると、この社會は少數者の安逸と享樂と

を保障する爲めに、何百萬といふ人々が受けてゐる苦痛を努めて押し隠してゐる。そしてこの社會の人々はその苦痛を見ようともしないし、見ることも出来ないもので、従つて自分達の生活が如何に残忍で罪惡に満ちたものであるかといふことを知らないからである。ネフリユードフはこの社會の人達と交はると、不快と自責の念を抱かない譯には何うしても行かなかつた。けれども矢張り情性や、過去の生活や、親戚關係や、友人關係に引きずられて、この社會と離れ切れなかつた。今、彼の念頭にあることをやり遂げようといふ重要な用件、つまり彼が力になつてやりたいマースロワやその他の苦しんでゐる人々を助けてやるためには、少しも尊敬出来ないどころか、寧ろ嫌惡と侮蔑の情を屢屢起させるやうなこの社會の人達に、どうしても依頼して、その助けを借りなければならなかつた。

ネフリユードフはペテルブルグに着いて、母方の伯母に當る、前國務大臣の妻であるチャールスカヤ伯爵夫人の家に逗留するやうになると、今ではまったく没交渉になつてゐた貴族社會の眞唯中に何時の間にか飛び込んでゐた。いかにも不愉快なことではあつたが、何とも仕方がなかつた。伯母の處を差措いて、ホテルにでも泊つたら、伯母の感情を害したに違ひなかつた。そればかりでなく、伯母は時めい

てゐる人々と交際があるので、これから奔走しようと思論んでゐる仕事に、伯母の手を借りなければならなかつた。「ねえ、いろ／＼お前の噂を聞きますが、一體何うしたのかい？ 随分變つてるぢやないの。」エカテリーナ・イワーノワナ伯爵夫人は彼が到着するとすぐ、珊瑚を持つて來て勸めながらかう言つた。「ホワード(有名な監獄改革者)を氣取つた譯なんだね。罪人を助けたり、あちこちの監獄を見廻つて悪いところを改良したりする氣なんだね。」

「いゝえ、そんな氣なんぞありませんよ。」

「だつて好いことぢやないか。だけど、何か小説的な經緯があるといふ話だね。さ、それを聞かしてお呉れ。」

ネフリユードフは、マースロワとの關係を有體に打明け

「さう／＼、やつと思ひ出した。お前があゝの年寄りの伯母さんの許に行つてみた時分、可哀さうなエレン(ドフの母親)が私に話したことがあつたよ。あの人達はその娘をお前と一緒にする腹でゐたらしいよ。(エカテリーナ・イワーノワナ伯爵夫人はネフリユードフの父方の伯母をいつも小莫迦にしてゐた)……ぢや、その女つていふのはあの娘なのだね？

で、今でもやつぱり美しいかい？」

エカテリーナ・イワーノワナはもう六十の婆さんである

が、なか／＼丈夫で、快活で、元気があつて、話好きな人であつた。背も高く、でつぷりして、上唇には目につくぐらゐの黒い薄髭が生えてゐた。ネフリュードフはこの伯母が好きで、一緒に話してゐると、彼女の元氣と快活さに誘ひ込まれる癖が、子供の時分からつてゐた。

「いゝえ伯母さん。そんなことは皆昔のことです。たゞ私はあの女を救つてやりたいだけの話ですよ。だつて、あの女は何の咎もないのに有罪にされて了つたんぢやありませんか。あれがかうなつたのも原因は私からなんです。だから私は自分の力の及ぶ限り、何うしてもあの女のために盡してやらなけりやならないと思つてゐます。」

「だつて、お前はその女と結婚したがつてゐるつて話ぢやないのかね？」

「えゝ、それあ結婚したいとは思つてますけどね、女の方が承知しないんです。」

エカテリーナ・イワーノウナは如何にも呆れ果てたといふ風に、眉をあげ、眼を丸くして、黙つて甥の顔を見てゐたが、不意に顔の表情が變つて満足さうな氣色を浮べた。

「さう、ぢやその女はお前よりか餘程精巧だね。随分お前はお莫迦さんね！ 本氣で結婚する氣かね？」

「無論ですとも。」

「あんなふしだらなことをして來た女と？」

「だからですよ。あゝなつたのはみんな私のせゐです。」

「まあほんとに驚いたお莫迦さんだね。」と、伯母は笑みを湛へながら言つた。「途方もないお莫迦さんだよ。でもね、お前がこんなお莫迦さんだからこそ私はお前が大好きなんだよ。」と、彼女は特にこの『お莫迦さん』といふ言葉が氣に入つてゐるらしく幾度か繰り返したが、その度に彼女の眼は確かに甥の理智の通つた道德的な立場を呑み込んでゐることを語つてゐた。「まあお聞きよ、丁度好いことがあるから。」と、彼女は言葉を續けた。「アーリンといふ方のところに、それは吃驚するやうなマグダレナの家(隠業娼婦係 隠所のこま)といふのがあつて、私も一度行つて見たが、其處に入つてゐる女と言つたらそれは嫌な女ばかりでね、歸つてから私は體をすつかり洗つた位みだつたよ。だけどアーリンは一身をその仕事に捧げてゐるんだよ。で、お前もその、自分の女を其處へ預けるやうにしたら何うだね。あゝいふ女を矯正するにはアーリンに限るよ。」

「ですけど彼女おれは徒刑の判決を受けてるんぢやありませんか。だから私はこの判決の取消し運動に出掛けて來たんですよ。お莫迦さんにお頼みしたい用件の一つはそれなんです。」

「おや、さうかい！ 何處へ運動しようと言ふんだね？」

「元老院にです。」

「元老院？ さうく、元老院には従兄弟のレウーシカがある筈だが。ただ彼は賞勳局の方だよ。さあ、私はその方の係りは誰も知らないね。みんなドイツ人だからロシア人だから分らない人達ばかりだよ。ゲエだとか、フェだとか、デーだとか——そんな頭字がついてゐるよ。さうかと思ふと、イワーノフだとか、セミーノフだとか、ニキーチンだとか、または、イワネンコとか、シモネンコとか、ニキーチエンコとか、變挺な名前の人ばかりだよ。ま、何でもいだから良人に話してあげよう。良人ならよく知つてゐるから。どんな方面の人でも知合ひなんだからね、話してあげよう。だけど詳しいことはお前から話すがいゝよ。私だと分らないと言ふからね。私のいふことは何もかも分らないくで押し通すんだもの、お定り文句だよ。他の方には分るのに良人にだけは分らないのだよ。」

この時、半ズボンの給仕が、銀の盆に、手紙を載せて來た。

「ほら丁度アーリンからだよ。都合よくお前もキゼウエツテルさんのお話が聞けますわ。」

「誰です——キゼウエツテルつて？」

「キゼウエツテルさんかえ？ 今にお出でになるよ。さうし

たらどんな人だか分るよ。あの人の説教を聞くと、どんな極悪人でも平伏して、泣いて懺悔するんだから。」

エカテリーナ・イワーノウナ伯爵夫人は、不思議なことには、その性格には不似合なやうだが、キリスト教の本質は贖罪に對する信仰にあるといふ教義の味方であつた。で、その頃流行つてゐたこの教義の説教にはよく顔を出したばかりでなく、自分の家にも信者達を集めたりした。この教義では儀式や聖像や聖餐式を排してゐたのであるが、エカテリーナ・イワーノウナは自分の家の部屋々々には勿論、自分の寢臺の上にも聖像を懸けてゐた。それでゐながら自分では何等の矛盾も感じないで、教會で規定されたことは一切守つてゐた。

「だからお前のマグダレナ(淫賣婦)もあの方のお話を聞くといゝよ、屹度心を入れかへるだらうから。」と、伯爵夫人は言つた。だけど晩にはお前は何うしても家にゐて貰はなけりやなりません。さうしたらあの方のお話が聞けますよ。それはほんとに偉い人だよ。」

「どうも餘り氣乗りがしませんね、伯母さん！」

「いゝえ、屹度氣に向きますよ。だから間違ひなしに歸つて来るんですよ。それから、何か、他に頼むことはないのかえ。どうせ序でだから。」

「も一つは、要塞監獄に用があるんです。」

「要塞監獄に？　ぢや、クリグスムート男爵に手紙をつけてあげよう。あの方はなか／＼羽振がいゝんだよ。お前のことだつて知つてるかも知れないわ、お前のお父さんと仲よしだつたからね。精靈説に凝つてるのが少々變だけど、まあそんなことはどうでもいゝよ。それア善い人なんだからね。そして用つて何だね？」

「要塞監獄に入つてゐる息子に、面會したいといふ母親があるの、それを許可して貰はうと思ふんです。だけど、これはクリグスムート男爵の管轄でなく、チエルヴィヤンスキーの権限にあるつて話ですが。」

「チエルヴィヤンスキーは私、大嫌ひだけど、マリエットの配偶だから、マリエットに話してあげよう。あの女は私の爲めなら何とかして呉れるだらうから。本當に惻巧な女だからね。」

「それからもう一人、女のことゝ頼みたいと思ふんですが、それは、五六ヶ月も監獄に入れられてゐるんですがね、何の科だか誰にも分らないのです。」

「そんなことはないよ。何の科だか、當人が屹度知つてる筈です。あゝいふ女達は、何で捕まつたか、自分ではよく知つてますよ。あんな斷髮女共には當然の報いだよ。」

（新妻の女）

（は羅無主の女）

「當然の報いだか何うか知りませんが、あの女達は酷い目にあつてゐますよ。伯母さんはキリスト教徒で、聖書を信じておゐでの癖に、憐れみつてことを知りませんね……」

「それでいゝんだよ。別に差支へはないのだから。聖書は聖書、嫌ひなものは嫌ひなものさ。もし私が虚無黨員を好いてゐるやうな風をしたら、もつと悪いぢやないかね。殊に斷髮女の虚無黨員と來たら、私は我慢出来ないよ。」

「何が悪くて我慢出来ないんです？」

「三月一日（アレキサンドル二世）のことがあつてから、そんなことを訊くのはお前ばかりだよ。」

「ですが、その女達がみんな三月一日の事件に關係してゐる譯ぢやありませんまい。」

「どつちみち同じことだよ。自分達の關係のないことに要らないおせつかいをいしなくとも好いちやないか。女の出しやばる幕ぢやないよ。」

「そんなら、あのマリエットだつて厭い出しやばるつてえ話ぢやありませんか。」と、ネフリードフは言つた。

「マリエット？　マリエットはマリエットさ。あの女がどんな女だか神様が御存知だよ。ハルチュウブキナとかいふ女なんか、人を教へる氣だから堪らないね。」

「教へるんぢやありません。たゞ民衆を救はうとしてゐるんです。」

「あんな連中に言はれなくたつて、救はなけりやならない者と、さうでない者位は分り切つてゐますよ。」

「然し、一般民衆は惨めな状態にありますよ。私は田舎から歸つて間もないんですが、百姓達は最後の力まで出し切つて働いても、腹一杯食へることが出来ないのに、私達は怖ろしいほどの贅澤三昧に耽つてゐなければならぬ譯もないでせう。」と、ネフリエドフは人の好い伯母に引き込まれて、つい自分の思つてゐたことを隠さず言つて了つた。

「ぢや何かい。私にも働いて、それで何も食へないでゐるとお前は言ふのかい？」

「いゝえ。伯母さんが食へないでゐるなんて、そんなことを言ふもんですか。」ネフリエドフは思はず微笑んでかう答へた。「吾々人間は皆働いて、皆十分に食へて行けるやうになればいゝ、と言ふだけです。」

伯母は又もや眉を張り、眼を丸くして、物珍らしげに彼を贖めた。

「まあ、お前は殊な死に方はしないよ。」と、彼女は言つた。「それは又どうしてよす？」

丁度その時、背の高い、肩幅の廣い將軍が部屋の中へ入

つて來た。これは伯母の夫で、前國務大臣であつた。

「やア、ドミートリイカ、御機嫌よう！」彼はかう言つてネフリエドフに接吻させようと、剃り立ての頬をその方へ向けた。「何時此處へ着いたのか？」

彼は妻の額に黙つて接吻した。

「この人は飛んでもないことを言つてますよ。」と、エカテリーナ・イワノワナ伯爵夫人は夫の方へ向き直つた。「河へ行つて洗濯でもして、馬鈴薯ばかり食へるがいゝと言つてゐるんですよ。驚いたお莫迦さんです。だけど、何かあなたに頼みごとがあるさうですから、兎に角聞いてやつて下さいな。驚いたお莫迦さんだよ。」と、彼女は言ひ直した。

「時にあなたお聞きになつて？ カーメンスカヤさんはひどく落膽なさつて、御自分の生命が危ないとの話ですよ。」と、彼女は夫の方へ向いた。「行つておあげになると好いんですがねえ。」

「うむ、それア大變だな。」と、夫は言つた。

「では、今直ぐ行つていらつしやいます。私は手紙を書かなけりやなりませんから。」

ネフリエドフが應接間の隣りの部屋へ行きかけると、伯母が呼び止めた。

「では、マリエットに宛てゝ手紙を書きますか？」

「どうぞ。」

「斷髮女のごときは、お前が書き込むやうに餘白を残して置きますよ。これを持つて行つたら、マリエットさんのことですもの、早速配偶を説きつけて何とかして呉れますよ。お前、私を悪く思つちやいけないよ。お前の心配してゐるあの女虚無黨共は別に醜い目に遭はす氣なんかないけど、どうも蟲が好かないんだよ。あんな者は勝手にさせておくさ。では行つておいで！ だけど晩には間違ひなく戻つて来るんですよ。キゼウエッテルさんのお話がありますから。お前も一緒にお祈りするんですよ。お前が無理に反對さへしなかつたら、屹度利益になりますよ。エレン始め、お前達はこんなことでは世間より餘程遅れてゐるからね。では行つておいで。」

一五

イワン・ミハイロウィチ伯爵は前國務大臣で、自信の強い人であつた。

伯爵の自信といふのは、若い時分からさうであつたが、謂はゞ小鳥が蟲を啄んだり、翼や柔毛を體につけたり、空中を飛び廻つたりするのが、本来の性質であるやうに、彼も亦、高給で抱へた料理人の手で拵へられる贅澤な料理を

食べ、素晴しく着心地のいゝ高價な衣服を纏ひ、素敵に乗心地のいゝ駿馬に乗つて出かけるといふのが、持つて生れた性質なので、従つてこれ等のものは残らず彼のために用意されてゐなければならぬといふのであつた。そればかりではなく、種々な名目で國庫から金を引き出し、種々な勳章や、何かダイヤ入りの徽章などをどしどし殖やせば殖やす程、また高い地位の人々に會つて話す機會が多ければ多い程、善いことだと考へてゐた。

さういふ根本の信條に比べれば、他の事はすべて無意味で、興味のないものだ、イワン・ミハイロウィチ伯は考へてゐた。それ以外のことは何うでもいゝと思つてゐた。彼はこの信條通り、ペテルブルグで約四十年間生活し活動して來たが、四十年の終り目になつて、とうとう國務大臣の椅子に坐ることが出來たのである。

イワン・ミハイロウィチがこの位地に登ることの出來た主なる資格と言へばかうである。第一に公文書や法律の意味が分り、拙いながらも自分の手で書類を起草することが出來、文字の綴りを誤らずに書くことが出來たこと、第二に、必要とあれば、傲慢な態度ばかりでなく、殆ど近づき難い威嚴さへ極端に示すことが出來ると同時に、また場合によつては、野卑な態度も取ることが出來、それが御機嫌取の

やうな醜態にまで達することもあつた。第三には、道徳的にも政治的にも、主義節操といふものが少しもなく、必要な場合には誰とでも提携したり離反したりすることを平氣にやつた爲めであつた。かういふやうな行動をしながらも自分では體面を保ち、矛盾した風を人に示さないように努めてゐた。のみならず自分の行爲が道徳的であるか不道徳的であるか、また、ロシア帝國や全世界に大きな好影響を與へるか、大きな害毒を流すか、などいふ點に就いてはとんと平氣であつた。

彼が大臣になつた時、多くの知人や屬僚達は言ふまでもなく、一般の人々までが、いや彼自身ですら、非常に賢明な國家的人物だと信じてゐたのである。

けれども相當の時日が経つても、これぞといふ仕事をせず、何等の手腕も示さなかつた。そして、こゝでも生存競争の法則によつて、彼と同じやうに公文書を起草したり解釋したりすることを習ひ覺えたといふ以外に何の取り得もない、代表的な無定見の官吏共が彼の椅子を奪つて、彼は職を退かなければならなかつたので、初めて彼が賢明な人間どころか、寧ろ無知無教育で、^{自惚}だけ^が人後に落ちないのみで、その頭腦と來ては保守黨新聞の社説の程度に達するか達しないほどの人間だといふことが、すべての人に

分つて了つた。そして彼を斥けた無教育な^{自惚}の強い俗吏共と別に異つたところもない人間だといふことが、彼自身にすら分つた。けれどもそれからいつて毎年國庫から莫大な金を引き出したり、自分の大禮服に新しい勳章を飾り立てたりすることを止める氣色は少しもなかつた。その自信の前には誰も彼に反對しようとしなかつたので、恩給とか、内閣官廳の一員としての俸給とか、種々な會議や委員會の議長としての手當だとか、そんな名目で毎年國庫から數萬ルーブリを受取つてゐた。のみならず、これは彼も重く見てゐたのだが、毎年々々新しい綬章を肩やズボンに縫ひつたり、大禮服につける飾りリボンや七寶の星章を臆面もなく受け取つてゐた。それがためイワン・ミハイロウィチ伯爵は到る處に大きな手藝を持つてゐた。

イワン・ミハイロウィチ伯爵は受持官廳で當務者から報告でも聞くやうな風で、ネフリユードフの言ふことを聞いてゐたが、聞き終ると、二通の紹介狀を書いてやらうと言つた。その一通は元老院上訴部議員ウァーリフに宛てたものであつた。

「いろんな噂はあるが、立派な人物だよ。」と彼は言つた。「それには^や恩を受けてゐるから出来るだけのことはやつて呉れるよ。」

もう一通の方は請願委員會の有力者に宛てたものであつた。ネフリユードフがフォードシャピリユーコワの一件を話す時、彼は非常に興味を持つた。またネフリユードフが皇陛下に手紙を書いて請願するつもりだと言ふと、實際この事件は非常に同情すべき點があるから機會さへあつたら自分から話してもいいと言つた。然し確かな約束は出来なかつた。兎に角、型の通り請願書は差出して置いた方が、何れにしてもいいだらう。それで機會があつて、委員の内會議でも開かれたら、その時話して見ようと、彼は考へた。

伯爵からのこの二通と、伯爵からマリエットに宛てた手紙を受取ると、ネフリユードフは、早速それ／＼訪問に出掛け行つた。

先づ第一にマリエットの家を訪れた。ネフリユードフは彼女がまだ少女だつた時分から知つてゐたのである。彼女は或る貧乏貴族の娘で、その後官海游泳術に巧みな男に嫁入りしたのだが、その男の面白からぬ評判を彼も聞いてゐた。ネフリユードフは何時いつもさうだが、自分が尊敬もしてゐない人物のところへ物を頼みに行くのは嫌で辛かつた。さうした場合、心の中で反抗と不快を覺えて、何うしようかと迷ふのが例になつてゐた。頼まうか止してはうかと決め兼ねるのであつたが、大抵頼むことにするのであつた。それ

ばかりでなく、彼の方では仲間なかまとは最早考へてゐないが、向うではまだ昔の通りさう思つてゐる、といふやうなさうした連中に奔走を頼むことが、何か詐欺でも働かやうで、何時も心苦しかつた。そして又、今までに染み込んだ古い習慣の軌道へ入つて行く度ごとに、この仲間を支配してゐる輕薄と墮落とにわれ知らず捲込まれさうな感じがした。

このことは、もう伯爵のニカテリノ・イワーノワナの家で經驗したことで、今朝であつたが、彼は極めて眞面目なことに就いて話しながら、巫山ふざん戯た調子になつてゐたのであつた。

彼がしばらく足を踏み入れなかつたベテルブルグは、いつもの通り、肉體的には興奮させるが、道徳的には人を鈍らせるやうな印象を彼に與へた。兎に角すべてのものが清潔で、便利で、氣持よかつたが、取りわけ人間が道徳的な方面に無關心なので、その生活が如何にも氣樂さうに見受けられた。

綺麗で、小ざつぱりした、客あつかひの叮嚀な馬車に乗つて、同じやうに綺麗で小ざつぱりした、叮嚀な巡查の傍を通り、同じやうに綺麗で小ざつぱりして、水の撒まいてある道路を通り、同じやうに綺麗で小ざつぱりした家々を過ぎて、マリエットの住んでゐる家に着いた。

車寄せにはイギリス風の二頭立の馬車が控へ、頬の半分は鬚で包まれた、イギリス人めいた馭者が馭者服を着込んで、手に鞭を握つたまま、傲然と馭者臺に腰かけてゐた。

驚くほど美しい制服を着た門番が支關の扉を開けた。其處にはそれ以上美しい、金條入りの制服をつけて、綺麗に櫛を通した、頬鬚の家僕と、新しい綺麗な紋章入りの制服をつけた當番の傳令とが控へてゐた。

「將軍は今日は誰方にもお會ひになりません。奥様も御同様で、これから出掛けになられるところです。」

ネフリエドフは伯母からの手紙と名刺を出して、訪問帳の載せてある小卓子に近寄つた。そしてお會ひ出来なくていかにも残念だと書き残さうとした時、家僕は忙はしうに階段の下へ走り、門番は支關へ出て来て馭者へ『おい、宜いかね』と聲をかけた。傳令は直立不動の姿勢をして、氣輕に早足で階段から降りて来る、小柄で華奢な貴婦人に目禮した。

マリエットは羽のついた大きな帽子を被つて、黒い衣服の上に黒の夏外套を引かけ、やはり黒の手袋をはめて、顔はヴェールで蔽はれてゐた。

ネフリエドフの姿が眼に入ると、ヴェールをあげて、その輝かしい眼をした艶やかな顔を見せて、『おや！』と言ひ

たさうに彼を見た。

「まあ、ドミートリイ・イワーノウィチ公爵ぢやありませんか？」と、彼女は朗らかな、氣持のいい聲で呼び掛けた。

「まあ、ほんとにお珍らしい。」

「ほんとに私の名まで憶えてゐて下さつたんですか？」

「憶えてゐなくて何うしませう。妹と二人であなたのお噂をしてゐたことさへあつたんですもの。」と、彼女はフランス語で言つた。「随分あなたもお變りになりましたわね？」

「ああ、これから出掛けなけりやならないので、ほんとに残念ですわ！でも、ちよつとでもお上りになりませんか。」

と言つて、彼女は立止まつてためらつてゐたが、懸時計に眼を向けて、「いけないわ。これからカーメンスカヤさんのお家の告別式へ參るんですから。あの方、ほんとにお可哀さうですわ。」

「カーメンスカヤさんでどんな方です？」

「まあ御存じないんですか？……あの方の息子さんが決闘で逝くなられたんですよ。相手はボーゼンといふ人でね。

一人息子だつたのに。怖ろしいことですわ！お母様の力落しつたらありませんわ。」

「その事なら一寸聞いてゐます。」

「では、私行つて來ますわ。明日か今晚あたり、いらしつ

て下さいませんか。」と、彼女はさう言つて軽やかな急ぎ足で出口の方へ歩き出した。

「今晚はお伺ひ出来ません。」と、彼女について支關まで出ながら答へた。「實はあなたに一寸したお願ひがあつて上つた譯ですが。」と、支關の正面に横づけになつてゐる二頭の栗毛の馬を見ながら言つた。

「どんな御用ですの？」

「伯母からの手紙を持つて来てゐます。」と、大きな紋章の入つた小形の封筒を彼女に手渡しながら言つた。「これに詳しく書いてある筈です。」

「カテリーナ・イワーノワナさんは、私が良人の仕事にまで口を出してゐるやうにお思ひなんでせうが、それは違ひますわ。手出しするなどいふことは出来もしませんが、あまり好みませんの。ですけれど伯爵夫人やあなたのおためなら無論、何時でもこの例を破りますわ。どういふお話でございますの？」と、彼女は黒い手袋をはめた華奢な手でポケットの中を掻き廻しながら言つた。

「實は或る娘が要塞監獄に入れられてゐますが、何の科もない上に病氣になつてゐるんです。」

「で、その娘の名前は？」

「シューストワ……リディア・シューストワといふんです。そ

の手紙に書いてあります。」

「承知しました。出来るだけやつて見ませう。」と、彼女は言つた。そして泥除けに目が當つて、ニスのにら／＼光つてゐる、柔らかな敷物の敷いてある幌馬車に身軽く乗つてバラソルをひろげた。すると家僕が馭者臺に乗つて、馬車を出せと合圖した。馬車が揺ぎ始めたその瞬間、彼女はバラソルの先で軽く馭者の背を叩いたので、毛並のこまかな美事な栗毛の馬はきゆつと手綱を絞られて、その綺麗な首を反らせながら、細長い脚でたぢ／＼と踏み止まつた。

「今度どうぞお遊びにいらしつて下さいよ。御用なんかお持ちにならないでね。」と、彼女は言つて、人を牽きつける魅力があると自分でもよく知つてゐる持前の微笑を見せた。そして、さも芝居が終つて幕を下ろすといふ風に、ヴェールを下げた。「さ、お出し！」かう言つて彼女は再びバラソルで馭者をついた。

ネフリリードフは帽子をあげて會釋した。純血種の栗毛は鼻をく／＼鳴らしながら敷石の上に蹄の音を響々と立てて駆けた。馬車はたゞ時折道路の凸凹に躍りながら、新しい護謨輪を迅速に柔らかに這らせて行つた。

一六

マリエットと交はした微笑を思ひ出して、ネフリュードフは頭をふつた。

『やつと本心に立返つたと思つたら、危く元の生活に引き摺り込まれるところだつた。』

自分が少しも尊敬しない人々に取り入らなければならぬ場合、いつも起る心の矛盾と疑惑とを感じながら、かう思つた。出直すのは面倒だから今度は何方へ廻つたものだらうと考へたが、ネフリュードフは先づ元老院へ行くことにした。元老院では事務室の方へ通されたが、その壯麗な事務室には、非常に叮嚀な身装のいゝ官吏達が、大勢のて執務してゐた。

マースロワの上訴状は既に受理されて、伯父が紹介状を書いて呉れた元老院議官ウォーリフの方へ廻つてゐる筈だ、といふことをネフリュードフは官吏達から聞いた。

「元老會議は今週中に開かれる筈です。それでマースロワの事件は今度の會議に合ひますか何うか、ちよつと難かしいでせうね。けれども何か特別な御依頼でもありませんたら今週の會議、水曜日ですが、それに間に合ひますでせう。」と、二人の官吏が言つた。

種々と事件の詮議をしてゐる間、ネフリュードフは事務室に待つてゐたが、その時、また決闘で殺された若いカーメ

ンスキイの話を耳にした。彼はペテルブルグ中の評判になつてゐるこの話の詳しい経緯を此處で始めて聞いたのである。それは、數人の士官が或る小料理屋で牡蠣を食べ、例の如く鱈腹飲んでからのこと、一人の士官がカーメンスキイの所屬聯隊に就いて何やら罵倒を始めた。するとカーメンスキイはその男を嘔吐きと言ひ返したので、對手はそこで彼を毆打したのであつた。で、翌日決闘が行はれて、カーメンスキイは腹部にピストルの彈丸を受けて、二時間の後には死んでしまつた。相手の士官と介添人達は捕まつて營倉に入れられてゐるが、二週間も経つたら放免されるだらうとのことである。

元老院の事務室を出ると、ネフリュードフは請願委員會での利ける、ウォロウィヨフ男爵の處へ出掛けた。彼は立派な官舎に住まつてゐた。門番と家僕はネフリュードフに向つて、男爵は面會日の外には誰方にもお會ひにはならない、今日は陛下の御前に召され、明日も伺候される筈だと、素氣なく説明した。ネフリュードフは手紙を渡して呉れるように頼んで、元老院議官ウォーリフの家を指して出かけた。ウォーリフは丁度朝食を終へたばかりの所で、いつもの通り腹ごなしに葉巻を燻かしながら部屋の中を歩いてゐたが、ネフリュードフを通すやうに言つた。このウラヂーミ

ル・ワシリーエウイチ・ウオーリフは實際完全な人間であつた。で、周囲よりも高く止まつて、その高いところから他人々を見下してゐた。そしてこの特質を高く評價せずにはゐられなかつたといふのは、その特質のお蔭で自分が望んでゐた通りの輝やかしい地位に達することが出来たからである。例へば、結婚によつて、一年一萬八千ルーブリの収入のある財産を手に入れ、自分の努力で元老院議員になることが出来たのである。彼は自分を完全な人間だと思ひ込んでゐたばかりでなく、古武士のやうな清廉潔白の人物であると考へてゐた。この氣象から、一個人の賄賂を密かに受けとるやうなことは、一切しなかつた。しかし、政府からの命令なら、どんなことでも、奴隸的に遂行する代りに、報酬とか出張費とか旅費日當とか、あらゆる名目をつけて國庫に請求することを別段恥づかしいとも思つてゐなかつた。彼がポーランドの或る縣の知事をしてゐた時であつたが、その土地の人民達が、祖國を愛し、自分達の祖先の宗教を信じて、ロシアの宗教を信じないといふ理由で、何百人といふ罪科のない人民達を破滅させたり、悲境に陥れたり、監獄に打ち込んだり、流刑にしたりしたことに對しても別に恥づかしいことと思つてゐないどころか、高潔な、男らしい、愛國的な勳功だと考へてゐた。又、自分に

戀してゐる妻や義理の妹の財産を取上げるとも同様に恥づかしいと思はないばかりでなく、反對に、自分の一家を整理する上に最も賢明なやり方だと思つてゐた。

ウラヂーミル・ワシリーエウイチの家庭は、至つて平凡な妻と、義理の妹と（その妹の財産もやはり彼は賣り拂つてその金を自分の名義で銀行に預けてゐるのであるが）何時もおどくしてゐる不纏な娘だけであつた。その娘は忙しい日を送つてゐたが、最近、福音書を讀むのに興味を覺え、アーリンやエカテリーナ・イワーノワ伯爵夫人の家で催される集りなどに出席してゐた。

ウラヂーミル・ワシリーエウイチには息子が一人ゐたが一人の善い男で、十五の時から頸鞵を生やして、酒を飲み、放蕩を始め、二十になるまでそんな生活を續けてゐた——何處へ行つても學校は落第ばかりしてゐて、悪い仲間に入り込んで、借金を拵へては、父親の名を汚したといふので勘當された。一度は父親も息子のために二百三十ルーブリの借金を支拂つてやり、二度目には六百ルーブリも拂つてやつたが、この二度目の時は、もしこれで身持が直らなければ、本當に勘當して親子の縁を切るからさう思へと言ひ渡したが、息子は身持が直るところか、またもや千ルーブリの借金を拵へて了ひ、その上こんな家にゐると窮屈で堪

らないなど、父に向つて逆らつたのである。そこでウラヂ
ーミル・ウシリーエウィチは、何處へでも好きな處へ勝手に
出て行くがいゝ、今日限り親でも子でもないからと言ひ渡
した。この時からウラヂーミル・ウシリーエウィチは、さも
自分には男の子けゐないやうな風をしてゐたし、家の者も
息子の事を口にしよつとしない者がなかつた。そして、ウラ
ヂーミル・ウシリーエウィチは自分の執つた手段が家庭生活
として一番良いやり方であつたと確信してゐるのである。

ウオーリフは愛想のいゝ、けれども幾分蔑むやうな微笑
を浮べながら——これは彼のよくやる態度で、つまり萬人
に立勝つた人間であるといふ自覺を殊更に表はしてゐる譯
である——書齋の中を歩いてゐるのをやめて、ネフリュード
フに挨拶をして、それから手紙を讀んだ。

「どうぞお掛け下さい。ところで甚だ失禮ですが、歩きな
がらお相手するのを許して下さい。」と彼は、上衣のポケッ
トに両手を入れて、きちんと體裁よく整へてある大きな書
齋の中を、軽い柔らかな歩調で歩きながら言つた。「今後は
何分お心易くお願ひします。で、イワン・ミハイロウィチ伯
の御依頼は喜んで盡力致します。」と、灰を落さないように
注意深く葉巻を口から離しては、香氣の高い青色の煙を吐
き出して言つた。

「實は成る可く早く處理して戴くようにお願ひしたいので
すが。と申しますのは、若し被告がシベリヤへやられるこ
とになりましたら、少し早目に出掛けたいと思ひますの
で。」と、ネフリュードフは言つた。

「成程、承知しました。ニージュニイ出帆の一番汽船に間に
合ひましたら好い譯ですな。分つてゐます。」相手が言はう
とすることを、言はない先からすつかり分つてゐたウオー
リフは例の勿體ぶつた微笑を浮べながら言つた。「で、その
囚人は何と申しましたかな？」

「マースロワ……」
ウオーリフは卓子に近づいて、他のものと一緒に綴込み
になつてゐる書類を見た。

「あゝ成程、うむ、マースロワ。承知しました。他の者とも相
談して見ませう。水曜日はこの事件も審議されるでせう。」

「では、辯護士に電報を打つてもいいでせうか？」

「辯護士？ 何のためですか？ 尤もそれは御隨意ですけれ
ど。」

「上訴の理由が薄弱かも知れませんが。」と、ネフリュー
ドフは言つた。「然しこの事件に對する宣告は、一寸した誤
解から來てゐることは明白です。」

「成程、さうかも知れませんが。然し元老院は判決の原因に

まで廻ることは出来ませんよ。」と、ウォーリフは葉巻の灰を眺めながら言つた。「元老院はたゞ法律の適用が正しいか、法文の解釋が間違つてゐないかを調査するだけの機關です。」

「でも、この事件は例外だと思ひますが。」

「存じてゐます。存じてゐます。元老院へ廻る事件はみんな例外です。然し吾々はやるだけのことをやればよいのですからな。まあ、それだけのことですよ。」葉巻の灰はまだ落ちないでゐたが、もう裂目が出来て今にも落ちさうである。「あなたはペテルブルグへ滅多においでなさらないですか？」灰が落ちないように葉巻を支へながら、かう訊ねた。それでも灰が今にも落ちさうになつて來たので、ウォーリフは用心深く灰皿へ持つて行つて落とした。「時にカーメンスキイの事件は大變ですな。」彼は言つた。「立派な若い男を、而も獨り息子と來てゐる、取りわけ母親の身になつたら堪りますまいて。」ペテルブルグ中の人が話してゐる通りのカーメンスキイの噂をそのまゝ繰返しながら彼は言つた。

それからカテリーナ・イワノワナ伯爵夫人の噂や、新しい教義を熱心に彼女が信じてゐることなどの話が一寸出たが、ウラヂーミル・ワシーリエウイチは別に賞めも貶しもしなかつた。彼のやうな完全無缺な人間に取つてそんな教義

は別段用がなかつたのである。彼はベルを鳴らした。

ネフリユードフは會釋して別れを告げた。

「御都合がよろしかつたら、晚餐にでもいらつしやいませんか。」と、ウォーリフは手を差出しながら言つた。「水曜日でも構ひませんよ。さうしたら、その時ははつきりした御返事が出来るでせうから。」

時間はもう晚かつた。で、ネフリユードフは家へ、と言つても伯母の許へ歸つて行つた。

一七

カテリーナ・イワノワナ伯爵夫人の家では七時半に晚餐會が始まつたが、その晚餐の方式はネフリユードフに取つては目新しいものであつた。給仕が食卓に皿を配つて了ふと、後は各自思ひ／＼に食事するのであつた。男達は婦人達に少しも手をおろさせないで、元氣よく婦人達の世話を焼きながら、その間に自分達も食べたり飲んだりしなければならなかつた。一と皿食べ終ると、夫人は食卓に仕掛けてある電鈴の鈕を押した。すると給仕が靜かに出て來て敏速に空の皿を片づけて了ふ。と、すぐ又食器を變へて次の料理を運ぶといふ風であつた。料理はなか／＼吟味されたもので、酒も同様であつた。フランスのゴック頭は、白

服の助手二人に指圖しながら、廣い明るい臺所で働いてゐた。食卓についてゐるのは六人で、つまり、伯爵と伯爵夫人と、その息子の、食卓に肘をつけてゐる無作法な近衛士官と、それにネフリュードフとフランス人の女教師と、田舎から上つて來た領地の管理人とであつた。

話は此處でも決闘のことに移つて行つた。この事件に對する陛下のお思召に就いて皆は話し合つた。殺された方の母親に對して陛下は深い御同情を垂れさせられたといふことが分ると、皆はその母親のために深い同情を寄せた。けれども陛下が、軍服の名譽を保つために人殺しをした相手に對して、寛大な處置を執るようにとのお思召だといふことが分ると、皆も軍服の名譽を防禦したポーゼンに對して寛大であつた。たゞ一人、伯爵夫人カテリーナ・イワノワナは持ち前の我儘な薄つべらな考へから、どうしても殺人者を罰しなければならぬと反對した。

「酒に酔つ拂つて、何の罪もない若い人を殺すなんて……どんなことがあつても許す譯には參りませんよ。」と、彼女は言つた。

「さあ、それは俺には分らないね。」と伯爵は言つた。

「存じてゐますよ。私の言ふことはいつだつてお分りにならないのですから。」と、夫人はネフリュードフの方を向い

て言つた。「他の人なら誰にも分る話が、あなただけ分らないのですよ。私はその母親が可哀さうでならないといふんです。人を殺しといて、それで好い氣になつてゐるなんて、私、そんなことは大嫌ひです。」

その時、今までも何も言はなかつた息子が、ポーゼンの肩を持つて、一體士官といふものはあんな場合、あれ以外の手段に出たら、同僚から侮辱され聯隊から追ひ出されるに決つてゐると云つて、不躰に母を攻撃した。ネフリュードフはその話には加はらないで、たゞ黙つて聞いてゐたが、自分が曾て士官であつただけに、養成こそしなかつたが、年若いチャールズスキイの意見は、十分諒解することが出來た。

それと同時に彼は、逆上した餘りに人殺しをして徒刑に處せられた美男の囚徒を監獄で見たのを思ひ出して、その若い囚徒の運命と今の士官の運命とを較べて見るのであつた。兩人とも酒の上の人殺しであつた。たゞ一方は百姓で、一時の怒りに逆上して人を殺したため、妻や家族や親戚の者から引離され、手枷足枷を篋められ、頭を剃られて徒刑囚となつてゐる。然るに一方は、營舎内の綺麗な部屋に置かれて、旨い物を食べたり、好い酒を飲んだり、また本を讀んだりして居り、しかも一兩日中に放免されて、以前の通りの生活が出来る上に、却つて皆から賞めそやされる位

ゐた。ネフリエドフはかう思つて、その通りを言つた。

初めの間はカテリーナ・イワーノワナも甥の言ふことに賛成してゐたが、間もなく他の人達のやうに口を噤んで了つた。自分が何か面白くないことでも言つたのだらうと、ネフリエドフは思つた。

晚餐が終つて夜になると、大廣間には説教のために特に、彫刻のした、高い背當の附いた椅子が幾列もずらりと並べられ、大卓子の前には――眩掛椅子と、水の入つた壺の載つてゐる小卓子とが置かれた。やがて外國人のキゼウエツテルの説教を聞かうとして、段々人が集つて來た。

車寄せには立派な馬車が何臺となく停つた。警澤に飾り立てた大廣間には、絹や天鵞絨やレースの着物に身を飾つた貴婦人達が腰をかけた。その貴婦人達の中に軍服や夜會服を着た紳士達が交り、五人の平民が――二人の庭番と、小店商人と、給仕と、馭者がその端にゐた。

キゼウエツテルは體のがつしりした、白髪頭の男であつた。彼が英語で話すと、鼻眼鏡をかけた若い娘が、巧みに早口で通譯した。

彼は、吾々人間の罪といふものは非常に大きいもので、その罪に對する刑罰も矢張り重く、到底避けることの出来ないものであり、そしてこの刑罰を豫想してゐては、とて

も生きて行けるものでない、といふことを説き出した。

「親愛なる兄弟姉妹等よ、私達は茲に自分自身のこと、自分達の生活のことを考へて見ませう。私達は何を爲しつゝあるか、何うして生きてゐるか、私達は慈悲深い神様に對して何ういふ風に罪を犯してゐるか、そして又、クリストを如何に苦しめてゐるかを考へやうではありませんか。私達には罪を赦される道もなければ、逃れる出口もなく、救ひの方法もなく、すべての人は滅亡の運命にあることを知つてゐます。怖しい破壊や永遠の苦惱が私達を待つてゐるのであります。」と、彼は涙聲になつて震へながら言つた。「そこでどうしたら人々は救はれるでせうか？ 兄弟よ、どうしたらこの怖しい業火から救はれることが出来るでせうか？ 火は既に家を包んでゐますが、出口は何處にもありません。」

彼は少時口を噤んだ。そして、本當の涙が彼の頬を傳つて流れた。この八年間といふもの、この好きな文句のところへ來ると、いつでも咽喉が塞つて鼻がつかへるやうな氣がして、涙が自然と流れ出るのであつた。涙が出ると、又一層自分で感動するのであつた。部屋の中では駭り泣きの聲がした。カテリーナ・イワーノワナ夫人は、モザイクの卓子の傍に腰を下し、兩手で頭を支へて、その卓子に眩をつ

いてゐたが、肉付のいゝ肩は震へてゐた。そこにゐた馭者は、丁度往來で人を馬車の轆はなに引つかかけようとして、その人が道を避けようともしない時のやうに、呆氣あつげに取られて、このドイツ人を見つめてゐた。この部屋に腰かけてゐる者の大部分は、カテリーナ・イワーノワナと同じやうな姿態を取つてゐた。流行の衣服を着た、ひどく父親に似てゐるウォーリフの娘は、兩手で顔を覆うて跪ひざまづいてゐた。

すると、説教師は突然顔をあげた。まるで俳優が喜びの色を顔に表はす時のやうに微笑を浮かべながら、心地よい和らかな聲で話し続けた。

「けれども救ひはあります。此處にあります——安らかな喜ばしい救ひです。この救ひは、私達のために十字架の苦を嘗めた神様のひとり子が、私達のために流された血の中にあるのです。彼の苦しみとその血は私達を救ひます。おゝ兄弟よ、姉妹よ。」と、彼は又もや涙聲になり始めた。「私共人類の罪を贖あがなふために、そのひとり子を遣はし給うた神様に感謝致しませう。その聖なる血は……」

ネフリードフは怖しく不快な氣持になつてそつと立ち上つた。そして顔を擧めて恥づかしいのを堪へながら、爪立ちして、自分の部屋へ退いた。

一八

あくる日ネフリードフが衣服を着更へて階下へ降りようとする時、丁度そこへ家僕がモスクワから來た辯護士の名刺を持つて來て渡した。辯護士は自分の用達しにやつて來たものではあつたが、若しもマースロワ事件の再審が近く開かれさうなら、序に元老院のそれへも出席しようと思つてゐた。ネフリードフの打つた電報は丁度彼と行違ひになつてしまつたのである。だからネフリードフから、マースロワ事件の審理される日取りや、出席判事の顔觸れを聞いた時、彼はにこつとした。

「では、例の三判事が皆出るんですね。」と彼は言つた。「ウォーリフですか、ありやペテルブルグ式の役人です。スコワロドニコフと云ふのは法律學者ですよ。それからペーカ、彼奴は實際的法律家です。だから中でも一番の腕きゝですよ。」と、辯護士は話した。「まあ一番有望なのは彼奴だけですね。ところで、請願委員會の方はどうなりましたか？」

「それなんですよ、バロン・ウォロビヨフの處へ丁度今から出かけようと思つてゐたんです。實は昨日の中に何とかして會つて置きたいと、いろ／＼骨折つて見ましたが、駄目だつたものですから。」

「あなたは、何故あの男が男爵ウオロビヨフといふのか御存知ですか。」と、辯護士は言つた。そのロシア式の姓につけられた外國の尊稱を、ネフリエドフがいくらか冗談半分には呼んだから問ひ返したのだ。「それはパウエル皇帝から、あの男の祖父さんが何かのことで附けて貰つたのださうですよ。宮中雜役頭をしたといふから、そのためかも知れません。何にしる大層皇帝のお氣に入らだつたといふんですからね。『彼を男爵にする、委細承知しろ』と來たのでせう。甘くその通りに行つて、男爵ウオロビヨフになり濟ましたんでさ。あの男、随分それを鼻にかけてゐますよ。中々抜け目のない狡猾い奴ですよ。」

「へえ、ぢや一つこれからそこへ出掛けるとしますか。」と、ネフリエドフは言つた。

「ぢや、丁度好い鹽梅だ、御一緒に出かけませう、お供しますから。」

二人が出かけようとして支關まで來ると、其處にはもう家僕が、マリエツトから來た手紙を持つて、ネフリエドフを待つてゐた。

『あなたのお氣に叶ふやうに、私は私の主義を枉げてすべてをお取り計ひいたしました。そして私はあなたの被保護者のために、夫へ頼んでおきました。その方は間もなく釋

放されますでせう。夫から要索監獄の長官の處へそのやうにいつてやりましたから。どうぞ御用がなくともお遊びにいらつしやい、お待ちして居ります。エム。』

「まあ何うです。」と、ネフリエドフは辯護士に言つた、「堪つたものぢやない。七ヶ月も獨房に放り込まれてゐた女が無罪なんだとさ。そしてその女を放免する爲めにはたつた一言言ひさへすれば濟むなんて。」

「何時もそれですよ。が、兎に角まああなたの望みが叶つたわけです。」

「そりやさうですが、併し如何にも残念です。一體全體彼等は何をしてゐるのでせう。何んだつてあの女を收監して置いたんでせう。」

「まあそんな事は餘りお考へにならない方がいゝでせう。」

「ぢや、お伴しませう」と、辯護士は言つた。そして彼等が支關口へ出ると、小綺麗な辻馬車が一臺、其處へ近づいて來た。それは辯護士の乗つて來た馬車であつた。

辯護士は馭者に行先を告げた。そして柔和しい馬共は間もなくネフリエドフを男爵の邸まで送り届けた。男爵は都合好く家に居合はせた。最初の部屋には制服を着た一人の若い官吏と、二人の婦人とがゐた。その官吏といふのは、かに襟首の長い咽喉佛の飛び出した、非常に輕快な歩き

方をする男であつた。

「どなた様であらつしやいますか。」と、咽喉佛の飛び出た青年官吏は、婦人達の處から、非常に輕快な、しなやかな歩き振りをしながら、ネフリニードフの側へやつて来て、かう尋ねた。

ネフリニードフは自分の名前を告げた。

「あ、男爵があなたのことをよくお噂してゐらつしやいましたよ。一寸お待ち下さい。」

男爵の祕書はかう言つて、閉つてゐた方の扉をあけて入つて行つたかと思ふと、間もなく其處から喪服に包まれ、眼を泣き脹らした一人の婦人を連れ出して來た。その婦人は、涙を隠さうとして、絡まつたヴェールを、その骨ばつた指で下に降さうとしてゐた。

「どうぞこちらへ。」と、前の青年官吏は輕快な步調で書齋の扉へ近づいて、それを開けると、立止まりながらネフリニードフの方へ向き直つて言つた。

ネフリニードフは書齋へ入つて、フロックを着た、中背の、頭を短く刈り込んだ、ぶんぐりした男の前に立つた。その人は大きな事務用卓子の脇の肘掛椅子に腰かけたまゝ、愉快さうな顔付をして自分の前方を眺めてゐた。口髭や顎髭の白いせるか、際立つて赤く見える、人の好さうなその顔

は、ネフリニードフを見ると愛嬌の好い微笑を湛へた。

「よくお出で下さつた。あなたのお母さんとは古い知り合ひで、極く仲好しでしたよ。あなたにも、まだお若い時分と、それから士官をしておゐるの頃にお目にかゝつたことがあります。さあ、どうぞお掛け下さい。そしてどんな御用か承りませう。——ふむ、成程、さうですとも。」と、彼はネフリニードフからフォードシャのことを聞きながら、刈り込んだ白髪頭を振り／＼言つた。「それから、それからどうなりました。ふむ、よく分りました。さうですとも、さうですとも、實際同情しますよ。ところで請願書はもうお出しになりましたか。」

「請願書は出來て居ります。」と、ネフリニードフはポケットから、それを取出しなが言つた。「併しあなたに折入つてお願ひ致したいのですが、どうかこの事件に對して特別の注意が拂はれるように、何分の御盡力が願ひたいのです。」「なか／＼よく出來て居りますよ。私からも屹度直接に奏請致しませう。」と、男爵はその快活らしい顔に全く下手な同情の表示を見せながら言つた。「どうもお氣の毒な事だ、その女はまだ子供だつたに違ひない。夫もまたひどい取扱ひをしたものだ。それがわるかつたんです。それから時が経つに従つて二人は愛し合ふやうになつた……宜しい、

私からもその事を申上げませう。」

「イワン・ミハイロウイチ伯爵も、自分から直接に奏請するからと申して居られました……」

ネフリュードフがそれ等の言葉を言ひ終らぬ中に、男爵の表情は見る／＼變つてしまつた。

「それはさうと、この請願書はあなたから直接に掛りの方へお出し下さい。私も出来るだけのことはいたしませう。」と、彼はネフリュードフに言つた。

丁度その時、例の青年官吏が、さも自分の歩き振りを誇るやうに部屋の中へやつて来た。

「あの婦人はもう二言ばかり申上げたとい、願つて居りませんが。」

「さうか、ぢや呼んで来い。まだ泣き居るかな。あの涙をすつかり拭つてやりたいが。まあ出来るだけやつて見よう。」

婦人が入つて来た。

「先程、お願ひいたしますのを、つい忘れて居りましたが、どうぞあの男が娘を他にやらないようにお止め下さいまし。さもなければあの男は何とでも……」

「私がやつて上げると申したぢやありませんか。」

「男爵様、どうぞお頼み申します、一人の母親をお救ひ下

さると思召して。」

彼女は彼の手を捉へてキスし始めた。

「萬事いゝやうにお計らひいたしますよ。」

婦人が部屋を出た時には、ネフリュードフも亦辭し去らうとしてゐた。

「出来るだけのことはいたしませう。一應司法省へも掛け合つて見ませう。何とか先方から挨拶があるでせうから、その上で私たちは出来るだけのことをいたします。」

ネフリュードフは其處を出て、事務局へ入つて行つた。彼は此處でも亦、丁度元老院で見たと同じやうに莊嚴な建物の中に、堂々たる風采の、服装から言葉つきまできちんとした、叮嚀な、重々しい威嚴のある官吏たちを大勢見出した。

『ずるぶん澤山あるな。恐ろしく大勢ゐたもんだ。よくまた皆な肥つてゐる。シャツも手も、なか／＼綺麗だ。どれもこれも皆綺麗に磨いた靴を穿いてゐる。誰が一體こんな贅澤を彼等にさせてゐるんだらう。囚徒達は勿論、問題にならないが、百姓達と較べて、何んと氣繁な生活なんだらう。』と、ネフリュードフは、また何時の間にか考へてゐた。

一九

ペテルブルグの監獄に繋^つがれてゐる囚徒達の運命を左右してゐる男は、澤山の勳章を有つてゐる——尤も彼は平常はその中の、襟に吊る白十字章の外はつけてゐないが——功勞のある、だが世間からは毫^{ちと}碌^{とく}したと言はれてゐる、謂ゆるドイツ系男爵中の年老いた將軍であつた。彼はカフカズ勤務中、其處で彼の氣に入つた、この白十字章を貰つたのだ。それは當時彼が大勢のロシアの百姓達に、頭髮を短く刈り込ませ、軍服を着せ、銃劍を擔^かがせ、自らそれを指揮して、自己の自由や、自己の家や、血族を防禦した何千といふ人たちを殺したといふ功勞で、戴いた勳章だつた。それから彼はポーランドにも勤務したが、其處でも矢張り、ロシア農民を使つて随分種々^{くさくさ}な惡事を働いた。そのためにもまた勳章や新しい服飾を貰つた。それからまだ何處かで勤務したといふことだが、今はもう年も老つたので、現在の地位にあるのだつた。お蔭で立派な邸宅にも住めるし、十分な手當や種々^{くさくさ}な名譽にもありついてゐた。彼は上からの命令を遂行するのに極めて嚴格で、そのことを何より大切なものとして心得てゐた。世の中のことは何んでも變更することが出来るが、この上司の命令ばかりは、どんなことがあ

つても、變更することの出来ないものだ、思ひ込んでゐた。

彼の職責といふのは男女の國事犯人を要塞の奥の獨房に監禁して、十年間にそれ等の半數が牢死し、あとは氣違ひになるか、肺病になるか、自殺をするか、——つまり或者は餓死し、或者は硝子の破片^{かけら}で動脈を切り、又或者は縊死し、燒死するやうに、囚人を待遇する役目であつた。

老將軍はこれらの一切を承知してゐた。これが皆彼の面前で行はれて來たのだ。併しすべてそれ等の事柄は毫も彼の良心を動かすことはなかつた。それは丁度、雷雨や洪水やその他の場合に遭遇した災厄が、彼の良心を動かすことがなかつたと同じであつた。

これ等の事柄は、悉く上皇帝陛下の命令を遂行する結果として生じたものであつた。これ等の命令は何んでもそつくりその儘實施されなければならないものだつたから、その命令の結果について考慮するといふことは全然無益なことであつた。それで老將軍は、自分で最も重要な職責だと考へてゐたそれ等の命令の遂行を緩めるやうでは一大事だから、頭から、そんなことを考へないといふことが、自分の愛國的軍人的義務であると、思ひ込んでゐたので、そのやうな結果に就いて考へることを、自分にも許さなかつた。

のである。老將軍は毎週一回、全部の獨房を巡視して、囚徒達の歎願を聞くのが義務であつた。彼は彼等の言ふことを冷靜に、黙つて聞いてやることはやつたが、未だ曾てそれ等の願ひ事を一度だつて實行してやつたことがなかつた。何故なれば、それ等の願ひ事は悉く規則に反したものであつたからである。

ネフリニードフが老將軍の邸宅に近づいた時に、丁度塔の上の大時計が、その小さな鐘の音で『ゴーリ・スラーヴェン』(神を讚美)を奏した後で、二時を打つた。この鐘の音を聞きながら、ネフリニードフは思はず、デカプリスト(十二月黨、一月十四日政治的改革を目的としてロシアに起つた近衛青年將校を中心とした革命黨)の日記の中で讀んだことを思ひ浮べた。永久に囚はれの身となつた人たちの胸に、このいつも繰り返すやさしい樂音が、どんなに強く響いたことであらうと想像した。彼の邸宅に近づいて行つた時、老將軍は暗い客間で、象嵌の施された小さな卓子デッセルに寄つて若い畫家と一緒に皿占ひオウチン(皿を週して)をやつてゐた。この青年畫家といふのは、彼の部下の中の誰かの弟であつた。畫家の細い、しなやかな優しい指が、老將軍の硬ばつた、皺だらけな、節くれだつた指と組合はされてゐた。そして、その繋がつた兩手が、アルファベットの文字を残りず描いた紙の上で皿と一緒に動いてゐた。小皿は今將軍の出した質

問、即ち靈魂は死んでからもお互ひに見知り合ふだらうかといふ問ひに答へてゐたのであつた。

家僕の役目を勤めてゐた一人の從卒が、ネフリニードフの名刺を持つて入つて行つた時には、丁度小皿を仲介にして、チャン・ダークの亡靈が物を言つてゐるところだつた。チャン・ダークの亡靈はこれ等の文字アルファベットに依つて、『死後、靈魂はお互ひに見知り合ふだらう。』といふ事を告げた。そこでこれを書き留めた。從卒が來た時に小皿は一度「P」の上に留まつて、次いで「O」の上に行き、更に「S」のところまで達してその文字の上に止まつた。そしてまた彼方此方へもがき始めた。將軍の考へでは、その小皿のもがくのは、次の文字が「L」でなければならぬからであつた。つまり彼の考へではチャン・ダークが『靈魂はお互ひに見知り合ふだらう。』が、それはすべて地上の煩惱或はその類似のものから淨められた後に限る。』といふことを告げなければならぬからであつた。それ故次の文字は「L」でなければならぬといふのであつた。併し畫家の方は次の文字は「W」だらうと考へてゐる。そして靈魂は、そのエーテルのやうな體から出るであらうところの光りに依つて、相互に見知り得ようと、チャン・ダークは告げるに違ひないと思つてゐる。將軍はその太い白い肩を擡め、凝面を作つて、兩手を注視して

るたが、小皿がひとりでに動いて行くとは思ひながら、それを「L」の方へ引つ張つた。と、蒼白い顔の青年畫家は薄い髪の毛の後ろへかき寄せながら、その生氣のない空色の障で客間の薄暗い片隅を見つめてゐたが、神經的に唇をひりつかせながら、皿を「W」の方へ引つ張つた。將軍は遊びの邪魔が入つたので顔を顰めたが、二三分黙りかへつてゐた後、名刺を手を取つて、鼻眼鏡をかけた。が、巾幅い腰のあたりがむづがゆかつたので、一つ咳拂ひをして、しびれた指を伸ばしながら、丈一杯背伸びをして起ち上つた。「書齋へお通し申せ。」

「閣下、あとは獨りでやつてしまひませう。」と、畫家は起ち上りながら言つた。「私は今靈の現れを感じてゐますから。」

「宜しい、最後までやつておしまひ。」と、將軍はしかつめらしく言つて、書齋の方へ行つた。「よくお出掛けでしたね」と、將軍はネフリュードフに、事務卓子の側にあつた肘掛椅子を指しながら、荒つばい調子で、優しい言葉をかけた。「ベテルブルグにはもう長く御滞在ですか。」

ネフリュードフはつい此間来たばかりだと答へた。

「お母さんの公爵夫人はお達者ですか。」

「母は逝くなりました。」

「それはお氣の毒でしたね。伴があなたにお目にかゝつたと言つて居りましたが。」

將軍の子といふのは、父親と同じやうな徑路を踏んで、陸軍大學を卒業してから諜報局に勤務してゐたが、其處の仕事が大變に彼の氣に入つてゐた。それは間諜の監督をすることだつた。

「さうだ、私はあなたのお父さんと一緒に奉職してゐましたが、随分親しくしてゐましたよ。ところで、あなたは何處かお勤めですか。」

「いえ、今勤めては居りません。」

將軍は不機嫌さうにうなづいた。

「閣下、今日はあなたに一つお願いがあつて上りましたが。」と、ネフリュードフは言つた。

「それはようこそ。で、その用件といふのはどんなことですか。」

「若し私の願ひが間違つてゐましたら、その時はどうぞお許しを願ひます。でも私はそれをお話しない譯には参りませんものですから。」

「どう云ふ事なんですか。」

「あなたの要寒監獄にグルケーウイチ某といふ者が收監されて居りますが、その男の母親が面會の許可を願つてゐま

す、若しそれが出来なければ、せめて書物の差入れだけでも許して戴きたいと申して居ります。」

將軍はネフリードフの歎願を聞きながら、何等満足らしい表情も不満足らしい顔付も見せなかつた。でも、何か考へ込んでゐるやうな様子をしながら、小首を一方へ傾げてゐたが、漸く顔を嚙めはじめた。彼自身はネフリードフの歎願については何も考へず、また興味も持つてゐなかつた。それは、何事も規則に従つて、どう答へてやればいゝかといふことが、ちゃんともう分りきつてゐたからである。彼は單に頭を休めてゐただけで、その實、何も考へてはゐなかつたのである。

「それは、御承知でせうが、私の權限外のことなんです。」と、彼はちよつと息を休めてから言つた。「面會に就いては陛下のお定めになつた規則がありますので、それが改まらないうちは何ともしようがないのです。それから書物のことは、こちらに圖書室があつて、許可されたものだけを彼等に與へて讀ませてゐるわけです。」

「それはさうでせうが、併しあの男には科學の本が必要なんです。科學を研究したいと願つてゐるんですから。」

「そんなことを信じてはいけません。」と言つて、將軍は少時黙つた後、更に續けた。「それは研究のためぢやないの

です。只さう言つて見ただけなんです。ほんたうに厄介な奴等ですよ。」

「併し、幾ら何んでも、彼等の苦痛を紛らすことも考へてやらなければなりませんから。」と、ネフリードフは言つた。

「彼等は何時にも不平ばかり並べてゐます。」と、將軍はそれを打消した。「吾々はよく彼等の心持を知つてゐますからね……」

彼は彼等のことを何んでも、或る特別な不良性の人間であるかの如く言つてゐた。

「けれども此處の囚徒達は、他處の監獄などではなかく見られないやうな便宜を與へられてゐますよ。」と、彼は續けた。

そして、さも辯解するかのやうに、囚徒達に許されるすべての便宜を詳しく述べたて始めた。囚徒達にとつて住心地の好い感じを與へるといふことが、監獄制度の一番の目的でもあるかのやうに喋り立てた。

「實際以前は随分亂暴に取扱はれたでせうが今日では此處の監獄に居る彼等も申分のない取扱を受けてゐるのです。

食事も三回づゝ與へられてゐますが、その中の一皿はいつもピフテキとか、或はカツレットとか、必ず肉が盛られてゐます。日曜日にはその上にもう一回おいしい物が貰へること

になつてゐます。普通のロシア人だつて、それだけの御馳走は食べたくも食べられないですからね。」

どの老人も、一度その覺え込んだ文句にぶつからうものなら、無暗に喋り立てるものだが、この將軍も亦それと同じやうに、囚徒達の要求辭や感謝の念の缺けてゐることを證明するために、屢々繰り返して來た文句をべら／＼と並べ立てた。

「彼等に與へられる書物には、宗教的内容のものもあれば古雜誌などもあります。兎に角こちらの圖書室には適當な書物が澤山にありますよ。でも彼等は偶にしかそれを讀まないのです。何んでも初めの中は興味もあるらしいが、ぢきにその儘うちやつて、新本が半分ばかり讀まれたまゝで、あとの頁を切つてないものさへありますからな。それから古本で少しも頁のかへしてないものもありますよ。私は時々試して見たのですが。」と、微笑とも何ともつかない面持で將軍は言つた、「わざと本の中に紙片を挿んで置いても、それがその儘で一向抜き出されもせずにはありません。それからまた彼等には書くことも別に禁じてはありますせん。」と、將軍は續けた。「石盤も石筆も與へられて居るから、彼等は勝手に書いて氣を紛らすことも出来るのです。消してはまた書くことも出来るのです。だが、矢張り書く

者もゐません。いや、彼等は随分早く落着いてしまひますよ。ただ初めの中だけ苛々して騒ぐだけです。その後は、だん／＼體も肥つて來て、大變に溫和しくなつてしまひます。」と、將軍は自分の言葉の持つ恐ろしい意味にも氣づかないで、語りを續けた。

ネフリリドフは皺枯れた老人らしい聲を聞きながら、その骨ばつた手足や、白い眉の下から窺いてゐるとんよりした眼許や、軍服の襟に凭れかゝつたやゝ垂れ氣味の、綺麗に剃つた頬骨のあたりや、慘酷な殺戮に依つて授かつたといふことを特に誇りとしてゐる例の白十字章などを眺めてゐた。そして一々彼の言葉を反駁したり、彼にその言葉の恐ろしい意味を説明してやつたりすることの無益であるのを悟つた。併し彼は兎に角元氣を出して、別なことを質問した。それは今朝その釋放命令が出たといふ通知に接した女囚シューストワの事であつた。

「シューストワ？ シューストワ？……どうも皆なの名前を覚えてゐる譯にも行きませんが、何しろ大勢居るのですからな。」と、囚徒の多すぎるのを非難するかのやうに彼は言つた。そしてベルを鳴らして、書記を呼ぶように命じた。

書記を捜しに行つた間に、彼はネフリリドフに奉職を勧めた。正直な善良な人間は特に皇帝陛下に取つて、それか

ら國家に取つて必要であるといつたが、それ等の人間の自分に自分も加はつてゐることをほのめかしてゐた。その癖、國家といふ語はたゞ語呂の具合がいゝから附け足したに過ぎなかつたらしい。

「私はもう御覽の通り年老つてゐます。が、力の許す限りは、かうやつて勤めてゐるんです。」

そこへ、干からびて瘦せこけた、俐巧さうだが落着きのない眼付をした書記がやつて來た。そしてシューストワは或る不思議な城塞の中に收監されてゐるが、まだ彼女の釋放に關する命令は來て居らない旨を報告した。

「命令を受取りさへすれば、その日の中に出してやりますよ。何も吾々は好き好んで彼等を引留めてゐる譯ぢやないのですから。」と將軍は云つたが、その無理な微笑は僅かに彼の老顔をゆがませたに過ぎなかつた。ネフリュードフはこの厭らしい老人に對して起した嫌惡と憐憫との交つた感情を現はすまいと努めながら起ち上つた。老人はまた老人で、この上ツ調子な、丁度、自分の同僚のぐれた息子のやうなこの若者に對し、餘りに嚴格に過ぎてはならず、さうかと云つて、訓戒も與へなければならぬ位に考へてゐた。「ぢや、左様なら、」と彼は續けて言つた。「決して私を悪く思はないで下さい。あなたを愛すればこそ申すのです。こ

ちらに收容されてゐるやうな人間と決して交際してはいけません。良い人間の決して來る處ぢやないのでから。そしてこれ等の人間は何れも皆ひどい悖德漢ばかりなんですから。私達にはそれがよく分るんですよ。」と彼は、疑ふ餘地などないといつた調子で言つた。實際彼はそのことには疑ひを有つてゐなかつた。それといふのも、事實その通りであつたからといふのではなくて、若しもそれが間違つてゐるとすれば、自分は十分に良い生活を送つて來た名譽ある英雄ではなくて、自分の良心を賣つて來た、そして年老つても猶ほその良心を賣つてゐる不徳漢であるといふことを、承認しなければならなかつたからである。「先づ何はおいても奉職をなさい。皇帝陛下には正直な人間が必要なんです……國家に取つても。」と彼は附け足した。「一體私やその他の人が皆、あなたのやうに奉職を嫌つたらどうなると思ひます。誰があとに残るのですか。たゞ政治を論議するばかりで、少しも政府を援けようともしなかつたら、困るぢやないですか。」

ネフリュードフは深い溜息をついた。そして低くお辭儀をしながら、自分の方へ慇懃に差出された骨ばつた大きな手を握つて、その部屋を出た。

將軍は何うも困つたものだといつた風に頭を振つた。そ

して腰の邊りを擦りながらまた客間の方へ行つた。其處には例の畫家ももうジャン・ダークの亡靈によつて與へられたお告げを書きつけて待つてゐた。將軍は鼻眼鏡をかけてずつとそれを通讀した。『靈魂はエーテルのやうなその體から發する光りに依つてお互ひに見知り合ふことが出来る。』

「あ、成程」と、將軍は眼を閉ぢて感心したやうに言つた。

「併し皆の光りが一つだつたとしたら、どうして見別けがつかだらうか。」とまた畫家と手を組んで、その小さな卓子の脇へ腰をかけた。

ネフリュードフの馬車は門を出た。

「旦那、彼處は陰氣臭えとこでがすな。」と、馭者はネフリュードフの方を向いて言つた。「わつちは待ちきれねえで、歸つちまうべえと思つてゐたとこでがすよ。」

「さうだ、陰氣なところだよ。」とネフリュードフは、胸一杯溜息をつきながら、一種の落着きを以て、空をゆく烟のやうな雲や、小舟や汽船の走り過ぎたあとに残るネヴァ河のきら／＼光る波紋などに眼を留めながら、馭者に同意した。

110

翌日ネフリュードフは、マースロワ事件の審査が開かれる

筈だつたので元老院へ行つた。辯護士は元老院の宏壯な玄関口でネフリュードフと落ち合つた。玄關の附近にはもう馬車が數臺並んでゐた。莊嚴な階段を昇つて二階に行つた時、様子を待つてゐる辯護士は、裁判法實施の年號を記してあつた左側の扉を押し入つた。最初の長い室で、外套を脱ぎながら廷丁から、警官等が全部參集したこと、一番最後の議員はたつた今、通り過ぎたばかりだといふことを聞いて、辯護士のファナーリンは燕尾服だけになり、白い胸に白いネクタイを結んだまゝ、愉快さうに自信のある笑みを漏しながら次の室に入つて行つた。そこには右の方に大きな戸棚と卓子があり、又左の方には螺旋形の階段があつたが、丁度その時、制服を着て、折艸を小脇に抱へた派手作りの官吏が降りて來た。尙ほその室の中で注意を惹いたのは長い白髪を垂れた、鼠色のズボンに背廣の上衣を着た、長老らしい風采の老人であつた。その左右には特に恭しく二人の役人が立ち並んでゐた。

その老人は着換へ戸棚の方へ行つて、其中へ隠れてしまつた。この時ファナーリンは、彼と同じやうに白ネクタイに燕尾服を着た同僚の辯護士を見つけたので、直ちにその男と賑かな會話を始めた。ネフリュードフはその室の中に居合はせた人達を見廻した。傍聴人は皆なで十五名だが、そ

の中の二人は婦人であつた。鼻眼鏡をかけた方は若かつたが、もう一人の方は白髪のお婦人であつた。今日は新聞の誹毀事件の公判があつたので普通の日より傍聴人が多かつた。そしてその大部分は新聞関係の人ばかりであつた。

派手な制服を着て、片方の手に紙片を持つた、頬の紅い美男の廷吏が、ファナーリンの側へ来て、その關係事件を質問したが、マースロワ事件と聞いて、何やら記したまゝ行つてしまつた。この時戸棚の扉が開いて、其處から例の長老らしい老人が現れた。けれどもこの時は背廣服ではなくて、胸のあたりに既に金屬板を付け、金モールの縁縫ひをした美しい服装をしてゐたので、人といふよりか寧ろ鳥を想はせるやうな恰好だつた。

この滑稽な服装が、老人自身にも不快だつたと見え、彼は慌たゞしくいつもよりも急ぎ足で、入口とは反對の扉を押して行つてしまつた。

「今のがベデーですよ、一番偉い男です。」と、ファナーリンはネフリユードフに言つた。そしてネフリユードフを仲間の辯護士達に紹介して、彼の所謂最も興味ある事件即ち今日の訴訟の話をして聞かせた。

間もなく審問が開かれた。ネフリユードフは他の傍聴人と一緒に、左の方の法廷へ入つて行つた。ファナーリンも皆と

一緒に、格子の後ろに設けてある傍聴席の方へ行つたが、ペテルブルグの辯護士だけは格子の前の卓子のところへ行つた。

元老院の法廷は地方裁判所の法廷よりも狭かつた。一體の装束も質素であつた。たゞ違つてゐる點は元老院議員等の着席した卓子に緑色の羅紗でなく、金モールで縫ひ取つた眞紅の天鷲絨が掛けてあつたことである。併し何處の裁判所にもある通りの附屬品、即ち裁きの鏡、偽善の標章である聖像及び壓制の標章である皇帝の肖像は、矢張り掛けてあつた。そしてこゝでも同じく廷吏が「開廷いたします」と、勿體振つて宣告した。皆は一齊に起立し、制服を着けた議員連は入場して背當の高い肱掛椅子に着席した。そして平然たる態度を装はうとして、その卓子に凭れかゝつてゐた。

議員は四名だつた。議長はニキータンといふ綺麗に顔を剃つた、面長の、鋼鐵のやうな眼付をした男だつた。ウォーリフは意味ありげに唇を結んで、白い小さい手で書類をいぢくり廻してゐた。次のスコウワロドニコフは肥つた、重味のある、痘痕面をした法律學者である。その次のベデーは一番最後に來た長老たる老人である。議員等と一緒に書記官長であり檢事次長である中背の、不愛想な、綺麗に髯

を剃つた、特に顔の浅黒い、愁はしげな黒服勝の若い男が入つて来た。ネフリエドフには、その男が變つた制服を着て居り、かれこれ五六年も會はなかつたにも拘はらず、直ちに自分の大學生時代の最も仲の好かつた親友の一人であることが分つた。

「あれは検事次長のセレーニンぢやないですか。」と、彼は辯護士に訊ねた。

「どうです、どうしてですか？」

「私はあの男をよく知つてゐるんです、なか／＼いゝ人物ですよ……」

「いゝ検事次長で、腕きゝです。では、彼に頼むところでしたな。」とファナーリンは言つた。

「彼はどんな場合でも良心に依つて行動する男です。」と、ネフリエドフは自分のセレーニンとの近しい關係や、彼の友情や、彼の潔白で正直な、紳士的な愛すべき性質が、如何にもこの言葉の有する最上の意味を以て表されてゐることなどを想ひ浮べながら言つた。

「だが、もう今そんな時間はありません。」と、ファナーリンは既に初まりかけた報告に耳を傾けながら言つた。

地方裁判所の決定に何等の變更を與へなかつた控訴院の判決に對する上訴が、審議され始めたところである。

ネフリエドフは注意して聞いた。今何ういふ事件が彼の前で論議されてゐるのか、それを理解しようとするが、此處でもまた地方裁判所に於けると同様、兎角主要問題を逸れて、枝葉の議論が多かつたので、容易にそれを聞きわけることが出来なかつた。審理されつゝあつた事件は、某株式會社の支配人の詐欺行爲を發した新聞記事に關するものであつた。それには、支配人が果してその信用を濫用したのかどうか、それをやめさせるにはどうしたらよいかといふことが、審理されて然るべきものゝやうに考へられるが、併しそのことについては何等言及してゐなかつた。辯論はたゞ雑誌欄記者の記事を載せる權利を法律上發行者が持つてゐるかどうか、これを掲載したことは如何なる犯罪に該當するか。つまり名譽毀損罪になるか、誹謗罪になるか、また名譽毀損罪は誹謗罪を包むことになるか、或は誹謗罪が名譽毀損罪を含むことになるかといつたやうな問題や、尙ほまた、法律の條文とか判決例とかいつた風な、門外の人には容易に理解出来ない問題や事柄に就いてばかり述べられてゐたに過ぎなかつた。

ネフリエドフにはたつた一つだけが理解された。それは事件の報告に當つたウォーリフが、昨日あれほどまでに元老院は實際のところ事件の審査に深入りは出来ないものだ、

と主張してゐたにも拘らず、今彼がこの事件を取扱ふに當り、明かに控訴院判決の廢棄に有利なやうな報告をした事が一つ、も一つはそれに對してセレーニンがその控へ目な性質にも似ず、不意に起つて自分の反對意見を熱心に發表したといふことであつた。平常控へ目なセレーニンが何うしてネフリニドフを吃驚させる程一生懸命に熱辯を振つたかといふと、それはかうであつた。彼はその會社の支配人が金錢上の問題には極めて汚ない人物だといふことを、かねて承知してゐたところへもつて來て、偶々ウオーリフが、つい審理の前日その支配人の處で贅澤な饗應に與つたといふことが耳に入つたからであつた。そこで今ウオーリフが、極めて慎重ではあつたが、併し見え透いた偏頗な意見を述べ立てた時に、セレーニンは忿然として神經質的に、このありふれた事件のために特に自分の意見を述べ立てたわけであつた。その演説は明かにウオーリフを侮辱した。そこでウオーリフは眞赤になつて體を動かしながら、口には出さずに驚きの身振りだけをした。そして勿體ぶつて怒つたやうな顔付をしながら、他の議員等と一緒に會議室へ退いた。「あなたの御關係の事件は何ですか？」と、議員連が退席すると間もなく廷吏がやつて來て、フナーリンに訊いた。「先刻も言つた通り、私はマースロワ事件の方だよ。」と、

フナーリンが言つた。

「左様でしたか。その事件は今日審理される筈ですが、併し……」

「どうしたといふんだ？」

「實は御覽の通り今の事件があんな具合でしたから、議員達も多分その決定の言渡しを濟んだらもうこゝへお出にならないかも知れません。併し……私から申上げて見ませう……」

「何だつて？」

「兎に角私から申上げておきませう、さう申上げておきませう。」と、廷吏は何か自分の紙片に記入した。

議員連は、實際、誹謗事件の決定を宣告したあとで、マースロワ事件やその他の事件は、會議室で煙草やお茶をのみながら片づけして了ふつもりであつた。

二

議員連が會議室の卓子の周りに席を占めるや否や、ウオーリフは棄却の理由を滔々と述べ立てた。

議長は元來片意地の男であるが、今日はまた殊に機嫌が悪かつた。會議中事件の審議を聞きながら、彼は既に自分の意見を纏めてしまつた。そして今ウオーリフの説明などに

は耳も傾けず、自分の考に没頭してゐた。彼の考へ込んでゐることは、自分が久しい以前から得たいと思つてゐた地位に、自分でなくウエリヤノフが任命されたので、彼はそのことを昨日自分の日誌に書きつけて置いたが、今それと思ひ浮べてゐたのであつた。議長の新キートンは、その奉職中接觸して来た最高二階級(高等官)の種々な役人について論評しておくことは、將來甚だ重要な歴史的資料となるべきものであると、全く確信しきつてゐた。彼は、現代の爲政者達に依つて破滅に導かれつゝあるロシアを救はうとする自分に對して、妨害を加へたものだとして、最高二階級の某々をひどく詰責した一文を昨日書いたのだが、實際は、彼等が彼の俸給の増額を妨害したといふことに過ぎなかつたのである。而も彼は今、この日記の一節が後世子孫に取つて如何に新しい光明を齎すであらうかを考へてゐた。「さうだ、勿論さうだ。」と彼は、ウォーリフが彼に向つて言つた言葉を碌に聞きもしないで言つた。

ペーは悲しさうな面持ちで、彼の前に置いてあつた紙の上に花環を描きながら、ウォーリフの言ふことに耳を傾けてゐた。ペーこそは生一本(いっぽん)の自由主義者であつた。彼は六十年代の傳統を神聖に保持してゐた。そして彼が若し嚴正中立の立場から退却した時には、必ず自由主義の方へ傾くこ

とに極つてゐた。そんな風で、今の場合も誹謗罪の告訴を提起した會社の支配人が、品性の下劣な人間だといふことの外に、尙ほ新聞記者を誹謗罪に問はうとすることは、出版の自由を壓迫するものだといふ廉を以て、その上告は全然理由なく、棄却すべきものだといふ方へ傾いてゐた。ウォーリフが自分の報告を言ひ終つた時、ペーはまだ花環を描き終らなかつたが、かゝる明白な理論を證明しなければならぬなどゝは如何にも情けない話だといつた風な悲痛の表情をして、やがて優しい朗らかな音聲で、簡單にあつさりとして、然し自信を持つて、上告の理由なきことを證據立てた。そして白髪(はくはつ)の頭を垂れて花環を完成すべく描き續けた。ウォーリフに向ひ合つて腰かけてゐたスコウロードニコフは、その太い指で顎髯(あごひげ)や口髯を絶えず丸めては口へ捻ぢ込んでゐたが、ペーの辯論が濟むと、顎髯を噛むのをやめて、大きなきい／＼聲を張り上げながら、株式會社の支配人が、假令愚劣極まる人間であつたとしたところで、若しも法律的根據があれば宣告取消に同意もしようが、さういふ根據がないのだから、自分はイワン・セメーノフ(イワン)の意見に賛成であると言つた。そして彼は、ウォーリフをやつゝけてやつたことを小氣味よく思ひながら、辯じ立てた。議長は結局スコウロードニコフの意見に賛成したの

で、その事件は否決されることに決定した。

ウォーリフはさも自分が不正な味方をしたやうに取られたことが特に不満でならなかつた。併し平氣を裝つて次の事件即ちマースロワ事件の書類を開けて、それを讀み返してゐた。議官達はその間にベルを鳴らして茶を持つて來させ、カーメンスキイの決闘と共に當時ペテルブルグで評判であつた一つの事件を話し合つてゐた。それは刑法第九九五條に該當する犯罪に問はれて、逮捕された某局長に關する事件であつた。

「實に穢はしいことだ」と、ペーは吐き出すやうに云つた。「何で悪いことがあるものかね？ ドイツの或る文學者の説を書いたロシヤの本を君にお目にかけてよいか。それにはこんなことは罪でないばかりか、男と男とが結婚してもいいやうなことがはつきり書いてあるよ。」と云ひながら、スコウォーロードニコフは葉卷を指の根元で挟んで貪り喫ひながらから／＼と笑つた。

「そんな莫迦なことが。」と、ペーは云つた。

「ぢや、その本を見せて上げよう。」と、スコウォーロードニコフは稍しくその本の名から出版年月や發行所まで擧げた。「ところで、その男はシペリヤのどこか或る町へ知事にやられるんださうだ。」と、ニキーチンは言つた

「そりや結構だ。屹度僧正が十字架を持つてお迎へするにとだらう。いや、さういふ坊主も必要だよ。何なら僕が紹介してもいい。」と、吸殻を灰皿に棄て、頸帯や口髭を一杯口に捻り込んでそれを噛みながら、スコウォーロードニコフが云つた。

この時廷吏が入つて來て、マースロワ事件の審理に臨席したいといふ辯護士とネフリニードフとの請願を通じた。

「この事件は全く小説的だよ。」と、ウォーリフは自分の知つてゐる限りネフリニードフとマースロワとの關係を話し出した。一くさり話が濟むと元老院の議官達は煙草を棄て、茶を喫み乾して再び法廷に出て着席した。そして前の事件の判決を申渡し、愈々マースロワの上訴を審議し始めた。

ウォーリフは持前の高らかな聲でマースロワの上訴の理由を詳しく説明した。多少例の偏見がないではないが、明かに原判決棄却の希望を以て陳述した。

「何かこれに附け加へて陳述することがありますか。」と、裁判長はファナーリンに向つて云つた。

ファナーリンは立ち上り、白い胸衣の廣い胸を反らしながら、一箇條毎に驚くべき自信と明確さとを以て前判決が正當な法律の解釋を缺いてゐたといふ六つの要點を指摘した。それから尙ほ簡單ではあつたが、本事件の本質に觸れ

て、原判決の甚しく不當であることを鳴らした。この簡單な、然し力の籠つたフナーリンの辯論の調子は、何だか言譯だか主張だか分らないやうなものであつた。つまり議員達はその聰明な法律的知識と洞察力とを以て、自分よりもよく事件を考察し、理解してゐられる筈であるが、それでも自分は職掌柄止むを得ず委託されてやつたまでであると云つたやうな調子であつた。

フナーリンの辯論が終つた時は、元老院は原判決を取り消すに違ひないと疑ひなく思はれた。フナーリンは勝ち誇つたやうに微笑を浮べた。ネフリュードもこの辯護士を見その微笑を認めて、上訴は確かに勝つたものだと思つた。だが、議員達の様子を見渡すと、微笑を浮べて勝ち誇つてゐるのはフナーリン一人だけであるのに氣がついた。議員達と檢事次長とは微笑んでもゐなければ得意の様子もなく、寧ろ飽き／＼した風で、『お前の云ふやうな理由はもう何度も／＼聞き飽きた。何の足しにもなりやしない。』と云はぬばかりで、やつと辯護士の長廣舌が終ると彼等は打寛げること喜んでゐるらしかつた。辯論が済むと、すぐ裁判長は、檢事次長の方を振り向いた。セレーニンは極く簡單に、しかし明瞭に、上訴の理由がすべて不十分であるから、原判決を取消すことは出来ぬと主張した。ウォーリフ

は原判決を取消す側の説を述べた。ペーも真相を知つて前裁判所の法廷の模様や法の適用の誤りなどを、實際自分が目撃したかのやうに、あり／＼と説明して、熱心に取消の方に賛成した。けれどもニキーチンはいつもの通り嚴格と形式主義を重んずる男としてそれに反対した。で、最後の議決は、もう一人のスコウォロードニコフの賛否如何に懸つた。だが、彼はネフリュードが道德的要求からマースロワと結婚しようとする決心が甚だ氣に喰はないといふ理由で、極力上訴の棄却を主張した。

スコウォロードニコフは唯物論者で、ダーウィン主義者である。すべて抽象的な道德性の發現は勿論、甚しきは宗教心さへも賤しむべき無智なものと考へて、そんな事に拘はるのは自分自身を辱かしのものだと思つてゐた。で、苟くも名聲ある辯護士が、淫賣婦のために辯護の勞を取つたり、公爵ともあらうものが自らそのために元老院までわざわざ出掛けるなぞといふことは以ての外だと思つた。だから彼は口の中に鬚をくはへ込んで顔は曇りながら、この裁判事件に就いては何も知らんといふ風にすまし込み、ただ上訴の理由が不十分であるから原判決は取消すことが出来ないとはかり主張して、議長の見解に賛成した。かうして上訴は遂に棄却された。

「あきれたこつた。」と、ネフリュードフは書類入りの鞆かぶとを整理してゐた辯護士と一緒に待合室の方へ出て行きながら云つた。「あれ程明白な事件を、たゞ形式に捉はれて棄却してふなんて全くあきれてしまふ。」

「この事件はもう裁判所でしくじつてゐますからね。」と、辯護士は云つた。

「セレーニンまでが、棄却を主張するなんて、驚いてしまふ。全く驚いてしまふ。」とネフリュードフは繰り返しながら、「さて、これから何うしたものでせうか?」

「さうです。陛下へ請願させよう。こちらに御滞在中直接あなたから請願書をお出しになればいいのです。私が草案を作つて上げませう。」

丁度この時、小柄なウォーリフが星章をつけた制服姿で待合室へ入つて来てつか／＼とネフリュードフに近寄つた。

「何とも致し方がございませんでした公爵。何分上訴の理由が薄弱だつたものですから。」と、彼はその狭い肩を揺り、眼を閉ぢながら言つて、どこかへ出て行つた。

その後からセレーニンは、昔の友人であつたネフリュードフが此處にゐることを議官達から聞きつけてやつて来た。

「よう、此處で君に會はうとは全く意外だつたね。」と彼はネフリュードフに近寄りながら、物思はしげな眼をして、唇にだけ微笑を洩らした。

「君がペテルブルグへ来てゐるとは知らなかつたよ。」

「僕も、君が検事長になつてゐるとは知らなかつたね。」

「いや、次長だよ。」と、セレーニンは訂正して、「どうしてまた君は元老院へ来たんだい。」と物思はしげに訊いた。

「尤も君がペテルブルグへ来てゐることはチラと聞いたが、こゝへは何の用で来たんだい。」

「此處へかい? それは公平な裁判を仰いで、無實の罪を被てゐる女を救はうと思つてさ。」

「それはどんな女だい。」

「今判決された事件の女さ。」

「あゝ、マースロワの一件か。」と、セレーニンは氣がついて、

「あれは全く根據のない上訴だつたよ。」と云つた。

「問題は上訴にあるんぢやない、女にあるんだよ。あの女は何も罪が無いのに處刑の宣告を受けてるんだからね。」

セレーニンは嘆息した。「さうかも知れん。が、然し……」

「さうかも知れんぢやないよ。確かにさうなんだ……」

「君はまた何でそれを知つてゐるんだ。」

「それは僕が陪審員であつたから、何うして事件を誤つた

かと云ふこともよく分つてゐるんだ。」

セレーニンは一寸考へ込んだ。

「では、その時直ぐ君は抗議を申込む筈ぢやないか。」と、彼は云つた。

「僕は申込んだよ。」

「そんならそのことは公判録に記載されてゐる筈だ。上訴状にもそれを書き添へておくとよかつたんだが。」

セレーニンはいつも忙しい身で、滅多に世間へ顔出ししなかつたから、ネフリュードフのローマンスについては何も知らなかつたらしい。ネフリュードフはそれに気がついて、自分とマースロワとの特別の關係に就いては、話さない方がよからうと決めた。

「だが、判決が出鱈目だといふことは明白ぢやないか。」

「然し元老院には、それをとやかういふ権利は無いんだ。」

もし元老院で原判決が正當であるかないかといつて、勝手に裁判所の判決を破棄してしまつたら、元老院は何等信頼すべき法律上の根據を持たないといふことになるよ。そして正義の擁護よりも寧ろ正義を侵害することになり、陪審員の決議も全然無意味なものになるだらう。」と、セレーニンは丁度今審議されたばかりの事件を思ひ出して云つた。

「僕はそんな議論は知らないが、唯あの女に罪のないこと

だけは事實なんだよ。そしてこの不當な宣告からあの女を救ふといふ最後の希望も、もう駄目だといふことが分つた。つまり、最もひどい不正が最高法廷に於て確定された譯なんだ。」

「確定された譯ぢやないよ。元老院は事件そのものゝ審議をしたのではなし、又してはいけないのだからね。」と、セレーニンは騒ぎながら云つた。「時に君は多分伯母さんの家に泊つてゐるんだらうね。」と、セレーニンは明かにその話頭を變へようとしながら云つた。「僕は昨日君が來てゐることを聞いたんだ。そしてエカテリーナ・イワーノヴナ伯爵夫人から、こんど來た説教師の歓迎會に君と一緒に來るようにと招待を受けたんだが……」と、たゞ唇だけに微笑を浮べた。

「さうだ、僕は出席したが、直ぐ厭になつて出て了つたよ。」

と、ネフリュードフは、セレーニンが話頭を變へたので、むつとしながら不機嫌に云つた。

「何故厭になつたんだ。それは勿論一方に偏した異宗派的な教義ではあらうが、矢張り同じ宗教心の發現ぢやないか」と、セレーニンは云つた。

「いや、ありやくだらう一種の證語さ。」

「さあ、そんなことはないと思ふね。一體僕等は自分の教

會の教義を薩張り知らないといふことが奇怪な話さ。僕等はロシヤ正教の根本の信條を、新しい天啓か何かのやうに考へてるんだ。」と、セレーニンは現在の自分が懐いてゐる宗教觀を舊友に知らせようと焦るやうであつた。

ネフリュードフは驚いたやうにじつとセレーニンを見成つた。セレーニンは眼を伏せなかつたが、その眼には常に憂鬱ばかりでなく、何だか不快な色さへ現れてゐた。

「それぢや君は、教會の教義を信じてゐるのか。」と、ネフリュードフは訊ねた。

「勿論、信じてゐるさ。」と、セレーニンは生氣のない眼でネフリュードフの眼を眞正面に瞋めながら答へた。

ネフリュードフは嘆息して、「それは變だ。」と云つた。

「だが、またあとでゆつくり話さう。」と、セレーニンは云つて、「今行くよ」と、彼は恭しく近づいて來た廷吏に答へた。「きつと又會はうよ。」と、彼は太息をつきながら附け加へたが、「然し君に會へるか知ら？ 僕は七時の食事時には何時でもゐるよ。家はナデジデンスカヤ街だ。」と、番地を教へた。「考へて見ると、随分久し振りだつたね。」と言ひ足して、彼はまた唇にだけ微笑を湛へながら向うへ行きかけた。

「若し行かれたら行くよ。」とネフリュードフは言つたが、

曾ては最も親しい友達であつたセレーニンがこの簡単な會話のために、まさか敵程ではなくとも、急に赤の他人のやうな遠い隔りのある、氣心の分らない者になつたのを感じた。

二三

ネフリュードフが知つてゐる大學生時代のセレーニンは、善良な息子であり、實意のある學友であり、そして年の割には世才に長けた教育のある男であつた。しかも上品で、何時も綺麗に身装を整へた容貌の美しい、それでゐて稀に見る誠實な潔白な人物であつた。餘り勉強もしなかつたが、いつも成績がよくて、時々論文で金牌を貰つても、學才を街ふやうなことは少しもなかつた。

彼は單に口先ばかりでなく、實行に於いて、人類に奉仕することを、若い頃の目的としてゐた。その目的を果すには、官吏になるより外、道はないと考へて、學校を卒業すると直ぐその全力を捧げようとする仕事を、各方面に互つて系統的に研究し、法律を制定する高等法院の第二部に入るのが最も有益だと決めて、そこに奉職した。ところが、就職して見ると、非常に綿密に且つ正確に履行せねばならぬ仕事があつてはれたにも拘らず、まだ、この奉職に於い

ては人類の爲めに有益なものにならうといふ自己の要求を満足させることも出来ず、又當然なすべきことをなしてゐるといふ意識も見出さなかつた。この不満はやがて、くだらない虚榮心の強い直ぐ上の長官と衝突する度毎にだんだん募つて行つた。が、結局彼は、高等法院の第二部を辭職して元老院に入つた。此處では前より幾らかましではあつたが、やはり同じやうな不満の意識が彼を苦しめた。彼は世の中のことは、かねて期待したり、又必ずかうなくてはならないと思つたりしたことゝは、まるで違つたものであることを痛感した。

元老院に奉職してゐる時に、彼の親戚が侍從職の地位を得させて呉れたので、金モールの大禮服を着飾り、白いリソネルの胸かけを掛けて、その幸福な地位を得させてくれた人達の家へ禮廻りするのに、幌馬車で出掛けなければならなかつた。然し彼はどんなに努力しても、この職務の合理的な理由を見出すことが、どうしても出来なかつた。そして彼はこの職について種々經驗してみると、これもまた『正道でない』といふことを感じた。それでも彼は、この地位を得させて自分に大なる満足と與へてゐると思ひ込んでゐる親戚等の厚意に背くのを恐れ、一つは又自分の卑劣な根性を喜ばしてゐたので、この職をやめることは出来な

かつた。金モールの禮服で着飾つた姿を鏡に寫したり、その地位に對して種々な人達から尊敬を受けたることが彼を喜ばした。

これと同じやうなことが彼の結婚した時にも起つた。世間的に見て、非常に華やかな結婚式が擧げられた。その結婚の主なる理由は、もし彼がそれを拒絶したならば、この結婚を望んでゐる貴婦人の花嫁と、世話した人達の自尊心とを、共に傷つけるやうになると思つたからで、それに又一方では、貴族の若い娘と結婚すると云ふことが、彼の自尊心をそゝつて嬉しかつたからでもある。しかし、この結婚は、すぐに侍從職や元老院の仕事よりも尙ほ一層『正道に適つた事柄』でないといふことが分つた。その細君は子供一人生むと、もう子供は持つまいと決心して、華美な交際場裡の生活を始めた。そこで彼は、同じ世俗的な生活に否應なしに引きずられて行つた。こんなことで、夫の生活を害ひ、自分にも非常な努力と疲労との外何等この生活から得たものは無かつたにも拘らず、彼女は尙も熱心にこの生活を續けて行つた。彼はあらゆる手段を盡してこの生活を變更しようと試みたが、親戚や知己の後援を持つた細君の方に、是非かうしなければならぬと云ふ自信力が強かつたので、彼の計畫は丁度石垣にでもぶつかるやうにすつか

り打碎かれてしまった。

まだほんの子供であつた娘は、長い金髪を房々させて、いつも足を露はに出してゐたが、セレーニンには何だかまるで他人の子供のやうな気がした。殊に彼の考へとすつかり違つて育てられてゐるので、その感じは、かなり深かつた。夫婦の間には、いつも意思が疏通しなかつたが、二人共別に諒解し合はうともせず、それに他人の眼には觸れない、禮儀作法で抑制された静かな無言の争鬭が續けられて行つたので、セレーニンにはその家庭生活が非常に苦しかつた。だから家庭生活は、職務や宮廷に於ける地位よりも更に『正道に適つた事柄』ではないやうに思はれた。

然し何よりも一番に『正道に適つた事柄』でないのは、彼の宗教に對する態度であつた。彼の仲間や同年輩の人々と同じやうに、彼は自分の知識の發達したことに依つて、自分か育てられて來た宗教上の迷信の極端を何の苦もなく打ち破ることが出來た。そして何時そんな迷信から解放されたか自分でも分らなかつた。彼は眞面目な正直な男であつたから、青年時代、大學生時代、それからネフリュードフと親しくなつた時代には、自分が公認宗教（諸教の意、ギリシヤ正教のこゝ）の迷信から解放されてゐることを隠すやうなことはなかつた。

然しだん／＼時が經つにつれて、彼の職務が高くなると共に、殊に當時社會に押し寄せて來た保守的の反動思想が盛んになつた關係から、この宗教上の自由は彼の仕事の上に少からぬ妨げとなつた。家庭に於けるいろ／＼の關係、殊に彼の父親が死んだ時や、その追悼會の時など、また母親が彼に向つて世間並に齋戒することを要求したことなどは別として、彼は職務上絶えず禮拜式や、聖餐式や、感謝禱やその他これと同じやうな儀式に參列しなければならなかつた。實際外面的な宗教上の形式に關係を持たない日は、殆ど稀であつた。それは到底避けることが出來なかつた。彼はこれ等の儀式に參列しつゝ、その場合の態度は次の二つの一つを選ばねばならなかつた。それは、信じないのに信じてゐるやうに見せかけるか、（これは彼の正直な性質として決して出來ないことであつた。）或はこれらの宗教上の外面的形式を虚偽であると認めて、そんな虚偽と思はれるものに參加する必要が無いやうに自分の生活を建て直すか、どちらかを取らなければならなかつた。この大したことゝも思はれないものでも、いざ實行になると、いろ／＼の支障が出てくる。即ち、周囲の人と絶えず争つて行かねばならず、又、自分の境遇をすつかり變更し、職務を棄て、更にまた自分が今までその官職によつて人類のために多大の

利益を齎らしてゐると信じ、將來は尙ほ一層大きな貢獻をしようとする期待してゐるすべての抱負を犠牲にしなければならなかつた。それをするには、自分を正しいものと固く確信しなければならぬのだが、現代の教養あるすべての人が、多少なりとも歴史を學び、一般的に宗教の起原及び教會基督教の起原並びに分裂の状況を知つてゐて、自分の常識を正しいと思つてゐるやうに、彼も亦自分を正しいと思ふ自信は、頗る固いものがあつた。それだから彼は、教會の教義を眞理であると認めずに、自分の方を正しいものとして考へてゐた。然し、日常の生活状態から來る、さまざまの壓迫は、彼のやうな正直一遍の男にも、少し位の偽りを許さないわけには行かなかつた。それは如何に不合理と思はれることでも、それを不合理と確認するまでには、先づ第一に研究する必要があるといふ自分の見解に基づいたのであつた。それは初めは小さな偽りであつたが、だん／＼彼を、現在その中からまつて跳トいてゐるやうな大きな偽りの中へ引きずり込んでしまつたのだ。

彼は自分の中に生れ、且つ育てられて來た正教、周囲の人々からその信仰を強ひられ、又それを認めなければ人類のために有益な自己の活動を續けて行くことが出來ないとされてゐる正教が、果して正しいものであるかどうかと

云ふ問題を自分に課して見たが、その答は豫めちやんと決まつてゐた。それだから彼はこの問題を明かに解答するために、ウォルテル、ショーペンハワー、スペンサー、コントなどの著書を讀まずに、ヘーゲルの哲學書、ヴィネーやホミヤコフの宗教書などを繙ヒいて、これらのうちに彼が自から必要だと考へてゐたものを見出した。即ち宗教の説く安心立命の根據と、それを正しいとする解釋のやうなものとを見出したのであつた。彼はこの教義によつて育てられ、しかも彼の理性は已に久しい以前からそれを排斥してゐたのであるが、然し、それを信じなければ、一切の生活は不愉快に滿たされ、それを正しいと信ずれば、すべてこれらの不愉快は一時に消えて了ふのであつた。それで彼は、人間個の智力では眞理を會得することは出來ない、眞理は唯人の綜合にのみ示現されるものである、眞理を會得する唯一の手段は天啓あるのみで、天啓は教會に依つて保たれて行くものであると云つたやうな在り來りの詭辯を取り入れた。それ以來彼は平素行はれてゐる虚偽を意識することなしに、平然と祈禱式、追悼會、禮拜式などに參列することも出來たし、齋戒したり、聖像の前で十字を切つたり、又彼が人類に利益を齎ホすと意識してやつてゐる職務を續けて行き、それによつて面白くない家庭生活の中にあつて幾分

の慰安を求めることも出来た。然し彼は、かうは信じてゐるものゝ、その信仰は、他の事柄と比較して、もつと『正道に適つてゐない』やうな氣がした。

彼がいつも悲しげな眼付をしてゐるのもこれが爲めであつた。そして又そのために、彼の心の中にまださうした虚偽が固まり切らない以前に親しくしてゐたネフリュードフに逢ふと、昔の純であつた自分を思ひ出した。殊に彼が大急ぎでネフリュードフに自分の宗教觀を仄めかした後では、いつもよりも一層そのことが『正道に適つてゐない』と考へられた。それで彼は惱ましい程の悲しさが募つて來たのであつた。ネフリュードフも、舊友に逢つて嬉しいといふ第一印象が消え去ると、同じやうなことを感じた。

さうして、二人は互に再會を約したが、別に逢ふ機會も作らなかつた。そしてネフリュードフがベテルブルグに滞在中、二人は遂に再會しなかつた。

二四

元老院を出てネフリュードフと辯護士とは一緒に鋪道を歩いて行つた。辯護士は自分の馬車に後から跟いて來いと云ひ付けておいて、ネフリュードフに向ひ、今日元老院議官の噂に上つた某局長事件の顛末を話し出した。話は局長

の罪狀暴露の有様から、彼が當然法律の條規によつて苦役に就かなければならないところを、苦役はおろか、シベリヤの或る縣知事に任命されたことに及び、その醜狀を殘らず曝け出してしまふと、今度は今朝二人がその傍を通つて來た工事中の銅像の寄附金が高官連に横領された一件や、某々名士の思ひ者が相場をやつて大儲けをした話や、某々が細君を金で賣買したことや、その他高官連が、官廳の椅子にふんぞり返りながら、悪黨振りを發揮したり、罪といふ罪を犯して、しかも監獄にもやられず平然と納まり返つてゐる事實などを、得意になつて並べ立てた。辯護士はこんな種類の話は種子がつきない程持合せてゐるらしく、非常に満足さうに話すのであつた。といふのは、彼が辯護士をして金を貯めるのは、ベテルブルグのお歴々が金儲けのためにやる手段よりも遙かに正當であり、公明であることを明かに證據立て得るからであつた。それだから、ネフリュードフが、話を終りまで聞かずに、別れの挨拶もそこ／＼に馬車を雇つて、河岸通りの自宅に向つてどん／＼行つてしまつたのには、辯護士も開いた口が塞がらなかつた。

一方ネフリュードフは、ひどく悲しくなつて來た。それは、先づ第一に、元老院が上訴を棄却した爲めに罪の無いマースロワが無意味な苦痛を更に續けて行かなければならぬ

のと、尙ほその棄却が彼女と運命を共にしようとする彼の變らぬ堅い決心を一層苦しむものにした爲めである。その上に彼は今、辯護士が得意さうに語つた恐るべき罪惡の跋扈を考へてゐるので、猶更悲しみが胸に迫つて來たのであつた。その他曾て優しく、素直で、氣品の高かつたセレニンが今は打つて變つた冷かな憎々しい眼眸を彼に送つたことが、絶えず頭の中を離れなかつた。

ネフリエードフが家に歸ると、門番が幾らか嘲弄ひ氣味で一通の手紙を渡し、或る婦人が門番の室で書いたものと云つた。それはシューストワの母からの手紙で、彼女は娘の恩人であり、救ひ主であるネフリエードフの許にお禮に來たことゝ、ウエーラ・エフレモウナ(ボゴドリホ)のことに就いて是非お話することがあるから、どうぞワシイリエフスキイ島五丁目何番地にある彼女の家までお出でを願ひたい、決してお禮をくどく言つて困らせるやうなことはないから御心配のないやうに、お禮のことは抜きにして、唯お目にかゝれさへすれば喜ばしい、若しも御都合が出来るなら明朝お出でを願へないだらうかと書いてあつた。

もう一通はネフリエードフの舊友で、侍從武官であるボガツイリヨフからの手紙で、ネフリエードフはこの友人に異宗派一件に關する請願書を、直接皇帝に捧呈して貰ひたいと

依頼しておいた。ボガツイリヨフの手紙は肉太な確かりした筆蹟で書いてあつた。彼は勿論約束した通り直接皇帝にお手渡しをすることはするが、彼が一寸思ひ浮んだのは、豫めネフリエードフがこの事件を司つてゐる役人に會つて、願ひの筋を話しておく方がよくなるからうかといふ助言であつた。

ネフリエードフは、今度ベテルブルグ滞在中の最後の數日間を受けたいろ／＼の印象によつて、何一つ望みを達することは出来ないと思ひ込んでゐた。彼がモスクワで考へた計畫は、一度現實に直面すると、直ぐ幻滅に歸する青年時代の空想のやうなものに思はれた。然し、ベテルブルグに來た以上、一旦實行しようと決したすべつてのことを遂行するのが自分の義務であると心得て、とにかく明日ボガツイリヨフを訪れた後、彼の助言通りに宗派問題を司つてゐる役人に面會しようと思つた。彼が書類靴から宗派事件の請願書を出して讀み返してゐると、扉をノックする音が聞え、伯爵夫人エカテリーナ・イワーノワナの家僕が入つて來て、二階にお茶を飲みに來るよりにと傳へた。

ネフリエードフは直ぐ參りますと返事をして、書類を元の靴に入れ、伯爵の居間に足を運んだが、二階に行くまでに窓の中から街に眼をやると、マリエットの栗毛の二頭立の馬

車が見えたので、彼は俄かに元氣ついで、微笑さへ洩らし
た。

マリエットは帽子を被つたまま、この前のやうに黒ずんだ
色合ではなく、何だか明るい、いろ／＼の色の雜つた美しい
服装をして、茶碗を手に持ち、伯爵夫人の安樂椅子の傍に
腰を下して、べちやく／＼喋つてゐたが、彼女の美しい眼は
笑ひに輝くばかりであつた。ネフリユードフが室へ足を踏
み入ると、マリエットは、何だか可笑しな、みだらなこと
を云つたところらしく、——ネフリユードフは笑ひ方で直ぐ
にそれと分つた——薄髭のあるお人好しの伯母は、肥つた
體を揺つて笑ひかけてゐ、マリエットは心持ち微笑を漂はせ
た口を少し捻り、晴々した元氣さうな顔を横に傾けて、殊
更悪戯好きのやうな表情を浮べながら、黙つて對手の方を
見てゐた。

ネフリユードフは二言三言話を聞くと、それがその時のペ
テルブルグの第二のニュースとされてゐるシベリヤの新任
知事に關する挿話であることが分り、マリエットがこれに就
いて何か可笑しなことを言つたので伯爵夫人が堪へ切れず
にいつまでも笑ひ崩れてゐることが推量された。

「そんなに笑はせると、わたし死んでしまひますよ。」と、
咳入りながらエカテリーナ・イワノフナが云つた。

ネフリユードフは挨拶をすませて二人の傍に腰掛け、マリ
エットの浮ついた様子を咎めようとする、彼女は早くも彼
が眞面目な、しかも何か氣に入らないやうな顔付をしてゐ
るのを見て、直ぐに彼の心持に合ふやうに、——彼女は彼
の姿を見た時からさういふ氣持はあつた——顔の表情ばか
りでなく、氣持まですつかり變へてしまつた。彼女は俄か
に生眞面目になつて、まるで自分の生活に對する不滿から
何物かを求め、何物かに向つて進んでゐるかのやうな態度
をした。これは單に一時の氣紛れではなく、實際彼女の持
つてゐた心持で、唯それを言葉には何としても言ひ現はせ
なかつた——この時ネフリユードフも同じやうな氣持にあ
つた。

彼女は仕事の首尾を訊ねたので、彼は元老院でうまく運
ばなかつた事と、セレーニンに出會つた話をした。

「あの方はほんとに何といふ潔白な方でせう。申分のない
騎士ですわ。ほんとに。」と、二人の婦人は、ペテルブルグ
の交際社會に知れ渡つてゐるセレーニンの通り名を付け加
へて云つた。

「あれの奥さんはどんな人ですか。」と、ネフリユードフは
訊いた。

「奥さん？ さうね、人の悪口を云ふのは厭ですけれど、

まあ夫を理解してゐない方なんですわね。あの方までが上訴棄却に賛成するなんて、一體何うしたんでせう？」と、彼女は心からの同情を以て訊いた。「ほんとに恐ろしい氣がしますわ。かうなるとマースロワさんが可哀相ですわね。」と、彼女は溜息を吐きながら云つた。

彼は顔を顰め、話を他に逸らさうとして、彼女の盡力で要塞監獄から出獄したシユーストワの話を持出し、彼女が夫の前をいろ／＼取り做してくれたことを感謝して、更にあの女とその一家が、誰も力になつてやるものがないために非常に苦しんでゐるのを話し出さうとすると、彼女は終ひまで云はせないで、今度は自分の不平を洩らし始めた。

「その話は止めませう。」と、彼女は云つた。「良人が私に、あの女を出獄させてもよいと申しました時は、私はほんとに驚きましたわ。何の爲めに罪のない者を收監したのでせう。」と、彼女はネフリュードフが云はうと思つてゐることを、口にした。「ほんとに、腹が立つて／＼堪らないんですわ。」

エカテリーナ・イワノワナは、マリエットが甥に媚びてゐるのを面白さうに眺めてゐた。

「あのねえ。」と、彼女は二人の言葉が杜絶えた時口を入れた。「明晩アーリンの處へ行つて御覽、キゼヴェツテルさん

がお見えになる筈だから。それからあなたもね。」と、彼女はマリエットの方を向いた。

「あの方はお前に氣を留めてゐらしたよ。」と、彼女は甥に向つて言葉が続けた。「あの方はお前の云つた事がね——私がすつかり話したもんだから——みんないゝ兆だと仰しやつたよ。お前は屹度キリストの御手に歸つて来るだらうつてね。だから明日は是非行くんですよ。マリエットさん、あなたからも勸めて下さいな。それからあなたもいらつしやいよ。」

「奥様がさう仰しやつても、私には公爵に何一つお勧めする資格がありませんわ。」とマリエットは、ネフリュードフに眼配せしながら云つた。その眼配せには伯爵夫人の言葉に對しても、また一般の宗教に就いても二人がちやんと一致した意見を持つてゐるのだと云ふ意味が含まれてゐた。「それに私はその方の事はあまり氣が向きませんので、あなたも御存知のやうに……」

「さうですわね。あなたは何でも一風變つたやり方ね、御自分だけのお考へで何でもなさるんですもの。」

「自分だけの考へですつて？ 私だつて世間一般の女ぐらの信仰は持つてゐますわ。」と、彼女は少し笑ひながら云つた。「それに私、明日はフランスの芝居を見に行くつもり

なんですか。」

「あらさうですか。あなたもうあれを御覽なつて……あの何とか云ふ女優を？」と、エカテリーナ・イワノワナは云つた。

マリエットは有名なフランスの女優の名を聞かされた。

「是非あなたも御覽なさいましな、それは素晴らしいんですよ。」

「ぢやあ伯母さん、女優と説教師とどつちを先にしますかと、ネフリュードフは笑ひながら訊いた。

「そんな揚足（あやし）をとるもんでありませんよ。」

「私は説教師を先に見て、それから女優と云ふ順序だと思ひます。折角の説教の味が臺なしにならないようにですね。」と、ネフリュードフは云つた。

「さうぢやありませんわ。矢張りお芝居を見てから、後で懺悔なさる方がいゝやうですわ。」と、マリエットが云つた。

「二人して人を茶化すものぢやありません。説教師は説教師、お芝居はお芝居です。人間は救はれたために、何も顔を長くして泣いてばかりゐる必要はありませんよ。信心さへすれば、それで自然と楽しくなりますよ。」

「伯母さん、あなたのお説教の方がどの説教師よりも巧（うま）いやうですわね。」

「まあ、とにかくね。」と、マリエットは少し考へてから云つた。「明日は私の機敷にいらつしやいな。」

「一寸行かれないかも知れません。」

その時家僕が訪問客があると傳へたので、話はそれきりになつてしまつた。お客は、エカテリーナ・イワノワナ伯爵夫人を會長としてゐる慈善會の祕書であつた。

「あゝ、面白くもない人が来ましたわね。いつそあつちで會ふことにさせよう。直ぐ戻つて来ますよ。マリエットさん、お茶を注いでやつて下さいな。」と云つて、彼女は速（はや）い、ちよこくした足どりで置間の方へ行つた。

マリエットが手袋を脱ぐと、引緊（ひきしま）つた可なり平たい手が出て、無名指には寶石入の指環が光つてゐた。

「お茶を召上りますか。」と、彼女は小指を妙な恰好に突出して、アルコールランプの上にある銀の急須を取つた。

彼女の顔は、眞面目で悲しさうだつた。

「豫（かね）て私とその思想を尊敬してゐる方々が、私の境涯と私と云ふものを混同しておゐでになると思ふと、いつもひどく心がくさくさ致しますの。」

彼女は最後の言葉を云つた時、殆ど泣き出しさうにした。たとへこの言葉を解剖して見たところで、そこには何の意味もなかつたが、又あつたとしても極めて漠然とした

ものに違ひないのだが、ネフリエードフには、特別に深い眞面目な善いことが含まれてゐるやうに思はれた。若くて美しい立派な装ひをしてゐる彼女が、この言葉と共に投げた輝くばかりの眼眸が、それ程彼を牽きつけたのであつた。

ネフリエードフは黙つて彼女を眺めてゐたが、彼女の顔から眼を離すことが出来なかつた。

「あなたは、私がああなたのお考やあなたのお心持を端から端まで、了解してゐないとお思ひですか。あなたのなすつたことは誰でも存じ上げて居りますわ。それは公然の祕密ですよ。それで私も心をうち込んでお褒め申してゐるんですわ。」

「實際何もさう心をうち込んで戴く程のことはありません。まだほんの少しばかりやつただけなんですから。」

「それはとにかく、私はあなたのお心持が分りますし、あの女の方のこともよく分つてをりますわ。では好うございませう。この話はこれで止めておきませう。」と、彼女は彼の顔に不快の色が浮んだのを見て、話を打ち切つた。「ですけれど、私も監獄内の苦しさを、恐ろしさを實見しまして、よく分つてゐますわ。」と、彼女は唯彼を自分に牽きつけたいばかりに、彼にとつて一番氣に入りさうな事柄を女心に推量しながら、かう言つた。「あなたは苦しんでゐる人達

を、あんな無慈悲な冷淡な役人達のために惱まされてゐる人達をお助けなさる思召なんでせう……。私はよく分つて居りますわ。ほんとにそのためなら命でも投出す氣になりますわ。實際私だつて投出したいくらいですよ。ですけど人にはそれ／＼自分の運命といふものがありましてね……」

「それではあなたは御自分の運命を不満足に思はれるのですか。」

「私？」と、彼女はこんな質問にはまさか出會ふまいと思つてゐたらしく、さも吃驚したやうに訊いた。「私は満足してゐなければならぬんですもの。それで満足して居りますわ。ですけどお腹の蟲が起つて來ますからね……」

「その蟲が起つたら二度と眠らせてはいけませんよ。吾々はこの良心の聲を信じなければなりません。」と、ネフリエードフはすつかり彼女の偽りの尻にひつかゝつてしまつた。

その後ネフリエードフは、屢々彼女と話し合つたことを残らず思ひ出して、恥づかしくなつた。彼は嘘八百と云ふよりも、寧ろ自分の御機嫌をとるために調子を合せた彼女の言葉や、彼が監獄の恐ろしさと、田舎で受けた印象などを話した時、如何にも感動して聴き入つたやうな彼女の顔を思ひ出した。

伯爵夫人が室に歸つて來た時には、二人は唯舊くからの

知合ひどころか、丁度何も知らない大勢の中で、唯二人だけが互ひに心を知り合つてゐる無二の親友だと云つたやうな態度で話をしてゐた。

二人は、官憲の不法や、不幸な人達の惱みや、農民の貧困のことなどを話し合つてゐたが、實際は話の最中に互ひに見交してゐる眼と眼で、「私を愛して下さる？」『愛してゐます。』と云ふ問答が、絶えず交されてゐるのであつた。そして性の感情が思ひがけない濃厚な形をとつて来て、二人を互ひに接近させた。

歸りがけに彼女はネフリードフに向つて、出来ることならいつでも盡力をするつもりであると云ひ、なほ、極く大事な話があるから、明晩は是非僅かの時間でもいゝから劇場に来て呉れるように言つた。

「ね、また何時お目にかゝれるでせう？」と、彼女は溜息をついて、寶石の指環で輝やいてゐる自分の手に、靜かに手袋を嵌めた。「明日はきつといらつしやると仰しやつて下さいよ。」

ネフリードフは行く約束をした。

その夜ネフリードフは獨り自分の室の寢具に横はつて蠟燭を消したが、長い間寝つかれなかつた。マースロワのことや、元老院の判決や、何としても彼女と一緒に往かう

と決心したことや、土地の權利を放棄してしまふことなどを思ひ出してゐると、俄かにこれに答へるやうにマリエットの顔が現はれて来た。彼女が「また何時お目にかゝれるでせう？」と云つた時の溜息や眼眸、さては口許から溢れた微笑などが如何にもはつきり現はれて来て、眼のあたり彼女に會つたやうで、思はず微笑せずにはゐられなかつた。彼は「シベリヤに行くのはよいことだらうか。財産を放棄するのはよいことだらうか。」と自問した。

窓掛を透して見えるペテルブルグの夜は明るかつたが、これらの間に對する答へは、一向瞭りしてゐなかつた。彼の頭の中は混亂した。彼は以前の心持や、心の動きを思ひ出して見たが、心の中にはもう以前のやうな確りした自信力はなかつた。

『自分は何でもばつと考へつくが、とても實行に移すだけの力がない。却つていゝ行ひをした後で後悔する。』と、彼は自分の心に云つた。そしてこれ等の間には答へる力もなくなり、長い間感じたことのなかつた憂愁と絶望を抱いて、丁度よくカルタに負けて寝ついた時のやうな重苦しい眠りに落ちて行つた。

二五

翌朝眼が醒めた時、ネフリードフは第一に、昨日何か醜みにくいことをしたやうな気がした。

彼はいろ／＼思ひ出して見たが、何も醜みにくいこともしなかつたし、悪いこともしなかつた。唯悪い考へだけは確かに起した覚えがある。それは、彼の現在の計畫——つまりカチュィンシャと結婚し、土地を農民へ分配しようといふ考へは實じつ現げんされない空想であり、到底彼の堪へられないことであり、わざとらしい不自然なものであるから、今まで通り生きて行かなければならぬと考へたのである。

彼は悪事を行った譯ではないが、それよりも遙かに悪いことをしたのであつた。といふのはあらゆる悪い行爲の根源たる悪い考へを起したからだ。悪い行爲は繰返さないうにも出来るし、悔い改めることも出来る。然し悪い考へはあらゆる悪いことを生み出すものである。

悪い行爲は他の悪い行爲への道を滑りよくするだけであるが、悪い考へはこの道にどし／＼人を引つぱり込んで行くものである。

この朝ネフリードフは、昨日の考へを頭に繰返して見た。そして、あんなことを、たとへちよつとの間にしろ、よくも正しいことと考へたものと、自分ながら呆おろれてしまつた。彼がこれからしようと計畫したことは、全く新し

いことで、どんなに困難であつても、それが現在では彼の執るべき唯一の生活法であることを知つてゐた。これに反して、以前の生活に立戻ることは慣れ切つたことで、それがどんなに容易なことであつても、死に等しいものであることを知つてゐた。今から考へると、昨日の迷ひは、よくあることだが、丁度人が十分睡眠をとつて眼が冴さえてゐても、また重要な愉快な仕事を目前に控へながら、もう起きねばならない時刻だと承知してゐても、尙ほ依然として寢床の中に寢ね轉ころんで安逸を貪らうとするのと同じやうな考へだと思つた。

ペテルブルグの滞在も愈々今日限りだといふその朝、彼はワシリエフスキイ島にあるシューストワの住居を訪れた。

シューストワは二階住居をしてゐた。ネフリードフは門番に教へられた通り、裏口に廻つて、眞直まぢなな急な階段を昇り、食物の臭におひがぶん／＼する暑苦しい臺所に入つた。其處には、エプロンをかけ着物の袖をまくり上げて眼鏡をかけた、可なり年老つた女が籠かごの傍に立つて、湯氣の出てる手鍋の中をかきまぜてゐた。

「どなたに御用ですか。」と、彼女は眼鏡越しに、ネフリードフを臆おそめながら、鹿爪しかづめらしく訊ねた。

ネフリュードフが名を告げるか告げないに、彼女の顔には
膽をつぶしたやうな、然し嬉しさうな表情が浮んだ。

「おや公爵様であらうしやいますか。」と、前掛で手を拭きながら彼女は云つた。「何うして裏口なんかうらいらしつたんです。あなた様は私共の大恩人でみらつしやいます。私は彼女の母でございます。まだあんな小娘だのに殺されかかつたのでございますよ。ほんとにお蔭様で助かりました」と、彼女はネフリュードフの手をとつて接吻しようとした。「昨日、お宅様へお伺ひしたんですよ。妹が是非上れと言ふものですから。妹も此處に居ります。どうぞ此方へ、私が先に立つて御案内致します。」と、シューストワの母親は云つた。そして狭い扉を開け、暗い廊下を通つてネフリュードフを案内しながら、途中で端折つた着物や髪を直した。「妹はゴルニエロワと申します。多分御存知だらうと思ひますが。」と、彼女は扉の前で立止まりながら小聲で附加へた。「政治運動の仲間に入つて居りまして、なか／＼惻巧な女でございますよ。」

廊下から扉を開けて、シューストワの母はネフリュードフを狭い室に案内した。其處には卓子の向うの小さい長椅子に縦縞の更紗の仕事着を着た背の低い肥つた娘が腰掛けてゐた。彼女は母親に似た蒼白い丸顔をして、髪の毛は纏れた

薄色であつた。彼女と差向ひにロシヤ風の襟に刺繍をしたルバーシユカを着て、黒い口髭と頸鞆のある青年が、體を二重に屈げて肘掛椅子に腰掛けてゐた。二人はまつたく話に夢中になつてゐたらしく、ネフリュードフが扉口に入つた時、やつと振返つて見た。

「リーダ！ ネフリュードフ公爵様がおいでになつたよ。ほらあの……」

蒼白い顔の娘は、耳から前に出てゐる髪の毛の房を直しながら、神経質らしく飛上つて、吃驚したやうに、その大きな灰色の眼でネフリュードフを見詰めた。

「ではあなたが、あのウエーラ・エフレモウナが私に助けて呉れと頼んだ、謂ゆる危険な御婦人なんですか。」と、ネフリュードフは微笑を含みながら手を差伸べた。

「はい、さうなでございます。」と、リヂヤは、美しい齒並を見せながら、無邪氣な子供らしい微笑を湛へた。「叔母が大變あなたにお會ひしたが、つて居りましたよ。叔母さん！」と、彼女は扉の方へ向つて、嬉しさうな優しい聲で呼んだ。

「ウエーラ・エフレモウナは、あなたが監獄に入れられたのを大變心配してゐましたよ。」と、ネフリュードフは云つた。「どうぞ彼方へ、いや此方がいゝでせう。どうぞお掛け下

さい」と、リディヤは今青年が立上つたばかりの、柔かい、
毀れてゐる肘掛椅子を指さした。「私の従兄弟でザハロー
フと申します。」と、彼女はネフリュードフが青年を顧みて
ゐる眼付に氣がつくと、さう云つた。

青年はリディヤと同じやうな優しい微笑を浮かべながらお
客に挨拶して、ネフリュードフが彼のゐた場所に腰を下す
と、窓の傍から椅子を持つて来て隣に腰掛けた。他の室か
らもう一人の薄色の髪をした十六歳位の中學生が入つて
来て、黙つて窓際に腰を下した。

「ウェーラ・エフレモウナは叔母の友達で偉い方ですが、私
はまるで知らないやうなものです。」と、リディヤが云つた。
この時隣の室から、白い仕事着の上に革帯を締めて、ひ
どく快活で伶俐さうな顔をした婦人が入つて来た。

「御機嫌よう。直ぐにおいで下さつて有難うございます。」
と、彼女はリディヤと並んで、長椅子に腰掛けるが早い口
を開いた。「ウェーロチカ(ウェーラ)はどうして居りますか。
お會ひになりました？ 辛抱して居りますか。」

「え、愚痴一つこぼしませんよ。」と、ネフリュードフは云
つた。「そして自分でも元氣旺盛だと云つてゐますよ。」

「成程ね、ウェーロチカらしいわ。あれの言ひさうなこと
ですよ。」と、笑ひながら點頭(うなづ)いて叔母は云つた。「あれをよ

く理解してやらなけりや。ほんとに立派な性格なんです
からね。何でも人の爲めに働いて、自分のことはちつとも考
へないんですよ。」

「さうです。あの女は自分のことは何も考へずに、唯あな
たの姪御さん(シユースト)のことばかり心配してゐまし
たよ。姪御さんが何の罪もないのに監獄に入れられたのを酷
く氣にかけてゐるやうでした。」

「さうなんでしょうよ。」と、叔母は云つた。

「ほんとにぞつと致しますわね。實際のことを申しますと
彼女はまつたく私の爲めにひどい目に逢つたのですよ。」

「叔母さん、それはまるで違ひますわ。」と、リディヤは云
つた。「私はあなたがゐなくても書類を預つてゐたでせう
よ。」

「まあ、私の方がよく事情を知つてゐるから黙つてゐらつ
しやい。」と、叔母は言葉を續けた。「ねえあなた」と、今度
はネフリュードフの方を向いて云つた。「事の起りはかうな
んですよ。或人が私に書類を預つて呉れと頼んだのですが
私は家がないのですから彼女の處へ持つて行つたのです
よ。するとその晩、家宅捜索がありまして、書類も押收され
彼女もそのまゝ拘引されて了りました。それから今まで監
獄に入れておいて、書類を誰から受取つたか白状するやう

に責めつけたんですよ。」

「でも、私は白状しませんでしたわ。」と、リディヤは邪魔にもならない髪の毛の房を神経質的にひつぱりながら早口で云つた。

「お前が白状したなんて私は云ひはしませんよ。」と、叔母は打消した。

「ミーチンが捕まつたのは私のせゐではないんですわ」と、リディヤは顔を赤くして、氣遣はしげにあたりを見廻した。

「リードチカ(リディヤの愛稱)、そのことを云ふのはお止しよ。」と、母親は云つた。

「何故なの。私は云つて見たいのよ。」と、リディヤは云つた。もう笑ひもせず顔を赤くして、髪の毛の房も直さずに指に巻きながら絶えず四邊を見廻してゐた。

「昨日お前はこのことを云ひ出したらあんなに興奮したぢやないか。」

「構はないわ……放つといて頂戴よ、ね、お母さん。私は白状しないで黙り通してましたわ。役人が叔母さんのことや、ミーチンのことに就いて二度も調べたけれど、私は何も云ひませんでしたわ。そしてこれからは何も返事をしないと、役人に云つてやりまゐたのよ。さうしたらあの……ペトロフが……」

「ペトロフと云ふのは憲兵の間諜でひどい悪黨ですよ。」叔母はネフリュードフに姪の言葉を説明しながら、かう挿んだ。

「さうすると彼奴が。」と、リディヤは興奮しながら早口で言葉を續けた。「私を説き付けるんですよ。『あの誰にも迷惑をかけないから何もかも僕に話してしまひなさい。さうすれば却つて……いや、あなたが話してしまへば、若しかすると何んでもないのに冤の罪を被て苦しんでゐる人を助けることになりますよ。』なんてうまく云ひましたか、私はやはり何も知らない」と云つてやりました。すると彼奴が『そんならいい。何も口をきかなくてもいい。その代り俺の云ふことも打消してはいかんぞ』と云つて、ミーチンを名指して、遂々それにきめてしまつたんですよ。」

「その話はお止し。」と、叔母は云つた。

「まあ叔母さん口を出さないでゐて下さいよ。」と、彼女は髪の毛の房を引張りながら四邊を見廻し尙も話を進めた。

「それから思ひも寄らないのに、まあお察し下さいまし、その翌日隣りの人が監房の壁を叩いてミーチンが捕まつたつてことを知らせてくれましたのよ。で、私は自分があの人を賣つたやうな氣がして、大層苦しみましたよ。ほんとに氣狂ひになるんぢやないかと思ふ程苦しんだんです。」

よ。」
「あの人が捕まつたのは、全くお前のせみでないことが分つたんですよ。」と、叔母は云つた。

「だつて私はそれを知らなかつたんですよ。私には自分があの人を裏切つたやうに思はれて、監房の中をぐる／＼歩きながらそのことを考へずにはゐられませんでしたわ。全く裏切つてしまつたとばかり思ひ續けてゐましたわ。横になつて眼をつぶると、誰か耳の傍で、——賣つたんだ賣つたんだ……ミーチンを、ミーチンを賣つてしまつたんだと、囁くんですよ。勿論これは幻覺だと云ふことは分つてをりましたけど、それがいつまでも耳について、聞かない譯に行きませんでしたわ。寝つかうとしても考へまいとしてもやはり駄目でした。ほんとに恐ろしいことでしたわ。」と、リディヤは、益々興奮して、髪の毛を指に捲いたり、解いたりしてあたりを見廻しながら云つた。

「リードチカ、氣をお静めなさいよ。」と、彼女の肩に手を觸れながら母親は云つた。

しかしリードチカは、もう話を止めることは出来なかつた。

「もつと恐ろしいことがあつてよ……」と、彼女はまだ何か云ひかけたが、言ひ終らないうちに急に泣きだして、長

椅子から立上つて安樂椅子に突つかゝりながら室から駆け出した。母親はすぐに彼女の跡を追うた。

「悪黨どもを絞め殺してやれ。」と、窓の上に腰かけてゐた中學生が云つた。

「お前は何を言ひだえ？」と叔母は訊ねた。

「何でもないさ、一寸云つて見ただけでですよ。」と答へて、中學生は卓子の上にあつた巻煙草を一本とつて、喫かしはじめた。

二六

「え、若い者にとつて、獨房に入れられるのは、ほんとに怖ろしいことですよ。」と、頭をふつて、紙巻煙草を喫かしながら、叔母は言つた。

「誰にだつてさうでせう。」と、ネフリュードフは言つた。

「いゝえ、皆が皆といふ譯でもありませんよ。」と、叔母は答へた。「本當の革命家などは監獄へ入ると、却つて氣樂になつて、心が落着くんだと申しますよ。あの人はいつも不安と貧乏と恐怖のうちに苦しんでゐます。自分一身のためばかりでなく、他人のため、主義のために氣の休まる時がないのです。それが監獄に入れられると、そんな心配や怖れが無くなつて、いろんな責任も除れて安心して居られ

るのですから、捕まると却つてはつとさうですよ。けれども若い者や、何の罪もない者は——いつもリードチカのやうな何の罪もない者から先きに捕まるんですが——誰でも最初はほんとに怖氣でしまひますわ。それも自由を失ふとか取扱ひが亂暴だとか、食べ物が悪いとか、空氣が悪いとか——何もかも心に任せないことばかりですけど——こんなことは大したことぢやありません。ですけど、初めて監獄に入れられた時感じるやうな精神上の苦しみ、それさへなかつたら、たとへ監獄内の不自由は二倍にならうと我慢が出来るでせう。」

「では、御經驗でもお有りになるんですか？」

「私ですか？ 二度ほど入りましたよ。」と、叔母は淋しげな優しい微笑を浮かべながら答へた。「最初私が捕へられました時は——やつぱり何の罪もなかつたのですが。」と、彼女は言葉をつなげた。「丁度私が二十二の時で、子供が一人ある上に妊娠までして居りました。あの時、自由を失つて、子供や夫から引離された時は、何とも言へない辛い思ひがしました。私が人間でなくなつて、品物同様になつて了つたと思ふとそれは堪りませんでした。私が娘に左様ならを言はうとしますと——何でもいゝから早く馬車に乗れと言ふし、一體何處へ連れて行くんですと訊ねますと——行つ

て見れば分るといふ返事なんです。何の科で連れて行くんですと訊ねても——教へては呉れませんでした。それから向うへ行つて、一通り取調べが済みますと、着物を脱がせて三十號と番號のついた獄衣を着せました。そして圓天井の監房へ連れて行つて、扉を開けて私を其處へ突き入れ、扉を閉めて錠を下すと、みんな行つてしまひました。たゞ一人の番兵が、鐵砲を擔いで物も言はずに往つたり來たりしてゐましたが、たまに監房の扉の隙から覗くだけでした——その辛さつたらありませんでしたよ。まだ覚えてゐますが、あの時何よりも腹の立つたのは、憲兵士官が煙草をやらうかと言つた時でした。その位ですから、この男は煙草喫みが煙草を喫まずには居られないといふことを知つてゐたに違ひありません。それを知つてゐるほどなら、どの位の人間が自由を愛し、光明を愛してゐるかといふ事も知つてゐる筈ですし、母親が子供を愛し、子供が母親を慕ふ事も分つてゐる筈なんですわ。それなのに何の容赦もなく私を一切の大切なものから抜き離して、よくも黙扱ひにして檻の中などに投り込まれたものです。こんな目に遭はされては誰だつて罪を犯さずには居られませんよ。たとへ神や人を信じ、人はお互ひに愛し合ふものだと信じてゐた人でもこんな目に遭つたらもう信じなくなりますよ。私はそれ

からといふもの、人間を信じなくなつて、人が悪くなつてしまひましたよ。」と、彼女は微笑しながら言葉をつらした。リディヤ(チカド)の出て行つた扉から、彼女の母が戻つて来て、娘は非常に氣を取り亂してゐて、この席へは出て來られないと言つた。

「何のために若い身空みそらであんな目に遭はされたんでせう？」と、叔母は言つた。「取り分け私が堪たまらなく思ひますのは、たとへ知らないとはいひながら、私がある原因になつてゐることなのですよ。」

「田舎へでも行つて靜かにしてゐたら直るでせう。」と、母親は云つた。「當分父親の許もとへやりませう。」

「ほんとにあなたでもいらつしやらなけりや、あの娘は死んでゐたかも知れませんよ。」と、叔母は言つた。「ほんとに有難うございました。それからあなたにお目にかゝりたいと思ひましたのは、實はこの手紙をウエーラ・エフレモウナに渡して頂きたいと存じましたので。」と、彼女は隠袋から手紙を取り出しながら言つた。「これには封をしてありませんから、お讀みになつた上、お破り下さつても構かまひません。それとも渡していゝと思ひなすつたら、どうぞお渡し下さいまし。」と彼女は言つた。「何も祕密なことは書いてありませんから。」

ネフリードフは手紙を受取つて、先方へ手渡すことを約束して立上ると、別れを告げて外へ出た。彼は手紙を讀まずに、そのまゝ封をして、名宛人に渡さうと決めた。

二七

ネフリードフがまだベテルブルグに滞在してゐなければならなかつた最後の用件は宗派事件であつた。それは以前中隊にゐた時の同僚で、今侍從武官になつてゐるボガツイリョフの手を経て、陛下に請願書を捧呈しようと思つてゐた。それで、朝早く彼はボガツイリョフの處を訪ねると丁度これから出掛けようとして朝食を取つてゐるところであつたので、直ぐ會ふことが出来た。ボガツイリョフは、背は高くないが、がつしりした男で、素晴らしい腕力家であつた——彼は蹄鐵を曲げることが出来た——しかも人の好い、正直で率直な、おまけに自由思想さへ持つてゐた。こんな性質ではあつたが、彼は宮廷に關係が深く、皇帝や皇室に忠勤を勵んでゐた。そして彼はかういふ上流階級の中に暮してはゐるが、その善い方面だけを見て、悪い腐敗した方面には少しも觸れないといふ驚く可き交際術おぼろげを辨わへてゐた。彼は決して他人のことを彼是れ言つたり悪企わる企み

をしたりすることはなかつた。何時も黙り込んでばかりゐるが、偶に物を言ふ時は無遠慮に高い、まるで怒鳴つてゝもゐるやうな聲で、言ひたい放題のことを話した。これは社交といふ方からでなく、彼の性格が生れつきかうなのであつた。

「よう、これは好いところへ来て呉れた。朝飯は何うだね？ まあ掛け給へ。素敵に旨いビフテキだがね！ 僕はいつも實質本位だよ、終始一貫さ。はつはは。ぢや葡萄酒でもやり給へ。」と、彼は赤葡萄酒の壺を指して怒鳴るやうに言つた。「それから、君の例の一件は承知した。捧呈するよ。直き／＼お手許へ差し出すよ——確かにお渡しする。だがね、これは僕の考へだが、その前にトポロフに一べん會つて置いた方が都合が好いだらうと思ふんだ。」

ネフリユードフはトポロフのことを言ひ出されて嫌な氣がした。

「宗教上のことはみんな奴の裁量如何にあるんだから。陛下へ直奏したところで、矢張りトポロフに御下問なさるだらうから、結局同じこつた。多分あの男と君は直接交渉することになるだらうよ。」

「君がさう言つて呉れるんなら行つて見よう。」

「それが好いよ。ところで、ピーテル(ペテルブルグの俗稱)へ来て何

を感じるかね？」と、ボガツイリョフは叫ぶやうに言つた。「話して呉れ給へ。えゝ？」

「まるで催眠術にかゝつてゐるやうだよ。」

「催眠術にかゝつてる？」と、ボガツイリョフは鸚鵡返しに言つて聲を立てゝ笑つた。「食べたくないかね？ ぢや隨意にし給へ。」彼はナブキンで口髭を拭いた。「ぢや、君はあの男の處へ行くだらうな？ えゝ？ 彼奴が若し承知しなかつたら僕の處へ持つて來給へ。明日捧呈するから。」と、彼は卓子から立上つて、口を拭くと同じやうに、無意識に大きく十字を切つて、サーベルを劍帯に吊り始めた。「ぢや、これで失敬するよ。出掛けにやならんのでね。」

「僕も一緒に出よう。」と、ネフリユードフは言つて、ボガツイリョフの逞しい廣い手を満足さうに握つた。そしていつもながら、健康な、すが／＼しい愉快な印象を受けて、知らず／＼のうちに、彼と階段の上で別れた。

トポロフを訪ねたところで、好い結果は得られないと思つたが、ネフリユードフは兎も角、ボガツイリョフの助言を無にする譯にも行かないので、宗派事件の運命を握つてゐるその男のところを訪ねて行つた。

トポロフの占めてゐる地位といふのは、その使命に於いて内面的に矛盾したもので、道徳的感情の痲痺した遲鈍な

人間でない以上、それを認めない譯には行かないのだが、トポロフは實に二つの消極的性質を具へてゐた。彼の占めてゐる地位の矛盾といふのはかうである。教會はその性質上神自身が建設されたもので、たとへ人間が如何なる努力をもつてしても人間や悪魔の力では動かすことの出来ないものであるのに、彼の地位はその性質上、外部的手段や壓迫によつて教會を維持し保護することをその使命としてゐる。即ちこの何ものにも動かされない神の制度が、人間の制度、トポロフがその頭となつて屬僚達を使つて支配してゐる役所(神聖な務所)によつて支持され保護されなければならないといふのである。トポロフはこの矛盾に氣がつかないし、又それを考へようとも思はなかつた。彼は、悪魔も動かすことの出来ない教會を、カトリック教の牧師やプロテスタントの宣教師やその他異端者達が破壊しやしまいかと、怖ろしく眞面目に心配してゐるのであつた。彼は、根本的な宗教的感情や人間の平等や同胞感の意識を失つたすべての人々と同じやうに、民衆を自分とは全然別種な存在と考へ、自分には信仰など無くとも毫も差支へないが、一般民衆にはどうしても必要缺く可からざるものであると堅く信じてゐた。で、彼の心には何等の信仰もなく、さういふ無信仰が却つて便利で氣樂だと思つてゐた。併し民衆が自分と同じ

やうになつては一大事だと心配して、彼がいつも言つてゐるやうに、民衆をさうした状態から救ひ出すのが、自分の神聖な義務だと考へてゐた。

或る料理の本に、蟹は生きながら煮られるのを喜ぶといふことが書いてあつたが、彼はこの料理の本と同じく、而も料理の本はそれをたゞ比喩の意味に使つてゐるのに、彼は直接その通りに信じてゐた。そして民衆は迷信を好むものであると考へ、それを口にも出して言つた。

彼が宗教に對して執つてゐる態度は、まるで腐つた肉で鶏を飼つてゐる養鶏屋のやうなものであつた。腐つた肉は飼主にとつては非常に厭なものであるが、鶏が喜んで食べるから、その腐つた肉をあてがつて置かなければならないと思つてゐた。

イウエールスキイや、カザンや、スモレンスクなどの聖母像を拜するのは愚昧な偶像崇拜に過ぎないけれども、國民がそれを好んで信じてゐるから、何うしてもこの迷信を支持して行かなければならないといふのが、トポロフの考へであつた。しかし、自分自身の眼を開いて民衆の眼を開かうともせず、また民衆を無智な暗の中から導き出さうともせず、彼等の迷信を益々深めることばかり考へてゐるやうなトポロフの如き残酷な人々が常に絶えたことがなかつた

し、現に今もゐることが、民衆の間に迷信の行はれる根本の原因であるといふことに、トポロフは氣づかないのであつた。

ネフリュードフがトポロフの客間へ入つて行つた時、彼は丁度、書齋で元氣のいゝ貴族出の尼僧と話し込んでゐるところであつた。この尼僧と云ふのは、西部地方で、正教への改宗を、強制的に命じられてゐるウニャット派(ローマンカト正教と合同せ)の間に希臘正教を傳道し支持してゐる女である。

應接室に控へてゐた取次の役人はネフリュードフに來意を訊ねて、宗派事件のことで皇帝陛下に請願書を捧呈する依頼に來たことが分ると、それを一應拜見することは出来ないかと訊ねた。で、ネフリュードフが請願書を渡すと、役人はそれを持つて主人の居間へ行つた。するとヴェールの垂れた聖帽を被り、黒い裾長な法衣を引いた尼僧が室から出て來て、爪を綺麗に長く伸ばした眞白な指を組み合せ、黃玉の珠數を手繰りながら戶外へ出て行つた。トポロフはなか／＼會はうとはしなかつた。彼は請願書を讀んでは首を振つてゐた。明晰な力強い文章で書いてあるのに驚いて不快になつたのである。

『これが若し陛下の御手許にはいつたら、いろ／＼と面白

くない御不審と御下問とを受けねばならぬだらう。』と、請願書を讀み終へて彼は考へた。そしてそれを卓子の上に置くとき、ベルを鳴らしてネフリュードフを通すやうに言ひつけた。

トポロフはこの宗派問題のことを思ひ浮べた。彼は既に前にもこれに關する請願書を受け取つてゐた。それはかういふ譯である。この異宗派は正教の信條に違背してゐるので、一度は説諭され、二度目には裁判沙汰になつたが、すぐ放免された。すると正教會の僧正や縣知事などが、この異宗徒達の結婚は正教會の式によらなかつたから正當でないと言ひ出して、彼等の夫や妻や子供を引離して別々な處へ流刑にしようとした。そこで親や妻は彼等を引離さないやうにと歎願した。トポロフは最初、事件が彼の處へ持ち込まれた時のことを思ひ出した。その時、その處分を停止したものか何うか、決し兼ねた。しかしこれ等の百姓達の家族を引離して別々に流刑に處分することを許したところで、別に害になる譯ではなし、若し今のまゝに放つて處分しないとすれば、正教を脱する百姓が出て來て、悪い結果を見ることになると思つた。それに僧正達も熱心に種々と主張したので、彼はこの事件をその成行きに委せようと思つた。

ところが今度ネフリュードフのやうな、ペテルブルグの要路に關係を持つてゐる後援者が出て來たので、慘忍な處置として陛下に直訴されたり、または外國新聞によつて論じられることも有り得るので、トポロフは直ちに意外な決心をしたのである。

「今日は」と、如何にも忙しげな様子で言つて、立つたまゝネフリュードフを迎へ、すぐ用談に入つた。

「この事件なら存じてゐます。請願人の連名を見ると直ぐに、あの不幸な人達の一件だと思ひましたよ。」と、請願書を手にしてネフリュードフに見せながらかう言つた。「私はこの一件を忘れてゐましたが、御注意下さつて何より有難い！これは地方の役人共がつひ熱心になり過ぎた結果でして……」

ネフリュードフは黙つたまゝ、じつと青白い假面のやうな顔を、不快な氣持で見つめた。

「では、この處分を直ぐ廢棄して、百姓達をそれ／＼家に歸すやうに、私から命令を出させう。」

「と申しますと、つまりこの請願書は出さなくてもいい譯ですか？」と、ネフリュードフが言つた。

「さうです。確かはこの私がお約束致します。」と彼は特に『私』といふ言葉に力を擡めて、自分は正直で、自分の言葉

は最も確かな保證だと自ら信じてゐるやうに答へた。「いつそのこと、今直ぐに命令書を書きませう。少時お掛け下さい。」

彼は卓子に近よつて書き始めた。ネフリュードフは立つたまゝ、この男の狭苦しい禿げた頭や、ペンをさら／＼走らせてゐる太く青い筋だらけの手を眺め下してゐたが、どう見てもすべてに冷淡らしいこの男が、直ぐこのやうに請願を許したり、種々と鄭重に取り計らつて呉れるのは、何うしたことだらうと驚いてゐた。何故だらう？……

「さあ御覽の通りです。」と、トポロフは封筒に入れて封をしながら言つた。「どうぞ請願人達に譯を話してやつて下さい。」と、付け加へて、微笑を見せるつもりか唇を引延ばした。

「一體何ういふ譯であの人達は苦しめられたんでせう？」と、ネフリュードフは封筒を受け取りながら言つた。

トポロフは頭をあげたが、ネフリュードフの質問を、満足に思つたかのやうに微笑した。

「それを此處で申上げる譯には行きませんが、しかし、人民の利益は吾々によつて保護されてゐるのですから、時として宗教問題に熱心になり過ぎて過激に互ることがあつても、それは今日擴がつてゐる無信仰ほど怖ろしいものでも

なく、又毒にもならないといふことだけは申上げられませう。」

「然し、宗教の名の下に、善の第一の要求が破壊されるといふことは、一體どんなものでせう？——例へば一家を離散させるといふやうなことが？」

ネフリュードフの言ふことが子供らしいと思つたのか、トポロフは相變らず取合はないやうな微笑を浮べてゐた。たとへネフリュードフがどんなことを言はうと、彼の抱いてゐる廣汎な國家的立場といふ高みから見下したなら、みんな幼稚な偏狹な考へ方としか思はれなかつた。

「個人々々の見地から見たら、或はそのやうに思はれるかも知れませんが」と、トポロフは言つた。「けれども國家的見地から見れば、幾許か別な考へ方があるでせう。だがまあ、今日はこれでお許しが願ひたいです。」トポロフはかう言つて頭を下げると、片手を差し伸べた。

ネフリュードフは無言のままその手を握つた。そしてこんな男と握手したのを後悔しながら急いで外へ出た。

『人民の利益』と、トポロフの言葉を彼は繰返した。『何言つてるんだ。自分だけの利益だらう。』外へ出ながら彼はかゝう思つた。

そして正義を鼓吹し、宗教を保護し、國民を教育する公

けの仕事に當つてゐる人々を次々に思ひ出した——それから酒の密賣で罰せられた田舎女、竊盜罪に問はれた少年、浮浪罪に問はれた無宿者、放火犯で擧げられた犯人、背任罪で收監された銀行家、それから、何の罪もないのにたゞ必要な手掛りが取れるかも知れないといふだけで捕へられたリヂヤ(シュエ)、正教の信條を犯したといふ異宗徒、立憲政治を渴望したために罰せられたグルケーウィチ——これ等の人達は正義を犯し又は不法を働いたがために捕縛されたり、收監されたり、流刑にされたりしたのではなく、ただ役人や富豪が國民から強奪したものを自由に享樂するのに邪魔だからといふに過ぎない。こんなことがネフリュードフには残らず分つてゐた。

酒を密賣した女、町を騒がした泥棒、宣傳文を隠したりデイヤ、迷信を破壊した異宗徒、立憲政治を要求したグルケーウィチ——彼等は官吏や富豪達の邪魔物であつた。これ等の官吏達——ネフリュードフの伯母の夫を始めとして、元老院の議員や、トポロフや、更に諸官省に勤めてゐる身裝の綺麗な容體ぶつた屬吏達は、現存制度の下で罪のない者が苦しんでゐるなどいふことは少しも氣にかけず、ただ自分達にとつて危険なものから逃れることばかり考へてゐるといふことを、ネフリュードフは残る限なくはつきり知

つてゐた。

だから、罪のない者を一人處罰するよりも、罪のある者を十人許した方が宜いといふ法律の原則を遵奉しないばかりか、却つてその反對に、體の腐つた部分を切り去るために、健全な部分をも取り去つて了ふと同様に——本當に危険な一人を除き去るがために十人の危険でない者まで刑罰の手段によつて除かれることになる。

ネフリュードフにとつてはこの解釋ほど簡單明瞭なものではなかつた。けれどもこの簡單明瞭であるといふことが、ネフリュードフをしてその解釋を本當だと認めるに躊躇せしめた。これ程込み入つた現象が何うしてこんな簡單な、怖ろしい解釋で済まされ得るものだらうか。正義、善、法律、宗教、神といふやうな問題に關するすべての言葉が、最も野卑な貪慾と慘忍性とを蔽ひ隠すといふことが果して有り得るだらうか。

二八

ネフリュードフはその晩出發したかつたのだが、マリエツトと劇場で會ふ約束があつた。こんな約束は別に守らなくても差支へないのは承知の上だつたが、何に依らず約束を守ることを義務と心得てゐたので、自分の魂を欺きつゝ、

これを口實として出掛けることにした。マリエツトをもう一目見ようといふ望みの外に、これを最後として、以前は自分に近かつたが今では全然關係を斷つて遠ざかつてゐるあゝいふブルジョア社會に入つて、自分を試めして見たいとも思つたのである。

『この誘惑に打勝てるかどうか？』巫山戲半分に彼はかう考へた。『これを最後に試めして見よう。』

燕尾服に着更へて劇場へ行つて見た。舞臺は丁度『椿姫』の二幕目で、外國の女優が新しい型で、肺病やみの女の死にかゝつてゐるところを演じてゐた。

劇場は満員であつた。ネフリュードフはマリエツトの棧敷を尋ねると直ぐ分つて、鄭重に案内された。

廊下に立つてゐた禮服の給仕は、馴染みの者でもあつかのやうに會釋して、扉を開けてくれた。

向うの棧敷に立つたり腰を掛けたりしてゐる者、近い處にゐて背中を見せてゐる者、平土間にゐる灰色の頭、胡麻鬘頭、禿頭、香油でてかゝした頭、縮れ毛の頭——それ等の看客は皆一緒に、絹レースの衣裳をつけた骨ばかりの瘦せかけた女優が、苦しきやうな不自然な聲で獨白を言つてゐるのを、熱心に眺めてゐた。彼が扉をあけた時、誰か『叱ッ！』と言つた。そして冷めたいのと温いのと、二つの

空気の流れがネフリエードフの顔を撫で、通つた。

マリエットの機敷には、彼女の外に、赤いオペラ外套を着た、ごく／＼と頭を飾り立てた貴婦人と、二人の男がゐた。一人は、マリエットの夫で、高い鉤鼻の、底意の一寸知れない、背の高い、立派な容子の、胸のゆつたりした軍服姿の將軍であつた。一人は亞麻色の髪の毛の少々禿げかゝつた然し見事な頬鬚を生やして、顔だけ綺麗に剃つた男であつた。あでやかな、ほつそりした、妖つばいマリエットは胸開きの廣い服を着て、頸筋と肩の付け根のところこゝろに黒い小痣のある、その丈夫さうな、すつきりとした撫で肩を露はにしてゐたが、直ぐにネフリエードフの方を振り向いて、何やら意味ありげな笑を浮べながら、自分の後の椅子に着くように扇で指示した。

マリエットの夫は、落ち着いた様子をして、ネフリエードフを見ると、軽く頭を下げた。そして細君と眼を見交はしたが、その眼差の中まなざしには、自分はこの美しい女の主人であり所有者であるといつたやうな意味を見せてゐた。

女優の獨白が終ると、劇場の中は拍手の音で破れるやうであつた。マリエットは立上つて、衣摺れの音のさら／＼する裳を摘み上げながら、機敷の後へ行つて、ネフリエードフを夫に紹介した。將軍は微笑を浮べながら、お目にかゝつ

て喜ばしいと言つて、やがてまた底の知れない沈黙に返つた。

「今日出逢するつもりでしたが、お約束があつたので。」と、ネフリエードフはマリエットに言つた。

「私なんかすつぽかしなさつても、あの素晴らしい女優だけは御覽なさいよ。」と、マリエットはネフリエードフの言葉の意味に答へながら言つた。そして、「最後の場面は素敵にうまかつたぢやありませんか？」と、夫の方へ向つた。

夫はうなづいた。

「あんなものには少しも興味がありませんね。」と、ネフリエードフは言つた。「私は今日、あゝいふ眞似事でなく、本當に不幸な人達を澤山見て來ましたよ——」

「ではまあ、お掛けなすつて、聞かして下さいな。」

彼女の夫は耳を澄ましてゐたが、だん／＼と皮肉な微笑を眼に浮べて來た。

「私は、あなたの御盡力で放免になつたあの女に會つて來ましたが、あまり長い間監禁されてゐたので、すつかり氣が狂つてゐますよ。」

「さう。あなたにお願ひしたあの女のことを話してゐらつしやるんですよ。」と、マリエットは夫に言つた。

「さうですか。放免されて私も嬉しいです。」と、彼は靜か

に頷いて言つたが、ネフリユードフにもそれと分る位の皮肉を口元に浮べてゐた。「私は煙草を一服吸つて來ます。」

ネフリユードフは腰をかけた。そして、マリエツトが何か言ひたいことがあると言つた、その事を今にも言ひ出すかと待ち設けてゐたが、彼女は別に何も話さなかつたし、またそんな風も見えなかつた。たゞ冗談交りに芝居の話を喋つてゐたが、ネフリユードフがそんなことに興味を持つてゐると思ひ込んでゐるらしかつた。

ネフリユードフは、彼女が芝居に誇つたのは別にこれといふ話があつた譯でなく、たゞ、撫肩や黒痣を露はした、けばくしい夕化粧を見て貰ひたいからだつたと云ふことが分つた。彼はその姿を見て惚々とするにはしたが、同時に何だか嫌らしい氣もした。

以前これ等のものに見られた美の粧ひは、今ネフリユードフの前からすつかり取り去られた譯ではないが、然し彼は今その粧ひの蔭に何が隠されてゐるかを見た。彼はマリエツトを見ながら、成程美しいとは思つた。けれども彼女は——數知れぬ人々の血と涙と生命とを犠牲にして今の榮位を作り上げた夫と一緒に暮して、夫の所行を何とも思はない虚言者である。昨夜彼女が話したこともすべて心にもないことであるが、彼女が彼に媚を寄せて——何のために彼女

がそんなことをしたのか彼にも分らなかつたし、彼女にも分らなかつたが——彼を口説き落さうと思つてゐることだけは、ネフリユードフによく分つてゐた。これが彼を牽きつけもしたが、また厭はしくも思はせた。彼は何遍となく歸らうと思つて帽子を手にしたが、まだ思ひ切れないでゐた。そのうちに彼女の夫が濃いその髭のあたりで煙草の匂ひをぶん／＼させながら棧敷へ歸つて來て、ネフリユードフなどは眼中にないかのやうに、蔑む如き横柄な態度で見下したので、ネフリユードフは開いた扉が閉らないうちに廊下へ出て、自分の外套を抱へながら劇場を出た。

ネフスキイ街を通つて家へ急ぐ途中、ネフリユードフは背のすらりとした、人目を牽くやうにけばくしく飾つた女が、眼の前を歩いて行くのに、思はず氣がついた。その女はアスファルトの廣い人道を徐かに歩いてゐたが、顔や姿には、男性を自由に弄ばうとする厭らしい氣配が一杯に溢れてゐた。通りすがりの者は、その女をしげ／＼と見て行つた。ネフリユードフも、足早にそれを追ひ越して、やはり何の氣なしに振向いて見た。厚化粧はしてゐたやうだが、美しい女であつた。につと笑ひながらネフリユードフをじろりと流眄で見た。すると——不思議なことには——ネフリユードフはマリエツトのことを思ひ浮べた。といふのは、

劇場でさつき感じたと同じやうな、ある厭らしい魅力を感じたからである。女を追ひ過して了ふと、自分に對して腹を立てながら、モールスカヤ街へ折れた。そして河岸通りに出ると、巡查が驚いて變な顔してゐるのにも構はず、其處を行つたり來たり、うろつき始めた。

『私が劇場へ入つて行つた時に、彼女もやはりあの通り私に笑つて見せた。』と、彼は考へた。『この微笑の意味は二人とも同じなんだ。その違ひと言へば、今の女は開けつ放しに御用があるなら——買つて頂戴！御用がなけれや——行つて下さい。』と言つてゐるだけのことだ。マリエトはそんなことは思つてもゐないといふ風を裝つて、如何にも高貴な淑やかな氣持で暮してゐるやうに見せかけてはゐるものゝ、底を割つて見れば同じことなのだ。少くとも今の女は正直で、彼女は偽善者だ。のみならず、今の女は生きんがための必要からあゝいふことをしてゐるのだが、彼女は遊び心で、その美しい、厭らしい、怖る可き情慾を樂しんでゐるのだ。この街頭の女は——汚いなど、言つては居れないほどの濁きを覺えてゐる人に飲ませる、汚い臭ひのする腐つた水のやうなものであるが、あの劇場の女は近づいて來る者を人知れず毒殺する毒藥のやうなものである。』かゝる思ふと、ネフリュードフは不圖貴族長の妻と自分の關係

を思ひ出して、それにつれて恥づかしい記憶を次ぎ／＼に思ひ浮べた。『人間の中に存在する獸性は厭ふべきものではあるが、』と、彼は考へた。『しかしその獸性が本來の姿のままであるうちは、自分の精神生活の高みからそれを觀察し侮蔑することが出来る。——墮落してゐるとゐないとに拘らず——けれどもその獸性が美的感情とか詩的情操とかの皮をかぶつて、吾々の尊敬を要求するやうになると、その時はすつかり獸性に吞まれて、善惡の區別もつかなくなつて了ふ。それこそ實に怖るべきものである。』ネフリュードフは、今丁度宮殿や、哨兵や、城塞や、河や、ボートや、株式取引所などが眼の前にはつきり見えるやうに、この理窟がはつきりと分つた。

そしてその晩、この地上にはのんびりした安息を與へるやうな薄暗がなくて、たゞ朦朧とした不愉快な、何處ともなく射して來る不自然な明るさがあつたやうに、ネフリュードフの心の中にも最早安息を與へる薄暗や無智などはなかつた。すべてがはつきりして來た。世間で重要な立派なものであると考へられてゐることは、すべて莫迦氣た無意味なことであり、これ等の驕奢や贅澤の中には昔からの罪惡が隠されてゐるのであるが、長い間の習慣によつて罪惡とも氣づかず、何等の制裁も加へられないばかりか、却つて

人間が考へ得る限りの美と光彩で飾られてゐる。そんなことがネフリニードフに分つて來たのであつた。

彼はかうしたことは忘れよう、もう見まいと思つた。だが、見ない譯には行かなかつた。ペテルブルグを蔽うてゐる光が何處から來るのか分らないやうに、彼の眼を開いて呉れたこの光も何處から來るのか分らなかつた。たとへこの光は朦朧とした不愉快な不自然なものに思はれたとはいへ、そのために自分の眼の前に開かれたものを見ない譯には行かなかつた。彼にとつてはそれが喜びでもあり、不安でもあつた。

二九

モスクワへ着くと、ネフリニードフは何はさて置いて、すぐ監獄病院にマースロワを訪ね、元老院は前判決を認めたら、愈々シベリヤへ行く用意をしなければならぬといふ悲しい報せを告げるために行つた。

監獄でマースロワに署名させるために、辯護士が書いて呉れた陛下への請願書も持つては來たが、大した希望をそれに繋いでほゐなかつた。それに不思議なことには、今では却つて請願が聽許されないのを望んでゐた。彼はシベリヤへ行つて、流刑囚や徒刑囚達と一緒に暮すことばかり考

へて、マースロワが放免された場合、自分の生活と彼女の生活を何ういふ風に築き上げるか、といふことは考へることさへ出來なかつた。

アメリカにまだ奴隸制度が存在してゐた時分、アメリカの思想家トローが、『法律を以て奴隸制度を保護してゐるやうな國家に於ては、正しい人に適した唯一の住家は監獄である。』と言つた言葉を彼は思ひ出した。それはペテルブルグへ行つて見聞した後、特にそのことを痛感したのであつた。

『さうだ。ロシヤで正しい人に適する唯一つの住家は、今のところ監獄だけである！』と彼は思つた。馬車が丁度監獄に近づいて、その構内に入ると、彼はこのことを直接経験した。

病院の番人は、ネフリニードフだといふことが分ると直ぐ、マースロワはこの病院にもう居ないといふことを知らせた。

「では、何處にゐるんですか？」

「また監獄に戻りましたよ。」

「どうして元へ戻されたんですか？」と、ネフリニードフは訊ねた。

「實は、あなたの前ですが、あゝいふ手合は……」と、番

人は蔑むやうに薄笑ひして言った。「ちよつくら助手に持ちかけましたんでね。それで、醫師長から戻されたんですよ。」

ネフリードフは現在のマースロワが、殊にあゝまで精神的に彼と接近して来たマースロワがそんなことをしようとは夢にも思はなかつた。で、まるで思ひがけない大きな不幸の報せを受取つた時のやうな感じがした。それは彼に取つて餘りに苦しいものであつた。この話を聞いて、彼が第一に味つた感じは、自分が侮辱されたといふことであつた。彼女の精神状態が、さも變つたかのやうに想像して喜んでゐた自分が、何よりも滑稽に思はれて来た。彼女の犠牲にならうといふ申出を撥ねつけた彼女の言葉や非難や涙は——より良く利用するために墮落した女の使ふ手管に過ぎなかつたのかと彼は考へた。すると又最後に會つた時、彼女の素振が妙に素氣なく見えたのはそのためかとも思ひ合はされた。こんなことが色々頭の中に関めくので、彼は我知らず帽子を被つて、病院を出た。

『さて、これから何うしたものだらう?』と彼は自分に訊ねた。『いつまでもあの女にくつゝいてゐるのか? 今聞いた話のやうだと、自分はどうあの女とすつかり關係がなくなつたのぢやなからうか?』

然しこの問題を考へるか考へないうちに、ふいとまた彼は、自分が若しこれで關係がなくなつたものとして、あの女を捨てゝ了つたら、今自分が懲らしてやりたく思つた女は懲らされずに、却つて自分が苦しまなければならぬ結果になると氣がついて、思はずぞつとした。

『いけない! どんないふことが起らうと自分は決心を變へない。こんなことが起る度に決心を堅くしなければならぬ。彼女には彼女の心まかせにして置けばいいのだ——助手と關係するなら勝手にさせて置けばいいのだ——それは彼女の勝手だ!……自分は、自分の良心の命するまゝにすればそれでいいのだ。』と、彼は自分に言つた。『自分の良心は、犯した罪を贖ふために、自分の自由を犠牲にしると命じてゐるんだ。自分の決心は、たとへ形式だけでも彼女と結婚して、彼女の行く處までは何處までも後から跟いて行つて、志の變らないことにある。』と、少し自暴氣味の執拗な心持で獨語を言つたが、病院を出ると、決心したやうな歩調で大きな監獄の門の方へ向つた。

門に近づいて、當番の看守に、マースロワに面會したいから典獄に取次いで欲しいと頼んだ。當番もネフリードフを覚えてゐたので、さも知合ひの人か何ぞのやうな調子で、監獄内の重大な、注意すべき出來事を話してくれた。それ

は元の典獄は免職になつて、厳格な典獄が新たに任命されたといふことであつた。

「近頃は嚴重になりまして——どうも困ります。」と看守は言つた。「丁度典獄がゐますから、直ぐ取次ぎます。」

成程、典獄は監獄内にゐたので早速ネフリュードフに近づいて来た。新任の典獄といふのは背の高い、瘦せぎすの頬骨の高い、のろ／＼した物腰の、沈鬱な男であつた。

「面會は指定日に面會所で許すことになつてゐますがね。」と、彼はネフリュードフを見もしないで言つた。

「然し、皇帝陛下への請願書に署名して貰ひに来たのですか。」

「私にお渡し下さい。」

「直接私は本人に會ひたいのですが。今までは面會させて頂いてみましたので。」

「以前はさうだつたかも知れません。」と、ちらとネフリュードフの方を偷み見しながら典獄は言つた。

「私は知事からの許可を得てゐるんですが。」と、言ひ張りながらポケットから認可證を取り出した。

「一寸拜見」と、やはり眞正面に見ないで典獄は云ひながら、人差指に金の指環を嵌めた、細そりした、かさ／＼の白い指でネフリュードフからその認可證を受取つて、ゆつ／＼

り讀んだ。「では、どうぞ事務室へ。」と、彼は言つた。

事務室には、今度は誰もゐなかつた。典獄は卓子の傍に腰を下して、その上に取り散らかつてゐる書類を選びはじめたが、多分面會に立會ふ心組らしかつた。その時ネフリュードフは、政治犯のボゴドゥホーフスカヤに面會出来るか何うかを訊ねて見た。典獄は膠もなく「政治犯人との面會は禁じられて居ります。」と言つて、また一心に書類を讀みはじめた。ポケットにボゴドゥホーフスカヤに宛てた手紙を預つて來てゐるので、ネフリュードフは、何だか罪を犯さうとして發見され、その企てが失敗に終つた人のやうな感じがした。

マースロワが事務室に入つて來た時、典獄は一寸顔を上げしたが、マースロワやネフリュードフには眼もくれず、「どうぞ」と言つて、依然書類調べに没頭してゐた。

マースロワはまた元の通り白いジャケツと下袴とを着け、頭巾を被つてゐた。ネフリュードフの傍に近づいて、その冷やかな、いかつい顔を見ると、さつと顔を赧らめて、ジャケツの端をいぢりながら眼を伏せた。そのどぎまぎした様子を見て、ネフリュードフは病院の番人の言葉が確かめられたやうな氣がした。

彼は前々通り打解けて彼女と話したかつたのであるが、

どうしても握手する気にはなれなかつた。それ程彼女が厭はしかつた。

「今日は面白くない報せを持つて来たよ。」彼はマースロワを見もしなければ、手も執らないで、張合ひのない聲でかう言つた。「元老院では棄却になつたよ。」

「さうだらうと思つてみましたわ。」と、彼女は息苦しさうな變な聲で言つた。

以前ならネフリュードフは、どうしてさう思つてゐたかと訊き返すところであるが、今日は唯彼女を見ただけであつた。彼女の眼は涙で一ぱいであつた。

彼はその涙を見ても心が和がなかつたのみか、一層彼女に對して腹立たしくなつて來るのであつた。

典獄は立上つて部屋の中を歩きだした。

ネフリュードフはマースロワを忌々しいとは思つたが、それは兎に角、元老院の方がうまく行かなかつたことに就いては、彼女を慰めなければならぬと思つた。

「氣を落しちや不可ないよ。」と、彼は言つた。「皇帝陛下に請願したら何とかうまく行くだらう。私の希望は……」

「そんなことを私、考へてはゐませんわ……」と、彼女は涙に濡れた斜視の眼で悲しげに彼を見て言つた。

「何うしたんだ？」

「あなたは病院へいらしつて、彼處で多分私のことをお聞きなさつたでせう。」

「それが何うしたんだ。私の知つたことぢやないよ。」と、ネフリュードフは肩を擧めて冷やかに言つた。

聆りを傷けられたといふ憤怒の感情は鎮まつてゐたのだが、彼女が病院のことを言ひ出したので再びむか／＼燃え上つて來た。「自分は堂々たる貴族で、どんな上流階級の娘でも、自分と結婚したら幸福であらうと云つてゐる程の身分であるにも拘らず、自ら進んでこんなマースロワ如き者と一緒にならうと申し込んでゐるのに、その時を待ちもしないで、病院の助手などとふしだらをするとは何といふ女だらう。」と、憎々しげに彼女を見ながら、ネフリュードフは思つた。

「さ、この請願書へ署名して呉れ。」と彼は言つて、ポケットから大きな状袋を取り出して卓子の上に置いた。彼女は頭巾の端で涙を拭いて、椅子に腰かけて、何處へ何と書いたらよいかと訊ねた。

彼がそれを教へると、彼女は左の手の上へ右の袖口を載せながら卓子に向つた。彼は彼女の後に突立つて、迫つて來る切ない思ひに堪へ切れずに折々身を震はしてゐるその後姿を黙つて見てゐた。彼の心の中では、善惡二様の感情

——矜まじりを傷けられた怒りと、思ひ悩んでゐる彼女に對する憐れみとの二つが戰つてゐるが、やがて後者の方が打ち克つた。

彼女を憐れに思ふ念が先きであつたか、それとも彼が今彼女を非難してゐるのと同じ自分の過去の罪惡や醜行を思ひ浮べたのが先きであつたか、それは分らないが、不意に彼は自分が罪深いものであることを思ひ出すと同時に、彼女が憐れになつて來たのである。

請願書へ署名を終へて、インキで汚れた指を下袴ズボットで拭ぬぐくと、彼女は立上つてじつと男を見つめた。

「どんなことがあつても、どんなことにならうとも、僕の決心は變らないからね。」と、ネフリュードフは言つた。

彼女を許してやつたといふ考へは、次第に彼女に對する憐れみと優しさの感情を彼の心に増さしめた。で、何とか言つて慰めずにはゐられなかつた。

「僕は言つた通りのことを實行するよ。何處へお前がやられるにしろ、僕も一緒に行くから。」

「何にもなりませんわ。」と、彼女はあわてゝ言葉を挟んだ。顔中急に喜びに輝いた。

「途中で要るものを考へて置いたがいゝよ。」
「えゝ有難う。何もこれといつてありませんわ。」

典獄が近くへ寄つて來たので、ネフリュードフは注意を受けないうちに彼女に別れを告げて、今まで覺えないほどの平和な喜びと、心安さと、すべての人間に對する愛とを感じながら外へ出た。マースロワがたとへどんなことをしようとするために彼女に對する愛は變らないといふ意識の爲めに、ネフリュードフの心は喜びに充たされ、今まで経験したこともないほどの高い精神状態にまで達した。彼女が助手とどんな關係にあらうとそれは彼女の勝手だ。彼は自分のために彼女を愛するのでなく、彼女のため、神のために愛するのであつた。

マースロワが病院を追い出され、ネフリュードフでさへ本當に彼女が犯したものと信じてゐるその助手との出來事といふのは、かういふ譯であつた。女助手がマースロワに、藥局へ行つて煎じ藥を取つて來るやうに言ひつけたので、廊下の端にある藥局へ行つて見ると、平生へいぜんから五月蠅うるさく彼女に言ひ寄つてゐるウスチーノフといふにきびだらけの助手が一人ゐて、彼女にいきなり抱きついた。マースロワはそれを振り切つて男の頭を強くはり飛ばした。するとそのはずみで男は藥棚に打突ぶつかかつて、棚から硝子壺びやうすが二つ落ちて毀れたのである。

丁度その時廊下を通りかゝつた醫師長が、器物の毀れる

音を聞き、顔を赤くしたマースロワを認めると、怒鳴りつけた。

「こら！ 何といふ醜態だ！ 此處の者にをかしの眞似をするとは承知しないぞ。一體何うしたんだ？」と、助手の方へも向いて、眼鏡越しにきつと睨み付けた。

助手は、や／＼笑ひながら辯解を始めようとしたが、醫師長はそれに耳も假さないで靜かに頭をあげると、眼鏡の中から睨んで、病室へ行つて了つた。その日のうちに、マースロワの代りに他のもつと眞面目な手傳ひを寄越すように典獄へ言つてやつた。マースロワと助手との變な關係といふのは要するにこれだけのことであつた。マースロワにとつて、男との惡戯（悪戯）といふことで病院を追ひ出されたのは、ほんとに情ないことであつた。最初のネフリュードフとの事があつて以來、もう長い間厭になつてゐた男との關係が、今は殊更に憎々しく忌々しくなつてゐるのであつた。彼女の今までの境遇や現在の境遇から推してすべての者が彼女を蔑むのを當然のやうに思ひ、にきび面の助手までが見くびつて、彼女が拒絶したのを却つて不審がつたりするのを考へると、彼女は心外でたまらず、自分で自分がつくづく可哀さうになつて、涙が込み上げて來るのであつた。で、今日ネフリュードフに會つた時も、きつと病院で聞いて

來たに違ひないから、自分の濡衣（濡衣）を晴らさうと思つてゐた。けれども辯解を始めようとする、彼はそれを信じて呉れさうもないばかりか、却つて一層疑ひを増されさうに思はれ、涙が胸に込み上げて來たので、つひ口を噤んで了つたのであつた。

マースロワは、いつまでもネフリュードフの罪を許さないで、二度目の面會の時言ひ放つたやうに、飽くまでもネフリュードフを憎み通してやらうと思つてゐたのであつた。ところがその實とうから彼に再び愛を感じてゐたのであつた。それは知らず／＼のうちに彼が彼女に求めてゐる通りのことをやつてゐたのである。酒も煙草も止め、人に媚を送ることも止め、勧められるまゝに病院の看護婦にもなつたが、それは皆彼が喜ぶだらうと思つてやつたのであつた。そして、ネフリュードフが結婚を申し込む度毎に、彼が犠牲を拂つて結婚しようとする度毎に、きつぱりと拒絶してはゐるが、それは一度自分が言ひ出した高慢な言葉を諷へしなくなつたからに過ぎなかつた。いや、それよりも、自分のやうなものゝと結婚したらネフリュードフが不幸に陥るといふことを、彼女はよく知つてゐたからであつた。そのやうな彼の犠牲は斷じて受けまいと固く決心してゐるが、然しネフリュードフも矢張り自分を輕蔑して、自分が普通

の根性をもつてゐると考へ、自分の心の中に起つた變化を見てくれないと思ふと、彼女は何よりも切なかつた。

自分が病院にゐる間に何か面白くないことをしてゐたやうに、ネフリードフに思はれてゐることが、自分のシベリヤ行きがいよ／＼確定したといふ報せよりも、彼女の心を苦しめたのであつた。

三〇

マースロワは第一護送隊に加へられることになつてゐたので、ネフリードフは出發の用意に取りかゝつた。けれども始末を附けなければならぬ用事か随分あつたから、幾ら時間があつても、すつかり片をつけることはとても出来さうに思へなかつた。その用事といふのは、以前とはまるつきり違つたものであつた。以前は、いつもドミートリイ・イワノウイチ・ネフリードフといふ一個人のことで、何うしたら好いか頭を悩ましてゐただけで、生活の興味は彼一人を中心にして結びつけられてゐたが、それでも彼はすつかり飽き／＼してゐたのである。ところが今では、自分のことでなく、他の人々のために働いてゐるので、何もかも面白く、熱中することが出来、しかもさういふ仕事が際限もなく出て来るのであつた。

そればかりでなく、以前の仕事はいつも忌々しく、腹立たしいことばかりだつたが、今、かうして他人の仕事をしてゐると大抵愉快な氣持になるのであつた。

この頃ネフリードフがやり掛けてゐた仕事は三つに分けることが出来た。彼はいつもの研究癖から仕事を分類して、それを適當に三つの書類挟みに分けて置いた。

第一は、マースロワと、彼女に對する助力に關する件であつた。これは今皇帝陛下に諸願の手續きをすることゝ、シベリヤへ旅立つ準備をすることゝであつた。

第二は、領地の處分であつた。パノウオ村では、地代を村の共同費用に充てる條件で、土地を百姓達にやつて了つた。が、この契約を確定するためには、證書と遺言書を作つて署名する必要があつた。クヂミンスコエ村では、矢張り彼が自分で定めた通り、つまり地代を取るには取るが、その期限を定め、その地代の中から幾許だけ自分の生活費に充て、幾許を百姓達のために残すかを決めなければならなかつた。それにシベリヤへ行くについては費用がどの位あるかゝるか、それが分らないので、収入を今迄の半分に減じたのではあるが、全部を放棄する決心はまだつき兼ねてゐた。

第三は、次第に増えて来た助力を求めめる囚徒達に力添へ

をしてやることであつた。

最初助力を求めに来る囚徒達と交渉を持ち出した時、彼等の苦痛を軽くしてやらうとして、早速當局者との間に立つて盡力したのであつた。けれども後になつて依頼人が多くなつて来ると、とてもその人々のために一々盡力することが出来ないで、止むを得ず、第四の用件が湧いて来るやうになつて来たが、それは終つひに他の何物よりも彼の興味を惹くやうになつた。

この第四の用件といふのは、刑事裁判と呼ばれてゐる驚くべき制度は一體何んだ？ どうして出来たのか？ また何處から来たものか？ その問題を解決することであつた。この刑事裁判の結果、一部分ではあるが彼がその收監者と親しく交際あひまひつた監獄といふものが存在することとなり、彼を驚かしたこの刑法の犠牲者が幾百千となく、ペトロパウロフスク要塞からサガレンに至るまで幾多の牢獄の中で苦しめられてゐるのではないか？

自分が親しく囚徒に接した経験や、辯護士や注意深い教師や實見者に聞いた話や、囚徒達の手記などを綜合して見ると、ネフリードフは、犯罪者といはれてゐる囚徒達が、五種類の人間に分けられるといふ結論に達した。第一は裁判の誤まつた判決の犠牲になつた全然罪のない人々で、例

へば放火犯にされて了つたメニシヨフや、マースロワ其他の人々である。この種類に入る者は左程多くはなく、教師の見る所では全體の約七パーセント位であるが、これ等の人々の境遇は特に彼の興味を惹いた。第二は、憤怒とか嫉妬とか泥酔とか、その他或る特殊な事情の下に行はれた行爲のために罰せられた人々で——これ等の行爲は、彼等を裁さいて刑罰を與へた當の裁判官でも同じ境遇に置かれたら、彼等と同じことを多分やつたに違ひないのである。

ネフリードフの考へでは、この種類に屬する人々は犯罪者全體の半數以上に上つてゐた。第三の種類は、自分では普通在り來りのことで、寧ろ善いことだとさへ思つてゐることが、それに無關係な立法者の側から見て、犯罪と見做されるといふ、さうした行爲のために處罰された人々である。この種に屬する人々は、酒の密賣者とか、密輸入者とか、又は大地主の所有林や官有林から草を刈り取つたり、薪を集めたりした者などである。山賊や、まだ正教を信じない者や、教會のものを持ち去る者などもそれに入る。

第四の部類には、ネフリードフの見るところでは、一般社會よりも精神的に高い考へを持つてゐたといふことだけで、罪人の仲間へ入れられた人々が屬する。例へば異端者や、獨立のために叛亂を起したポーランド人やチケルケ

ス人、國事犯——社會主義者やストライキを起した者など、時の權力に反抗した廉で處罰された人々である。ネフリュードフの意見では、かういふ立派な階級に屬する人々は可なり多かつた。

最後に第五の部類に入れられる人々は、彼等が社會に對して犯した罪よりも、寧ろ社會の方がずつと餘計に責を負はなければならぬといふやうな人々である。これ等の人は、絶望ない壓迫と誘惑のために世に捨てられ、愚昧にされたので、藤を盗んだ少年を初め、ネフリュードフが牢獄の内外で何百人となく目撃したのがそれである。彼等の生活の事情が、犯罪と呼ばれてゐる行爲を何うしてもしなればならぬやうに出来上つてゐるのである。ネフリュードフの考へでは、最近彼が見た泥棒や人殺しの大部分はこれに屬してゐた。新しい犯罪學が犯罪の典型と名づけ、それがために、刑法と刑罰が必要だといふ主な證據として社會に認められてゐる墮落者やならず者もまたこの中に入る。かうした謂ゆる墮落者やならず者や病的なタイプは、社會に對して犯した罪よりも、社會の方が寧ろ餘計に彼等に罪を犯してゐるといへるやうな人々に外ならないのである。しかも社會は現在直接彼等に對して罪を犯してゐるばかりでなく、前の時代——彼等の兩親や祖先に對しても責任を

持つてゐる。

こんな連中のうち、この點で特に彼を驚かしたのは、盜癖が深く骨髓まで染み込んでゐるオホーチンといふ泥棒であつた。彼は淫賣婦の私生兒で、木賃宿に育ち、三十歳になるまで、巡查よりも道德的に高い人間に出會つたことがなく、生れ落ちた時から泥棒の仲間に入り込んだものである。それに天性頗る滑稽の才能があつて、人に取り入ることが上手であつた。この男はネフリュードフに助けを求めて來た時にも、自分や裁判官や監獄や、すべての提、甞に刑法ばかりではなく、神の掟までも茶化し切つてゐた。もう一人は好男子のフォードロフで、彼は一群の盜賊の首魁となつて、その仲間と共に、或る年取つた官吏を殺して金を奪つたのであつた。彼はひどい不法な處分に遇つて家を捲き上げられた百姓の倅で、その後兵隊に徴られ、其處で士官の情婦と惚れ合つたため酷い目にあつた男である。彼は妙に魅力を持つた情熱的な性格で、たとへどんなことがあらうと遊蕩を止めようとは考へなかつた。今まで、何のためにしてろ自分から遊蕩を止してしまつたといふ人間に唯の一度も會つたことがなく、また、遊蕩を外にしてこの人生に何か他の目的があるといふやうな言葉は、今まで一と言も耳にしたことがなかつた。この二人の男は、生れつき善い

素質を持つてゐたのではあるが、野生の草木のやうに、手
入れする者がなかつたばかりに不具かたはになつて了つたこと
が、ネフリュードフにはよく分つてゐた。それから愚昧で、
殘忍で、思はず顔おもてを背けしめた一人の浮浪人と一人の女と
を見たが、然しその中にイタリイ學派の唱へるやうな犯罪
者の典型を見出すことは何うしても出来なかつた。たゞ個
人的に見て嫌な奴もあつたが、それは監獄外で燕尾服を着た
り、肩章をつけたり、レースを飾つたりしてゐる人々の中
にも、彼がよく見かけるところであつた。

其處で、このやうな種々雑多な人々が監獄に投ぜられ、
その一方では、少しもこれと違はない人々が監獄の外で氣
儘に振舞ふどころか、人々を裁いてゐるといふのは、一體
どういふ譯わけだらう？ この問題を研究するのがネフリュード
フの念頭にあつた第四の仕事であつた。

この問題の解答は本を讀んだら得られるだらうと、最初
はさう思つた。そしてこの問題に關する本を手あたり次第
に買ひ込んだ。ロンプロゾー、ガロフプロ、フェリー、リス
ト、モオツレ、タード等の著書を買つて來ては熱心に讀ん
だ。けれどもこんな本を讀めば讀むほどだん／＼失望を増
すばかりであつた。別段科學界にいと廉の役割を演ずるた
めでなく、つまり、著述したり、論議したり、教へたりする

爲めでなく、卑近な人生問題を解決しようとして科學に向
ふ人々が、何時いつでも失望するやうに、ネフリュードフもやは
り失望したのである。科學は成程刑法に關係のある極めて
深奥な精密な問題に對して、いろ／＼と數限りなく解答を
與へてはゐる。けれども彼が聞かうと思つてゐる事柄に對
しては一言も答へてゐない。而も彼は至つて簡單なことを
訊ねようとしてゐるのであつた。それは、一體どうした譯
で、又、どういふ權利があつて、少しも違はない同じ人間
同志でありながら、一方の人間が一方の人間を禁錮したり、
拷問ごうもんにかけたり、追放したり、管むちで打つたり、殺したりす
ることが出来るのであらうかといふことであつた。だが、
彼に答へたものは次のやうな判斷であつた。つまり人間に
は意志の自由があるか何うか？ 頭蓋骨づかぶねその他を計量する
ことによつて、犯罪者か否かを知ることが出来るか何う
か？ 遺傳は犯罪の中でどんな風に現はれて來るか？ 先天
的に不道德といふものがあるか何うか？ 一體道德とは何
か？ 發狂とは何か？ 惡化とは何か？ 氣質とは何か？ 氣
候、食物、無智、模倣性、催眠術、欲望などは犯罪にどん
な影響を及ぼすか？ 抑も社會とは何か？ 社會の義務とは
如何なるものか？ 曰く何、曰く何。

こんな論議がネフリュードフに、以前彼が學校歸りの子供

に訊ねた時の子供の返答を思ひ出させた。ネフリユードフは子供に、もう字の綴り方を覺えたかと訊ねた。『あゝ覺えたよ。』と子供は答へた。『ぢや足といふ字を綴つて御覽。』『何の足？ 犬の足かい？』狡さうな顔付をして、子供は答へた。ネフリユードフが自分の抱いてゐる根本問題の解決を求めようとして、科學書の中で見出したものは、丁度この子供の返答と同じやうなものであつた。

その本の内容は、聰明で深遠で興味深いものでいつぱいだつたが、一番肝腎な問題——如何なる權利があつて人間が人間を罰するかといふことに對しては、何の解答もなかつた。いや、この問題に對して解答が與へられないばかりでなく、それ等の論究は、前もつて刑罰の必要を原則的に認めて、刑罰を説明し主張してゐるのであつた。ネフリユードフは飛び／＼に澤山の本を讀んだが、結局このやうな皮相的な研究では解答が見つからないのだと考へて、その解答を他日に譲つた。で、最近になつて、解答らしいものがある／＼と現はれては來たが、それが眞理であると信じ込む氣にはまだなかく／＼なれなかつた。

三

マースロワが加はつてゐる囚人の組は七月五日に出發す

ることに決つてゐた。ネフリユードフはその日に、彼女に跟着て出發する用意をした。出發の前夜、ネフリユードフの姉が、彼に會ふために夫を伴れて田舎から出て來た。

ネフリユードフの姉、ナタリヤ・イワーノワナ・ラゴジンスカヤは弟より十歳も年上であつた。ネフリユードフは大部分この姉の世話で育つたのである。彼がまだ子供だつた時分から姉は大變彼を可愛がつて居て、その後嫁に行く時まで同じ年頃のやうに仲よくしてゐた。彼女が嫁に行つた時は二十五の娘で、彼は十五の子供であつた。その時分彼女は、もう今は死んで了つたネフリユードフの伸よしのニコールンカ・イルテニーエフを思つてゐた。姉弟ともニコールンカを愛して居り、三人は互ひに立派な、人と人とを結び付ける何物かを見つけ合つて、それを愛してゐた。

その後姉弟二人は墮落して行つた。彼は軍隊に入つて良くない生活を送るし、彼女は性慾的に愛してゐた男と結婚した。だがこの男は、曾つて彼女にとつて、ネフリユードフと一緒に一番神聖で貴かつたすべてのものを、愛しなかつたばかりでなく、そんなものを理解さへしなかつた。曾つて彼女が生活の根本義としてゐた道徳の完成や人間への奉仕などに對するあらゆる憧憬を、その男は自己流に解釋して、唯利己心を満足させ、世間を衝ぶ野心に過ぎないもの

だと思ひ込んでゐた。

ラゴージンスキイは、名もなければ財産もない男であるが、可なり腕利きの勤め人で、自由主義と保守主義との間を巧みに泳ぎながら、この二つの傾向の中を利用して、時と場合によつて自分を眞價以上のものに仕上げてしまひ、特に婦人に取り入ることに妙を得て、それによつて裁判官としての比較的立派な経歴を作り上げたのである。彼は青年時代を過ぎた時分、外國でネフリニードフと知り合ひになり、これも亦娘盛りを通り越してゐるナターシヤを蕩し込んで、この結婚は不釣合ひだと見てゐた母親の反對などはそつち除けにして、二人は結婚してしまつたのであつた。ネフリニードフはこの氣持を押し隠し、この感情を出すまいとはしてゐたが、自分の姉婿を忌み嫌つてゐた。彼の氣に喰はないのは、この男の下卑た感情と、狭量な自惚とであつたが、殊に面白くなかつたのは、自分の姉がこんな淺ましい性格の男を、よくもあんなに熱情的に、エゴイスチックに、性慾的に愛する氣になつて、今まで持つてゐた善い所を何もかも、夫のために失くして了つたといふ點であつた。姉のナターシヤが、この毛むくぢやらな、禿頭のかか／＼した自惚男の妻だといふことを思ふと、いつも胸が痛くなる程苦しいのだつた。その子供をさへ可愛がつてやらうとい

ふ氣にもなれなかつた。姉が懐妊したことを知ると、その度に、赤の他人だと思つてゐる男に、また姉が何か忌々しい病毒でも傳染されたかのやうに堪らなく悲しくなるのだつた。

二人の間には男の子一人、女の子一人あつたが——この二人の子供を残してラゴージンスキイ夫婦だけやつて來た。そして一流の旅館の一番立派な部屋に陣取つた。ナターリヤ・イワーノウナは早速母の古い屋敷へ出掛けたが、生憎弟は居合はせなかつた。で、アグラフェーナ・ペトロウナから、弟は下宿へ移つたことを聞き取つて、そつちの方へ廻つた。と、薄暗い、晝間でもランプが點つてゐて、堪らない匂ひのする廊下で、汚らしい下男に出會したが、彼は公爵が唯今留守だと告げた。

ナターリヤ・イワーノウナは、一言書き残して置きたかつたので、弟の部屋に入らうとすると、下男が彼女を案内して呉れた。

弟の二間つゞきの部屋へ入つて、姉はつく／＼と見廻した。ネフリニードフの持前の綺麗好きと几帳面さは昔に變らず、部屋の中の一切の物に現はれてゐたが、彼女を驚かしたのは、昔に變るその質素な道具や飾り付けであつた。書物卓子の上には彼女に見覚えのある青銅の犬のついた文鎮

が乗つて居り、種々な書類挟みや書類や文房具類が整然と重ねてあつて、刑法に關する書籍や、ヘンリー・ジョージの英書や、タードのフランス本の間には、見覚えのある大きな弓形の象牙製のナイフが挟んであつた。

椅子に腰を下して、是非とも今日會ひに来て呉れといふ意味を書き残して、再び周囲の様子に呆れながら首を振り振り部屋を出て、旅館へ歸つて行つた。

ナターリヤ・イワーノウナは弟の身にふりかゝつてゐる二つの問題が今氣になつて來た。それはカテューシヤと彼の結婚の話で、これは町で噂しないものは無い位の評判になつてゐるので、何處へ行つてもその話を聞かされた。も一つは土地を百姓達にやつて了つたことで、これも同様に誰知らぬ者も無い位で、何うやら政治的意味を持つた危険な行爲と思つてゐる者も多かつた。カテューシヤと結婚することは、一方から考へれば、ナターリヤ・イワーノウナの氣に入つてゐた。このやうにてきばきと決斷するのが彼女は好きだつた。結婚前、彼女がまだ弟と一緒に幸福な日を送つてゐた時分、彼も彼女も二人ながらさうした氣象だつたのを思ひ出した。然しそれと同時に、自分の弟が、あの怖しい女と結婚するのと思ふと、身震ひするのだつた。そしてこの後の感情の方が比較的強かつたので、彼女はと

ても望みはないとは知りながら、それでも何とか手を盡して思ひ止ませようと決心したのである。

もう一つの事件、つまり百姓に土地をやつて了つたことは、大して彼女の心を打たなかつたが、彼女の夫の方がひどく憤慨して、どうしても姉の力で止めさせなければならぬと彼女に迫るのだつた。かういふ行爲は理由のない、輕卒な、驕慢の甚しいもので、無理に説明すれば、奇を衒つて、世間に見せびらかして、彼れ是れ評判されたいためにやつただけの話だと、イゲナーチ・ニキフォローウィチ（イゴジンス）は言ひくしてゐた。

「百姓共に土地をやつて了つて、その地代を奴等の爲めに使はせるなんて、一體何ういふ意義があるんだ？」と、彼は言つた。「もしそんなことがそれ程やりたければ、農業銀行の手を経て、奴等に賣り渡すことも出來たんだ。その方がまだ意義があつたらう。どう見てもこんなやり方は正氣の沙汰ぢやない。」イゲナーチ・ニキフォローウィチはかう言つたが、この時ネフリエドフに後見人の必要のあることを考へながら、姉として弟に、この突飛な計畫を止めるやうに、眞面目に話してやるが宜いと、妻に迫つたのである。

ネフリュードフは下宿へ歸つて、卓子イフムの上の姉の手紙を見ると、その足で姉の處へ行つた。もう夜であつた。イグナリーチ・ニキフォローウィチは別室に休息してゐて、ナターリヤ・イワノフナ獨りだけが弟に會つた。彼女はしつくり身に合つた黒の絹服を着て、胸に赤いリボンをつけ、眞黒な髪を縮らせて、洗行ワシヨウの結び方にしてあつた。同じ年配の夫の前に少しでも若く見せようと努めてゐるのがあるが、いと讀まれた。弟を見ると、彼女は長椅子から飛び上るやうに立つて、さら／＼と絹袴ヌイハカマの音をさせながら急ぎ足で迎ひに出た。兩人は接吻して、微笑みながら顔を見合はせた。不可思議な、とても言葉には現はせない、意味深い、そして眞實のこもつた眼眸メノムが交はされると、やがて眞實のこもらない言葉を交へはじめた。兩人は母の死後、始めて會つたのである。

「姉さんは少し肥つて、若返つたやうですね。」とネフリュードフは言つた。

彼女は満足さうに唇を歪めた。

「あなたは少し瘦せたやうね。」

「え、兄さんは何うしました？」とネフリュードフは訊ねた。

「夫は休んでゐます。昨夜一晩ぢゆう眠らなかつたんです。

の。」

話したいことが澤山あつたけれども、言葉にはお互ひに出なかつた。言ひたくても口に出なかつたことは、たゞ眼眸で話した。

「私、あなたの處へ行きましたよ。」

「え、知つてゐます。僕は家を出て了つたんです。廣すぎて獨りぢや淋しかつたものですから。どうせ僕は要りませんから、姉さんにみんなお譲りしませう。家具から——家財みんな。」

「さう。アグラフエーナ・ペトロフナがさう言つてゐましたわ。あちらへも行きましたよ。本當にすまないわね。だけど……」

その時旅館の給仕が銀の茶器を持つて來た。兩人は給仕が茶器を卓子の上に据ゑる間だけ口を噤んでゐたが、ナターリヤは卓子に向つた肘掛椅子に移つて、押し黙つたまゝ茶を注いだ。ネフリュードフも黙つてゐた。

「時にね、ドミートリイ、私はすつかり聞きましたよ。」とナターリヤは彼をちらと見て、煮え切らぬ調子で言つた。

「結構です。姉さんが御存知だとすれば何よりです。」

「でも、あゝいふ生活をして來た女を、あなたに矯正せるとても思つてるんですか？」とナターリヤ・イワノフナ

は言つた。

ネフリエードフは小さな椅子に、凭たかれかゝらないで、行儀よく腰かけながら、彼女の言ふことをよく呑み込んで、間違ひなく答へようとして、耳を澄まして聴いてゐた。つひこの間マースロワに會つた際に、彼の心に呼び起こされた氣持は、今もなほ彼の魂を静かな喜びとすべての人間に對する好意とで充みつ續けてゐたのであつた。

「僕はあの女を矯正しようといふんぢやないのです。自分を矯正したいのです。」と、彼は答へた。

ナターリヤ・イワーノワナは溜息をついた。

「結婚しなくとも、別に方法がありますわ。」

「けれども結婚するのが一番いゝと考へます。それに又、結婚すれば、僕みたいな者でも何か役に立つやうな方面へ出られますから。」

「そんなことをしたつて、」と、ナターリヤ・イワーノワナは言つた。「あなたが幸福になれようとは、私考へられませんか。」

「問題は僕の幸福にあるんぢやないのです。」

「それはさうでせう。だけどあの女にたとへ愛情があつたにしても、あの女は幸福にはなれませんかよ……さういふことはとても望まれませんよ。」

「さうです。あの女はまた望んでもあません。」

「それは分つてゐますわ。だけど人の生涯は……」

「人の生涯がどうしました？」

「もつと別なものを要求してゐますよ。」

「人の生涯には吾々の當然しなければならぬことの外には、何も必要なことはありませんよ。」眼や口元に幾らか小皺が寄つてゐるとはいへ、まだく美しい姉の顔を見ながら、ネフリエードフはかう言つた。

「私には分りませんわ。」と、溜息ため息して彼女は言つた。

『可哀さうに！ どうしてまあこんなには姉は人間が變つたのだらう？』と、まだ彼女が結婚しない以前のナターシヤを憶ひ出し、自分がまだ子供だつた時分に受けた數限りない優しい心づかひの思ひ出を、次ぎ／＼に憶ひ出しながら、ネフリエードフはかう考へたのであつた。

この時、いつもの通り頭を高く反そらせ、胸を突き出し、軽く柔かな足取りで、にや／＼笑ひながら、イグナーチ・ニキフォロウィチが部屋へ入つて來た。彼は例の眼鏡を光らせ、禿頭はげや鬚髯ひげをてか／＼させてゐた。

「や、今日は！」と、彼は態わざとらしく言葉に力をこめて言つた。

（結婚當座は二人共『君』ツイ（目下の者に向ふ時は呼び棄てゐるが）同輩以上に使ふ時は親しみを現はす）

を使用しようとお互ひに努めてゐたのだが、結局矢張り「あなた」(大して親しみを含)を使つてゐた。)

二人は握手し合つた。そして、イグナーチイ・ニキフォロウイチは徐かに安樂椅子に腰を下した。

「お話のお邪魔ぢやありませんかね?」

「いえ、僕は自分の話すことや爲ることを誰にだつて隠さうとは思ひませんから。」

この男の顔を見、毛むくぢやらな手を見、保護者氣取りの自惚たつぷりな聲音を耳にするや否や、ネフリユードフは今までの穩かな氣分がすつかり消えて了つた。

「あのね、この人の計畫のことで、種々話してたんですの。」とナターリヤ・イワノウナは言つた。「あなた、お茶は?」と、急須を手にして彼女は附け加へた。

「うむ、一杯貰はう。で、その計畫とは一體どんなものですか?」

「なあに、僕が罪深いことをした女が、囚人達と一緒にシベリヤへ送られるので、僕も一緒に行かうといふだけのことです。」とネフリユードフは口を切つた。

「いや、單に送つて行かれるだけでなく、それ以上のことがあるやうに聞いてゐましたが。」

「さうです、あの女さへ承知なら結婚するつもりなんで

す。」

「ほう、成程! で、もしお差支へないなら、その動機といつたやうなものを聞かせて頂けませんか。私には何うも合點が参りませんのでね。」

「その動機といふのは、その女が……その女の墮落の第一歩といふものが……」と、ネフリユードフは適當に言ひ表はすべき言葉が見つからないのでいら／＼した。「その動機といふのは、つまり、僕が罪を犯してゐるのに、罰せられたのはあの女だからです。」

「だが、その女が罰せられたとすれば、恐らくその女に罪がないとはいへますまい。」

「いや、その女には、全く罪がないのです。」

ネフリユードフは別にその必要もないのに、興奮しながらあの經緯をすつかり話した。

「成程、それあ裁判官の失錯ですな。つまり陪審員の答が輕卒だつたんですよ。しかしこんな場合のために元老院といふものがあるでせう。」

「元老院では棄却したんです。」

「は、あ棄却したと……して見ると、上訴の理由が薄弱だつたと見えますね。」イグナーチイ・ニキフォロウイチはかう言つたが、眞理は原被兩告の陳述の結果であるといふあ

りふれた俗論を抱いてゐるのは明かであつた。「元老院はその事件の本質まで立入つて調査することは出来ないのです。もし事實その判決に間違ひがあるならば、皇帝陛下に請願しなければなりません。」

「その手續きなら、もう取りましたけれど、どうもこれといふ程の見込みもなさうです。まあ、請願書を司法省へ廻はして調べさせるでせう。そして司法省では元老院へ照會するでせう。すると元老院は以前の判決を繰返す外はありません。で、まあ結局同じやうに、やはり罪のない者が刑を受けることになるんですね。」

「いや、第一、司法省が元老院に照會するなんてことはありませんよ。」と、イグナーチ・ニキフォロウィチは勿體ぶつた微笑を浮べて言つた。「直接裁判所から事件を取り寄せて再審しますよ。そしてもし間違ひでも發見すれば、それに従つて判決を下します。第二に、罪のない者が刑罰を受けることは決してありません。一步譲つて見てもそれは極めて稀な例外です。刑罰を受けるのは事實罪過があるからです。」と、落着いた調子で、得意さうな微笑を浮かべながら言つた。

「でも、僕はその反對だと信じてゐます。」と、ネフリュードフは姉婚に對して反感を覺えながら言つた。「裁判所で

有罪と判決された人間の大部分は無罪だと僕は信じてゐます。」

「それは何ういふ意味ですか？」

「文字通り、罪がないといふことです。例へば、今の話の女は殺人犯として罰せられてゐます。近頃會つた百姓なども人殺しをしないのに殺人犯に問はれてゐます。またある母子の者は、實は家主が自分で火をつけたのに、放火犯の罪をなすり付けられてゐるんです。」

「成程、裁判上の手拔りは今迄もあつたし、これからだつて勿論有りますよ。人間の作つた制度ですから、完全といふ譯には參りませんよ。」

「それから、自分の育つた周囲の影響によつて、自分のした行爲を犯罪と思つてゐない人達も澤山にゐますが、是等は矢張り無罪でなければなりません。」

「ちよつと待つて下さい。それは偏り過ぎた言葉です。どんな泥棒だつて人の物を盗むことは良くないことや、盗んでならないことや、盗むことが人の道に反すること位はよく知つてゐますよ。」イグナーチ・ニキフォロウィチは、穩やかに、自信ありげに、そしていつもの通り幾分輕蔑するやうな薄笑ひを浮かべながらかう言つたが、この薄笑ひはネフリュードフを憤つとさせた。

「いや、知つてやしませんよ。たゞ皆が盗んぢや不可いないと言ひきかせるだけです。けれども彼等は、工場主が賃金を十分拂はないで自分達の勞力を盗んだり、政府がその使つてゐるあらゆる官吏達と共に謀して、租税といふ形式で自分達の金を盗むのをやめない、といふこと位のは、事實目撃して知つてゐますよ。」

「や、そいつあまるで無政府主義アナーキズムだ。」とイゲナーチ・ニキフォロウィチは、靜かに義弟の言葉に、かう定義を下した。

「僕はそれが何といふのかは知りませんが、有りの儘を言つてゐるんです。」と、ネフリニードフは言葉を續けた。「政府が自分達の金を盗んでゐる事實を彼等は知つてゐます。凡ての人間に共有さる可き筈の土地を、吾々地主なる者が強奪して、長い間彼等から搾取してゐたことをよく知つてゐます。然るにこの盗まれた土地から、百姓が自分の煖爐にくべるために小枝一本でも取つたら吾々は監獄へ打ち込んで、彼等を泥棒呼ばはりします。泥棒は彼等でなく、彼等の土地を盗んだその者共であり、盗まれたものを取り返へすことは自分達の家族に對する義務であることを彼等はよく知つてゐます。」

「よく分りませんな。よしんば分つたところで同意致し兼

ねますな。土地といふものは誰かの所有でなければならぬのです。もしあなたが土地を分けておやりになるとすれば……」イゲナーチ・ニキフォロウィチは落着き拂つて、ネフリニードフが社會主義者であると信じ込み、又社會主義の理論は凡ての土地を平等に分配しなければならぬと主張してゐるものと信じて、かうした分配方法は極めて愚劣であり、それが何うして愚劣であるかといふことは容易に證明出來ると信じてゐた。「もしあなたが今日土地をたとへ平等に分配したとしても、明日になればまたその土地は勤勉で腕のある奴の手に移つて了ふでせうよ。」

「土地を平等に分配しようとは誰も考へてゐません。土地は誰も占有してはならないものなんです。買つたり賣つたり、貸したりすべき性質のものぢやありません。」

「だがね、所有するといふ權利は生れながら人間に具つてゐるものです。この所有する權利がなければ土地を開墾することに少しの興味もありますまい。所有の權利を破壊してごらんさない。吾々は野蠻な状態へ逆戻りしてしまつすよ。」土地所有權は争ふ餘地のない眞理で、土地を所有したいといふ人々の渴望はこの要求の現はれであるといふ俗論を繰返しながら、イゲナーチ・ニキフォロウィチは權威ある者のやうな口吻で言つた。

「その反對ですよ。誰も土地を私有しなくなつたら、今日のやうに地主達が乾草に寝てゐる犬ころみみたいに何もしないで、自分では土地開墾も出来ない癖に、開墾しようとする人々に、土地を自由することを許さない、といふやうなことが無くなつて、自然荒廢した土地などは無くなりやすよ。」

「ねえ、ドミートリイ・イワーノウィチ、どう見ても正氣の沙汰とは受け取れないぢやありませんか！ 今の世の中で土地の私有を廢止しようたつて出来る筈もないし、これはあなたの何時ものお株に過ぎませんよ。だが、率直に言ひますが、どうぞ悪しからず……」と、イゲナーチイ・ニキフオロウィチも、やゝ顔色をかへて聲を顫はした。この問題が彼の心に最も近く觸れたらしかつた。「私はあなたに御忠告致しますがね、愈々實際的に解決される前に、この問題をもつと熟考された方がいゝと思ひます。」

「あなたは僕の一身上のことについて言つておゐでなんですか？」

「左様、吾々のやうに特別の位置にあるものは、吾々の生れた周囲の生活状態を維持して行かなければなりません。また吾々は先祖から承け繼いだものを吾々の子孫に傳へて行かなければならないといふ責任があると思ひます。」

「ですけれど、僕が自分の責任と考へてゐることは……」
「お待ちなさい。」と、話の腰を折られまいとしてイゲナーチイ・ニキフオロウィチは言葉を續けた。「私は私一個のためや子供達のために言つてるんぢやありません。子供の地位はもう保障されてゐますし、吾々一家が食つて行けるだけの資産は作つてゐます——で、子供も安樂に暮して行けるだらうと思ひます——だからあなたの行爲について私が抗議したいのは、遠慮なく申しますが、まだ十分にお考へが行き届いてゐないといふ點、自分のためといふことを少しも考へられてゐないといふ點です。これでは主義として同意致し兼ねますよ。もつとよくお考へになるようにお勧め致します。お讀みになる本にしろ……」

「いや、僕一身上のことは僕の決心に任せて頂きたいです。それに何んな本を讀まうと讀むまいと、僕の自由にさせて頂きたいのです。」と、ネフリュードフは蒼くなつて言つたが、手が冷たくなつて、自分を抑へることが出来なくなつたので、口を嚙むと、茶を飲みはじめた。

三三

「ところで、子供はどうしました？」と、やゝ氣が落着くとネフリュードフは姉にかう訊ねた。

姉は、お祖母さんと一緒に残して来たと話した。そして夫と弟との争論が止んで了つたのを満足に思ひながら、昔、丁度彼が子供の時分、黒ん坊の人形やフランス女と名をつけてゐた人形など、三つの人形と一緒に遊んでゐたと同じやうに、彼女の子供も人形と旅行ごつこをして遊んでゐるなど、話しだした。

「そんなことを覚えてるんですか？」と、ネフリュードフは微笑みながら言つた。

「え、それにね、その遊びつ振りがあなたとそつくりなんですの。」

面白くない對話がお終ひになつて了つてナターシャは、つとしたが、夫のある前で、弟と二人だけしか分らない話をするのも好ましくないで、みんなに分る世間話をはじめるともりで、決闘で獨り息子を失くしたカーメンスカヤの悲しみが目下ペテルブルグで噂の種になつてゐることを話題にのぼせた。

イグナーチイ・ニキフォロウイチは、決闘で人を殺した者を一一般殺人罪から除外するといふ制度には賛成出来ないといふ意見だつた。

彼はこんなことを言ひだしたので、ネフリュードフの反感を買つた。で、ネフリュードフは又もやこの問題に就いて議

論をやりださうといふ氣がむら／＼と起つたが、二人とも口には出さないで、お互ひに心の中で自分の説が正しいと考へてゐた。

イグナーチイ・ニキフォロウイチは、ネフリュードフが自分の仕事を頭から輕蔑して非難してゐるのを感じて、その意見の間違ひをすつかり指摘してやらうと思つた。またネフリュードフの方では、姉婿が自分の土地處分一件に餘計な口を入れたので忌々しくは思つたが、そのことは言ひ出さなかつた。(彼の財産相續者として、姉婿や姉やその子供達がこの一件に口出しする權利があるのは、彼も心の中に認めてゐた。)しかし、今ネフリュードフには罪惡に違ひないと思はれてゐる愚劣な決闘事件を、この偏狭な男が自惚れきつて、落着き拂つて、如何にも正當な理窟に適合してゐるやうに思ひ續けてゐるのが、癪に障つて仕方がなかつた。この自惚れがネフリュードフの怒りを買つた。

「では、裁判所はどうしたら好いと云ふんです？」とネフリュードフは訊いた。

「決闘して人を殺した方を、やはり普通の殺人と同じやうに苦役につかせたがいゝんです。」

ネフリュードフの手は又もや冷たくなつたが、彼は熱心に言つた。

「それで、どうなるんでせう？」

「それで公平が保たれるんです。」

「まるで裁判所の仕事の目的が公平といふことに在るやうな口吻ですね！」と、ネフリュードフは言つた。

「ぢや何か別に目的がありますかね？」

「ある階級の利益を維持するんでさあ。裁判所は、僕の考へによれば、吾々地主階級にとつて有利な現存制度を維持するための、行政上の道具に過ぎません。」

「これは全く珍らしい御意見ですな。」と、イグナーチイ・ニキフォローウィチは、落着き拂つた微笑を浮べて言つた。

「然し一般の裁判所に對する考へは、それとは少し異つた目的をもつてゐるやうですね。」

「理論から云へば仰しやる通りですが、僕の目撃した實際は違つてゐます。實際に於ける裁判所の目的は、現在の社會狀態を庇護するために過ぎません。その目的のために一般社會の水準以上に立つて、現存社會を向上させようとする人々、所謂政治犯と呼ばれる人々や、水準以下の所謂犯罪人典型と呼ばれる人々を迫害したり處罰したりするのが裁判所です。」

「私にはそれには同感出来ませんな。第一政治犯と呼ばれてゐる人達が罰せられるのは、その人達が一般社會よりも優

れてゐるからではないのです。幾分毛色は變つてゐても、そのうちの大部分は、あなたが水準以下と言つて居られる犯罪者の典型と同じく邪道に陥つた社會の掃き出し者に過ぎませんよ。」

「然し、僕は現に精神上裁判官達よりも遙かに優れてゐる政治犯人を幾らも知つてゐます。あの異宗徒達は皆精神的な、意志の堅固な人達です……」

しかし、イグナーチイ・ニキフォローウィチは自分が話してゐる時に話の腰を折られたことのない人間の癖として、ネフリュードフの言葉をてんで聞いてゐなかつた。これがネフリュードフを憤つとさせたのだが、それにはかまはず彼と殆ど同時に自分の話を續けた。

「裁判所の目的が現在の社會制度を維持して行くに在るといふ御意見には、どうしても賛成出来ませんな。裁判所には裁判所の目的といふものがあつて、それを遂行してゐます。つまり、罪人を矯正したり……」

「それなら監獄の中を矯正したらいいでせう。」と、ネフリュードフは言葉を挟んだ。

「或は社會の」と、イグナーチイ・ニキフォローウィチは頑強に續けた。「安寧を齎^{おと}かす放蕩無頼の徒を取除くのが裁判所の目的です。」

「そこが問題なんです。裁判所は罪人を矯正することも無頼漢を取除くこともしていません。第一社會にはそんなことをする手段がないんです。」

「そりやまたどうしてです？ とんと合點が参りませんな。」イグナーチイ・ニキフォロウィチは作り笑ひをしながらかう言つた。

「僕の考へでは、本來合理的な刑罰といふものは二つしかありません——それは昔採用されてゐたもので、つまり體刑と死刑がそれです。しかし、これ等の刑罰は人間の精神を柔らげるので、今ではだん／＼廢止されるやうになつてゐます。」と、ネフリュードフは言つた。

「これはまた、あなたの口からそんな説を聞くのは初めてで、不思議に思ひますな。」

「人間を一度痛い目に遭はせて、二度とそんなことを繰返さないやうにするのが、體刑の合理的な點です。また社會に毒を流し、危険を及ぼすやうな者の首を切り落すのは、誰が見ても賢明な遣り方です。兎に角この二つの刑罰は合理的な意義を持つてゐます。然し、職業が無く、周圍が悪かつたために止むなく墮落した人間を、極悪非道の連中と一緒に監獄の中に閉込めて、遊んでゐて食へるやうにしたり、無理にもぶら／＼させて置いたりするのは、一體どう

いふ意義があるんですか？ それから又、官費で——それには一人分の費用が五百ルーブリ以上もかゝりますか——ツラ縣からイルクーツク縣へ、或はクルスク縣から何處其處へといふ風に、罪人を無暗に移送するのも無意義なやうに思ひます。」

「では、囚人はこの官費旅行を非常に怖れてゐます。もしこの官費旅行や監獄がなかつたら、吾々はお互ひにかうやつて安心しては居られませんよ。」

「けれども監獄は吾々の安全を保障しては呉れませんよ。と言ふのは、囚人は永久に監獄にある譯でなく、放免になる日があります。それにこんな制度の下では、囚人を極度まで悪くし墮落させますから、却つて社會にとつて危険を増すばかりです。」

「では、あなたは懲治制度を完全にしなければならぬと仰しやるんですね？」

「いや、完全にされては堪りません。監獄を完全にすれば、普通教育に費すよりも餘計な金をかけなければなりませんし、そのために新しい負擔がやはり國民へかゝつて來ます。」

「然し、懲治制度に缺陷があるからと言つて、裁判所そのものが無用だとは言へますまい。」と、又もや義弟の言ふこ

とに耳を藉さないでイグナーチ・ニキフォローウィチは自分の話を續けた。

「でも、その缺陷を矯正することは出来ませんよ。」と、ネフリニードフは聲を高めて言つた。

「では何うすれば好いんです？ 囚人を皆殺して了ひますか？ それとも或る政治家が言つたやうに、眼玉を抉り抜いて了ひますか？」と、イグナーチ・ニキフォローウィチは勝ち誇つたやうに微笑して言つた。

「さうです。それは残酷かも知れませんが、その方が有効です。今行はれてゐるやうな制度だと残酷な上に無効力で、莫迦々々しいのです。正氣の人間がどうしてこんな刑事裁判みたいな愚劣で残酷な仕事に關係して居られるのか、了解出来ない位みです。」

「ところで私は現在それに携はつてゐますがね。」と、イグナーチ・ニキフォローウィチは顔色を眞着にして言つた。

「それはあなたの御勝手です。然し僕には呑み込めませんな。」

「どうもあなたには御了解出来ないことが随分澤山あるやうに思ひます。」

「僕は裁判所で、公平無私の人なら誰でも同情せずにはゐられないやうな一人の不幸な少年を、ある檢事次長が有罪

にしようとして、全力を盡してゐるのを見ましたよ。また或る檢事が異宗徒を訊問して、聖書を讀んだといふ科で罪に落さうとしたことを知つてゐます。要するに裁判所の仕事などは、すべてさうした無謀な残酷なことばかりです。」

「もし果してその通りだつたら私だつて、とても勤めてはゐない筈ですがね。」と、イグナーチ・ニキフォローウィチはかう言つて、起ち上つた。

姉婿の眼鏡の下が妙に光つてゐるのに氣がついて、『涙ぢやないか！』とネフリニードフは思つた。全くその通りで、辱しめられたための口惜し涙であつた。イグナーチ・ニキフォローウィチは窓際へ近づいて、ハンカチを取り出すと咳拂ひしながら、眼鏡をはづして眼を拭いた。それから肘掛椅子へ戻つて來て、葉巻を吹かしたが、それきり一言も口を利かなかつた。

ネフリニードフはこれ程まで姉や姉婿を苦しめたことが心苦しくなり、恥づかしくもなつた。殊に明日出發したら、またと會ふ機會は無からうと思つたので。

で、心中むしやくしやししながら二人に別れを告げて、自分の下宿へ歸つた。

『自分の言つたことは事實には違ひない——少くともあの男は反對出来なかつた。が、自分もあれ程まで言はなくと

もよかつたのだ。思はず悪い感情に支配されて、あの男を辱しめたり可哀さうなナターシャを悲しませたりしたのは、自分も餘りいゝとは言はれない。」と、彼は思つた。

三四

マースロワが加はつてゐる囚人の一隊は、翌日の午後の三時に停車場を出發することになつてゐたので、ネフリュードフは彼女が監獄から出るのを見送つたり、また一緒に停車場まで行かうとして、それには十二時前に監獄へ出かけなければならぬと思つた。

ネフリュードフは、手廻りの荷物や書類を纏めてゐるうちに、ふと自分の日記に眼を留めて、それをあちこち拾ひ讀みした。その最後の一節は、彼がペテルブルグを出發する直ぐ前に書いたもので、次のやうなことがあつた。『カテューシャは自分に犠牲を拂はせまいとして、却つて彼女自身犠牲にならうとしてゐる。彼女は勝つたが、自分も勝つた。俄に信じる譯には行かないが、彼女の心の中に或る變化か起りかけてゐるらしいのは嬉しい。はつきり信じていゝか分らないが、彼女は甦^{よみが}へるやうな氣がする。』彼は尙ほその先を讀んで行つた。『自分は非常に苦しい、けれども喜ばしいことを經驗した。カテューシャが病院で良くない行爲をし

たと聞いた時、自分は突然ひどい苦しみを感じた。こんなに苦しいものとは思ひがけなかつた。自分は彼女と口を利く時、嫌忌と憎惡の情を禁じ得なかつたが、後でふと自分のことを思ひ出すと、それは今までに何度となく自分がやつたことであり、彼女があんな不品行をするやうになつたのも自分の責任であつて、彼女を憎む理由は少しもないと思つた。と、不意に自分が厭はしくなり、却つて彼女が可哀さうになつて、再び優しい氣持になつて來た。常にこのやうに眼を開いて自分自身を省みることさへ出來たら、我々をもつと善い人間になれるのだ！』次に彼はその日の日記を書きつけた。『今日ナターシャを訪ねたが、自分勝手な振舞^{ふるまひ}から、思ひやりのない憎しみの言葉を言つた後なので、重苦しい感じが残つてゐる。然し何うにも仕様がな^ない。明日から新しい生活が始まるのだ。舊い生活よ、おさらばだ！新しい印象が無數に浮んで來るけれど、まだ一つに纏めることが出來ない。』

翌朝ネフリュードフは眼を覺ますと、姉婿の氣持を害したことが第一に後悔された。

『このまゝで出發することは出來ない。』と、彼は考へた。『何とかして立寄つて仲直りをしなければならぬ。』併し時計を見ると、もう時間がなかつた。護送隊の出發

に間に合ふためには急がなければならなかつた。で、彼は
大急ぎで支度して、下宿の門番と、矢張り一緒に出發する
フョードシヤの夫タラスとに荷物を停車場まで運ぶやうに
頼むと、最初眼についた辻馬車を備つて監獄へ急がせた。
囚人列車が出發して、二時間後に出る郵便列車でネフリユー
ドフも發つことになつてゐたので、もう歸つて來ない心算
で、下宿屋の勘定をすつかり済ました。

それは七月の暑苦しい日であつた。蒸し暑い前夜のほと
ぼりのまだ冷め切らない街路の敷石や家や屋根の板金から
發散する熱が、蒸し／＼した、淀んだ空氣の中に立ちこめて
ゐた。風は全く絶えてゐた。時たま微風が吹いて來ても、そ
れは塵やペンキの匂ひを一ぱい含んだ、むつとする生暖
い空氣であつた。街路には人影が少く、往來する人々はい
家並の日蔭を選びながら歩いてゐた。眞黒に日に焼けた道
路人夫だけが襦袢を穿いて道の眞中に躡んで、焼け火照る
砂地の中へ、金槌で石を叩き込んでゐた。そして陰氣な顔
をした巡査が白い夏服を着て、オレンジ色の紐にピストル
を吊るして、氣倦るさうに足を揉みながら道の眞中に突つ
立つてゐた。白い頭巾をすつぱり被つて、兩耳だけがその
裂目から突出てゐる馬をつけ、片方だけ日覆をかけた鐵道

馬車が、鈴を鳴らしながら街路を往つたり來たりしてゐた。
ネフリユードフが監獄に着いた時は、護送隊はまだ出發し
てゐなかつた。監獄では朝の四時に始まつた護送囚徒達の
受け渡しの面倒な仕事はまだ片づかなかつた。この隊で護
送される囚徒は男六百二十三名、女六十四名であつた。そ
れを一々囚徒名簿と突き合はせて、病人と虚弱者とを選り
出して護送兵に引渡さなければならなかつた。庭の日蔭
に持出されて書類や事務用の道具が載せてある卓子の傍に
は、新任の典獄と二人の典獄補と、醫者とその助手と、護
送士官と書記とが、腰かけてゐた。そして囚徒を一人づゝ
呼び出しては診察したり訊問したりして、次ぎ／＼に覺え
書を作製した。

日は既に卓子の半分まで射しかゝつて、蒸し暑くなつて
來た。風が全く絶えたのに、其處に立つてゐる囚徒達の群
から入いきれがして、猶更暑苦しかつた。

「これぢや一體何時になつたらお終ひになるんだ？」と、
背の高い肥つた楮ら顔の、肩の怒つた、手の短い護送士官
が鬚で蔽はれた口に煙草をすつと吸ひ込みながらかう言つ
た。「まつたくやり切れないよ。何處からこんなに背負ひ込
んで來たんだ？ まだ大勢ゐるかね？」

書記は帳簿を調べた。

「まだ二十四人と、女囚全部が残つてゐます。」

「おい、何で突つ立つてるんだ！ 此方へ来るんだよ！ ……」と、護送士官は、まだ調べの済まない囚徒達が一つ處にかたまつてゐるのに向つて怒鳴つた。

自分の順番を待つ囚徒達は、日蔭でなく、眞正面に太陽に照り付けられながら、三時間以上も列を作つて、立つてゐた。

監獄の中庭でこんな仕事をやつてゐる間、外の方では、門の傍に銃を持つた番兵が例の通り立つて居り、囚徒達の荷物や體の弱い囚徒達を乗せて行く荷馬車が、二十臺ばかり並んでゐた。曲り角の處には囚徒の身内の者や友達が、一かたまりになつて出發を見送り、出来れば一言でも別れの挨拶を交はして、餞別の品を手渡さうと待ち構へてゐた。ネフリュードフもこの一と群の中に交つてゐたのであつた。

彼は一時間ばかり其處に待つてゐると、やがて門の向うで鎖のがちや／＼鳴る音や、足音や、何か指圖する聲や、咳の聲や、群衆の低い話聲が聞えて來た。それが物の五分も續いて、その間、獄吏が小門を出たり入つたりしてゐたが、遂々出發の命令が下つた。

雷のやうな音を立て、門が開かれると、鎖の音が前より

も高く鳴つた。と、白服を着て銃を擔つた護送兵達が街路

へ出て來て——いかにも馴れ切つて、よく心得てゐるといつた風に——門の正面に規則正しく環狀の列を作つて並んだ。それが濟むと、再び號令がかゝつて、髪を剃つた坊主頭にパン菓子形の帽子を被つた囚徒達が、肩に袋を擔いで鎖のついた足を曳摺りながら、片つ方の手では背中の袋を支へ、他の空いた手を振りながら二列に並んで門から出て來た。最初に出て來たのは重罪の徒刑囚で、みんな同じやうな灰色のズボンをはいて、同じ色の、背中に印の入つた上衣を着てゐた。それは——若いのが年寄や、瘦せたのや、肥つたのや、蒼ざめたのや、赫ら顔や、黒いのや、鬚の生えてゐるのや、あないのや、ロシア人、タタール人、ユダヤ人等——種々雑多な人間が足枷の音をさせながら、これから遠い旅へ出ると覺悟をきめてゐるらしく、勢よく手を振り／＼出て來たが、十歩位も歩くと、立止まつて、濼順しく四人づつ列を作つた。それによつて、同じく頭を剃られて同じやうな服装をした連中が、續々と門から繰り出して來た。この連中は足枷をつけられてはゐないが、手錠で二人づゝ繋ぎ合はされてゐた。これは流刑囚で、やはり勢よく押し出して來たが、立止まると、前と同じく四人づゝ並んで列を作つた。それから町村組合から追放され

た囚徒がやつて来ると、それに續いて同じやうな順序で女囚が出て来た。先頭の者は徒刑囚で、灰色の囚人上衣を着、布で頭を包んでゐた。それに續いて流刑囚と、自ら進んで夫と一緒に歩いて行く女房達、それ／＼自分の出た町や村の服装で出て来た。女囚の中には乳呑兒を上衣の懷に入れて抱いてゐるのも二三あつた。

女達と一しよに男の子や女の子がぞろ／＼歩いて来た。まるで親馬の傍に仔馬がくつゝいて行くやうに、女囚達の間に挟まつてゐた。男囚達は折々咳をしたり、一寸口を利いたりするだけで、黙つて立つてゐたが、女囚はしつくりなしに喋つてゐた。マースロワが門から出て来たとき、ネフリニードフは逸早く見つけたやうであつたが、彼女の姿は直ぐ大勢の中に紛れ込んでしまつた。眼に入るものは、人間らしい姿を失つた、女とも何とも見分けのつかない顔付をした、子供や袋を背負つて男囚の後からが／＼言ひながら跟いて行く灰色の生物の群だけであつた。

監獄の中で一應囚徒の人数調べは済んだ筈であるのに、護送兵は帳簿と照し合せて又もや人数を調べ始めた。この人数調べはかなり時間を取つたが、殊に二三の囚徒が動いたり場所を代へたりしたので、その度毎に、護送兵は數へ方を間違へて、一層長びいた。護送兵は怒鳴り立て、囚徒

を軽く突き飛ばしたりして、囚徒が憤つとしながらも、従順しく元の位置へ歸つて行くのを待つて、又改めて數へ直した。すつかり點檢が済むと、護送兵は何やら號令をかけた。すると囚徒の群に動搖が起つた。體の弱い男や女や子供は我れ先きにと人を押しつけて馬車の方へ駆け出し、その中へ袋を投げ込んで、飛び乗つた。泣き喚いてゐる乳呑兒を抱いた女達や、場所争ひで喧嘩してゐる元氣な子供達や、しよんぼりと沈み切つてゐる囚徒達は、皆馬車の中に席を取つた。

二三人の囚徒が、帽子を脱いで護送士官に近よつて何やら懇願してゐた。後になつて、それは馬車に乗せて呉れと頼んだのだといふことがネフリニードフに分つた。見てゐると、護送士官は黙つたまゝその方には見向きもしないで煙草を喫かしてゐたが、列から離れて自分に近づいて来たその囚徒の鼻面へ、いきなり自分の短い腕を振り廻した。撲られるのかと思つて吃驚した囚徒は坊主頭をあわてゝ引込めて飛び退いた。

「愚圖々々言ふと思ひ知らしてやるぞ！ 立派に歩けるぢやないか！」と、士官は怒鳴りつけた。

只一人足枷をつけられて、ひよろ／＼した瘦せてゐる老人だけを乗せることにした。この老人はパン菓子形の帽子

を脱いで、十字を切つて馬車に近づいたが、老衰して弱り果てた足に鎖がついてゐて、足を持ち上げることが出来ない爲め容易に馬車に乗れないのを、中にゐた女が助けて彼の手を曳上げた。それを、ネフリードフは見てゐた。

袋が皆馬車に積込まれ、乗車を許された囚徒が袋の上に腰を下すと、護送士官は軍帽を脱いで、ハンカチで拭け上つた額や赤い太い頸筋の汗を拭いて、十字を切つた。

「進め！」と、士官は號令をかけた。

兵卒達は銃をかちやつかせ、囚徒達は帽子を脱ぎ、或る者は左手で十字を切り始めた。見送り人達が何か叫ぶと、囚徒達もそれに對して何とか返答した。女の中には叫び聲が起つた。白服の護送兵に取巻かれた一隊は、鎖につながれた足で埃を立てながら歩き出した。護送兵が先頭に立つて、次に足枷の鎖をかちやく、いはせながら徒刑囚が續き、それから二人づゝ手をつながれた流刑囚、町村組合から追放された囚徒がつゞき、それから女囚といふ順序であつた。その後から袋や病弱者を乗せた馬車が軋り出したが、或る馬車の上で、衣服を堅く巻きつけた一人の女が、おい／＼聲を立てながら止め度なく泣いてゐた。

三五

囚徒の列はかなり長く續いて、袋や病弱者を乗せた馬車がやつと軋り出した頃は、列の先頭がもう見えなくなつてゐた。馬車が動き出した時、ネフリードフは待たして置いた辻馬車に乗つて、一つには男囚の中に自分の知り合ひの囚徒が交つてゐないか、それを調べる爲めに、二つには女囚の中にマースロワを見出したので、彼女に贈つた品物が届いたか何うか訊ねる爲めに、行列の傍を通つて先頭に追ひ付くように馭者に言ひつけた。暑さは酷くなつて來た。

風はバツタリ杜絶えて、千人の囚徒が足で蹴立てる埃は、往來の眞中を動いて行く囚徒の行列の上に、絶えず舞ひ上つてゐた。囚徒達は急ぎ足で歩いて行くので、のろ／＼進ませてゐるネフリードフの馬車では追いつくのに餘程時間がかゝつた。行列は幾つも／＼續いて行くが、何れも見知らぬ奇怪な恐ろしい顔付をして、同じやうな靴を履き、同じやうな服装をして、自ら元氣をつけようとするかのやうに歩調に合はせて、空いてゐる方の手をふりながら、動いて行つた。こんなに多くの人間が、こんなに同じやうな様子をしてこんな奇怪な状態にあるのを見ると、ネフリードフには、これは人間でなく何か一種特別な怖しい生物であるとしか思はれなかつた。しかし、徒刑囚の群の中に殺人犯フリードフを、流刑囚の中に道化者のオホーチンを、それ

から何時だつたか彼に助力を求めたことのある一人の浮浪人を見付け出した時、この印象は消えて行つた。大抵の囚徒達はみんな振向いて、傍を通り過ぎて行く馬車を眺め、その馬車の中に坐つて彼等をじろ／＼見てゐる紳士を見成つた。フォードロフはネフリュードフを認めたといふふ圖に首を振り、オホーチンは眼ばたきをして見せた。けれども叱られると思つたのか二人とも挨拶しなかつた。囚徒達の列と並ぶと、ネフリュードフは直ぐマースロフを見出した。彼女は二列目にゐた。一番端にゐるのは緒ら顔の、足の短い、黒勝ちの醜い女で、上衣を帯で端折つてゐた——これは例の洒落女であつた。その次はやつと足を曳きすつてゐる妊娠女で、三番目がマースロフであつた。彼女は袋を肩にして眞直ぐに正面を見てゐた。その顔には落ちつきと覺悟の色が表はれてゐた。彼女と並んで四番目にゐるのは元氣よく歩いてゐる若い美しい娘で、短い上衣を着て、百姓風に髪を布で包んだフォードシヤであつた。ネフリュードフは馬車から降りて、マースロフに品物のことや體の様子などを訊ねたかつたので、女囚達の傍へ寄つたが、すぐその側を歩いてゐた護送下士がそれを認めて、彼の方へ駈けて來た。

「駄目です。傍へ寄つちや不可ません。嚴禁されてありま

す。」と、寄つて來て怒鳴つた。

が、近づいて、ネフリュードフだと氣がつくと（監獄内では最早ネフリュードフを知らぬ者はなかつた）、擧手の禮をしてその傍に立止まつて言つた。

「今は不可ません。停車場でなら構ひませんが、途中ぢや不可ないことになつてゐますから。こゝら、後れちや不可ん。

さあ歩いた／＼！」と、かう囚徒達に怒鳴つて、この暑いのに、新しいピカ／＼した長靴を穿いた下士は、元の位置へ元氣よく駈けて行つた。

ネフリュードフは鋪道へ引返して、後から跟いて來るように馭者に言ひつけて、自分は隊列の見える處を歩いて行つた。何處でもこの隊列が通り過ぎる、沿道の人々は、憐憫と恐怖との入り交つた注意を彼等に向けた。馬車で通りかゝつた人々は馬車から首を突き出して、暫く囚徒達を見送つてゐた。歩いてゐる者は立止まつてこの氣味の悪い觀物を、びつくりして怖々見つめてゐた。中には隊列に近づいて金を與へて行く者もあつた。その金は護送兵が受取つた。また中には、催眠術にでもかゝつたやうに、隊列の後に跟いて、暫く行つてから不圖立止まり、頭を振つて、たゞ見送るだけの人もあつた。あつちこつちの車寄せや門から、互ひに呼び出しながら駈けて來たり、窓から首を突出して身

動きもせず黙つて、この氣味悪い行列を見てゐる人々ももつた。或る四つ角で立派な幌馬車がこの行列の爲めに行手を食ひ止められた。その馭者臺にはテカ／＼光つた顔の肥つた馭者が、二行釘の外套を背中に引つかけて腰を下してゐた。馬車の後ろの座席には夫婦の者が腰かけてゐたが妻君は青白い瘦せぎすの女で、明るい色のボンネットを被り、派手な傘を持つてゐた。夫はシルクハットを被り、明るい色の、立派な外套を着てゐた。その向ひ座席には二人の子供が腰かけてゐた。亞麻色の髪をお下げにして、花のやうに美しく、また涼しげに着飾つた娘は同じやうに派手な傘をもち、首筋のほつそりした、瘦せこけて、頬骨の尖つた、八歳位になる男の子は、長いリボンで飾つた水兵帽をかぶつてゐた。父親は宜い折を見計つてこの邪魔な行列を通り抜けなかつたといふので、馭者を腹立たしげに叱りつけた。母親の方は絹のパラソルを顔に押しあてるやうにして陽射しと埃を避けながら、忌々しさに眼を細め眉を顰めてゐた。肥つた馭者は、主人が自分でこの往來を行くやうに言ひつけた癖に、今更筋の通らない叱言を言ふのを聞いて、ふり／＼しなからふくれてゐた。そして毛並の艶艶した、絡頭と頸の下に泡を吹いてゐる黒馬か前へ出ようとすることを引きとめるのに苦心してゐた。

巡查はこの立派な幌馬車の持主の機嫌を取るために、囚徒達をちよつと止めて馬車をどうかして通してやらうと、いろ／＼心を配つたが、この行列の中にはどんな金持の紳士でも犯すことの出来ない、或る陰鬱な嚴肅さがあるのを感じた。で、彼は自分が富に對して尊敬を持つてゐるといふ、印に舉手の禮をして、もし萬一のことがあつたらこの馬車に乗つてゐる方々を保護するのは、自分の務めだといはぬばかりの様子で、囚人達をきつと睨め付けてゐた。こんな具合で馬車は行列が通り過ぎるまで待つてゐなければならなかつたが、袋や囚徒達の乗つてゐる最後の馬車が軋つて過ぎた時、漸く動き出すことが出来た。囚人馬車の一つに乗つてゐた例のヒステリー女は、すつかり落着いてゐたが、この贅澤な馬車を見ると、又もやおい／＼泣き出した。やつとこの時馭者は手綱を放したので、黒馬は車道を憂々踏みながら、ゴム輪の馬車を軽々と別荘へ運んで行つた。夫妻や娘や頬骨の出た細い首筋の息子達は、その別荘へ遊びに行く途中だったのである。

父親も母親も、子供達に向つて今のは一體何であるかを教へてやらなかつたので、子供達は思ひ／＼にそれを判斷しなればならなかつた。

娘は母親の顔付から察して、今の人々は、自分の両親や

知合ひの人々とは全然別な種類の悪い人間だからあゝいふ風にされるのが當然のことだといふ風に考へてゐた。それで娘はたゞ怖かないと思つたゞけで、行列がすつかり見えなくなると喜んだのである。

しかし、じつと瞬きもしないで囚徒の行列から眼を放さなかつた頸の瘦せ細つた男の子は、これを別な風に考へてゐた。あの人々も自分や他の人間と少しも變らない人々で、あの人達はしてはならない悪いことをどうしてもしなければならぬやうに誰かゞして了つたのだ、といふことを、まるで神から直接啓示でも受けたかのやうに堅く信じて疑はなかつた。そして囚徒達が可哀さうになつて來たか、鎖に繋かれて、頭を剃られてゐる人達も、その人達を鎖に繋いだり、頭を剃つたりする人達も、彼には等しく怖しいものと思はれた。そして彼の唇はだん／＼と泣く前のやうに脹れ上つて來るのだつたが、こんな時に泣くのは恥づかしいことだと思つたので、泣くまいと一生懸命に力んでゐた。

三六

ネフリュードフは囚徒達の急ぎ足に步調を揃へて歩いてゐたが、薄い着物を着、軽い外套を羽織つてゐたのにも拘らず、ひどく暑かつた。殊に往來を立罩めてゐる埃と、

激んだ蒸暑い空氣で息苦しかつた。百歩ばかりも歩くと彼は再び馬車に乗つて列の先頭へ出た。けれども街路の眞中で、馬車の中にじつとしてゐるのは餘計苦しかつた。で、彼は暑さを紛らさうとして昨日の姉婿との爭論を思ひ起さうと試みたが、それも朝ほどには、彼を興奮させなかつた。囚徒が監獄から出て來る所や、この行列の光景から受けた印象で、そんなものは蔽ひかぶされてしまつた。いや何よりもこの壓しつけるやうな暑さかこたへた。或る塀の傍の木蔭で帽子を脱つた二人の小學生が、膝を突いて坐つてゐる氷屋の傍に突立つてゐた。一人は氷屋が何か黄色いものをコップに入れて呉れるのを、さも待ち遠しさうにしてゐた。

「何處か飲む處はないかね？」と、ネフリュードフは何か冷めたいものを飲みたくつて堪らないので馭者に訊ねた。

「すぐそこに好いお茶屋がありますよ。」と、馭者はかう言つて、角を曲ると、大きな看板の出でゐる處までネフリュードフを案内した。

帳場の向うにゐるタバシニカを着てブク／＼肥つた主人と、何時かは白かつた時もあったかと思はれるやうな汚れた服を着た給仕達は、少しも客が來ないので卓子に凭れてゐたが、不意にこの邊に見掛けない客が入つて來たのを

物珍らしさうに、ろく見ながらその註文を訊いた。ネフリュードフはゼルツェル水をいひつけて、窓から少し離れた、小汚い卓布をかけた古卓子に向つて腰掛けた。

向うの卓子には茶道具と白い瓶とが載つてゐて、二人の男がそれに對つてゐたが、額の汗を拭いて仲よさうに何か相談してゐた。その中の一人は、色の黒い禿頭の男で、丁度イグナーチイ・ニキフォローウィチのやうに、矢張り黒い毛が後頭部に縁を取つて生えてゐた。ネフリュードフはそれを見て、姉婿との昨日の争を思ひ浮べて、出發前一度彼と姉とに會ひたくなつて來た。『出發までには、とても間に合ふまい。』彼はさう考へた。『手紙を書いた方がいゝだらう。』それから彼は紙と封筒を持つて來さして、しゆうしゆう泡を立てゝゐる冷たい水を飲みながら、さて何を書いたものだらうと考へ込んだ。けれども彼の考へは少しも纏らないで、手紙が何うしても旨く書けなかつた。

『親愛なる姉上、昨日イグナーチイ・ニキフォローウィチとあなたに議論して、そのまゝお詫びもしないで、重苦しい氣持で出發したくありません。』……と先づ書き出した。『さてこれから何と書かうか？ 昨日言つたことを許して呉れとでも書いてやるか？ だが自分は思つた通りを言つたのだ。もしさう書けば、自分が自説を取消したと奴さん考へるだ

らう。さうすればまた自分の仕事に駭を容れるに違ひない……いや、止さう。』彼はまるで自分と心持の離れた、自惚の強い自分を理解しないこの男に對する憎惡の念が再び頭を擡げるのを感じて、折角書きかけた手紙をポケットに押込んで、勘定を済ますと、街路へ出て護送隊を馬車で追うた。暑さはいよ／＼酷くなつてゐた。壁や石はまるで熱い呼吸をしてゐるので、鋪道は足を焦がしさうに思はれた。ネフリュードフは馬車の漆塗りの泥除けに露はな手を觸れた時、まるでやけどしたやうに感じた。

馬は埃つばいでこぼこ道を倦るさうに蹄の音をたてながらのろ／＼と歩いてゐた。馭者は絶えず居眠りしてゐた。ネフリュードフは何を考へるでもなく唯ぼんやりと前方を眺めてゐた。街路が坂になつてゐる處まで來ると、大きな家の門前に黒山のやうに人が集つて、銃を持つた護送兵が立つてゐた。ネフリュードフは馭者に車を止めさせた。

『何うしたんだね？』と、彼は門番に訊ねた。

『懲役人が何うかしたんでさ。』と、門番が答へた。ネフリュードフは馬車から降りて群衆に近づいた。鋪道の端の傾斜した、目の粗い石の上に、頭の方を足よりも低くして、中年の囚徒が横はつてゐた。鬚の赤い、赭ら顔の、鼻の平べつたい、灰色の上衣を着、同じ色のズボンを穿いた男であ

つた。斑點だらけの両手の指を擴げてだらりと落とし、大きな間を置いて、その高い逞しい胸に波打たせながら叫び、血走つた眼は空をじつと見てゐた。その傍には、佛頂面の巡査や、行商人や、郵便配達や、店員や、日傘を持つた老婆や、空籠をぶら提げた稗頭の男の子などが立つて見てゐた。

「この人達は皆體が弱つてゐますよ。監獄の中に閉ぢ込めて置いて、體をすつかり毀した處へもつて来てさ、この燒き付くやうな日に引つぱり出すんですからね。」と、店員らしい男が、近づいて來たネフリュードフに向つて批難するやうに言つた。

「どうしても助かる見込みはねえだかね。」と、日傘をもつた老婆はおろ／＼聲で言つた。

「胸をひろげなけりや不可ないね。」と郵便配達が言つた。巡査は震へてゐる太い指で、筋はつた赤い頸のところの紐を不器用に解かうとして、あたふたとしてゐたが、それでも矢張り群衆を制しなければならぬと思つた。

「何でみんな突つ立つてゐるんだ？ 暑いぢやないか。風が通らないよ。」

「一體なら、醫者が證明して、體の弱い者は残すのが當然ですな。これぢや、まるで死人を護送するやうなものだ。」

と、店員はかう言つたが、それは自分が法律を嘔つてゐるのを見せつけるつもりらしかつた。

巡査はルバーシユカの紐を解くと、腰を伸ばして邊りを見廻した。

「こら退かんかい。お前達の知つたことぢやない。見世物ぢやないぞ！」と、同情でもして呉れるかとネフリュードフの方を向いてかう言つたが、同情してゐるやうな顔色をしてゐないので、護送兵の方へ眼を向けた。然し護送兵は側の方に離れて、巡査の擦り減つた靴の踵を見てゐるだけで、その當惑してゐる様子には目もくれないやうであつた。

「何て無頓着な人達だらう。こんなにして人間を殺すつて法があるもんか！」

「いくら懲役人でも、矢張り同じ人間ぢやないか。」と、群衆の中で誰かが言つた。

「頭をも少し高くして、水を與りたまへ。」と、ネフリュードフが言つた。

「水は取りに行きました。」その囚徒の上體を兩腕でかゝへて、やつと少しばかり引き起しながら、巡査はかう答へた。

「何故そこへ立つんだ？」と、突然いかめしい聲が聞えた。珍しい位ゐさつぱりした、ピカ／＼する制服を着て、

それよりもつと光つてゐる長靴を穿いた警部が、囚徒の周圍に寄り集つてゐる人ばかりの方へ急ぎ足でやつて来た——「さあみんな退いた！ 何も立つてゐることはないぢやないか！」と、何で皆が集つてゐるのか、まだよく分らない先から、彼は群衆に向つて怒鳴つた。

やがて傍に寄つて来て、死にかゝつてゐる囚徒が眼に入ると、前から豫期してゐたかのやうに「うむ、うむ」と頷いて見せ、巡查の方を向いて言つた。

「どうしたんだ？」

巡查は囚徒の護送隊が此處を通過した時、この囚徒が打つ倒れたのを、護送士官が、置き去りにするやうに命じて行つたといふことを話した。

「さうか、宜しい。警察署に連れて行かにならん。辻馬車を呼べ。」

「唯今門番が呼びに行きました。」と、巡查は擧手の禮をして言つた。

「店員は今日のやうな暑い日にと、又何か言ひ始めた。

「何ぞお前に關りでもあるのかね？ え？ さつさと行く處へ行つたがいゝ。」と、警部はかう言つて、じろりと睨めつけたので、店員は黙り込んでしまつた。

「水を飲ましてやらなけりや不可ない。」と、ネフリュード

フは言つた。

警部はじろりとネフリュードフをも睨めつけたが、別に何とも言はなかつた。

門番が水を持つて来たので、囚徒に飲ませるやうに巡查に言ひつけた。巡查はだらりと垂れてゐる頭を持ち上げて、口の中へ水を流し込まうとしたが、もう飲む力がなかつた。水は頸鞆を傳つて、ジャケツから薄汚ない襦袢まで濡らして了つた。

「頭からぶつかけるがいゝ！」と、警部が言ひつけたので、巡查はそのバン菓子型の帽子を脱かして、人蔘色の縮毛や禿げた脳天のあたりに水をぶちまけた。

囚徒は吃驚したやうに大きく眼を見開いたか、別に體を動かすでもなかつた。埃で汚れた水が彼の顔を幾筋か流れたが、その日は依然として一定の間を置いてはハア／＼と息をつき、絶えず體が顫へてゐた。

「あ、あそこにあるぢやないか？ あれにしよう。」と、警部はネフリュードフの乗つて来た馬車を指して巡查に言つた。それから馭者の方へ向いて、「おい、お前、こつち来い！」「お客があるんです。」と、馭者は眼をあげないで、氣むづかしげに言つた。

「これは私が儲つたんですが。」と、ネフリュードフは言つ

た。「どうぞ使つて下さい。代は私が拂ふから。」と、馭者に向つて、彼は附け加へた。

「ちやさうしよう。何をぼんやりしてるんだ！」と、警部は怒鳴つた。「早く乗せろ！」

巡查と門番と護送兵は、死にかゝつてゐる囚徒を抱き上げて、馬車の中に運び込んで坐らせようとしたが、病人は獨りでは坐つてゐることが出来ないで、頭を後へがつくり垂れて、座席からすつかり滑り落ちてしまつた。

「寝かしとけ！」と、警部は言ひつけた。

「大丈夫です。このまゝで警察分署まで運びます。」と、巡查は病人の隣りへ體をくつ着けるやうにして坐り、湿しいその右腕で病人を抱へながら言つた。護送兵は素足に百姓靴を穿いてゐる囚徒の足を持ち上げて、馭者臺の下に伸ばしてやつた。

警部は邊りを見廻して、病囚徒のパン菓子型の帽子が道ばたに落ちてゐるのを認めて、それを拾ひ上げると、濡れて水のボタ／＼落ちてゐる彼の頭に被せてやつた。

「さ、行け！」と、彼は命じた。

馭者は忌々しげに邊りを見廻しながら頭を振つて、護送兵と一緒に警察分署の方へ馬車を進めた。病囚徒と同席してゐる巡查は、囚徒の體がぐたり／＼と揺られて滑り落ちさ

うになるのを絶えず元の位置へ抱へ直してゐた。馬車の傍について歩いてゐる護送兵は病囚の足を直してゐた。ネフリュードフはその後から跟いて行つた。

三七

消防夫の傍を通つて警察分署へ来ると、病囚を乗せた辻馬車はその中庭へ入つて行つて、とある入口で止まつた。

中庭では消防夫達が腕をまくつて、大聲で喋つたり笑つたりしながら、何かの車を水で洗つてゐた。

馬車が止まると四五人の巡查か飛び出して来て、馬車を取巻いた。そして死にかけてゐる病囚の腋や兩足を抱きかかへて、ぎし／＼音のする馬車から運び出した。

病囚をつれて来た巡查は馬車から降りて、痺れた腕を振廻はして、帽子を脱ぐと十字を切つた。死にかゝつた囚徒は入口から階段傳ひに、二階へ運ばれて行つた。ネフリュードフはその後に従つた。狭苦しい小汚い部屋へ運び込まれたが、其處には粗末な寢臺が四つあつた。そのうち二つには二人の病人が部屋着を着て腰かけてゐたが——一人は頸に縋帶した口の曲つた男で、も一人は肺病患者であつた。他の二つの寢臺は空いてゐた。その一つに病囚は寝かさされた。そこへ、眼のぎら／＼光つた背の低い男が、しつきり

なしに肩手を動かしながら、下着と靴下一つでちよこくと小刻みに入つて来て、運び込まれた病囚に近づくと、じつとその顔を見てゐたが、それからネフリードフの顔を見て、げら／＼聲を立てゝ笑つた。これは警察分署の病室に收容されてゐる氣狂ひであつた。

「俺を皆で脅かさうとしてやがるな。」と、彼は口を開いた「だが駄目さ。さう巧くは行かねえよ。」

病人を運び込んだ巡査達の後から、警部と醫員助手とが入つて来た。

助手は病人に近づいて、まだ柔らかくはあつたが、最早死人のやうに蒼ざめた斑點だらけの黄ばんだ手を執つた。

そしてじつと握つてゐたが、やがて放した。その手はもう全く死體になつてゐた腹の上にぐたりと落ちた。

「もう駄目です。」と、助手は頭をふつてかう言つたが、兎に角規定通りに、濡れた汚ないルバーシユカを押開き、自

分の耳のまはりの捲毛を後ろに掻き撫でながら、黄色くなつて動かない囚人の高い胸に耳を押しあてた。皆黙つてし

んとしてゐた。助手は身を起して、まだ首を傾けて、開いたまゝ動かない空色の障の片方に指をあて、次にもう一つ

の方にもあてた。「恐かねえぞ。ちつとも恐かねえぞ！」と、氣狂ひはのべ

つに醫員助手に唾を吐きかけながら言つた。

「何うですか？」と、警部は訊ねた。

「何うですつて？」と、助手は鸚鵡返しに答へた。「死體室

に持つて行かなければなりませんまい。」

「よく見て下さい。本當ですかね？」と、警部は訊ねた。

「手遅れです。」と、開けはだけてゐた死體の胸を何のため

かシャツで被ひながら助手は言つた。「念のためマトウエイ・

イワーヌイチを呼びにやつて診て貰ふことにしませう。お

いペトロフ！ 呼んで来て呉れ！」助手はかう言つて死體

から離れた。

「死體室へ運んで行け。」と、警部は言つた。「それから君は

事務所へ行つて書類を作つて呉れ給へ。」と、ずつと死體に

付き添うてゐた護送兵に向つて警部はかう附け加へた。

「承知しました。」と、護送兵は答へた。

巡査達は死體を擔ぎ上げて、階段から又運び降ろした。

ネフリードフはその後から跟いて行かうと思つたが氣狂

ひがそれを引き止めた。

「君は悪黨の仲間ぢやないだらうね？ それぢや紙巻頁を

一本呉れ給へ。」と言つた。

ネフリードフは莫入から一本出してやつた。氣狂ひは

肩手をびく／＼動かしながら怖ろしい早口で、皆が催眠術

で自分を苦しめてゐることを話した。

「奴等はみんな僕を敵に思つて、神うつりを使つて僕を虐め殺さうとしてやがるんです……」

「失禮します。」と、ネフリユードフは後の半分は聞き流して、何處へ死體を運んで行つたか、それを知りたいと思つて中庭へ出た。

巡査達は死體を擔いで中庭を通り過ぎて、穴倉の入口へ差しかゝつてゐた。ネフリユードフは其處へ行かうとしたが、警部が呼び止めた。

「何か用がありますか？」

「いえ、別に。」と、ネフリユードフは答へた。

「用がなければお歸りなさい。」

ネフリユードフは温順しく引返して自分の馬車の處へ行つた。馭者は居眠りしてゐたので、それを起して再び停車場へ向つた。

馬車を駈けさせて百歩程も行くと、銃を擔いだ護送兵に附添はれてゐる荷馬車に出會つたが、この馬車の上にも死んだらしい囚徒がもう一人横になつてゐた。その囚徒は車の上に仰向けになつてゐた。黒い頸鞆を生やし、顔から鼻までずつてゐたパン菓子形の帽子で蔽はれた頭はくる／＼に剃られて、車が揺れる度に動いては打つかつてゐた。厚

ぼつたい長靴を履いた荷馬車の馭者は、馬の轡を取つて車に付き添ひ、その後から巡査がついて行つた。ネフリユードフは自分の馭者の肩を軽く叩いた。

「またやられましたね。」と、馭者は馬を止めて言つた。

ネフリユードフは馬車から降りると、荷馬車について、再び消防夫の立つてゐる傍を通つて、警察分署の中庭へ入つた。中庭では消防夫達が車を洗ひ終つて、もう引き込んで了つた後に、背の高い骨ばつた消防隊長が、青筋の入つた帽子を被つて、ポケットに兩手を突つ込んだまゝ立つてゐたが、消防夫が曳き出した、まだ去勢してない首の太い栗毛の馬を嚴めしい顔付で見つてゐた。この馬は前脚を一本折つて、跛を引いてゐた。消防隊長は、傍に立つてゐる獸醫に何やら不機嫌さうに話してゐた。

警部も立つてゐた。また死體が運ばれて来るのを認めて彼は荷馬車に近づいて來た。

「何處から拾つて來たんだ？」と、忌々しげに首をふつて訊ねた。

「舊ゴルバトーフスカヤ通りで。」と、巡査は答へた。

「囚徒かね？」と、消防隊長が訊ねた。

「左様です。」

「今日はこれで二人目だ。」と、警部が言つた。

「始末が悪いや。おまけにこんな手合を持ち込むんだからなあ。」と、消防隊長はかう言つてから、跛の馬を曳いて来た消防夫に向つて怒鳴つた。「隅つこの廐に入れて置け。この碌でなし奴！馬を跛にしやがつて、今に醜い目に會はせてやるぞ。馬は貴様より値打があるんだぞ。この頓痴氣野郎。」

死體は前と同じやうに、巡查が馬車から擔ぎ出して二階の病室へ運ばれた。ネフリードフは催眠術をかけられたやうに、その後には跟いて行つた。

「何か御用ですか？」と、一人の巡查が訊いた。彼は何とも答へないで、死體の運ばれた處へ寄つて行つた。

氣狂ひは寢臺の上に腰かけてゐたが、ネフリードフに貰つた巻蓑を貰るやうに喫かしてゐた。

「やあ歸つて來ましたね！」彼はかう言つてげら／＼笑つたが、死體を見ると眉を蹙めた。

「またか。」と言つた。「もう澤山だよ。俺ア子供ぢやねえぞ。ほんたうに。」と、何か物問ひたげな微笑を浮べて、ネフリードフの方へ向いた。

今度は誰も邪魔する者がなく、帽子で蔽はれてゐた死人の顔が、帽子を取去られたので、ネフリードフはすつかり見ることが出來た。この囚徒はさつき囚徒が醜男だつた

のとは違つて、目鼻立から體全體が並外れて美しかった。それに丁度、男盛りといふ年配だつた。頭は半分剃られてゐたので、見つともなかつたが、今は生氣の全く失せた、黒い眼の上の額つきの恰好もよく、また薄い黒い口髭の上の細い筋の通つた鼻も美しかった。最早紫色に變つてゐる唇にはまだ微笑を浮べ、多くない頸髻はほんの顔の下の部分だけを隠取つて、剃られた頭の側には恰好の好い耳が見えてゐた。顔には落着いたきりつと引締つた、善良さうな表情が浮かんでゐた。この男に精神生活を送ることの可能性が失はれてゐたことは顔だけで判斷出来るが、その手や鎖を箝められてゐる立派な足の骨組や、釣合ひの取れた四肢の逞しい筋肉などは、この男が如何に美しい強い敏捷な人間であつたかを思はせた。單に一個の動物として考へても、あの消防隊長が怪我をさせたといふので腹を立てた栗毛の馬などよりは、遙かに完全に發達したものであることは明らかであつた。然るにこの男は今も殺されてしまつて、誰一人彼を人間として惜まなければかりか、空しく酷使され殺された一個の動物としても惜まなかつたのである。たゞこの男の死によつてすべての人々が起す唯一の氣持といへば、その死體の腐敗するのを怖れて、何處かへ片づけなければならぬその骨折に對する不平の感情であ

つた。

病室に醫者とその助手と署長とが入つて來た。醫者は肥えて背の低い男で、支那絹の上衣に、同じ地の、太つた腿にびつたり合つたズボンを穿いてゐた。署長は背の低い、毬のやうに圓々した赭ら顔の太つた男であつた。空気を一杯吸ひ込んで、それをまた徐かに吐く時、頬をふくらます癖があつたので、餘計圓くなるのであつた。醫者は死人の横はつて居る寢臺に腰を下して、助手がやつた通り、手を握つたり心臓に耳をあてたりしたが、立上つてズボンを眞直に引延ばした。

「もう疾うに死んでゐる。」と彼は言つた。

署長は口一ばいに空気を吸ひ込んで徐かに吐き出した。

「何處の監獄から來たんだね？」と、彼は護送兵に訊ねた。

護送兵はそれに答へて、死人の足についてゐる足枷を指示した。

「鎖を外さしてやらう。幸ひ鍛冶屋があるから。」と、署長はかう言つて、又もや頬を脹らまして、徐かに息を吐き出しながら扉口の方へ行つた。

「どうしてこんなことになつたのでせう？」と、ネフリュードフは醫者の方を向いて言つた。

醫者は眼鏡越しに彼を見た。

「こんなことゝ仰しやると？」日射病で死ぬことですか？

それは、多ぢう運動もせず、日の目も見ないで監獄に入つてゐたものが、不意に日光に當てられると、特に今日のやうな暑い日に、大勢一緒に固まつて歩いてゐるのに、風が少しも通しませんからな、日射病になるのは當り前であ。

「ぢや、何うしてこんな日に護送するんです？」

「そのことならあの人達に訊いて下さい。ですが、一體あなたは何方です？」

「私は別に關係のない者です。」

「あ、さうですか！……では失禮します。私は暇がありませんから。」と醫者は言つて、忌々しげにズボンを下の方へ撫で下しながら、病人の寢臺の傍へ近づいて行つた。

「何うだね、體の具合は？」と、醫者は頸に繻帶した口の歪んだ、顔の蒼白い男に訊ねた。

この間に氣狂ひは自分の寢臺の上に坐つてゐたが、煙草を喫み終へたので、醫者に向つて、しつ切りなしに唾をべつべつ吐いてゐた。

ネフリュードフは中庭へ降りて行つて、消防隊の馬や、鶏や、眞鍮のヘルメット帽を被つた消防夫などの傍を通つて門へ出た。そして自分の馬車へ來て見ると、馭者は又居眠

りしてゐた。彼は馬車に乗つて停車場へ向つた。

三八

ネフリュードフが停車場に着いた時は、囚徒達はもう窓に鐵格子のついた列車に乗り込んでゐた。見送り人は、列車に近づくことが許されないので、プラットホームに立つてゐた。護送兵達は特に今日ほ忙しかつた。監獄から停車場まで来る途中に、ネフリュードフの見た二人の外に、日射病で死んだ者がまだ三人程あつた。その中の一人は最初の二人と同様に最寄りの警察分署に收容され、他の二人は停車場で倒れたのであつた。(これは一八八〇年代の初めモスクワにあつた事實で、ブツイルスキ監獄からニゼゴロドスカヤ鐵道の停車場へ護送されて行く途中、一日の中に五人の囚徒が日射病に罹つて死んだ。護送兵達の心配したのは手當の仕方によつては、この五人が命を取止めたかも知れないといふことではなかつた。このことは別に何とも思つてゐなかつた。彼等が氣遣つたことは、かういふ場合に法規通りの手續きを手抜かりなくやることであつた。死體の處置をしたり、死體に關した書類や、所持品をその筋へ届けたり、ニージュニイに持つて行かなければならない囚徒名簿からその名を除いたりする煩はしい仕事を、特にこの暑

苦しい日にやらなければならぬといふことが、護送兵には堪らなく煩さかつた。

護送兵達はこんなことで忙しい思ひをしてゐたので、その仕事が片づくまではネフリュードフ始め囚徒に面會を願ひ出た者に、列車に近寄ることを許さなかつた。だが、ネフリュードフは護送下士に心づけをしたので早速許された。護送下士はネフリュードフに許したことは許したが、指揮官の眼に觸れないやうに話を早く切り上げて、列車を離れるやうに頼んだ。列車の箱は皆で十八あつて、指揮官の乗つてゐる箱を除いた外の箱は囚徒で詰詰めになつてゐた。列車の窓下を通り過ぎながらネフリュードフは囚徒達の間で話してゐる言葉に耳を傾けた。どの箱の中でも饑の音や、がや／＼言ふ聲や、罵り喚く他愛もない話聲が聞えて来るが、途中で打倒れて死んだ同僚のことを一言も、どの箱の中でも耳にしなかつたのは、ネフリュードフの豫期に反して意外に思つたことであつた。話題は主に袋のことや、飲料水のことや、腰かけ場所を選ぶ話で持切つてゐた。或る一つの窓を覗くと、車輛の中頃の通路で、二人の護送兵が囚徒達の手鏡を外してゐるところであつた。囚徒達が兩手を上に差伸べると、一人の護送兵が、鍵で手鏡をガチリと外し、他の一人がその手鏡を集めて廻つた。ネフリュードフは男

囚の車輛の傍を通り過ぎて、女囚の車輛へ差しかゝつた。第二番目の車輛から「おゝ、おゝ、神様、おゝお、神様！」といふ言葉の交つた女の唸り聲が聞えて來た。

ネフリュードフはその前も通り過ぎて、護送兵が教へて呉れた第三番目の車輛の窓際に近寄つた。窓の傍へ頭を寄せるや否や、汗の臭ひのこもつた人いきれのする蒸暑い空氣がむつと鼻について、甲高い女の聲がはつきり聞えて來た。どの腰掛も獄衣やジャケツを着た、赤く汗ばんだ顔の女囚で一杯で、ベチャクチャ喋り散らしてゐた。ネフリュードフの顔が窓外に見えると、みんなはその方へ氣を取られた。マースロワはジャケツ一枚になつて、頭の布も取り去つて、向う側の窓際に腰かけてゐた。その手前に美しい愛嬌のあるフォードシヤか坐つてゐた。ネフリュードフにふと氣がついたフォードシヤは脇でちよつとマースロワを突つついて、此方の窓の方を指さした。と、マースロワはそゝくさと立上つて眞黒い頭髮にシヨールをかけ、赤く火照つた顔に微笑を浮べて、窓際に寄ると、格子に捉まつた。

「随分酷い暑さですこと。」と、彼女は嬉しさに、こゝくしてゐた。

「品物は受取つたかね？」

「えゝ。有難うございましたわ。」

「それで、別に欲しいものはないかね？」と、ネフリュードフは訊ねた。窓からは絶えず籠の中から來るやうな熱苦しい空氣が流れ出した。

「えゝ有難う。でも別にこれといつて。」

「何か飲み物が貰へるとえゝだに。」と、フォードシヤが言つた。

「あゝ、さうだわね、飲み物が頂けるといゝんですけれど。」とマースロワも繰返して言つた。

「ぢや何かね、飲み物は呉れないのかね？」

「えゝ少しはあつたんですけれど、もうすつかり飲んぢまつたんですの。」

「ぢやね。」と、ネフリュードフは言つた。「直ぐに護送の役人に頼んで置くとしよう、ニージュニイに着くまではもう會へまいからね。」

「ではあなたもいらつしやるんですか？」と、思ひ掛けなかつたといふ體でマースロワは言つた。そして嬉しさにネフリュードフの顔を睨めてゐた。

「次の列車で行くよ。」

マースロワは何も言はなかつたが、少時経つてから深い溜息をついた。

「旦那さア、十二人の囚徒を死なしたちふが本當だかね？」

と、ぶつきら棒な年寄りの女囚が男みたやうな荒つぽい聲で訊ねた。

この婆さんはコラブリョフであつた。

「さあ十二人つていふのは聞かなかつたな。私の見たのは二人だけだつたが。」とネフリュードフは言つた。

「十二人死なしたちふ話だべえ。そねえ酷えこととして、奴等は別に何とも罰くふこともねえのかね？ あの畜生どもは！」

「女の中では病人は出なかつたかい？」と、ネフリュードフは訊ねた。

「女子衆は皆元気でござえやすだよ。」もう一人の小柄な女囚はかう言つた。「たんだ一人、今赤ん坊を生みかけてる女子が居りやすだが。ほうら、あすこで、うん／＼喚いてゐるだ。」と、さつきから呻き聲の聞えて来る隣室を指して言つた。

「何か欲しいものはないかつて仰しやつたわね。」と、喜びの餘り込み上げて来る微笑を口元に押へながらマースロワは言つた。「では、あの女を後廻しにして貰ふことは出来なないのでせうか。あんなに苦しうなんですから。話して頂けますなら……。」

「あゝいゝとも。話して見よう。」

「それから、あの、フォードシヤをお配偶のタラスさんに會はしてあげることは出来ないでせうか？」と、にこ／＼してゐるフォードシヤを眼で示しながら附け加へた。「タラスさんも矢張りあなたと御一緒にいらつしやるんでせう？」

「あなた、話をしてはいけません。」と、護送下士の聲が聞えた。それはネフリュードフに先程許可を與へた男ではなかつた。

ネフリュードフは其處を離れて、お産をしかゝつてゐる女のことや、タラスのことを頼んで見ようと指揮官を捜しに行つた。長い間捜し出すことが出来ないで、護送兵に訊ねて見たが、誰も満足に返事をして呉れなかつた。彼等は目の廻る程の忙しさであつた。彼方此方へ囚徒を引張り廻したり、食糧品を買ひに走つたり、荷物を車輛に運び入れたり、又は護送士官が連れて行く婦人の世話をしたりしてゐて、ネフリュードフの訊ねることなどには縁に返事する者もなかつた。

第二回目のメルが鳴つた時、ネフリュードフは漸く護送士官を見つげ出した。士官はその短い手で口の邊りにかぶさつてゐる口髭を撫でながら、肩を張つて何やら下士に向つて怒鳴つてゐた。

「何か御用ですか？」と、彼はネフリュードフに訊ねた。

「あの中にお産しがつてゐる女がゐますが、あれを後廻しに……」

「あれは放つときませう。後で何とかなりませんから。」とかう言ひ捨て、護送士官は短い手を振り、自分の車輛の方へ駆けて行つた。

その時呼子よびこを手にした車掌が通り過ぎた。やがて最後のベルと呼子の音が響いた。と、プラットフォームに集つた人々の中や、女囚の車輛の中に發泣なりなきや祈禱の聲が聞えて來た。ネフリュードフとタラスとはプラットフォームに並んで、坊主頭の見える鐵格子の窓のついた車輛が通り過ぎて行くのを眺めた。それから何も被おらないのや、布を卷いたのや、澤山の女囚の頭が窓越しに見える一番目の女囚車が通り、それから女の呻うき聲のする二番目の車輛、次にマースロワの乗つてゐる三番目の車輛が過ぎた。マースロワは他の人達に交つて窓際に立つてゐたが、ネフリュードフをじつと瞋おこめながら悲しさに微笑ほんでゐた。

三九

ネフリュードフの乗る列車が出るまでにはまだ二時間の間があつた。最初この時間を利用して、もう一度姉を訪問

しようかと考へたが、朝からいろ／＼な事件に出會あつて感情が非常に昂たかまり、體が疲れ切つてゐたので、一等待合室の長椅子に腰を掛けると、急に眠氣ねむけが差して、つひ横になり頬に手を當てたまゝ、すぐ寝こんで了つた。

燕尾服を着込んだ給仕が襟飾とナブキンを手に持つたまゝ、ネフリュードフを起しに來た。

「もし、ネフリュードフ公爵ではゐらつしやいませんか。御婦人の方がお訪ねでございます。」

ネフリュードフは眼を擦りながら飛び起きた。そして今何處にゐるのか、どんなことが朝から起つたのか、すつかり思ひ出した。

囚徒の行列、死體、鐵格子てつがらの缺まつた列車、車内に監禁された女囚達、その中の一人が、看護する者もなく出産に苦しんでゐたこと、それから一人の女囚(マースロワ)がネフリュードフを鐵格子の窓からじつと瞋おこめて悲しさに微笑ほんでゐたこと、そんなことがネフリュードフの思ひ出の中に浮んで來た。ところが、今眼のあたり見る光景はそれとは似もつかぬものであつた。其處には酒櫃しゅくや花瓶や燭臺やナイフやフォークの敷つてゐる食卓があつて、その間を縫うて給仕が急ぎ足で往つたり來たりしてゐる。室の奥には大きな戸棚が置いてあり、その前には果物の容器はたかや酒櫃を置い

て、賣子が一人立つてゐる。それと向ひ合せて大勢の旅客が此方の食堂に背を向けて立つてゐた。

ネフリユードフが坐り直してやゝ氣が落着いた時、室内にゐる者はみんな申合せたやうに、入口の方に何事かあるらしく、物珍しさうに眺めてゐるのに氣づいた。ネフリユードフもその方を見ると、薄いヴェールを顔に巻いた貴婦人を安樂椅子に載せて擔いで行く一行があつた。椅子の前の方を擔いでゐるのは家僕で、見知り越しの顔であつた。後の方を持つてゐる、金筋入りの帽子を被つた門番の顔も馴染みであつた。その椅子の後からは、縮れ髪ちぢかみの、エプロンを掛けた上品な女中が、包みや、圓い革函かひばなに入れたものや、日傘を持つて跟ついていて來た。續いて旅行帽を被つたコルチャーギン公爵が胸を突き出してやつて來た。その次にはミッシーと、從兄のミーシヤとか並び、ネフリユードフとは顔馴染みの、頸の長い、咽喉佛のどぼんの出つ張つた外交官オーステンが、いつもの快活な顔付や氣持で一しよにやつて來た。彼は熱心に、然し巫山戯まじか半分の調子で、にこ／＼しながらミッシーに何やら話し込んでゐた。一番最後に、響めつ面の醫者が紙卷煙草を喫かしながらやつて來た。

このコルチャーギン一家は、都會に近いその所領からニゼゴロドゥスカヤ鐵道沿線にある公爵夫人の妹の領地へ、

今丁度引越すところであつた。

椅子を擔つてゐる連中と、女中と、醫者の行列は、見物人に好奇心と尊敬の念を喚び起させながら、婦人待合室へ入つて行つた。老公爵は食卓について、給仕を呼び寄せて何やら註文を始めた。ミッシーとオーステンも食堂に残つて何か食べるつもりであつたが、その時、入口に知り合ひの婦人が見えたので挨拶に行つた。その婦人といふのはナターリヤ・イワノウナ(ネフリユードフの姉)であつた。ナターリヤはアグラフェーナ・ペトローウナと一緒に、邊りを見廻しながら食堂へ入つて來ると、其處にミッシーと弟とを見つけた。そしてネフリユードフには唯領みづかひいたゞけで、先づミッシーの方へ近づいて行つた。が、ミッシーと接吻を交すと直ぐ弟の傍へ行つた。

「とう／＼捜しあてましたよ。」と彼女は言つた。

ネフリユードフは起き上つて、ミッシーやミーシヤやオーステンに挨拶して、立つたまま、一言二言話した。ミッシーは、田舎の別荘が焼けたので、仕方なく叔母の領地へ引移るところだと話した。オーステンは、その火事について面白い話がありますよと言ひ出した。

ネフリユードフはオーステンの話などは聞き流して、姉の方へ振向いた。

「ようこそ来て呉れましたね。心から嬉しく思ひますよ。」
「とつ、くに来てゐたんですよ。」と彼女は言つた。「アグラ
フエーナも一緒なんですよ。」と、ナターリヤはアグラフエ
ーナを指さした。アグラフエーナはレインコートを着て帽子
を被り、優しい品位の中にもいくらかどぎまぎしながら、
話の邪魔にならないようにと、少し離れた處からネフリュ
ードフに挨拶した。「随分、方々捜しましたよ。」

「此處でついでとくくとしてしまつてね。併しよく来て呉れま
したね。」と、ネフリュードフは繰返した。「姉さんに手紙を
書きかけたんですが……」と彼は言つた。

「まあ、本當なの？」と、彼女は何か気がゝりな様子で
言つた。「何か用事でも出来て？」

ミッシーは、姉弟の間に何か内輪の話が始まりさうだと氣
づいて、自分の保護者達と一緒にその場を外した。ネフリュ
ードフとナターリヤは窓際へ寄つて、縞羅紗や、箱や、そ
の他の手廻りの荷物が置いてある傍の、天鵝絨の長椅子に
腰を下した。

「昨日お別れしてから、もう一ぺん後戻りしてお詫びしよ
うかと思つたんですがね、ラゴードンスキイが何う考へる
か分らなかつたのですから。」とネフリュードフは言つた。
「僕は義兄さんにあんな失禮なことを言ひ過ぎたものです

から、それが氣になつて困つてしまひましたよ。」
「私にはあなたの心持が分つてゐましたわ。本當に。」と姉
は言つた。「あんなことを本氣で言つてるのではなかつたで
せう？ ねえ……」

彼女は眼に涙を浮べてネフリュードフの手を握つた。姉の
言葉は女らしく優しかつた。ネフリュードフは十分その意
味を汲んで、その氣持には心から動かされた。その言葉に
は彼女の全身を支配してゐる自分の夫に對する愛の外に、
囚親の弟たるネフリュードフに對する愛が、彼女にとつて
如何に大事なものであり高價なものであるかといふこと、
そしてまた弟と夫との間に少しでも氣持の喰ひ違ひがあれ
ば、それが彼女に取つて大きな苦痛であるといふ心持が現
はれてゐた。

「有難う。本當にお禮を申します……」とこゝろでね、今日僕
は何を一體見たと思ひます？」と、彼はふと囚徒の死體を
思ひ出した。「二人の囚徒が殺されましたよ。」

「どうして殺されたんですの？」

「まあ、殺されたも同然ですわね。この熱い中を引つ張り廻
されて、日射病にかゝつて二人が死んだのですから。」

「まあ飛んでもない！ どうしてよせう？ 今日？ たつ
た今？」

「ええ、つい先刻まづです。僕は死體を見ましたよ。」

「でも何うして殺されたんですの？ 誰が殺したんですの？」

「殺したのは、こんな酷熱の日に無理矢理に引つ張り出したその連中ですよ。」と、ネフリュードフは姉がその醜偶みにくと同じやうな眼でこの問題を見てゐるやうに思つて、むかむかしながら言つた。

「まあ！」と、アグラフェーナがその時二人の傍へやつて來た。

「僕は、あんな不仕合せな囚徒達が、どんな取扱ひを受けてゐるかまるで知らないのです。だけど知つて置く必要がありますね。」と、ネフリュードフは老公爵の方を見ながら附け加へた。丁度この時、ナブキンをぶら下げて、眼の前に酒のコップを並べて坐つてゐる老公爵と視線がばつたり合つた。

「ネフリュードフ君。」と、老公爵は呼んだ。「どうだね、暑氣拂ひに一杯やらないかね？ 旅をする前には素敵すてだよ。」

ネフリュードフは辭退して、又姉の方へ向つた。

「だけど、これから何うするつもりですか？」と、ナターリヤは言つた。

「僕の手に叶ふことならどんなことでもやります。が、何

をしていゝか僕にも見當はついてゐません。だけど、やらなけれやならないものゝ有ることは感じてゐます。自分に出来るだけのことをやる積りですよ。」

「ええ、ええ。私、よく分つてますわ。だけどあの一件はどう？」と、彼女はにつこり笑つて、コルチャーギンの方を眼で示しながら言つた。「すつかり關係がなくなつた譯ぢやないでせう？」

「いゝえ、もうすつかり關係を斷たちましたよ。お互ひに何の未練もないと思つてゐます。」

「残念ね。ほんとに残念ですわ。私、あの方が大好きですよ。だけどあなたがさうなら仕方がありませんわ。あなたを東縛ひしたかありませんものね。」と、彼女はおづ／＼附け加へた。「でも何うしてあなたは行つておしまひになるんです？」

「行かなければならないから、僕は行くんですよ。」と、こんな話を打ち切りにしたいといふ風に、きつとなつて膠くわもなく言つた。

けれども直ぐ、姉に對して自分が冷淡だつたことが恥づかしくなつた。「自分の思つてゐる事を何うして打ちまけて話してやらないのだ？」と彼は思つた。「そしてアグラフェーナ・ペトロウナにも打明けたらいゝぢやないか。」と、年

老つた女中の顔をチラと見ながら自分の心に言った。

「アグラフェーナ・ペトロウナが傍に來たので、餘計に力づいて、姉に自分の決心を繰返して聞かせる氣になつた。

「姉さんは僕がカチューシャと結婚するといふ意向に就いて言つてゐるんでね。如何にも、僕は結婚しようと思つて居たんです。けれども彼女の方ではきつぱり拒絶しました。」と、彼はかう言つたが、このことを言ひ出すといつてもさうであるやうに聲が顫へて來た。「彼女は僕の犠牲を受けようと思ひたんです。それはかりでなく、あの境遇としては過分の犠牲を却つて僕のために拂はうとしてゐます。でも僕としてはたとへそれが一時的なものであらうともこの犠牲を甘んじて受けることは出来ません。だからこそ僕は彼女の後について、彼女の行く處なら何處へでも行く積りです。そして出来るだけ彼女の苦しみを軽くしてやることに力を盡したいと考へてゐるんです。」

「ナタリーヤは何も言はなかつた。アグラフェーナ・ペトロウナは怪訝な顔付でナタリーヤ・イワーノウナを見て、頭をふつた。丁度この時、婦人室から再び一行が出て來た。さつきの男つぶりのいゝ家僕のフィリップと門番が、公爵夫人を擔いで來た。夫人はふと擔ぎ手を止めさせてネフリュードフを招ぎ、哀れつばい元氣のない様子で、強く握り締め

られはしないかと氣づかひながら、指環の篋つた白い手をおづ／＼差し伸べた。

「嚴しいですわね……」と、彼女は烈しい暑氣のことをかう言つた。「これでは私は體がもてません。この氣候では殺されて了ひさうです。」——彼女はロシアの氣候の恐しいことを一と言ひ二言話して、今度遊びに來て呉れとネフリュードフを誘つてから、擔いでゐる人達に合圖をした。「ぢや是非いらして下さい。」と、向うへ擔がれて行きながら細長い顔を振向けて附け加へた。

「ネフリュードフはプラットフォームの方へ出て行つた。公爵夫人一行は右へ曲つて一等車の方へ行つた。ネフリュードフは手荷物を持つた赤帽に、袋を擔いだタラスと一緒に左の方へ歩いて行つた。

「これは僕の同僚です。」と、タラスを指しながら姉に言つた。この男のことは前に姉に話したことがあつた。

「三等なんですか？」と、ナタリーヤは、ネフリュードフが三等車の前に立止まつて、荷物を持つた赤帽やタラスなどと一緒に三等車へ入つて行つたので訊ねた。

「ええ。僕にはこの方が便利なんです。タラスと一緒にですから。」と彼は言つて、「それからもう一言。」と附け加へた。「僕はクヂミンスコエ村の土地は百姓達に與つてはあり

ませんか、僕が死にでもしたら、あなたの子供が相續することになります。」

「ドミートリイ、もうそんなことを言ふのは止して下さい。」と、ナターリヤ・イワーノワナは言つた。

「假りに地所をやつて了つたにしても、子供には残つた他の財産があります。僕は恐らく結婚なんかしないでせう。假りにするやうなことがあつても子供は出来ないでせうから……それで……」

「ドミートリイ、お願ひだからそんなことを言はないで。」と、ナターリヤ・イワーノワナはかう言つたけれども、彼の言葉を耳にした時、喜んで居る様子をネフリユードフは見取つた。

一等室の前には一群の人々が立つて、コルチャーギン公爵夫人が運び込まれた車室を珍しさうに、しげ／＼見てゐた。残りの人々もみんな自分々の席を取つた。後れて来た客は大急ぎでプラットフォームの板床をがた／＼させながら駆け込んだ。車掌は扉を一つ／＼閉めながら遅れ馳せに來る乗客を急ぎ立て、車内にゐる見送り人を去らせた。

ネフリユードフは、太陽に焼かれて、蒸暑いむつと臭ひのする車内から出て、早速後ろの昇降口に行つた。

ナターリヤ・イワーノワナはいつもの洗行の帽子を被つ

て、ア格拉フェーナ・ペトロウナと並んで車輛の後ろに立つて、何か言ふことはないかと考へ出さうとしてゐるが、思ひ出せないらしかつた。彼女は『手紙を下さいな。』といふ別れの時の定り文句さへ言へなかつた。と言ふのは、ずつと以前弟と、この旅立つ人の定り文句を笑つてゐたからであつた。それに財産や、相續に關した話が二人の間の優しい骨肉の情をもよつと打ち毀してしまつたので、お互ひに他人同志のやうな氣持になつてゐた。それでナターリヤ・イワーノワナは汽車が動き出すとほつとした。そして物憂しい悲しげな顔付になつて、首を振りながら、『左様なら、ぢや左様なら、ドミートリイ！』と言つた。けれども列車が出て行つて了ふと、弟と話したことをどういふ風に夫に傳へたものか、それを考へて生眞面目な、心配さうな顔付をした。

ネフリユードフの方でも亦、姉に對しては、心からの好感以外に何の含むところもなければ匿し立てすることもなかつたのであるが、今は姉と一緒にゐると、何となく重苦しく、氣まづい思ひがするので、早くその場を逃れたかつた。昔一緒に仲よく遊んだ時代の姉の面影はもう無くなつて、今では彼にとつて全然交渉のない、不愉快な、黒い毛むくぢやらの夫の奴隷になつて了つたことを感じた。殊に今、

彼女の夫の念頭から離れない問題——土地を百姓に分配すること、財産相續のことを言ひ出した時だけ、姉の顔が特別に活々と輝いたのを認めたので、その心根がはつきりと讀めたのであつた。そして、このことを彼は悲しく思つた。

四〇

一日ぢう絶え問なしに、太陽に照りつけられてゐる、旅客のいつぱい詰まつた大きな三等車の中の暑さは、息が塞るほど堪らなかつた。それでネフリユードフは、車内へ入らないで昇降口に立つてゐた。が、其處でも息を吐くことが困難だつたので、列車が人家の間を通り抜けて、隙間風がさつと横ぎる時だけ胸一ぱい息を吸ひ込むのであつた。『さうです、殺されたのです。』と、姉に言つた言葉を自分に向つて繰返して見た。すると今日見た様な光景の中で二番目に見た囚徒の死體の、唇に微笑を浮べ、眉の邊りがきりつと引締つて、剃刀をあてられて背々となつた頭の下に小さな恰好のいゝ耳のついてゐた、あの美しい顔が、異常に生々しく浮んで來た。『最も戰慄すべきことは、殺されてゐながら誰が殺したのか誰も知らないといふことだ。だが、殺されたことは事實だ。彼を他の囚徒並みに引つ張り

出したのは、マースレンニコフの命令によるんだ。マースレンニコフは恐らく印刷した紙に、いつもの慣例通り拙い花形文字で署名して命令を出しただけで、自分に罪があるなどゝは勿論考へないだらう。囚徒達の健康を診断した用心深い醫師は、自分に罪があるなどゝは猶更考へないだらう。彼は規則正しく自分の職務を盡して、身體の虚弱な者を選び分けただけであつて、この怖しい暑熱や、こんな日盛りにこんなに多くの者を連れて行くなどゝいふことは前から醫師にわかる筈がない。では典獄か？……けれども典獄はたゞ、何時幾日に、徒刑囚何名、流刑囚何名、男囚何名、女囚何名を護送しろといふ命令を受取つてその通りしつたに過ぎない。護送士官とてもその通り、何處々々に幾名の囚徒を受取つて、何處々々へ幾名引渡すといふのが彼の義務で、彼にそれ以上の責任を負はせる譯には行かない。彼はいつもの通り隊列を引率して行つたので、ネフリユードフの見たあの二人の囚徒のやうな強壯な人間が途中で堪へ切れなくなつて死ぬなどゝは、夢にも思はなかつたのである。すると、誰にも罪がないことになる——しかも人間が死んだのは事實であるから、これ等の死に對して何の責任もない人々によつて、やはり殺されたのに違ひはない。』『かういふことが起るといふのは、詰り』と、ネフリユード

フは考へた。「これ等の人々が皆、つまり知事とか典獄とか警部とか巡査とかいふ人々が、この世の中には、人間らしい温情を以て接しなくとも宜い境涯があると考へてゐる所から起つて来るのである。すべてこれ等の人々——マースレンニコフにしる典獄にしる護送士官にしる——がもし知事や典獄や士官でなかつたとすれば、彼等は、こんな暑い日にこんなに大勢を引つれて出發したものだらうか何うかと二十遍も首をひねつて、二の足ふんだに違ひない。又いよく出發したところで、二十遍も隊列を止めて休息させたら違ひない。すつかり弱り切つて、喘いでゐるのを認めたら、列から連れ出して木蔭へ休ませ、水をやつたに違ひない。それでも不幸なことが起つたら悲しみを現はしたに違ひない。ところが彼等はそんな氣になるどころか、他の人が同情することさへ妨げてゐる。それといふのもつまり、囚徒に對しては人間が人間に對する温情を持たず、人間が人間に對する義務を考へず、唯自分達の職務とその要求だけを遂行することを考へ、それを人間が人間に對する道德的要求以上の仕事だと考へてゐるからである。これがすべての原因なんだ。」と、ネフリエードフは考へた。「もし吾々が、假令一時間なりと、また何か例外的場合なりと——吾々の人間愛の感情がどんなに重大なものであるかを認め

ることが出来たら、普通の人間にはやれない罪を、一向罪とも考へずに平氣でやれるものでない。」

ネフリエードフは、空模様の変つて來たのに氣づかない位、深く考へ込んでゐた。空低く走つて行く斷れぬの雲に太陽は度々翳つた。やがて西の方から淡灰色の密雲の群が追ひ迫つて來て、もう遙か遠方では烈しい夕立が野原や森の上に斜に叩きつけてゐた。雲から濕つぽい雨氣を含んだ空氣が吹いて來た。折々雲間から稻妻が閃いて、汽車の響と雷鳴とが刻一刻と烈しく入り混つて來た。黒雲は段々と此方へ近づいて、風に追はれた雨粒が斜に飛んで來て、昇降臺やネフリエードフの外套に疎らな斑點を印し始めた。ネフリエードフは反對側へ避けて、冷や／＼した新鮮な空氣と、長らく雨に濕多てゐた地上の穀物の匂ひを吸ひ込みながら、汽車の近くを駈けてゐる庭園や、森や、裸麥で黄ばんで來た畑や、青々とした燕麦の畑や、暗緑色の縞になつて花をいつばいつけてゐる馬鈴薯畑などを眺め渡してゐた。あらゆるものが雨に濡れて艶を帯び、緑はいよ／＼鮮やかな緑に、黄色は更に黄色に、黒色は一層黒くなつた。「もつと、もつと降れ！」と、ネフリエードフはこの夕立に霑うてすつかり廻つて行く野原や、畑や、菜園を眺めて喜ばしさうに言つた。

烈しい夕立は長くは續かなかつた。雨雲は半ば雨となつて降り注ぎ、半ばは空を通り過ぎて、間もなく夕立の名残の細い雨滴が、濡れた地上に眞直ぐに落ちて來た。太陽が再び雲間から現はれて地上一切のものがキラ／＼輝き始めた。そして地平線から少し上の東の空に、一方の縁だけがぼやけた中に、菓色の一際鮮かな美しい虹が現はれた。

『だが、自分は何を考へてゐたんだっけ？』と、ネフリュードフは、このやうな空模様の変化が元の通り收まつて、汽車が高い傾斜面になつて居る切通しに差しかゝつた時、自分に訊ねた。『あゝさうだ。自分の考へてゐたのは、典獄とか護送士官とかいふ連中のことだつた。あゝいふ職に就いてゐる連中は、個人として考へると大抵はいゝ人間だが、しかしこの善良な人間達が奉職してゐるといふだけでよくないことをやつてのけるんだ。』

彼は、監獄の中でどんなことが行はれてゐるかを話してやつた時、耳を傾けなかつたマースレンニコフの冷淡さや、體の臆弱な囚徒が馬車に乗せて呉れと言つた時頭からはねついたり、停車場で子供を生むために苦しんで居る女に眼も昏れなかつたあの護送士官の残酷さなどを思ひ出した。これ等の人々にも固より人間の温みがないのではないが、たゞ官職についてゐるばかりに、ごく分り切つた普通の人

情すらも頭に入らないのである。彼等は官職に在るがために、普通の人間愛の意識すら頭に入らないのだ。『丁度この石を敷いた土と雨との關係のやうなものだ。』と、ネフリュードフは、さまざまな色の石を疊み込んだ溝の斜面を、雨水が地べたへ沁み込まないで、小さな流となつて行くのを眺めながら思つた。『それは成程こんな傾斜面の溝には石を敷く必要はあらう。けれどもその敷石さへなければ穀物や草や灌木や樹木が生長したかも知れないのに、敷石のために濕りが得られず生長の力を失つたことは悲しまなければならぬ。人間とても矢張りその通りだ。』ネフリュードフはさう思つた。『それは知事とか典獄とか警察官とかは、世の中に必要であらう。けれども人間の一番大切な本質——人間相互の愛や同情などいふものを失ふとすれば、それは怖しいことだ。』

『それといふのは要するに、』ネフリュードフは考へた。『かういふ手合は、元々掟でも何でもない、人間のでつち上げたものを掟と認めて、神が人間の心に刻みつけた恒久不易の掟を少しも掟として認めてゐないからである。自分がこの手合と面つき合はして、重苦しい氣持になるのは、そのためである。自分はたゞひたすらに彼等を怖れる。まづたく怖れる。強盜よりずつと怖しい。いくら強盜にして見

ても憐憫の情を期待することか出来る。ところが彼等と来たら成長しようとしてゐる植物を抑へてゐるこの石のやうなもので、憐憫などは薬にしたくもない。こゝがあの手合の怖ろしい所以だ。ブガチョーフやラージン(二人共ロシヤ史上の叛亂者)が怖ろしい人間のやうに言つてゐるが彼等の方が千倍も怖ろしい。』と、彼は考へ續けた。『今假りに之を心理學の問題として、現在我々と同じ時代の人々、例へば基督敎信者や人道主義者や單に善良な人々をして、自分達が罪惡を犯してゐるといふ意識なしに、最も恐る可き罪惡を犯させるやうにするには何うしたらいいか、といふ問題があるとすれば、それに對する解答は唯一つ、單に現在行はれてゐる制度法律をその儘守つて行つたらそれでいいのである。是等の人々が、知事や典獄や士官や警察官になればそれでいいのである。それには先づ、第一に官職なるものを、人間に對して人間らしい同胞的態度を取らずに、これを物品として取扱ふことの出来る一種の職業であると信じなければならぬ。次にこの官職の爲に盡した行爲の結果に對しては、それがどんなに他人を苦しめたにせよ、責任が決して彼等の上に落ちて來ないやうに、ちゃんと規定されてゐることを信じなければならぬ。かうした條件がなければ、今日自分が目撃したやうな怖ろしいことが今の世に於いて行は

れる筈がない。かういふ事はすべて人間同志が愛情なしに交渉し得る境涯があると信じてゐる所から來るのである。併し世の中にそんな境涯があるべき筈はない。尤も物品に對してなら例へば木を伐るとか、煉瓦を焼くとか、鐵を鍛へるとか——さういつた事に對してなら愛情なしに交渉出來ないこともない。けれども人間に對しては愛情なしで交渉する事は何うしても出來ない。丁度それは蜜蜂を取扱ふには、特に深い注意を拂はなければならぬのと同じ事である。蜜蜂の性質がさうであるから、もし無用心に蜜蜂を取扱つたら、それこそ蜜蜂を傷つけるか、それとも蜜蜂に齧れるかの二つに一つであらう。人間と人間との交渉も、正にこの通りである。人間同志の相互愛といふことが人間生活の根本義である。尤も人を働かせることなら少し位ゐるの無理は利かうが、愛情のない者に強ひて愛情を持たせることは出來ない。といつた所で愛情抜きで人間と人間との交渉が出来るといふ理由は成立立たない。殊に他人に對して何物かを要求する時は猶更さうである。それで人間がもしも他の者に對して愛を感じないものであるならば温順おとなしく坐つてゐるが宜い。』と、彼は自分に言つた。『そして人間との交渉を一切斷つて、唯一人で品物なり何なり、人間でないものに没頭するがよい。人間が食べたい時に食べるのは

害になるどころか、利益になると同じやうに、他の人間に對して愛情を感じた時、他の人間と交渉するのは害にならないのは勿論、却つて利益がある。例へば昨日自分が姉婿に對したやうに、全く愛といふやうなものなしに、或る人が他の人に向つたとしたら何うだらう。今日私が目撃したやうに他人に對する殘忍と暴虐には際限がない。自分はこれまで過ごして來た、さまざまな生活によつて、このことを知つてゐるが、さういふ人にはまた際限ない苦しみといふものがある。さうだ、全くその通りだ。」と、ネフリュードフは考へた。「それで宜い。それで宜い！」焼けつくやうな苦熱を洗ひ去つた夕立後の爽かな涼しさと、今まで彼を惱ましてゐた疑問を今はつきりと解決したのと、彼は二重の喜びに打たれなから、かう繰返し、繰返し言つた。

四一

ネフリュードフが席を取つた車室には、乗客が半分ほ少しかゝなかつた。下男や工場労働者や職人やユダヤ人や屠獸者や店員や労働者の女房達、兵隊等で、なほ他に二人の奥樣風の女と一人は若い女で、今一人は露き出しの腕に腕環を穿めた年寄りの女だつた、そして前庇のついた黒い帽子を被つた嚴めしい顔付の紳士がゐた。先程までは席を取

るのにか、や／＼してゐたが、もうすつかり落着いてそれぞれ、自分の席に靜かに腰を下してゐた。向日葵の種子を噛んでゐる者、隣り客と話をはずませながら煙草をふかしてゐるものもあつた。

タラスは幸福さうな顔付で、通路の右側にネフリュードフの席も序に取つて、向う側に坐つてゐる木綿の袖無し外套を着た肉付のいゝ男と話し込んでゐた。その男は仕事を探しに出かけて行く園丁であるとネフリュードフは後で知つた。ネフリュードフはタラスの傍へ行かうとして通り路の中ほどに立止まると、ついその傍で、南京木綿の袖無し外套を着た灰色の髯を生やした威嚴のある老翁が、百姓服の若い女と頻りに話し込んでゐた。その女の隣に、新しい百姓服を着て、白つ茶けた髪をお下げにした七つ位もの女の子が足をぶら／＼させながら、絶えず向日葵の種子を噛んでゐた。老翁はネフリュードフを見ると、一人で坐つてゐた明るい席から、自分の袖無し外套の裾をかた寄せて、親しみのある調子で言つた。

「何卒おかけなせえまし。」

ネフリュードフは禮を言つて、その席に着いた。百姓女はすぐ又、杜切れた話をつゞけた。その女は都に行つてゐる亭主の處から、今、村へ歸るところで、その亭主がどんなに

自分を可愛がつて呉れたかを、しきりに話し込んでるところであつた。

「謝肉祭の時にも逢ひに行きやしたが、神様のお蔭で、又逢つて来やしたぞ。」と、彼女は言つた。「クリスマスの時にも、又行きてえと思つてますだ。」

「それア結構なこんだ。」と、老爺はネフリユードフを、チラと見ながら言つた。「何んでも、五月蠅え位の逢ひに行つたがよかんべえ。若え者を都さ一人でおつ放して置くと、ろくな事アしねえからの。」

「なアに、爺さま、家の人に限つて、それえな心配はいらねえだよ。これつばかりだつて、ばかりしねえだ。まるで、はアおほこ娘見てえな暮してますでナ。稼いだお金にや手えせつけず、そつくり家さ送つてよこしますだ。此處にゐるこの女つ子の顔見るのが、この上もねえ楽しみにしますだに。」と言ひながら、につこりした。

女の子は向日葵の種子を嚙んでは、皮を吐き出しながら母親の言葉に、じつと耳をすましてゐたが、如何にもそれに違ひないと言ふ様子をして、静かな、惻巧さうな眼で、老爺やネフリユードフの顔を見上げた。

「それえ賢い人だら餘計に逢ひに行く方がよかんべえ。」と、老爺は言つた。「お前さんの配偶も、やはり酒を飲るか

ね？」と、向う側にある、見たところ職工らしい夫婦者を眼で示しなから言つた。その亭主の方は、仰向いて、ウォーツカを喇叭飲みにながぶく飲んでゐると、そのそばで、女房が壘の袋を手にしたまゝ、亭主の顔をじつと見成つてゐた。

「いゝえ、家の方は、酒も飲まねえし、煙草も喫りましねえだ。」老爺の話相手の女は、又もや亭主の自慢が出来るのを嬉しがつて話した。「ふんとにお前様、家の人見てえなのはさうざらにねえだよ。」かう言つてネフリユードフの方を振向きながら、附け加へた。「丁度この方見てえな男でござえますだよ。」

「何より結構なこんだ。」と、職工の方を眺めながら老爺は言つた。その職工は飲みさした壘を女房に渡した。女は頭を振りくく笑ひながら壘を自分の口に持つて行つた。ネフリユードフと老爺とが、自分達を見てゐるのに氣づくくと、職工はネフリユードフに聲をかけた。

「えゝ旦那、飲んだがどうだつて云ふんだい。あつしがせつせと稼いでるところは誰も振向いては見ねえが、一ぱいやつてるところは、皆がよくじろく見やがるだ。こんでもあつしはね、自分で働いて自分で飲んで、そして壘を大事がつてるんです。それで文句があるけん。」

「さうだ、さうだ。」と、ネフリュードフは何とも挨拶に困つてさう言つた。

「まつたくがすよ旦那。あつしの噂はそれアしつかり者ががすぜ。あつしを大事にして呉れやすからねえ。あつしはすつかり満足してるでがすよ……なあマウラ、さうぢやねえか？」

「さア、お前さんお飲み、私やもう澤山だよ。」と、女房は彼に壘を押戻しながら、「まあお前さん、何をわからねえことをつべこべ云つてるんだよ。」と、附け加へた。

「ほら、この通り。」と、職工は言つた。「まつたく親切な奴でさア、ところがこれが時々油の切れた車みてえに、キイキイ聲を出しますからな。なアおい、マウラ、さうぢやねえか。」

マウラは笑ひながら、酔拂つたやうに、手を振りあげた。「ほら又ははじまつたよ。」

「だつてその通りぢやねえか。そりやいゝ噂でがすよ。いい聞だけはね。ところが、ちよつくら手綱が緩んで、尻尾の下へさはりでもしようもんなら事でさア。どうなることか知れねえんだ……おい、さうだらう。旦那御免なせえ。すつかり酔つ拂つちまひやしてね、どうも何んとも仕様がねえ。」と職工は、一寝入りしようとして、にこ／＼して

ゐる女房の膝を枕にした。

ネフリュードフは少時しばらくの間、老爺の傍に坐つてその身の上話を聞いてゐた。老爺は煖爐屋で、五十三年間働き通しに働いて、もう數へ切れない程の煖爐を造つた。で、愈々隠居しようと思つたが、なか／＼どうして何時になつたら出来ることやら。たつた今、モスクワで、伴達の仕事を見つけてやつたばかりで、これから郷里の村へ歸る所だと話した。この話を聞き終つてから、ネフリュードフはタラスが取つておいてくれた自分の席へ行つた。

「さア旦那、お掛けなせえまし、わし等の袋は此方こゝろさ片づけやすから。」と、タラスとさし向ひの園丁は、ネフリュードフの顔を眺めながら、親しさうに言つた。

「少々窮屈でも、我慢して下せえまし。」と、タラスは笑ひながら歌ふやうに言つた。そして、「二ブード(一ブードは四貫四百匁)もある袋を、その頑丈な腕で羽でも入つてゐるやうに軽々と持ち上げて、窓下へ運下で行つた。「場所はうんとありまさアね、掛けられなけア立つてただけのことつてさ、立つてゐられなけア、腰掛の下さ入つてもいいでさ。まアのんびりとさつしやい。不平なんぞ言はないことつた。」と、人のいゝ優しさと愛嬌を顔に現はしながら言つた。

タラスは、酒を飲まない口が利けないが、酒さへ飲め

ば思ふやうに言葉がすらく／＼出て来て何んでも喋れると言つた。まつたくその通りで、タラスは素面の時には、たいてい黙りこくつてゐるが、酒を飲んだとなると（滅多にないことで、特別の場合に限るのだが）、この上もなく上機嫌になつて喋り出す。そんな時彼は、率直な、誠意のこもつた調子で、特にその優しい青い眼に人なつゝこい色を浮べて、絶えず愛想よい微笑を口邊に湛へながら、色々なことをよく喋るのだつた。

タラスは今日丁度そんな状態にあつた。ネフリユードフが來たので、一寸話を杜切らしたが、袋を向うへ押しやり、元の處に腰を下して、膝の上へがつしりとした働き人らしい手を重ね、園丁の顔をまともに見入りながら、自分の話を續け始めた。彼は自分の女房の事をその斬らしい知合ひに、精しく話してゐたのである。女房は今、シベリヤへ送られるところで、その原因やら、自分がそれに従いてシベリヤへ行く途中であるといふことを残らず話してゐた。

ネフリユードフは、その精しい事情を知らなかつたので、興味をもつて聞いた。彼がそこへ來た時、丁度話しかけてゐたのは、フォードシヤがタラスを毒殺するつもりで、すっかり手筈をきめてゐたのが、家の人々に見つかつたと云ふ所であつた。

「今ね、俺の悲しい経緯を話してゐた所でござえやすよ。」と彼はネフリユードフに向つて馴々しい口調で言つた。「こねえ思ひやりの深え人に出會つたもんでね、話し込んでしまひやしたよ。」

「あ、さうか。」と、ネフリユードフは答へた。

「で、さういつた譯で、お前様、露見ちやひましたよ。母親はその毒入りの饅頭を持つて『駐在所』へ行つてやるからつていふ始末でさ。俺んとこの爺様は譯の分つた爺様だ、『まア／＼待たつしやい。婆様や、嫁つ子はまだほんの小娘だよ。何んにも知らずにやつたこんだ。いたはつてやるがえよ。その内にはわかつてくるだから。』とね。が、どうして、母親はなかく承知しねえだ。『彼女をゆるしておかうもんだら、いまに家内中の者が油蟲のやうに殺されるだ。』といふだ。とう／＼巡査さんのとこさ駈け込んで行つたよ。すると、すぐに女房を拘引にやつてくる。證人を呼び出すつてえ騒ぎさ。」

「で、お前さんは何うだつた？」と、園丁は訊ねた。

「俺かね、俺はお前さん、腹がごろ／＼鳴つたり、嘔吐を吐いたりでね、腹ん中がでんぐり返るやうな始末で、口も利けねえさ。そこで爺様が荷車に馬をつけて、フォードシヤを乗つけて、警察から裁判所へ連れて行きやしたよ。フォ

ドシヤは初めから何もかも裁判官に白状しやしたゞよ。順繰りに、何處で亞砒酸あひさんを手に入れたか、どうして菓子かしを拵しらへたかつて調子でね。『そんなことを何うしてやつた？』——『あねえな男大嫌おとこきらえだからさ。あねえな男と一緒に暮す位くらいえならシベリヤシベリヤ行つた方がえうだ。』つまり俺のことです。』とタラスは説明しながら微笑わらんだ。何もかもつまりぶちまけたもんだでね。どうしてもこれこれア懲役ちやうどもんでさ。爺様一人おやさまひとりで戻つて來やしたゞ。丁度野良仕事のらじむの時だといふに、家にうちにゐる女おんなといやア母親はは一人で、おまけにそれが、もう體からだが弱つてゐると來てゐるだ。それでどうかして保釋ほくしにして貰もらえめえかと皆考みなへやしたゞ。で、爺様おやさまはお役人やくにんとこさ直ただきくくくに頼たのみに行きやしたゞ。丁度五人ごにんまで相談さうだん打つたゞが、皆駄目だめでさ。駈かけ廻まわるななあもう止とまると諦あきらめたところところがこいつがまた、珍めづらしくはしつつ、こい野郎やろうで『四ルしーブリ出したら放免はうめんしてやる。』つて云ひやがるんだ。とどの詰つりが三ルさんーブリで話わをつけやしたがね。何なにアにその位くらいえの金かねは俺おれア、フフードシヤの麻あしの衣物いぶつを質ちに置いて、やりやしたゞ。すると、奴やつはすぐ書付かきつけを書いてくれやしたよ。』と、彼は射撃しやうげきの話わでもしてゐるかのやうに手を擡たげた。『でまア、ことア一度に運びやした。丁度その時分に俺も病氣びやうき

が癒なつてゐやしたからね。すぐに女房にようばうを迎むかへに町さ出掛でかけけやしたゞ。町さ着きいて、馬うまを宿屋しゆくやに預たくけといて、書付かきつけを持つて牢屋らうやへ行つたでがすよ。『何なにんの用もちか？』と來きやしたから、用もちも用もち、大きな用もちさ、俺おれの女房にようばうが監獄かんごくさ入いつてゐるのを迎むかへに來たゞと云ふと、『書付かきつけを持つとるか？』つて云ふだ。早速渡わたしてやると、それをじつと見てゐたつげがね、『待まちつてろ。』といふことになつたゞ。で、俺おれはその腰掛こしかに坐まつてゐたゞ。お天道あまの様さまはもう午過ひる過ぎぎになつてゐやした。やがてお役人やくにんがで出でて來きやして、『お前まへがワケルわシしョフか』つて訊きかつしやる。『へえ、さやうで。』『さア、引き取とれ。』つて云ふだ。で、すぐすぐに門かどが開あいて、見ると、フフードシヤは別段べつだん變かりもなしに、自分おれの着物きものを着きて出でて來きやしたよ。『さア、一緒に歸かへえるんだよ。』『お前まへ様さまは歩いて來きさつしたのか？』『うんにや、馬うまで來たゞ！』で、宿屋しゆくやまで來て、預たくり賃ちやうどをやつて、せいから馬うまの用意よういをしやしたゞ。残のこりの馬うま糞ふんを積たんで、その上うへさ袋ふくろを置おくと、フフードシヤはそれに乘のつかつて、頭巾かぶとで頭あたまをすつかり包くるんでゐやした。俺おれアその馬うま曳ひいて村むらさ歸かへりやしたが、あれも黙もくつてゐれア、俺おれもはア、黙もくつてゐるといふ譯わけでさ。家いへが近ちかくなつてから、フフードシヤは訊ききやしたゞ。『母親ははさまはどうしてゐるだべえ？』『あゝ、無事むじだよ。』と俺おれが云ふと、『で、爺様おやさまはど

うだね？』——『無事だ。』『ほんに濟まねえことしたゞ。俺はア莫迦だつたよ。自分のすることが何にもわかんなかつたゞ。』と言ふんで、俺は『そねえびく／＼するこたアねえだ。俺アもうとづくに勘辨してらだよ。』と言つてやりやしたよ。もうそれきり話はおねえだ。家に着くとすぐ、フョードシヤは母親の足下さ突伏したゞ。『神様が許して下さるだよ。』と母親は言ふし、爺様は無事なのを祝つてくれただ。『もう濟んだことア濟んだこんだ。氣を入れさせてくれる。今はそんなこと言つてる時でねえ。もうはア刈り入れなげやなんねえだ。よう鋤を入れて肥料をかけたで、有難えことに、鎌の刃も當てられねえほど麥が實つて、重なりあつて、寢床のやうになつてゐるだ。刈り入れなげやなんねえよ。明日はお前もタラスと一緒に叫かけて、とり入れしてくんろ。』で、その時からお前様、彼女は働き出したゞ。おつたまげるほど働き出したでなア。俺が借りた土地は、その頃は三デシヤチナありやしたゞが、お蔭で燕麥も、裸麥も、近頃になえ位え豊作でござえやしたよ。俺が刈ると彼女が束ねる。時にヤア二人して刈り込みやしたゞ。俺も働く方では人様に負けを取らねえ方で、何んでもやりやすだが、フョードシヤと來たら、その上手で、決してひけをとるこつでねえ。根が慳巧者だし、年は若え

し、元氣はあり餘つてゐやすだ。あんまりよく働くもんだで、俺の方が根まけをしちまつて、仕事を切り上げる始末でさ。家さ歸えると、指が腫れ上つて、腕節が痛む。一休みしなげやなんねえとこだが、彼女ははる／＼飯も食はねえで、納屋へ出掛けて行つて、明日束ねをする支度をするんでがす。こねえにまア彼女がならうたア變つたもんでがすよ。』「お前さんにも優しくなつたこんだらうなア。」と、園丁は訊ねた。

「そりやア、言ふまでもねえこんだ。まるで二つの魂が一つになつたやうに、結びついてゐやすだ。こつちの考へることア、みんな呑み込むでがすよ。腹を立てた母親でせえ。家のフョードシヤはすつかり變つて來たゞ。まるで生れ變つたやうな女になつたゞ。』つて言ふだ。いつだか、二人で車に乗つて東積みに行つたとき、どつかの家の支關で彼女と一緒に腰掛けやしたゞ。俺は言ひやしたゞ。『フョードシヤ、何故あねえなこと考へたゞ。』つて。すると『お前様と暮すのが嫌だと思はれたで。いつそおつ死んだ方がよかんべえ。あゝ、もう生きてゐたくねえと思つたゞ。』『そんなら今はどうだね？』『今ぢやお前様のことばかり思つてゐるだ。』と、かう云ひやしたゞ。』と、タラスは言つて嬉しさうに、どきまぎしなから頭を振つた。『刈入れがやつとおしめ

えになると、いぢん日麻を晒しに行つた。歸つてくると、と、タラスはちよつと黙つて續けた。「まア御覽なせえ、呼び出し狀が來てるぢやねえか、裁判するつて言ふだ。一體全體誰を裁判するだね。そのことを俺等はまるで忘れつちまつて、考へもしなかつたに。」

「魔がさしたんだべえ。」と、園丁は言つた。「さもなくけりやア、人間が人間を殺すなんて氣が起るもんぢやねえだ。俺達の村にもそねえなのがあるやしが。」……と、園丁は話を始めた。と、その時、列車が停車場にとまつた。

「さア停車場だ。」と彼は云つた。「どれ、一杯ひつかけてくるかな。」

話は杜切れた。そしてネフリユードフは、園丁の後に續いて、濡れたプラットフォームの板敷の上に降りた。

四二

列車を下りる前からネフリユードフは停車場の構内に三頭立や四頭立の立派な馬車に、よく肥えた馬が鈴をからから鳴らしてゐるのに氣がついてゐた。雨のために黒つぼくなつたプラットフォームを歩いてゆく時、ネフリユードフは、一等客車の前に大勢の人々が立つてゐて、その中に立派な羽毛の飾りのついた帽子を被り、レインコートを着た、肥つ

た背の高い婦人と、自轉車服を着た、背のすらいとした、脚の細い青年が立つてゐるのを見かけた。青年は贅澤な首輪を嵌めた強さうなよく肥えた犬をつれてゐた。彼等の後には、膝掛や傘を持つた従僕と馭者とがやはり出迎へに立つてゐた。この人々にはみんな、肥つた婦人から、長い外套の端を手で引張つてゐる馭者に至るまで、落着き拂つた自信と、裕福らしい様子が見え、誰も皆飽滿の體で、艶々してゐた。そして新らしいさつぱりした着物を着てゐた。そのまはりには、物見高い、金持の前に、べこくする連中——赤帽子を被つた驛長、憲兵、夏時分にはいつも汽車の着く時の有様を見にくる南京玉の頸飾をしたロシア服の瘦せた娘、電信技手、旅客、その他の男女達がゐた。

犬をつれた青年がコルチャーギンの息子の中學生だとな、とネフリユードフは氣づいた。その肥つた婦人は公爵夫人の妹で、コルチャーギン一家は、その妹の領地へ行くところであつた。びか／＼した金筋入りの服を着て長靴を穿いた車掌頭が客車の扉をあけて、慇懃にそれを押へてゐた。その間に、フィリップと白い前垂を掛けた女中とは、疊み椅子に顔の長い公爵夫人を乗せて、氣をつけながら車内から運び出した。公爵夫人は妹と挨拶した。箱馬車にしようか、輓馬車にしようかなど、言ふフランス語の文句が聞えて來た。

行列は、パソルや箱を持った、縮れ髪しぢがりの女中を駭おそらして停車場の出入口の方へ歩いて行つた。

ネフリュードフは彼等に出會つて、又挨拶するのが厭いやだったので、停車場の出入口の方へは行かないで、立止まつたまゝ、行列の通り過ぎるのを見送つてゐた。公爵夫人と令息、ミッシェ、醫師、女中などが先きに行つて、老公爵は義妹と後に残つた。ネフリュードフは餘程離れてゐたので、二人の話してゐるフランス語は杜切とつれ／＼に聞えるだけであつた。だが、公爵の言つた一句が、時としてそんなことがよく在るものだが、音聲から調子まで何故だかはつきりとネフリュードフの耳にこびりついた。

「あゝ、あの男は上流社會の人間だ。上流社會の人間だ。」と、持前の聲こゑ高たかな、傲慢な調子で、誰かの噂をしながら老公爵は車掌や赤帽を随へて、義妹と一緒に出て行つた。

この時、何處から來たのだから、停車場の一隅から、襪靴はきを穿はき、短い皮外套を着て、袋を背負つた労働者の一群がプラットフォームに姿を現した。労働者達はしつかりした軽い足取りで一番目の車輛へ近づいて行つて、その中に入らうとしたが、忽ち、その車の係りの車掌に追つ拂はれてしまつた。が、すぐに又、お互ひの足を踏みつけ合ひながら慌てゝ走つて行つて、隣りの客車へ入り込んで、片隅や扉

の傍へ袋を置かうとしてみると、今一人の車掌が停車場の入口からこの有様を見て、ひどい權幕けんまくで怒鳴りつけた。中に入り込んでゐた労働者達は急いで飛出して、又しつかりした軽い足取りでネフリュードフのゐる隣りの客車の方へ歩いて行つた。車掌は今度も彼等を遮つた。彼等は立止まつて尙ほ向うへ行くつもりらしかつた。そこへ、ネフリュードフが、彼等に、車内には席も空いてゐるから入るが、と言つた。労働者達はその言葉を開きつけた。そして彼等が入つてから、ネフリュードフも車内に入つた。労働者達は今度は席をどらうとすると、前まへ此こゝの附いた帽子を被つて、女を二人連れてゐる紳士が、この客車の中で彼等が席を取らうとするのは自分に對して侮辱だと考へて追つ拂ひ始めた。労働者達は二十人ばかりだつたが、老人達も若いのも、みんな疲れて、日焼けした干乾かかびた顔をしてゐたが、すぐに腰掛けの下や、壁や扉の傍の袋を引かゝへて、悪いことをしたと思つたらしく、その客車を抜け出して隣りへ行かうとした。行けと言はれたら、車輛から車輛と世界の涯はたまでも行き、坐れと言はれたら針の上にも坐りさうに見えた。

「おい、何處へ駈けて行くんだ。莫迦ばか！ 此處らへ掛ける。」と、出會頭でうあつちの別な車掌が叫んだ。

「あら、妙なことがあつてよ。」と、二人の婦人の中の若い

方が、フランス語でかう叫んだ。フランス語の發音にすつかり自信を持つてゐる女で、ネフリュードフの注意を惹かうとしてゐるらしかつた。

腕環を絞めてゐる婦人は絶えずく／＼鼻を鳴らしながら、汗臭い労働者達と同席するのを不愉快に思ひ、何やら眉を蹙めてぶつ／＼話してゐた。

労働者達はさも大難を逃れたやうに思つて安心し、大喜びで、重い袋を背から降ろして腰掛の下へ押しこんだ。

タラスと話すために此方の方へ來てゐた園丁が、自分の席へ歸つて行つたので、向う側に二人分の空席と、タラスの隣りへ一人分の空席が出來た。すると労働者が三人すぐ其處へ腰を下した。しかし、紳士風の身装をしたネフリュードフが傍にやつて來たので、労働者達はびつくりして、まごついて向うへ行かうと席を立ちかけたが、ネフリュードフは「どうぞ」とそれを押し止めて、自分は通路の傍の、座席の腕木に腰をかけた。

その二人の中の、五十位ゐの労働者は、不思議さうに、おづ／＼しながら若い方と顔を見合せてゐた。ネフリュードフが普通の紳士がする通り、叱り飛ばしたり、追つ拂つたりしないばかりか、自分の席を譲つてくれたので、労働者達はびつくりして當惑してゐた。却つて、後になつて何か

困るやうなことになるのではないかと、薄氣味悪く思つた位であつた。

けれどもネフリュードフが至つて氣輕にタラスと打解けて話してゐるのを聞いて、別に心配する程のことはないと思つた。で、労働者達は、若い男を袋の上に掛けさせ、ネフリュードフに是非自分の席へ歸つて呉れと頼んだ。ネフリュードフと向ひ合せて腰掛けてゐた年寄りの労働者は、初めは怖がつて、この紳士の體に觸つても大變だと身を縮こめてゐたが、やがて馴々しくなつて、ネフリュードフとタラスとに話しかけながら、特に自分の話に注意を拂つて聞いて欲しい箇所では、ネフリュードフの膝を軽く掌で叩くまでになつた。

この老人は自分の身の上話を始めて、泥炭掘りに雇はれてゐたが、今暇をとつて故郷へ歸る途中であると話した。彼は丁度二ヶ月半ほど其處で働いてゐたのだが、雇はれる最初に給金の前借をしたので、十ルーブリづゝしか家にゐる兄弟に送ることが出來なかつた。そして又、食事の時、二時間休息する以外には日の出から日の暮れまで、泥水の中に膝まで浸つて働いてゐたと話した。

「馴れねえうちア骨の折れるのは分つてまさア。」と彼は言つた。「だが馴れつこになれア大したこともねえんでさ。た

だ食ひ物がどうも旨くねえとか。初手は不味い物をあてがやがつて困りやしたよ。だが、皆で苦情を持ち込んだで、そのうちにア、ちつたア乙なものを食はせるやうになつて、仕事も樂に行きやしたよ。」

それからこの老人は二十八年間も出稼ぎを續けて、手に入れた金はみんな自分の家へ仕送つたことを話した。最初は父親に、次は兄に、今では家の面倒を見てゐる甥に仕送つて、自分では一年に儲ける五十ルーブリの中から、煙草代とか熨斗代とか、自分の小遣として僅か二、三ルーブリを費ふだけだといつた。

「だが、こんでね、よくねえこんだが、時々疲れが酷えと、つい火酒を飲むんでさ。」と、彼は微笑を浮べながら附け加へた。

それから又、故郷では女房が働いてゐることや、今日出稼人達が出發する時に雇主が火酒を皆に半樽密つて呉れたことや、仲間の一人が死んだことや、患らつて家へ歸る仲間のことなどを話した。その病人といふのは、同じ室の片隅にゐた、顔の蒼ざめて寢れ切つた、唇の紫色がよつた若者であつた。確かに瘧にかゝつてゐるらしい。ネフリュードフが病人の傍へ寄ると、若者は厭な、いかにも困つたやうな顔を見せて、そつと放つて置いて呉れといふ氣色が見えた

ので、ネフリュードフは何も言はなかつた。で、キニーネを買つて飲ましてやつたがいよと、藥の名を書いて老爺に渡した。そして藥代も渡さうとしたが、老爺は自分が買つてやるから要らないと辭退した。

「わしアこれ迄何べんも旅しやしたよがね、今までお前様みてえな旦那にア、ついぞ打つかつたことがねえでがすよ。お前様ア、頭もはらねえで、席まで讓つておくんなすつただ。いや全く旦那方にもピンからキリまでいろ／＼あるだね。」と、タラスに向ひながら言葉を結んだ。

「うむ、これは今までまつたく見たことのない世界だ。」ネフリュードフは、勞働者の瘦せ細つた筋だらけの手足や、粗末な手織木綿の着物や、寢れてはゐるが優しいところのある、陽焼けのした顔を眺めながら、本當の肉體的らしい勞働生活の眞面目な興味と喜びと苦痛とを味つてゐる、まつたく新しい人々の中に自分が居るのを感じた。

『一方には上流社會の人々がある。』と、ネフリュードフは、コルチャーギン公爵の言つた言葉を思ひ出しながら、コルチャーギンのやうな人々の遊惰な、贅澤な世界や、彼等の下らない情けない興味を思ひ浮べた。

そして新しい未知の美しい世界を發見した旅行家の喜びそのものを彼は味つてゐたのである。

第三編

マースロワの加はつてゐる囚徒の一隊は、もう五千露里程もやつて来た。マースロワは、ベルムまでは刑事犯人と一緒にされて、汽車や汽船で送られてゐたが、この町まで来ると彼女を國事犯人の中へ入替へようとするネフリュードフの斡旋がやつと聴き届けられた。ネフリュードフにこれを勧めたのは、やはり同じ旅をしてゐる女囚徒のポゴドッホーフスカヤであつた。

ベルムまでは、マースロワにとつては、肉體的にも精神的にも随分苦しい旅であつた。肉體的には、窮屈で、あたりが汚なくて、それに嫌な蚤や虱がたかるので、おち／＼休むことも出来なかつたし、精神的には、蟲けら同様な厭な男共に當まれるのであつた。其等は宿場々々で交代はするものゝ、何處で代つても同じやうに煩さく附廻すので、少しもゆつたりした氣分になれなかつた。一體に、男囚、看守、護送兵など、女囚との間には厭らしい淫蕩の惡風が行はれてゐたので、女囚の中でも殊に年若いもので、女と

しての特權を利用することを望まない者は、絶えず警戒してゐなければならなかつた。始終かうした怖ろしい思ひをしたり、睨み合つたりして行くのは、並大抵な苦勞ではなかつた。マースロワは、人目をひく婀娜つぽい美貌ではあつたし、それに以前の生活は誰でも知つてゐたので、殊に男の襲撃を受けがちだつた。彼女が、言ひ寄る男達を手酷しく撥ねつけると、男達は、それを侮辱されたやうに思つて、今度は彼女を憎み始めるのであつたが、彼女は、フォードシヤや、その夫のタラスと懇意にしてゐたので、幾分安心してゐられた。タラスは自分の女房が男達からこんな風な手だしをされたことを聞いて、女房を保護するためにわざと捕まり、今は囚人として、ニージュニイ・ノゾゴロドから一隊と共に旅をしてゐるのであつた。

國事犯人の部に移されたことは、マースロワにとつて萬事好都合であつた。國事犯人は、宿舎も食物も比較的いゝ上に、取扱ひ方も、それほど厳しくはなかつた。それに男達から惱まされる處れもなく、従つて彼女が忘れよう、忘れようとしてゐる過去の生活を、今は思ひ出させられずに済んだので、ずつと氣樂になつた。が、何よりも一番重大なことは、彼女に最も有益な力強い感化を與へてくれた數人の人々と知合ひになつたことであつた。

マースロワが、國事犯人と一緒に居るのを許されたのは、宿場に泊る時だけで、一體極く丈夫な女であつたから、途中は必ず刑事犯人と共に歩かなければならなかつた。彼女は、トムスクから始終さういふ風で來た。彼女と一緒に歩いて來る一隊のうちに、二人連の國事犯人があつた。その一人は、マリヤ・パーウロワナ・シチエーニナといふ、仔羊のやうな眼をした美しい娘で、彼女は、ネフリュードフが、監獄でボゴドゥホーフスカヤと會つた時、彼の注意を一寸惹いた女だつた。もう一人は、ヤクーツク州に流されて行く、シモンソンといふ、眼の凹んだ、黒い髪や髯をもちやく／＼に生やした男で、矢張りあの時に、ネフリュードフの目についた男であつた。彼等二人が何故徒歩で行くのかと云ふと、マリヤ・パーウロワナは、刑事犯人の中にある懷妊の婦人に、車の上にある自分の席を譲つてやつたからで、シモンソンは國事犯人と云ふその特權を利用して車に乗るのは正しくないと考へたからであつた。この三人連は、馬車で後から出發する他の國事犯人と別になつて、朝早く徒歩で出發した。かうして次の或る大きな町に着く直ぐ前の宿場でもさうであつた。そしてその大きな町に着くと、新しい護送兵の將校が、この囚徒の一隊の引繼ぎを受けるのであつた。

天氣の悪い九月の或る早朝のことであつた。寒い風がさつと吹きつけると、空は雨になつたり、雪になつたりした。男囚四百人、女囚約五十人の一隊は、全部もう驛の構内に集つて、一部は、二晝夜分の食料代を囚徒の總代に渡さうとしてゐた護送兵の下土を取卷き、他は、驛の構内に入出を許されてゐる物賣女から、食料品を買つてゐた。金を勘定したり、食料品を買つたりする騒々しい囚徒の聲に交つて、物賣女の甲高い聲も聞えた。

マースロワと、マリヤの二人は、長靴を穿き、膝までの毛皮外套に身をくるみ、頭巾を被つて、宿營所の中から中庭へ出て、物賣女の方に足を向けた。物賣女達は北側の壁際に風を避けて腰を下し、焼立てのパン、肉饅頭、魚、素麵スープ、粥、肝牛肉、鶏卵、牛乳などの食料品を列べ、或る女の前には仔豚の焼いたのまでが列べられてゐた。

シモンソンは、護謨曳の短上衣に、護謨の上靴と云ふ扮装で、毛糸の靴下を紐で結びつけ（彼は榮食主義者で、殺された獸の皮を身につけなかつた）、やはり一隊の出發を待ちながら、入口の階段に立つて、胸に浮んだ考へを手帳に書き留めてゐた。

『若し細菌が人間の爪を観察し研究したならば、恐らくこれを無機物と見做すであらう。これと同様に、吾々は地殼

を觀察して、地球を無機物と認めてゐるが、それは誤謬である。」

マースロワが、鶏卵、輪形パンの繋がつたもの、魚や出来立てのパンなどを買つて袋の中に入れ、マリヤ・パーウロワが商人と買物の勘定をしてゐる時、囚徒は一寸ざわつたが、やがてしんと静まりかへつて列を整へた。すると將校が顔を出して出發準備の指圖をした。

いつもの通りのことが始まつた。囚徒の數が算へられ、足の鎖の検査が行はれ、二人繋がつて行くものには手錠が嵌められた。ところが突然將校の威丈高に叱り飛ばす聲と、人を殴る音と、赤兒の泣き聲とがした。その瞬間みんなしんとなつたが、だん／＼そこに集つて來た囚徒の口からぶつ／＼云ふ聲が聞えて來た。マースロワとマリヤ・パーウロワとは、騒ぎの起つた場所に近づいて行つた。

二

マリヤ・パーウロワとマースロワとが騒ぎの始まつてゐる場所に近づいて見ると、ブロンドの大きい口髭を生やした頑丈な體格の將校が、男囚の顔を殴りつけて、右手の掌が痛むのを、左手で擦りながら顔を頰め、なほも口汚ない下品な言葉でがみ／＼罵つてゐた。その前には、頭の毛を

半分剃つた、背の高い瘦せた男囚が、短い上衣を着、それよりもつと短いズボンを着て、片手で血に塗れた顔を拭き、もう一つの手には、聲を張り上げて泣いてゐる女の子をショールに包んで抱いてゐた。

將校は怒鳴つた。「つべこべ吐かすな、(口汚ない罵詈の言葉)理窟なら俺が教へてやる。(または罵詈の言葉) 餓鬼は女共に渡しちまへ——早く嵌めるんだ。」

將校はこの男に手錠を嵌めるやうに命じた。この百姓は、チプスに權つた女房にトムスクで死別れ、殘された女の兒を我が手で抱きながら、流されて行く途中であつた。男が、手錠を嵌めては赤兒を抱いて行けないと言つたのが、丁度機嫌の悪かつた將校の拍癢に觸つて、一度位言つたのはおとなしく引下らないこの囚徒を思ひ切りぶん殴つたのである。(デ・リネフ著「宿場物語」(きて)に書かれた事實)

打ちのめされたこの囚徒と向ひ合ひに立つてゐたのは、一人の護送兵と、片手に手錠を嵌められてゐる、黒い髭の、背の低い肥つた男囚で、暗い顔をして上眼遣ひに、將校と、娘を抱いてゐる囚人とを見較べてゐた。將校は女の兒を囚人の手から引離すやうに護送兵に命じた。囚人達のがやがや云ふ聲はだん／＼大きくなつて來た。

「トムスクからこつちは、手錠を嵌めねえで來たぞ。」と、

後の方から鐵履聲おびせりが聞えた。

「犬つころぢやあるめえし、人間の兒ぢやねえか。」

「その赤ん坊を何うしろといふだ。」

「そんな法律はねえだ。」と、誰かど云つた。

「誰だ、今吐かしやがつた奴は。」と、蜂にでも刺されたやうにびりつとした將校は、ぐんぐん囚徒の中を押し分けて入つて行つた。「俺が法律を見せてやる。誰が云つたんだ。貴様か、貴様だらう。」

「みんなが云つてるだよ。何故つて、あんまり……」と、背の低い、顔のだぶつ廣い囚徒が云つた。と、その男が終ひまで云ひ切らないうちに、將校の雙手は男の顔に飛んで行つた。

「貴様達は一緒になつて手向ふ氣だな。よし反抗するならして見る。どんな目に遇ふか見せてやるから。犬ころ同様に射殺しちまふんだ。その方がお上のおためになるんだ——さア餓鬼を引きとちまへ。」

囚徒は靜まつた。一人の護送兵が、自暴に泣き叫んでゐる女の兒を引き離すと、他の一人が、今は諦めて從順しく手を差出してゐるこの囚徒に手錠を嵌めた。

「女共に渡しちまへ。」と、將校は刀の釣革の位置を直しながら護送兵に命じた。

女の兒は、ショールの中から兩手を差出さうと焦りながらしつきりなしに泣き叫んだ。マリヤ・パウロウナは、大勢の中から飛び出して来て、將校の前に進み、「この兒を私が連れて參つてもよろこびませうか。」と云つた。

女の兒を抱いてゐた護送兵は立止まつた。

「お前は誰か。」と、將校は訊ねた。

「國事犯人です。」

眼のぼつちりしたマリヤ・パウロウナの美しい顔は、(將校は先に囚徒を受けとる時彼女に目をつけてゐた。)確かにこの際利目があつて、將校は暫く何か胸算用でもしてゐるかのやうに、黙つて女を見てゐた。

「俺の方はどうでもいゝのだから連れて行きたければ連れて行つてもよい。お前が彼奴等を不憫に思ふのもよからうが、若しこの兒の親父が逃亡したら、一體誰が責任を持つか。」

「あの人かどうして子供を連れて逃げられませう。」と、マリヤ・パウロウナは云つた。

「俺はお前と話してゐる暇はない。連れて行きたければ、さうするがいゝ。」

「渡しても宜しくありますか。」と護送兵が訊いた。

「よし、渡していゝ。」

「さア、小母ぢやんの處においで。」と、マリヤ・パウロウナは赤兒をあやしなから受取らうとした。然し、赤兒は護送兵の手から父親の方に行かうと、反り返るやうにして泣きつゞけ、マリヤ・パウロウナの方へは行きたがらなかつた。

「ちよつとお待ちなさい、マリヤ・パウロウナさん、あの兒はきつと私の處なら來るでせう。」と、マースロワは袋の中から輪形のパンを出しながら云つた。

女の兒は、マースロワを知つてゐたので、その顔とパンを見ると、彼女に抱かれてしまつた。

これで四邊は靜かになつた。門が開かれて一隊は外に出て列を作ると、護送兵は更に囚徒の數を算へた。そして、袋を荷馬車に積み込み、體の弱い囚人を上に乗らせた。マースロワは赤兒を抱いて女囚の列に入り、フォードシャと竝んだ。今までの騒ぎを始終じつと見てゐたシモンソンは、もうすべての指圖を終へて自分の旅行用の馬車に乗らうとしてゐる將校の傍に、大股でつか／＼進み寄り、

「將校さん、あなたの處置はよくないと思ひます。」と云つた。

「自分の場所に行つてゐる。貴様の出る暮ぢやない。」

「あなたにお話するのは私の義務です。それで私はあな

たの處置がよくないと申上げたのです。」と、シモンソンは濃い眉毛の下から、じつと將校の顔を見詰めながら逆らつた。

「準備はよいか。進め！」と、將校はシモンソンに構はずに、駈者でもあり兵卒でもある男の肩に据まつて馬車の中に入つた。

一隊は歩き出した。やがて深い林の中の、兩側に溝のある泥濘道に來ると、隊列は崩れてだら／＼になつて進んだ。

三

最近六年の間、町で淫蕩を極めた墮落生活を送り、更に二ヶ月の間刑事犯人と一緒に監獄で暮したカテューシャにとつては、國事犯人と共にその日を過ごすのは、決して樂なものではなかつたが、何にしても仕合せなことには違ひなかつた。一日の行程が二十露里乃至三十露里で、食物もよかつたし、それに二日歩くと一日の休日があるので、彼女はすつかり壯健になつた。そして新しい仲間と交つてゐるうちに、少しも知らなかつた世界が展開されて、本當に利益になつた。彼女の言葉によると、自分が毎日かうして一緒に歩いてゐるやうな不思議な人々は、彼女にとつては全く知らなかつたどころか、想像もつかなかつたのだ。

彼女は云つた。「さうく、私の裁判の決つた時は泣いたつ
けね。だけど今考へると、私は一生神様に感謝しなければ
ならないわ。お蔭で一生かゝつたつて分らないやうなこ
とが分つたんだもの。」

彼女には、これ等の人々を動かしてゐる動機が容易く了
解された。そして自分も農民出の女として、深く彼等と同
情した。貴族階級に反抗して民衆のために起つた彼等が、
貴族階級の出身であるにも拘はらず、その特權、自由、生
命などを民衆のために犠牲にしてゐることがよく了解され
ると、彼等が尊い人に思はれて、一層深い感激に打たれた
のであつた。

彼女が心から感動したこれらの新らしい仲間の中でも、
一番敬服したのはマリヤ・パーウロウナであつた。それは單
に心を牽かれたと云ふよりも、特別な崇敬の念と歡喜の愛
情を以て接してゐた。この娘は富裕な將軍の家に生れ、三箇
國語を操る程の學問がありながら、ほんとにつまらない女
工同様の暮しをして、裕かな兄から分けて貰つたものはす
べて他人に與へて了ひ、自分の身裝などは少しも構はずに、
着物も履物も見窄らしいものをつけてゐたのには、カテュー
シヤもすつかり感動して、愈々尊敬の念を高めた。それに、
この娘が少しも人に媚びるやうなことの無いのをカテュー

シヤは殊の外驚いて、ひどく心を牽きつけられたのであつ
た。彼女の見た所によると、マリヤ・パーウロウナは自分
の美しいことを知つて、それを喜んでゐるのに違ひない
が、その美しさが男達の眼につくことを喜ばないばかり
か、却つてそれを危んで、戀などに落ちることをひどく嫌
ひ且つ恐れてゐた。彼女の氣分を知つてゐた男の仲間達
は、假令彼女を慕はしく感じてゐても、決して素振に見せない
ことにして、男同志のやうな交際をしてゐた。然しそんな
ことを知らない男が挑みかけて來る時も屢々あるので、さ
ういふ場合には、彼女は得意の腕力を揮つて追拂ふのであ
つた。

「いつだかこんなことがあつてよ。」と、彼女は笑ひながら
話した。「知らない男が通りで私を追つかけて來てね、どう
しても離れないのよ。それで私、力まかせに張り飛ばして
やつたのさ。さうしたら膽をつぶして逃げだしたのよ。」

彼女が革命家になつたのは、彼女の言ふ通り、子供の時
分から貴族の生活を嫌つて、平民の生活を好んだからであ
つた。彼女はよく女中部屋や、臺所や、既に入り込んで、
座敷にはゐなかつたので、始終叱られたものである。

「料理人や馭者達と一緒にゐる方が、そりやア面白かつた
のよ。貴族や貴婦人とゐるのは退屈だつたわ。」と、彼女は

云つた。「そのうちにだん／＼物心がついてくると、上流の生活がほんといけなひのが分つて來たの。私にはお母さんはないなかつたし、お父さんは嫌ひだつたし、それで十九の時に友達と一緒に家出をして、或る工場の女工になつたのさ。」

女工を止めてから彼女は田舎で暮し、それから又モスクワに來て、秘密出版物の印刷所になつてゐた下宿で捕縛され、懲役を言ひ渡されたのであつた。マリヤ・パーウロウナはこのことに就ては自分から一度も口外したことは無かつたが、カテューシヤが他人から聞いた所に依ると、彼女が懲役を宣告されたのは、家宅搜索を受けた時、一人の革命黨員が暗闇で發砲したのを、彼女が自分の罪に被たのだからである。

カテューシヤがマリヤ・パーウロウナと知合ひになつてから、彼女は何處でも、亦どんな場合でも、自分のことは構はずに、多少とも他人の爲に心を配つてゐるのに氣がついた。今の仲間の一人であるノウォドゥウォーロフといふ男が冗談半分に彼女を評して慈善道樂だと云つたが、全くそれに違ひなかつた。彼女の生涯の楽しみは、獵師が獲物を探すやうに、他人のために盡す機會を探すことだつた。この道樂はやがて彼女の習慣となり、遂に一生涯の仕事となつ

た。彼女はまたそれを極めて自然にやつてのけたので、彼女を知つてゐる人々は、終ひにはさほど珍らしいことにはないで、却つて平氣で何でも頼むやうになつた。

最初カテューシヤが國事犯人の仲間入りをした時分、マリヤ・パーウロウナは彼女をひどく嫌つて、仲間外れにしてやりたいやうな氣がしてゐた。カテューシヤにもすぐそれが分つたが、その後、マリヤ・パーウロウナが強ひてその感情を抑へて、殊に優しくしてくれることも分つた。こんな場合の親切は、カテューシヤにとつては殊の外有難く思はれて、自分の心を擧げて彼女に捧げるやうな氣持になり、自然に彼女に學び、すべて彼女の眞似をするやうになつた。で、マリヤ・パーウロウナも、このカテューシヤの獻身的な愛に感激して、彼女を心から愛するやうになつた。

この二人が仲よくなつたのは、二人とも戀愛を擯斥したためであつた。カテューシヤは戀愛の恐ろしさを體驗したのでこれを嫌ひ、マリヤ・パーウロウナは、未だ戀愛の經驗がないので、戀愛は何か譯の分らない、同時に厭な、人の品性を傷けるものとして忌み嫌つてゐた。

四

カテューシヤは、マリヤ・パーウロウナから或る感化を受

けたが、それは彼女がマリヤ・パウロウナを愛したからであつた。同時に又彼女は、別な意味の感化をシモンソンからも受けた。それはシモンソンが、彼女を愛したからであつた。

すべての人が、この世に生活し、活動して行くのは、自己一個の思想によつて動く時と、他人の思想を取り入れる時とがある。そしてどの程度まで自分の思想を働かし、どの程度まで他人の思想に動かされるか、人を區別する重要なことの一つになつてゐる。或る人々は、多くの場合に、自分の思想を智的遊戯のやうに見做し、自分の理性を恰も調^{ていぶ}革をとつて了つた滑車のやうに取扱つて、いざ實行となると、他人の思想、傳説、法律などに動かされてしまふ。又或る人々は、自分の思想をあらゆる行爲の原動力と考へて、多くの場合、自分の理性の命ずるまゝに動き、偶々他人の意見に接しても十分な研究批判を経なければ容易に受け容れようとするのである。シモンソンはこの種類の人であつて、彼はすべて自分の理性に依つて決定し、決定したことは直ちに實行に移すのであつた。

彼がまだ中學生の時、經理官を勤めてゐた彼の父が金儲けをしたのを知つて、それは不正な金であるから全部民衆に施すべきものであるといふことを、父に申出たのであつ

た。が、父はこれを承知しないばかりか、却つて叱つたので、彼は憤然家を出て了つて、以後斷じて父の厄介にならなかつた。彼は、すべて現存の不善は、民衆の無教育に起因するのだと決め込んで、大學卒業後には民情派(十九世紀の七民の中への一派)に加はり、遂に村の小學教師になつて、兒童や農民に自分の正義と信じた事を大膽に宣傳し、不正と考へたことを遠慮なく排斥した。

それがために捕へられて裁判を受けることになつた。

裁判所で彼は、裁判官が自分を裁く權利はないと信じたので、その通りを述べたが、裁判官がそれを聽かずに裁判を續行したので、彼は答辯をしないことに決めて、何を訊かれても黙り込んでゐた。それでアルハンゲリスク縣に流刑に處せられた。流しものになつてゐる時に彼は一つの宗教上の理論を編み出したが、それによると、萬物は皆生命があるので、死物は一つもない。それで吾々が無生物とか、無機物とか考へてゐるものは、吾々の考への及ばない或る大きな有機體の一部に過ぎないのである。それだから人間もこの大きな有機體の一部分として、この有機體の生存を助け、有機體の各部分の生命を保存して行く使命があると云ふのである。隨つて彼は生命を絶つことを罪惡と考へてゐるので、戦争、死刑、その他人間ばかりでなく動物の殺害

に對しても反對した。結婚に就ても彼獨特の理論があつて、生殖は人間の下等な職能に過ぎない、高等な職能は既に生存してゐる生物の爲に、奉仕することにあると考へた。彼がこの思想に益々固い信念を持つたのは、血液中に殺菌細胞の存在する事實を見たからであつた。彼は、獨身者は殺菌細胞のやうなもので、有機體の弱い分子や、病者を助けるのがその任務であると考へた。彼もまだ若い時分には相當放蕩もしたが、この結論を得てからはその考へ通りの生活をした。彼はマリヤ・パウロワと共に、人間界の殺菌細胞であると自認してゐた。

カテューシヤに對する彼の愛はこの理論を破壊しなかつた。それは彼の愛はプラトニックであるから、そのやうな愛は弱者に奉仕する殺菌細胞の活動を妨げるところか、却つてそれを力づけるものになるからであつた。

彼は精神上の問題の外に、實際問題も大部分は自己流に片付けた。彼はすべての實際問題に就て、自己の理論を抱いてゐて、何時間働いて何時間休息するか、どんな食物を食べてどんな衣物を着るとか、さては燻爐の焚き方から室の照明法に至るまで、ちやんと規定してあつた。それでは彼は非常な含羞家であつたが、然し一旦かうと決めて了ふと、どんなことがあつても動じない、性分の男だつた。

かういふ性格の男が、カテューシヤを愛したのだから、彼女は決定的の感化を受けずにはゐなかつた。彼女は、女の本能で早くからこれを勘づいて、自分がこんなすぐれた人物から慕はれてゐることを思つて、益々彼女の誇りを高めしめたのであつた。ネフリニードフが、彼女と結婚しようとしたのは、寛大な心からと、また過去の事情がさうさせたので、聊か不純なところもあつたが、シモンソンの方は、現在あるがまゝの彼女を愛し、唯愛してゐるといふ外に何物もなかつたのである。そして彼女には、シモンソンが自分を氣高い品性の持主で、他の女などには滅多に見られない立派な婦人であるものゝやうに考へてゐることが感じられた。併し彼が果してどんな品性を自分に擬してゐるかは、彼女には解し得られなかつた。が何れにせよ、萬一にも彼の期待を裏切ることのないやうに、一生懸命になつて自分の考へ得る最も高い徳性を身につけ、出来るだけ立派な婦人にならうといふ心掛を持つに至つた。

このことの始まりはまだ監獄にゐた頃からであつた。國事犯人の面會日に、彼女はシモンソンの清らかな優しい紺青色の眼が、その長い眉の下からじつと自分の方に注がれてゐるのに氣がついた。同時にこの一風變つた男が、特別の態度で自分を眺めてゐることも分つた。それにまたもち

や／＼と伸びた髪の手と鬘まげめた眉とから受ける嚴格の印象と、小兒のやうな無邪氣さと、清らかな眼付とが、一つの顔に驚くべき調和をなしてゐるのに心を惹かれた。その後トムスクで彼女が國事犯人と一緒にされた時、再び彼と會つた。兩人共一言も言葉は交さなかつたが、見交した眼の中で、彼等はお互にとつて大切な人だと云ふ事を知らし合つた。兩人はその後も別にこれといふ程の話もしなかつたが、マースロワは、彼が自分の傍で話をしてゐる時は、いつも自分に話しかけてゐるやうに思はれ、又彼は彼女に對して出来るだけ自己を明かにしようとしてゐるのだと考へてゐた。然し、兩人の間が極く親密になつて來たのは、シモンソンが刑事犯人と一緒に歩き出した時からであつた。

五

ニージュニイ・ノヴゴロドからベルムまでの間で、ネフリュードフがカテューシヤに會つたのは、たつた二度しかなかつた。一度はニージュニイ・ノヴゴロドで囚人を金網張りの解に乗せる前で、もう一度はベルムの監獄の事務所であつた。二度ともカテューシヤは沈んで面白くもなさうな顔付をしてゐた。それで、彼がどんな具合かとか、何か入用な物はないかと訊ねても、彼女は口數も少なく、含羞はにかん

だやうな様子をしてゐて、ことによると前に屢々あつたあの敵意を含んでゐるのではないかと思はれるやうな態度をしてゐた。このやうに彼女の沈んだ氣持が——それは道中男達から追ひ廻されたからさうなつたのではあるが——ネフリュードフにはひどく氣にかゝつた。彼は彼女が道中苦しい目に會つたり、淫みだららかな空氣の中にゐたりするので、彼に當り散らした當時のやうな自暴自棄の氣持になつて、苦しさを忘れるために強い煙草や酒を飲み續けるやうになりはせぬかを憂へたが、旅行の始めのうちには彼女に會ふ機會がなかつたので、何うすることも出来なかつた。その後、彼女が國事犯人の中に移されるとすぐに、彼は今までの自分の心配は、ほんとの取越苦勞に過ぎなかつたことが分つたばかりでなく、彼女と會ふ毎に、その氣持は、彼が常に望んでゐる方向に、はつきり變つて行くのを認めることが出來た。トムスクで始めて彼女と會つた時には、まだモスクワ出發前のやうな様子をしてゐた。彼女は彼を見るともう少しも含羞はにかんだり、厭な顔をしたりせず、喜んで彼を迎へ、彼の骨折りや、殊に今一緒にゐる人々の仲間に入れて貰つたことなどを感謝した。

二ヶ月の道中で、彼女の性格が變つて行つたのは、外から見ても分るやうになつた。彼女は瘦せて、日焼けがして、

か
老けて見えた。額こめかみや口のあたりには小皺が現はれ、髪は額に垂らさず、頭を頭巾で包んでゐた。それに着物といひ、髪かみの結方むすびかたといひ、また應對たいおうぶりといひ、もう以前の媚を賣つた面影は更になくなつてゐた。彼女がこのやうに變つて行くのを見て、ネフリエードフは殊の外喜んだ。

彼はこの頃になつて、彼女に對して今までにない或る感じを持つやうになつた。これは最初にあつた詩的な熱中とも違ふし、その後を抱いた肉慾的な戀とは更にずつと違つてゐた。さりとて利己的な考へと結びつけられた義務の履行といふやうな感じ——これによつて裁判がすんだ後彼女と結婚しようとした——とも違つてゐた。今は唯不憫に思ふ單純な感情で、それは監獄で始めて彼女に會つた時にも、その後病院の助手と彼女とが何うかしたと云ふのを思ひ切つて許してやつた時にも抱いた感情であつた。(尤も後にそれは嘘であつた事が分つた。)唯、同じ感情ではあるが、今は、以前のやうなほんの一時的に起つたのでなく、永久的になつて來たのであつた。彼が今何か考へるにつけ、何かするにつけ、いつも起つてくる氣持は、この不憫に思ふ惻陰の情で、これは唯彼女に對してばかりでなく、誰に對してもさうであつた。

この感情は、丁度ネフリエードフの心の中にある愛の流れ

に出口を開いてやつたやうなもので、はたはし逃り出た流れは、會ふ人々を潤うるはさずにはおかなかつた。

ネフリエードフは旅の間ずつと興奮状態を續けてゐたので、その間に、馭者 護送兵から典獄、縣知事に至るまで、彼が交渉した限りのすべての人々に對して、いつの間にか慈悲深い親切な人となり切つてゐた。

マースロワが國事犯人の中に移されてからは、ネフリエードフは自然多くの國事犯人と知合ひになる機會が繁くなつて、先づエカテリンブルグでは、彼等と一緒に大きな室にゐることが許され、その後の道中でも、マースロワが仲間入りをしてゐた五人の男と四人の女とに近づきになつた。かうして近づきになつて見ると、流されて行く國事犯人に對するネフリエードフの考へが、前とすつかり變つてしまつた。ロシヤに革命運動が始まつて以來、殊に三月一日(アレクサンドル二世が、虚無黨の爲に斃れた日)以後、ネフリエードフは革命黨員を憎み、蔑あざむんでゐた。彼が何よりも彼等を嫌つたのは、彼等の政府と闘ふ手段がいかにも残忍で且つ陰險であつたからで、殊に彼等の行つた慘殺と、それに次いで彼等に共通な自尊心の強いこと、が彼の氣に入らなかつた。然し彼等と親しくなり、彼等が多く無辜の罪を負うて政府から苦しめられてゐることが分ると、彼等が現在のや

うな人になる外はないといふことが了解された。

罪人と名のつくうちで、刑事犯人が受ける恐ろしい苦痛は、まことに不條理を極めたものであるにはせよ、とにかく宣告の前後には法律らしいもので裁かれる。ところが國事犯人になると、この法律らしいものさへも適用されないのである。それはネフリュードフが知つた範圍から云つても、シネーストワの場合でも、その他頃知合ひになつた多くの國事犯人の場合でも皆さうであつた。これらの人々を取扱ふのは、丁度網で魚を獲るやうなもので、網にかゝつたものは残らず岸に引上げられ、その上で物になりさうな大きな魚だけが選りだされ、雜魚は顧みられずに岸に抛り出されたまゝ干乾びてしまふのである。かうして捕へられた幾百の人々は、勿論罪のないものも、政府に對して別に危険でなさうなものも、時によれば幾年かの間監獄に繋がれて、肺病になつたり、氣狂ひになつたり、或は自殺をしたりして空しく消え去つて了ふのである。彼等を監獄に入れておくのは、唯放免の理由がないからであるが、かやうに手近の監獄に入れてさへおけば、法廷で審理をする際に何かの疑問を解決するのに役立つことがあるだらうとらゝるに思つてゐるのである。政府の眼から見ても罪人といへないこれ等の人々の運命は、憲兵、警察官、探偵、檢事、

判事、知事、大臣などの氣紛れや、暇つぶしや、御機嫌次第で左右されてゐる。かういふ官吏は自分が退屈を感じるとか、或は忠勤振りを認められようとするやと早速檢束をやる。そして自分の氣持とか上官の眼の色とかで監禁したり放免したりする。高官でもやはり同様に忠勤を挺んでる必要があるとか、大臣と何かの關係があるかすると、いゝ加減な情實によつて何の罪もない者を遠い世界の涯に流したり獨房に監禁したり、懲役や死刑を宣告したりする。それであるて貴婦人から歎願でもされると譯もなく放免して了ふ。

國事犯人の取扱ひ振りは丁度戰爭と同じことであつたら、彼等の方でも勢ひ官憲が彼等に對して執つたと同じやうな手段を執らなければならなかつた。それで丁度戰時に於ける軍人の行爲が罪とならないで却つて眼覺しい勳功として、輿論の賞讃の的となるやうに、國事犯人の間にも、矢張り彼等仲間の輿論といふものが形作られてゐる。それによると、彼等の自由や生命が危くなつた場合又は人間にとつて尊い一切のものが失はれさうになつた場合に、彼等のとつた殘虐な行爲は、決して悪行でないばかりか、却つて勇敢だと思はれてゐた。これによつてネフリュードフは平素生物と名のつくものを苦しめるどころかその苦しみを平氣で見てもゐられない程の温和な人々が、顔色一つ變へず

に殺人の計畫に携はると云ふ驚くべき現象を理解することが出来た。彼等の殆どすべては、或る場合には殺人行爲を目して、自衛とか或は一般の幸福を齎すべき最高目的達成の武器だと考へ、極めて合理的な行爲であると思つてゐた。彼等が自分達のやることを餘程高尚であるとなし、従つて自分達も重要な人間であると考へるのは、政府がそれをそのやうに重視して、それに嚴罰を課するから起つて来たことなのである。彼等が今まで耐へ忍んで來てゐるくちなは壓迫を耐へ切るためには、自分達が餘程偉いと思はなければ、とても出来るものではなかつたのだ。

彼等と親しくなるにつれて、ネフリュードフには、彼等が多くの人の考へてゐるやうに、悪人ばかりでもなく、さりとて彼等の一部でその仲間の者を考へてゐるやうに、英雄ばかりでもなく、みんな普通の人間で、その中には、どこにもあるやうに善人も、悪人も、中位の者もあるのがはつきり分つて來た。彼等のうちには現在行はれてゐる罪惡と闘ふのが自分の義務であると眞面目に考へて、革命家になつた者もあるが、中にはまた利己的な功名心がその動機となつてゐる者もあつた。併し大部分は、ネフリュードフが戦時の經驗で分つてゐるやうに、危険や冒險的なことを望んだり、生命を弄んだり、とかく血氣盛りの青年時代に特

有な感情によつて革命に牽きつけられてゐるのであつた。彼等が一般の人と異つたよい點は、彼等の間の道徳的の要求が普通一般の社會で考へられてゐるよりも、遙かに高いことにあるので、彼等の間では、節制、粗衣粗食、眞實、清廉などが必ず守るべき信條とされてゐるばかりでなく、社會公共のためにはすべてを犠牲にし、或は自己の生命をも棄てるのが當然の義務と考へられてゐた。だから、彼等のうちの中位以上の者は、ネフリュードフより遙かに優れた人物であつたが、中位以下の者になると、彼に劣ること數等で、それらの多くは、不正直で、偽善で、その上に自惚が強く、高慢であつた。従つてネフリュードフは、新らしく知合ひになつた或る者には、極端に無關心でゐたけれども、また或る者には心からの尊敬を捧げた。

六

ネフリュードフは、カテニシヤと同じ組の中に入れられてゐる徒刑囚のクルイリツォフと云ふ肺病の青年を殊に愛してゐた。ネフリュードフはこの青年とエカテリンブルグで知合ひになつて、その後途々二人は、幾度か顔を合せ、いろ／＼話をした。或る夏の日であつたが、丁度休日になつたので、二人は驛の宿舎にまる一日を送つた。クルイリ

ツォーフは、話に興が乗つて来て、自分の経歴から革命黨員になつたまでの事を話して聞かせた。彼が收監されるまでの話は至つて簡單であつた。南露地方の富裕な地主であつた彼の父が、彼のまだ幼少の折に死んでしまつた爲めに、一人息子であつた彼は、母の手によつて育てられた。中學から、大學へすら、と進んで行つて、大學の數學科を卒業した時は最優秀の成績で學士になつた。彼は大學に残つて更に研究を続け、そして外國留學を勧められたが躊躇して決行しなかつた。その頃彼は或る娘を戀し、結婚しようとして、自治團に就職することを考へてゐた。こんな風にいる／＼の事がして見たかつたけれども、何一つ決行するに到らなかつた。この時、大學時代の友人達から、同志の事業に醸金してくれと頼まれた。その事業と云ふのが、當時の彼には、全く興味のなかつた革命運動の資金であることは分つてゐたが、友情と虚榮心から、また一つには、彼が革命黨を怖がつてゐると思はれないために、金を與へたのである。ところが金を受取つた男が捕へられると、金の出所はクルイリツォーフであるといふ證據の書付が発見されて、彼はすぐに捕縛され、先づ警察署に引かれ、後に監獄に移された。

「私が入つた監獄では」と、クルイリツォーフはネフリユト

ドフに話した。彼は胸を窪ませ、肘を膝の上にあぐらをかいて、共同寢室に腰を下し、時々その輝かしい熱狂的な美しい眼でネフリユトドフを眺めた。「あの監獄では、そんなに厳しい取扱ひを受けませんでした。私達は壁を叩いて合圖をし合つたばかりでなく、廊下をぶらついたり、話をしたり、食物や煙草を遣り取りしたり、毎晩合唱したりすることが出来ました。私はこれでなか／＼聲が、いゝ方でした。それで若し母さへゐなかつたら——母は大變心配してゐたのですから——私は監獄にゐた方がいゝやうに思はれました。氣樂で、大變面白い位でした。彼處で私はあの有名なベトローフ(彼は後に要塞監獄の中で、硝子で咽喉を切つて自殺した)や、その他の人々と知合ひになりました。然し私はまだ革命黨員にはなつてゐませんでした。それからやはり監房が隣り合つてゐた二人の男と近づきになりました。二人共同じポーランド宣言書事件で引張られたのですが、停車場に護送される途中で脱走を企て、裁判に廻されたのです。一人はロジンスキイと云ふポーランド人で、一人はロゾーフスキイと云ふユダヤ人でした。ところでこのロゾーフスキイはまだほんの子供でした。十七だと云つてゐましたが十五位のしか見えませんでした。瘦せた、小柄な、明るい黒い眼を持つた元氣のいゝ男で、ユダヤ人特有の音楽

的素質がありました。聲はまだしつかりしてゐませんでしたが、なか／＼上手に歌ひました。さうです、私が丁度居合させた時二人とも裁判に引出されてゐました。朝呼び出されて、夕方歸つて來ましたが、死刑の宣告を受けたと云ふので、みんな餘りの意外さに吃驚してしまひました。二人のやつたのは、たいしたことぢやありません——唯護送の途中で逃げようとしただけで、誰一人怪我させた譯ではないのです。それに、ロゾーフスキイのやうな子供を處刑するなんて、ほんとに何うかしてゐますよ。で、私達監獄にゐた連中はみんな、これは脅かすだけで、實行はされないものと決め込んでゐました。始めのうちは、誰も興奮してゐましたが、だん／＼静かになつて、舊のやうな生活が續きました。すると或る晩、看守が私の室の扉口に近寄つて、大工が來て絞首臺を作つてゐることをこつそり知らせたのです。私は初めは何の意味か、何のための絞首臺か見當がつきませんでした。この老看守があんまりそは／＼して落着かないので、彼を見てゐるうちに、絞首臺は例の二人のためだなどいふことが分りました。私は壁を叩いて他の仲間話をしてやらうかと思ひましたが、ひよつとして二人の耳に入ると思ひないと思つて止めました。他の連中も、やはり黙り込んでゐました。確かにみんな知つてゐたので

すよ。廊下も、監房も一晩中死んだやうに静まりかへつてゐました。一同壁も叩かず、唄も歌はなかつたのです。十時頃になると又看守が私のところ來て、モスクワから死刑執行官を連れて來たといつて、直ぐにまたすた／＼行つてしまひました。私が呼び返さうとすると、不意にロゾーフスキイが自分の監房から廊下越しに、私に向つて大聲を擧げてゐるのが聞えました。「君、何うしたんだ、何故彼奴を呼ぶのだい。」といふんです。私は看守が煙草を持つて來たのだと云ふやうなことを云つたのですが、彼はちやんと覺つて了つて、私にいろ／＼訊き出したのです。「今夜はみんな歌はないが何う云ふ譯だらう。それに何故壁も叩かないのか。」と訊くんです。私は何と答へたか覚えてゐませんが、彼と話をしないやうに急いで引込んぢまひました。さうです、それはほんとに怖ろしい晩でした。一晩中ことりとする物音にも耳を敏てました。すると明け方になつて、不意に廊下の扉が開いて、誰か大勢の人の足音が聞えました。私は小窓のところに身を寄せて見ると、廊下には、ランプが明るく點つて、最初に典獄が前を通りました。肥つた、自信の強い、決斷力に富んだらしい男でしたが、その時の顔色つたらまるでなかつたのです。蒼白くなつて、下を向いたまゝ、すつかり磨つ玉をつぶしたやうな風でした。その

後から典獄補が、顔を擧げながら、しかもきつぱりした風をして跟いて來ました。一番後ろは看守達でしたが、其奴等
は私の扉のすぐ前を通つて、隣の監房の前で止りました。
すると、典獄補が妙な聲を出して怒鳴つてゐるのが聞えま
した。『ロジンスキイ、起きろ、清潔なシャツに着更へろ。』
と言ふのです。それから扉のぎい／＼云ふ音がして、其奴
等が中に入ると、ロジンスキイの足音が聞えました。彼は
廊下の向う側に行つたので、私には唯典獄の姿が見えた
けです。典獄はすつかり蒼くなつて、上衣の鈕釦を掛けた
り外したりして肩をすぼめてゐましたが、俄かに吃驚したや
うに脇へ寄りました。それはロジンスキイが彼の傍を通つ
て私の室の扉口に近寄つて來たからです。美しい青年で、
御承知のボーランド型の、廣いすつきりした額に、薄色の
縮れた髪の毛が帽子のやうに垂れて、愛くるしい碧い眼を
してゐました。本當に華やかな、肉付のいゝ、みづ／＼し
い健康な青年でした。彼は私の扉の穴の前で止つたので、
私は彼の顔をすつかり見ることが出來ました。物凄く瘦せ
こけた灰色の顔でした。『クルイリツォーフ君、煙草はない
か?』と訊きますから、私は煙草をやらうと思つたのです
が、典獄補が手取るのを恐れたのか、自分の煙草入を出
して皮に渡しました。彼が一本とると典獄補は燐寸を擦つ

て火をつけてやりました。彼は煙草を喫ひながら考へ込ん
でゐましたが、暫くしてから何か思ひ出したやうな様子で
話し始めました。『あんまり殘酷だ、無法だ。僕は何にも罪
を犯さなかつたのに。僕は……』と話しかけましたが、私
が眼を離さずに見てゐた彼の白い若々しい頸筋に、何だか
知らない癢癢が來て、話は杜切れました。すると丁度この
時、廊下からロゾーフスキイが、高調子のユダヤ音で叫ん
でゐるのが聞えて來ましたので、ロジンスキイは喫差の煙
草を投げ棄て、扉のところから離れました。それと入れ違
ひに、今度は扉の穴にロゾーフスキイが現はれました。潤
んだ黒い眼を持つた子供じみた顔は、赤くなつて汗ばんで
ゐました。彼も小ざつぱりしたシャツを着てゐましたが、
ズボンがあまり大きすぎるので、始終兩手でそれを引上げ
ながら、體中をぶる／＼震はせてゐました。彼はその悄氣
た顔を、扉の穴に寄せて『アナトリー・ペトロウイチ(クル
イリツォーフ)、醫者が僕に咳の藥の處方箋を書いたつて、
本當だらうか。僕はどうも體の具合がよくないから、もう
少しあの藥が飲みたいよ。』と云ひました。誰も返事をす
る者が無いので、譯を訊きたさうに私の方を見たり、典
獄の方を見たりしてゐました。尤も彼が何う云ふ意味でこ
んなことを言つたのか、私にも分らなかつたのです。する

と、典獄補が急に怖い顔をして、また例の甲高い聲で、『そんな冗談は止して、もう行くんだ。』と叫びました。ロゾーフスキイは、これからどんな目に會ふのか分らないらしく、何か急ぎのことでもあるやうに、誰よりも先に立つて廊下を駈け出すばかりにして行きました。然し、暫らくして、彼は歩かないと頭張つたのです——彼の鋭い聲と泣き叫ぶ聲とが聞えました。人のが、やく云ふのや、ばた／＼する足音がしました。彼は鋭く泣いたり、喚いたりしたのです。暫く經つとそれが段々遠のいて行つて、廊下の扉がぱたんと閉ると、あとは森然と静まりました……。そんな風にして彼は絞殺されたのです。つまり繩で絞めたのですね。看守が、それは前の奴ぢやないんですが、絞殺の現場を見て私に話したのによりますと、ロジンスキイは素直にしてゐたさうですが、ロゾーフスキイは長い間暴れ廻つたので、大勢で彼を處刑臺に引きずり上げて、無理やりに頭を絞繩の輪の中に押込んだといふことです。尤もこの看守は少し足りない方です。『怖いもんだつて聞いてゐましたが、ちつとも怖ありませんよ。奴等がつり下ると、二度ばかり肩でかうやつた切りでした。』と、彼は肩を痙攣するやうに上げて、また下しました。『それから絞繩の輪がうまく緊まるやうに、刑手が少しばかり繩を引張ると、それでお終

ひでさ、もうびくり、ともしなくなりましたよ。』と云ひました。『ちつとも怖い、ことなんかありませんよ。』と、クルイリツォーフは看守の言葉を繰返して笑顔を見せようとしたが、笑ふことが出来ないで、思はず聲を揚げて泣き出してしまつた。

それから彼は苦しうな呼吸遣ひをして、なほ咽喉に込み上げてくる泣きじやくりをやつと嘸み込みながら、暫らくの間、沈黙を續けた。

「その時からです、私が革命黨員になりましたのは。まあさう云ふ譯なんですよ。」と、彼は落着いてから、簡単に自分の經歷談の結びをつけた。

彼は國民自由黨に籍を置いて、破壊團の長とさへなつた。その一團の目的とするところは、政府自ら政權を投げ出して人民の權利を認めしめるやうに政府當局を威嚇するにあつた。かう云ふ目的を以て、彼はペテルブルグに行つたり、外國に行つたり、それからキエフ、オデッサと旅を續けて到るところで成功を収めた。けれども最後に彼が十分信用しきつてゐた男に裏切られて捕縛され、裁判の結果二年間も監獄にぶち込まれた揚句、死刑の宣告を受けたが、後に無期徒刑に變更されたのであつた。

彼は入獄中に肺病に冒され、現在の状態では僅に數ヶ月

の壽命より無いやうに思はれた。それで彼もよくこれを知つてゐるのだが、自分のやつたことに就いては後悔しなかつた。それどころか、若しもう一度生れ變つて來ることがあつたら、彼はその生命をやはり同じ目的のために、即ち彼が目撃して來た事實の存在し得る現存制度の破壊のために用ふる考だと言つてゐた。

この男の経歴談を聞き、彼と親しく交つたことによつて、ネフリュードフは自分が以前理解し兼ねてゐたことに説明を與へられたのであつた。

七

宿場から出發しようとする際、赤兒のことから護送士官と囚徒との間に衝突が起つたその日、ネフリュードフは宿場の宿屋に泊つてゐたが、朝寢をした上に、縣廳所在地の町から出さうと考へてゐた手紙を澤山書いたので、宿屋から出發するのが平常よりも遅れて、これまでのやうに、途中で囚徒の一隊に追ひつくわけには行かなかつた。それで小さい宿場の近くの村に着いた時はもう日暮になつてゐた。で、中年の、肥つた、素暗らしく首筋の白い後家さんが經營してゐる宿屋に入つて、濡れた衣物を乾かし、聖像や繪が澤山飾つてある小ざつぱりとした部屋で、十分茶を飲んで

から、將校のゐる驛の宿舎に行つて、彼女に面會の許可を乞はうと、急いで身支度をした。

今まで通つて來た六つの宿場では、何處でも護送士官が交替したに拘らず、誰一人としてネフリュードフに驛の宿營所の中に入ることを許さなかつた。それで彼は、一週間以上もカテューシャに會はずにしまつた。こんなに嚴重になつたのは、地位の高い監獄長が巡回することになつてゐたからである。ところが、その監獄長は、宿場を視察せずに通つた護送士官が、以前の士官同様に、屹度カテューシャとの面會を許してくれるだらうと期待してゐた。

宿の女將は、ネフリュードフに村端れの宿場までタラシタス(旅行用)の馬車(馬車)で行くように勧めたけれども、彼は歩いて行くことにした。臭の高いタールをこて／＼塗つた大きな長靴を穿いた、背の低い、肩幅の廣い、若い雇人が、丁度傳説に出てくる勇士のやうな恰好で案内をすることになつた。空から濃い霧がかゝつてゐて、案内者の姿は、窓の火影の射さない場所では、三步位も離れても見わけられないほどの暗さであつた。そのうちに、案内者の姿は、ネフリュードフの眼から離れてしまつて、たゞねは／＼した泥濘(泥濘)に吸ひつかれながら、踏んで行く長靴の音だけが聞えた。教會

の廣場と、軒毎に明るい燈火の點いてゐる長い街路を通り過ぎると、ネフリュードフは案内者の後について、眞暗闇の村端れに出た。が、間もなくこの暗闇の中に、霧を透して光つてゐる、宿場の傍の軒燈の光が眼についた。赤く見える幾つかの火はだん／＼大きく、明るくなつて來た。やがて圍の杭や、うろついてゐる歩哨の黒い影や、縦に染め抜いた柱や番小屋が見えた。歩哨は例によつて『何者だ!』と誰何した。そして同じ仲間者でないことが分ると、急に厳しくなつて、圍ひの傍で待つことも許さないやうな態度をした。然しネフリュードフの案内者は、歩哨の厳しい態度にはびくともしなかつた。

「お前さん、何うしてそんなにぶり／＼してるだ。」と云つた。「軍曹を起して來てくんせえ。俺等アこゝで待つてゐやすから。」

歩哨は何とも答へずに、耳門の中に向つて何だか云つた。そしてこの肩幅の廣い案内者が燈火の下で、泥に塗れたネフリュードフの長靴を木片で擦つてゐるのを見ながら、じつと立止まつてゐた。圍ひの杭の向うでは、男や女の聲ががやがやしてゐた。三分ほど過ぎると鐵のきい／＼云ふ音がして耳門の扉が開き、暗闇の中から燈火の方へ、外套を引掛けた下士が出來て來て、用向を訊いた。ネフリュードフは、個

人的の用事で面會が願ひたいと、豫め名刺に書きつけて持つて來たのを出して、將校に渡してくれと頼んだ。下士は歩哨ほど厳しくなかつたが、非常に物好きで何事をも嗅ぎつけたがつた。それは何か賄賂にありつけさうに感じたので、それを取り通すまいとするらしく、ネフリュードフがどんな用事で將校に面會する必要があるのか、またどんな人間なのかを知つて置きたかつたのだ。ネフリュードフは特別に大切な用事があることゝ、幾らかのお禮をするつもりでゐることを述べて、書付を渡して貰ひたいと頼んだ。下士はそれを受取ると點頭して向うに行つてしまつた。それから暫らく經つて、耳門が又音を立てた。中からは、籠や、樹皮製の箱や、壺や、袋などを提げた女達が出て來た。際立つたシベリヤの方言を丸出しにして、べちや／＼喋りながら耳門の鬮を越えてぞろ／＼やつて來た。女達はどれも田舎じみた扮装でなく、都風であつた。立派な外套や毛皮の外套などを身に着けてゐたが、下袴は高く端折つて頭は頭巾でくるんでゐた。みんな、火影に立つてゐるネフリュードフや案内者を珍らしさうに眺めた。その中の一人は、肩幅の廣い案内者の若者に會つたのが嬉しさうで、愛想半分にシベリヤ式の擲擲口をきいた。

「おや森の鬼さん(ロシアの民間では森に精霊が)お前、何で此處

さ来たゞ。何してゐるだよ。」と、彼女は云つた。

「この旅の方を案内して来たゞよ。」と、彼は答へた。「お前は何か持つて来たゞ。」

「牛乳よ。明日の朝もまた来てくんろといふだよ。」

「泊つてくんろとは言はんかつたか。」と、若者は云つた。

「何を莫迦云ふだよ、このお喋り！」と、女は笑ひながら叫んだ。「一緒に村を歸るべえ。俺を送つてくんろよ。」

案内者はまだ何か女に云つたが、女ばかりでなく、歩哨まで笑ひ出した。それから彼はネフリュードフに向つて云つた。

「且那一人で道が分りやせうか。迷子にはなりませんめえか。」

「分るとも、分るとも。」

「教會の前を通つて行きやすと、右側の二階家から二番目の家でござえやすよ。おさうだ、この杖貸して上げやせう。」と云つて、彼は自分の背よりも高い杖を、ネフリュードフに渡した。そして大きな長靴で、たゞ歩きながら、女達と一緒に暗の中に姿を消した。彼の聲は女達の聲と交つて、まだ霧の中から聞えてゐた。その時、先刻の軍曹が音を立てながら耳門を開けて、ネフリュードフに、自分の後に跟着いて將校の許に來るように案内した。

八

この小驛はシベリヤ街道筋の大小驛と同じやうに、尖つた丸太の杭で圍まれた構内に造られてゐた。住居に充てた平家が三軒あつて、格子窓の附いた一番大きいのは囚徒用、他の一つは護送兵用、三番目は將校用兼事務所になつてゐた。今は三つの家とも燈火が點いてゐて（特にこゝではいつでもさうであるが）、明るい壁の中で何か氣持のよい樂しさうなこともあるやうに見せてゐた。家々の階段の前には幾つかの燈火が點されてゐて、壁の傍にも構内を照す五つばかりの燈火があつた。下土は敷板の上を通つて、ネフリュードフを一番小さい家の階段に案内した。彼は階段を三つばかり上るとネフリュードフを先に立て、ランプの點つた、炭氣の臭のする玄關に通した。暖爐の傍では、ごつ／＼としたバーシユカを着て、ネクタイをつけ、黒いズボンを穿いた兵卒が、片足だけを黄色い脛皮の長靴に突込んで、體を曲げながら片方の長靴の脛皮でサモワルの火を煽つてゐた。兵卒はネフリュードフを見ると、サモワルをそのままにして置いて、ネフリュードフの外套を脱ぎ、奥の室に入つた。

「御用の方が見えませんでした。」

「では、こゝへ通すがいい。」と、ぶり／＼してゐるやうな聲で言つた。

「どうぞ、奥の方へ。」と云つて、兵卒はまたサモワルにかかつた。

釣ランプに照された次の室には、大きい薄色の口髻を生やした、ひどく顔の赤い將校が、幅広い胸や肩にしつくり適つたオーストリヤの上衣を着て、覆ひのかゝつた机の向うに腰掛けてゐるが、卓子の上には食事の残りや瓶が二本置いてあつた。この温い部屋には、煙草の香りの外に何だか強烈な安っぽい香水がぶん／＼匂つてゐた。ネフリュードフを見ると、將校は立上つて、如何にも莫迦にしたやうな、疑ひ深い眼付で眺めた。

「何ういふ御用ですか。」と、彼は訊いた。そして返事を待たずに扉の方へ向つて怒鳴つた。

「ベルノフ、どうしたんだ、サモワルは何時になつたら出来るんだ。」

「直ぐに持つて参ります。」

「それを忘れると、ぶん殴るぞ。」

「今持つて参ります。」と、大聲で云つて、兵卒はサモワルを持つて入つて來た。

ネフリュードフは兵卒がサモワルを置くのを待つてゐた。

(將校は何處を殴つてやらうかと探すやうに、意地悪さうな小さな眼で兵卒の姿を見つてゐた。) サモワルが置かれると將校は茶をいれた。そして函の中からコニャークの四角な瓶とアリベルトのビスケットを出した。それをみんな卓布の上に列べてしまふと、彼はまたネフリュードフの方を向いた。

「では、どんな御用ですか、伺ひませう。」

「私は或る女囚に面會させて頂きたいのですが。」と、ネフリュードフは腰を下さずに答へた。

「國事犯ですか？ それは法律で禁じられてゐます。」と、將校は云つた。

「その女は國事犯ではありません。」と、ネフリュードフは云つた。

「さあ、どうぞお掛け下さい。」と、將校は丁寧云つた。ネフリュードフは腰掛けた。

「國事犯ではありませんが、實はこちらからお願ひして」と、彼は言葉を續けた。「上官から國事犯と一緒に頂くお許しを得てゐるのです……」

「あゝそれなら知つてゐます。」と、將校は話を遮つた。「背の小さな、色の浅黒い女でせう？ 別に御心配はいりません、それは何とか出來ますから。さア煙草は如何です。」

彼は煙草の箱をネフリュードフに差出した。それから丁寧に二つのコップに茶を注いで、その一つをネフリュードフに薦めた。

「どうぞ。」と、彼は云つた。

「有難うございます。實は早く面會が致したいのですが……」

「まあ、夜は長いですよ。時間は十分あります。此方へ呼び出すやうに取計らひませう。」

「あの女を呼出さずに、私があちらに參る譯には行かないでせうか。」と、ネフリュードフは云つた。

「國事犯人のところへですか？ それは法律が許しません。」

「今まで幾度も許されてゐますが。若し私が何か國事犯人に渡しはしないかといふ御掛念でもおありでしたら、それは御無用です。若しそれだけのことなら、私はあの女の手を通して出来るのですから。」

「いや、さうではないのです。どうせあの女の體は檢めますから。」と、將校は苦笑した。

「では、私をお檢めになつたらいゝでせう。」

「いや、そんなことをしないで何とかなりませう。」と、將校は栓を開けた瓶をネフリュードフのコップに押しつけた

がら云つた。「さあ、どうぞ。お厭ですか、では御隨意に。どうもこんなシベリヤにゐますと教養のある方にお目にかかるのが何より嬉しく思はれましてな。御承知の通り私共の職務は實に情ないものです。他の仕事に慣れた人間には殊に辛いでしてね。私共の仲間就いては世間一般に、護送士官などゝ云ふものは頑固一點張りの無教育な人間だと云ふ定評があるやうですな。ですから、私共が全然違つた他の仕事のために生れて來たものとは誰も考へてくれないのです。」

この將校の儲い顔や、香水や、寶石入りの指環や、殊にその不快な笑ひ方がネフリュードフには堪らなく厭であつた。然し今は旅行中であるからと云ふので、どんな人に對しても輕々しい態度や侮蔑的な動作をしてはならない、誰と話す時にも、自分自身に對するやうに『奥底なく』語らなければならぬといふ眞面目な注意深い氣持になつてゐた。で、今將校の云ふことを聞いて、彼の心持が了解出來たので、眞面目に口を切つた。

「私は、あなたの御職掌にしても、人の苦しみを輕くしてやると云ふことに慰めを見出せることゝ思ひますが。」と、彼は云つた。

「苦しみとは何を指すのでせう？ 彼奴等はあれだけの人

間なんですよ。」

「あれだけなんて何だか特別の人間扱ひにしておるのでやうですが？」と、ネフリニードフは云つた。「やはり普通の人と同じ人間なのです。中には罪の無い者も居りますよ。」

「それは勿論いろんな種類の人間が居りますからな。時には可哀さうに思ふのもありますよ。他の同僚達は少しも容赦しませんが、私は出来るだけ彼奴等を樂にさせてやらうと努めてゐます。彼奴等よりも自分が苦しんだ方が寧ろいいやうです。他の連中は何かちよつとしたことがあると、直ぐに法律を擔ぎ出して、銃殺でもやり兼ねないのですが、私は憐れみをかけて居ります。如何ですか、どうぞお菓子でもお取り下さい。」と、彼は更に茶を注ぎながら云つた。

「あの女は一體何者ですか——あなたがお會ひになりたいと仰しやる女は。」と、彼は訊いた。

「不幸な女で、娼妓にまでなり下つたのです。それに毒殺したと云ふ不當な宣告を受けたのですが、實は極く善良な女なのです。」と、ネフリニードフは云つた。

將校は點頭した。「さうですか、ちよい／＼そんなのがありますよ。一つお話ししますと、カザンにエムマと云ふハンガリー生れの女が有りましたね、それでゐて眼は純然たるベルシヤ風でしたか」と、彼はこれを思ひ出すと微笑を抑

へることが出来ない様子で尙も言葉を續けた。「伯爵夫人とも云へるやうな風采でした……」

ネフリニードフは將校の云ふことを遮つて、前の話に立ち返つた。

「私は、あなたがあの人達をお手許に預つておゐてになる間は、樂にさせておやりになることが出来さうに思ひます。それにさうなさつたらあなたも大變御満足だらうと存じますか。」と、ネフリニードフは丁度外國人か子供にでも話すやうに、出来るだけ分り易く、噛んで含めるやうに言つた。將校は眼を光らせてネフリニードフを眺めてゐた。そして、自分の眼の前にあり／＼と浮んで、始終頭から離れないベルシヤ風の眼付をしたハンガリー女の話の續きをしようとして、ネフリニードフの話が終るのを、今か／＼と待つてゐた。

「さう、それはまつたくさうです。まあ、さうとしておきますせう。」と彼は云つた。「私も彼奴等を可哀さうだと思つて居ります。それから一寸あのエムマのお話をしますが、あの女は何をしたかと申しますと……」

「失禮ですが、私はその話には餘り興味を持ちません」と、ネフリニードフは言つた。「率直に申しますと、私は以前はさうでもありませんでしたが、今は女の話は厭になつて了

ひました。」

將校は吃驚してネフリニードフを眺めた。

「お茶をもう一杯如何です。」と、彼は云つた。

「有難うございます。もう澤山です。」

「ベルノフ！」と、將校は叫んだ。「この方をワクローフのところへお連れ申せ。そして國事犯の特別監房へお通しするやうに云へ。點呼までは彼處に居られてもいゝから。」

九

傳令に案内されたネフリニードフは、また、赤い燈火が薄暗く照つてゐる構内の庭に出た。

「何處へ行く？」と、出會つた護送兵はネフリニードフを案内して來た傳令に訊いた。

「特別監房の五號へ。」

「こゝからは行けないよ、閉まつてゐるから。あの階段を通つて行くが、いゝ。」

「閉まつてゐるとは、何うしたんだ。」

「下士が閉めたまんまで、村に行つちまつたんだよ。」

「さうか、では此方においでなさい。」

傳令はネフリニードフを他の階段に案内して、敷板を通つて別の入口に近づいた。と、もうがやく／＼してゐる聲や、

どや／＼動く人の氣配が、丁度巢立ち前の蜂の巢のやうに庭から聞えて來たが、ネフリニードフが傍に行つて扉を開けると、がやく／＼騒ぐ聲は急に高まつて、お互ひに叫び合つたり、罵つたり、笑つたりしてゐる聲に變つて行つた。同時に頭がいろ／＼の音を立てゝ鳴つてゐるのが聞え、例の重苦しい臭が鼻を衝いた。

この二つの印象——鎖の音と一緒に聞えてくるがやく／＼した聲と、恐ろしいほどむつとする臭とは、いつもネフリニードフにとつては一つの惱ましい感じに溶け合つて、それが或る精神的嘔吐となり、最後には肉體的嘔吐にまで變つて行つた。そしてこの二つの印象は入れ交つて、互にその不快さを強めて行くのであつた。

俗に『バラハ』(夜間、監房に入れ)と云はれてゐる大きな臭い桶の置いてある建物の入口で、ネフリニードフの眞先に眼についたのは、桶の傍に腰を下してゐる一人の女であつた。女と差向ひに、刺つた頭の上に煎餅形の帽子を横被りにしてゐる男がゐた。二人は何か話し合つてゐたが、男囚の方はネフリニードフを見ると、瞬きをして云つた。

「天子様だつて、小便の我慢は出來ねえだ。」

女は着物の裾を下して、顔を伏せた。

支那から廊下が續いてゐて、其處には監房の扉が幾つか

開放されてゐた。最初の室は夫婦者用で、次の大きな室は獨身者用である。廊下の一番端には國事犯人用の小さな室が二つあつた。宿場の建物は百五十人を收容するやうに造られてゐるのに、四百五十人も詰め込んだので、囚徒は監房に入りきらずに、廊下まで一杯になつてゐた。床の上に腰を下したり、横になつたりしてゐる者もあるし、空の茶瓶や、湯の一杯入つた茶瓶を持つて、行つたり來たりしてゐる者もあつた。この中にはタラスもゐた。彼はネフリュードフに追ひすがつて愛想よく挨拶した。タラスの無邪氣な顔は、鼻の上と眼の下に出來た打傷のために醜くなつてゐた。

「お前何う、たのだ。」と、ネフリュードフは訊いた。

「へい、こんな譯でして。」とタラスは微笑しながら云つた。「始終喧嘩ばかりするものですから。」と、莫迦にしたやうに護送兵は云つた。

「それがみんな女から起つたこんでさ。」と、二人の後について來た一人の男囚が云ひ足した。「盲のフェーヂカと摺合をしやしたのさ。」

「それでフォードシヤは何うした？」と、ネフリュードフは訊いた。

「お蔭様でびん／＼してゐやすよ。今お茶をいれるのに、

湯を持つて行くところでがす。」といつて、タラスは夫婦者の室に入つた。

ネフリュードフは扉口から内を覗いて見た。監房には女囚と男囚がぎつしりつまつて、寢臺の上にも下にも一杯になつてゐた。濡れた着物を乾かす湯氣が漂うてゐる中に、しつきりなしに喋る女の聲が聞えた。次は獨身者の室で、この方はもつと詰め込んでゐて、扉口はおろか、廊下にもではみ出し、濡れた着物を着た男囚の群が、何か分配したり、取り定めたりしてゐた。護送兵がネフリュードフに説明した所によると、あれは囚人頭が、出入りのイカサマ師(賭博で四徒達から金をこつた)から囚人達が前借りしゐた食料代か、でなければ食料代の交附を當にカルタ勝負をして、それに負けた額を、切札で作つて渡して置いた手形を引換へにイカサマ師に支拂つてゐる所であつた。が、下士とネフリュードフを見ると、傍に立つてゐた者は、憎しみの眼眸を透つて黙り込んだ。何か分配してゐる囚徒の中にネフリュードフは、見覚えのある刑事囚のフォードロフを見つけた。その傍にはこの男がいつも連れてゐる眉毛の吊上つた、色の白い、眼みの來てゐる、小柄な、みじめな若者と、もう一人見るも厭らしい瘡痕面の鼻缺けの浮浪人とがゐた。之は逃亡の途中、シベリヤの密林の中で仲間を殺して、その肉を

喰つたといふ噂のある有名な男であつた。この浮浪人は、濡れた着物を一方の肩に引掛けて、人を蔑むやうな眼付でネフリニードフを見ながら、廊下に立つて脇へ寄りやうとしなかつた。ネフリニードフは彼を避けて通つた。

かう云ふ光景はネフリニードフにとつては未知の世界でもなかつたし、殊にこの三ヶ月の間、四百人の刑事囚のいろ／＼な状態——それは暑い日に鎖を引きずりながら立ちのぼる砂塵の中に塗れてゐるところや、途中の休憩のや、ぼか／＼する時に宿場の構内でむき出しに風紀を紊してゐる恐るべき場面など——を見てゐた。それでも彼は、彼等の中に入つてゐる時はいつも、今と同じく彼等の注意の焦點となつてゐるのを感じた。そして、彼等の前に、自分の罪を意識して、恥づかしさで一杯な苦しい心持を味ふのであつた。彼にとつて一番辛いのは、この恥づかしさと罪を犯したといふ心持に、更に嫌悪と恐怖の感じが、加はつて來ることであつた。彼も彼等のやうな境遇に置かれたら、彼等のやうになるのが當然であるとは知つてゐたが、とにかく、彼等に對する嫌悪の情を、抑へつけることが出來なかつた。

「働かねえで食つて行ける奴アうめえもんさ。」と云ふのをネフリニードフは國事犯人の室の扉口に近づいた時に耳に

した。これは、聲の暖れた男が云つたのだが、その男はもつと口汚ない罵詈を附け加へた。と、その後から憎々しげな、人を莫迦にしたやうな笑聲がどつと起つた。

一〇

獨身者の室の前を過ぎると、ネフリニードフを案内して來た下士は、點呼前にまた迎ひに來るからと云つて歸つてしまつた。下士がゐなくなると、直ぐに一人の囚徒が足の鎖を引きずらないように、素足で小走りに、ネフリニードフの間近に身を寄せて、氣持の悪い酸っぱい汗の臭ひを浴びせながら、こつそりと耳打ちした。

「且那、どうぞお力を貸して下さいませ。大勢で若え者ですつかりごまかしてをります。その若えのに酒代をやつて、今日の點呼にはカルマーノフと名乗らせることにしましたよ。どうぞお力を貸して下さいませ。俺アには何うにもなりませんねえ、殺されやすから。」と言つて、心配さうに四邊を見廻しながら急いでネフリニードフの傍を離れた。

それはかう云ふ譯であつた。徒刑囚のカルマーノフと云ふ男が、自分と顔の似てゐる流刑囚の若者を咬かして、うまく名前を取り換へて自分が流刑囚となり、若者を自分の代りに徒刑にやらうとしてゐるのであつた。

ネフリードフはこの話をもう聞いてゐた。それはさつきの囚人が既に一週間ばかり前にも、この差替への話を彼にしたからであつた。で、ネフリードフは、よく分つたから出来るだけの骨折はしてやらうと云ふ印に點頭うなづいて見せ、臍目はらみもふらず進んで行つた。

ネフリードフは、この囚人をエカテリンブルグから知つてゐた。この町で、彼は女房も自分と一緒にけるやうにその筋の許しを願つてくれと頼んだことがあり、ネフリードフも、彼の犯罪にはひどく驚いてゐた。これは中背の、極く平凡な百姓姿をした三十恰好の、マカール・デフキンと云ふ男で、強盗謀殺未遂で徒刑に處せられてゐた。その犯罪は實に不思議なもので、彼自身の云ふところによれば、彼のなした犯罪ではなくて、悪魔の所業であつた。それは、彼の親父おやのところところに旅人が立寄つて、二ルーブリで四十露里もある村まで行くために彼の馬車を雇つた。親父はマカールにその旅人を乗せて行けと命じたので、彼は馬に馬具をつけ、自分も着物を着更へて、旅人と一緒に茶を飲んでると、旅人は茶話ちわし、これから嫁よめとりに行くので、モスタワで儲けた五百ルーブリを懐中してゐると云つた。マカールは外に出て斧を取ると、それを櫂この薬の下に入れて置いた。

「なんで斧を持つて行つたのか俺おれアにも分らねえですが。」と、彼は話した。「『斧を持つて行け。』と云ふ聲がしやしたのがす。それで斧を持つた譯わけでして、櫂に乗つて、どんどん行きやしたが途中別に何事もなかつたのがす。俺おれアは斧のことなんか忘れてゐやした。それだのにもう村も近くなつたと云ふ時に——さうですが、六里位むいりの手前てまへでしたが、丁度ちょうど小せ道から本道に出る坂道でござえやしたから、俺おれア下りて櫂この後あとから歩いてゐやすと、悪魔の野郎やろうがこつそり耳打ちしやした。『お前おまへ、何考へてゐるだ、坂道だぜ、本道に行きやア人があるだぞ、それに村があるぢやねえか、奴やつは金を持つてゐるだ、やるなら今だぞ——考へてゐる時ぢやねえ。』つてよ。俺おれア薬いしを直すやうにして櫂この中に屈かみ込むと斧がひとりでに俺おれアの手てに飛び込んで來きやしたぞ。客人はすぐに眼まなこをつけて『何するだ』と云つたで、俺おれア斧を振り上げてぶち殺ころさうとしやしたぞ。が、客人はすばしこく櫂こから飛び下りて俺おれアの両手を押へやした。『この惡黨あくだんめ何をするだ。』と云つて、俺おれを雪ゆきの中に投げつけやしたぞ。俺おれア手て向むかへもしねえで降参くだりまゐりしやしたよ。すると客人は俺おれアの両手を帶おびでふん縛むすつて櫂こへ抛なり込んで、直ただぐに警察に連れて行きやしたぞ。それから監獄かんごくにぶち込まれ裁判を受けたがすよ。村の衆しゆは、俺おれアをいゝ人間で、悪いこたア爪

の垢程もありやしねえつて庇つてくれたぞ。俺アを使つて
ゐた主人もやつぱり褒めてくれやしたが、何しろ辯護士を
頼む金がねえので」と、マカールは云つた。「それで四年近
くもぶち込まれやしたぞ。」

今この男は同じ村の若者を助けたいばかりに、それを打
明けては命も危いとは知りながら、ネフリュードフに、囚徒
の秘密を傳へたのであつた。もしこれが知れたら、一も二
もなく絞め殺されるに違ひない。

一

國事犯人の室は二つの小さな監房から出来てゐて、その
扉は廊下の仕切られてゐる部分についてゐた。ネフリュード
フは、その仕切られた廊下に入ると、松のたきつけを手に
してゐるシモンソンの姿を見た。彼は短い上衣を着て、盛
んに燃えてゐる燵の扉が火氣に震へてゐる前に蹲んでゐ
た。

彼はネフリュードフを見つけると、蹲んだまゝ長い眉毛の
下から覗くやうに、ネフリュードフをずつと見上げながら手
を差伸べた。

「よくおいでになりました。丁度あなたにお會ひしなけれ
ばならなかつたのです。」と、彼は意味あり氣な様子で、ネ

フリュードフの眼をまともに見ながら云つた。

「それはどんなことで？」と、ネフリュードフは訊いた。

「後で申しませう。今一寸忙しいですから。」

そしてシモンソンは再び燵に向つた。彼は自分一流の
理論で、熱のエネルギーの消耗を出来るだけ少なくして燵
を焚いてゐたのであつた。

ネフリュードフが最初の入口に入りかけると、次の入口か
ら、大きな芥や埃の堆積を燵の方に押しやりながら體を
屈めて箒を手にしたマースロワが出て來た。彼女は白い短
い上衣に、下袴を端折つて、靴下を穿き、頭には塵よけの
ために眉の處まで白い頭巾を被つてゐた。ネフリュードフ
を見ると、腰を伸ばして、さつと顔を染め、いそ／＼と箒
を捨て、兩手を下袴で拭いて、彼の前に立つた。

「部屋を片つけてゐるのかい。」と、ネフリュードフは手を
差出しながら云つた。

「え、昔、私のしてゐた仕事ですわ。」と云つて、彼女は笑
顔を見せた。「でも、こゝの埃つたら、お話になりません
わ。掃除の仕通しなんですよーあの格子縞の服は乾きま
して？」と、彼女はシモンソンに向つて云つた。

「大抵ね。」と、シモンソンはネフリュードフを意外に思は
せた程の普通ならぬ眼付で、彼女を見ながら答へた。

「さう、それでは私、取つて來ますわ。そして毛皮の外套を持つて來て乾しませう。私共はみんな此處に居りますのよ」と、彼女は向うの扉の中に入りながら、ネフリュードフに近くの扉を指した。

ネフリュードフは扉を開けて小さな監房に入った。其處には寢臺の上に低く置かれてある金屬製の小さいランプが、ぼんやりした光を投げてゐた。監房の中は薄ら寒く、浮いてゐる塵や、濕氣や、煙草の香が漂つてゐた。ブリキ製のランプはその傍にある物を明るく照らしてゐたが、寢臺は蔭になつて、壁の上にはゆらくした影が動いた。この小さい室には、食事係になつてゐた二人の男が湯と食物を取りに行つてゐる外には、みんな揃つてゐた。その中にはネフリュードフには古馴染のウェーラ・エフレモウナもゐたが、彼女は以前よりも更に瘦せて黄色味を帯び、大きな驚いたやうな眼付をして、額には青筋を浮べ、髪の毛も短かゝつた。灰色のコートを着て、煙草の粉をばら撒いた新聞紙の前に坐つたまゝ、震へる手付で紙煙草を巻いてゐた。

此處にはネフリュードフにとつて最も愉快に感ずる女で國事犯人の一人であるエミリヤ・ランツェーワも居合した。彼女は此處の家事萬端を引受けて、どんな苦しい中にも女でなくては見られないやうな上手な家政の切廻し方をし

て、しかも自然に親しみと慰樂とを感ずるやうに骨折つてゐた。今彼女はランプの傍に坐つて、袖をまくり上げ、日焼けはしてゐるが美しい器用な手で、茶碗やコップを拭いては寢臺の上に擴げた布片の上に列べてゐた。美人ではなかつたが年は若く、伶俐で溫和しやうな顔付をしてゐた。そしてその顔は微笑むと直ぐに、愉快さうな、生々した、人の心を蕩かすやうな表情に變る特色を持つてゐた。彼女は今もさういふ笑顔でネフリュードフを迎へた。

「あら、私共はあなたがおうちやんとロシヤにお歸りになつてゐることゝばかり思つてゐましたわ。」と、彼女は云つた。

蔭になつてゐる暗い遠くの隅には、マリヤ・パウロウナもゐた。彼女は可愛い子供らしい聲で何やら譯の分らないことをしつきりなしに喋つてゐる、髪の毛の白い小娘の對手になつて、何かしてゐた。

「丁度いいところにお出でよしたわ。カーチヤ(カチエーシ)にお會ひでしたか?」と、彼女はネフリュードフに訊いた。「御覽下さいまし、私達のとこにもこんなお客様があるのですよ。」と、彼女は小娘を指した。

アナトリー・クルイツォーフも此處にゐた。瘦せ衰へて蒼白くなつた彼は、防寒靴を穿いた足を折り曲げ、身を屈

め、震へながら両手を半外套の袖の中に突込んだまゝ寢臺の彼方の隅に坐り、熱病やみのやうな眼で、ネフリュードフを眺めた。ネフリュードフは彼に近寄らうとして、扉の右手に、眼鏡をかけた、赤い縮毛の男が護謨の短い上衣を着て、袋の中の物を探しながら、微笑を含んでゐる美しいグラベツと話をしてゐるのが眼についた。これは有名な革命黨員のノウォドゥウォーロフであつた。ネフリュードフは急いでこの男とほんの形式だけの會釋をした。彼が特にさうしたのは、この一團の國事犯人全部の中で、この男一人だけが嫌ひであつたからなのだ。ノウォドゥウォーロフは、眼鏡越しに青い眼を光らせてネフリュードフを見、顔を蟹めながら彼にその細い手を差出した。

「何うです、旅は面白いですか。」と、彼は見えすいた皮肉を云つた。

「えゝ、なか／＼面白いことがありますよ。」と、ネフリュードフは態と彼の皮肉に氣が付かずに、好意ある言葉を受取つてゐるやうな風をして答へた。そしてクルイリツォーフのところへ近寄つて行つた。

ネフリュードフは表面無關心のやうに見せてゐたが、内心はノウォドゥウォーロフに對して、それどころでは無かつた。ノウォドゥウォーロフの言葉や、何か不愉快になるやうなこと

を云つたり、したりしてやらうと考へてゐる彼の見えすいた動作は、折角今までネフリュードフが浸つてゐたその柔い氣分をすつかり打毀してしまつた。それで彼は悲しい惱ましい氣持になつて來た。

「體の具合は何うです。」と、彼はクルイリツォーフの冷い震へる手を握りながら云つた。

「別にどうもありません。唯寒いので閉口です。それにこんななにつぶ濡れですからね。」と、クルイリツォーフは急いで半外套の中に手を入れながら云つた。「此處は恐ろしい寒さですよ。そら、窓が毀れてゐるでせう。」と、彼は鐵格子の向うの二箇所も窓硝子の毀れてゐるところを指した。「それで、あなたは何故暫くお見えにならないかつたのです？」

「面會を許さないのでね、なか／＼嚴しいお役人達ですよ。然し今日の將校は寛大に取計らつてくれました。」

「へえ、寛大とはよかつたですね。」と、クルイリツォーフは云つた。「あの將校が今朝どんなことをしたかマリーシャ（マリヤ）に訊いて御覽なさい。」

マリヤ・パーウロウナは自分の席を立たずに、今朝宿場から出掛けに赤兒のことで起つた騒ぎの顛末を話した。

「私は、皆が團結して抗議しなければならぬと思ひます。」と、ウエーラ・エフレモウナはきつぱりした聲で云つた

が、同時にきよとくした落ちつかなさで、一人々々の顔を見廻した。「ウラヂーミル(シモンツ)さんが抗議したんだけど、それだけでは足りませんわ。」

「どんな抗議をするんだ。」と、不平らしく顔を顰めてクルイリツォーフが云つた。確に彼はずつと前から、ヴェーラ・エフレモウナの率直でない、如何にも慮とらしい神経質なのが癪に觸つてゐたのだ。「あなたはカーチャを探しておいでですか。」と、彼はネフリュードフの方を向いた。「あの女は始終働いて、掃除をしてゐますよ。今しがた吾々男の室を掃除してしまつて、もう女の室の方をやつてゐるのです。ですが、蚤はまだなか／＼退治しきれませんので、惱まされまますよ。マリーシャは彼處で何をしてゐるんだらう。」と、彼はマリーヤ・パーウロウナのゐる隅の方を頭で指し示すやうにして云つた。

「あの貰ひ兒の髪を梳いていらつしやるのよ。」と、ランツェエーフが答へた。

「それはいいが、私達に虱なんか飛ばしやしないかな。」と、クルイリツォーフは云つた。

「大丈夫よ。私は氣をつけてゐますわ。この子はもう清潔になりましたの。」と、マリーヤ・パーウロウナは云つた。「この子をちよいと預つて頂戴。」と、彼女はランツェエーフの

方に向いた。「私、カーチャのお手傳ひをして来るから。さう／＼、あの人のところへ格子縞の服を持つて行つてやるわ。」

ランツェエーフは赤兒を受取ると、母親のやうに優しくその露出しになつてゐる、ふつくりした手を握つて、自分の膝の上に置き、砂糖を少し與つた。

マリーヤ・パーウロウナは出て行つた。そして彼女と入れ違ひに、湯と食料を持つた二人の男が室に入つて來た。

二二

入つて來た一人は、背の低い、瘦せぎすの若者で、毛皮裏の半外套を着、深い長靴を穿いてゐた。彼は、湯氣の立ち昇る熱湯入りの大きな湯沸しを兩手に提げ、なほ麵麩を入れた風呂敷包を小脇に抱へて、つか／＼と急ぎ足でやつて來た。

「や、公爵様もお見えですな。」と言ひながら、彼は湯沸しを茶碗の間へ置き、麵麩をマースロワに渡した。「珍らしいものを買ひ込みましたよ。」と、半外套を脱いで、それを皆の頭越しに寢床の隅つこへ抛りながら言つた。「マルケルが卵や牛乳を買つて來たんです。今夜は一つ夜會が出来ますよ。こちらでは、キリロウナ(エリツ)か、例によつて美的

清潔さを發揮してますからね」と、にこ／＼しながら、ラ
ンツェーワの方を見て言つた。「さアお茶でもいれて貰ひま
せうか。」と、矢張り彼女に向つて言つた。

この男は外貌からも、舉動からも、音聲からも、眼付か
らも、元氣と愉快さが溢れてゐた。ところで、も一人は
背の低い骨ばつた、灰色の瘦せこけた顔に頬骨ばかり特別
に高く、間の離れ過ぎた眼が美しい緑色をした、唇の薄い
男であつたが、今一人とは反對に暗い憂鬱的な容子をして
ゐた。そして古めかしい綿入の外套を着て、長靴には表
靴をつけて、兩手には二つの壺と二つの折詰を持つてゐた
が、その荷物をランツェーワの前へ置くと、ネフリュードフ
にお辭儀をした。それも首を下げただけで、眼は依然とし
て、彼を見てゐた。それから、いや／＼さうに、汗ばんだ
片手を差出して、握手した後で、籠の中から、食物を取出
して列べ始めた。

この國事犯人は二人共平民出の者であつた。前の男はナ
バートフといふ百姓で、後の男はマルケル・コンドラティエ
フと云ふ職工であつた。マルケルはもう三十五にもなつて
から、革命運動に入つたのだが、ナバートフの方は既に十
八歳の時からそれに携はつたのであつた。彼は、ずば抜
けた才人だったので、村の小學校から直ぐに中學へ入り、

個人教授をやつて自活の道を講じながら、金牌つきで卒業
した。然し、七年級にゐる時早くも自分の出て來た農民の
教化に志し、世間から無視されてゐる同胞を啓發しようと
決心してゐたので、大學へは入らないで自分の目的通り、
最初は或る大きな村の役場の書記となつた。けれど彼は、
百姓達に本を讀んで聞かせたり、彼等の間に購買生産組合
を組織したりしたので、直きに捕縛されて了つた。初めは
禁錮八ヶ月に處せられ、秘密な監視の下に出獄を許された。
自由の身になると、彼は直ちに他の地方へ行つて、其處で
小學教員となつたが、また同じことをしたので捕へられ、
今度は一年二ヶ月の間禁錮された。そして收監中に愈々自
分の信念を固めてしまつたのである。

二度目の禁錮が済むと、ベルム縣へ追放された。彼はそ
こから逃走して又捕まり、七ヶ月間投獄されてゐたが、そ
れが済むと今度はアルハンゲリスク縣へ追放された。その
時も逃走を繰返して捕まつた。そしてヤクーツク州へ流さ
れることになつた。成人してからの彼の半生は、まるで投
獄と追放のうちに過ぎた。でも、かうしたすべての徑路
のために、此^{いさ}かも彼の心は亂されず、その精力も減退せず、
むしろ元氣を鼓舞された位であつた。それといふのも、
彼が弾力性に富んだ人間で、優れた消化力を有し、常に平

衡のとれた活動をつづけ、いつも快活で元氣であつたからである。何をしても後悔したことが無く、又遠い將來を氣にしたことが無かつた。たゞ自分の智慧と、敏捷と、實際的な能力の全部を擧げて、現在に活躍してゐた。自由の身になると、彼は、終生の目的たる、勞働階級、わけても農民階級の啓發と團結との爲に働いた。それから、捕まると監獄の外と通ずる工夫をしたり、自分のためといふよりは自分の仲間のため事情の許す限り最善の生活を打ち立てようとして、矢張り根氣よく實際的の活動を續けてゐた。彼は、何よりも先づ社會的の人物であつた。自分は何も要らないので、少しばかりのもので満足してゐたが、仲間のため、同志のためには、多くのものを要求し、手も足も休めず、寢食を忘れて肉體的にも精神的にも、どんな仕事でも働くことが出来た。百姓としての彼は、頗る勤勉で、行き届いてゐて、仕事に巧みであつた。その上生れつき克己心が強く、人に接するにも慇懃で、他人の感情ばかりか、他人の意見にもよく氣をつける質であつた。生ひ先き短い彼の母は、無學の百姓女で、迷信が強く、且つ寡婦であつたが、まだ元氣であつた。ナバートフは親孝行で、ひまな時にはよく訪ねて行つて、こま／＼した母の生活に目をくばり、彼女の仕事を手傳つた。また幼な友達や百姓の子供達との

交際も續け、彼等と一緒になつて、『犬の足』(百姓と職工の輿紙巻煙草)といふ安煙草をふかしたり、拳闘をしたりした。また如何に彼等が欺かれてゐるか、その欺かれてゐる境地から脱するには何うすればよいか、などいふことを説明して聞かせた。それから革命によつて民衆が何うなるかといふ問題を考へたり、語つたりする時、彼はいつも自分の出身階級たる農民を今日と殆ど同じ状態に於いて想像するのであつたが、然しその時は、地主とか官吏とかいふものはゐなくなつて農民が土地を所有するやうになるのだと考へた。彼の想像に従へば、革命といふものは、民衆生活の根本的形式を一變すべきものではなかつた。——この點に於いて彼の意見は、ノウォドゥウオーロフやその門下のマルケル・コンドラティエフなどと異つてゐた。——彼の説によれば、革命は建物全體を破壊すべきものではなく、たゞこの麗はしい彼の熱愛する堅牢宏壯な舊い建物の内部の造作を置き變、るだけのものであつた。

宗教上の見解に於いても、彼は矢張り典型的農民であつた。形而上學的問題や、世界の原始とか、來世とかいふことに就いては考へた事がなかつた。神は彼にとつては、アラゴ(十九世紀前半期の有名なフランスの物理學者)の考へと同様、一の假定であつて、そんなものゝ必要を感じたことはこれまでに唯の一度も無

かつた。世界は如何にして造られたか、モーゼーの言つたやうにか、それともダーウィンの言つたやうにか、彼としてはそんなことは問題でなかつた。あれ程同志の者が重大視してゐたダーウィン説も、彼にとつては、六日間の天地創造説と同様、思想の玩具に過ぎなかつた。

世界の起原に就いての問題が、彼の興味を唆らなかつたわけは、外でもない。何うしたらこの世界により良く生活し得るかといふ問題が、常に彼の眼前に懸かつてゐたからである。來世を考へたことが無いといふのも、祖先傳來の、そして一般農民に共通な、一の確固たる落ちついた信念を、心の底に藏してゐたからである。即ち動植物の世界に於けるが如く、何物と雖も、終焉を告げるものはない、不斷に形を變へて行くだけのことである。——肥料が穀物となり、穀物が鶏になり、お玉杓子が蛙になり、蟲が蝶になり、團栗が樫の木になると同様、人間も亦死滅することなく、たゞ輪廻して行くだけのことだといふ信念を固く持つてゐたからである。これを信じてゐたからこそ、彼は常に元氣よく、といふよりは寧ろ愉快に、死を正視し、死を齎らす所の苦痛にも、雄々しく打克つてゐたのである。けれどもそれを口に出して言ふのを好まなかつたし、又上手でもなかつた。彼は働くことが好きで、常に實際上の仕事

に従事し、同志の者をも亦かうした實際上の仕事へ驕り込んでゐた。

この黨派に屬するもう一人の、農民出の國事犯人、マルケル・コンドラティエフは、全くこれと傾向を異にしてゐた。彼は十五歳の時労働者の群に入り、漠然たる屈辱の意識を紛らはすため、煙草を燻かしたり、酒を飲んだり出した。彼が初めてこの屈辱を感じたのは、降誕祭に當つて、工場主の細君が降誕祭祝賀會を催し、その席へ彼等丁稚共を連れて來て、彼とその仲間の者には、一カペイカの釣竿と、林檎と、金色に染めた胡桃と、乾無花果とを呉れたのであつたが、自分の子供等には、まるで魔法使のお寶のやうないろ／＼の玩具——あとで聞くと五十ルーブリ以上もする品物——を贈物にした時であつた。彼が三十歳になつた時、その工場へ、一人の有名な革命婦人が女工となつて入り込んで來た。そして、コンドラティエフの人並み勝れた器量を見抜いて、彼に書物や雜誌を與へ、それからだん／＼と彼の地位の慘めなことや、その原因、並にこれが改善策などを説明して聞かした。それによつて、彼の今居るやうな虐待された境遇から自分をも他人をも救ひ出す可能性が、漸くはつきりと分つて來ると、現在の境遇の不當極まるることが、前よりも一層痛切に感じられて來た。と同時に

に、早くこの境遇を脱したいものだと思ふばかりでなく、このやうな惨酷な不正を仕組んで維持してゐる人達を責罰してやりたいといふ熱望も熾ん（さか）びなつた。然しさうするのには知識が必要であると言はれたので、コンドラティエフは熱心に知識を獲得することに努めた。何ういふ具合に社會主義的理想が知識によつて實現されるものであるかそれは不明であつたけれど、現に自分の身を置く境遇の不正を教へて呉れたのは知識であるから、その知識の力で不正を改めることも出来るに違ひないと彼は信じてゐた。のみならず、彼は知識によつて他の人々よりもその人品を高めて來たと思つてゐた。だから酒も煙草も止め、殊に倉庫係にされてからは閑の多くなつたのを幸ひ、一生懸命勉強に耽つた。

一人の革命婦人が彼を導き教へてゐたが、實際どんな知識でもぐんぐん呑み込んで行く彼の消化力と吸収力には驚いてゐた。二ヶ年間で彼は代數、幾何、歴史等に通じ、歴史は特に好きであつたが、また藝術的及び批評的文學、殊に社會主義的文學にも親しんだ。

革命婦人が逮捕せられると同時に、コンドラティエフも、禁止の書籍を持つてゐた科で捕へられ、共に監獄へ打ち込まれ、それからウヨロゲダ縣へ追放された。其處で彼は、ノウドゥウヨロフと知合ひになり、革命に關する書籍を更

に多く讀み、残らず頭に收めて、益々自分の社會主義的見解を深めた。追放が許されてから、彼は勞働者の大ストライキの首領となり、工場を破壊し、支配人を殺したりした。そこで又捕へられて、權利剝奪の上、徒刑に宣告されたのであつた。彼の宗教に對する態度は、現在の經濟組織に對すると同様に、否定的なものであつた。自分がその中に生長して來た宗教の莫迦々々しさを知り、努めて、と言つても初めはびく／＼ものであつたが、後には寧ろ夢中になつて、その羈絆を脱してしまはうと思ひ、まるで先祖代々自分に至るまで騙されてゐたその復讐をしようとするかのやうに、僧侶や教理を毒々しく意地悪く嘲弄して、飽くことを知らなかつた。

彼は禁慾的な性癖を持つてゐて、極僅かなもので満足してゐた。そして子供の時分から勞働しつけて筋肉の發達してゐる誰もがさうであるやうに、どんな骨折仕事でも樂々と、多分に、敏捷にやつてのけた。が、何よりも時間を惜んで、獄中でも宿營所でも勉強を續け、今研究中のマルクスの第一巻を、まるで無二の寶のやうに、自分の袋の中に忍ばせてゐた。同志の者に對しては至つて控へ目に、無愛想に振舞つてゐたが、たゞ一人ノウドゥウヨロフだけに別で、大に心服し、種々な問題に關するその人の議論

は、犯すべからざる眞理として受け容れてゐた。

彼は又、女といふものは、あらゆる重大な仕事の邪魔物であるといふ風に見てゐたので、すべての女性に對しては制し難いほどの侮蔑の念を持つてゐた。けれどもマースロワばかりは可哀さうに思つて、親切にしてゐた。彼女こそは、上流階級に對する下層階級の犠牲の標本であると思つてゐたからである。この理由によつて、彼はネフリュードフが嫌ひであつた。彼とは言葉を交さず、自分から進んで握手しようともせず、ネフリュードフが挨拶してくる時には、たゞ彼に握らせるやうに、いや／＼自分の手を出さずだけであつた。

一三

燂爐はよく焚かれて温かく、煎れたての茶は一々コップや茶碗などに注ぎ分けられ、更に牛乳を加へて薄くし、それに月形の麵麩、出來たての篩ひ粉の麵麩、小麦粉の麵麩、茹卵、バター、それから犢の頭や脚などが出されてあつた。皆の者は、卓子代りの寢臺の一角へにじり寄つて飲んだり、食つたり、喋つたりしてゐた。ランツェーワは箱に腰掛けて、お茶を注いでゐた。皆、彼女を取巻いて、集まつてゐたが、クルイリツォーフだけは、濡れた半外套を

脱ぎ、乾いた綿の着物にくるまつて、自分の場所に寝轉んだまゝ、ネフリュードフと話をしてゐた。

寒いじめ／＼した道中をして來た後で、汚ない亂雑なこの室を掃除し、何も彼も片づけた上で、食事を攝り、熱い茶を飲むと、さすがに苦心地よい嬉しい氣分に浸つた。

その上、壁一重隔てた向うに聞える刑事犯人等の足音や叫聲や罵詈雑言などを耳にすると、自分達の周囲のどんなであるかを思ひ出したかのやうに、一層、伸びやかな感が強くなるのであつた。恰も絶海の孤島にでも居るやうに、これ等の人々は、周圍に行はれてゐる侮蔑や苦惱を脱して、少時なりと自由を味つた喜びに興奮して、大に元氣づいてゐた。彼等はどうなことも語り合つた。が、自分達の境遇と、將來の身の上に就いては何も言はなかつた。のみならず、若い男女間（わけても、この人達のやうに無理に一緒にさせられたやうな場合）に有り勝ちなことではあるが、彼等の間に於いても、互に好きだとか、嫌ひだとか、いろ／＼と纏れ合つた氣脈がついてゐた。彼等の殆どすべてが思ひ思はれてゐる仲であつた。ノウォドゥウォーロフは、美しい、愛嬌のあるグラベツと出來合つてゐた。このグラベツといふのは、まだ年の若い女學生で、革命問題などは餘り考へたこともなく、そんなことには寧ろ無頓着な女であつた。

が、何時しか時代の風潮に捲き込まれ、何を見咎められてか遂々追放の憂目を見るやうになつたのである。捕はれる前から、彼女は男を操ることを以て自分の生活の第一義としてゐたので、裁判中も、入獄中も、また追放中も、同様にこれを續けてゐた。今度の道中では、ノウォドゥウォーロフの心を描へたことを楽しみにしてゐたが、終ひには自分も彼に惚れてしまつた。ウエーラ・エフレモウナ(ボゴドウホ)は根は頗る好色な質でありながら、而も一向に相手を得ないでゐたが、それでもいつかは成功するだらうと期待しながら、或はナバートフに、或はノウォドゥウォーロフに心を寄せてゐた。クルイリツォーフは片思ひながら、マリヤ・パーウロウナに對して戀らしいものを感じてゐた。彼は多くの男が女を愛するやうな愛で彼女を愛してゐたのであるが、この種の愛に對する彼女の態度を知つてゐたので、その切ない思ひを、たゞ單なる一片の友情や、又何かと優しくしてくれる彼女の親切に對する感謝やらに紛らしてゐた。ナバートフとランツェーフとは、互に切つても切れない深い仲になつてゐた。マリヤ・パーウロウナが清淨無垢な處女であつたやうに、このランツェーフも亦夫のある身として貞操の正しい皎潔な女であつた。

十六歳で、まだ女醫學校に在學中に、彼女はベテルブル

グ大學の學生ランツェーフと戀仲になり、彼女が十九歳の時男はまだ大學を卒業しないうちに結婚してしまつた。ところが夫のランツェーフは大學の四年級の時に、學生騒動に捲き込まれて、ベテルブルグを追放され、そして革命黨員になつた。彼女も聽講してゐた醫學の修業を廢し、夫の後を追ひ、同じく革命黨員になつてしまつた。若し彼女の夫が彼女からこの世の中で一番賢い立派な人物と思ひ込まれてゐるやうな人間でなかつたら、彼女は彼を戀しなかつたであらう。隨つてまた結婚もしなかつたであらう。然し最早この世の中で一番賢い立派な人物と見込んで、戀して、結婚した以上、彼女も人生とその目的を、この一番賢い立派な人物が見るやうに見てゐたのは、至つて自然の成行であつた。最初彼は學問することに人生の意義があると思つてゐたので、彼女も同様に人生を解してゐた。また彼が革命黨になつたので、彼女もそれになつたのであつた。現存の制度は、決してこの儘にすべきものでないといふことや、かうした制度と闘つて、個人が自由に發展し得るやうな政治的經濟的生活組織を建設するやうに努めるのが各人の義務であるといふことや、その他さうしたやうなことを彼女は立派に論證することが出来たので、自分が眞に斯く思ひ斯く感じてゐるのだと思ひ込んでゐた。けれどもその實、

彼女はたゞ夫の思ふ事なら、すべて絶対に眞實であると信し、只管夫の心と一致することを希ひ、それによつて自分の道徳的満足を得てゐたに過ぎなかつた。

それで今度、夫や子供（子供は彼女の母が引き取つてくれた）と別れるのは彼女としては辛いことであつた。けれども、それが夫のためでもあり、又夫が奉仕してゐる以上、疑ふ餘地もない眞實である所のその主義のためであつたので、彼女はこの離別を心強く且つ靜かに耐へ忍んだのであつた。彼女の心は常に夫と共にしてゐた。そして自分の夫以外の者は、これまでも誰一人愛したことがなかつたやうに、今とても他の何人をも愛することは出来なかつた。然るにナバートフの眞情を捧ぐる純潔な愛には、流石に心を動かされ、亂されたのであつた。彼は夫の親友であり、また道念の高い堅固な人物であつたので、彼女を妹のやうに遇しようとしたが、その素振には動もするとそれ以上の或る物が閃くので、その時には、兩人とも吃驚するものであつた。が同時に亦それが彼等の今の苦しい生活のせめてもの色彩でもあつた。

こんなわけで、この連中のうちで全く情事に關係のない者としては、たゞマリヤ・パウロウナとコンドラティエフだけぐらゐであつた。

一四

會食とお茶の後で、ネフリードフはいつもの通り、カテューシャと内證話をしようとして期待しながら、クルイリツォーフの傍に腰をかけて、彼と話をしてゐた。とりわけ、ネフリードフが彼に話して聞かせたのは、マカールの彼に對する態度と、それから彼の犯罪物語であつた。クルイリツォーフはネフリードフの顔に、ぎら／＼した眼眸をじつと据ゑて、熱心に聽いてゐた。

「さう／＼と、クルイリツォーフは急に言つた。「僕は時時こんな考に捉はれますよ、僕等は彼等と一緒に並んで歩いてゐます。——彼等は一體何者でせう？ それは僕等が救ひ出さうとしてゐる人々なのです。所が僕等は彼等を知らないばかりか、知らうとも致しません。一方彼等と來ては、もつとひどいのです。彼等は僕等を憎み、僕等を敵視してゐます。何といふ淺ましい話でせう。」

「何も淺ましいことは無いよ。」と、この對話を横聞きしてゐたノウォドゥウォーロフが口を入れた。「民衆は常に權力ばかり崇拜してゐるんだ。彼はひゞの入つたやうな聲で言つた。政府が權力を持つてゐるから、彼等は政府を崇拜し、僕等を憎んでゐるんだ。一朝僕等が權力を執つた時には、

彼等は僕等を崇拜するよ……」

この時壁の向うから、突發した罵り聲や、壁にぶつかる音や、鎖の響や、泣き聲や、喚き聲が聞えて來た。誰か駭られたらしく、『助けて！』といふ大聲が響きわたつた。

「まあ、あれを聞き給へ、まるで野獸ぢやないか。彼等と僕等との間に何の關りがあるんだ？」と、ノウォドゥウォーフは靜かに言つた。

「君は野獸だと言ふが、僕は今ネフリエードフ公爵からかういふ話を聞いたよ。」と、クルイリツォーフは神經質的に云つて、それから、マカールが命を投げ出して同村の友を救はうとした顛末を語つた。「これはもう野獸ではない、英雄的行爲だよ。」

「感傷的だね。」と、ノウォドゥウォーフは皮肉つた。「彼奴等の心持や、その行爲の動機などは、なか／＼僕等に分るものでない。君は今の話を義侠だと見てゐるが、それは今の男に對する君の嫉妬かも知れないよ。」

「まあ、何うしてお前さんは、他人の美點を見ようとしないでせうな。」と、マリヤ・パウロウナは急に躍起となつて口を出した（彼女は誰にでも『お前さん』と言つてゐた）。

「無いものは見られないよ。」

「無いことはありませんよ、一人の男が命がけですることですもの。」

「僕はかう思ふね。」と、ノウォドゥウォーフが言つた。「苟も僕等が何事かをしようとするならば、それがための第一要件は、」（この時、ランプの傍で讀書してゐたコンドラティエフは、書物を伏せて、一心に自分の先生の言葉に耳を傾け始めた）。「飽くまでも空想を避けて、實際のありの儘を見なければならぬ。何から何まで皆民衆のためにやるべきである。けれども彼等から何物をも期待してはならない。民衆は吾々の活動の目的物とはなり得るが、彼等が今日のやうに無氣力である限り、到底吾々の働き仲間たることは出来ないよ。」と、まるで講義でもするやうな調子で言ひ始めた。「随つて、發達の過程すら見えてゐないうちに、彼等から何か期待するのは全く妄想だ。——だからこそ吾々はこの發達の過程に向つて彼等を指導してゐるのだ。」

「何が發達の過程だ！」と、クルイリツォーフは眞赤になつて言ひ出した。「吾々は我儘と横暴とに反抗することを揚言してゐる。然るに君の議論はもうひどい横暴ではないか？」

「何も横暴なことは無いよ。」と、ノウォドゥウォーフは心靜かに答へた。「僕はたゞ民衆の行くべき道を知つてゐると

言ふのだ。そしてこの道を教へてやる事が出来るといふのだ。」

「だが、君の教へる道が正しいといふことを何うして君は信じてゐる？　それが既に横暴ではないか、宗教裁判や大革命の虐殺を生み出したその横暴と同じではないか。彼等だつてその横暴を道理から割出した唯一の正しい道だと思つてゐたんだ。」

「彼等が間違つたといふことは、何も僕が間違つてゐるといふことの證明にはならないよ。そればかりではない、理想主義者の論語と、積極的な經濟學の材料との間には大きな距離が存してゐるからね。」

ノウォドゥウォーロフの聲は室一杯に響いた。彼だけが喋つて、他の者は皆黙りこんでゐた。

「何時でも議論ばかりしてるよ。」と、ちよつと靜まつた時、マリヤ・パーウロウナが言つた。

「ではこのことに就いてのあなた御自身のお考は何うなのですか？」と、ネフリユードフが、マリヤ・パーウロウナに訊いた。

「それは、アナトリイ(ツルイリ)の方が、正しいと思ひますわ。自分達の見解を民衆に強ひることは出来ないんですから。」

「では、カテューシヤ、お前は？」と、にこ／＼しながらネフリユードフは訊いた。彼女が何か間違つたことを言ひ出しはしないかとびく／＼もので、彼女の答を待つた。

「私は、平民は辱しめられてると思ひますわ。」と言つて、彼女はさつと赤くなつた。「もう随分踏みつけにされてると思ひますわ。」

「全くだ、ミハイロウナ、それは全くだ。」と、ナバートフが大きな聲を立てた。「民衆はとも踏みつけにされてゐるんだ。だから踏みつけにされないようにしなければならぬ。そこが僕等の仕事なんだ。」

「ふむ、をかしな革命問題の考察だね。」と言つて、ノウォドゥウォーロフは黙り込んで、腹立たしげに煙草を燻かし出した。

「あの男とは口が利かれないよ。」と低聲で言つて、クルイリツウォーフは黙つて了つた。

「それは口を利かない方がいゝでせう。」と、ネフリユードフが言つた。

一五

ノウォドゥウォーロフは革命家連中から大變尊敬されてゐた。また立派な學者として自らも任じ、聰明な人物として

人からも推されてゐたが、ネフリュードフは、道徳的素質から言つて、彼を水平線以下も以下、餘程下つてゐる革命家の列に加へてゐた。この男の智力——即ちその分子——は比較的大きかつたけれど、その自信——即ちその分母——は量り知られぬ程大きくて、遙かに智力を乗り越してゐた。

彼はシモンソンとはまるで反對な精神生活を營んでゐたのである。シモンソンは、何れかと言へば、思想の働きの行爲を決定し、理性によつて斷行する質の（専ら男性的タイプタイプの）人間であつたが、ノヴォドゥウオーロフは寧ろ感情で決めた目的を達するために思想の働きを借りたり、感情によつて喚び起された行爲を辯證するために思想の働きの頼るといつた側の、専ら女性的タイプタイプの人間であつた。

ノヴォドゥウオーロフの革命的活動の全部は、それが如何に滔々と明確な推論によつて説明された所で、ネフリュードフから見れば、單に權力に對する欲望と野心から出てゐるものに過ぎなかつた。彼は他人の思想に同化して、それをそのまま受け賣りする才能があつたので、かういふ才能の重く評價される修學時代では、學生や教師の間に（中學、大學、研究時代共）持て囃されて、彼もそれに満足してゐた。が、これは最初のこととて、やがて學位證を手に入れ、學問も止め、従つて持て囃されることもなくなると急に——そ

れはノヴォドゥウオーロフ嫌ひのクルイツォーフがネフリュードフに話したところであるが——今度は、新しい別な方面で持て囃されるために、自分の意見を一變し、穩健な自由主義者から赤色の國民自由黨員になつてしまつた。幸か不幸か、彼の性格のうちには、懷疑と動搖とを生み出すやうな、道徳的乃至藝術的な素質がなかつたので、革命界に於いて一躍して彼の自負心を満足せしめるやうな一黨の領袖となることが出來た。そればかりでなく、一度方向を選択してしまふと、彼はもう決して迷つたり、惑つたりすることはなかつた。で、彼はこれまで間違つたことをしたことはないと思つてゐた。彼の目から見ると、萬事は皆極めて單純明白で、少しの疑はしい點もなかつた。又、一つには彼の視野が狭く且つ偏つてゐたため、萬事が極めて單純明白でもあつた。たゞ主要なことは、彼自ら言つてゐた通り、論理的でなければならぬといふ一事であつた。彼の自信の強いことと言つたら、それは、人を擊退するか、さもなければ屈服させるか、どつちかであつた。ところが、彼の活動は極若い人達の間にはばかり行はれてゐて、その多くの者が彼の途方もない自信を、深慮であり睿智であると買ひ被り、一も二もなく服従してゐたものだから、彼は革命家連中の間にも、一大雄飛することが出來たのであつ

た。彼の活動とは、叛亂を起し、それによつて政權を奪取し、國民大會を召集するにあつた。大會では彼の造つた政綱が提出されなければならなかつた。そしてその政綱こそはすべての問題を擲み盡してゐるから、否でも應でも實行されるのだと頭から信じ切つてゐた。

同志の者は彼の勇猛果敢に尊敬を拂つてゐた。けれど彼を愛してはゐなかつた。彼も亦誰をも愛さなかつた。そしてすべての有名な人々を自分の競争者と見做してゐた。出来ることなら、男の親猿が若い子猿をあしらふやうに彼等をあしらひたかつたのである。自分は人の智慧も才能も悉く奪ひ取つて、人には自分の技倆を發揮する邪魔をされたくなかつたのである。彼が厚意を以て遇した人々は、たゞ自分に頭を下げてくる者だけであつた。今現に旅をしながらも、彼の説に感化された労働者のコンドラティエフや、彼に惚れ込んでゐるウエーラ・エフレモウナや、可愛らしいセラベツなどには善くしてゐた。主義としては、彼は婦人問題の味方であつたけれど、内心ではすべての女を愚かな取るに足らないものと考へてゐた。然し自分が今感傷的に戀してゐるセラベツのやうな女は例外であつて、これは非凡な婦人と見做してゐた。しかもさうした婦人の長所は、自分一人にしか分らないものと思つてゐた。

两性間の問題についても、彼の目から見れば、他のすべての問題と同じく、極めて單純明白なものであつて、自由戀愛を承認することにより、全く解決されるものと考へてゐた。

彼は一人の名義上の妻の外に、尙ほ本當の妻を持つてゐたが、それも二人の間に眞の愛が無くなつたといふので離別し、今度はセラベツと新たに自由結婚をしようと企んでゐた。

彼はネフリエードフを輕蔑してゐた。といふのは、彼の口調を藉りて言へば、マースロワと「莫迦な眞似をしてゐる」からでもあるが、殊にネフリエードフが現存社會制度の缺陷やその改善方法などに就いて、彼(ウオードフ)の考へとびつたり一致した考へ方をせず、自己流に、公爵流に、即ち阿呆流に考へるからであつた。ネフリエードフは、ノウエドゥウオエーロフの自分に對するかうした態度を知つてゐた。そして、いつも旅行には誰にでも親切な氣持で對されるのに、今度はかりは、この男に竹籠返しをしないでは居られないことを感じた。そしてこの男に對する強い「反感を、何うにも壓伏することが出来ないのを、情なく思ふのであつた。

一六

隣り合つた監房では役人の聲がしてゐた。何も彼もひつそりしてふと、續いて、一人の軍曹が二人の護送兵を伴れて入つて来た。これは點呼のためであつた。軍曹は一人一人指さして皆の者を數へ、ネフリュードフの番になると、狎れ／＼しく言ひかけた。

「點呼後は規則ですから、お歸りを願はねばなりません。」ネフリュードフは、それが何を意味する言葉であるかを知つてゐるので、すぐその傍へ行つて、用意して置いた三ループリを握らせた。

「あ、さうですか。さういふことでしたら、もう少しの間構ひません。」

その軍曹が出て行かうとした時、他の一人の下士が入つて来た。その後から背の高い、瘦せこけた、片眼の潰れた髯の疎らな囚人がついて来た。

「俺は娘のことで來やしたが、みやすかな？」

「あゝ、父ちゃんか。」と、俄かに甲走つた子供のやうな聲がして、ランツェーワの後ろから、亞麻色の頭が持ち上つた。ランツェーワはマリヤ・パーウロウナやカテューシヤと一緒に、彼女の恵んでやつた下袴を直して、女の子に着物を縫

つてやるどころであつた。

「おゝ俺だよ、娘や、俺だ。」と、ブヅフキンは優しく言つた。

「この子は機嫌よくしてますよ。」と、マリヤ・パーウロウナが、ブヅフキンの傷のある顔を氣の毒さうに見やりながら云つた。「私達と一緒に置いておきなさい。」

「小母ちゃん達があたいに新しいお衣服を縫つてくれるのよ。」女の兒は衣服を縫つてゐるランツェーワを父に指さして見せながら言つた、「綺麗な、赤いお衣服よ。」彼女は喋りつゞけた。

「小母ちゃん達と一緒に寝んねするの？」と、ランツェーワが、女の兒をいたはりながら訊いた。

「あゝ、寝んねしたいわ。父ちゃんも。」

ランツェーワは思はずにつこりした。

「父ちゃんは駄目。」と彼女が言つた。「これですもの、ここへ置いておきなさいよ。」と、父親に言葉をかけた。

「さうしろ、預けて置くがい。」と、入口に立止まつてゐた軍曹が言つた。そして他の一人の下士と一緒に出て行つた。

護送の兵士等が出て行つたと思ふと、ナバートフはブヅフキンの傍へ寄つて、その肩を叩いて言つた。

「おい爺さん、君の方のカルマーノフといふ者が換へ玉を使つていふ話だが、本當かい？」

お人好しの、柔和なブゾフキンの顔は俄かに悲しげになり、その兩眼は何だか暈でもかゝつたやうであつた。

「そねえなこたア聞きましねえよ。まさかそねえなことが。」と彼は言つた。そして眼を曇らしたまゝで、「そんなやアニュータや、小母ちゃん達に可愛がつて貰ふがえゝだ。」と附け加へて、急いで出て行つた。

「それは確かなことだ。もう事實替へてゐるんだ。」と、ナバートフが言つた。「そこであなたは何うなさいます？」

「次の町へ行つたら、役人に話させよう。私は兩方の顔も知つてますから。」と、ネフリュードフは答へた。

皆の者は、再び議論の持ち上るのを怖れでもするやうに黙つてゐた。

この時迄ずつと、兩手を枕にして、黙つて寢床の一隅に横たはつてゐたシモンソンが、急に思ひ立つて身を起し、坐つてゐる人々を注意深く避けながら、ネフリュードフの傍へ近寄つた。

「一寸お耳を貸して頂けませんか？」

「さアどうぞ。」と言つて、ネフリュードフも起ち上り、彼の後について行つた。

起ち上つたネフリュードフをちらりと見たはずみに、思はず彼の視線とかち合つて、カテテューシヤは顔を赤らめ、さも氣が氣でないといふやうに頭を振つた。

「實は外でもありませんが。」と、ネフリュードフと一緒に廊下へ出ると、シモンソンは切り出した。廊下には刑事囚のがや／＼いふ音や、高い怒鳴り聲などが、特によく聞えてゐた。ネフリュードフは顔を曇めた。けれどシモンソンはそんな事に頓着しない様子であつた。

「私はあなたとカテテューシヤとの間柄をよく承知してゐます。」と、彼はその善良な眼眸でネフリュードフの顔をじつと眞正面に見ながら言ひ出した。「ですから一應お話するのが義務だと思ひまして——」と話し續けたが、この時すぐ扉口の處で二つの聲が何か争ひながら一度に叫び出したので、言葉を切らねばならなかつた。

「この唐變木め、俺のぢやねえと言つてるぢやねえか！」と、一つの聲が喚いた。

「何をツ、畜生奴、押し潰されねえように氣をつけろ！」と、もう一人が腹れ聲で叫んだ。

この時、マリヤ・パウロウナが廊下へ出て來た。

「まア、こんな處で立話をしてる者がありませんか。」と、彼女が言つた。「こちらへお通りなさいよ、ウエーラ一人しか

「みませんから。」と、彼女は先に立つて、隣り合つた扉口から小さな室へ入つた。そこは獨房らしかつたが、今は女の囚人犯人の使用に當がはれてゐた。寢床の上には、ウエーラ・エフレモウナが、頭からすつぽり身をくるんで横になつてゐた。

「ウエーラは頭痛がするつて寢てゐますからお話なんか聞きはしませんよ。私は今出て行きます。」と、マリヤ・パウロウナが言つた。

「行かずに、此處にゐて下さい。」と、シモンソンが言つた。

「何も秘密なことではありません、殊にあなたに對しては猶更です。」

「さう、では——」とマリヤ・パウロウナは言つた。そして子供のやうに體をもぢ／＼揺つて、寢床のやゝ奥の方に腰を据ゑ、何處か遠い方をその美しい羊のやうな眼で眺めながら、さア承はりませうといふやうに身構へした。

「お話といふのは、實は——」と、シモンソンは繰り返した。「あなたと、カテューシャとの間柄を存してゐますから、私とあの女との間柄もあなたにお話して置かなければならぬと思ひまして。」

「と、仰しやるのは？」と、シモンソンの話振りの如何に

も單純な、如何にも率直なのに、思はず氣を奪られながら、ネフリユードフは問うた。

「實は、私はカテューシャと結婚がしたいのです……」

「まア驚いた！」と、マリヤ・パウロウナは、シモンソンを見詰めながら言つた。

「そして私は、あの女に結婚を申込むことに決めました。」シモンソンはかう話し續けた。

「私には何うにもなりません。これは彼女の一存にあることです。」と、ネフリユードフが言つた。

「さうです。然しあの女はあなたに伺はないでこの問題を決めることが出来ません。」

「何故でせう？」

「何故と言つて、あなたとあの女との關係がきつぱり片づかないうちにはあの女も心を定めることは出来ませんから。」「私の方では、その事はきつぱりと、解決されてゐるので、私の望むところは、私の義務と考へることを實行して、彼女の境遇を樂にしてやらうといふだけのことです。然しどんな場合でも、彼女を束縛しようなどとは思つてゐません。」

「さうですか。然しあの女はあなたの犠牲的行爲を欲してゐませんよ。」

「何も犠牲的行爲といふほどのものぢやありません。」

「ですが、今度のあの女の決心は動かないものと思ひます。」

「それなら、何も改めて私にお話しなさる必要はないでせうか？」と、ネフリュードフが言つた。

「あの女は、自分と同じやうに、あなたにもこの事を承認して頂きたいと願つてゐるのです。」

「と仰しやるのは、私が自分の義務と心得てゐることをしてはならないといふのでせうが、何うしてそれを承認することが出来ますか。私の申上げられることは、私は自由でないけれど、彼女は何をしようとする自由であるといふことだけですよ。」

シモンソンは黙つて考へ込んだ。

「さうですか。私はその通りあの女に話させよう。ですが私があゝの女の容色に迷つたといふ風にお取り下さらないやうに願ひます。」と、彼はまた續けた。「私はあゝの女を世の中の苦勞を爲抜いた、稀に見る立派な人間として愛してゐるのです。私は何の要求もありません。たゞあゝの女を助けて樂な境遇にしてやりたいと思ふばかりです……」

シモンソンの聲の震へてゐるのを聞いて、ネフリュードフは驚いた。

「あの女の境遇を樂にしてやりたいと思つてゐるばかりです。」とシモンソンは語り續けた。「あの女があなたのお世話になるのを好まないのなら、私が代つて面倒を見てやりませう。若しあゝの女が承知してくれさへすれば、あゝの女の收監される處へ私も送つて貰ひませう。四年と云へば長いことではありません。私があゝの女の傍に居られたら、幾らかあゝの女の運命を軽くして……」又も彼は、興奮のために言ひ淀んでしまつた。

「私としてはかう申上げるより外はありません。」と、ネフリュードフは言つた。「彼女があなたのやうな保護者を得たことを、衷心から喜びます……」

「そのお言葉を私は聞きたかつたのです。」と、シモンソンは更に言葉をついだ。「あゝの女を愛し、あゝの女の幸福を望まるとあなたとしては、私とあゝの女との結婚を宜いことだとお考へになるに違ひありません。私はその處を伺ひたかつたのです。」

「え、勿論宜いことです。」と、ネフリュードフははつきりと言つた。

「すべてあゝの女次第ですが、私はたゞ、この苦しみ抜いた魂にひと安心させてやりたいばかりです。」と、シモンソンは、こんな氣むづかしい容貌の人間には珍らしい、子供の

やうな可愛らしさを浮べて、ネフリュードフを眺めながら言つた。

シモンソンは起つて、ネフリュードフの手を執り、顔を彼の方へ差しのべながら、恥づかしさうに、つこりして、彼に接吻した。

「では、その通りに、私はその通りに、あの女に話させよう。」と彼は言つて、出て行つた。

一七

「あなたは何うお思ひになつて？」と、マリヤ・パーウロウナは言つた。「あれは戀よ。すつかり戀してしまつたんですわ。あのシモンソンさんがあんな莫迦々々しい子供みたいな戀をしようなんて、とても思へませんでしたわ。奇抜ですわね。だけど考へると、情ない事ですわね。」と、言葉をついで、彼女はほつと溜息をついた。

「ですが彼女は何うでせうか？ カテューシヤの方は？ 彼女はこれを何う考へると思ひますか？」と、ネフリュードフは訊いた。

「あの女ですか？」と、マリヤ・パーウロウナは、成るべく確かな返事をしようと思ふものゝ如く暫く言葉を切つた。

「あの女ですか？ さうね、あの女は御承知の通り、あんな

職業をして来たにも似合はず、生れつき堅い質の女ですわ……、本當に美しい心持の女ですわ……、あの女はあなたを愛してゐます——それは——本當に愛してゐますのよ。そしてあなたに御迷惑をかけないように——假令自分の意志には反しても、あなたのために計るのを幸福だと思つてゐます。ですから、あなたと結婚することは、あの女としては以前にもまして怖ろしい墮落なのですわ、あの女は決してこの事だけは承知しないでせう。それに、矢張りあなたがゐらつしやると、あの女は落着いてゐられないでせうから。」

「では、私は何うしたら宜いのでせう。消えて了はなければならぬのですか？」と、ネフリュードフが言つた。

マリヤ・パーウロウナは可愛らしい子供のやうな微笑を浮べた。

「さうですわ。或る程度まではね。」

「何うしたら或る程度まで消えて了はれますか？」

「それはまあ冗談ですけど、然し私がああ女のことであなたにお話ししようと思ひますのは他でもありません。あの女はあの男の途方もない戀を見て（尤もあの男はあの女にまだ何とも打明けてはゐませんが）、もうあつけにとられて氣味悪がつてゐるらしいんですよ。御存じの通り、私はこん

な事に就いてはかれこれ言ふ柄でもありませんが、然しあの男の戀はどんな面を冠つてゐたつて、矢張り世間並の男の感情から出てるとしか思はれませんよ。口でこそ自分を力づける戀だとか、プラトニックな戀だとか云つてますけれど、矢張りその底には、よしんばそれが例外的な戀にした所で、不純なものが屹度潜んでゐると思ひますわ……。ノウォドゥワーロフとリュートボチカとの間柄も同じことですわ。」

マリヤ・パーウロウナは得意な主題に言ひ及んで、いつか肝腎な問題から外れてしまつた。

「所で、私は一體何うすればよいのでせう？」と、ネフリュードフが訊いた。

「まああの女へすつかりお話しなさる方がよいと思ひますわ。何事もはつきりして置くに越したことはありませんからね。お話しなさいな。私があの子を呼んで来て上げますわ。いかゞですか？」と、マリヤ・パーウロウナが言つた。

「では、お願ひします。」と、ネフリュードフが言つた。そこで彼女は出て行つた。

ネフリュードフは、ひとり小さな室にとり残されると、何とも言ひやうのない氣持に囚はれた。ウエーラ・エフレモウナの靜かな呼吸は、時折り呻き聲に破られ勝ちであつた。また二つの扉口の彼方に響く刑事囚のどよめきは絶間なく

聞えてゐた。

シモンソンに言はれたことは、實はネフリュードフに取つて、時々氣が弱くなつた折には苦しい怖ろしいものゝやうに思はれてゐたその重荷から彼を免れしめてくれるものであつた。が、かうなつて見ると、それは又不愉快なばかりでなく、大きな苦痛でもあつた。この氣持のうちには、シモンソンの申出によつて、自分の義理を立て貰かうとする特殊な意地が、もう何にもならないものになつて了ひ、人の眼にも自分の眼にも、その價値が小さくされたといふ不満も含まれてゐた。彼女と何の因縁もない人間が、しかもあのやうな立派な人が、彼女と運命を共にしようといふことになれば、彼の犠牲はさまで大したものではなくなるのだ。又、その間には、單なる嫉妬の情も交つてゐたかも知れない。彼は自分に對する彼女の愛にすつかり狎れ切つてゐたので、彼女が他の男を愛することを許すことが出来なかつた。尙ほ又其處には、彼女が苦役を果すまでは附添人として生活しようといふ、一旦彼の打立てた計畫の崩壞もあつた。彼女が若しシモンソンと結婚するならば、自分がその傍に居る必要はなくなり、自分としては何か別に新しく生きる計畫を立てねばならないことになるのだ。かうして彼がまだ自分の様々な感じを整理し切らないうちに、

開かれた扉口から刑事囚達の烈しいどよめきの音が流れ込んで来て（今日は何うも彼等の様子が變つてゐた）、それと同時に、その小さい室へカテューシャが入つて来た。

彼女はつか／＼とネフリュードフの傍へ寄つて、

「マリヤ・パーウロウナさんが呼びに來ましたので。」と言つた。

「あゝ、一寸話したいことがあるので。まあお掛け。シモンソンから今話があつたんだが。」

彼女は腰を下し、膝の上に兩手を結び、ひどく落ちついてゐるやうであつたが、ネフリュードフがシモンソンの名を口にするると、眞赤に顔を染めた。

「あの人はどんな事をお話しました？」と、彼女が訊ねた。「お前と結婚したいと言つてゐたよ。」

彼女は俄かに顔を曇めて、困惑の色を表はしたが、一言も口には出さずに、たゞ眼を伏せた。

「あの人はその事で僕の同意、いや助言を求めに來たんだが、僕は何も彼もお前次第のことで、お前が決める問題だと言つてやつたよ。」

「まあ、飛んでもない！ それは又何故でせう？」と言ひ放つて、彼女は例の不思議に何時でもネフリュードフを強く牽きつける斜視の眼で、彼の眼を見成つた。數秒の間、二人

は黙つて互に眼と眼を見合つてゐたが、この眼眸こそは、どちらに取つても口よりは多く物を云つてゐた。

「お前が兎に角決めなければならぬ問題だからね。」と、ネフリュードフは繰返した。

「今更何を決めるのですか？」と、彼女は言つた。「何も彼も、もう疾うから決つてゐるんですわ。」

「いや、さうでない。シモンソンの申込を承認するかしないか、それを決めなければならぬよ。」と、ネフリュードフが言つた。

「私のやうな、こんな罪深い者が人の妻などになれるものですか。この上シモンソンさんまで不仕合せにすることが、何うして私に出來ませう？」彼女はかう言つて顔を曇めた。

「だが若し、赦免になつたら？」と、ネフリュードフは言つた。

「あゝ、そんなこと、もう仰しやらないで下さい。私もう何も申上げることはありません。」と言つて、彼女は起ち上つた。そしてその室から出て行つてしまつた。

一八

ネフリュードフはカテューシャに續いて男囚の部屋に戻つ

て見ると、そこでは一同が激昂してゐた。其處らちうを歩き廻つて、誰とも附合つて、何でもよく知つてゐるナバートフが、皆をびつくりさせるやうな情報を齎したところであつた。それは革命家ベトリンが或る壁に書きつけて置いた注意書を、彼が發見したのであつた。ベトリンは徒刑を宣告されて、もう疾うにカーラへ行つてゐるものと、誰も思つてゐたのに、その書附で見ると、彼はついこの頃、たつた一人刑事囚に交つて、この道筋を通過したといふことが分つたのである。

『八月十七日』と、その注意書に記してあつた。『余は唯一人、刑事囚徒の一行と共に護送せらる。ネウエーロフは余と共にありしが、カザンの癡狂院にて益死す。余は身心共に健全なり。諸君の幸福を祈る。』一同はペトリンの境遇と、ネウエーロフの自殺の原因を論議してゐた。たゞクルイリツォーフだけはじつと黙り込んで、ぎら／＼する眼で前を見詰めてゐた。

「良人の話では、ネウエーロフはまだペトロパウロフスク(要塞)に居る時分から、不思議な幻影に囚はれてゐたつてことですね。」と、ランツエーワが言つた。

「さうだ、あの男は詩人で、夢想家だつた。あゝいふ性質の人は獨房には堪へられないよ。」と、ノウエドゥォーロフが

言つた。「僕などは獨房に入れられた時は、決して空想などはせずに、極めて系統的にきまりよくやつてゐたが、それでよく堪へることが出来たんだ。」

「そりやア堪へられんことはないよ。僕などは監禁されると、わけもなく嬉しがつてゐたものだ。」と、ナバートフは一座の陰鬱さを拂はうとするものゝ如く、元氣のよい聲でかう言つた。「娑婆にゐると、捕まりやしないか、他人に迷惑をかけやしないか、事をやり損じはしないか、と何も彼も心配になるが、捕まつて監禁されてしまふと、すつかり責任がなくなつて、始めてゆつくり休息が出来るといふものだ。まア／＼安心して煙草でも喫んでればいゝのだ。」

「お前さんはあの人をよく知つてゐたの？」と、マリヤ・パウロウナは、クルイリツォーフの俄かに變つて來たとげとげしい顔を氣遣はしげに見成りながら訊いた。

「ネウエーロフが果して空想家だらうか？」と、突然言ひ出したが、クルイリツォーフの呼吸の喘ぎ方と言つたら、まるで長い間叫ぶか歌つたかした後のやうであつた。「ネウエーロフは、僕等の門番の言ひ草ぢやないが、この地球には滅多に出ない男だつた。さうだ……彼は全身水晶で出来てるやうな人間だつた。腹の底まで透き徹つてゐたよ。さうだ……彼は嘘がつけななし、蔭日向がなかつた。單に皮膚

が薄いばかりぢやなく、まるで皮膚を剥ぎ取られたやうにその神経が全部露出しになつてゐた。さうだ……複雑な性質の、豊かな天分を持つた男で、到底ありふれた……いやこんなことを言つたつて始まらない！」と、彼は言葉を切つた。「吾々の論議するのは」と、また腹立たしげに顔を顰めて言ひ出した。「先づ民衆を教育し、その次に生活様式を變更する方がよいか、それとも先づ生活様式を變更して、後から闘つて行く方がよいか、つまり、温和な宣傳で行くか、恐怖主義で行くかといふやうな戦闘方法のことばかり吾々は論議してゐる。ところが彼等(政府當局者)は論議などしない。彼等は自分の仕事をどし／＼進めて行く。そして何十、何百といふ人間が死なうが死ぬまいが彼等としては平氣なのだ。どんな人間が亡びようと構はない。構はないどころか、寧ろ立派な人間が亡びるやうに願つてゐるのだ。さうだ、ゲルツェンは、十二月黨員が根絶された時社會の水準が低下したと言つたが、本當に低下せずには居れまいて。それからゲルツェン自身とその一派の者が亡ばされ、今またネウエーロフも……」

「だが、全部がやられるやうなことはないさ。」と、例の元氣の好い聲でナバートフが言つた。「何時でも根分けするだけは残つて行くよ。」

「いや、吾々が彼等(政府當局)を可哀さうだなどと思つたら、一人残らずやられてしまふよ。」と、聲を高めて、自分の説を押し通さうとしながら、クルイリツォーフが言つた。「煙草を一本くれ給へ。」

「あら、アナトリイさん、煙草はお前さんによくはないわよ。」と、マリヤ・パウロウナが言つた。「煙草だけは喫まないで下さい。」

「いよ、抛つといってくれ。」と、腹立たしく言つて、彼は火を點けた。と思ふと直ぐ咳を始めて、下度嘔吐す時のやうに、胸を塞らした。でも漸く痰を出してから、また言ひ續けた。

「吾々のやつて来たことは外的を外れてゐた。全く的を外れてゐたんだ。議論の必要はないから、今後は皆一致協力して……(政府) 双等をやつゝけるのだ。」

「だが、双等だつて人間ですから。」と、ネフリュードフが言つた。

「いや、双等は人間ぢやない。今双等のして居るやうなことをし得る者は、人間ぢやない。話に聞けば、爆彈や氣球が發明されたといふことだから、幸ひその氣球に乗つて空へ上り、爆彈を浴せかけて、南京蟲みたいに殲滅してやるんだ……さうだ、何故といふに……。」と云ひかけた。け

れどその時彼は眞赤になつて、俄かに、前よりもひどく咳をし始めた。さうしてゐるうちに、彼の口の中から血が溢れ出した。

ナバーロフは雪を取りに駆け出した。マリヤ・パーウロウナは藪草の水を取り出して、彼にすゝめた。が、彼は眼を閉ぢ、その瘦せ細つた白い手で彼女を押しつけて、重苦しく、せか／＼と呼吸をしてゐた。やがて雪や冷水で幾分落ちつかせてから、寢床へ運んで、寝かしてやつた。そこでネフリードフも皆の者に別れを告げ、彼を迎へに来て、もう長いこと待つてゐた一人の下士と一緒に、出口の方へ歩いて行つた。

刑事囚達は今はもう静まつてしまつて、大抵は眠つてゐた。監房の中では、寢床の上にも、寢床の下にも、その間の通路にも、大勢寝てゐたが、それでも皆収まり切れずに、その一部は廊下の床板の上に寝轉んで、袋を枕にしたり、濕っぽい獄衣を敷つたりしてゐた。

監房の扉口からも、また廊下からも、鮮や呻きや寢言などが聞えた。到るところ獄衣をかぶつた人間の塊が、重なり合つてゐた。たゞ獨身者の刑事囚部屋の数人だけが眠らないでゐた。彼等は隅の方に蠟燭の火を圍んで坐つてゐたが、兵卒の姿を見ると、直ぐその火を消した。もう一人廊

下のランプの下に起きてゐる老人があつた。彼は裸のまま坐り込んで、ルバーシユカの虱を取つてゐた。この邊の臭いむさぐるしさに比べれば、國事犯人の部屋の不潔な空氣も、まだ／＼きれいなやうに思はれた。燻つたランプも、霧の中のやうに、ぼんやりと輝き、呼吸するのも苦しかつた。寝てゐる人を踏まないようにまた足を踏かせないやうに廊下を抜けて行くためには、豫め空いてゐる處を見定めて、其處へ片足を入れ、次の足を移すには又他の空いてゐる處を捜さねばならなかつた。見受けるところ、廊下にも寢場所が見つからなかつたのであらう、三人の囚徒は廊下の端れの臭い汚物が筋を成して流れてゐる桶のすぐ傍に寝てゐた。その中の一人は、ネフリードフが道中で折々見掛けたことのある年老つた白痴であつた。他の一人の十歳位の少年は、二人の囚人の間に挟まつて、片手を頬の下にさし入れ、一人の囚人の足を枕に寝てゐた。

門を出ると、ネフリードフは立止まつた。そして一杯に胸を擴げて、長い間貪るやうに、凍つた空氣を呼吸した。

一九

戶外は星空であつた。凍つてついて、たゞ處々減込む泥濘の道を踏んで、自分の宿へ戻つて來ると、ネフリードフ

は眞暗な窓をこつ／＼と叩いた。肩幅の廣い下男が素足で出て来て、扉を開けて玄關へ通した。玄關から右手にあたる黒い小屋の中から取者の荒々しい高駈が聞えてゐた。扉の前方にあたる庭先では、多くの馬の燕麥を嚼む音が聞えてゐた。左手が廣い座敷への通り口であつた。廣い座敷は苦蓬と汗の臭氣が漂ひ、衝立の彼方からは誰かの力強い肺臓の調子よく吸ひ込む駈聲が聞え、聖像の前では赤硝子の燈明が點つてゐた。ネフリュードフは着物を脱ぎ、膠布製の長椅子の上へ、格子縞の毛布を敷き、皮の枕を置いて横になつた。そして今日一日中に見たり聞いたりしたことすべてを胸の中で思ひ返して見た。彼が今日見て来たものの中で、一番怖ろしく思はれたのは、一囚徒の足を枕にして、汚物桶から流れ出してゐる液體の上に眠つてゐた少年であつた。

この晩、シモンソンやカテューシャと話した事は意外でもあり、重大でもあつたけれど、彼はこの事件にはさまでこだはつてゐなかつた。彼とこの事件との關係は餘りにも複雑であり、またそれと同時に漠然としてゐたので、この事に就いては成るべく考へまいとした。が、あのむさぐるしい空氣の中に喘ぎながら、臭い桶から流れ出す液體の上に轉がつてゐる、あの不憫な人々の記憶は、一層はつきりして

来た。わけても無邪氣な顔をして囚人の足の上に眠つてゐた少年の姿は、何うしても彼の頭を去らなかつた。

何處か遠い處で、ある一部の人々が他の人々を苦しめ、あらゆる邪道に導き、非人間的な凌辱や虐待を加へてゐるといふことを間接に聞くのと、現在三ヶ月の間斷えず一部の人が他の人々に加へる凌辱と虐待とを直接目撃するのは、その間に非常な相違があつた。ネフリュードフはこのことを全く體驗したのである。彼は三ヶ月の間一再ならず自ら問うて見た。「他の人々が氣づかずにゐるものを見てゐる自分が狂者なのか、それとも自分が氣づいてゐるやうなことを爲してゐる奴等が狂者なのか？」然し彼等は（さうした人々は實に多かつた）、實に驚くやうな、ぞつとするやうなことを平氣で行ひながら、これはかうしなければならぬといふばかりではなく、自分達の爲す所は極めて重要且つ有益なことであるといふ動かし難い信念を以て行つてゐるのである。——それを見ると、是等すべての人々を狂者と認めてしまふ譯には行かなかつた。が、それなら自分を狂者と見做すべきかといふに、これも出来ないことであつた。何故といふに、彼は自分の考のはつきりしてゐることをよく意識してゐたからである。それで彼はいつも迷つてゐたのであつた。

この三ヶ月間ネフリエドフの目撃したことは大體次のやうに考へられるのであつた。凡そ自由に生活してゐる人のうちから、裁判と行政とによつて選り分けられて捕まゐるものは、最も神經過敏で、熱烈で、激し易い、天分の豊かな、強い、そして比較的狡猾でない、比較的用心深くない人々であつて、これ等の人は捕はれずに残つてゐる人々に比し、社會に取つて、より多く罪あるわけでもなく、より多く危険性を帯びてゐるわけでもない。それなのに、これ等の人は監獄や、宿營所や、苦役に押し込められて何ヶ月も又は何ヶ年も、全く遊惰と、物質的安定のうちに扶持されて、自然と、家庭と、勞働からは遠ざけられ、物質的及び精神的生活のあらゆる要件から隔離されてゐる。これが第一の印象であつた。第二には、これ等の人は、さうした制度の中で、鎖、剃髮、獄衣といふやうな、ありとあらゆる無用な侮辱を蒙つて、——弱い人間が立派な生活を送つて行くのに最も大切な要素となつてゐる廉恥心とか、人格の意識とか、輿論を重んずる心とか、さういふものを全く剝奪されてゐる。第三に、これ等の人は不斷に生命を脅されてゐるので（——と言つても、日射病や、溺死、燒死、又は監獄にあり勝ちな傳染病や、疲勞や、毆打のやうな特別な場合は別として）、餘程善良な、徳義心の高い人でも、

自己防衛の感情から、殘忍極まる行爲をなし、又他人のさうした行爲を許すやうになるのであつた。第四に、是等の人は無理矢理に廢頓した生活（わけでもさうした制度）へ押し込まれ、無賴漢や人殺しや悪徒など、接觸しなければならぬので、これ迄の遺口（せうぐち）だけではまだすつかり墮落したとは言はれないこれ等の人も、丁度練粉が酵母のために發酵させられるやうに對手のために感化されてしまふのであつた。最後に第五は、かうした影響を受けてゐるすべての人々は、最も慘酷な手段によつて——といふのは他でもない。彼等自身の上に加へられる、ありと有らゆる非道な行爲によつて——例へば、小兒や婦人や老人を苦しめたり、笞や棒で打つたり叩いたり、脱走者を生きながらでも、殺したまゝでも、兎に角それを突き出す者には褒美を與へたり、夫婦を引き離して、他人の女房と他人の亭主とに共同生活をさせたり、又は射殺したり絞殺したりするやうな實に慘酷極まる手段によつて——次の事實を見せつけられてゐるのである。それはつまり、ありとあらゆる暴虐、殘忍、無道も、それが政府のために有利な場合には、密に禁じられないばかりか、政府によつて公然許されてゐるといふ事實である。だから束縛と困苦と缺乏との中に在る人達が、自分等には猶更さういふ行爲が許さるべきだと思ふのは當

り前である。

すべてこれ等の制度は他の如何なる事情の下に於いても爲^し遂^げることが出来ない程、極度に濃厚にされた墮落と悪行を製作するために、そして後からこの墮落と悪行とを全民衆の間に最も大規模に傳播させるために、わざ／＼考案されたやうなものであつた。『これではまるで、どうすれば、最もよく、最も確實に、なるべく多くの民衆を墮落させる得るか、といふ問題が課せられてゐるやうなものだ。』と、ネフリードフは、獄内や宿營所で行はれる種々なことに氣を配^りながら考へた。年々何十萬といふ人間が墮落の頂點まで持つて行かれ、しかもそれが完全に墮落し終ると、その獄中で完成した墮落を一般民衆の間へ撒き散らすために、放免されるのである。

テューメン、エカテリンブルグ、トムスタ等の監獄や、驛々の宿營所などで、社會が自ら作つたこの風俗壞亂の目的が、如何に首尾よく達成されてゐるかを、ネフリードフは直接に目撃して來た。平凡普通の人々——ロシヤ的、農民的、基督教的道義の要求を持つてゐる人々——が、それ等の心掛を失つて、何時の間にか新しい監獄氣質になり、利益にさへなるなら、人間の人格に對してどんな脅威しようかと、暴虐を加へようと、或は全くそれを蹂躪しようとは

うにでも理窟は立つと考へるやうになるのは止むを得ないことだつた。一旦監獄生活をして來た人々は、自分の身に加へられた所から判斷して、人間尊重とか人間愛といふやうなすべての道德律は、教會の教師と道學者等の唱ふる所ではあるが、實際上では疾うに廢れて了つてゐるから、何も自分達ばかり之を守るには及ばないと、腹の底まで呑み込んでゐた。ネフリードフは之を自分の知れる限りの囚徒に見た。——フォードロフにせよ、マカールにせよ、また宿營所生活を二ヶ月したばかりで、早くも道念を失つた議論をして、ネフリードフを驚かしたタラスにせよ、皆さうであつた。この旅の途中で、ネフリードフの聞き込んだ話であるが、或る浮浪人共は密林に逃げ込む時、仲間の者を攫つて行き、あとから之を殺してその肉を食つたといふ位のである。そして生き延びてゐたその中の一人が、告發されてこの事實を自白したことは彼の目撃したところであつた。更に驚くべきは、かうした變行が一つや二つでなく、絶えず繰返されてゐると云ふことであつた。

かうした制度の下に行はれてゐるやうに、特に悪行を養成して行つた日には、ロシヤの人間は、最新のニーチエの學説にかぶれて、一切の行爲は許されてゐる、何事も禁じられてはゐないと見る浮浪漢同様の者になつて了ひ、最初は

それが囚徒の間に^{弘ま}り、一般民衆の間に傳播されて行くのは分りきつたことであつた。

斯く行はれてゐるすべての事に就いての唯一の辯解は、犯罪の防止と畏怖と矯正と、それから法律書に書かれてある通りの合法的報復とであつた。だが實際は、それらの手段は一つとして何等の効果もなかつた。防止どころか、犯罪は蔓延するばかりであつた。畏怖どころか、却つて犯罪者を奨励し、そのうちの多くは浮浪漢となつて、監獄入りを志願して来る位であつた。矯正どころか、あらゆる悪弊を組織的に傳染せしめるばかりであつた。また、報復の要求は、政府の刑罰によつて少しも緩和されなばかりか、却つてそのやうな氣のなかつた人々にまで復讐心を起さしめた。

『何故彼等はこんな事をしてゐるのであらう?』と、ネフリニードフは自ら問うて見たが、その答は得られなかつた。

更に何よりも不思議で堪らないのは、この事が皆、偶然でもなく、間違ひでもなく、又一朝一夕のことでもなく、幾百年の長い間絶えず行はれて来たといふことであつた。たゞ異つてゐるのは、もとは鼻を裂いたり、耳を切つたりしたのが、後には烙印^{なまざ}を押ししたり、木の枝に縛りつけたりするやうになり、手錠を嵌めて荷車で運搬する代りに、今

では汽車で輸送するやうになつたといふだけである。

役人達に言はせれば、ネフリニードフの憤慨は監禁所又は留置所の設備の不完全から生ずるものであつて、最新式の監獄を設立しさえすれば、それ等は皆改善されるといふのであるが、そんな批判では彼は満足出来なかつた。何故といふに、彼の憤慨は監禁する場所の設備の完全不完全によつて生じたものではなかつた。彼は電鈴を装置した完全な監獄のことも、タードの稱へた電気死刑のことも讀んで知つてゐたが、そんな完備した慘虐には猶更憤慨したくなるのであつた。

それなら、ネフリニードフの憤慨の核心は何處にあつたかといふと、それは、裁判所や諸官省の役人達であつて、彼等は人民から搾取した莫大な俸給を貪りながら、同じ種類の動機から同じ種類の官吏によつて書かれた法律書に照して、その法律を犯した人民の行爲を無理に或る條項に當て^{あて}、その條文によつて彼等を、何處か二度と再び出會はないやうな處へ送つて了ふのであつた。そして送られた人民は何うなるかといふと、その遠い處で残忍無法な典獄や、看守や、護送兵等の權力の下に絶対服従して、幾百萬といふ人間が精神的にも肉體的にも滅びて行くのであつた。

ネフリニードフは監獄や、宿營所を親しく知るに及んで、

囚徒の間に發達してゐるすべての悪行、例へば、飲酒や賭博や残忍な行爲や、その他の怖ろしい犯罪や、また食人行爲の如きものですらも、決して偶然ではなく、變態の現象でもなく、犯罪的典型と云ふやうな生得の缺陷のため(政府に迎合する愚鈍な學者の言ふところであるが)でもなくて、實は人が人を罰し得るといふ間違つた考へから起る必然の結果であることを發見した。ネフリュードフの見るところによれば、食人行爲とても、密林で始めて行はれるものではなく、實は各官省や委員會や各局などに胚胎して、それが偶々密林の中で、實を結んだに過ぎないのであつた。例へば、彼の姉婿を初め、廷丁から大臣に至るまで、法官といふ法官、官吏といふ官吏はみんな、自分の口にしてゐる民衆の正義とか幸福とかは、全然顧みようともしないで、たゞこれ等の墮落や病弊を生み出すやうな仕事をした代價に俸給を貰ふだけであつた。これは實に火を賭るよりも明かであつた。

『では、これ等一切の事は單に誤解から生じたことであらうか? これ等すべての官吏共にその俸給を保證しやり、又賞與を與へてやつて、彼等が現に行つてゐることを止めさせる譯には行かないものであらうか?』と、ネフリュードフは考へた。そして、このやうな考へに没頭したまゝ、二番

鶏が鳴き止んでから、まるで噴水のやうに身邊から跳び出す蚤の襲撃にも構はず——彼は深い眠りに落ちた。

二〇

ネフリュードフが眼を醒ました時、馬車の馭者達はもう疾に出立し、宿の女將は茶を濟まして、汗ばんだ太い頸をハンカチで拭きながら入つて来て、宿營所の兵隊さんが手紙を持つて來たと云つた。手紙はマリヤ・パーウロウナから寄越したもので、クルイリツォフの發作は思つたよりも重體であると書いてあつた。『最初私達は彼を此處へそのままにして置いて、私達も滞在してゐようと思つたのですが、それは許されませんでした。私達は彼を連れて行きます。けれど心配でなりません。で、あなたにお願ひしたいのですが、何卒町へお着きになつたら彼を残しておくように、また私達のうち誰か一人留まつてゐられるように、御盡力下さいませんか。若し滞在の許可を得るために、私が彼と結婚しなければならぬやうでしたら、私は無論さうする考へで居ります。』

ネフリュードフは、若い男を宿場によつて馬車を命じ、自分では急いで荷作りにかゝつた。彼がまだ二杯目の茶を飲み乾さない中に、もう三頭立の驛馬車が鈴を鳴らしながら、

鋪石道のやうに凍つた泥濘道をかたくとやつて来て、玄關前に着いた。ネフリュードフは、頸の太い女將に勘定を済まして、急いで外へ出て、車の中の腰掛に坐ると、一行の者に追いつくやう出来るだけ速くと命じた。果して村有牧場の門から程近い處で、袋や病囚徒を載せた一隊の馬車に追ひついた。車は溶けかゝつた泥濘道にあつてひどい音を立てゝゐた。將校は獨り先へ行つてしまつてゐなかつた。酒を飲んで來たらしい兵卒達は賑やかに喋りながら、後について、道の兩側を歩いてゐた。馬車は澤山あつた。前方の馬車には弱々しい刑事囚が六人位ゐづゝ苦しさに詰め込まれ、後方の三臺には、一車三人づゝの割で國事犯人が乗つてゐた。一番後の車にはノウォドゥォーロフとセラベツと、コンドラティエフが乗り、二番目のにはランツェーワと、ナバートフと、それからマリヤ・パーウロウナに席を譲つて貰つたレウマチ病みの弱々しい女がゐた。三番目には乾草を積み重ねた上にクルイリツォーフが枕をして横になり、その傍の馭者臺の處にはマリヤ・パーウロウナが坐つてゐた。ネフリュードフはクルイリツォーフの近くまで行くと、車を止めさせて、彼の方へ歩いて行つた。酔つぱらひの一人の護送兵がネフリュードフに片手を振つて制したけれど、ネフリュードフは見向きもしないで、ずん／＼車のそ

ばへ寄り、馬車の縁を掴んだまゝ並んで歩き出した。クルイリツォーフは毛皮の外套と羊皮の帽子を被つて、口をハンカチで覆つてゐたが、ずつと瘦せ細つて蒼白く、美しい眼ばかり大きく輝いてゐるやうに思はれた。彼は凸凹道にがたつく馬車に體を揺られながら、それでも眼を離さずに、ネフリュードフを見成つてゐた。そして、容態を訊かれると、眼を閉ぢて、腹立たしげに頭を振つたゞけであつた。彼の全精力は馬車の動揺のためにだん／＼消耗されて行くらしかつた。馬車の向う側に付き添つてゐたマリヤ・パーウロウナは、クルイリツォーフの容態に就いての心配をありつたけ浮べた意味深い眼付をネフリュードフに送つたが、また直ぐに快活な聲で話し出した。

「あの將校は、自分でもきまりが悪くなつたらしいのよ。」と、彼女は轡の音を親切つてネフリュードフに聞かせようと、大きな聲で言ひかけた。「ブツフキンは手錠を外されたので、今日はあの女の兒を抱いてゐますよ。カーチャもシモンソンもあの男と一緒にすわ。それからウエーロチカも私の代りに跟いて行きました。」

クルイリツォーフは、何か聞きとれないことを口にして、マリヤ・パーウロウナを指さした。そして咳を咳へるもの如く顔を曇めて、首を振つた。ネフリュードフはよく聞き

取らうとして頭を近づけると、クルイリツォーフはハンカチの中から口を出して、かう囁いた。

「今は大分好い具合です。たゞ風邪をひかなければいゝと思つてゐます。」

ネフリニードフは頷いて同意を示し、マリヤ・パーウロウナと眼を見交した。

「三體の問題は何うなりましたか？」と、更に言ひ足して、無理に、苦しげに微笑した。「解決は六ヶ敷いでせうか？」

ネフリニードフは、何のことだか分らなかつたので、マリヤ・パーウロウナに説明して貰つた。それは、太陽と月と地球の問題であるが、クルイリツォーフは巫山戯て、これをネフリニードフとカテニーシヤと、シモンソンとの三角關係にうつして言つたのであつた。クルイリツォーフは、自分の冗談をマリヤ・パーウロウナが正當に解釋したと、頷いて見せた。

「その解決は私のすべきものではありません。」と、ネフリニードフは言つた。

「手紙は受取つて下さいましたか？ 御盡力願はれませうか？」と、マリヤ・パーウロウナが訊いた。

「屹度します。」と、ネフリニードフは答へた。と、クルイリツォーフの面に不満の色を見たので、そのまゝ自分の馬

車へ戻つた。そして上から吊つた腰掛に坐ると、荒れた凸凹道にがたつく馬車の兩端につかまつて、一行の者を追ひ越すことにした。一行は鼠色の囚人服や半外套に、足枷や二人つなぎの手錠など嵌められて、それが一里も續いてゐた。道の反対側に、ネフリニードフは、カテニーシヤの青い頸巻と、ウエーラ・エフレレウナの黒い外套と、シモンソンのセターと編細工の帽子と白檀が何かの紐で止めてある白い毛糸の靴下とを見た。彼は女達と並んで歩きながら、何やら熱心に話してゐた。ネフリニードフを見ると、女達はお辭儀をした。シモンソンも鹿爪らしく帽子を持ちあげた。ネフリニードフはこれと言つて話すこともなかつたから、そのまゝ馬車を止めないで、彼等の先を越して行つた。平らな道に出ると、馬車は一層速くなつた。しかし道の兩側に長く續いてゐる荷車の行列を避けるため、絶えず平らな道から外れなければならなかつた。

深い轍の痕を刻まれた道は、暗い針葉樹林の中を通つてゐた。そこでも道の兩側には、まだ落葉しきらない樺その他の潤葉樹が鮮やかな、黄ばみかゝつた砂色の葉を處々見せてゐた。囚徒の一行を半分追ひ越して、森の端れへ出ると、兩脇に野原が展開され、修道院の金色の十字架と圓屋根とが幾つも見えてゐた。雲は散つて、空はからりと晴れ互

り、太陽は森の上に昇り、濡れた木の葉や、水溜りや、會堂の圓屋根や、十字架などが日に當つてきら／＼と光つてゐた。やゝ右手の灰青色をした遠方には山々が灰白く見えて來た。馬車は漸く郊外の大きな村に入つた。村の往還は人で一杯だつた。ロシア人も居れば、他種族の者もあつて、何れも異様な帽子と上衣とをつけてゐた。酔拂ひや、素面の者や、男や女が、店頭や、料理店や、居酒屋や、荷車のほとりにうよく／＼して何かがや／＼喋つてゐた。愈々町の近いことが感じられた。

馭者は、右側の馬に一と鞭あてて、その手綱をぎゆつと引き締めて、手綱が右側へ來るやうに、馭者臺の端の方へ腰を移し、一寸手際をひけらかすやうに、大道を驅つて行つた。そして歩度を緩めずに、筏渡しになつてゐる河の處へ近づいた。今、河の中心にある渡しは、向う側から來る所で、こちらの岸には二十臺ばかりの車が待つてゐた。ネフリニードフもそこで一寸待つことゝなつた。流れに逆らつて河上へのぼつてゐる筏は、水の流れに運ばれて、直ちに棧橋の置板の處へ着いた。

背の高い、肩幅の廣い、筋骨の逞しい、むつ／＼り顔の、半外套に短靴を穿いた船頭が、慣れた手付で巧みに綱を投げ、それを樁杭に縛りつけた。それから、横木を脇へ除けると

すぐ筏の上の馬車を岸にあげ、待つてゐた馬車を載せ始めた。渡しは筏は忽ち、荷車や、水を見て暴れる馬などでぎつしり詰まつた。流れの早い大川は綱を強く引つばる度に筏船の腹に打突かつて飛沫を揚げた。筏が一杯になつて、ネフリニードフの車も、車から解かれた馬も、四方八方から押されながら、片隅に座を占めた時、船頭達は入口に横木を差して、乗りきれなかつた人々の種々な哀願などには耳も藉さず、綱を解いて出發した。筏の上は静かであつた。たと聞えるものは船頭達の足音と、脚をもち／＼動かす馬の船板にあたる蹄の音ばかりであつた。

二一

ネフリニードフは筏の縁に立つて、廣い、速い河を眺めてゐた。すると、彼の想像に二つの人影が交る／＼浮んで來た。それは頭をがた／＼揺られながら憤怒の瀬戸際に臨んでゐるクルイリツォーフの面影と、シモンソンと並んで元氣よく道脇を歩いてゐたカテューリシヤの姿とであつた。一つの印象は——死を豫期しないで而も死にかゝつてゐるクルイリツォーフの印象——は如何にも苦しい傷ましいものであつた。が、他の印象——シモンソンのやうな男の愛を得て。今では堅固な正しい善道を踏んで立つてゐる元氣なカテュー

「イヤの印象——は本来嬉しかるべき筈であるのに、それが矢張りネフリユードフにとつては重苦しいものであつて、何うしてもその重苦しさに打ち勝つことが出来なかつた。

町の方からは河の面を渡つて、オホートニツキイの大きな黄銅の鐘の頓へる音と反響とが聞えて來た。ネフリユードフの傍に立つてゐた馭者とすべての乗合の者は次ぎ／＼に脱帽して十字を切つた。誰よりも欄干近く立つてゐた背の低い、襪袴着物を着た年寄だけは、(ネフリユードフも最初はその人に氣づかなかつたが)十字を切らず、傲然と頭を上げて、ネフリユードフを見詰めてゐた。この老人は補綴だらけの上衣に、羅紗のズボンと、これも古い補綴だらけの短靴を穿いてゐた。肩越しに小さい合財袋を背負ひ、頭には高い毛皮製の擦りきれた帽子を被つてゐた。

「爺さんお前は何んでお祈りをしねえだよ？」と、ネフリユードフの馭者は、帽子を被つて、眞直に直しながら言つた。「それとも洗禮を受けねえのかえ？」

「誰に祈るだね？」と、襪袴着物の老人は、矍ひかゝるやうな勢で、鋭く一語々に力を入れて言つた。

「誰につて分つてるぢやねえか、神様にさ。」と馭者はやゝ皮肉に出た。

「ではお前は、神様が何處にゐるか、分つてるかい？」

老人の言ひ方に何だか凜とした、動かし難いものが潜んでゐたので、馭者は手強い奴にかゝり合つたと、聊かへこたれ氣味であつたが、併しそんな素振は見せず、大勢の聞いてゐる前で、黙つて恥をかゝないやうに努めながら、急いで答へた。

「何處につて、天にゐるだよ。」

「ぢや、お前は天に行つて見たかい？」

「行かうと行くめえと、神様にお祈りする位えのこたア誰でも知つてらアね。」

「神様を見たものは何處にもあるめえ。たゞ父の懷に在る獨り子だけが見たといふぢやねえか。」と苦り切つた顔をして、矢張り口早に老人は言つた。

「お前は何うも基督者ぢやねえや。邪宗徒なんだべえ。まア、そこいらの偶像にでもお祈りするがえゝだ。」と馭者は、鞭の柄を帯に挟み、脇馬の革具を直しながら言つた。

誰か笑ひ出した。

「ぢやア、爺さんや、お前の信心は何ういふのだね？」と、筏の端に馬と一緒に立つてゐた中年配の男が訊いた。

「俺の心は信心なんてものは無えだ。何者も信じねえだから、自分の外には何者も信じねえだから。」相變らず口早に又齒切れよく老人は答へた。

「だが、何うして自分を信ずることが出来ますかね？」と、ネフリードフも口を入れた。「自分だつて誤ることがありますから。」

「いゝや、そねえなこたアねえ。」と頭を振つて、きつぱりと老人は答へた。

「では、種々異つた信仰のあるのは何ういふ譯でせう？」と、ネフリードフが問うた。

「種々な信仰のあるア、人が他の人達を信じて、自分を信じねえからだ。俺も矢張り他の人達を信じて、林の中にも迷ひ込んだやうに迷つてゐた。そして、これはとても抜け出せねえと思ふ程、迷ひ込んだもんだ。舊宗旨も、新宗旨も、安息宗も、フルイスト宗や、僧侶宗も、無僧侶宗も、アウストリヤク宗も、モロカン宗も、スコペツ宗も(凡てロシアに行はれてゐる宗派で、正教からは何れも異端と視られてゐる)みんな手前味噌ばかり並べて、目の見えねえ犬つころみてえに這ひ廻つた揚句の果はくたばつちまふだ。世の中に宗旨はいろ／＼あるだが、人間の靈は一つだ、お前さんでも、俺でも、あの男でも、靈は一つだ。だから、各自が自分の靈を信じせえすりやア、皆一つになるだ。各自が皆自分を信ずることせえ出来りや、それで萬人が一つになるだ。」

老人は聲高く語りながら、絶えずあたりを見廻した。そ

れはなるだけ多くの人々に聞いて貰ひたいやうな風であつた。

「それで、あなたはずつと前からその信仰を持つてゐましたか？」と、ネフリードフが彼に問うた。

「俺かね、えゝ、ずつと前からだよ。そのために攻め立てられてもう二十三年目になるだ。」

「攻め立てるとは？」

「キリストを攻めたてたやうに、この俺をも攻めたてるだ。俺を捕へては、法廷や、坊主共や、學者や、パリサイ(ユダヤ教の教師)の連中の前へ突き出すのだ。氣狂ひ病院へも入れられたことがあるだ。だけれんどの俺を何うすることも出来やしねえ、俺は自由だからな。『お前の名は何といふか？』とぬかしやがる。この俺が名前みたいなものを持つてると思つてゐるだ。だが俺は名も何も持つてゐねえ。俺は一切を棄てた。名もなければ、職業もねえ、生れ故郷もねえんだ。俺はたゞ俺だ。『でも何とか呼名があるだらう？』

「人間といふだ。』『年齢は幾つか？』と來やがる。俺は年なんか數へたことねえ、また數へきれぬものでもねえだ。何故つて、俺は何時でも在つたし、この先だつて何時迄も在るだ。——と、こんどは、『お前の両親は誰か？』と來る。

俺にや父も母もねえ、神と大地の外に親はねえだ。神が父

で、大地が母だ。すると、『では皇帝を認めるか?』といふ。認めねえ事があるもんか。皇帝は皇帝自身の皇帝で、俺は俺自身の皇帝ぢやねえか。すると、『いや、お前見たやうな者と話は出来ん。』といふ。俺も言つてやる、俺はお前に話をしてくれと頼みやアしねえつて。それで俺はこの通り苦しめられてるだ。」

「で、あなたはこれから何處へ行くのですか?」と、ネフリードフが問うた。

「足の向くところに行くだ。そして働くだ。仕事がないア乞食をするだ。」彼は、筏が岸に近づいてゐるのに気がつく、かう答へて、そして勝ち誇つたやうに、自分の話を聞いてゐたすべての者を見廻した。

筏は岸に縛りつけられた。ネフリードフは財布を取出して、幾らかの金を與へようとした。老人は謝絶した。

「俺は錢など貰はねえ。麵麩なら戴きやすが。」と言つた。「いや、失禮しました。」

「何もあやまる事アねえだ。俺に恥をかゝしたわけでもねえ。また俺に恥をかゝせることア出来ねえだ。」と言つて、老人は下してゐた合財袋を肩にかけ始めた。そのうちに馬車は運び出され、馬が繫がれた。

「旦那があねえな奴に口を利きなせえますなんて魂消やし

たね。」と、馱者は、ネフリードフが力強い船頭達に心附をして、再び車に乗り込んだ時、彼に言つた。「あれア浮浪人ですよ。たゞの旅の者ぢやアごせえせん。」

三三

丘の上へ登り切つた時、馱者は振返つた。

「どの宿屋さ着けますべえ?」

「一番いゝのは何處だね?」

「『シビールスカヤ』が一番よがすよ。でなきやデューコフもなか〜よがす。」

「どちらでもお前の好きな方へ案内してくれ。」

馱者は再び斜に坐つて、速力を加へた。町は何處にもあるやうな町であつた。軒並の屋根裏も、緑色の屋根も、會堂も、小店も、大通りの商店も、巡查達も同じやうなものであつた。たゞ家屋のみは、殆ど全部木造で、街路には石が敷きつめてあつた。一番賑やかな街路の一つに來ると、馱者はとある一旅館の前で馬車を留めた。然し、その旅館には生憎空室がなかつたので、他の旅館へ行かなければならなかつた。今度の旅館には空室が一つあつたので、ネフリードフは二ヶ月振りにやつと、これまで住み馴れたやうな、比較的清潔な、居心地のよい處に落着くことが出来た。

ネフリードフの案内された一室は、裝飾こそあまりなかつたが、旅馬車や、田舎宿屋や、宿營所などで、二ヶ月を過ごして来た後なので、のんびりした氣持になつた。何よりも先づ、宿營所訪問以來何うしても取り切れなかつた虱を退治しなければならなかつた。荷物を解くと、彼は直ちに風呂へ行き、そこから、都會風に姿をかへて、——糊のついたシャツを着、可なり皺くちやになつてゐるズボンを穿き、フロックコートと外套とを着て、——この地方の長官を訪問することにした。旅館の門番が態々呼んで来て呉れた辻馬車屋は、食ひふくれた大きなキルギス産の馬にがたくり馬車をつけてやつて来た。彼はネフリードフを乗せて、番兵や巡查の守衛してゐる大きな立派な邸宅に着いた。家の前後は庭園になつて、白楊や樺の木が裸で、むきだしの方を突つ張つてゐる中に、杉や、松や、椴などが濃く暗く青々としてゐた。

生憎、將軍は病氣で面會を謝絶してゐたが、それにも構はずネフリードフは、自分の名刺を通ずるようにと小使に頼み込んだ。すると、小使は戻つて来て、「何卒こちらへ。」と都合のいゝ返事を齎らした。

玄關の間や、小使や、傳令や、階段や、てか／＼と拭き込んだ嵌木細工の床を敷いた廣間など——すべてがペテル

ブルグ同様で、たゞそれよりも、堂々として、少し汚らしいだけであつた。ネフリードフは書齋に通された。

將軍はでぶ／＼太つた、團子鼻の、額にはぼ／＼と持ち上つた瘡があり、頭はつる／＼に禿げ、眼の下の皮膚はだぶ／＼にゆるんだ、多血性の男であつた。そして鞞靴式の、絹の上衣を着、手に巻煙草を持つたまゝ、銀の皿に載せたコップから茶を飲んでゐた。

「ようこそ！　こんな身装で甚だ失禮ですが、それでもお目にかゝらぬよりはましだと思ひまして。」彼はその太い、後方から皺の曇み寄つた頸を、上衣で埋めながら言つた。「少々體の加減が悪くて引籠つてゐます。あなたはまた、何うしてこんな昔話のやうな遠國へお出でなすつたのです？」

「私は囚人の一行と一緒にやつて参りました。實はその中に私と密接な關係のある者が一人居りますので。」と、ネフリードフは言つた。「それで一つは、その人間に就いて、もう一つは他の事件に就いて、閣下のお力にお頼りしたため、上つたやうなわけでございます。」

將軍は煙草を一口息吸ひ込み、茶を一口飲んで、煙草を孔雀石の灰皿に消した。そして細い、潤ひのある眼をネフリードフから離さずに、眞面目に聞き入つてゐた。たゞ

煙草を欲しくないかと訊くために、ちよつと口を挟んだだけであつた。

この將軍は、自由思想や人道主義は自分の職分と調和出来るものと思つてゐる、教養ある軍人のタイプに屬してゐた。然し、天性聰明で善良な人間である彼は、程なく斯様な調和の不可能なことを感知するに至つた。そして、その惱ましい内面的矛盾を忘れる爲めに、軍人仲間の間に廣く行き互つてゐた飲酒の習慣にだん／＼泥み、終ひにはひどくこれに溺れるやうになつて、三十五年間の軍務を終へた後には、醫者の言ふアルコール中毒に罹つてしまつた。彼は全身酒に浸されてゐたので、どんな酒でも一口飲めば、すぐに酔ふことが出来た。しかもこの飲酒は、彼にとつては、既に避け得られない要求であつて、これなくしては、生きてゐることが出来なかつた。それで一日でも晩酌をやらないことはなかつたのだが、流石にその道の修業が積んでゐるので、よろ／＼したり管を巻いたりするやうなことは無かつた。たまさか管を巻いたところが、身分がずば抜けて高いので、どんな莫迦々々しいことを言つても、人はこれを賢い言葉だと受取るのであつた。丁度ネフリードフが訪問した朝ばかりは、彼は本當に聰明な人のやうに、對手の言葉がよく呑み込めた。そして常々口癖に言ふ、『酔うて

賢なれば二途を樂しむ』(酔つた上に機巧であれば二つの満足が)といふ諺を、先づ適當に實證してゐた譯である。監督官廳とても、彼の大酒家であることを知らぬではなかつたが、彼は他の人々よりも、深い教養を持つて居り——尤もこの教養は、彼が飲酒に耽つた時から停止してしまつたが——また大膽で、機敏で、風采も堂々としてゐて、幾ら酔拂つてもうまくやつてのける技倆があるので、現にこの責任の重い要職に任命されて、その地位を保つてゐるのであつた。

ネフリードフは、自分の心配してゐる人間が女であるといふこと、彼女が冤罪を蒙つてゐるといふこと、その女のために皇帝陛下へ請願書を提出して置いたことなどを將軍に話して聞かせた。

「成程、それで？」と、將軍は言つた。

「それでこの女の運命に關する通知が本月中には私宛にベルブルグから當地へまゐる筈になつてゐます。」

將軍は矢張り、ネフリードフから眼を外らさずに、指の短い手を卓子の上に伸ばして、呼鈴を押し、更に煙草を喫つては激しく咳入りながら、黙つて聞いてゐた。

「就きましては、その請願書に對する御沙汰が参りますます、その女が當地に滞留しても宜いやうにお許しを願ひたいのです。」

制服を着た給仕の從卒が、入つて來た。

「アンナ・ワシーリエウナは、もう起きたか訊いておいで。」と、將軍は從卒に言つた。「それから、もう一杯お茶をくれ——成程、で、もう一つの用件と仰しやるのは？」と、今度はネフリュードフに向つた。

「もう一つのお願ひは」と、ネフリュードフは言ひ續けた。「矢張り一行中の、或る國事犯人のことですが。」

「さうですか。」と、將軍は意味ありげに頷いて言つた。

「その男は只今重體で——死にかゝつてゐます。ですから多分當地の病院へ預けられるやうになるでせう。それに就いて、婦人の國事犯人の一人が附添に居残りたいと云ふのです。」

「その女は、その男の親戚の者ですか？」

「いえ、親戚ではありません。然し結婚によつて男の傍に附いてゐられるのですしたら、その男と結婚してもいゝと申して居ります。」

將軍は眼を光らして、じつと見詰めてゐた。そしてその眼付によつて對手をたじろがせようとするものゝ如く、黙りこくつて、煙草ばかり喫つてゐた。

ネフリュードフが話を打切ると、彼は卓子の上から一冊の本を取つて、指に唾をつけては手早く頁を繰りながら、結

婚に關する條文を探し出して、そこを讀んだ。

「その婦人はどんな刑を宣告されたのですか？」と、彼は本から眼を上げて訊ねた。

「その女は徒刑です。」

「は、ア、それだと、結婚した所で減刑にはなりませんよ。」

「それはさうでせうが……」

「お待ちなさい。たとへその女が自由な人と結婚するとしても、宣告された刑期だけはちやんと服役しなければなりません。ところで問題になるのは、その女と男と、どちらが重い刑を受けてゐるかといふことです。」

「二人共徒刑を宣告されてゐます。」

「それなら、文句はありません。」と、笑ひながら將軍は言つた。「男女同罪ですから。ところで、男の方は病氣によつて残ることが出来ます。」と彼は續けた。「そしていくらか取扱も寛大にされるのが出来ますが、然し女の方は、たとひその男と結婚してもこの地に居残ることは出来ません……」

「奥様は御食事中であります。」と、給仕が報告した。

將軍は頷いて、また言ひ續けた。

「だが、もう少し考へて見ませう。その人達の名前は何と言ひますか？ これへ書いて置いて下さい。」

ネフリードフは書きつけた。

「いや、それは私には出来ません。」ネフリードフが、その病人に會つて貰ひたいと願ひ出た時、將軍はかう言つた。「勿論私は、あなたを疑つてゐる譯ではありません。」と、彼は續けた。「然しあなたは、その男や、その他の人達のことを大變お氣にかけて居られるやうだし、それに金を澤山持つて居られるやうですから、それをお遣ひなさつたら何うです。この私共の地方では、何事も金次第です。——賄賂は根絶するようにと私などもよく言はれますが、しかし今日のやうな賄賂公行の世の中で、何うして根絶することが出来ませう。下役の者程、賄賂を欲しがつてゐますよ。五千露里も先の人間を監視することなどは、出来るものぢやありません。役人はその土地の小さな帝王ですからねえ。丁度私がこの土地に於けると同じやうに。」と言つて彼は笑ひ出した。「あなたは多分是迄も國事犯人に面會なさつたでせう。そしてその度に金を與つては許されたのでせう？」と、にこ／＼しながら彼は訊ねた。「どうでせう？」

「さうです。全く仰しやる通りです。」

「あなたがさうしなければならなかつたことは、私にはよく分つてゐます。あなたは國事犯人に面會しようと思つてゐなさる。あなたにはその犯人が氣の毒でならない。とこ

ろが典獄にせよ、護送兵にせよ、何れも出せば取りますよ。何しろ彼等は四十コペイカの日給で家族を養つてゐるのですから。彼等としては取らずにはゐられないのです。彼等の身になり、またあなたの立場になつたら、私だつて、あなたや彼等と同じことをするでせう。然し私はこの地位に在つては、少しでも法文に外れたことを自分に許しません。といつて、私も一個の人間として憐憫の情に惹かされることは無論ありますが、何しろ行政官の一人として、或る條件の下に政府の信認を受けてゐるのですから、義務としてその信用を實際に見せてやらなければなりません。いや、こんな問題は、これで打切りにして、今度はあなたの方から、都の噂でも話して貰ひたいものですね。」と、それから將軍は、盛んに訊ねたり話したりし始めたが、それといふのも、本當に何か珍らしい話を聞きたい爲めではあるが、それと同時に又一方では、自分がもの識りで情深いことを人に知らせたい爲めでもあつた。

三三

「時に、あなたは何方どこにお泊りですか？ デュイクのところですか？ いや、あそこでは汚ないでせう。何うです食事にいらいしやいませんか。」と、將軍はネフリードフを送り出

しながら言つた。「今晚五時に。あなたは英語を話されませんか？」

「え、話します。」

「それは結構です。實は當所へ一人のイギリス人の旅行家が来てゐるのです。その人はシベリヤに於ける流刑と監獄の状況を研究してゐます。その男も丁度食事に来ることになつてゐますから、あなたもいらしつて下さい。五時の會食です。家内は是非にと願つてゐますから。そして、お話の女囚や病人を何うするかといふ問題の御返事も、その時に致します。いづれ誰か一人は附添の者が残されるやうになるかも知れません。」

將軍の邸を出ると、ネフリュードフは、心中何となく勇み立つて、一種の力強さを感じながら、郵便局へと馬車を走らせた。

郵便局は天井の低い家であつた。幾人かの局員が卓子に向つて腰掛けながら、詰めかけてゐる人々に應對してゐた。一人の局員は首を傾げて、巧みに押出される状態へ續けざまにスタンプを捺してゐた。ネフリュードフはあまり待たせられなかつた。彼の名前を聞くと、局員は可なり澤山来てゐた手紙をすぐ渡してくれた。そのうちには金や、幾通かの手紙や、書籍や、『祖國雜纂』の最近號などがあつ

た。ネフリュードフが自分の手紙を受取つて、木製の腰掛の處へ寄ると、其處には本を手にした一人の兵卒が、何か待受けながら坐つてゐた。ネフリュードフはその並びに腰を掛けて受取つた手紙を調べた。その中に非常に立派な封筒に入れて、眞赤な封蠟で固く封をした書留郵便が一通あつた。封を切ると、中から公文書のやうなものに添へてセレーニンの手紙が出て來たので、急に血が逆流して顔に上り、心臓の收縮するのを感じた。それはカテリーナ事件の決定書であつた。一體どんな決定だらうか？ よもや却下ではあるまい？ 彼は、細かく分りにくい、硬ばつた、整はない筆蹟で書かれたその手紙に目を通し、讀み終ると、ほとと救はれたやうな吐息をした。決定は良好な方であつた。『親愛なる友よ』と、セレーニンは書き出してあつた。――「あなたとの最後の會見は、私に非常な感銘を與へました。マースロワに關するあなたのお考は確かに正しいものです。私は念を入れてあの事件を調べ、彼女に關して驚くべき不正の行はれてゐたことを見出しました。これが修正の道としては、あなたの差出された通り、請願局へ提出する外はありませんでした。幸ひ私もこの事件の解決に微力を盡すことが出來ましたので、左に減刑指令書謄本を添へてお送ります。實はあなたの伯母さんのカテリーナ・イ

ワノヅナ伯爵夫人からお送りする管でしたが、私の方へ御宿所を知らして貰ひましたので、それによつて私から差上げることになりました。なほ、原本は彼女が豫審中收監されてゐた處へ送られましたので、多分そこから直ぐにシベリヤ地方廳の方へ送附されることとせう。先づは取り急ぎこの吉報をお傳へします。さやうなら。セレーニンより。』

指令書そのものゝ内容は大體かうであつた。『皇帝陛下直屬請願局。何年何月何日。何々局何々課發第何號。何々請願事件。皇帝陛下直屬請願局長ノ指令ニヨリ平民エカテリーナ・マースロワニ宣スル事左ノ如シ。皇帝陛下ニハ奏上セラレタル報告ニ基ツキ、マースロワノ請願ニ對シ格別ノ御思召ヲ以テ、前判決ノ徒刑ヲ破棄シ、シベリヤノ遠隔ナラザル地方ニ移住セシムベキ旨、御沙汰アラセラル。』

いかにも喜ばしい重要な吉報であつた。カテューシヤにとつても、ネフリードフ自身にとつても彼の望み得られるすべてのことが叶つた譯であつた。彼女の境涯が變れば、彼女に對する關係にも新しい複雑なことが起るのと言ふまでもなかつた。彼女が徒刑囚である間は、彼の申込んでゐた結婚も、單なる空想で、それはたゞ彼女の苦役を慰めるといふだけの價値しかなかつた。けれど斯うなつてしまへば二人の同棲を妨げるものは何一つ無かつた。が、これ

に對しては流石のネフリードフも用意が出来てゐなかつた。のみならず彼女とシモンソンの關係は何うなることだらう？ 昨日の彼女の言葉は何ういふ意味にとつたものか？ 彼女がシモンソンと一緒にすることを承諾するとしたら、その方がよいのか、或は悪いのか？ 彼はこれ等の問題を容易に解決することが出来なかつた。それで、今の所、この問題は考へないことにした。『そのうちに筋道がついて来るだらう。』と、彼は思つた。『今の場合は一刻も早く彼女に會つてこの吉報を傳へ、早く彼女を釋放してやらなければならぬ。』彼は自分の手に入つた謄本だけで十分それが出来るものと思つてゐた。そこで郵便局を出ると、早速駟者に命じて監獄へと馬を走らせた。

彼は、この朝、監獄を訪問する許可を將軍から得てゐなかつたが、これまでの經驗によると、上官の許さないことを、下役の者が手軽くやつてくれる例があるので、兎に角當つて見て、今監獄へ入れたら、カテューシヤにこの吉報を告げよう、事によつたら彼女を釋放して貰はう、序にクルイリツォーフの容態も訊ね、將軍の云つたことを彼とマリヤ・パーウロウナに傳へてやらうなどと思つた。

典獄は随分背の高い、肥え太つた、嚴めしい男で、口髭や頬髯が口の端へまくれ込んでゐた。彼はひどく四角張つ

てネフリュードフに應對し、長官の許可が無い限りは絕對に外來人の面會を許す譯にはいかないと、頭から撥ねつけた。

ネフリュードフは、これまで都市の監獄でも許されて來たといふと、典獄はそれに對して、「さういふこともあり勝ちですが、私の處では決して許しません。」と答へた。その語調の中にはかうした意味が含まれてゐた。あなた方都會の紳士は、私達を煙に巻いて困らせようと思つてゐますが、東部シベリヤに居る吾々とても、秩序といふものをよく存じて居ます。一つあなた方に見せつけてやりませう。」

皇帝陛下直屬の役所から出た、紛れもない公文書の謄本もこの典獄を動かすことは出来なかつた。彼は斷乎としてネフリュードフが監獄の構内に入ることを拒絶した。それから、ネフリュードフが、この謄本の提示によつてマースロワを釋放することも出来さうなものだといふ、自分の無邪氣な假定を述べると、彼はたゞ侮蔑的な笑を含んで、自分の直屬上官の命令がない限り何人たりとも釋放することは出来ないと云つた。で、結局彼が約束してくれたことは、マースロワに減刑指令書の來たことを傳言すること、並に長官から命令を受ければ一時間以内に彼女を釋放することだけであつた。

クルイリツォーフの健康状態に就いては、典獄は矢張り何の消息をも告げず、そんな囚徒が居るかどうかといふことさへ語れないと言つた。こんな具合でネフリュードフは、何の得るところもなく、馬車に乗つて、自分の旅館へ歸つた。

典獄の嚴格ぶりは、主として、定員の二倍も收容してゐるその監獄に、この時チブスが流行してゐた所から來てゐた。ネフリュードフを乗せた辻馬車の馭者が途々話したところによると、監獄で亡くなる人の數は、それは夥しいものである。何でも悪い病氣が流行つてゐて、毎日二十人づゝも埋められてゐるといふことであつた。

二四

監獄での不首尾にも怯げず、ネフリュードフは依然として元氣のよい、調子づいた氣分で、すぐ縣廳へ行き、マースロワ減刑の書類が到着したか何うかを訊きたゞした。まだ着いてゐないと云ふことだつたので、旅館へ引き返し、直ぐこのことに關する手紙をセレニンと辯護士とへ書いた。書き終つて、時計を見ると、もう將軍邸の饗應に出席すべき時刻になつてゐた。

途すがら又もや、カテューシャがその減刑の通知を受け取

つたら何う思ふであらうかといふ考へが浮んだ。彼女はこれから先き何處で暮すことになるであらうか？ 自分は如何に彼女と暮したものであらうか？ シモンソンは何うなるであらうか？ 彼女と彼との關係は何うなるであらうか？それからカテューシャの心に起つた變化、それを思ふと同時に、彼女の過去のこととも亦思ひ出された。

『いやこんなことは忘れなければならぬ、帳消しにしなければならぬ。』と彼は思つた。そして又急いで彼女に關する思ひを自分の心から追ひ拂はうとした。『時節が來れば分るさ。』と獨語して、今度は將軍と話すべきことに就いて考へ始めた。

將軍邸の饗應は貴顯富豪の生活にありふれた贅澤なものであつた。ネフリュードフには固より別段珍らしいことでは無かつたが、長い間の道中で、贅澤は愚か、極く普通の便をさへ缺いてゐた後なので、特に愉快に思はれた。

將軍夫人はニコライ一世に宮仕へしたこともある、ペテルブルグ生れの古風な老女で、フランス語は自由に話したが、ロシア語は拙かつた。彼女はいつも體をきちんとして、眞直にして、手は動かしても、肘はひたりと腰に着けてゐた。夫に對しては冷靜に、といふよりも幾分憂鬱さうに敬遠主義を取つてゐた。お客達に對しては、相手次第でその應對

に濃淡はあつたが、兎に角頗る殷勤であつた。殊にネフリュードフに對しては、まるで身内の者か何ぞのやうに、濃やかな感情を籠めて、それとなく媚びるやうに待遇するので、ネフリュードフは今更の如く自分の資格に氣がつき、何とも言へない愉快な満足を感じるのであつた。彼女は、ネフリュードフが態々シベリヤまでも來るやうな一種の變人ではあるが、その正直な人柄をよく理解して、彼をまつたく特別な人間と見做してゐるのだといふ素振を見せた。この濃やかな待遇と、將軍邸の風雅な贅澤な生活振りとか相俟つて、ネフリュードフはすつかり美しい調度や、美味しい料理や、自分の生きて來た階級の教養ある人々と接觸することの氣樂さ、心地好さなどに、陶然としてしまひ、果ては、こゝ數ヶ月にあつたこと的一切は皆夢であつて、今俄かにその夢から本當の現實に眼醒めたやうな心持がする程であつた。

饗應には家族の者と將軍の娘夫妻、並にその副官の外に、イギリス人と、金鑛業者の商人と、遠いシベリヤの町から來てゐる縣知事とかゐた。すべてこれ等の人々はネフリュードフにとつて氣持が好かつた。

緒ら顔の、健康さうなイギリス人は、フランス語は頗る拙いが、本國の英語は素敵にうまく、滔々たる辯舌は人に

迫る所があつた。彼は非常に見聞が廣く、アメリカ、印度、日本、シベリヤなどの話は非常に興味のあるものであつた。

金鑛業者の若い商人は百姓の子であるが、ロンドン仕立ての夜會服を着て、シャツにはダイヤモンドの飾り鈕釦をつけてゐた。彼は大きな書齋を持ち、慈善事業には巨額の寄附をなし、ヨーロッパ流の自由思想的信念を持つてゐた。それに彼は朴訥堅固なる百姓氣質の根幹にヨーロッパ文明の核木をしたやうな、全く新しい立派な文化人の型をしてゐたので、ネフリニードフは頗る氣持よく又興味深かつた。

遠い町の縣知事といふのは、ネフリニードフがペテルブルグに居る頃、大評判になつてゐた例の某省局長の後身であつた。で、ぶくと太つて、薄い縮れ髪けの、優しい碧い眼まなこをした、腰から下の莫迦ばかに肥つた、可愛らしい白い手に指環を幾つもはめた、にこ／＼した好紳士であつた。この縣知事は、收賄官吏の多い世の中でたゞ一人決して賄賂を取らないといふので、當家の主人からひどく尊敬されてゐた。また、自分が大の音樂好きで、なか／＼立派なピアノニストである夫人も、この知事がすぐれた音樂家で彼女と合奏が出来るといふので、矢張り彼を尊敬してゐた。ネフリニードフの氣持は一層好くなつてゐたので、今日はこのやうな人達をも不愉快に思はなかつた。

快活で元氣のいふ、鼠色の頸を持つた副官は、一から十まで氣をきかせた、その親切さが氣持よかつた。

が、ネフリニードフから見ても、誰よりも一番氣持好く思はれたのは、愛らしい、若い、將軍の娘夫妻であつた。娘といふのは、あまり美しくないが、清楚な、若い女で、その二人の子供にまるで夢中になつてゐた。長らく親達と争つた末に戀愛結婚をした彼女の夫は、モスクワ大學の學位を持つた自由思想家で、謙遜な聰明な青年であつた。統計事務に服してゐたが、特に土人研究に身を委ね、彼等を研究し、愛撫し、早晚絶えてしまひさうな状態から彼等を救はうと努めてゐた。

これ等の人々は皆ネフリニードフに親切で、丁寧であるばかりか、新しい趣味深い人物である彼に會つたのを喜んでゐるらしかつた。軍服を着、白十字章を頸にかけて食事に出来た將軍は、ネフリニードフとまるで舊友か何ぞのやうに挨拶を交し、それから直ちに客人達にザケースカとウォイツカとをすゝめた。將軍がネフリニードフに向つて、あれから何をしてゐたかと訊いたので、ネフリニードフは、先づ郵便局へ往き、今朝話をした囚徒の減刑された通知を受取つたことを答へて、改めて監獄訪問の許可を得たいと願つた。

將軍は饗應の席上で事務の話を出されたのが如何にも不満らしく、眉を蹙めて、何とも言はなかつた。

「ウエイツカは如何ですか？」と彼は丁度この時、傍へやつて来たイギリス人に、フランス語で言葉をかけた。イギリス人は一杯飲んでから、今日は聖堂と工場を見物して来たが、なほ大移動監獄を見せて貰ひたいと言つた。

「ほう、それは結構です。」と言つて、將軍はネフリエードフに向ひ、「あなたも御一緒に行かれたがいゝでせう。——」と言ひ、更に副官に向つて、「このお二人へ通行證をあげなさい。」と言つた。

「あなたは何時お出でになりますか？」と、ネフリエードフはイギリス人に訊いた。

「私は今晚行つて見たいと思つてゐます。」と、イギリス人は言つた。「みんな引つこんでゐて、何等の用意もありませんから、却つてありの儘が見られるでせう。」

「いや、これは最も異彩を放つてゐる所を御覽にならうと云ふのですな。それも面白いでせう。私も随分書いて見ましたが、一向誰も注意してくれませんよ。外國新聞に出たのを見るのも宜からうて。」と言つて、將軍は食卓の方へ歩いて行つた。其處では夫人が一々お客の席を指定してゐた。

ネフリエードフは夫人とイギリス人との間へ腰掛けた。その向う側には將軍の娘と前の某省局長とが坐つてゐた。食事中の會話は取り止めもなく進んで、或はイギリス人が印度漫遊談をしたり、或は將軍がトンキン遠征を盛んに攻撃したり、或はシベリヤ一般の官吏の腐敗とか、收賄とかの話に移つたりした。どれもこれもネフリエードフには餘り面白くもない話ばかりであつた。

然し食事が済んで、客間の珈琲に移ると、彼はイギリス人や夫人などゞグランドストーンに就いて大變面白い話を交した。そしてネフリエードフは相手の人達の注意を惹くやうな、うまいことを澤山によく話し得たと思つた。かうして、結構な饗應を受け、上等の酒を飲んだ後、柔かい安樂椅子に凭れて珈琲を啜りながら、親切な上流の人達に圍まれてゐると、ネフリエードフは愈々以て愉快になつた。更に、イギリス人の所望により、夫人と前の某省局長とがピアノに向ひ、よく練習して置いたベートウエンの第五シムフォニーを連奏し始めると、ネフリエードフは、今初めて自分が如何ばかり善良な人間であつたかを悟つたものゝやうに、暫らく振りで、うつとりと完全な自己満足の心持を味はつた。

大ピアノも素晴らしく立派であり、シムフォニーの出来

榮えも美事なものであつた。少なくとも、豫てからこのシムフォニーが大好きであつたネフリエードフにはさう思はれた。美しいアンダンテを聞いてみると、彼は一方自分自身と自分のあらゆる善行とに對する感激から、何となく、擦つたいやうな感じを起させられた。

やがて、ネフリエードフが、夫人に向つて、自分の暫らく味はなかつた快感を興へて貰つた禮を述べ、暇乞して、出掛ける用意をしてゐると、夫人の娘が心を決したらしく彼のそばへ寄つて來た。そして顔を赧らめながら言つた。「あなたは先刻私の子供達のことをお訊ね下さいましたが、お目に掛けませうか？」

「おや、この女は誰方でも自分の子供を見たがつてゐらつしやるものと思つてゐるのね。」と夫人は、娘の可愛らしい無作法を見て微笑しながら、かう言つた。「公爵は子供などに興味をお持ちではゐらつしやいますまいよ。」

「いゝえ、それは違ひます。非常に、非常に好きなんですよ。」と、ネフリエードフはこの溢れるやうな幸福な夫人の愛に打たれて言つた。「どうぞ見せていたゞきたいです。」
「何うです、態々公爵を連れて、自分の子供を見せに行くなんて。」と、カルタの席の方から、將軍は笑ひながら大聲をあげた。そこには彼の婿や、金鑛業者や、副官などが一緒

に坐つてゐた。「まあ、母親の役目を果たがいゝ。」

若い婦人は、その間に、自分の子供が何う評されるだらうかを心配するものゝ如く、急ぎ足でネフリエードフの先に立つて奥の方の部屋へ入つて行つた。三つ目の、やゝ高い、白紙張りの部屋には淺黒い笠をかけた小さいランプが一つ點つてゐて、二つの小さい寢臺が並んでゐた。その寢臺と寢臺の間には、白いケープをかけた保姆が、シベリヤ風の頬骨の高い、親切さうな顔をして附添つてゐた。保姆は立つてお辭儀をした。若い母親は先づ初めの寢臺の上を覗き込んだが、そこには波打つやうな長い髪の毛を枕に亂しかけた二歳の女の兒が、口を開いて、すやくと眠つてゐた。

「この方がカーチヤです。」かう言つて母親は青い縞のついてゐる編物の掛蒲團を直してやつた。その下からは小さな白い踵が突き出てゐるのであつた。「可愛らしいでせう？
これでやつと二つなんですの。」

「なんてお可愛いことでせう。」

「それから、こちらのワシユータです。お祖父様かさう呼んでゐるのですが。まるでタイプが違つてゐるでせう。何うしたつてシベリヤ人ですわね？」

「立派な坊つちやんです。」とネフリエードフは、お腹を下にして眠つてゐる、丸々と肥つた兒をしげ／＼見成りなが

ら言つた。

「さう？」と母親は種々な意味の籠つた微笑を洩らしながら言つた。

ネフリニードフは、ふと、鎖や、坊主頭や、殴り合ひや、淫蕩や、瀕死のクルイリツォーフや、カテューシヤとその過去のことなどを思ひ起した。と、彼は何とはなしに羨しくなり、自分にもこのやうな美しい、清い（今の彼には全くさう思はれた）幸福が欲しくなつて來た。

ネフリニードフは、幾度も子供を褒めちぎつて、貪る如くその褒め言葉を吸収する母親を幾分なりとも満足させながら、彼女の後について客間に出て來た。すると、客間ではもうイギリス人が約束通り一緒に監獄訪問に出掛ける積りで待つてゐた。ネフリニードフは、早速この家の年寄や若い主人達に暇を告げて、イギリス人と共に將軍邸の支關先に出た。

天候は一變してゐた。豊かな雪が綿でもちぎつて投げけるやうに降つて、路も屋根も、庭の樹々も、車寄せも、馬車の上も馬の背も白く掩はれてゐた。イギリス人は別に一臺の馬車を持つてゐたので、ネフリニードフはイギリス人の馭者に監獄へ行くやうに命じ、それから自分の馬車に乗り込み、不愉快な役目をはたす重苦しい感じを覺えながらも、

イギリス人の後から、軟らかな雪の中を迂りにくい辻馬車に乗つて行つた。

二五

陰氣な監獄の建物の門の下側に、門燈が黠り、番兵が一人立つてゐた。——車寄せと言はず、屋根と言はず、壁と言はず、最早すべてが清く白い布のやうな雪に覆はれてゐるにも拘はらず、正面から見ると、建物全體が窓ばかり光つてゐるので、朝よりも一層陰鬱な印象を起させた。

例の嚴めしい典獄が門へ出て來て、門燈の光で、ネフリニードフとイギリス人との通行證を讀むと、訝しげにその大きな肩を縮めたが、命令に従つて、二人の訪問者を案内することゝなつた。彼は先づ庭を通つて、それから右手の扉口に入り、階段を登つて事務所へ連れて行つた。二人に椅子をすゝめて、さて、用向を訊き、ネフリニードフのマースロワに面會したいといふ希望を知ると、一人の看守をやつて、彼女を呼ばせ、それからイギリス人がネフリニードフを介して發するいろ／＼な質問に答へる用意をした。

「この監獄は幾人を收容する設備ですか？」と、イギリス人は問うた。「幾人監禁されてゐますか？——男は幾人？

女は幾人？ 子供は？——徒刑囚は幾人？ 流刑囚は幾人？
自分の志願で従って居る者は？——病人は幾人？」

ネフリュードフは、目の前に迫るカテューシヤとの面會に、
豫期しなかつた心の動搖を覺えて、イギリス人の言葉も典
獄の言ふことも、意味などは考へずに通譯してゐた。丁度
イギリス人に或る一句を譯して聞かせてゐる最中に、彼は
近づき來る聲音を耳にした。と思ふと、事務所の扉が開け
られて、いつもの通り、看守が先づ入り、その後からハン
カチで頭を包み、獄衣を着たカテューシヤが入つて來た。
彼は急に重苦しい感じを受けた。

『自分は生きたい。家庭や子供が欲しい。人間らしい生活
がしたい。』彼女が眼もあげず、急ぎ足で部屋の中へ入つて
來た途端、彼の頭の中にはこんな考が閃いた。

彼は立つて、五六歩進んで行つて彼女を迎へた。と、彼
女の顔はいつぞやネフリュードフを責めた時とそつくりの、
嚴めしく且つ不愉快さうに見えた。ちよつと赤くなつたが、
直ぐに蒼くなり、指を引きつるやうにして、上衣の端を捻り
ながら、彼を見上げたり、伏眼になつたりした。

「お前は、滅刑の指令書が出たのを知つてゐるかい？」と、
ネフリュードフは言つた。

「え、看守の人から聞きました。」

「さうすると、原本が着き次第、お前は何處でも好きな處
に移住することが出来るよ。私達はよく考へて……」

彼女は急いで喉を容れた。

「何も私は考へることなんかありません。シモンソンさん
の行く處へ、私もついて行くのですから。」

ひどく昂奮してゐたにも拘はらず、彼女はきつとネフリ
ュードフを見上げながら、この先き自分の言ふことはすつ
かり用意してゐるとも言ふやうに、口早に、明瞭に言つて
のけた。

「成程！」と、ネフリュードフが言つた。

「で、ドミートリイ様、若しあの方が私と一緒に暮す氣で。」
と言ひかけて、彼女は吃驚して言葉を切り、やがてすぐ言
ひ直した。「私を自分のそばに置く氣で居るのでしたら、
私としてはこの上もない事です。私はそれを幸福だと思は
ないわけには参りません。私としてはこれ以上……」

『矢張りシモンソンを愛してゐるために、自分が彼女に捧
げてゐる一切の犠牲を何とも思はないのか。それとも亦本
當に自分を愛し續けてゐる爲めに、自分の幸福を思つて心
にもない拒絶をして、シモンソンとその運命を共にし、永
久に埋れて了ふ簡なのか。いづれこの二つの中の一つに
相違ない。』と、ネフリュードフは思つた。かう思ふと、彼

は氣恥づかしくなつて、顔が赤くならずにはゐられなかつた。

「お前があつた男を愛してゐるのなら……。」と彼は言ひ出した。

「愛するのだ、愛しないのだつて、私もうそんなことはみんな捨てしまひました。シモンソンさんは全く特別なんですよ。」

「それはさうだね。」と、ネフリニードフは言ひ始めた。「彼は立派な人だ。だから僕は……」

彼女は、餘計なことを言はれても困るし、また自分が言ひ残しがあつてはと氣遣ふやうに、再び彼の言葉を遮ぎつた。

「いゝえ、あのドミートリイ様、私が若しあなたのお氣に召さないことをしてゐるのでしたら、どうぞ御免なすつて下さいまし。」と言つて、例の斜視の不可思議な眼眸で彼の眼を見入つた。「だつて、もうかうなるより外はありませんもの。それにあなたによつてお生きにならなければなりません。」

たつた今彼が自分自身に言つたばかりのことを、そのまま彼女は言ふのだつた。然し今となつては、もう彼はそれと思つてゐなかつた。そして全く別なことを感じ、別なことを思つてゐた。彼は恥づかしいばかりでなく、彼女と共に

に失はれてしまふ一切のことが惜しまれるのであつた。

「かうならうとは思ひも寄らなかつた。」と、彼は言つた。

「あなたは何時迄もこんな處で御苦勞なさることはないでせう。あなたの御苦勞はもう十分ですわ。」と言つて、彼女は、こりした。

「僕は苦勞どころか、寧ろ愉快だつた。だから出来ることなら、もつと／＼お前のために盡したいのだが。」

「私達は、」彼女は特に「私達は」と言つて、ネフリニードフを覗いた。「何も要りませんわ。あなたにはもう十分お世話になつて居りますから。これが若しあなたのやうなお方になかつたら……。」彼女は何か言はうとしたが、その聲が慄へて來たので止めた。

「僕は、お前からお禮を言はれるわけではない。」とネフリニードフは言つた。

「私達は何も勤定することはありませんわ。勤定はすべて神様がして下さいますから、」かう言ひきつた彼女の黒い眼には涙が一杯になつて、きら／＼光つた。

「お前は何かといふ善人だらう。」と、彼が言つた。

「私が善人ですつて？」と、彼女は涙に潤んだ聲で云つた。そして泣き出しさうな微笑にその顔を輝かした。

「もういゝですか。」と、その時イギリス人が訊いた。

「今直ぐ。」と答へて置いて、ネフリニードフは彼女にクルイリツォーフのことを訊ねた。

彼女は漸く落着いて、心靜かに、知れる限りのことを話した。それによると、クルイリツォーフは道中で非常に衰弱してしまつたので、直ちに病院へ入れられた。マリヤ・パウロウナが大膽氣を揉んで、看護のため入院したいと願つたけれど、許されなかつたといふことであつた。

「私、これでお暇しても宜しいでせうか？」と、イギリス人が待つてゐるのに氣がついて、彼女は言つた。

「僕はまださやうならとは言ひたくない。また會ふことにしよう。」と言つて、ネフリニードフは彼女に手を伸べた。

「御免下さい。」と彼女は聞えるか聞えない位の低い聲で言つた。二人は目と目を見合せた。そして彼女がこのやうに『さやうなら。』と言はず、特に『御免下さい。』と言つた時のその妙な斜視の眼眸と悲しげな微笑とで、ネフリニードフはすつかり分つた——彼女の決意の理由に就いての二つの假定の中、その後者の方が眞實であつた。つまり彼女は彼を愛してゐるのだが、そのために何時までも悪縁を繋いでゐたら、彼の一生を打ち壞すことになると氣遣ひ、態とシモンソンと一緒に身を避けて、彼を自由にさせようと考へてゐた。そして今彼女は自分の思ふ通りになつたのを悦ん

だが、それと同時に彼と別れることが辛かつたのである、——これがすつかりネフリニードフに分つた。

彼女はネフリニードフの手を固く握つて、直ぐに身を翻して出て行つた。

ネフリニードフは、自分と一緒に見廻らうとしてゐるイギリス人の方を振り返つて見ると、そのイギリス人は手帳へ何か記入してゐたので、ネフリニードフはそれを妨げまいとして、壁際の木造の長椅子へ腰を掛けた。すると俄かにひどい疲労を身を感じた。この疲労は、單なる睡眠不足とか、旅行とか、心配事などから來たものではなく、生に對する烈しい倦怠のやうに感じられた。彼は腰かけてゐた長椅子の背當に凭れて、眼を閉ぢてゐると、忽ちわれ知らずぐつぐつと死のやうな眠りに落ちた。

「さア、監房の方を御覽になりませんか？」と、典獄が訊いた。

ネフリニードフは、はつと氣がついて、こんな處に居つたのかと異しんだ。イギリス人はその記入を終へ、監房を見廻りたいと言つた。

ネフリニードフは氣乗りのしない、疲れ切つた様子で、その後からついて行つた。

二六

ネフリュードフとイギリス人と典獄とは、一人の看守に案内されて、控室から、嘔氣を催すほど悪臭のする廊下を通る時、其處で二人の囚人が床へ直接に放尿してゐるのを見て驚いた。それから第一監房へ入ると、内部には中程に寢床があつて、すべての囚人がもう横になつてゐるが、その數は約七十人であつた。彼等は頭と頭とを突き合せ、横腹と横腹とを接して寝てゐた。參觀人が入つて行くと、皆鎖の音をたてながら跳ね起きて、寢床の傍に立ち、つる／＼に半分剃られた頭を光らした。が、たゞ二人だけは寝たまゝでゐた。一人は熱でも出てゐるらしく、眞赤な顔をしてゐる若い男で、もう一人は、絶えず呻いてゐる老人であつた。

イギリス人は、その若い囚人がもう長い間病んでゐるのかと訊いた。典獄の言ふところによると、その男は今朝からであるが、老人の方はもうずつと以前から腸を病んでゐるのだつた。けれど病舎が疾から満員なので何處へも收容せずにあつたといふのであつた。イギリス人は感心しないやうな顔をして頭を振り、此處で一つ囚人達と談話を試みたいからと、ネフリュードフに通譯を頼んだ。このイギリス人は旅行しながらシベリヤの流刑や、監獄の研究をするとい

ふ目的の外に、もう一つ、信仰と贖罪による救ひの傳道といふ他の目的も有つてゐたのであつた。

「彼等に話してやつて下さい。キリストは彼等を憫み、彼等を愛してゐた。」と彼は説き出した。「そして彼等の代りに死なれた。若し彼等がこの事を信するならば救はれるであらう。」彼がかう言つてゐる間、すべての囚人達は手を兩脇に垂れたまゝ、寢床の傍に立つて黙つて聞いてゐた。「かう話してやつて下さい。この本にはそのことがすつかり書いてある。讀める人がありますか？」と、言葉を結んだ。すると、文字の讀める者が二十人以上居つた。

イギリス人は手提袋の中から五六冊の革綴ちの新約聖書を取出した。すると、硬い黒い爪を生やした澤山の荒くれた手が、麻の袖の下から彼の方へ押し合ひながら突き出された。彼はこの監房に二冊の聖書を分ち與へて、次の監房へ行つた。

第二の監房も同じであつた。空氣も臭氣も同一だつた。前の室と丁度同じやうに、前方の窓と窓との間に聖像が懸かつてゐて、扉の左手の處に汚物桶が置いてあつた。こゝでもまた同様に皆の者は横腹と横腹とをびつたり接して寝てゐた。そして前と同様に皆跳ね起き、前と同様に直立したが、丁度同じやうに矢張り三人の者が起きなかつた。二

人は半身を起して坐つたが、一人は寝たまゝ、入つて来た者を見ようともしなかつた。これは病人達であつた。イギリス人は矢張り前同と同様の話をして、同じやうに二冊の聖書を與へた。

第三の監房では何やら呼び合ふ聲と大騒ぎをしてゐる。氣勢がしてゐた。典獄はこつ／＼と叩いて、「氣を付け！」と叫んだ。扉が開くと、幾人かの病人と、喧嘩をしてゐる二人の者との外は、皆寢床の傍に直立してゐた。喧嘩をしてゐる二人は、憎悪に顔を歪めて、一人は髪のに、他の一人は頸髻に手をかけたまゝ、互に掴み合つてゐた。彼等はじつとかうしてゐて、看守が駆け寄つた時、漸く手を放し合つた。一方は血の出る程鼻を打たれて、流れ出る鼻汁や唾液や血を上衣の袖で拭いてゐた。他の一方は頸髻からむしり取られた毛を集めてゐた。

「監房長！」と、典獄が厳しい聲で叫んだ。

出て来たのは顔の美しい、屈強な男であつた。

「實は、何うにも手がつけられませんが。」と、その監房長は面白さうに眼で笑ひながら言つた。

「この通り續まるではないか。」と、鑿め面をしながら典獄が言つた。

「何だつて喧嘩したのですか？」と、イギリス人が訊いた。

ネフリュードフは監房長に喧嘩の原因を問うた。

「敷物のことからです。他人のものを、間違へたといふので。」と、まだ微笑を續けながら、監房長は言つた。「一方が突き飛ばすと、も一方が仕返すといふ具合でした。」

ネフリュードフはこれをイギリス人に話した。

「私はこの人達にも一言お話をしたいと思ひますが。」と、イギリス人はネフリュードフの通譯で典獄に願ひ出た。典獄が、「よろしい」と言つた。

そこでイギリス人は、例の革綴ぢの聖書を取り出した。

「何卒また譯して上げて下さい。」と、彼はネフリュードフに言つた。「あなた方は争つたり、喧嘩をしたりしました。

が、私共の身代りに死なれたキリストは、別な争論の解決法を私共に與へました。キリストの方法によれば、私共を辱める人を何うあしらふべきでせうか、誰か知つてゐる者はありませんか？」

ネフリュードフがイギリス人の話と問とを譯して聞かせた。

「お上の人に訴へて裁いて貰ふのぢやねえかね？」と、嚴めしい典獄を横目で見ながら、一人の者が問ふやうに答へた。

「悪い野郎は打ちのめすに限る。さうすれあ悪いこと

はしなくなる。」と、他の一人が言った。

それに同意するやうな笑ひ聲が幾つか聞えた。ネフリードフは彼等の答をイギリス人に譯してやつた。

「では、かう話してやつて下さい。キリストの教によると、丁度その反對のことをすればよいのです。若し片方の頬を打たれたら、他の頬をも差出してやるのです。」と、イギリス人は自分の頬を突き出す身振りをしながら話した。

ネフリードフはその通りに譯した。

「彼奴が自分でやつて見るがえうだ。」と、誰かの聲がした。

「他の頬まで打たしたら、その次には何の頬へたを出すだ？」と、寢てゐる病人の一人が言った。

「それえなことしたら、こつちが八つ裂きにされつちまふぜ。」

「ぢや、一つやつて見てくれ。」後の方で誰かかう言つて、面白さうに笑ひ出した。皆の者も嗜き出してしまつて、監房中が笑聲に満ちた。毆られた男までが、血や涙水の出るのも堪へて笑ひ聲を立てた。病人達も笑つてゐた。

イギリス人は顔色もかへなかつた。そして、不可能と思はれることも、信ずる者には、可能なもの、容易いものになると云ふ事を、彼等に傳へて欲しいと言つた。

「では、この人達は酒を飲むか訊いて下さい。」

「仰せの通り。」といふ一つの聲がした。すると又それと同時に鼻を鳴らす音や、高笑ひが起つた。

この監房には病人が四人ゐた。何故病人をみんな一室に纏めて置かないのかといふイギリス人の間に對して、典獄は、本人達がそれを望まないのだと答へた。そして是等の病人は傳染病患者でもないし、監獄醫も屢々回診して相當の手當をしてゐると説明した。

「醫者の奴、もう二週間も面を出さねえぜ。」といふ聲があつた。

典獄は何とも返答をしないで、そのまま次の監房へ案内して行つた。同じやうに扉があくと、皆起立して靜肅になつた。イギリス人は同じやうに聖書を分配した。第五の監房も、第六の監房も、右側左側どちらの監房も皆同様であつた。

徒刑囚の處から流刑囚の處へ移り、流刑囚の處から村拂ひになつた連中や志願で同行してゐる連中の處へも行つた。が、何處へ行つても、同じやうに凍えてゐる者、飢えてゐる者、怠けてゐる者、病氣に感染した者、辱められた者、閉ぢ込められた者などが、まるで野獸のやうな状態を現はしてゐた。

イギリス人は、聖書を豫定の數だけ頒ち與へると、もう

呉れるのを止めて、説教さへしなかつた。この惨憺たる光景、わけても息の窒るやうな空氣には、流石の彼も精力を減殺されたと思え、各監房毎に如何なる囚徒が收容されてゐるかを典獄から話して聞かされても、たゞ『成程』を繰返すばかりで、監房から監房へと移つて行つた。ネフリュードフはネフリュードフで、今更辭し去る力もなく、矢張り相變らずの疲労を感じながら、まるで夢遊病者のやうにふらふらと跟いて歩いた。

二七

流刑囚の居る或る監房で、ネフリュードフは、今朝渡船場に出會つた老人を見出して、吃驚した。見窄らしい、皺苦茶の顔をしてゐるこの老人は、肩の抜けた灰色の汚いルバーシニカを着て、同じやうなズボンを穿き、裸足で寢床の脇の床の上に胡坐をかいて、入つて来る人々を訝しげに鋭く見詰めてゐた。汚いルバーシニカの孔から見える彼の衰へた體は、見るも哀れな程弱々しかつたが、その顔は筏の上で見た時よりも一層緊張して嚴めしく、生々としてゐた。此處でも、他の監房と同様に、獄吏が入つて行くと、囚人達は皆跳ね起きて直立した。たゞその老人だけは坐つたまき動かなかつた。彼の眼はぎら／＼光り、眉の根は憤つた

やうに鑿められてゐた。

「立て！」と、典獄が彼に怒鳴つた。

老人は身動きもせず、たゞ嘲るやうに、にやりとした。

「お前の手下はお前の前に立つてるでねえか。俺はお前の手下ぢやねえ。お前にも極印がついてらア……。」と、老人は典獄の額を指示しながら、かう言ひ放つた。

「な、何だと？」典獄は彼ににじり寄り、威嚇するやうに言つた。

「私はこの人を知つてゐます。」と、ネフリュードフは急ぎ込んで、典獄にかう話した。「何うして收監されたのです？」

「旅行免狀を持つてゐないので、警察から送つてよこしました。こんな奴は連れて来るなど言つて置くのですが、矢張り連れて来るんです。」と、典獄は腹立たしげに横目で老人を睨みながら言つた。

「お前も矢張り反基督軍の片割れだつたのか？」と、老人はネフリュードフに向つた。

「いや、私は參觀に來たのです。」と、ネフリュードフは言つた。

「へえ、反基督が人民を虐げてゐる實況を見に來たといふのか？ さア／＼、見るがえ。人民を引捕へて、一と軍

隊もこんな檻かごん中へ押し込めてゐるだ。人間は額かぶたに汗かいて飯を食ふのが當然だに、まるで豚か何かのやうに押し込めて置いて、仕事あひらもさせねえで飼つてゐるだ。これぢや人間が畜生になつてしまふだ。」

「彼は何を言つてるのです？」と、イギリス人が問うた。

この老人は、人々を禁錮して置くのが不都合だと言つて典獄を非難してゐるといふことを、ネフリードフは話してやつた。

「では、法律を守らない者は何うすればよいのか、一つこの人の意見を訊いて見て下さい。」と、イギリス人は言つた。

ネフリードフはその質問を譯した。

老人は行儀のよい齒並を見せて、變な笑ひ方をした。

「法律か。」と、彼は嘲るやうに繰返した。「最初みんなの者から土地も持物も残らず掠奪し、それに逆らふ者は片端かたはしから殺しちまつておいて、あとから掠奪するな、殺すなつてな法律を作つたでねえか。それよりもつと前にこんな法律を作ればよかつたぞ。」

ネフリードフは譯して聞かせた。イギリス人は微笑した。

「それはまあよしとして、では今日の場合、盜賊や人殺しを何うすれば宜いか、訊ねて下さい。」

ネフリードフは再び彼の質問を譯した。老人は厳しく顔を顰しりぞめた。

「かう言つてやるがえ。先づ、自分の體からだから反基督アンチクリストの極印を取つてしまふこんだ。さうすれア盜賊かたも人殺しもなくなるつて、かう言つてやるがえ。」

「この人は氣が何うかしてゐます。」ネフリードフが老人の言つたことを譯してやると、イギリス人はかう言つた。そして肩をすぼめて監房から出た。

「人は自分のことをすれアえ。他人ひとのことは抛なつて置くがえ。誰にしたつて自分は自分だ。誰を罰し、誰を許すか、それは神様の知つてござるこんで、人間の知つたこんぢやねえ。」と、老人は言ひ放つた。自分が自分の長官になるかえ。さうすれア長官ながてなものは要らなくなるだ。行きなせえ。出て行きなせえ。」と、彼は監房から出逃つてゐるネフリードフに眼を光らせて、六ヶ敷い顔をしな

がらかう附け加へた。反基督アンチクリストの手下共が人間を餌にして虱を養つてるのがよく分つただべ。さア行きなせえ。――

ネフリードフは廊下に出て、イギリス人の傍かたわらへ寄つて行つた。イギリス人は典獄と二人で或る開かれた扉の處に立止まつてゐた。イギリス人はこの監房は何にする處かと訊いてゐた。それは死體室であつた。

「ほう！」と言つて、イギリス人はその中へ入つて見たいと言ひ出した。

その室は普通の小さい監房で、壁に小さなランプが點つてゐて、一隅に積み重ねてある袋や、薪や、右手の寢床の上の四つの死體を籠ろに照してゐた。粗末な麻のルバージュカに股引を着けた第一番の死體は身長の高い男で、小さい、尖つた鬚髯を蓄へ、頭は半分剃られてあつた。體はもうしやちこばつて、確かに胸の上で組まれてゐたらしい暗藍色の手は離れてゐたし、裸足の兩足も亦離れぬになつて、別々に踵を突き出してゐた。彼と並んで横になつてゐた、白い上衣に下袴姿の老女は、これまた何も履かず、薄い毛の疎い短い髪を結び、皺だらけの黄色い小さい顔には尖つた鼻がちよこんとついてゐた。その老婆の向うには、何だか藤色のものを纏つた男の死體があつた。その色を見ると、ネフリードフは不圖或る物を思ひ出した。彼は近寄つて、それをよく見た。

上の方へびんと跳ねた小さい尖つた鬚、きちんとした美しい鼻、白い高い額、薄い縮れた髪、——彼には見覚えのある顔であつたが、何うにも自分の眼を信ずることが出来なかつた。昨日彼はこの顔が憤慨し、惱んでゐるところを見たのであつた。それが今は黙然として動きもせず、凄

までに美しくなつてゐた。

さうだ。これはクルイリツォーフであつた。少くとも彼の物質的存在から残つた死骸であつた。

『何の爲めに彼は惱んでゐたのか？ 何の爲めに彼は生きてゐたのか？ 今はその悟りが開けたであらうか？』と、ネフリードフは考へた。が、その解答は無いやうに思はれた。死の他には何も無いと思はれた。すると彼は急に氣持が悪くなるのを覺えた。

ネフリードフはイギリス人には別れも告げずに、看守に案内を頼んで戸外へ連れ出して貰つた。それから、今夜經驗したことのすべては、是非とも一人になつて、よく熟考しなければならぬと感じたので、彼は直ちに辻馬車で旅館へ歸つた。

二八

ネフリードフは臥床に就かうともせず、旅館の一室内を長いこと往つたり來つたりしてゐた。カテューシャと彼の間の問題は終りを告げてゐた。彼はもう彼女に取つては不用の人間となつて了つた。それは悲しくもあり恥づかしくもあつた。けれど今彼を苦しめてゐた問題はそれではなかつた。彼のもう一つの仕事は、當に終結してゐないばかりではな

く、前よりも一層激しく彼を苦しめ、一層甚しく彼の活動を要求してゐるのであつた。これまで目撃して來て、近頃になつて漸く分つて來た怖ろしい非道——殊に今日あの慘憺たる獄舎に於いて見て來た非道、愛すべきクルイリツォーフをも亡してしまつた非道は、まるで世の中を我が物顔に勝ち誇つてゐるのであつた。そしてこれに打勝つことは愚か、これに打勝つべき方法を知ることさへも絶対に不可能のやうに見えた。

彼の想像のうちに浮んで來たのは、あの冷淡な將軍や、檢事や、典獄などのために、腐敗した空氣の中に監禁されてゐる幾百幾千の虐げられた人々であつた。更に思ひ出されるのは、官吏を叱責して、狂人抜ひにされてゐる不思議な豪膽不羈の老人と、死骸の中に交つてゐる憤死したクルイリツォーフの美しい、生氣の抜けた、蠟細工のやうな顔とであつた。するとやがて、こんなことを考へてゐる自分が狂人であるか、それともこんな非道を當然の事と思ひ込んで、どんなことでもしてゐる人々が狂人であるかといふ、以前にも浮んだことのある問題が新しい力を盛り返して來て、彼の前に立ち塞がり、解決を要求して止まないものであつた。

歩き疲れ、考へ疲れた彼は、ランプの前の長椅子に腰を

下して、イギリス人から記念に與へられた聖書（それは懷中のものを取り出す序に卓子の上に投げ出して置いたのであつた）を機械的に開いた。『この中には一切の解決があると言ふことだ。』と、彼は思つた。そして聖書を開いて、その開いたところ——即ち『馬太傳』の第十八章を読み始めた。

一、その時弟子達、イエスに來りて曰ひけるは、天國に於いて大なる者は誰ぞや。——と、彼は讀んで行つた。

二、イエス嬰兒を呼び、之を彼等の間に立て、

三、而して曰ひけるは、われまことに爾等に告げん、若し心を改めて嬰兒の如くならずば、天國に入ることを得じ。

四、されば、この嬰兒の如く自ら謙る者は、これ天國に於いて大なる者なり。

『さうだ。全くその通りだ。』と、彼は思つた。そしてこれまでの彼の經驗によつて見ても、生活の平和と歡喜とはたゞ自分を無にする程度の如何に懸つてゐたことを想ひ起した。

五、またわが名の爲めに斯くの如き一人の嬰兒を接くる者は我を接くるなり。

六、されど我を信ずるこの小兒の一人を礙かする者は、礙白をその頸にかけられて、海の深みに沈められん方なほ

勝るべし。

『これは何の事だらう。接くる者とは誰か、接くるとは何處へ接くることか？ 又わが名のためとは何を意味したのか？』これ等の言葉が少しも彼の心に響かないのを感じて、彼は自ら問うて見た。『頸に磔^{はり}曰^{いは}とは、海の深みとは、何のことだらう？ いや、これは何だか當つてゐない。的確でない、明瞭でない。』と彼は思つた。そしてこれまでも、幾度となく聖書を読みかけては、此處のやうな不明瞭な點にぶつかると、厭^{いと}になつて止めてしまつたことを憶ひ出した。彼は尙ほ第七節、第八節、第九節、第十節と進んで、磔^{はり}の機縁^{きえん}や、それ等がこの世に来るべきことや、地獄の火中に人々の投ぜらるゝ責罰^{せつばつ}のことや、また天父の顔を見る小兒等の天使のことなどを讀んだ。『こんなに矛盾だらけでは何とも遺憾である。』と彼は考へた。『けれど此處にも何だか善いものゝあるのが感じられる。』

一一、それ人の子は亡びたる者を尋ねて之を救はん爲めに來れり。——と彼は讀み續けた。

一二、爾^{なんぢ}等如何に思ふか？ 人もし百匹の羊あらんにその一匹迷はゞ、九十九匹を捨て置きて、迷ひし一匹を尋ねざるか？

一三、若したづねて之に遇はゞ、我れまことに爾^{なんぢ}等に告

げん、彼は迷はざる九十九匹の羊よりも、尙ほその一匹を喜ばん。

一四、是の如くこの小兒の一人の亡ぶるは天に在す爾^{なんぢ}等の父の御旨に非ず。

『さうだ、彼等の亡びるのは父の御心ではないのだ。それなのにあの通り、幾百幾千と纏つた人間が亡びてゐる。而も之が救済の道は無いのだ。』と、彼は考へた。

一一、その時ペトロ彼に來りて曰ひけるは、——と彼はなほ先を讀み續けた。——主よ、幾次までわが兄弟のわれに罪を犯すを赦すべきか、七次までか？

一二、イエス彼に曰ひけるは、爾に七次とは言はじ、七次を七十倍せよ。

一三、この故に天國は、その臣下と會計を調べんとする王の如し。

一四、調べ始めし時、千萬金の負債ある者を彼に曳き來りしに、

二五、償ひ方なかりければ、王は彼に命じて、その身、その妻、子供等と、あらゆる所有をみな賣りて償へと曰へり。

二六、その時、臣下俯伏^{うつぶさ}し拜して曰ひけるは、王よ、われを寛し給へ、さらば皆償ふべし。

二七、王はその臣下を憐みて、之を釋き、その負債を免したり。

二八、然るにその臣下はいで、己より銀一百の負債ある友に逢ひければ、之を執らへ、喉を抑へて、負債を返せと曰へり。

二九、その友足下に俯伏して求ひ曰ひけるは、われを寬し給へ、皆償ふべし。

三〇、然るに之を肯かずして、往き、その負債を償ふまで彼を獄に入れぬ。

三一、彼の友、その爲せる事を見て、甚だ哀しみ、往きて、この事を皆その王に告げたり。

三二、その時王彼を召びて曰ひけるは、悪しき臣よ、爾われに求ひしに因りて、われ爾の負債を悉く免したり。

三三、わが爾を憐みし如く、爾も亦その友を憐むべきにあらざや。

『つまり、これだけの事か?』と、ネフリードフはその句を讀み終ると、突然聲高く言つた。と、彼の全存在の内部の聲はかう囁いた。『さうだ、要するにこれだけの事だ。』で、精神生活を送つてゐる人々にあり勝ちな事が、ネフリードフにも起つた。といふのは、最初はたゞ異様で、逆理で、いや寧ろお笑草とさへ思はれてゐた考が、だん

だんと實人生に根ざして來て、今度は急に、最も單純な、疑ふ餘地のない眞理となつてしまつたのである。それで、人々を苦しめてゐる怖ろしい邪惡からの救ひの道は、たゞ人々が自分自身を神の前に常に罪人であると認め、隨つて他の人々を罰することも矯正することも出来るものでないと悟ることに在る。そしてこれが唯一の疑ふべからざる道であるといふ考が、今にしてはつきりとなつた。また、彼が監獄や宿營所で目撃したあの怖ろしい惡も、それ等の惡を行ふ人々の落着き拂つた自信も、すべて皆人々が、惡人でありながら惡を矯正しようといふ不可能なことをしたがつてゐる所から生ずるのだと、今にして分つた。惡癖ある人々が惡癖ある人々を矯正しようと思ひ、機械的方法でそれを達成しようと思つてゐるのだ。然しかうした一切のことから出て來る結果は、貪婪強慾の人々がこの空しき懲罰矯正を職業にして、自ら極度の墮落に陥ると同時に、自らが虚げてゐる人々をも絶えず墮落させてゐるのである。ネフリードフには今、彼の目撃したすべての慘事が何處から生ずるか、また之を絶滅せしめるためには何うすればよいかと明白になつた。これまで彼の見出し得なかつた解答は、實はキリストがペテロに與へた言葉に外ならなかつた。それはつまり、人として罪人でない者は無いのだから、隨つ

て人を罰したり矯正したりすることの出来る者は無いのだから、常にすべての人々を何遍でも限りなく赦さねばならないといふ一事に歸した。

『だが、かう簡単に片づけられる筈はない。』と、ネフリュードフは獨語した。けれどもこれが理論上ばかりか、實際上最も確實な解決であることは疑ふ餘地がなかつた。それが最初變に思はれたのは、彼があまりにその反對なことに狎れてゐたからである。それなら惡漢を何うすればよいのか、まさか處分しないで放任しても置けまい？——といふおきまりの駁論には、今はもう氣を揉まなかつた。この駁論は、懲罰なるものが犯罪を滅じ、犯罪者を矯正するものだといふことが、事實上證明されない限り、價値の無いものであつた。却つてその反證があがり、又、他人を矯正する權利を持つてゐる者はないといふことも明白になつた以上、最早、無用有害であるばかりか、慘酷無道なことを廢めて了ふ方が、吾々の爲し得る唯一の合理的な道である。吾々は幾世紀の間、犯罪者と認められた人々を罰して來た。それで、罪人は絶えてしまつたか？といふに、絶えないばかりか、懲罰によつて墮落させられる罪人によつて、また一つには、人々を裁き、人々を罰するところの、同じ罪人である裁判官、檢事、司法官、獄吏などによつて、益々その

數が増大されたばかりである。——してみると、この社會や一般秩序が兎も角も保たれてゐるのは、何もこれ等の法律に問はれた犯罪者や、他人を裁き、他人を懲罰する人々が存在してゐるからではなく、寧ろそのやうな墮落があるにも拘はらず、人々が矢張り互に憐み合ひ愛し合つてゐるからである。と、ネフリュードフは今にしてよく分つた。

ネフリュードフは更に、この考の確證を同じ聖書の中に見出さうと思つて、それを最初から讀み始めた。

山上の説教はネフリュードフの常に感動する所であつたが、今日はこゝへ讀みかゝると、驚くべき一大發見をした。この説教は、大部分が誇張した不可能な要求を述べた抽象的な美しい思想のやうに見えるが、決してそんなものではなく、實は簡單明瞭な、實際上實行し易い戒律である。若しこれを實行するならばそれは全く可能なことである、人間社會は全然新しい組織となり、あれ程ネフリュードフの心を亂した暴虐もその根柢から自然と消滅し、人類の獲得し得る最高の幸福——即ち地上に於ける神の國が出現するのであつた。その戒律といふのは五ヶ條である。

第一の戒律(馬太傳第五章二一——二六節)は、人は同胞を殺すべきでないのみならず、同胞に對して怒つてもならない。何人をも『莫迦』と思つてはならないのみならず、

若し誰かと不和の關係があつたら、先づ和睦してから、供物を神に捧げること、——即ち祈ることである。

第二の戒律(馬太傳第五章二七——三二節)は、人は姦通してはならないばかりでなく、女の美貌を見て心を動かしでもならぬ。一旦一人の女と結び合つたならば決して變心してはならぬ事。

第三の戒律(馬太傳第五章三三——三七節)は、人は何事に限らず誓を立て、約束してはならぬ事。

第四の戒律(馬太傳第五章三八——四二節)は、人は目を以て目に報いてはならぬのみならず、一方の頬を打たれたら、他の頬をも向けてやらねばならない。侮辱に遭つたら之を許し、溫和しく之を忍び、人から求めらるゝ事はこれを何人にも拒んではならぬ事。

第五の戒律(馬太傳第五章四三——四八節)は、人は敵を憎んだり之と鬪つたりしてはならないばかりでなく、彼等を愛し、彼等を助け、彼等に奉仕してやらねばならぬ事。

彼は點つてゐるランプの光に眼を据えて、じつと坐つてゐた。一方からは現在の生活の醜惡を悉く思ひ浮べ、他方からはすべての人がこの福音の精神で養はれる時、その生活はどんなものになるかを、はつきりと胸に描いた。すると、長いこと覺えなかつた大きな歡びがその心に充ち溢れ

た。久しい艱難辛苦の後に、忽ち安息と自由を見出したやうなものであつた。

彼は終夜眠らなかつた。そして、聖書を初めて讀む多くの人に有り勝ちなやうに、今まで何遍となく讀みなれてゐて、氣のつかなかつた言葉の全意義が、讀むにつれて分るのであつた。まるで海綿が水を吸収するやうに、彼はこの書物に啓示されるところの必要なる、重大な、喜ばしいものを十分に吸ひとつた。そして今讀んだところは皆知つてゐるやうな氣がした。が、これまでに疾うから知つてゐても十分に會得せず、十分に信ずることが出來ずにゐたところをもはつきりと掴み、はつきりと意識に收めたやうな氣がした。いや今はもうそれをすつかり意識し、それを固く信ずるやうになつた。

然し、そればかりではない。これ等の戒律を實行する時は人々はその望み得べき最高の幸福に達することが出來ると、彼は意識的に信ずるに至つた。また、如何なる人間にせよ、是等の戒律を實行する以外に何も爲すべきことはない。こゝに人生の唯一の合理的な意義が存してゐる。これを犯すことはどんなことでも誤りであつて、直ちに罰を伴ひ來るものであるといふことを意識的に信ずるやうになつた。これは實に戒律の全體から流れ出てゐるもので、それ

が殊に鮮かに、殊に力強く表現されてゐるのは、葡萄園の園丁に關する比喩譚であつた。園丁等は、自分達が主人の仕事をするために葡萄園に送られてゐることを忘れ、その葡萄園が自分の所有であるかの如く想像し、園の中にあるものはすべて皆自分達のために作られてあるかの如く思ひ、自分達の仕事はたゞこの園の中で自分達の生を樂しむにあると考へて、終に主人のことも、主人に對する自分達の義務も忘れてしまひ、彼等に主人のことを思ひ出させようとした使者をも殺害したのである。

『吾々とても丁度これと同じことをしてゐるのだ。』と、ネフリュードフは考へた。『吾々自身か吾々の生命の持主であると思ひ、この生命は吾々の快樂のために吾々に與へられたのだといふ、無稽な信念を抱いて生きてゐる。が、これは明白な誤りである。若し吾々がこの地上へ遣はされたものであるとすれば、それは何者かの意志によつて、何等かの目的のために遣はされた筈である。然るに、吾々はたゞ自分の快樂のために生活するのだと決め込んでゐる。これでは、主人の意志を實行しなかつた葡萄園の園丁が酷い目に逢ふのと同じやうに、吾々も觀面その報を受けねばなるまい。而も主人の意志は此等の戒律のうちに表示されてゐるのだ。人々はたゞ此等の戒律を實行するだけで十分で

ある。さうすれば自から地上に神の國が建設されるのだ。そして人々は達し得られる限りの至大なる幸福を享けるやうになるのだ。

（爾等先づ神の國と、その義とを求めよ。然らば是等のものは皆爾等に加へらるべし。）と言はれてゐるのに、吾々は、その他のものばかりを探し求めてゐる。それが見出せないのは火を賭るよりも明かである。

さうだ、此處に自分の終生の事業がある。やつと一つの仕事が終わつたと思ふと、もう別の仕事が始まつてゐる。』

この夜以來、ネフリュードフにとつては、全く新しい生活が始まつた。それは、彼が新しい生活條件に入つたからだといふばかりでなく、その時以來彼の身邊に起つた事が、以前とは全く異つた意義を持つてゐるやうになつたからである。

彼の生活のこの新しい時期が、果してどんな風な結末をつけるであらうか——それは、たゞ未來が示すであらう。

了

晩年のトルストイは作家でもなければ批評家でもなく、また哲學者でもない。彼は全く聖人である。醒めた賢人である。その身邊には一種の軟かな光が輝いてゐる。凡て安靜と調和の象である。それでトルストイに對した時の氣持は温かく、軟かな、ふうわりとした夢のやうな氣持である。その頬や顎の軟かな髯、その粗末な外套、その蒼く輝やける雙の眼——凡てがしんみりとした靜かな印象を與へる。

——アンドレエフ——

主人と下男

トルストイ著
昇曙夢譯

それは一八七〇年代の冬のニコライ祭の翌日であつた。教區は引續きお祭であつたので、村の區長をしてゐる第二級商人、ワシーリイ・アンドレーキチ・ブレフノフは何うにも出抜けるわけに行かなかつた、——教會の世話役であつたから——教會へも顔を出さねばならず、家でも親戚知己を招いで御馳走してやらなければならなかつた。でも、漸く最後の客達が歸つたので、早速出掛ける支度にかゝつた。行先は隣り村の地主の家で、もう疾うに値踏みをして置いた山林を買取るためであつた。彼が出發を急いだのは、この有利な買物を市の商人連に横取りされたくないからであつた。年若い地主は、彼が七千ルーブリと値踏をしたのに附け込んで、一萬でなければと言ふのであつた。ところがその七千ルーブリといふのは、山林の本當の價值から見れば三分の一にしか當つてゐなかつたが、彼は、事によつた

らもう少し値切れるかも知れないと思つた。といふのは、その山林が彼の繩張内に在るのだし、また彼と田舎商人連との間には、他人の繩張内へ入つて来て競り合はないことに、ちやんと規約があつたからである。然し彼は、縣廳所在地の材木商共がゴリヤーチキンの山林を買ひたがつてゐることを聞き込んだので、直ぐ出掛けて行つて、その地主と話をつけてしまはうと決心した。そこで、祭が済むと、箆筒の中から自分の七千ルーブリを取出し、三千ルーブリに纏めるように、預つてゐる教會の金から二千三百ルーブリを足して、さて、念入りにそれを數へて見てから紙入に差込み、出立の支度をした。

この日、數ある下男のうちで唯一人素面であつた下男のニキータが、馬の用意に飛んで來た。ニキータがこの日酒を飲まずにゐたのには理由があつた。彼はもと／＼呑んだくれだつたが、齋の初めに外套や革製の長靴を飲んで了つてからは、斷然酒を止めて、もうこゝ二ヶ月も飲まずにゐた。そして祭の最初の二日間到的處で飲み交される酒に腹の蟲をそゝられながらも、今以て禁酒を續けてゐるのであつた。ニキータは隣村生れの百姓で、年は五十であつた。噂の通り、彼は曾て一家の主人であつたことがなく、一生の大部分といふものを、自分の家でない、他人の家に送つて來

た。で、何處へ行つても彼はその勤勉と、氣輕さと、熱心と、それから殊に人の好い快活な性質とで珍重された。けれど年に二度位、時にはそれ以上も、飲み過ぎをやつて、身に着けた一切のものを飲んで了ふばかりでなく、氣が荒くなつて、喧嘩を吹つかけるので、何處へ行つても長續きはしなかつた。ワシリーイ・アンドレーキチも何遍か彼を追ひ出したが、その正直なのと、動物を可愛がるのと、それから何よりも給金の廉いのを重寶がつてゐたので、直ぐ又連れ戻した。そしてかういふ下男の通り相場になつてゐる八十ルーブリを拂つたことがなく、ざつと四十ルーブリそこらをあてがつてゐたが、それすらちび／＼小出しにして勘定をはつきりつけなければかりか、大抵は現金でなく、店の品物を高い値で押しつけてゐた。

ニキータの女房のマルファは、元は繚繚好しで、なか／＼の強か者で、一人の小僧と、二人の娘を相手に家の切り盛りをやつてゐて、亭主のニキータを家に引き入れようとしなかつた。といふのは、素面の亭主なら思ふまゝにこき使へたが、呑んだくれた時の亭主は火のやうに怖かつたからであつた。一度など家で酔ひどれてしまつて、不斷素面でゐる時尻に敷かれてゐるその腹癒せをするつもりか、女房の箆箭を敵き壞し、彼女の一番大切にしてゐる衣裳を取り

出し、斧を揮つて、その袖無外套や衣類を切株の上でずたずたにたゞき切つてしまつたこともあつた。その稼ぎ出す給金は、残らず女房に捲上げられてゐたが、ニキータもこれには逆らはなかつた。こんなわけで、今度もお祭の二日前に、マルファがワシリーイ・アンドレーキチの家へやつて来て、白い小麦粉、茶、砂糖、酒七升、めて三ルーブリ程の物を手に入れ、更に現金五ルーブリを受取つて、それをさも特別の恩恵か何ぞのやうに感謝して歸つたのであつた。だがその實、ワシリーイ・アンドレーキチの方にはまだ、どんなに少なく見積つても二十ルーブリの拂ひ残りがあつた。

「お前とは別に約束がしてあつたわけではあるまい。」とワシリーイ・アンドレーキチはニキータに言つた。「要るものがあつたら、何でも取るがよい。それだけのことは又してやるのだから。他處とは違つて、やれ勘定だとか、やれ罰金だとか、面倒なことはしない。直で行くんだ。お前は俺に奉公してくれる以上、俺はお前を抛つて置くやうなことはしやしないよ。」

ワシリーイ・アンドレーキチはかう言ひながら、本當に自分分はニキータに恩恵を垂れてゐるのだと思ひ込んでゐた。といふのは、彼は説得することが巧かつたし、また、ニキ

「タを始め、すべて彼と金銭上の關係を結んでゐる者は皆、瞞着されてゐるのでなく、親切にして貰つてゐるのだと思つて、彌が上にも彼の慢心を支へてゐたからだつた。」

「いや、よく分りやした、ワシリーイ・アンドレーキチ様。俺も何だか生みの父親にでも盡くすやうな氣で精出してゐやすだ。本當によく分りやした。」ニキータはかう答へながらワシリーイ・アンドレーキチが自分を瞞してゐることはよく分つてゐたが、然しそれと同時に又、今勘定のことをかれこれ言つたところで始まらない、それよりか他に奉公口の出来るまでは此處に辛抱してゐて、あてがはれるものを貰つてゐる方がよいと思つたのであつた。

今、主人から馬の用意を言ひつけられると、ニキータは何時もの通り、快活に、忠實に、鷲鳥のやうなちよこした歩調で物置へ行き、其處の釘から總つきの重たい鞞皮の轡をとりはづし、その鑲をちやらく鳴らしながら、扉の閉つてゐる厩の方へ歩いて行つた。厩にはワシリーイ・アンドレーキチが用意を命じた馬が一頭だけゐた。

「何うした、退屈したか。退屈したか、莫迦。」中背の、恰好のとれた、幾分尻こけの、褐色が、つた栗毛の若い馬が、ひとり厩の中に立つてゐて、彼を迎へると軽く會釋するやうに嘶いたので、ニキータはそれに答へてかう言つた。――

「よし／＼、待つてろ。先づ水を飲むが、いゝだ。」彼は全く言葉の分る者と話をするやうに、馬と話してゐた。そして、肥つた、中程に溝のついた、ひどく埃に塗れた背を着物の端で拂つてから、美しい若い馬の顔に轡をはめ、耳や頭の毛を直し、索を外して、水飲みに引張り出した。

栗毛は高く粟の積んである厩から靜かに出ると、飛んだり跳ねたりして、一緒に井戸の方へ駈けて行くニキータへ、後脚をあげて蹴る眞似をした。

「巫山戯るでねえよ、巫山戯るでねえよ、畜生！」斯う言ひながらもニキータは、栗毛がほんの唯脂じみた半外套に觸るだけで、強くぶつからないやうに後脚を跳ね上げたその用心深さを知つてゐた。また彼はさうした癖を特に好んでゐた。

冷たい水を飲むと、馬は濡れた硬い唇を動かして、一と息吐いた。唇の鬚から水槽の中へ透明な雫が滴り落ちた。馬は一と息吐くと、何か考へ事でもするやうにうつとりしてゐたが、やがて俄かに荒々しく鼻を鳴らした。

「欲しくなけりやア、もう止すだ。よし／＼。だが後で欲しがるでねえよ。」と言つて、ニキータはその栗毛に自分のしてゐることを至極眞面目に細々と聞かせてゐた。それから小躍しては、邸中に響きわたるやうな脚音を立てる快活

な若い馬の手綱をとつて、また物置の方へ引つ張つて行つた。

奉公人は誰もゐなかつた。たゞ一人他處の者で、お祭を祝ひに來た女コックの亭主がゐるだけであつた。

「おい／＼。ちよつくら訊いて來て貰えてえな。」と、ニキータはその男に言つた。「旦那のつけろといふ櫓は大きい櫓だか、小せえ櫓だか、どちらだかな。」

女コックの亭主は、鐘葺屋根の、土臺の高い家へ行つて、程なく、小さい櫓をつけるのだといふ返事を齎らして來た。ニキータはこの時もう頸輪を嵌め、鉞の一面に打つてある鞍褥を結びつけ、それから片手に飾りのある軽い鞆を持ち、他の片手で馬を引張りながら、物置の屋根下に立つてゐる二臺の櫓へ近づいてゐるのであつた。

「小せえ方だら、小せえ方にすべえよ。」と言つた。そして彼は、咬みつく真似ばかりしてゐる伶俐な馬を、鞍の間へつれ込んで、女コックの亭主の手を借りて、櫓をつけ始めた。

何も彼も殆ど出來て、あとは手綱をつけるだけになつた時、ニキータは女コックの亭主を使つて、物置の裏と、倉庫の粗布を持つて來させた。

「これでえゝだ。これ／＼、さう暴れるでねえ。」ニキータ

タは、女コックの亭主の持つて來た、實を落して間もない燕麥の粟を櫓の中へ押し込みながらかう言つた。「——今度、は、ズックを敷いて、その上に粗布を置くだ。あゝ、これだえゝ、これでえゝ。これだら坐り心地がえゝだべえ。」と言ふ傍から一つ／＼やつて行つた。そして座席のぐるりの粟の上に粗布を押當てゝゐた。

「これでえゝだ、どうも有難う。」と、ニキータは女コックの亭主に言つた。「——何でも二人でやると抄行くだなア。」

それから結び目の端に録のついてゐる鞆皮の手綱をとると、ニキータは馭者臺に乗つて、歩きたがつてゐた元氣のいゝ馬を動かして、庭の凍てついた敷粟の上を門の方へと進んだ。

「ミキート爺や。爺や、爺やてば。」彼の後ろから細い聲を揚げたのは、玄關から庭の方へ慌てゝ駈けて來る七歳の少年であつた。黒い半外套を着、新しい白い冬靴を穿いて、暖かい帽子を被つてゐた。「乗せておくれよ。」走りながら半外套の鈕釦を掛け／＼願ふやうに言つた。

「あゝ、あゝ來なせえよ、坊つちやま。」とニキータは言つた。そして馬を止めると、喜びに輝く蒼白い瘦せぎすの主人の子供を乗せて街路に出た。

二時過ぎであつた。氷點下十度といふ寒さで、どんより曇つてゐる上に、風があつた。空の半分は低い暗い雲に掩はれてゐて、中庭は静かだつたが、街路は風が強く、隣家の物置の屋根から雪が吹き下されて、隅つこや、風呂場の傍で渦を巻いてゐた。漸くニキータが門を抜けて、馬を階段の處へ着けると、もうワシリイ・アンドレーキチは口に紙巻煙草をくはへ、覆のある羊皮の外套をつけ、下の方へぎゆつと帯をしめて、玄關から出て來た。そして縫飾りの附いた冬靴の革をぎゅう／＼鳴らしながら、雪の踏みつけられた高い階段に立止まり、紙巻煙草の残りを一と吸ひ吸つて、それを足下に投げて踏みつけた。そして口髭の奥から煙を出しながら、いま出掛けようとしてゐる馬を斜に見た。そして口髭の外はよく剃つてある緒ら顔の兩方へ外套の襟を立て、毛皮を内側へ突込んで、呼吸のために毛が汗ばまないやうにした。

「ほう、この腕白め、もう乗つてゐるな！」彼は檯の上の息子を見て言つた。

ワシリイ・アンドレーキチは客と一緒に飲んだ酒で興奮してゐた。だから、彼が所有してゐる一切のもの、彼が行つたすべての事に對していつもより満足であつた。心の中ではもう相續人と決めてゐた息子の様子が、今は特に大き

な喜びを與へてくれるので、眼を細くし、長い齒を現はしながら息子を見てゐた。

眼だけ見えるやうに出して、頭から肩まで毛織の肩掛で包んだ、蒼白い、瘦せ形のワシリイ・アンドレーキチの妻は、彼を送り出して來て、その背後の玄關内に立つてゐた。

「ほんとに、ニキータをお連れになつた方がいゝですよ。」おづ／＼と扉の蔭から出て來て、彼女はかう言つた。

ワシリイ・アンドレーキチは何とも答へなかつた。そして、彼女の言葉に不快を覺えたらしく、腹立たしげに顔を顰め、べつと唾を吐いた。

「お金を持つてゐらつしやるんでせう。」と、相變らず哀れつばい聲で言ひ續けた。——「それに天氣も氣になるし、本當にどうしたらいいでせう。」

「何を言ふんだい。知らない路ぢやあるまいし。案内者なんか要るもんか。」と、彼がいつも商賣相手と話をする時のやうに、不自然に唇を引き緊め、一語々々を態とはつきり發音しながら、言ひ放つた。

「でも、本當に連れてつて下さいよ。お願ひですから。」と、一方へ肩掛を引つぱりながら、妻は繰返した。

「何だつてさう、つまらん事を言ひ出すんだ……。一體速

れてつて何になるんだ？」

「いや、ワシリーイ・アンドレーキチ様、俺はお供しますだよ。」と、快活にニキータは言つた。「たゞ俺の留守中に馬共さ一度餌を遣つて貰えりやえゝでがす。」と、今度は主婦に向つて言つた。

「それは私が見るよ、ニキータ。セミヨンに云ひつけておくから。」と、主婦が言つた。

「ではお供しますよ、ニキータ。ワシリーイ・アンドレーキチ様。」と、承諾を期待しながらニキータは言つた。

「まあ、婆さんのいふ事に降参するとしよう。だが行くなら行くで、もう少し暖かい外出着を引つ掛けて来るがいゝ。」と言つて、ワシリーイ・アンドレーキチは又もにこゝし出した。そして片眼を隠しながらニキータの半外套を見てゐた。それは腋の下や背中穴があき、裾はぼろ／＼に破れ、脂じみて、縫れ／＼になつて、とても見られたものではなかつた。

「おいお前様、ちよつくら、この馬を押へてみてくんなよ。」と、ニキータは中庭の方にゐる女コックの亭主に聲をかけた。

「僕持つてるよ、僕持つてるよ！」と、少年が凍えて赤くなつた手をポケットから出して、冷たい鞞皮の手綱を取りな

がら細い聲を出した。

「外出着はいゝが、あまりめかし込んでみちや駄目だぞ。早くしろよ。」と、ワシリーイ・アンドレーキチはニキータに笑ひかけながら大聲に言つた。

「一と息にやつて來ますだ、旦那、ワシリーイ・アンドレーキチ様。」と言つて、ニキータはフェルトの底を縫ひつけたぼろ／＼の冬靴と、その内側の靴下をちらつかせながら威勢よく中庭の方へ駈けて行つて、下男部屋へ入つた。

「おい、アリーヌシカ、俺の上衣を燧燼のところから取つてくれ。旦那と一緒に言つて來るだ。」ニキータは小屋の中へ駈け込むなり、釘にかゝつてゐた帯に手をかけてさう言つた。

晝食後ぐつすり午睡をしてゐて、やつと今亭主のためにサモワルの湯を立てた女コックは快活にニキータを迎へた。そして男の急ぎ込んでゐるのに釣り込まれて、自分も同様にあたふたと體を動かして、燧燼の傍に乾してあつた粗末な、着古した羅紗の上衣をとつて來て、急いで振つたり、揉んだりし始めた。

「これでお前も亭主とゆつくり遊べるだべ。」と、ニキータはその女コックに言つた。ニキータは愛想のよい質なので人と差向ひになると、いつも何かしら言葉のつき穂を見つ

けるのだつた。

そこで彼は、狭い古ぼけた帯を腰に廻しながら、瘦せ細つた腹を凹まして、力のありつたけ、半外套の上から緊めつけた。

「さア、これでえ。」と、今度は女コックに話すと云ふよりは、自分の帯に物を云ひかけながら、その兩端を腰に挟んだ。「かうしたらお前は跳び出しやすめえな。」と言つて、更に兩手の動き具合がよくなるやうに肩を上げ下げし、上衣をひつけてからまた兩手の利くやうに背中を伸ばしたり腋の下を直したりして、棚の上から手袋を取つた。「先づこれでえ。」

「あれステパーヌイチ(ニキータ)、履物を換へなくつちやいけまい。」と女コックが言つた。「それではひど過ぎるわ。」ニキータは立止まつて、何やら思ひ起したらしかつた。

「そりやア換へるがえ。」だが……。まあこんで何うにか濟ませるだ。——そねえな遠方でもねえだ。」と、彼は庭へ急いだ。

「ニキータ、お前それで寒くないのかい？」と、彼が襦袢へ寄つた時、主婦が言つた。

「なあに、こんで寒かねえでさ、暖かですア。」答へながらも、ニキータは兩足を包むために襦袢の前部の釦をなほし、

良い馬には不要な鞭を繫の下へしまひ込んだ。

ワशीリイ・アンドレーキチはもう襦袢に乗り込んで、外套二枚で包んだ背中を、車臺の彎曲した後部一杯に擴げてゐるが、直ぐに手綱を取つて馬を出した。ニキータは進むにつれて前方の左側に落着いて、片足を突き出してゐた。

二

馬は襦袢の滑り木を軽く軋らしながら引張り出して、村の平坦な凍つた道を軽快な足取りで進んだ。

「こら、そんな所にくつゝいてるんぢやない！ おいミキート、鞭を寄越せ。」と、後方から滑木の上に乗つかつてゐる息子を見て、堪らなく嬉しがりながら、ワशीリイ・アンドレーキチは叫んだ。——「かうしてくれるぞ。早くお母さんの所へおいで。」

少年は飛び降りた。栗毛は歩調を早めて、蹄の音高く速足に變つた。

ワशीリイ・アンドレーキチが住まつてゐるクレストイは六軒しか家のないところだつた。一番はづれの鍛冶屋の向うへ出ると、彼等は思つたよりずつと風の強いことが直ぐ分つた。道路はもう殆ど分らなかつた。

襦袢の跡は忽ち消されてしまふので、道路を見分けるてだ

てとしては、たゞ道路の方があたりの地面より高いといふことだけであつた。吹雪は原一面に渦巻いて、何處で天と地とが繋がつてゐるのか見界もつかかなかつた。いつもならはつきり見えるテリヤティンの森も粉雪を隔て、時々ぼんやりと黒く見えるだけであつた。風は左から吹いて、栗毛のしつかりした肥つた頸の鬃を執拗く吹き拂ひ、まるで何か東のやうに逆立つたむく／＼した尾を脇へ吹きそらしてゐた。ニキータの長い襟も、風に押しつけられて、その顔や鼻にびつたり當つてゐた。

「この雪ぢや、此奴だつて思ふやうには駆けられまいて。」と、自分の良馬を誇りながら、ワシリーイ・アンドレーキチは言つた。「この前バシューティノへこの馬で出掛けた時には、三十分で着いてしまつたが。」

「何でがす？」と、ニキータは襟が被さつてゐるために聞き損つて問ひ返した。

「バシューティノへな、三十分で着いたつてことよ。」ワシリーイ・アンドレーキチは怒鳴つた。

「そりや、もう良い馬でがす！」と、ニキータが言つた。

二人は黙つた。然しワシリーイ・アンドレーキチは何か話したかつた。「春までに馬を買ふ氣かい？」と、相變らず大きな聲で言ひかけた。

「え、買はなきやなんねえでがすよ。」ニキータは上衣の襟をはだけながら、主人の方へ身を傾けて答へた。「年齢の若え奴をね。自分で耕すんがすからなア。これまでのやうに借りてばかりも居られねえでがすよ。」と、彼は言つた。

「何うだい、あのよぼ／＼したのを買つては。俺も高いことは言はないぜ。」ワシリーイ・アンドレーキチは彼の頭の働きを全部捕へてしまつた大好きな仕事——ぼろ儲け——にぶつかつて、自らも興奮してゐるのを感じながらかう叫んだ。

「だげんど俺に十五ルーブリも貸してくんなさつたら、馬市さ行つて買つて來ますだ。」と言つたニキータは、今ワシリーイ・アンドレーキチが彼に押しつけようとしてゐるやぐざ馬は高々七ルーブリ位のものである事や、ワシリーイ・アンドレーキチがそれを彼に譲つて二十五ルーブリ位の勘定にするのだといふことや、又そんなことをしてゐては半年稼いでも一文も手に入らないといふことをちやんと知つてゐた。

「い、馬だよ。俺はお前を自分のことのやうに思つて言ふのだ。そりや心から言ふのだよ。このブレフノフは人に恥をかゝしたことなくありやしない。自分のものは棄て

てかゝつてゐるのだ。世間の奴等とは人間が違ふからね。本當の話だよ。」と、彼は商賈人相手に口を利く時の調子で叫び續けた。「本當に馬らしい馬だぜ。」

「さうでがすとも。」と言つて、ニキータは溜息を一つ吐き、もうこの上聞く必要はないと思つて、襟にかけた手を放した。と、襟は忽ち彼の耳と顔とを掩らた。

三十分ばかりの間二人は話しもせずに進んだ。風は外套の縫ひてる處を突いて、ニキータの横腹や手に當つた。

彼は身を縮め、その口に被さつてゐる襟の中で呼吸をした。すると、全身が寒くなくなつた。

「どつちにしよう、カラムイシエヲを通つて行くか、それとも眞直に行くか。」と、ワシーリイ・アンドレーキチは訊いた。

カラムイシエヲを通つて行く道は、立派な道標が二列に設けてあつて、割合に人通りは多いけれど、道程は遠かつた。眞直ぐ行けば近い代りに、人通りが少なく、道標もなく、あつたにしても確なものでないから、雪に埋もれてゐるに相違なかつた。

ニキータは一寸思索した。

「カラムイシエヲの方が遠くても樂でがす。」と、彼は言つた。

「だが眞直ぐ行くにしても、窪地を通る時迷はないやうにすりやア、あとは林だから大丈夫だ。」と、ワシーリイ・アンドレーキチは眞直ぐに行きたいやうなことを言つた。

「そりやアどつちでもようござえやすだ。」と言つて、ニキータは再び襟を離した。

ワシーリイ・アンドレーキチは自分の思ひ通りにした。

そして半露里も来た頃、風に揺られてゐる高い樫の木之處から左へ折れた。木の上にはまだ干乾びた葉がそこゝに残つてゐた。

左へ曲つてからは風は殆ど眞正面に當るやうになつた。

雪も上から降つて來た。ワシーリイ・アンドレーキチは馬を操りながら、頬を脹らませて、下の方から鼻毛の中へ息を吹き込んでゐた。ニキータはうとく寝入つてゐた。

彼等はこんな風にして約十分も黙つて行つた。すると俄かにワシーリイ・アンドレーキチが何やら言ひ出した。

「何でがす。」ニキータは眼を開いて聞いた。

ワシーリイ・アンドレーキチはそれには答へず、前屈みになつて馬の前後をきよ／＼と見てゐた。馬は股の根や頸の上にかいた汗のために毛がもちやく／＼になり、今はゆつくり歩いてゐた。

「お前様、何でがすか。」ニキータは又繰返した。

「何でかすか。」ワシリーイ・アンドレーキチは腹立たしげに口眞似した。「道標が見えなくなつた！ 路を間違へたに違ひない！」

「ぢや、止めてくらつせえ。俺が路を見て來ますだ。」と、ニキータは言つた。そしてひらりと橇から跳ね降り、粟の下から鞭を取り出して、今まで坐つてゐた側から左の方へ歩き出した。

今年の雪は深くはなかつたから、路は何處にもついてゐたが、處によつては矢張り膝まで位ゐあつて、ニキータの長靴は時々埋まつた。で、彼は足と鞭とで探しながら歩いてゐたが、路は何處にも見つからなかつた。

「何うだい？」と、ニキータか橇の處へ歸つて來たのを見て、ワシリーイ・アンドレーキチが訊いた。

「こつち側にもや路がありましねえ。そつちの側さ行つて見ますだ。」

「何だか向うに黒ずんでるものがある。お前、あすこまで行つて見る。」と、ワシリーイ・アンドレーキチが言つた。

ニキータは出掛けて行つて、その黒ずんでゐるものゝ傍へ寄つた。——と、それは收穫時に掻き寄せた土が雪の上へ崩れかゝつて、そして雪を黒く彩つてゐるのであつた。ニキータは右側をも歩いて見た後、橇へ戻つて、體の雪を

拂ひ落し、一方の長靴からも雪をふるひ出して、橇に乗つた。

「右の方さ行くがすよ。」と、きつぱりした聲で、彼は言つた。——「さつきの風は俺の左に當つてゐやしたが、今は眞正面から來ますだ。右の方さ行くがすよ。」

ワシリーイ・アンドレーキチは言はれるまゝに、右の方へ行つた。然しやつぱり路は無かつた。彼等はこんな風にして暫く進んで行つた。風は靜まらずに細かい雪が降り出して來た。

「ワシリーイ・アンドレーキチ様、俺等すっかり迷ひ込んでまつたと見えますだ。」俄にニキータは面白さうに言つた。「あれを見さつしやい。」と、言ひながら、雪の下から突き出てゐる馬鈴薯の黒い莖を指した。

ワシリーイ・アンドレーキチは、もう汗をかいて横腹を苦しさに波打たせてゐる馬を止めた。

「何うしてさ？」と彼が言つた。

「何うしてつて、俺等ザハローフの畑さ來てるがすよ。飛んでもねえとこさ來たもんだ。」

「嘘吐け！」ワシリーイ・アンドレーキチは言つた。

「本當ががすよ、ワシリーイ・アンドレーキチ様、本當のことを言つてるがす。」と、ニキータは言つた。「橇の迂り

具合から言つたつて、今馬鈴薯の畑に違えねえでがすよ。ほら、向うに塵塚がありますだ、ありや馬鈴薯の莖を積んだものでがすよ。何うしたつて、ザハローフの畑でござえやす。」

「飛んでもないところへ迷ひ込んだものだ！」と、ワシリーイ・アンドレーキチは言つた。「何うしたらいいんだ？」

「なほに、眞直ぐに行くだけのこんでがす。屹度何處かへ出られますだ。」と、ニキータが言つた。「ザハローフカへ出なけりやア、且那の小屋のところでへでも出ますだ。」

ワシリーイ・アンドレーキチはそれに従つて、ニキータの言ふなりに馬を飛ばした。二人はかうして可なり長いこと進んだ。露出した野菜畑に差しかゝると、穢が凍つた土塊にぶつかつて音を立てた。收穫あとの切株の上や、冬蒔や、春蒔の畠などを通ると、雪の下から、風に揺れる苦蓬や粟などが見えた。また時には、見渡す限りたゞ一様に眞白く、何一つ見えない、平坦な深い雪の中へ乗り入れることもあつた。

雪は上から落ちるばかりでなく、下から捲きあがることもあつた。馬もさすがに疲れたらしく、體ぢうの毛がよれよれになり、汗のために霜が出来て、緩やかな歩調で歩いてゐた。と、突然馬が、水穴か溝かへ落ちた。ワシリーイ・アン

ドレーキチは停めようとする、ニキータが怒鳴り立てた。「なんで停めなざるだ。おやんなせえ、一度入つてから出なくつちやなんねえだ。ほうら、可愛い奴、ほらく、兄弟！」彼は穢から飛出して、自分も溝に入り、快活に馬に呼びかけた。

馬は全力を振つて、忽ち凍つた盛り土の上へ出た。それは正しく掘つて拵へた溝であつた。

「ところで、此處は何の邊だらう？」と、ワシリーイ・アンドレーキチが言つた。

「直き分りやすだよ。」とニキータは答へた。「兎に角行きせえすりやア、きつと何處かへ出られますだ。」

「おう、あれはゴリヤーチキンの森に違ひないな？」と言ひながら、ワシリーイ・アンドレーキチは前方遙かに雪を透して見えかゝつた黒いものを指した。

「森だか何だか、今行つて見りやア分りますだ。」と、ニキータが言つた。

ニキータは、その黒ずんでゐるものゝ方から河楊の細長い枯葉が飛んで来るのを見て、それが森ではなく、人家のある處だと分つたが、口に出して言ひたくもなかつた。果して彼等が溝の處から十サージエン（一サージエンは投）も進まないうちに眼前に立樹らしいものが黒く立現はれ、何とな

く初めて聞くやうな、うら淋しい響が聞えて來た。ニキータの推測は違はなかつた。やつぱり森ではなくて、所々落ち残つた葉を顛はしてゐる高い河楊の並木であつた。その河楊は紛れもなく、納屋の溝に沿うて植ゑられてあつた。樹さうに風に唸つてゐる河楊の處へ近づくと、馬は不意に櫓よりも高く前脚で立上り、後脚を小高いところに載つて、そのまゝ左に折れた。と、あとは膝も雪に没しないやうになつた。——それは道路に出たのであつた。

「さア着きましたよ。」とニキータは言つた。「何處だか分りましねえけど。」

馬は埋れた道路を逸れもせずに進んだ、そして四十サージエンも行かないうちに、もう納屋の生籬がたゞ一筋に見えて來た。屋根には雪が厚い層をなして被さつて、そこから絶えず雪が吹飛されてゐた。納屋を抜けると、道路は風の吹いて來る方角から曲つて、櫓は雪の吹き溜りへ乗り込んだ。けれども、前方二軒の家の間に通り路が見えてゐたから、この吹き溜りは道路の上に出來たものに違ひないといふので、それを越して行くことにした。果して、その吹き溜りを越えると、街道に出られた。とツツきの家の庭では繩にかけられたまゝ凍つてゐる洗濯物が風にひどくはためいてゐた。それはルバーシユカの赤いのと、白いのと、股引

と、脚絆と、女の下着だつた。中でも、白いルバーシユカは袖をふりながら、ひどく跳いてゐた。

「ふん、無精な女もあつたもんだ。それとも死にかゝつてゐるだかな。お祭だといふに洗濯物も取込まねえ。」と言ひながら、ニキータはそのはためくルバーシユカを見てゐた。

三

街道のとツツきはまだ風が強く、路の上の雪も深かつたが、村の中程へ來ると、静かで、温かで、陽氣だつた。或る家の傍では犬が吠えてゐた。もう一つの家の傍では頭からすつぱり外套を被つた女が何處からか駆けて來て、家の扉口から入らうとしたが、闕の上に立止まつて、通り行く櫓の人人を眺めてゐた。村の中頃からは娘達の歌が聞えて來た。

村の中は風も雪も寒さも少ないやうな氣がした。

「こゝはグリシキノ村だ。」と、ワシーリイ・アンドレーキチが口を切つた。

「さうですがすよ。」と、ニキータが答へた。

實際これはグリシキノ村であつた。して見ると、彼等は左の方へ迷ひ込んで、八露里ばかり通り過ぎたわけだ。方角は彼等の思つた通りではなかつたが、大して外れもせず、兎に角自分達の目指す處へ接近してゐた。グリシキノ村か

らゴリーチキノ村までは五露里であつた。

村の途中で彼等は、路のまん中を歩いてゐる一人の背の高い男に出會した。

「誰方だれがすか？」その男は馬を停とめながら、かう叫んだ。そして、ワシリーイ・アンドレーキチだと見ると、直ちに鞍くらに取まり、それを傳つて、櫓かの側に寄つて来て、馭者臺おしやうだいに乗込んだ。

この男はワシリーイ・アンドレーキチも知つてゐるイサイといふ百姓で、界限切つての馬泥棒として通つてゐた。

「ワシリーイ・アンドレーキチさん。何處へござらつしやるだ？」イサイは飲んだ酒の香をニキータに浴せかけながら、かう言つた。

「ゴリーチキノへ行くところだが。」

「それをこんな方へ廻り道しやしたよか。マラホヴォをお通んなさりやよかつたに。」

「よかつたどころぢやないが、それがさう行かなかつたのだ。」と馬を止めながら、ワシリーイ・アンドレーキチが言つた。

「いゝ馬うまがすなア。」と言ひながら、イサイは馬を見まはし、束ねた濃い尻尾しっぽの結び目が弛ゆるんでゐたのを、慣れた手つきでぎゅつと根元へ引き緊きめた。

「泊とんなさつちや何うがす？」

「いや、兄弟、是非行かなくつちやならねえんだ。」

「大した用事だと見えますだ。時にこの人は誰方だれだ？ おう？ ニキータ・ステパーヌキチか。」

「さうでなくて誰だえ？」と、ニキータが言つた。「ところで、お前様、今度道を迷はねえやうに行くにやア、何う行つたらいいかね。」

「何もこの邊は迷ふとはねえよ。後へ廻つてこの道を眞ま直ちく行つてさ、上り切つたらまた何處までも眞ま直ちく行くだ。左へとつてはいけねえ。大きい道へ出たら、右へ曲るだ。」

「曲るつてえ何處邊どこだ？ 夏の路を行くだか、それとも冬の路か？」と、ニキータが聞いた。

「冬の道さ。出ると直ぐ藪くさがあるだ。その藪の向うに大きな樫かしの木きの、こんもりした目標めくが立つてらア。その處ところだよ。」ワシリーイ・アンドレーキチは馬を後へ戻して、また村を進んだ。

「でも、泊とんなさつたがえゝだに！」イサイはまだ彼等の後から叫んでゐた。

然し、ワシリーイ・アンドレーキチは之には返事もせず、馬を驅つた。——平坦な道を五露里ほど行くのだが、そのうち二露里は林の中を行くので樂たの氣きがした。それに風も

静まつたらしく、雪も止んでゐた。

再び街道にかゝつて、其處此處に新しい敷薬の黒ずんでゐる、踏みならした路を通り、それから白いルバーシユカの洗濯物の懸かつてゐた家の傍を、それがもう吹き外されて、やつと凍つた片袖でぶら下つてゐるのを見ながら、抜けてしまふと、彼等はまたも怖ろしい唸りを立て、ゑる河楊の處に出て、更に廣々とした畠地へ出た。と、吹雪は静まらないばかりか、何だか先刻よりもつとひどくなつたやうだつた。道はすつかり雪に埋れてゐるので、やつと道標の爲めに、外れてゐないことを知つた。然しその道標も前方になると、風が向ひ風であつた爲め、よく見分けることが出来なかつた。

ワシーリイ・アンドレーキチは目をばちつかせ、首を傾げて道標を見成つてゐた。が、それよりも馬に信頼して、その進んで行くまゝに任せてゐる方が多かつた。事實また馬も道を外れずに、脚の下に感ずる道路の曲折を傳つて右に左に方向を轉じながら進んだ。そして、雪は益々降り募り、風は愈々激しくなつたにも拘はらず、道標は依然右に左に見えてゐた。

こんな風で彼等は約十分も進んだ。すると、突然馬の直ぐ前に當つて、何か黒いものが現はれ、斜めに風に吹き捲

くられる雪の網の中を動いてゐた。それは同じ道を行く仲間であつた。栗毛はそれに追ひついたので、前を行く櫓の座席に脚を打突つた。

「先へ廻つてくんなよ、……先へ。」と、その櫓の中から人聲がした。

ワシーリイ・アンドレーキチは迂回しかゝつた。櫓の中には三人の百姓と一人の女が乗つてゐた。一と目見ると、それがお祭歸りの客であることが分つた。一人の男は雪に埋もれたまゝ馬の尻に鞭をあてゝゐた。二人の者は兩手を振りながら、櫓の前部の處で何やら叫んでゐた。頭からすつぱり被ひをして、全身雪に埋れた女は、櫓の後部に後れ毛を逆立て、身動きもせず坐つてゐた。

「何處の方がね！」と、ワシーリイ・アンドレーキチは叫んだ。

「ア、ア、ア……スキイだよ。」たゞこれだけしか聞えなかつた。

「何處の方だと訊いてるんだ。」

「ア、ア、ア、スキイだよ。」一人の男は聲を限りに叫んだ。しかしそれでも何を言つてるのか聞きとれなかつた。

「それ／＼、後れるな。」と叫びながら、もう一人の男は馬に鞭を當て續けてゐた。

「お祭りの歸りかね？」

「それ、セムカ、駈けるく。追ひ越すだく。」

橇と橇とは互に曲木をぶつゝけて、危く絡まり合はうとしたが、やつと離れくになつて、百姓共の橇は段々後へ残された。

全身雪を被つた、毛深い、腹の脹れた馬は、低い軛に壓されて苦しい呼吸を吐きながら、打ち下される筈を遁れようと徒らに全力を絞つてゐるものゝ如く、その短い脚を跳ね上げ跳ね上げ、深い雪の中に跛を引いてゐた。一目見て分る若馬ながら、魚のやうに下唇を引きつり、鼻の孔を擴げ、恐怖のために耳を伏せて、數秒の間ニキータの肩の横で頑張つてゐたが、やがてだんくと後れて了つた。

「あれも酒のする業だ。」とニキータは言つた。「伊達に馬を苦しめてゐるだ。アジャヤ人そつくりだ。」

脅かされた馬の鼻を鳴らす聲と呑んだくれた百姓共の喚きとが、ちよつとの間聞えてゐたが、そのうちに鼻を鳴らす聲も静まり、次に喚く聲も黙つてしまつた。そして凍りは又も耳もとに嘯く風の唸りと、時々路面の露出した處に當る滑り木の軽い軋りの外は、何も聞えなくなつた。

ワシーリー・アンドレーキチはこの一行との出會ひにすつかり氣を晴らし、元氣を得て、なほ一層活潑に馬を驅り

出した。最早道標などは見もせず、たゞ馬だけを頼りにした——

ニキータは何もする用がないので、かういふ場合、いつもやる通りに、居眠りをしてゐた。これ迄の睡眠不足の埋め合せでもしようといふのらしい。すると急に馬が止まつたので、ニキータは鼻先をがくりと前方に突き出して、危くのめり落ちやうとした。

「何だかまた道が變になつて來たぞ。」と、ワシーリー・アンドレーキチが言つた。

「何うしてね？」

「道標が見えない。きつとまた道が無くなつたんだよ。」

「道が無くなつたら、探しに行きますすべえ。」と、ぶつきら棒に言つて、ニキータは起ち上つた。そして又、例の内側へ扱れた足を輕やかに運びながら、雪の中を歩き始めた。

彼は見え隠れしながら、長いこと歩いてゐた。そしてまた隠れてしまつたが、やがて戻つて來た。

「この邊には路はありませぬえ。ひよつとしたら前の方にあるかも知れませぬえ。」と言ひながら、橇に乗り込んだ。

もう確かに日が暮れかゝつてゐた。吹雪は募つても來ないが、我へもしなかつた。

「せめてあの百姓達の聲でも聞えりやアいゝになア。」と

ワシリーイ・アンドレーキチは言つた。

「あの衆が追ひついて來ねえところを見りやア、餘つ程遠いところ踏込んでるがすよ。若しかしたらあの衆も路をなくしたよかな。」と、ニキータが言つた。

「だが、どつちへか行かにななるまい。」と、ワシリーイ・アンドレーキチが言つた。

「馬に任せるがようがすよ。」とニキータが言つた。「連れてつて呉れやすよ。どれ、手綱を寄越しなせえ。」

ワシリーイ・アンドレーキチは、暖かい手袋を楸めてゐるのに兩手が凍えかゝつてゐたので、自分の方から進んで手綱を渡した。

ニキータは手綱を受取ると、努めてそれを動かさないようににし、たゞ愛馬の智慧を樂しみながら、ほんの支へてゐるだけだつた。果して、柗巧な馬は、双方の耳を彼方此方に扭ぢ向けながら、方向を轉じて行つた。

「口だけはきかねえでくらつせえ。」と、ニキータは言つた。「何うがす、あの通りだよ。さうく、行つたく。」

風は後ろから吹くやうになつて、幾らか暖くなつた。

「柗巧なもんぢやござえやせんか。」ニキータは馬を見て喜び續けてゐた。「そこへ行くと、キルギス産の馬は、力はあるが莫迦がすな。だが、此奴のあの耳の働きと言つた

ら何うがす。電信も何も要らねえや。一里先までも感づくだから。」

かうして、まだ三十分と経たないうちに、實際前方にあつて何だか黒いものが見えて來た。森か、村であるらしい。また右手には道標も現はれた。道に出たことは明かになつた。

「おや／＼、こりやア又グリシキノだ。」と、急にニキータが言ひ放つた。

本當に、今彼等の左方には、雪を吹き落してゐた最前の納屋があつて、その先には同じ繩に凍つた下着や、ルバシニコヤ、股引が懸かつてゐた。そして矢つ張り前と同様、滅茶苦茶に風にあふられてゐた。

又も彼等は街道に乗り入れた。又もそこは靜かで、暖かで、賑かであつた。又も敷藁の路が見え、人の聲々や歌が聞え、犬も吠え出してゐた。あたりは薄暗くなつて、方々の窓にはもう灯がついてゐた。

通りの中程まで來るとワシリーイ・アンドレーキチは、大きな二重煉瓦の家へ馬を向けて、その入口に止めた。

ニキータは、雪で掩はれた窓の處へ寄つて行つて、颯でこつ／＼叩いた。その窓からは灯がさして、ひら／＼と舞ふ雪が光つて見えた。

「誰方だかね。」ニキータの呼び聲に應じて内から聲があつた。

「クレストイのブレフノフです。」と、ニキータが答へた。「一寸出てくんませえ。」

誰か窓の處から離れた。と、二分程してから、支關の扉が開いて、それから外扉の鍵がかちつと鳴る音が聞えた。そして風に押される扉を支へながら、背の高い白髯の老人が出て来た。白いお祭り着の上に半外套を羽織つてゐた。その後から赤いルバーシユカに鞞皮の長靴を履いた若者が現はれた。

「アンドレーキチさんかね？」と、老人が言つた。

「實はね、兄弟、路を間違へまして。」と、ワシリーイ・アンドレーキチが言つた。「ゴリヤーチキノへ行くのをこんな處へ来てしまつたのです。一度は出直したんですが、また路が分らなくなつてしまつたんです。」

「いや、そいつア、えらく迷つたもんでがすなア。」と老人が言つた。——「ベトルーシカや、行つて門を開けろ。」と、彼は赤いルバーシユカの若者に聲をかけた。

「よし来た。」と、若者は快活な聲で返辭をして、入口へ飛んで行つた。

「でも、俺等は泊めて貰ふのぢやありませんよ、兄弟。」と、

ワシリーイ・アンドレーキチが言つた。

「今から何處へ行きなさるつて。もう夜になつてますだ。お泊んなされ。」

「泊めて貰ふのは有難いが、是非行かなければならないんです。用事が用事ですから、兄弟、いけませんや。」

「ぢや、せめて温まつてお出でなせえ。丁度サモワルも沸いてますだ。」と、老人が言つた。

「温まらして戴けたら、結構です。」と、ワシリーイ・アンドレーキチが言つた。「これより暗くはならないでせうし、それに月が出たら、もつと明るくなるでせうから。それではミキート、御免蒙つて一つ温まらして貰はうか。」

「へえ、温まらして貰ふがよすがすよ。」ひどく凍え切つて、早くそのかじかんだ手足を温めたいと思つてゐたニキータはかう言つた。

ワシリーイ・アンドレーキチは老人と一緒に家の中へ入つた。ニキータはベトルーシカの開けてくれた門から櫓を入れ、その若者の指圖に従つて、物置の庇の下へ馬を止めた。物置には肥料が積んであつたので、高い軛が上の横木にひつつかつた。と、その横木に棲つてゐた鷄共が機嫌を悪くして、こつこつと啼きながら、足で横木を引つ掻いた。羊も驚いて、凍てついた肥料を蹄にかけながら、脇の方へ

飛び退いた。犬は恐怖と憎悪とから、自暴に大聲を揚げて、仔犬らしく、見知らぬ人に吠え立てゝゐた。

ニキータはその何れもと語り合つてゐた。鶏共に對してはお詫びを述べ、もうこれ以上騒がさないからと安心させ、羊共に向つては、事情も辨へずに矢鱈と狼狽へるものではないと叱り、また犬の仔には、馬を繋いでゐる間絶え間なく訓戒してゐた。

「まづこんでえ。」と言ひながら、彼は自分の體から雪を拂ひ落した。「よく吠える犬だな。」と、犬に一言附け加へ、「もういゝ、もう澤山だ、莫迦奴、澤山だよ。自分から氣をくさらずだけのこんだ。」と言つた。「泥棒ちやねえ、お前達の仲間だ……。」

「こりやア、話に言ふ、家の三役だな。」と、例の若者ががつしりした手で、外に残つてゐた小櫓を軒下へ押込みながら言つた。

「何うしてそれが三役だ？」と、ニキータが言つた。

「でも、ブリソンに書いてあるだ。——泥棒が家へ入らうとする時、犬が吠えるのは——油断すな、氣をつけるといふわけだし、鶏が時を作るのは——起きろといふのだし、猫が顔を洗ふのは、お客が見える、御馳走の支度をせいといふのだと。」若者はにこ／＼しながらかう言つた。

ペトルーハは讀み書きの出来る若者で、彼の持つてゐる唯一の書パウロソンを殆ど讀記してゐた。今夜のやうに一寸一杯引つかけた時には、周圍の事情に當て嵌るやうな個所を抜き出すのが殊に好きであつた。

「そりやア全くだ。」とニキータが言つた。

「お爺さん、凍えただらう？」と、ペトルーハは言ひ足した。

「うむ、全く凍えちまつたぞ。」とニキータは言つた。そして二人は庭を横切つて、支關から家の中へ入つた。

四

ワシーリイ・アンドレーキチの立寄つた家は、村でも一番裕福な家の一つであつた。一家族で五地領も所有し、尙ほその他にも土地を借りてゐた。中庭には馬が六頭、牛が三頭、犢が二頭、羊は彼これ二十頭もゐた。家族は總勢二十二人、そのうち四人の息子は女房持ちで、孫が六人あつた。孫のうちでペトルーハ一人だけはもう女房があつた。この外まだ二人の曾孫と、三人の孤兒と、子持ちの養女が四人居つた。分家もせずに残つてゐる家としては珍らしかつた。然し此處にももう、女同志の間に起り勝ちな、内輪揉めがより／＼行はれてゐた。そして動もすると忽ち角働き合ひ

にまで進むこともあつた。二人の息子はモスクワへ出て水撒き人夫となり、一人は兵隊にとられてゐた。今家にゐる者は、爺さん婆さんに、主人役をしてゐる次男、お祭りでもスクワから来てゐる長男、それから女子供全部であつた。それと、家族の者の外に、もう一人お客として隣の名づけ親が泊り込んでゐた。

部屋の中には、上に火除けをつけたランプが卓上に懸かつてゐて、下にある茶器や、ウォツカの瓶や、前菜をあかあかと照らし、また神棚には聖像、その兩側にはいろんな繪の懸けてある煉瓦の壁を見せてゐた。卓子の上座には黒い半外套だけ着た、ワシリーイ・アンドレーキチが通されて、自分の凍つた鬚を吸ひ廻しながら、周囲の人々や家の様子に、鷹のやうな凸出した眼を配つてゐた。ワシリーイ・アンドレーキチの外、卓子に着いてゐたのは、白い手織のルバシユカを着た、禿頭の、白髯の老主人で、それと並んで、お祭りにモスクワから遣つて来た息子が、逞ましい背恰好や肩つきをして、更紗のルバシユカを着てゐた。其處にもう一人一家の主人役をしてゐる肩幅の廣い次男がゐた。瘦せた赤毛の百姓で、隣の人だといふのもその座に居つた。

百姓共はもう飲んだり食つたりして、今丁度お茶にかゝらうとしてゐた。サモワルは燂爐の傍の床の上に立てられ

て、もう唸つてゐた。床や燂爐の上には子供等が見えてゐたし、寢臺の上には搖籃を控へて一人の女が坐つてゐた。主婦の婆さんは、顔中一面に小皺を寄せ、その唇にまで皺を作つて何彼とワシリーイ・アンドレーキチを接待してゐた。ニキータが家の中へ入つて来た時、その婆さんは、厚硝子のコップにウォツカを注いで、客に出してゐるところだつた。

「遠慮なさるもんぢやありませんよ、ワシリーイ・アンドレーキチさん。お祭のこんですもの。」と、彼女は言つた。「まあ〜一つ。」

ウォツカの色と香は、凍えて疲れてゐた今の場合、殊更ひどくニキータの心を亂した。彼は鬚め面をした。そして、帽子や上衣の雪を拂ふと、聖像の前に立ち、まるで外の者は目に入らないかのやうに、三度十字を切つて、聖像にお辭儀をした。そこで初めて老主人の方へ向いて、先づ彼に頭を下げ、次に卓子を圍んでゐた皆の者に、それから燂爐のほとりに立つてゐた女達に向つて、「お目出たうござえます。」と言ひながらお辭儀をした。そして卓子の方などは見もしないで、外套を脱ぎかけた。

「えらく霜をかぶつたもんだね、小父さん。」と、ニキータの雪に掩はれた顔や眼や髯を眺めながら、長男が言つた。

「ニキータは上衣を脱いで、それを拂つてから、燵の處に掛けて、そして卓子の方へ寄つて行つた。彼にもウォーツカが勧められた。苦しい闘ひの瞬間があつた。彼はもう少しで盃に手をかけて、その香ばしい透明な液體を口に傾けるところであつた。けれど彼はワシリーイ・アンドレーキチを見ると、誓の言葉を思ひ出し、續いて長靴を飲んでしまつたことや、春先になると馬を買つてやると約束したわが子のことなどを思ひ浮べ、ほつと溜息を一つ吐いて斷つた。

「有難うござえやすが、俺は飲みましねえだ。」と言つて、饜め面をした。そして二つ目の窓の處へ行つて腰掛に坐つた。

「そりや又どうしてね？」と、長男が言つた。

「飲まねえから、飲まねえでがす。」眼もあげないで、追々に氷柱の融けてゆく自分の薄い口髭や顎髭を斜に見下しながらニキータはかう言つた。

「爺やは飲まない方がいゝんです。」と言ひながら、ワシリーイ・アンドレーキチは一杯飲んだ後へ菓子を頬ばつた。

「ぢや、お茶でも。」と、親切な老婆が言つた。「随分寒かつたやらうに。これ女子達や何でさうサモワルにばかりかかつてゐるだよ？」

「もう沸いてますだよ。」と嫁が答へた。そして古い蔽ひをしたサモワルを布巾で拂つて、やつと持つて來ると、一旦持ち上げて卓子の上に載せた。

そのうちにワシリーイ・アンドレーキチは、二人が路を見失つた事や、二度同じ村へ歸つて來たこと、彷徨ひ歩いたこと、醉拂つた百姓達に逢つたことなどを話して聞かせた。家の人々は驚いて、迷つた場所や、そのわけや、出會つた醉拂ひ達の誰であつたかといふことなどを説明し、今度は何う行けばよいかを教へてくれた。

「兎に角モルチヤノフカ迄なら、小僧つ子でも行けますだ。たゞ大きい道の曲り角のところを氣つけられアいゝでがすよ——あそこには藪があつて、見えてめまさア。お前様方は其處ん處まで行かつしやらなかつたよね。」と、隣の人が言つた。

「それにしても泊つて行きなはれや、女達に臥床をのべさせますだ。」と、婆さんは勧めた。

「そして朝に立たれるがえゝだよ。」と、老人も相槌を打つた。

「それが、さう行かないんです、兄弟。仕事の都合があつて。」と、ワシリーイ・アンドレーキチは言つた。「此處の所一時間延びると、一年でも取返しはつかないので。」と附け

加へながら、彼は山林のことや、この買物を横取りするかも知れない商人達のことなどを想ひ起した。「なアおい、今度は大丈夫行き着かうぜ。」と、彼はニキータに聲をかけた。

ニキータは、鬚や口髭の氷柱の溶けきらないのに氣を揉んでゐるらしく、少時返事をしなかつた。

「また踏せえ失くさなけりやアね。」と、陰氣くさく言つた。

ニキータが陰氣くさくなるのも無理は無かつた。彼はウォーツカが欲しくつて堪らなかつた。そしてこの要求を紛らすものゝ一つはお茶であつたが、そのお茶すら彼の前にはまだ出されてゐなかつた。

「でも曲り角まで行きさへすりや、それから先は迷ふことはないよ。林の中を行くうちに向うへ着いてしまはア。」と、ワシリーイ・アンドレーキチが言つた。

「そりやアお前様の用事でがすもの、行くと言やア行きますだよ。ワシリーイ・アンドレーキチ様。」と言ひながら、ニキータは出されたお茶のコップを受取つた。

「ぢや、お茶を澤山飲まして貰つて、立つとしよう。」

ニキータは何とも言はずに、頭だけを振つた。そして茶碗の受皿に注意深く茶をあけて、勞働のためにいつも臍んでゐる手の指を、その湯氣で温めた。それから砂糖の小片

を嚙んで、家の人達にお辭儀をして、「皆様の御息災を祈りやす。」と言つてから、温かい液體を吸ひ込んだ。

「誰方かその曲り角まで送つて下さると、大きに助かりますがね。」と、ワシリーイ・アンドレーキチは言つた。

「へえ、ようがすとも。」と、長男が言つた。「ベトルルーハに櫓の支度をさせて、曲り角まで送らせやせう。」

「ぢや、支度をさして下さい、お禮はしますから。」

「何を、お前様、減相もない。」と、親切な婆さんは言つた。「こちらこそ喜んでますだよ。」

「ベトルルーハ、さア行つて牝馬をつけるがい。」長男がかう言つた。

「よし来た。」と言つて、ベトルルーハは、にこ／＼しながら釘にかゝつてゐた帽子を取つて、馬の用意に飛んで行つた。

馬の支度が出来るうちに、話はだん／＼轉じて行つて、先刻ワシリーイ・アンドレーキチが窓の處へ乗りつけたので腰を折られたその話へ戻つた。老人は、三人目の息子が今度の祭に自分の處へは何も送つて寄越さないのに、女房にはフランス出來のショールを送つて来たといふので、隣からの客に不平を言つてゐた。

「若い者はだん／＼俺達のとこから離れて行きますだ。」

と、老人が言つた。

「離れるも何もねえでさ。」と隣の客が言つた。「どだい、手が合はねえでがすよ。えらく柄巧（へいこう）になつたもんでさ。ほら、あのデモーチキンなんざア——何うでがす、親父（おやぢ）の腕を折つちまひやしたぞ。みんな柄巧過ぎるからでがすよ。」

ニキータはじつと耳を傾けて聴入（きこ）つたり、顔を見上げた。そして話の仲間入りがしたいらしかつたけれど、何分お茶の方に氣がとられてゐるので、たゞ同じ考へだと云ふ腹で頷（うなづ）いてゐた。彼は一杯々々と重ねて行くにつれて、だん／＼暖かくなり、だん／＼氣持が好くなつて來た。話は、分家の害といふ同じ問題について、いつまでも長いこと續いてゐた。而もその話は固（もと）より空な議論ではなく、この家の實際問題で、此處に同座して氣六ヶ敷（きむ）く黙（もく）りこくつてゐる次男の要求してゐた分家の問題に觸れて行つた。これは言ふまでもなく一家の大事件で、家族中の者の心に懸つてゐることであつた。けれど彼等は他人の手前を憚（おそ）つて、その真相に入らなかつた。が、遂々老人が我慢しきれなくなつて、おれの生きてゐるうちは財産は分けさせない、かうしてゐればこそ有難いことに家といふものもあるが、分けてしまつたら、皆零落（おちぶ）れて乞食になつてしまふだらうと、おろ／＼聲になつて言ひ出した。

「早い話がマトウエフの家でがす。」と、隣の人が言つた。「本當にしつかりした家でしたが、分家するが最後、何もなくなつちまひましたぞ。」

「手前はそれがして見てえのか。」と、老人は息子に言葉を向けた。

息子は何とも答へなかつた。ぎごちない沈黙があつた。この沈黙を破つたのは、馬の支度を済まして來たベトルーハであつた。彼はこれより數分前に家の中へ戻つて來て、絶えずにこ／＼してゐたのであつた。

「全くさうだよ、ブリソンの本にも喩へ話があるだ。」と、彼は言つた。「父親が息子等に箒（はき）を一本やつて折らせようとしたぞ。そのまゝでは折れなかつたぞが、ばら／＼にしたら一と枝づゝ樂に折つてしまつたといふだ。これだつてその通りだ。」と言つて、彼は口一杯に笑つた。——「さア、支度は出來やしたよ。」と、彼は更に言つた。

「出來たら、出發しよう。」と、ワシーリイ・アンドレーキチは言つた。「だが、お祖父さん、分家に就（つ）いちゃ負けなさんなよ。お前さんが儲け出した財産なんだからね。お前さんが主人です。仲裁裁判にかけりやア、すぐきまりがつきますよ。」

「何處までも頑張つて見せますだ。」と、老人は相變らず泣

き聲で言つた。「奴等とは腹が合はねえだからなア。奴等全く悪魔だ。」

ニキータは、その間に五杯目のお茶を飲み乾して、それでもまだコップを伏せず、六杯目を注いで貰ふ氣で、それを横に寝かして置いた。けれどサモワルのお湯はもう盡きたので、主婦はそれ以上注いでくれなかつた。それにワシリー・アンドレーキチは身支度を初めてゐたので、もう何うにもならなかつた。ニキータも起ち上つて、角を殘らず噛み減らした砂糖の塊を後方の砂糖壺に入れ、汗に濡れた顔を着物の裾で拭いてから上衣を着始めた。

着物を着ると、彼は深い溜息をほつと吐いた。そして主人夫婦に禮を述べ、別れの挨拶をして、暖かい、明るい部屋から、寒い入口へ出た。と、風が唸りを揚げて吹き荒み、がた／＼顛ぶ扉の隙から雪が吹き込んでゐた。そこから彼は暗い中庭へ降りて行つた。

ペトルーハは毛皮の外套を着て、自分の馬と一緒に庭の眞中に立つてゐたが、にこ／＼しながら、パウロソンの詩か何か口吟んでゐた。『嵐と囀は空を捲ひ、吹雪は渦を捲き、獸の如く吼えたり、子供の如くすゝり泣く。』と言ふのだつた。

ニキータは、如何にもさうだと言はぬばかりに頷きなが

ら、手綱をさぐり取つた。

老人は提灯を持つて、ワシリー・アンドレーキチを玄關に送り出して、彼を照らしてやらうと思つたが、提灯は忽ち吹き消されてしまつた。中庭へ立つと、吹雪は前にも増して強くなつて來たことが認められた。

『何うも困つた天氣だ。』と、ワシリー・アンドレーキチは思つた。『これはへたすると行き着けないかも知れないぞ。と言つて、用事が用事だから仕方がない。それに支度までして、この家の馬もつけて貰つたんだ。何うにか行き着けるだらう!』

年寄りの主人も、出掛けない方がよいと思つたけれど、一度そのことを勸めて聽かれなかつたのだから、これ以上言つて見ようもなかつた。『いや、俺も年のせみで、かう氣弱になつたのかも知れない。あの衆なら行き着けよう。』と、老人は考へた。『それにこちらだつて寝る時刻に寝られるといふもんだ、面倒なしに。』

ところが、ペトルーハと來たら危険などいふことは考へもしなかつた。彼は道も附近の地理もよく知つてゐた。

そればかりではない、『吹雪は渦を捲く』といふ詩が、如何にもよく中庭の實況を現はしてゐるので、すつかりそれに元氣つけられたのであつた。

ニキータは何うかといふと、彼はまるつきり出掛けたくなかつた。しかし彼はもう疾うから、自分の意志といふものは持たず、すべて人の云ふなりになる癖がついてゐた。斯うしたわけで彼等の出立を遮る者は誰一人なかつた。

五

ワシリーイ・アンドレーキチは、暗がりの中でやつと橇の在處を見分けながら、その方へ寄つて行つた。そして乗り込むと直ぐ手綱を手にとつた。

「先へ行つて貰はう！」と彼が叫んだ。

ペトルーハは、大橇の中に立膝をしたまゝ、馬を出した。さつきから頻りに嘶いてゐた栗毛は、自分の前に牝馬のゐるのを知つて、その後から進んだ。そして彼等は街路へ出た。又もや村の通りにさしかゝり、同じ道を進んで、凍つた洗濯物のかゝつてゐた家の傍も通つたが、その洗濯物はもう見えなかつた。それから前と同じ納屋のわきに差しかゝると、その納屋はもう殆ど屋根まで雪に埋まつて、屋根からは絶えず雪が吹き飛ばされてゐた。これもまた前と同様悲しげにざわめき、唸りながら風に舞られてゐる河楊のほとりを抜けて、彼等は再び上からも下からも荒れ狂うてゐる雪の海へ乗り入れた。風の強いことは、乗り手の

者が横から吹きつける風に逆らふと、橇が傾いたり、馬が片方に押されたりする位であつた。ペトルーハはその良い牝馬の大股の並歩で二人の前を進みながら元氣よく叫んでゐた。栗毛もその後を追つて駈けた。

かうして、約十分も来たかと思ふ頃、ペトルーハは後を振向いて何か叫んだ。ワシリーイ・アンドレーキチも、ニキータも風のために聞きとれなかつたが、もうその曲り角へ来たのだらうと推量した。やがて、ペトルーハが右に折れると、横合から吹いてゐた風は、今度は眞正面になり、右の方に雪を透して何だか黒いものが見えて来た。それが曲り角の藪であつた。

「では御機嫌よう。」

「有難う、ペトルーハ。」

『風は空を闇もて覆ひ。』ペトルーハは叫び聲と共に姿を消してしまつた。

「何うだい、なか／＼の詩人ではないか。」かう言つて、ワシリーイ・アンドレーキチは手綱を引いた。

「えゝ、良い若者がすな、あれが本當の百姓がすよ。」と、ニキータが言つた。

かうして二人は先へ／＼と進んだ。

ニキータは着物を掻き合せ、首を兩肩の中へ縮め込み、

その小さい頸骨で頸のあたりを埋め、百姓家でお茶を飲んで貯へて置いた暖氣を失くすまいとして、黙つて坐つてゐた。眼の前には鞍の眞直な線があつて、それが絶えず彼の目を欺いて、平坦な道路のやうに見せかけた。次にはゆらゆら動く馬の尻と、結び玉のやうに縛り上げて一方へ寄せてある尻尾が見えてゐた。もつと前の方には、高い軛と、動揺する馬の頭と、頸と、吹き散らされる鬃とが見えてゐた。何うかする度に道標が眼に留まつた。で彼は、道の上を進んでゐるといふことが分つたので、別に何にも爲ることはないと思つた。

ワシリーイ・アンドレーキチは手綱を持つてゐるだけで、馬の行くまゝに任かしてゐた。けれど、栗毛は村であれ程休んで来たにも拘はらず、厭々さうに駆けてゐて、動もすると道を外れたがるので、ワシリーイ・アンドレーキチは何遍かそれを向け直した。

『おう、右手に道標が一つある、また一つ、また一つ。』と、ワシリーイ・アンドレーキチは數へてゐた。『それ、前の方に林があるぞ。前の方に何だか黒いものゝ在るのをすかし見て、彼はかう思つた。然し、林だと思つたのは藪に過ぎなかつた。その藪も過ぎ、更に二十サージェンばかり進んだが、次の道標は無く、林も無かつた。』もう直きに林に

なる筈だ。』と、ワシリーイ・アンドレーキチは思つた。そして、酒と茶とで興奮してゐるまゝに、絶えず手綱を引張つた。馬はまるで見當違ひの方へ遣られてゐることを知つてゐたが、従順な善良な動物だけに、跑足で飛んだり、早足で駆けたりして、たゞもう遣られる方へ進んで行つた。やがて十分も経つたのに、やはり林は無かつた。

『おい、また路を違へてしまつたぜ！』と、ワシリーイ・アンドレーキチは馬を止めて言つた。

ニキータは黙つて櫓から降りた。そして風のために身に引つ着いたり、離れたり、迂り落ちさうになつたりする上衣をしつかと押へながら、雪の中を這ひ廻つた。彼方側へも行つて見、此方側へも行つて見た。三度ばかりは全く姿が見えなくなつたりした。やがて戻つて來ると、彼はワシリーイ・アンドレーキチの手から手綱を取つた。

『右さ行かなきやなんねえでがす。』と馬をまはしながら、鋭く、きつぱりと言つた。

『うん、よし、右なら右へ行け。』と、手綱を渡して、凍えた兩手を袖に差入れながら、ワシリーイ・アンドレーキチは言つた。

ニキータは返事をしなかつた。

『ほうら、大將、頼むぞ！』と、彼は馬に聲をかけた。然

し馬は、手綱を振られても、並足で行くだけであつた。

雪はところ／＼膝までも浸つた。櫓は馬の進む毎に雪にぬかつた。

ニキータは櫓の前部に吊して置いた鞭をとつて、びしやりとあてた。これまで打たれたことのなかつた良馬は飛び出して、早足になつた。けれど直ぐまた跣足に變つて、やがて並足に返つた。かうして五分間ばかり進んだ。あたりは眞暗で、天も地も曇つてゐるので、時とすると馬の軀さへ見えなかつた。櫓は一つ處に立つてゐて、野原が後方へ馳せて行くやうに思はれることもあつた。不意に馬が、眼の前に何か障害を感じたと見えて、がくりと停まつた。ニキータはまた手綱を放つて輕快に飛び降り馬の止まつたわけを探らうとしてその前へ出た。が、馬の前へ一步踏み出したか出さぬかに、足は這つて、何だか崖のやうな處へ轉り落ちた。

「と、と、と！」彼は落ちながら、そして止まらうと努めながら、かう言つた。然し體を支へることが出来なかつた。で、遂々雪の吹き溜められた窪地の底へ足を突つ込んで、そこに止まつた。

崖の端に懸かつてゐた雪の塊は、ニキータの墜落したはずみで、彼の上に落ち重なつて來た。そして彼の頸筋へ入

つた。……

「えい、畜生、これはまた、何うしたこんだ。」ニキータは雪の塊と窪地に向つて小言を言ひながら、頸筋の中から雪を振ひ出した。

「ニキータ、おーい、ニキータ！」上からワシーリイ・アンドレーキチが叫んでゐた。しかしニキータは返事をしなかつた。

彼は答へる間がなかつた。先づ雪を振り落し、それから崖下へ轉げ込む時何處かへやつた鞭を探してゐた。鞭が見つかると、落ちた處を眞直に登つて行かうとしたが、何うにも登ることが出来ず、幾度か後へ這り落ちたので、止むなく、上へ登る口を探すために低い處を歩かなければならなかつた。彼は落ちた處から三サージョンばかり離れた邊で、やつと四つん這ひになつて崖上へ攀ぢ登ることが出來た。そして窪地の縁を傳つて、馬の居る筈だと思ふ處へ歩いて行つたが、馬も櫓も見當らなかつた。しかし彼は風に向つて行つたので、それ等を見出す前に、早くも自分を呼んでゐるワシーリイ・アンドレーキチの叫び聲と、栗毛の嘶きとを耳にした。

「今行くだ、今行くだ。怒鳴らねえでもえゝに。」と、彼は言つた。

殆ど櫓にぶつかる處まで来て、やつと馬とその傍に立つて莫迦に大きく見えるワシーリイ・アンドレーキチとを見出した。

「何處へ失せたんか？ これぢや歸らなけや駄目だぜ。グリシキノへなりと引き返さるか。」主人は荒々しく、ニキータに突つかうつた。

「そりやア引返すのはようがすが、ワシーリイ・アンドレーキチ様、一體何方へ行つたものがせう？ 此處のとは、とてもひでえ窪地で、一度落ちたらもう出て来られまじねえだ。俺は其處さ陥ちて、やつと出て来たところだ。」
「だが何しろ、こんな處に止まつちやみられめえ。何處へでもいゝから、行かなきやアならない。」と、ワシーリイ・アンドレーキチが言つた。

ニキータは何とも答へなかつた。彼は櫓に乗つて、背中に風に向け、靴を脱いで、中へ入つた雪を拂ひ落し、今度は薬を少し取つて、左の靴の孔へ内側から念入りにそれを詰め込んだ。

ワシーリイ・アンドレーキチは、かうなつた上は一切ニキータに任せると言はぬばかりに、口を嚙んでゐた。靴を履き直すと、ニキータは兩足を櫓の中へ入れ、また手袋を嵌め、手綱をとつて、窪地傳ひに馬を廻した。然し百歩と行

かないうちに、馬はまた動かなくなつた。眼の前にはまた窪地があつた。

ニキータはまた降りて、も一度雪の中をうろつき始めた。かなり長いこと歩き廻つた末に、出掛けたのと反對の方向から現はれた。

「旦那、そこにみなさるかい？」と、彼は叫んだ。

「うむ、此處だ。」と、ワシーリイ・アンドレーキチがその聲に應じた。「で、何うだい？」

「いや何うにも分りまじねえや。まつ暗な上に、窪地だからでさ。また風に向つて行かなけりや。」

また出發して、またニキータが雪の中を歩き廻つた。そしてまた乗つては、また捜す。終ひには遂々息を切らして櫓の傍に立止まつて了つた。

「で、何うだい？」とワシーリイ・アンドレーキチが訊いた。

「何うにもかうにも、俺はすつかり草臥れてしまつたです！ それに馬も動かねえし。」

「ぢや、何うしたらいいだらう？」

「まあちよつくら待ちなせえ。」

ニキータはまた立去つたが、程なく戻つて來た。

「俺に跟いて來さつしやい。」と言ひながら、彼は馬のすぐ

前を歩き出した。ワシリイ・アンドレーキチはもう何の指圖もせず、たゞおとなしくニキータのいふ事を聞いてゐた。

「こちらでがすよ。俺の後へ。」かう叫びながら、ニキータは素早く右に寄り、栗毛の手綱をひと筋手にかけて、何處か吹き溜りの下へと馬を向けた。

馬は最初頭張つたが、やがてその吹き溜りを跳び越す氣になつて突進した。しかし、やり損なつて頸輪の處まで雪にはまり込んでしまつた。

「降りて下せえ！」ニキータは櫓の上に乗リ續けてゐるワシリイ・アンドレーキチに大きな聲をかけた。そして片一方の轆の下へ手をやつて、櫓を馬の上へ押し上げようとした。「兄弟、一寸骨が折れるぞ。」と、彼は栗毛に言つた。「でも仕方がねえや。も一つ踏張つて呉れる。ほら、ほら、も少し！」と叫んだ。

馬も一二遍出ようとして跪いたが、矢張り抜け出すことが出来なかつた。そして何か考へ込むやうな風をして、また蹲つた。

「おい兄弟、そいつアいけねえ」と、ニキータは栗毛をすかした。「さア、も一つ頼むよ！」

またも、ニキータはこちら側から轆に手をかけ、ワシ

リイ・アンドレーキチは向う側から同じやうにした。馬は頭を振つてゐたが、急にぼんと跳ね出した。

「その通りく。へこたれるこたアねえや。」と、ニキータは言つた。

馬はひと足掻き、二た足掻きして、三度目にやつと雪の吹き溜りから抜け出した。そして、息を切つて、身振ひしながら立止まつた。ニキータはも少し先へ連れて行かうと思つた。けれど、ワシリイ・アンドレーキチの方が外套二枚も着込んでゐるので、息苦しくなつて、歩くことが出来ず、そのまゝ櫓の中へ轉げ込んでしまつた。

「ひと息、吐かしてくれ。」と言ひながら、彼は村を立つ時ハンカチで縛つて置いた外套の襟を解いた。

「かうなりや心配はありましねえ。寝て居なさる。」とニキータが言つた。「俺が引つ張つて行きますだ。」そこで櫓の上にワシリイ・アンドレーキチを載せたまゝ馬の鞍をとつて曳つぱり出し、十歩ばかり降つて、それから一寸登つて立止まつた。

そこは、雪の塊の吹き溜まる窪地の中ではないので、雪に埋れてしまふ氣遣ひはなかつたが、それでも谷の角で風の避けられるのは一部分に過ぎなかつた。數分時の間風のいくらか鎮まるやうな氣配のする事もあつたが、それは長

續きがしなかつた。そして、何だかこの休息を埋め合はずつもりでもあるやうに、その後の嵐は十倍も烈しい勢で襲つて来て、ひどく吹き立て、渦巻くのであつた。ワशीリイ・アンドレーキチが一と息吐いてから櫓を降り、何うしたらいか、相談するためニキータの方へ近寄つて来た瞬間に、丁度また風の發作がやつて来た。兩人は思はず身をすくめて、怒り狂ふ風の通り過ぎるまで口をきかずゐた。栗毛も亦不興氣に耳を伏せて、首を振つた。漸く風の發作が幾分鎮まつたと思ふと、ニキータは手袋を脱ぎ、それを帶の間に挟んで、兩手に呼吸を吹きかけてから、鞭の紐を解きかゝつた。

「そんな事をしてお前は何うするんだ？」と、ワशीリイ・アンドレーキチが聞いた。

「馬を解いてやりますだ。この上何うにもなりませんや。俺アもう駄目です。」ニキータは謝罪のやうにかう答へた。

「では、もう何處へも行けないのか？」

「出られましねえや。馬を弱らしてしまふだけですが。彼奴も可哀さうにふらくしてゐますだ。」と言ひながら、ニキータは温和しく立つたまゝ、何でもし兼ねまじき様子をして、堅い、づぶ濡れの胸腹を重苦しく波打たしてゐる馬を

指した。「こゝで夜を明かしますだ。」彼はまるで宿屋にでも泊るやうな口吻で、かう言ひ添へて、馬の革紐を解きはじめた。首輪が落ちた。

「でも凍えつちまふだらう？」と、ワशीリイ・アンドレーキチが言つた。

「そりやア、凍えつちまつても致し方ねえですよ。」と、ニキータは言つた。

六

ワशीリイ・アンドレーキチは、外套を二枚も着てゐたし、それに雪の吹き溜りで働いた後なので、殊に温かであつた。しかしこんな處で事實夜を明かさねばならないかと思ふと、さすがに背中がぞく／＼するのだつた。彼は氣を鎮めるために櫓に上つて、煙草と燐寸を取出した。

一方ではニキータが馬を離してゐた。彼は腹帶や鞍の紐を解き、手綱を去り、大繩をとり、鞭を抜きとつた。そして絶えず馬と話をして、元氣つけてゐた。

「ほら出る、出る。」鞍と鞍の間から馬を曳き出しながら、彼はかう言つた。「そしたら、手前を其處のどこへ繋いで置くだ。襖も敷いてやるべえ、鞆も脱つてやるべえ。」彼は自分の言つてゐることを片つ端からやりながらかう言つてゐ

た^て手前も食^てべるがい、したら、だん／＼元氣が出るだ。」
然し、栗毛はニキータの言葉に氣を落ち着けた様子もなく、いら／＼してゐた。そして、脚を踏み鳴らしたり、風に尻の方を向けて、櫓に身を寄せたり、ニキータの袖に頭を擦りつけたりなどした。

栗毛は、ニキータが櫓の中からとつて鼻梁の下へ差出してくれた薬の御馳走を、ほんの義理一遍にくはへたが、直ぐに、薬など食^たべてゐる場合でないと決めて、それを棄てた。と、忽ち風がその薬を吹き散らして、雪に埋めてしまつた。

「今度は目標を一つ立て、置^めくだ。」と言つて、ニキータは櫓を風上へ向け、轆^なを鞍の紐で縛り、それを押し立て持ちあげて前の方へ引張つた。「こんで、俺等が雪に埋まつてしまつても、轆が立つてゐるで、人様に見つけて貰ふだ。掘りかへして貰ふだ。」ニキータは手袋を拂つて、それを穿めながら言つた。「年寄から教はつたこんで。」

その間、ワシリーイ・アンドレーキチは外套をはだけて、その裾で被ひをしながら、黄燐マッチの棒を一本々々鋼鐵の小箱に摺りつけてゐたが、手が震へてゐるので、點きかゝつた棒も、或はよく燃え出さないうちに、或は煙草へ持つて行く瞬間に、何本も／＼風に吹き消されるのであつた。

でもとう／＼、一本の棒がよく燃えついて、彼の外套の毛皮や、内へ曲げた人差指に金の指環をはめてゐるその手や、粗布の下からはみ出して雪を被つてゐる燕麥の薬などをチラリと照らして、やうやく煙草に燃え移つた。二度はかり彼は貪り吸つて、呑み込んだと思ふと、口髭の間から煙を出した。また吸ひ込まうとした時、煙草は火の點いたまゝ風にさらはれて、薬の持ち去られた方へ、同じく飛んで行つた。

けれども、この煙草の一二服で、ワシリーイ・アンドレーキチはすつかり心持よくなつた。

「此處で夜を明かすなら、明かしてもいゝ。」と彼は思ひ切つて言つた。「だが待てよ、俺が旗をつけてやるから。」と言つて、彼は、襟からとつて櫓の中へ抛つて置いたハンカチを拾ひ取ると、手袋を脱いで、櫓の前部に立つたまゝ、背伸びして鞍の紐へ手を屈かせ、小さい結び玉を造つて鞍の傍の紐にそのハンカチを縛りつけた。

ハンカチは直ぐに激しく風にゆらめいて、轆にはりついたり、急に吹き離されて、擴がつて、ばた／＼とはためいたりした。

「どうだい、うまく出来たらう。」ワシリーイ・アンドレーキチは櫓の中へ踏みながら、自分の手並を眺めて、かう言

つた。「一緒にゐたら暖かだらうが、二人ゐるだけの場所
は無いぜ。」と彼は言つた。

「俺は、俺で居處を見つけますだ。」と、ニキータは答へた。

「だが、馬も何うにかしてやらねえといけましねえ。可哀さ
うに汗びつしよりですが。一寸御免なせえよ。」と附け加
へて、彼は櫓へ近づき、ワシリーイ・アンドレーキチの下か
ら粗布を引摺り出した。

彼は、粗布を二重に畳み、先づ後鞆を脱し鞍褥をとつて
から、それを栗毛にかけてやつた。

「手前もだん／＼暖かになつて來るぞ、なア野郎。」と言ひ
ながら、彼は再び粗布の上から鞍褥と後鞆とを馬に着けて
やつた。

「且那、ズックはお前様に要らねえでがせう？ 薬をもちつ
とお呉んなせえ。」仕事が片づくくと、ニキータは再び櫓の側
へ來てかう言つた。

ワシリーイ・アンドレーキチの膝の下からズックや薬を引
張り出すと、ニキータは櫓の背中へ廻り、雪へ穴を掘つて、
その中へ薬を敷いた。それから、帽子を眞深く被り、上衣
を掻き合せ、その上にズックを着て、風と雪を防いでく
れる、樹皮で造つた櫓の後部へ身を寄せるやうにしながら、
敷薬の上へ坐り込んだ。

ワシリーイ・アンドレーキチは、一體に百姓の無智と愚か
さには同感されなかつたが、今ニキータのする所を見ても
賛成出来なかつた。で、不機嫌に頭を振つて、寢支度にか
かつた。

彼は残りの薬を櫓の中に均らし、體のまはりには特にみ
つしりと敷き詰め、兩手を袖に差入れ、風を防いでゐる前
部に寄つて、頭を櫓の隅へ具合よく突込んだ。

彼は眠くはなかつた。身を横にしたまゝ、物を考へてゐ
た。考へると言つてもいつも同じことで、それは彼の生活
の唯一の目的であり、意義であり、歡喜であり、誇りであ
つたことに就いてある。——自分はこれまで何の位の
金儲をしたか、そしてこの先、どの位の儲け得るかといふこ
と、それから彼の知つてゐる他の人々はその位の金を儲け
て持つてゐるか、どんな具合にしてそれ等の人々は金儲け
をしたか、又してゐるか、何うしたら自分も、彼等と同じ
やうにもつ／＼大金持になり得るか、といふ問題であつ
た。ゴリヤーチキンの山林を買ふことは、彼として大仕事
であつた。うまく行くと、彼はこの山林で一舉に一萬ルー
ブリの利得を握れるのだと思つてゐた。そこで、彼はこの
秋、下見に行つて、二デシャチーナだけの立木を残りず數へ
て來た、あの山林の見積りをし始めた。

「樫の木は樫の臺になる。建築用材は言ふまでもない。それに薪は一デシャチーナ當り三十サージェンが出る。』彼は獨語した。『一デシャチーナから悪く見積つても二百ルーブリ廿五カペイカはあがる。それが五六デシャチーナだと、五千六百に五千六百、それへ五百六十と、もう一つ五百六十と二百八十だ。』彼は一萬二千を越すだらうと思つた。けれど算盤が無いので、正確な數字は知れなかつた。『それにしても一萬は出せない、高々八千だ。そして樹の生えてゐない空地を口實に割引きさせるのだ。測量師には百ルーブリか百五十ルーブリも擲なげませてやれば、空地を五デシャチーナ位のは多くしてくれるだらう。そこで八千と云ふことにして、即座に三千ルーブリ鼻先へつきつけてやる。これなら大概先方でもぐにやりとなつてしまふだらう。』と思ひながら、彼は肘で懷中の紙入を觸つて見た。『だが、あすこを曲つてから、何うして迷つたのだらう。どうも變だ。このあたりには林と番人小屋がある筈だ。犬の吠聲でも聞えさうなものだ。だが犬の畜生も、吠えて貰ひたい時には吠えはしない。』彼は襟の中から耳を出して、じつと聞きすました。聞えるものは矢張り、風の吹く音、ハンカチが鞆たもとに當つたり、はためいたりする音、それと樫の背へさら／＼とぶつかる雪の音だけであつた。彼はまた襟を覆うた。『こんなこと、

知つたら、あの村に泊るのだつた。いや、それにしても同じことだ。何うせ明日は行くのだ。潰れたつて一日だけのことだ。この天氣ではあちらの奴等だつて行きはすまい。』と、此處で彼は、九日には肉屋から羊肉の代金を受取ることになつてゐたことを想ひつた。『彼方から來ると言つたが、俺は家にゐないし、——家内は金を受取ることも出來ないし、とても無教育なんだから。てんで口のきゝ方も知つてゐない。』と考へ續けて行つた。自分の妻が、昨夜お祭の客に來た署長を接待し兼ねてまご／＼してゐた有様を思ひ出した。『たかゞ女だ。何處へも出ず、何も見てはゐないのだ。一體親達の代には自分の家はどんなだつたらう？ まア村の裕福な百姓といつたゞけのもので、風車場と宿屋一軒——それが何も彼にも全財産であつた。ところが俺はこの十五年間にいろんなことをしたぞ。店を出す、酒屋を二軒立てる、製粉所に倉庫、小作に出してゐる地所が二箇所、土藏つきの住家、それも鐵屋根と來てる。』彼は得意になつて思ひ出した。『親父の代とはえらい違ひだ。この頃ちや、プレフノフと言へば近所で誰知らぬ者もない。』

『だが何うしてかうなつたのか？ それは仕事を怠らずに働くからだ。怠なまけてゐるか、愚にもつかないことをしてゐる連中とは違ふからだ。俺は夜の目も寝やしない。吹雪だ

らうが、吹雪でなからうが、行く處へは行く。そこで仕事が出来ると、彼奴等は遊び半分に金を儲けようと思つてゐる。大間違ひだ。骨を折つて、頭を絞らなくつちや出来るものでない。この通り野宿もするが、夜の目も合さないうが、頭の中か考へて一杯のために枕までころがり出すやうだ。』彼は得意になつて考へた。『人は運で出世すると思つてゐる。早い話があつたミロノフだ。彼奴は今百萬長者になつてゐる。だがそれは何のためだ。働くことだ、働くことだ。さうすりや神様がお授け下さる。體さへ健康であつて呉れ、ばいゝが。』

無一文から叩きあげたミロノフのやうな百萬長者に、自分もなり得るかも知れないと思ふと、ワシリーイ・アン・ドレーキチは堪らなく氣が立つて来て、誰かと話をして見たくなつた。然し話の相手になるものはなかつた……。まあ、ゴリヤーチキノへでも着いたら、地主とその話をして、眼の玉をむいてやらう。

『いや何うもよく吹くなア！ かう吹きかけられては、朝になつても出られないぞ！』彼は風の發作に耳をすましながら、かう思つた。風は櫓の前部に當つてそれを撥め、その薄板の處へ雪を吹きつけてゐた。彼は體を伸ばして見廻した。白い、落着きのない薄闇の中に栗毛の黒ずんだ頭と、

はためく粗布に包まれた背と、括られた濃い尻尾ばかりが見えてゐた。周圍は、前後左右皆一様に白い、落着きのない闇で、時とすると幾らか明るくなつたり、更に濃くなつたりした。

『ニキータの言ふことなんか聽かなければよかつた。』と思つた。『進みさへすれば、何處かへ出られたに違ひない。よしまたグリシキノへ着いたにしても、タラスの處で泊れたんだ。それをこんな處に坐つて夜を明かさなければならぬのだ。えゝと、今何だつたかうまい處まで考へて行つたんだが？ うむ、さうだ。神様も稼ぐ者には報いを下さるが道樂者や怠け者や莫迦者には下さらないのだ。先づ一服やらう！』と、彼は坐つて、煙草を取出し、俯伏すやうにして、着物の裾で火を包んで、風を避けた。けれども風は入口を見つけては、一本又一本と燐寸の火を消すのだつた。でも遂々、何とか工夫して火をつけて、煙草を喫かし始めた。

彼は思ひが徹つたので、ひどく喜んだ。煙草は彼自身よりも風の方が餘計喫かしてしまつたけれど、それでも三度ばかり吸つたので、又心持がよくなつた。彼は再び櫓の後部へ身を落ちつけて、よく包まつて、又も思ひ出と空想とを始めた。と、全く意外に突然意識を失つて、微睡みかゝつた。けれど俄かに何かで突かれたやうに、びつくりして眼を醒

ました。それは栗毛が彼の體の下から鬮を抜き抜いたのか、それとも彼自身の内部の何物かに揺られたのか、——兎に角彼は眼りを破つた。すると、心臟が莫迦に速く激しく打つて来て、まるで彼の乗つてゐる轎が揺れてゐるやうに思はれた。彼は眼を見開いたが、周圍は依然として同じであつた。たゞ幾分明るくなつたやうな気がした。『夜が明けかゝつたな。』と彼は思つた。『それに違ひない。では朝になるのも直ぐだ。』しかし、明るくなつたのは月が出たからだらうと、忽ち思ひ直した。彼は身を起して見廻した。最後に馬を見た。栗毛は相變らず風に尻を向けたまゝ全身顫へてゐた。雪を被つた粗布は一方の端が捲かれて、後鞞は片側にずり落ち、雪を被つた頭と亂れた捲毛と鬮とは、今ははつきりと見分けがついた。ワシリーイ・アンドレーキチは轎の後部へ身を反らしてその蔭の方を見た。ニキータは蹲まつた時のまゝの姿で坐り續けてゐた。彼の包まつてゐるズツと、その兩足の上には雪が厚く積つてゐた。『此奴、凍え死しなければよいが、破々な着物も着てゐないからなア。でもこちらばかりが悪いのぢやない。この手合の分らないのにも困る。本當に無教育だからな。』と考へた。そして彼は馬の粗布をとつて来てニキータに掛けてやらうと思つた。けれど起ち上つて身動きするのも寒かつたし、

またさうすると馬が凍つてしまはなとも限らなかつた。『何だつてまたこんな野郎を連れて来たんだらう。これといふのも皆彼女が分らないからだ。』業腹な女房のことを考へだして腹を立てた。そしてまた元の自分の座に體を横にして轎の前部にくつゝいた。『いつか叔父さんが雪の中で一晩明かしたと云ふのもこんなだつたらう。』と彼は思ひ出した。『然し何ともなかつた。ところがセワスチヤンが掘り出された時には。』と、他の場面が現はれた。『今度は全身こちゝになつて、まるで氷漬けにした動物の死體だつた。』

『グリシキノに泊れば、何の事もなかつたに。』毛皮の温かみが何處からも無駄に出ないやうに、そして頸も、膝も、足先も、何處も温まるやうに、丹念に身を包むと、彼は眼を閉ぢて、また眠らうと心がけた。然し今度はどんなにしても、もう寝入ることが出来なかつた。却つてあべこべに自分が全く元氣の盛んなのを感じた。で、彼はまた利益高や、人に貸してある金高を勘定し始めた。そして自分一人を相手に自慢をしたり、自分の身と自分の境遇を喜んだりしたが、今度はそつと忍び寄る恐怖と、何故グリシキノに泊らなかつたかといふむしやくしやくした考のため絶えず遮られた。『何うして、寝床に寝たら、温かだらうに。』

彼は幾度も寢返りを打ち、幾度も居ずまゐを直して、風の防げる位置を取らうと努めた。が、何うにもうまく行かなかつたので、また體を起して位置を換へ、兩足を包み、眼を閉ぢて氣を静めた。然し、堅い雪靴の中に縮こまつてゐる足が、づき／＼痛くなつたり、何處からか風が吹込んで來たりしたので、一寸横になつてゐたゞけであつた。グリシキノゐれば、今頃は温かい家の中で安らかに寢てゐることが出來たらうと思ふと、またもむしやくしやくして來るので、起き上つて向きをかへた。そして體を包み直して寢かゝつた。

一度遠くの方で鶴の鳴くのを耳にしたやうな氣がした。彼は喜んで、外套をはだけて、頻りに聞きとらうとした。が、どんなに耳を尖らして見ても、轅に嘯き、ハンカチをはためかす風の音と、襦の後部へ吹きつける雪の外には何も聞えなかつた。

ニキータは一度坐り込んだつきり、身動き一つせず、また二度ばかり聲をかけた、ワシリーイ・アンドレーキチの言葉に返事もせず、じつと何時までも、坐りつゞけてゐた。

『野郎心配ごとが無いから、眠つてるにちがひない。』襦の後部越しに、厚い雪をかぶつてゐるニキータをのぞくと、

ワシリーイ・アンドレーキチは、積に障りながら、かう思つた。

ワシリーイ・アンドレーキチは二十回も立つたり坐つたりした。この夜はいつまで経つても明けないのではないかと思はれた。『だがもう、夜明に近い筈だ。』時々かう思つては、身を立てて見廻した。『どれ、時計を見ようか。着物をはだけては凍えてしまふぞ。だが、もう夜明けに近いのだと分つたら、だん／＼心持よくなるだらう。そしたら先づ馬をつけよう。』心の底ではまだ／＼夜が明けるものかと思つてゐたが、だん／＼ひどく怖氣がついてくるので、時間も確めたかつたし、また自分を騙しても置きたかつた。彼は細心に半外套のホックを外し、兩手を懷中に入れ、少時探してから漸くチョッキに手か届いた。やつとのことで、七寶の花模様についてゐる銀側時計を引張り出したが、火がなく、ては何も見えなかつた。彼はまた煙草の時と同じく兩膝と兩肘をついて、俯伏になり、燐寸を出して摺り始めた。今度は餘程用心深く仕事にかゝつたし、燐寸の棒でも一番燐の澤山ついてゐるのを探り當てたので、二遍で火が點いた。そこで光の下へ時計の面をさしつけて見たが、彼は一寸見た時は、自分の眼を信じなかつた……。十二時を十分過ぎたばかりであつた。まだこれから先に一と夜さあるのだつ

た。

『あゝあ、長い夜だ!』と思ふと、ワシリーイ・アンドレーキチは背中にさつと寒氣を感じた。そこで、また鈕釦を嵌め、體を包んで、氣長に待つ心構へで櫓の角にびたりとくつゝいた。と、その途端、單調な風の音の彼方から、何だか新しい活き／＼した響がはつきりと耳に止まつた。その響はだん／＼強くなつて、そのうちにすつかり聞きとれるやうになつたと思ふと、又だん／＼に弱くなつて行つた。それが狼であることに少しの疑ふ餘地は無かつた。而もこの狼は餘程近い處にゐるらしく、下顎を動かして、その聲の調子を變へてゐるのが、風の加減で明らかに聞えるのだつた。

ワシリーイ・アンドレーキチは襟を拂ひのけて、一心に聞いてゐた。栗毛も兩耳を動かしながら、じつと聞いてゐた。そして狼の聲が歇むと、馬は兩脚を踏み直して、用心深く鼻を鳴らした。それからといふもの、彼はもう何うしても眠れなかつた。眠れないばかりか、落着いてゐることも出来なくなつた。例の勘定事や、事業や、自分の榮達や資格や、富などに就いて、如何に思ひを凝らして見ても、益々恐怖に囚はれるばかりで、何故グリシキノへ泊らなかつたかといふ考が、すべての考への上に立ち、すべての考

へに付き纏うた。

『山林なんか何うでもなるがいゝ。あんなものなんか無かつたつて結構やつて行けるんだ。——本當に泊ればよかつた。』と獨語した。『酔拂ひは凍死するもんだといふ。そして俺は飲んで来た』と彼は思つた。そこで、自分の感覺を探つて見たが、彼の知り得たところは、自分が寒さのためか、恐ろしさのためか、何のためか譯もなく慄へてゐることであつた。前のやうに體を包んで寝て見たが、最早そんなことをして居れなかつた。一箇所にじつとしてゐる事さへ出来なかつた。そしてとても駄目とは思ひながら、心のうちに湧いて来る恐怖を紛らすために、起き出して何かしてみたくなつた。再び煙草と燐寸を取り出したが、併し、燐寸も残るところは僅かに三本で、それすら屑ばかりだつた。三本とも火が黠いたが、皆燃えつかずに消えてしまつた。

『えゝ糞、勝手にしやがれ、畜生、失せちまへ。』と、相手も無しに罵つて、握り潰した煙草を抛り投げた。ついでに燐寸箱も棄てようとしたが、思ひかへして、箱は衣囊に入れた。で、こんな具合に不安が益々募つて來るので、彼はもうとてもこの場所に留まつて居れなくなつた。櫓の中から降りて、風に背を向けながら、ぎゆつと下の方へ帶を締

め直した。

『こんな處に寝轉がつて、死ぬのを待つて居られるかい。早く馬に乗つて逃げちまへ。』と、不意にかういふ考が頭に浮んだ。『乗つたら、馬も黙つちやあまい。彼奴は。』と彼はニキータの事を思つた。『彼奴は死んだつて同じことだ。どうせ餘な生活をしてゐる譯でもない。彼奴は生命なんか惜しくはなからうか、俺の方は、有難いことにはまだ生きるだけの價值があるて……』

そこで彼は馬を解き、その頸に手綱をかけて、直ぐ様それに跳び乗らうとした。けれど外套や靴があまりに重かつたので、下り落ちた。そこで橇の上に立つて、其處から乗らうとしたが、體の重みで橇が揺れた爲め、また落ちた。漸く三度目に馬を橇へ引き寄せてから、そつと橇の端に立つて、兎に角馬の背に腹を載せることだけは出來た。そのまゝ一寸横たはつてゐて、一二度前方へ體をせり出し、遂々馬の背に足を跨ぎかけた。それから足の蹠を後靴の分け紐に乗せて坐り込んだ。

橇が動揺したのでニキータは眼を覺まして起き上つた。そして何か言つてゐるやうに、ワシーリイ・アンドレーキチには思はれた。

「手前達のやうな莫迦者の言ふことが聞いてゐられるか。

こんな態で死なれるもんかね。」と、ワシーリイ・アンドレーキチは叫んだ。そしてはだかる外套の裾を膝の下に掻き込み、馬を廻すと、林と番人小屋があらうと思はれる方へ向けて、駈けさした。

七

ニキータは、ズックを被つてしやがみこんだまゝ、じつと橇の後部の蔭に蹲つてゐた。彼は自然を相手に生活し、萬事不如意に慣れた多くの人と同じく、辛抱強かつた。そして、聊かの不安も訂立たしさも味ふことなく、幾時間も幾日間も穩かに過ごすことが出來た。彼は、主人に呼ばれたのを耳にしないわけではなかつた。けれども身を動かして返事をしたくなかつたので黙つてゐた。飲んで來たお茶の爲めと、も一つは雪の中をのたくり廻つて可なり運動した爲めとで、まだ温かではあつたが、この温かみはそんなに長く續くものでないといふことを知つてゐた。丁度馬が立止まつて、幾ら鞭をあてゝも先へ進まなくなり、主人もこの上働かせるにはどうしても餌をやらなければならぬと思はれるほど、馬の草臥れたと同じやうに、彼も疲れ果てた自分を感じてゐたので、この上運動によつて身を温める力の無いことを知つてゐた。それに彼の片足は破れ靴の中

で冷たくなつてゐて、最早親指の感覚も無かつた。そればかりか、全身も次第々々に冷たくなつて行くのであつた。そこで自分は今夜のうちに死ぬかも知れない、いや多分このまゝ死なねばなるまいといふ考へが浮んだけれど、その考へも彼にとつては、別に不快なものでもなく、格別怖ろしいものでもなかつた。この考へが別に不快なものでなかつたといふのは、つまり彼の一生は不斷のお祭でなかつたし、寧ろ反對に間斷のない勤勞であつて、そのためにだんだん疲れて來てゐたからであつた。次にこの考へが格別怖ろしくも思へなかつたわけは、彼は、この地上で仕へてゐたワシリーイ・アンドレーキチのやうな主人達の外に、彼の生命は、彼をこの世に遣はし給うた別な大きな主人のものであることを、その生涯中、常に感じてゐたからであつた。そして、死ぬ時にはこの大きな主人の支配に入るのでといふことも、この大きな主人は決して怒らないといふことも知つてゐた。『そりやア住みなれ、やり馴れたものを棄てるのは惜しいけれど、どうしようもねえこんだ。新規におつばじめるより仕様がねえだ。』

『罪?』と思ふと、彼は自分の飲酒、之に棄てた金、女房をいぢめた事、悪口、教會へ行かなかつたこと、齋を守らなかつた事、その他、懺悔式の時、僧侶が諷へてくれた一切

のことを想ひ起した。『なる程こりやア罪だ。だが俺だけがそれを背負ひ込むわけやねえ。神様がこんな風に俺を造らつしやつたと見える。だが罪は罪だ。何處へも隠れられるもんぢやねえ。』

かうして彼は、初めのうちに、今夜やつて來さうなことを考へてしまつて、その後は二度とこの考へに戻つて行かなかつた。そして自然に頭の中へ浮んで來る種々の思ひ出に耽つてゐた。マルファが來た時のこと、酔つ拂つた労働者のこと、自分が酒を斷つたことを想ひ起したり、今度の旅、タラスの家、分家の話などを考へ出したり、自分の息子のこと、今粗布を着て温まつてゐる栗毛のこと、櫛の中で寢返つて、ぎし／＼いふ音をたてた主人のことなどを思つてゐた。『旦那は怒つてゐるやうだ、俺が遣つて來たことが氣に入らねえんだ。』と、彼は思つた。『あゝいふ暮しを棄て、往生さつしやるのは厭だらうて。そこへ行くところとは違つたもんだ。』かうした思ひ出のすべてが彼の頭の中でこんぐらかり、ませ、こぜになつてゐるうちに、彼は寢入つてしまつた。

ワシリーイ・アンドレーキチが馬に乗らうとして、櫛を揺つたはずみに、ニキータが背を凭せてゐた櫛の後部が離れて、その滑り木がごとんと背甲に當つた時、彼は眼を

覺まして、否いな應おこなしにその位置を換へさせられた。やつとの思ひで足を伸ばし、雪を拂つて立上ると、忽ち鋭い寒さが彼の全身を刺した。彼は、現在起つてゐる事が皆分つてしまふと、ワシリーイ・アンドレーキチが、今はその馬に着せて置く必要のなくなつた粗布あらぬのを置いて行つて呉れるやうに、そのことを主人に叫んだのであつた。

然しワシリーイ・アンドレーキチはそのまゝ、濛々たる雪煙ゆきけむりの中に見えなくなつてしまつた。

ひとり取り残されて、ニキータは少時しばらく何うしようかと考へた。人家を捜して歩いて行く力はないと感じたが、舊もとの處へはもう坐り込むことが出来なかつた。——そこはすつかり雪に埋まつたからである。橇こまの中でも、温まらないこととは分つてゐた。何故なぜといふに身を包む物もなかつたし、上衣や外套はあるにはあつたが、今では全く彼を温めてくれなかつた。彼はまるでルバシニカ一枚きりのやうに寒かつた。

彼は心細くなつた。

「天あまに在あす父ちちよ！」彼は口に出して言つた。すると、自分おれは一人であるのでない、誰かしら彼の言葉を耳に入れて、見成みまつてくれる者があるといふ意識によつて、氣が落ち着いて來た。

彼はふかい溜息ため息を吐ついた。そして、頭からズックを取りもせずに、橇こまに這ひ込んで、主人のゐるところへ横になつた。

しかし橇こまの中でも、何うしても温まる事が出来なかつた。最初は全身が、たゞく慄おそへてゐたが、やがてその慄おそへが止まると、次第々々に意識を失つて行つた。死にかゝつてゐたのか、それとも眠りかゝつてゐたのか——彼は知らなかつた。けれども、その何れに對してもちやんと準備が出来てゐるのを感じてゐた。

八

一方、ワシリーイ・アンドレーキチは、何故なぜか林と番小屋とがあると思ひ込んだ方へ向けて、兩足と手綱の端とで馬を驅つてゐた。雪は彼の眼を眩くらまし、風は彼をやるまいとするものゝやうであつた。けれど彼は體を前に伏せて、斷えず外套を掻き合せながら、またそれを、坐るのに邪魔な冷たい鞍褥くらとと自分との間にねぢ込みながら、間斷なく馬を驅つた。馬は苦しかつたけれども、遣られる方へ素直すぢに並歩ならみで進んで行つた。

五分間程、眞直まことに進んだと思つた。が、彼の眼には、もう馬の頭と白い野原の外何物も見えず、馬の耳もとに嘯なげく

風の音と、自分の外套の襟の鳴る音の外、何物も聞えなかつた。

すると俄かに眼の前に何か黒いものが見え出した。彼の心臓は嬉しさに高鳴つた。彼は早くも之を村の家々の壁だとして、その黒いものに向つて進んだ。然し黒いものは静止してゐないで、斷えず揺いでゐた。それは村ではななくて、畦に生えてゐる高い艾で、雪の下から頭を出し、一方に押しつけてびゅう／＼唸つて行く風に逆らひながら、自暴に悶えてゐるのだつた。無残な風に揉まれてゐるこの艾の様子

子が、何故かワシーリイ・アンドレーキチを戰慄させた。そこで彼は、急いで馬を驅り出したが、この艾の處へ來る時、以前の方向を變へてゐたことに氣がつかなかつた。

で、今は全く別な方向へ馬を驅つてゐながら、畑番の小屋のある方角へ進んでゐるのだとばかり思つてゐた。然し馬が右へ曲らうとするので、彼は負けずにそれを左へ左へと引張つてゐた。

又も彼の前に何か黒いものが見えた。今度こそは確かに村だと思ひ込んで喜んだ。しかしそれは又しても艾の生えてゐる畦であつた。干乾びた高い草は前と同じく風にあふられて、何故かワシーリイ・アンドレーキチを脅かした。しかしそれは前と同じ背の高い草であつた。そればかりでは

ない、その傍には雪に埋れかゝつた馬蹄の跡が續いてゐた。彼は馬を止め、身を屈めて覗いた。それは埋まりかゝつた馬の足跡で、彼自身の馬のものでなければならなかつた。彼は明らかに、小さい地點を二巡りして來たのだつた。『こんなことをしてゐてはおしまひだぞ！』と思つた。けれど恐怖に屈服しまいとして、尙ほ強く馬を驅り出し、白い雪の渦巻をじつと見詰めてゐた。と、その中に何だか光るやうなものがちら／＼見えた。何かと思つてよく見ると、それは直ぐ消えてしまふのだつた。一度は、犬の遠吠えか狼の吼えるやうな聲を耳にしたと思つた。しかしその音は微かで、明瞭しなかつたから、彼自身も本當にそれを聞いたのか、それともたゞさう思つたのか分らなかつた。で、彼は立止まつて一心に耳を傾けた。

と、不意に耳が潰れる位の凄じい叫び聲が、彼の耳もとで響いた。彼の體の下にあるすべてのものが震ひをのゝいた。彼は馬の頸へしがみついたが、馬の頸筋もぶる／＼と顫へた。怖ろしい叫び聲は、尙も物凄く募つて行つた。何秒かの間、彼は正氣づくことが出来なかつた。何事が起つたのか、合點が行かなかつたが、事實は何でもなく、栗毛が元氣をつける爲めに、それとも何かの助けを呼ぶ爲めに、その力づよい凜とした大聲を揚げて、嘶いたに過ぎな

かつた。『ちえ！ 莫迦にしてやがる。ひどく嚇かされたわい、畜生！』と彼は獨語した。けれど、事の真相がわかつて、彼はその恐怖を追ひ拂つてしまふことが出来なかつた。

『度胸を据えて、氣を持ち直さなければ駄目だ。』と心の中で言つては見たものゝ、それと同時に自制の力がなくなつて、矢張り馬を驅り續けてゐた。彼は今風に逆らつてゐるのではなく、却つて風下に進んでゐることには氣がつかなかつた。彼の體——と言つても、着物のほだかつて、鞍梅に觸れてゐる處などは、進むにつれて殊にびり／＼痛み、手足は慄へ、呼吸も断え／＼であつた。この恐ろしい雪野原のまん中でだん／＼死に落ちて行くのに、何一つ救ひの道はないといふことを、彼は悟つた。

と、不意に馬がず／＼と何處かへめり込んだと思ふと、雪の吹き溜りに落ちて、身悶えしながら横倒れになつてしまつた。彼はぼん／＼と跳ね降りたが、その時自分の足をかけてゐた後靴を横腹の方へ引寄せ、跳び降りながらも取纏つてゐた鞍梅をひつくりかへして了つた。そして彼が跳び降りると同時に、馬は身を直して、一氣に前方へ飛び出した。そして一と跳ね二た跳ねしてから、また嘶いたと思ふと、ワシリーイアンドレーキチ一人を吹溜りの中に残して、

落ちかゝつた粗布と後靴とを後へ引き摺つたまゝ姿を消してしまつた。ワシリーイアンドレーキチはその後を追ひかけて行つたが、雪が深い上に外套が重く、一步毎に膝の上まで没るので、二十歩足らず進むと、もう息が切れて動けなくなつてしまつた。『山林、羊肉、貧地、店、酒屋、鐵葺きの住宅、土藏、相續人——』かう心の中で數へると、『一體それが何になる。それは何だ？ 無駄なことだ。』といふ考へが頭に閃いた。すると、何ういふわけか、彼が二回も乗りつけた、あの風に跳いてゐた艾が記憶に浮んで来て、烈しい戰慄に襲はれ、今現に遭遇してゐることがまるで嘘のやうに思はれて來た。『これはみんな夢ではないだらうか？』と考へて、夢ならば早く醒めたいと思つたが、醒めるも何もあつたものではなかつた。それは事實本當の雪が彼の顔を打ち、彼の身にふりかゝり、手袋の失くなつた右の手を凍えさしてゐるのだつた。それは事實本當の曠野の中に、彼ひとり取残されて、あの艾と同じく、刻々に迫る、避けやうもない、無意味な死を待つてゐるのだつた。

『天の女王よ、節制の模範たる聖者、吾等の父ミコライに——(百姓は多くの場合)』彼は昨日の祈禱と、黄金の衣をつけて眞黒な顔をしてゐた聖像と、その聖像に供へる蠟燭とを

思ひ起した。而もその蠟燭といふのは彼が賣つてゐた品で、それを直ぐ人々が彼の處へ持ち返すと、彼はその一寸焦げたのを箱の中へしまつて置くのであつた。今彼はこの奇蹟者ニコライに、救ひを祈つて、感謝禱と蠟燭を獻上する約束を立てたが、すぐその場で固くはつきりと次のことを悟つた。それは、あの聖像の面や、法衣や、蠟燭や、司祭や、祈禱などは、教會の中でこそ皆大切な肝要なものであるが、この場では何一つ役立つことが出来ない、又あのやうな蠟燭や祈禱と、かうした目の前の危急な場合との間には、何等の連絡もないのだ、いやあり得ないといふ事であつた。『へこたれてはならぬ。』と、彼は考へた。『馬の足跡について行くだけのことだ。でないとも埋まつてしまふ。』と、頭に浮んだ。『馬は歸つて来るだらう、歸つて来ないまでも、捕へることが出来る。だが、急いではならぬ、急ぐと却つて莫迦を見る。』ところが、靜かに歩いて行くつもりであつたに拘はらず、彼はのめるやうにして走つてゐた。そして斷えず倒れたり、起きたりするのだつた。雪の浅い處まで來ると、馬の足跡はもう殆ど見分けがつかなくなつて來た。『しまつた！』とワシリーイ・アンドレーキチは思つた。『足跡も失くしてしまひ、馬にも逐ひつけないのか。』然るに、その隣間ふと前方を見ると、何やら黒いものが眼

に入つた。それは栗毛であつた。管に栗毛ばかりではなく、櫛も、ハンカチのついてゐる轆もそこにあつた。栗毛は後轆も粗布も横の方へずり落して、今はもとの場所でなく、ずつと轆の傍へ寄つて立つてゐた。そして足に絡まつた一本の手綱に頭を引き下げられて、そのまゝ首を振つてゐた。かうして見ると、ワシリーイ・アンドレーキチが落ち込んだ吹き溜りといふのは、先刻ニキータと一緒に落ちた處であつて、馬は彼を乗せて櫛の處へ歸つて來たのであつた。それからまた彼が馬上からぼんと跳び降りた場所は、何う考へても櫛の在る處から五十歩とは離れてはゐなかつた。

九

ワシリーイ・アンドレーキチはやつと櫛の處まで辿りつくと、それに取纏つたまゝ、少時じつと立盡して、氣を鎮め、呼吸を休めた。ニキータはもとの處にゐなかつた。しかし櫛の中を見ると、雪を被つてゐるものが寢てゐるので、すぐにそれがニキータであると察した。ワシリーイ・アンドレーキチの恐怖は今は全く消え去つて、若しまだ何か恐ろしいことがあるとすれば、それはたゞ馬上で感じたあの戦慄するやうな恐怖状態と、吹き溜りの中へ只一人取り残された時の驚愕位のものであつた。どんなことがあつて

も、あのやうな恐怖に取りつかれてはならない。その爲めには何かしらしてゐなければならぬ、何かに取紛れてゐなければならぬ。かう思つて彼が手始めにしたことは、風に背を向けて、外套の前を開くことであつた。それから少し息を入れると、今度は靴や左の手袋の中から雪をふるひ出した。右の手袋は見つかるともなく失はれたので、今は何處かで雪の下に入つてゐるに違ひない。

次に彼は、百姓達の曳いて來た穀物を買つてやる時、店先へ出ながらいつも締め直すやうに、ぎゅつと低く帯を締め、動きよいやうに、身支度をした。さて、彼の第一に爲すべきことは、馬の足に引つからまつた綱を解いてやることであつた。彼はそれをしてしまふと、手綱を緩めて、栗毛を元の場所に連れて行き、櫛の前部の金具に縛りつけた。それから、馬の後から寄つて行つて後鞍と鞍褥と粗布とを直してやらうとした、その時である。櫛の中で何かむく／＼と動くのを見出した。と、一面に覆はれてゐる雪の下から、ニキータの頭が持ち上げられた。紛れもなく、最早凍えかゝつてゐるニキータが、一所懸命になつて、身を起したのであつた。彼は坐つて、蠅でも追ふやうな妙な恰好で、手を鼻先で振りながら、何か言つてゐた。ワシリーイ・アンドレーキチは、自分を呼んでゐるのだと思つて、

粗布をそのまま打棄て、櫛の傍へ寄つた。

「何うした？」と、彼は訊いた。「何を言つてるんだ？」

「俺、もう、死に……ますだ。」とぎれ／＼の聲で漸くこれだけのことをニキータは洩らした。「給金は、伴か、嬬に、やつてくんませえ、——どつちでも。」

「おい、何うしたんだ、凍えたのか？」とワシリーイ・アンドレーキチは訊いた。

「わかりますだ、もう駄目ですが……どうか救しておくんなせえ……。」ニキータは、泣き聲でか言ひながらも、矢張り蠅でも拂ひのけるやうに、鼻先で手を振つてゐた。

ワシリーイ・アンドレーキチは三十秒ばかりの間、物も言へないで、じつと立盡してゐたが、急に、うまい買物にありついた時、んと手を打つ時のやうな決意をして、一歩後へ退き、外套の袖を打ちあげて、ニキータの上からも櫛の中からも両手で雪を掻き出し始めた。雪を掻き出してしまふと、急いで帯を解き、外套をはだけ、ニキータを臥かして、その上に乗り被さり、外套ばかりでなく、温かいぼかぼかしてゐる自分の體全體で彼を覆ふやうにした。そして両手で外套の縁を櫛の後とニキータとの隙間へ詰め込み、兩膝でその裾を引き寄せながら、俯伏に寝て、頭を櫛の前

部へ凭せかけた。かうなると馬の動く音も、嵐の吹きすさぶ音も耳に入らず、たゞ一心にニキータの呼吸に注意するばかりだつた。ニキータは最初のうちは長いこと身動きもせずに寝てゐたが、やがて聲を揚げて溜息を吐き、一寸體を動かした。

「そら見ろ、これで死ぬなんて言はれるかい。お前はじつとして温まるがいき。二人でかうして……。」と、ワシリイ・アンドレーキチは言ひかけた。

ところが驚いたことには、彼はそれから先が言へなかつた。何故といふに、涙が眼に溢れて来て、下顎がわな／＼慄へ出したからだつた。彼は言ふことを止めて、咽喉に込み上げて来るものをぐくり／＼と呑み下してゐた。『俺は怖い／＼でこんなに氣が弱くなつたのかな。』と、彼は自分を顧みた。然しこの弱さは彼にとつて不愉快でなかつたばかりか、寧ろ名狀し難い一種特別の、未だ曾て感じたことのない喜びを彼に與へるのであつた。

『二人でかうしてゐれば。』何とも言へない一種嚴肅な感動を覺えながら、彼はまた獨語を言つた。可なり長いことかうして、黙つて、外套の毛皮で眼を拭ひながら、また斷えず風に捲上げられる外套の右端を膝の下に掻い込みながら、横たはつてゐた。

しかし彼はこの喜ばしい心持を誰かに告げないでは居られなくなつた。

「ニキータ。」と彼は呼んだ。

「いゝ氣持でがす、温か度がす。」下から彼に答へた。

「おい兄弟、俺はも少しでくたばつちまふ所だつたよ。そしてたらお前も凍えちまつたらう、そして俺も……！」

ところが此處でまた彼の頬骨が顫へ出して眼に涙が溜つてしまつたので、その先を續けることが出来なかつた。

『なアに、大丈夫だ。』と彼は思つた。『俺は自分が何うなるか位はちやんと分つてゐる。』こゝで彼は黙り込んだ。かうして長いこと、横になつてゐた。

彼もまた下からは、ニキータの爲めに、上からは毛皮外套の爲めに温かだつた。たゞニキータの兩脇で、外套の縁を押へてゐる兩手と、斷えず外套をあふられてゐる。兩足だけが、凍えかゝつて來た。殊に手袋を嵌めてゐない右手は、冷たくなつた。けれど、彼は自分の足のことも、手のこととも考へてゐなかつた。たゞ何うにかして、自分の下に寝てゐる百姓を温めてやりたいと、そればかりを念じてゐた。

何遍か彼は馬を見上げて、その背中がまる出しになつてゐるのと、粗布と後鞆とが雪の上に横たはつてゐるのとを

目に留めた。また、起きて行つて馬に着せてやらねばとも思つたが、ちよつともニキータを棄て、置きたくなかつたし、又自分の浸つてゐる、喜ばしい心持を破る氣にもなれなかつた。恐怖などは、今ではもう微塵も感じてゐなかつた。

『かうなつたら、もう大丈夫だぞ。』と、彼は、自分の買物や賣物のことを語る時にするやうな、例の高慢氣を出して、今現に百姓を温めてゐることを、われとわが胸に語つた。

かうしてワシリーイ・アンドレーキチは一時間過ぎ、二時間過ぎ、だん／＼時の流れて行くのも知らないでゐた。最初彼の頭の中を往來してゐたのは、吹雪や、轆や、眼の前で揺れ動いてゐる、軛をつけた馬などの印象であつた。そこへ、自分の下に寝てゐるニキータのことが想ひ起された。次にはお祭や、妻や、署長や、蠟燭箱などの思ひ出が入り亂れた。そしてまた、その蠟燭箱の下に寝てゐるニキータのことなどが考へ出された。その次には物を賣つたり買つたりしてゐる百姓共や、白い壁や、鐵で葺いた家などが胸に描き出された。そしてその家の下にはニキータが寝てゐるのだつた。それから後はすべてこれ等のものが一緒にこんがらかつて、此方のものも彼方のものも互に入り亂れた。丁

度虹の七色が一つの白い光に結び合ふやうに、これ等一切の印象が一つの無に歸した時、——彼はもう眠りに落ちてゐた。彼は夢も見ずに長いこと眠つてゐた。が、明け方近くなつて再び様々な幻が現はれた。彼は何だか蠟燭箱の傍にでも立つてゐるやうであつた。するとティーホノフの女房がお祭に供へる五コペイカの蠟燭を買ひに來た。彼は蠟燭をとつてこの女に渡さうとしたが、手がびたりと衣囊の中にくつゝいてしまつて、持ちあがらないし、箱の周圍を廻らうと思つても足が動かない。新しい、よく磨いた上靴が敷石の床に生えついてゐて、それを引離すことも出來なければ、その中から足を抜き取ることも出來ない。と思ふと、その蠟燭箱が蠟燭箱でなくなつて、寢床に代つてゐる。よく／＼見るとその蠟燭箱の上には、つまりわが家の寢床の上には自分が俯伏になつて寝てゐるのであつた。彼は寢床の上に横はつたまゝ、起き上がることが出來ない。また起きる必要もなかつた。何故なら署長のイワン・マトウエイチが間もなく自分を訪ねて來る、そして彼と連れ立つて、山林の買入れか、又は粟毛の後鞆を直しに行く筈になつてゐる。そこで彼は妻に訊く。『おい、ミユラウナ、署長はまだ來ないかい？』——『え、まだ來ません。』と答へる。すると玄關先へ誰か來るやうな音がする。屹度、彼だ、と

思つたら通り過ぎた。『ミコラウナ、おいミコラウナ。何うだい、まだ来ないかい？』——『え、まだです。』かうして彼は寢床の上に横はつたまゝ、起きることも出来ず、たゞ待ち侘びてゐる。ところでこの待ち侘びてゐる事はどうかしくもあり、また嬉しくもあつた。すると俄にその喜びが實現されて、彼の待ち人がやつて来る。然しそれはもう署長のイワン・マトウエーイチではなくて、誰だか他の人である。他の人ではあるが、これこそ彼の眞の待ち人である。その人は来ると、彼を呼んでゐる。彼を呼んでゐるその人といふのは、彼に囁いて、ニキータの上に乗りかゝれと彼に命じた人であつた。ワシーリイ・アンドレーキチは、このやうな人の訪ねて来たことが嬉しくなつて、『参りませ！』と歡聲を揚げた。と、その聲で正氣ついで、彼は眼が醒めたが、それは眠入つた時とは全く別人になつて醒めたのである。彼は起きようとするが起きられない。手を動かさうとするが動かない。足をと思ふが足も動かない。頭を廻さうとしたがこれも駄目であつた。そこで彼は不思議なことだと思ふ。しかしそれを少しも悲觀しない。ふと、ニキータが自分の下敷きになつて寝てゐることを思ひ起し、ニキータが温くなつて生きてゐることが分る。すると自分はニキータであり、ニキータは自分であるやうに思はれ、

彼の生命は彼自身のうちになくて、ニキータのうちに在るやうに思はれた。彼は耳を澄まして、ニキータの息遣ひと、その微かな鼾聲まで聞きつける。『ニキータが生きてゐる。といふのは、俺が生きてることなんだ。』と、彼は凱歌を奏するやうに獨語した。

それから、彼は金のこと、店のこと、家、買物、賣物、ミローノフの百萬分限のことなどを想ひ起した。そして何故、あのワシーリイ・ブレフノフといふ人間は、あんなことばかりしてゐたのか、料簡が知れなかつた。『いや、彼は何が何だかまるで分つてゐなかつたのだ。』と彼は、ワシーリイ・ブレフノフのことを考へてゐた。『分つてはゐなかつたとしても、今はわかつてゐる。今はもう間違ひなしにわかつてゐる。お、今はわかつてゐる。』するとまたも、さつき自分を呼んでゐた人の呼び聲が耳に聞えた。そこで『私、参ります、参ります！』と、彼の全存在が、嬉しさに感動して答へた。と同時に、彼は自分が自由であること、もうこれからは彼を妨げる何物もないことを感じた。

ワシーリイ・アンドレーキチはこの世ではこれつきり何も見ず、何も聞かず、また何も感じなくなつた。

あたりは依然として、濛々と煙つてゐた。今までと同じ

雪の旋風が渦巻いて来ては、死體となつたワシリーイ・アンドレーキチの外套や、打ち慄へてゐる栗毛の全身や、僅かに見えてゐる櫓や、その底で今は死體となつた主人の下に寝てゐる温かいニキータを覆うてゐた。

一〇

夜明け前にニキータは目を覺ました。彼を起したのは、又もその背中をさつと走つた寒さであつた。彼は夢を見てゐた。何でも主人の麥粉を車に積んで風車場から遣つて來る處であつた。そして、小川を渡らうと橋の袂に差しかゝると、車が減込んでしまつた。彼は車の下へ這ひ込んで、背中を擴げてその車を持ちあげてゐるのだつた。ところが不思議なことには、車は動かないで、びつたりと彼の背中へくつゝいてしまつた。そこで彼は車を持ちあげることも出來なければ、車の下から這ひ出すことも出來ず、腰のあたりをすつかり壓し潰されてしまつた。『もう澤山だ！』と、彼は、その背中を車で壓しつけてゐる者に言つた。『袋を取つてくれ！』然し車はだん／＼と冷たく彼に壓しかゝる。すると俄かに何だか變な音がする。それで彼はすつかり眼が醒めた。そして一切のことを思ひ出した。冷たい車といふのは、彼の上に乗るかゝつてゐた主人の死體であつた。

又こつ／＼當つたのは、栗毛の奴が二度ばかり櫓を蹴飛ばしたのであつた。

「アンドレーキチ様、こうれ、アンドレーキチ様！」ニキータはもう事實を豫感しながらも、背中を彈ませて、そつと主人に聲をかけた。

然しアンドレーキチは返事をしなかつた。そしてその腹や足は、分銅のやうに堅く冷たく重たかつた。

『死んでしまつたぞ、屹度。どうぞ天國の往生を！』と、ニキータは心に言つた。

彼は首をひねり、眼の前の雪を片手で拂つて、眼を開いた。明るかつた。風は相變らず轆に嘯き、雪も相變らず降り注いでゐた。たゞ以前と僅に違ふところは、もう雪が櫓の後部にさら／＼當らないで、音もなく櫓と馬とを深く深く埋めてゐたことゝ、もう一つは馬の動くのも鼻息もまるで聞えなかつたことだけであつた。『彼奴も凍えちまつたに違えねえ。』と、ニキータは栗毛の身を思ひやつた。事實、ニキータの夢を破るほど櫓を蹴飛ばしたあの打撃は、もうすつかり凍え切つた栗毛が、立つてゐる脚を踏み支へようとした最後の努力であつた。

『これは、神様が、天の父が、俺をもお呼びになつてゐるさるだ。』と、ニキータは獨語した。『主よ、御心のまゝでが

す。辛つらいことですが、二度は死なねえし、一度は逃れましねえ。どうか早く、お願ひ申しやす。……」から言つて彼は再び手をひつこめて、眼を閉ぢた。そして今度こそは大丈夫本當に死ぬのだと思ひ込んだまゝ、だん／＼氣が遠くなつた。

翌日の晝頃のことである。百姓達は鋤を使つてワシリーイ・アンドレーキチとニキータとを掘り出してゐた。其處は道路から三十サージエン、村から半露里離れた地點であつた。

雪は極より高く積つてゐたが、轡なぐさと、それにつけられたハンカチはまだ見えてゐた。栗毛は腹まで雪に埋もれて、背中からは後轡うしろなぐさと粗布あらぬいとを下げ、死んだ頭を凍つた喇佛らふつの處へつけて、全身眞白になつて立つてゐた。鼻孔には氷柱が垂れ、眼は霜で蔽はれた上に、涙の跡が凍つてゐた。彼は一夜のうちによつ／＼と瘦せてしまつて、もうたゞ骨と皮ばかりになつてゐた。ワシリーイ・アンドレーキチはまるで獸の死骸のやうにこち／＼と固くなつて、その足は擡げられたまゝにふんぞつてゐた。それをニキータの上から引摺り下した。鷹のやうに突出してゐる眼は堅く凍りつき、刈り込んだ口髭の下に開かれた口には、雪が一杯詰まつてゐた。

ニキータはと見ると、全身凍え切つてはゐたが、まだ生きてゐた。物音に氣がついた時、ニキータは、もう自分は疾うに死んでゐるのだと思ひ、今自分に爲されてゐることゝあたり起つてゐることゝは、もうこの世のことではなくあゝの世のことなのだ信じてゐた。そして百姓達があや／＼や、あや／＼ながら彼を掘り始め、やがて彼の上から堅くなつたワシリーイ・アンドレーキチを引摺り下すのを耳にした時、彼は、あの世でも百姓達は大きな聲で話をするのかと思ひ、體からだも元のまゝなのを不思議に思つた。けれども、それは最初のうちであつた。やがて、自分はまたこの世に、この場にあるのだと分つた時、彼は喜ぶよりも寧ろそれを悲しんだ。殊に、兩足の指が凍傷してしまつたことが分ると、猶更であつた。

ニキータは病院で二た月暮らした。指を三本取られたが、あとは癒なほつてしまつたので、働くには差支へなかつた。で、初めは人の家に住み込み、後、老い込んで番人になつて、猶二十年も生き永ながへた。死んだのは漸く今年のことである。而も自分の望み通りに、わが家の聖像の前で、火を點ともした蠟燭ろうそくを手にして息をひき取つた。臨終には自分の女房に今までの罪を詫び、息子や、孫共に別れを告げ、自分が死ねば、餘計な食ひ扶持が減つて伴や女房が助かり、自

分としてはこの厭はしい生活から離れて、年を重ねるにつけ、時の経つにつれて、愈々明かに愈々慕はしくなつて来た別な生活へ、本當に移つて行くのだといふことを、心から喜んで死んだ。さて、この本當の死の後、彼が目覺めた後世は、果してこの世よりもよい處であるか、悪い處であるか？ 彼はそちらへ行つて幻滅に逢つたか、それとも期待したものを發見したか？——それは吾々すべての者が間もなく知ることであらう。

了

カフカズ
高架索の捕虜トルストイ著
昇曙夢譯

一人の貴族がカフカズの軍隊に一士官として勤務してゐた。彼は名をジイリンと云つた。

或る日彼の處へ國許から手紙が來た。それは老母からの手紙で、かう書いて來た——『私ももうだん／＼年を老るので、死ぬ前に可愛い息子に一度會ひたいと思ひます。歸つて來て私に暇乞をして葬つておくれ。そしてその上で、首尾よくまたお前の勤めに歸つて行くやうにしておくれ。それから、私はお前のために花嫁を見附けておきました。その女は伶俐で美しく、財産もあります。お前が氣に入つたら、結婚して一緒に家に残るのもいいでせう。』

ジイリンは考へた、『全くだ、お母さんは年を取つて、だん／＼弱くなつて來た。多分もう一度お目にかゝる機會が無いかも知れない。行かう。それから、若し花嫁が美しければ——その時は結婚してもいい。』

ジイリンは聯隊長の處へ行つて、賜暇の許可を得、仲間將校に暇乞をし、部下の兵士等に別れの馳走として、四ウエドロ(わが一斗五)の火酒を與へた。そして出發の準備をした。その當時、カフカズには戦争があつて、日中でも夜でも、道を自由に旅行することが出来なかつた。ロシア人の誰かが、要塞を離れて馬車で通つたり、歩いたりすると、轆轤人は彼を殺すか若くは山へ擲つて行くのであつた。で、一週間に二度、護衛の兵卒が要塞から要塞へと往復することに取極められてゐた。前と後に兵卒等が付き、中央に旅客が馬に乗つて行くのであつた。

夏の事であつた。日の出る頃に荷車の一隊が要塞の後で編成され、護衛兵が先頭に立つて、この一隊は道路に沿うて動いた。

ジイリンは馬に跨つてゐた。彼の荷車もこの一隊の中にあつた。一行は二十五露里を旅行しなければならなかつた。荷車の行列はのろ／＼と進んだ。兵卒等が立止まつたり、荷馬車の車輪が脱れたり、又は馬が停つたりする毎に一同は立止まつて待たなければならなかつた。

日射しは既に晝を過ぎたが、行列は行程の半ばを進んだに過ぎなかつた。それ程埃と暑さが烈しかつた。太陽はぢり／＼と照りつけて、何處にも日蔭がなかつた。あたりは

一面の禿げた曠野で、一本の樹も一つの草叢もなかつた。

ジイリンは先頭に馬を驅つてゐた。そして行列が彼に追ひ着くまで立止まつて待つてゐた。すると、背後から角笛の鳴るのが聞えて、一行はまた止まつた。彼は考へた、「兵卒なしで一人で行く方がよくはないかしら。俺の乗つて居る馬は良い馬だ。若し韃靼人に會つたら、逃げるのは譯ないんだ。それとも、待たうかしら。」

彼は立止まつてじつと考へてゐた。と、丁度そこへ、やはり馬に乗つた他の士官が、彼の傍へ近づいて來た。名をコスツイリンと云つて、小銃を持つてゐた。

彼は云つた、「ジイリン君。一緒に先きへ乗つて行かう。僕は腹が減つて、もう少しも立止まつてはゐられない位だ。それにこの暑さだ——襖衣なんかぐつしよりになつちまつたよ。」コスツイリンはづんぐりした肥大漢で、赭い顔からは汗がだら／＼流れてゐた。

ジイリンはちよつと考へて云つた、「で、君の小銃は彈丸が込めてあるかね。」

「込めてあるさ。」

「宜し、それなら行かう。たゞ一つ言つて置くがね、離れちやいかんよ。」

二人は並んで道を進んだ。話しながら兩側を見い／＼、

野原に沿うて乗つて行つた。四邊は眺望が廣く展けてゐた。野原が盡きると、道は二つの山の間の谷間に入った。と、ジイリンが云つた、「あの山の上へ登つて、偵察しなくちやなるまい。さうでないと、奴等が山を降りて來て、僕等を驚かすかも知れないからね。」

けれども、コスツイリンは云つた、「あすこを偵察してどうするんだ。いつそのこと前進しようぢやないか。」

ジイリンは彼の云ふことを聽かなかつた。

「いや。」と彼は云つた。「君は下の方で待つてゐてくれたまへ。僕が一寸見廻つて來るから。」

彼は馬を左手の山の上へ駈けさせた。

ジイリンが乗つてゐた馬は獵馬であつた。彼は曾てその馬を百ルーブリ出して、仔馬の群から買ひ取り、それを自分で馴らしたのであつた。彼は翼でも生えたやうに、險しい傾斜の上へと馬を登らしたが、登り始めると直ぐに自分の前方一町程の距離に騎馬の韃靼人が三十人も立つてゐるのを見た。

彼は韃靼人を見て引返さうとしたが、韃靼人の方でも彼を見つけた。彼等は駈けてゐる間にその銃を革袋から取出しながら、彼を追跡し始めた。彼は馬を走れるだけ走らして崖を懸地に駈け降り、コスツイリンに向つて、「銃を用意し

ろ！」と叫んだ。そして自身は馬に向つて云つた、「可愛
い、奴。俺を無事に連れて行つてくれ。躰みづかくなよ。若しお
前が躰みづかいたら最後、俺はお終ひだ。鐵砲のある處まで引返
せば彼奴等に捕まらずに済むのだ。」

併しコスツイリンは韃韃人を見るや否や、ジイリンを待
たずに、あらん限りの力で要塞の方へ駆けて行つた。彼は
その鞭で、馬を右から打つたり左から打つたりした。砂埃すなご
を通して見る事の出来るのは、尾を振つてゐる馬だけであ
つた。

ジイリンは事態が面白くないと見て取つた。が、鐵砲は
行つてしまつた。長劍だけではどうすることも出来なかつ
た。彼はその馬を後方の行列の方へ向けた。護衛兵の方へ
逃げようと考へたのである。

けれども六騎の韃韃人が彼の前方を横切つたのを見た。
彼の馬は良かつたが、彼等のはもつと良かつた。それに彼
等は、ジイリンの機先を制してゐた。彼は馬の手綱を絞つ
て、後方へ向け直さうとしたが、馬がひどく駆け出して
ゐたので、引止める事が出来なかつた。馬は韃韃人の方へ
眞直まじくに飛んで行つた。ジイリンは赤髯あかひげの韃韃人が灰色の馬
に乗つて、彼に近づくのを見た。その韃韃人は喊聲を上げ
て、齒を露出しながら銃を構へた。

『さア。』とジイリンは考へた。『俺はお前たちを知つて
ぞ、悪魔奴！ 若しお前たちが俺を捕虜にしたら、穴に入
れて鞭で打つんだらう。だが俺は生きたまんまぢや捕まら
ないぞ。』

ジイリンは體からだは大きくなかつたが、勇敢であつた。彼は
その長劍を抜き、赤髯の韃韃人に向つて馬を眞直まじくに進め
た。彼は自分に云つた、『俺は馬で彼奴を踏み碎くか、でな
ければ長劍で彼奴を切り倒してやらう。』

彼が一馬身ほどの距離まで駆けつけると、不意に後方で
彼の馬を目撃して銃が發射された。馬は眞逆まじやく様に倒れて、
ジイリンの足を敷いた。

彼は立上らうと試みたが、惡臭のする二人の韃韃人が早
くも彼の上にのしかゝつて後手にしめあげた。

ジイリンは身を振りもぎつて、韃韃人等に打つてかゝつ
た。その時三人の他の韃韃人が馬から降りて、銃床とじしやうでジイ
リンの頭をなぐつた。

彼は目がくらんでよろめいた。

韃韃人等はジイリンを捕へ、自分達の鞍から餘分の腹帶はらび
を取出して、彼の腕を後に曲げ、韃韃結びたて結びに縛つて、彼を
鞍にくゝりつけた。

彼等はジイリンの帽子を取上げ、長靴を引抜き、體中からだ

すつかり探して金や時計を取出し、着物を全部ずたくに引裂いた。

ジイリンは自分の馬をちらと見た。可哀さうな動物は彼の傍に倒れたまゝに横たはつて、空しく起上らうと試みながら、頻りに空を蹴つてゐたが、足は地面に届かなかつた。馬の頭には一つの孔があつて、そこから黒い血が流れ出て、周囲の三尺角程の砂埃は、その血で濡れてゐた。

一人の韃靼人は鞍を取る爲にジイリンの馬に近づいた。馬はやはり足掻いてゐた。その男は短刀を取出して、馬の喉笛を切つた。喉はひう／＼いふ響を立て、全身ぶる／＼と顫はしたが、それつきり絆切れてしまつた。

韃靼人は鞍や馬具を奪つた。赤い髻の韃靼人が馬に乗ると、他の者はジイリンをその鞍の尻に乗せた。そして彼が落ちないように革紐で赤い韃靼人の帯に縛り付けて、山の方へ連れて行つた。

ジイリンはふらく／＼して、韃靼人の臭い背に顔を衝き富てながら、その後には坐つてゐた。

彼の眼に入るものは、丈夫さうな韃靼人の背と、筋の多い頸と、帽子の下に青く現はれてゐる、綺麗に刺つたその頭とだけであつた。

ジイリンの頭はひどく傷つけられてゐた。血が彼の眼の

上に滴り落ちた。が、馬の上では身を置き換へることも、血を拭ふことも出来なかつた。その兩腕は鎖骨が痛むほど緊しく縛られてゐた。彼等は山から山へと長い間乗り進んで行つたが、やがて河を徒渉して往來に出て、それから谷に沿うて進んだ。ジイリンは彼等が自分を連れて來た道を見ておかうと思つた。が、彼の兩眼は、血で引つ着いてゐたし、それに後を振向くことも出来なかつた。

日は暮れかゝつた。彼等は更にもう一つの河を横切つて、岩の多い山を攀ぢ登り始めた。煙の香がして、犬の吠える聲が聞えた。

彼等は或る韃靼人の部落に着いて馬を降りた。子供等が馳せて來てジイリンを取巻き、口笛を吹いたり跳ね上つたりして喜んだ。しまひには、ジイリンに石を投げつけ始めた。

韃靼人は子供等を追ひ除け、ジイリンを馬から抱へ上げて、一人の下男を呼んだ。

頬骨の突出た一人のノガイ人(トルコ種族の一派)が呼ばれてやつて來た。彼は破れた襦袢を着てゐるだけで、胸が丸出しになつてゐた。韃靼人は何事かを言ひつけると下男は足枷を持つて來た。それは鐵の輪の附いた二本の檜の木材で出來てゐて、鐵輪の一つには錠と縮金具とがあつた。彼等

はジイリンの腕を解いて、足枷を箱め、小屋へ連れて行つてその中へ押し入れ、そして戸を閉めた。

ジイリンは肥料の上に倒れた。そこに横になつたまゝ、暗黒の中で柔かさうな處を觸つて見て、その上に寝た。

二

その晩ジイリンは眠られなかつた。夜は短かつた。隙間を透して、外の明るくなるのを見ると、起上つて、隙間をもつと廣くして、外が見えるやうにした。

山から下へ通じてゐる道がその隙間から見えた。右手には韃靼人の山小屋があつて、その傍に二本の樹が立つてゐた。一匹の黒犬が路上に横たはり、一頭の牝山羊が、仔山羊を引連れて、いづれも尻尾を振り／＼歩いてゐた。

染別の襦衣を着て、帯を締めないで、寛い長股引に長靴を穿いた、若い韃靼人の娘が山の下から来るのが見えた。

彼女は頭を布で包んで、その上に大きなブリキの水瓶を載せ、背を前後に曲げて調子をとりながら、頭をくり／＼坊主にして襦衣一枚しか着てゐない韃靼人の子供の手を引いて歩いて来た。

韃靼人の娘が水瓶を持つて通り過ぎると、昨日の赤髯の韃靼人が出て来た。絹の半外套を着帯に銀の短刀を差し、

素足に草鞋を穿き、頭に羊皮の高い黒い帽子を阿彌陀に被つてゐた。そして出て来ると、背伸びをして、その赤い髯を抜き、一寸立止まつて、下男に何か命令して、何處かへ行つてしまつた。

次に馬に乗つた二人の子供が、水槽へ出掛ける途中通りが／＼つた。その馬の鼻さきは濡れてゐた。

それから、襦衣の外には何も着てゐない、足にも何も穿いてゐない、頭を剃つた他の子供達が、小さな隊を組んで、小屋へ近づいて来た。彼等は枯枝を持つて来て、それを隙間へ差し通した。

ジイリンは彼等に向つて、こらつと怒鳴つた。子供たちは泣きだして、足一杯の速さで、四方八方へ散つた。たゞ彼等の裸な脛だけが光つてゐた。ジイリンは、水を飲みたくなつた。喉は焦げるばかりに渴いてゐた。彼は獨語を言つた、『彼奴等は、俺の様子を見に、やつて来ないのかしら。』

突然小屋の扉の開く音がした。

赤髯の韃靼人が、體の細りした、顔色の黒い、もう一人の韃靼人を連れて入つて来た。その男の眼は黒く光つて、頬は赤みを帯び、その小さな髯は、綺麗に刈込んであつた。顔は快活さうに、絶えず元氣よく笑つてゐた。

色の黒い男の方の身装はずつと立派だつた——金のレースで刺繡した青い絹の半外套を着、帯には大きな銀の短刀を差してゐた。それから銀で刺繡した美しいモロッコ皮の上靴を穿き、その立派な靴の上に、更に大きな丈夫な一對の表靴を穿いてゐた。そして頭には白い羊皮で作つた高い帽子を被つてゐた。

赤髯の鞆靴人は入つて来て、何か咳きながら、亂暴な言葉漏らした。それから壁に寄りかゝつて立つと、短刀を動かしながら、狼のやうに横目でジイリンを睨んだ。

しかし敏捷で、活潑で、彈機でも出来てゐるやうにいつも元氣のいゝ色の黒い鞆靴人は、眞直にジイリンの傍へ近づいて、胡坐を組んで、齒を露出し、彼の肩を叩きながら、鞆靴語で、何事かべちや〜喋り、眼を瞬いた。そして、舌打ちしながら、かう云ひ續けた。「コロシヨ・ウルス、コロシヨ・ウルス！」(「立派なロシヤ人だ、立派な」
「ロシヤ人だ」ロシヤ人だと云ふ意味)

ジイリンは彼の云ふことが分らなかつた。そして云つた、「水を飲みたい、僕に水をくれたまへ。」

色の黒い鞆靴人は笑つた。
「コロシヨ・ウルス！」彼は絶えず譯の分らぬ言葉で喋り續けた。

ジイリンは手と唇で、水をもらひたいといふ心持を示した。

た。

色の黒い男はやつと分つたらしく笑つて、入口から頭を出して叫んだ、「デイナー！」

若い娘が走つて来た——細りと瘦せこけた十三四歳の兒で、その顔は色の黒い男にそっくりだつた。紛れもない彼の娘だ。やはり黒目勝で、晴々として、顔は美しかつた。

袖の廣い、長い青色の襦衣を着て、帯は締めてゐない。その襦衣は裾も袖口も赤く、縁は刺繡がしてあつた。彼女は足に寛い長股引と上靴を穿いて、その上に、踵の高いもう一對の表靴を穿いてゐた。頸には、ロシヤの銀貨を連ねた頸飾をつけ、頭には何も被つてゐない。その黒い髪には一本のリボンをつけ、リボンには種々の飾りとルーブリ銀貨が結びつけてあつた。

父に何か言ひつけられると、娘は駈け出した。そして小さなブリキの水差を持つて、直ぐに歸つて来た。娘は父親に水を渡した後で、自分も亦膝をついて、膝頭を肩よりも高くなるやうに突つ立てながら眼を圓く開いて、ジイリンが水を飲んでゐるのを、まるで野獸でも見るやうに凝視してゐた。

ジイリンは水差を返さうとして娘に突出した。すると、娘は野育ちの山羊のやうに跳び退いたので、父親までが腹

を抱へて笑つた。

父親は娘に何か他のものを取りに遣つた。彼女は水差を持ちながら、駈け出して行つて、麵麩種こむぎの入つてゐない麵麩こむぎを小さい丸い板の上に載せて持つて來た。そして又蹲かたまりんで、じつと眼を離さずにジイリンを凝視こらめた。

やがて韃靼人等は立去つて、再び入口を門かどで鎖かざした。

少し經つとまたノガイ人がジイリンの處へやつて來て云つた。「アイ・ダ、ホジャーイン、アイ・ダ！」(おい、且那、お)

彼もロシヤ語を知らなかつた。然しジイリンは、何處かへ行つてくれと云ふのだと察した。ジイリンは足枷あしづかを附けたまゝ、蹠かかとを引いた。歩くことが出来ないで、片脚を引摺らなければならなかつた。ジイリンはノガイ人に跟ついていて小屋から出た。

と、十軒ばかりの家から成つてゐる韃靼人の村と、尖塔のある土民の回教寺院とが見えた。

一軒の家の前に、鞍を附けた三頭の馬が立つてゐて、少年達はその馬の手綱を執つてゐた。この家から色の黒い韃靼人が出て來て、手を振つて、ジイリンに自分の處へ來るやうに合圖しながら、笑つて、何か分らない事を言ひ續けて、また家の中へ入つて行つた。ジイリンは彼の後に跟ついていて行つた。

部屋は小さつぱりとしてゐて、その壁は粘土で滑かに塗られてあつた。正面の壁寄りに斑まだらな羽蒲團はねとんが置いてあつて、兩側の壁には、高價な毛氈けしきが掛つてゐ、毛氈の上には、全部銀鍍金の銃とや拳銃けんじゆや長劍ちやうけんがあつた。

一方の側には、小さな竈かまどが床と同じ高さに据たまつけられてゐた。

床は土で出來てゐて、打穀場うちちかばのやうに滑かであつた。正面はすつかり毛氈で蔽おほはれ、その上には幾個かのふつくりとした枕まくらが置いてあつた。

毛氈の上には、上靴かみぞうだけを穿はいた韃靼人達が坐つてゐた——色の黒いのと赤髯あかひげの男と、それから三人のお客とである。彼等の背には、柔い枕まくらがあてがはれ、その前には、木の盆ひしの上に載せた、稗ひらの粉で作つた煎餅せんぺいと、茶碗ちawanに溶かした牛酪ぎゆうがくと、瓶びんに入れたブウザブウザと稱する韃靼麥酒たんでいばくしゆとがあつた。彼等は何も彼も彼も牛酪ぎゆうがくに浸ひけて、それを指さでちかに喰べた。

色の黒い男は跳はび上つて、ジイリンに、一方の、毛氈けしきの敷しいてない地ちべたのまゝの床へ坐れと命じた。そして再び毛氈けしきの上へ戻つて、客に餞頭せんとうとブウザを御馳走ごちそうした。

下男はジイリンを席せきにつかせて、自分は靴くつを脱ぬぎ、それそれを入口の傍わきの他の客の上靴かみぞうと同じ列れいに置き、主人に成るべ

く近い毛氈の上に坐つた。そして、みんなが喰べてゐるのを見て唾液を拭いてゐた。

韃靼人等が饅頭を食べ終ると、先刻の小娘と同じやうな襦袢を着、寛い長股引を穿いて、頭にハンカチを被つた一人の韃靼婦人が入つて來た。彼女は牛酪と饅頭を提げて、美しい手洗ひ鉢と、口の細い水差とを持つて來た。韃靼人等は、手を洗ひ終ると、腕を組んで跪づいて、四方八方に息を吐きながら祈禱をした。それから彼等は、韃靼語で話し合つた。

客の一人の韃靼人はジイリンに振向いて、ロシア語で話しかけた。「お前はカジイ・ムハメットのために捕虜になつたのだ。」と、彼は赤髯の韃靼人を指さして云つた。「そしてあの男はお前をアブドゥル・ムラートに引き渡したのだ。」と、色の黒い男を指さして云つた。「これからアブドゥル・ムラートはお前の主人だぞ。」

ジイリンは何も云はなかつた。

アブドゥル・ムラートは話し出した。そして始終ジイリンの方を指さしては、笑ひながら云ふのであつた——「ソルダート・ウロス、コロシヨ・ウロス」(ロシアの兵隊さんだ立派) 通譯は云つた。「この人は、お前が家へ手紙を出して、家の者に身代金を送らせるやうに計らへと言つてゐるのだ。」

金が届いたら、直ぐこの人はお前を放免してくれる。」

ジイリンは一寸考へてから云つた。「あの男は澤山の身代金が欲しいのか。」

韃靼人はみんなで相談した。それから通譯は云つた——

「銀三千ルーブリだ。」

「駄目だ。」とジイリンが答へた。「そんなに出せるもんか。」

アブドゥルは跳び上つて、ジイリンに手眞似で何か話し始めた。彼は自分の云ふことがジイリンに分るものと思つてゐるらしかつた。

通譯は彼の言葉を通譯した。「この人はかう云ふんだ。」と彼は云つた。「お前は幾許出すつもりだつて？」

ジイリンは一寸考へてから云つた。「五百ルーブリ。」

と忽ち韃靼人はみんなで話し始めた。アブドゥルは赤髯の韃靼人に向つて叫んだ。彼は話しながら非常に興奮して、口から唾を飛ばした。しかし赤髯の韃靼人は、顔を曇めてその舌を鳴らしただけだつた。

みんなが再び沈黙した時に通譯は云つた。「五百ルーブリぼつちぢや、主人はお前を手放す譯には行かないのだよ。あの人は、自分でお前のために二百ルーブリ拂つたのだ。カジイ・ムハメットはこの人に金を借りてゐるので、この人

は、その貸金の代りにお前を受取つたのだ。三千ルーブリだ。それより少くはお前を許しはしない。若しお前が手紙を書かないんなら、みんなはお前を穴に押し込んで鞭で打つんだぞ。」

『えーッ!』とジイリンは考へた。『奴等に臆病な様子を見せれば見せる程益々悪くなるわい。』

彼は跳び上つてかう云つた――

「ぢやア、あの畜生に云つてくれ。彼奴が俺を嚇かさうと思つてゐるんなら、俺は一カペイカ(我が一鎊)だつてやるもんか、手紙も書くもんか。俺はこれまでだつてお前たちなんぞ怖かアなかつたんだ。これからだつて怖がりはしないよ、畜生!」

通譯はその通りを彼等に通じた。と、忽ち彼等ももう一度話し始めた。

彼等は長い間喋つてゐた。黒い男は立上つてジイリンに近づいて云つた。

「ウルス・ジギット、ジギット・ウルス。」

ジギットといふ言葉は、彼等の間では大膽な若者といふ意味であつた。色の黒い男はまた笑つて、通譯に何か云つた。すると通譯は云つた。「千ルーブリ出せ。」ジイリンは屈服してたまるものかと思つた。「五百ルーブリ以上は拂はな

いぞ。だが、若しお前たちが俺を殺さうものなら、一文だつて取れやしないぞ。」

鞭韃人等はみんなで相談して、下男を何處へか使ひに出した。そして彼等は入口の方を見たり、ジイリンの方を見たりした。

下男は歸つて來た。その後からどつちかかと云へばよく肥えた、ぼろ／＼の着物を着た素足の男が來た。その男の足にも足枷があつた。ジイリンはあつと驚いた。それはコスツイリンだつたのである。

彼等はコスツイリンをもやはり捕虜にしたのであつた。

鞭韃人等は二人を並べて坐らせた。二人は互に話し始めた。鞭韃人等はそれを見て、黙つて聽いてゐた。

ジイリンは自分に起つたことを語つた。と、コスツイリンは馬が立止まつて動かなくなつたことや、銃が發火しなかつたことや、やはりこのアブドゥルに追附かれて捕虜にされたことなどを語つた。

アブドゥルは立上つて、コスツイリンを指さして何か呟いた。通譯はそれを譯して、二人ともこれから同じ主人のものになつたので、先きに身代金を拂つたものが、先きに放免されるのだと云つた。「さアいゝか。」と、ジイリンに云つた。「お前はあんなに直ぐむかつ腹を立てたが、お前の仲間

は溫和おとなしいよ。家うちへ手紙を書いたから、家から銀五千ルーブリを送つて来ることになつてゐる。それで食べ物もよくなるし、ひどい眼にも會はずにすむのさ。」

ジイリンは云つた。「僕の仲間がどうしようとするそれは勝手だ。多分金持なんだらう。しかし僕は金持ちやない。僕は前にお前たちに話した通りなんだ。お前達が殺したいと云ふんなら殺すがいゝ。だがさうすると、お前たちは、なんにもならないんだぞ。と云つて僕は五百ルーブリ以上は拂へないんだ。」

彼等は黙り込んだ。

突然、アブドゥルは跳び上つて、小さな鞆かばんを持つて来て、ペンと一枚の紙とインキを出し、それをジイリンの手に握らせて、それから彼の肩を叩いて、手眞似で、「書け。」と云つた。アブドゥルは五百ルーブリを受取ることに同意したのであつた。

「一寸待つてくれ。」と、ジイリンが通譯に云つた。「あの男にかう云つてくれ。吾々にいゝものを食はせ、いゝ着物を着せ、適當な履物はきものを與へて、吾々が愉快に暮せるやうに二人を一緒に置かなくちやいけない。それから、この足枷あしづかを除つてくれ。」

ジイリンは鞆鞆人の主人を見て微笑ほほえんだ。主人も亦微笑

んだ。そして彼はジイリンが要求したことを聞いて云つた

「お前たちには極上等の着物を與らう——婚禮の時に使ふやうな長外套と長靴を。それから王様の食べるやうなものを食べさせてやらう。またお前たちが一緒に暮したいと云ふなら、あの小屋の中に一緒にゐるがいゝ。しかし足枷あしづかは除ることが出来ない。除つたら逃げるからだ。が、夜だけは除つてやらう。」そして彼は跳び上つて、ジイリンの肩を叩いた——「さうすれや、お前もいゝし、俺もいゝんだ。」

ジイリンは手紙を認めたが、間違つた宛名を書いて、先方へ届かないやうにした。そして自分自身に云つた。『逃げ出さう。』

鞆鞆人はジイリンとコスツイリンを小屋に連れて行つて、麥蘖あひぢを敷き、又水差と麵麩あなごと二着の古い外套と、ぼろぼろになつた兵卒用の長靴とを與へた。明らかにその長靴は死んだ兵卒から脱ぎ取つたものであつた。夜になるとかれら二人の足枷あしづかを除り、小屋の中へ閉ぢ籠めて錠かぎをかけた。

三

こんな風にして、ジイリンとその友達はまる一月暮らした。彼等の主人はいつも笑つて云つた、

「お前イワン、好い——俺アブドゥル、好い。」(イワンといふ名はいから、さう呼んだのである)

けれども彼は二人にひどいものを食はせた。稗の粉で拵へて圓餅のやうに焼いた、麵麩種の入らない麵麩をくれた。が、それもどうかすると中までよく焼けてゐないことがある。つた。

コスツイリンは再び家へ手紙を出して、氣を揉みながら、金の届くの待つてゐた。彼は元氣を失つて、毎日／＼朝から晩まで小屋の中に坐つて、何時手紙が来るか日を數へて待つた。でなければ眠つてゐた。

しかしジイリンは自分の手紙が届かないのを知つてゐたし、またその他には手紙を書かなかつた。

『何處で。』と彼は自ら尋ねた——『何處でお母さんは、僕の身請の金をあれだけ手に入れることが出来よう。それにお母さんは、僕がいつも送つてゐた金で、大部分生活してゐたのだ。若しお母さんか五百ルーブリの金を工面しようものなら一文なしになつてしまふだらう。あゝどうにかして僕は此處を逃げ出したいもんだ』

始終彼は眼を開いて、監禁者等の手から逃げる工夫を凝らしてゐた。

彼は韃韃の部落を歩き廻つては口笛を吹くか、でなければ

ば、粘土で人形を拵へたり、樹の枝で籠を編んだり、坐つて何か作つたりしてゐた。ジイリンはあらゆる種類の手細工に妙を得てゐた。

或る時彼は鼻や手や足のちやんと附いてゐる人形を拵へて、それに韃韃人の襦衣を着せて、屋根の上に載せて置いた。すると韃韃人の女たちが水を汲みに通りかゝつた時、主人の娘のデイーナが人形を見つけて、韃韃の女達を呼んだ。女達は水甕を下に置いて、それを見て笑つた。

ジイリンは人形を取つて、それを女達に差出したが、女達は笑つてばかりゐて、それを取らうとしなかつた。

彼は人形をそのままにして置いて、小屋へ入つて、どうするか見てゐた。

デイーナは人形に走り近づいて、あたりを見廻しながら、それを掴んで逃げ出した。

翌朝明け方にデイーナが人形を持つて、鬨の處に出て來たのが見えた。彼女は、もう人形を赤い布片でくるんで、小さな子供のやうにそれを拵すりながら、韃韃の子守唄を歌つてゐた。

一人の老婆が出て來て、彼女を叱りつけて、人形をひつたくつて、それを粉微塵に壞した。そしてデイーナを何處かへ仕事に遣つてしまつた。

ジイリンは前のよりもつと良い、も一つの人形を作つてディーナに與へた。

或る時ディーナは小さな水甕すゐがめを持つて来て、それを下に置いて、坐つて彼を見た。すると彼女は笑ひながら水甕を指さした。

『なんでこんなに燥はしいでゐるんだらう。』とジイリンは訝いぶつた。

彼は水甕を取つて飲み始めた。水だと思つたのが、牛乳であつた。

彼は牛乳を飲み干ぬして、『あ、おいしかつた!』と言つた。

ディーナはどんなに喜んだであらう! 「おいしい、イワン、おいしい!」

から言つて彼女は跳とび上り、手を叩いて、水甕をひつたくつて駈かけ去つた。それから後、毎日牛乳をこつそり彼の處へ持つて来てくれるやうになつた。

韃靼人はよく山羊ヤシロの乳で乾酪チーの菓子を作つて、屋根の上でそれを乾かわかすのだが、ディーナはこつそりこの菓子を彼の處へ持つて来るのであつた。それから又、彼女の父が羊を殺した時には、袖の中へその羊肉の片を入れて、彼の處へ持つて来た。そしてそれを差入れては、駈かけ去るのであ

つた。

或る時激しい雷雨があつた。まる一時間雨はバケツの水をひつくりかへすやうに降つた。どの小川も濁つた。淺瀬であつた處が七尺も水嵩が殖ふえて、圓石が流れに沿うてごろ／＼と轉まがつた。到る處に早瀬が出来て、山々はごうごうと凄まじい響きに充たされた。

雷雨が止むと、水は村の通りを瀬を爲して流れ出した。ジイリンは主人から小刀を借りて、一つの圓筒と水掻きを作り、車輪を拵たへ、その兩端に小さな人形を結びつけた。

小娘たちが布片ぬを持つて来たので、彼は小さな人形に着物を着せた。一人は百姓に、一人はその女房に仕立てた。そしてその人形を結びつけて車輪を小川へ入れた。すると、車が回轉して、人形が踊つた。

村中のものが集まつて来た。子供ばかりでなく、大人の韃靼人もやつて来て、彼等の言葉で囁ささし立てた。「アイ、ウルス! アイ、イワン!」(「うま、うま、ロシヤ人! うま」)

アブドゥルは壊れたロシヤの懐中時計を持つてゐたので、ジイリンを呼んで見せた。そして自分の言葉で喋あべ立てた。ジイリンは云つた――

「どれ寄越せ、修繕きしてあげよう。」
彼は時計を取つて、ペン・ナイフを開いて、時計をばらば

らにした。そしてそれを又組立て、返した。時計は動き出した。この韃靼人は喜んで、自分の古いぼろ／＼になつた半外套を持つて来て彼に與へた。斷るわけにも行かないので、ジイリンはそれを貰つた。そして夜それを被つて寝た。

その時からジイリンが『名人』であるといふ評判が他の部落まで傳つた。わざ／＼遠方の村からやつて来るものさへあつた。修繕して貰ふために、鐵砲や拳銃を持つて来るものもあれば、懷中時計を持つて来るものもあつた。

主人は、彼に道具——鐵鉗と手錐と小さな鑪——を提供した。

或る時一人の韃靼人が病氣に罹つた。人々はジイリンの處へやつて来た——「来て、あの人を癒しておくれ！」

ジイリンは醫學に就ては何も知らなかつた。でも彼は出掛けて行つて、病人を見て腹の中で云つた、『多分、ひとりで癒るだらう。』彼は小屋へ歸つて、水と砂とを取つて、それを振り混ぜた。それから韃靼人の面前で、その水に向つて何か二言三言云つて、それを病人に飲ませた。

幸ひにその韃靼人は癒つた。

ジイリンはその頃には、彼等の言葉が幾らか分るやうになつた。そして幾人かの韃靼人と懇意になつた。彼等がジイリンに用のある時は、「イワン、イワン。」と名を呼んだ。

が、その他の者はいつでも、まるで野獸でも見るやうな眼付で彼を見るのであつた。

例の赤髯の韃靼人はジイリンを好かなかつた。彼はジイリンに會ふと、顔を顰めてわきを向いた。でなければ、彼を買つた。

彼等の中に老人がもう一人ゐた。彼は部落には住んでゐないで、山の下からやつて来た。ジイリンは彼が回教寺院に祈禱に来る時の他は彼に會はなかつた。この老人は體が小さくて、帽子の上に白い手拭を飾りに巻き付けてゐた。顎髯も口髭も短くつんでゐるが、兩方とも羊毛のやうに白かつた。顔は皺が寄つて、煉瓦のやうに赤く、鼻は鷹の鼻のやうに曲つて、目は灰色で、意地悪さうだつた。そして齒は犬齒が二本あるきりだつた。

この老人はいつも、頭被を着けて、杖に寄りかゝつてやつて来た。そして狼のやうに尻みつけるのであつた。ジイリンに會ふと、いつでも鼻息を吐いて背を向けた。

或る時ジイリンはこの老人がどんな處に住んでゐるか見たいと思つて、山を降りて行つた。狭い小徑を下ると、小さな石垣を繞らした庭が見えた。垣根の向う側には、櫻や桃の木や、平な屋根の小屋があつた。

もつと傍へ近づくと、窠で作つた蜜蜂の巢が見えた。蜜

蜂はその周囲をぶん／＼唸りながら飛び廻つてゐた。老人は蜂の巢の前で膝をついて、何か頻りに世話してゐた。

ジイリンはもつとよく見るために背伸びをした。すると彼の足枷が音を立てた。

老人は振返つて、喚き立てながら、帯の蔭から短銃を引抜いてジイリンに發射した。ジイリンは危いところで石礮に身をかはす事が出来た。

老人はジイリンの主人に苦情を云ひに來た。アブドゥルはジイリンを呼び寄せて、にや／＼笑ひながら訓いた、

「何故お前はあの老人の家へ行つたんだ。」
「僕は、別に何にも悪いことをした覚えはない。たゞあの爺さんが、どんな風に暮らしてゐるか見たいと思つただけだ。」

アブドゥルはそのことを老人に説明した。が、老人は怒つて、しつと制し、何かもぐ／＼云つて、糸切齒をむき出し、手を振上げてジイリンを嚇しつけた。

ジイリンには何にも分らなかつた。が、老人はアブドゥルに、あの二人のロシヤ人は殺してしまふがいゝ、村に置いておくのは不都合だ、と云つてゐるのだといふことが、ほど呑み込めた。

老人は立去つた。

ジイリンは自分の主人に訊ねた。「あの爺さんは、どんな人だね。」

主人は答へた。

「あれは偉い男だよ。あの男は前からずつと吾々の中では一番の勇士なんだ。ロシヤ人も随分殺したことがあるんだよ。元は金持で、女房が三人と息子が八人もあつたが、みんな一つの村に住んでゐたんだ。所がロシヤ人がやつて來て、あの男の村を壊してあの男の息子を七人殺したんだ。生き残つたたつた一人の息子が、ロシヤ人に降参したので、爺さんは出掛けて行つてロシヤ人に降参し、三月の間ロシヤ人の中で暮らしてゐた。そしてやつと息子を見つけ出すと、自分の手で其奴を殺して逃げて來たんだ。それから爺さんは戦争をばつたり止めてしまつて、神に祈るためにメッカに出掛けて行つた。それで頭被を着けてゐるんだよ。誰でもメッカに行つたものはハヂイと云はれて、頭被を着けるんだ。だが、あの爺さんは、お前たちロシヤ人を好かないで、の俺にお前を殺せといふんだよ。だが俺はお前を殺すつもりはない。俺はお前のために金を拂つたんだからね。それにイワン、俺はお前が好きになつて來たので、お前を殺すどころか、全くお前を俺の傍から離したくないんだ、あんな約束さへしななければね。」

彼は笑つて、ロシア語でかう繰り返した。「イワン、お前好い。俺アブドゥル好い。」

四

こんな風にしてジイリンは一月暮らした。晝間は部落を歩き廻るか、何かの細工をするかした。夜が来て部落が静かになると、彼は小屋の中で穴を掘つた。石があるので穴を掘るのは容易な仕事ではなかつた。で、時々鑿キリを使つて石を取り除けなければならなかつた。かうして、やつと掘つて通れるくらゐの穴を壁の下に掘つた。

彼は考へた。「土地の様子さへ分れば、方角を誤る心理はないわけだ。だが鞆鞆人の奴等に聞いたところで、何も話して呉れないだらう。」

或る時、彼は主人の留守を見計つて、晝飯の後で、部落の後の山へ出掛けた。其處から土地の様子を一わたり偵察しようとしたのである。

が、アブドゥルは出掛ける時に、小さな伴トモに、ジイリンの後を跟けて、決して眼を離すなと云ひつけておいた。で、この小伴は、ジイリンの後に跟いて来て、かう叫び續けた。「そんな處へ行つちやいけな。お父さんがいけないつて云つたよ。行くんなら、人を呼ぶよ！」

ジイリンはこの小僧を躡おそしにかゝつた。「遠くへ行くんぢやないよ」と彼は云つた——「あの山へ登るだけだ、此處の人達の病氣を癒すために草を取らなくちやならないんだ。僕と一緒にお出で。この足枷こしがあつては、逃げられやしないよ。明日、お前に弓と矢を作つてやるからな。」

彼は少年を説き伏せた。二人は一緒に出掛けた。見ると山は遠くはないが、足枷のまゝで上るのは容易でなかつた。少しづつ足を運んで、辛つとの事で登り終えた。

ジイリンは頂上に坐つて、土地の様子を調べ始めた。

例の小屋の向うの南には谷があつて、谷の中には家畜の群群が草を食つてゐた。そして谷の底にもう一つの部落が見えた。部落の背後にはこゝより險阻な山がもう一つあり、その後には更にもう一つの山があつた。山と山との間には、ずつと遠くまで森が青ずんでゐた。そして更に山又山が、向うへ行けば行く程、だん／＼高くなつて何處までも續いてゐる。どの山よりも高く、砂糖のやうに白い雪を冠つた峰々が聳え、その雪の峰の一つは、あらゆる山々の上に帽子のやうにそゞり立つてゐた。

東と西にも、やはり同じやうな山があつた。遠近の谷合の部落からは、煙が上つてゐた。

『よし。』と彼は心の中で思つた。「このあたりはみんな奴

等の領分だな。』

それから彼はロシヤの方角を眺め始めた。彼の直ぐ下には小川があり、花園で囲まれた今自分のゐる部落があつた。小川の傍で女どもが坐つて洗濯してゐるのが小さな人形のやうに見える。部落の背後にはこゝより低い山があつて、その向うには、森で蔽はれた二つの山があつた。この二つの山の間は、平原になつてゐて、ずつと遠くまで青ずんで見え、その平原の上には煙のやうなものが延びてゐた。

ジイリンは、彼が要塞の中の家に住んでゐた時、どこから太陽が上つて、どこへ沈んだかを思ひ出さうとして、あたりを見渡した。「丁度あすこら邊りだ。」と彼は云つた。「あの谷に吾々の要塞がある筈だ。あの二つの山の間、彼處へ逃げなくちやならない。」

太陽が西の方へ沈みかけた、雪を頂いた山々は白から赤に變つて、樹木の茂つた山々は黒くなつた。谷間から霧が立ち上つて、ロシヤの要塞がある筈の峽谷は、日没の光で火事のやうに輝いてゐた。ジイリンは目を据ゑて見定めた。何か煙突の煙のやうなものが峽谷にゆらくと裊曳いてゐるやうに思はれた。

で、これこそロシヤ人の要塞に違ひないと彼は考へた。もう遅くなつた。祈禱に集れと呼んでゐる回教僧の聲が

聞えた。家畜の群は歸り始めた。牝牛は鳴いてゐた。少年は、「歸らうよ！」と繰返したが、ジイリンは立去るに忍びなかつた。

が、とう／＼二人は家に歸つた。

『よし。』とジイリンは考へた。『さア地理が分つた。愈々逃げ出さなくちやならない。』

彼はその晩すぐ逃げ出さうと企てた。夜は暗く、月はすつかり虧けてゐた。

運悪くその晩韃靼人等が歸つて來た。いつも彼等は家畜を逐ひながら嬉々として歸つて來るのが常であつたが、今日に限つて、家畜を連れずに、鞍の尻に死んだ韃靼人を載せて歸つて來た。それは例の赤髯の韃靼人の兄弟で、誰かに殺されたのであつた。彼等は不機嫌な顔をして歸つて來て、一同葬式のために集まつた。

ジイリンも見に出掛けた。

彼等は死骸を棺には入れずに、麻布で包んで、村の彼方のプラタナの樹の下へ運んで行つて、草の上に置いた。

回教僧が來た。老人たちが集まつた。彼等の帽子の周圍にはハンカチが結びつけられてゐた。彼等は靴を脱いで、死人の前に列を作つて胡坐をかいた。

前方には回教僧がゐた。その後には頭被を着けた二三人

の老人が並んでゐた。老人たちの後にゐた残りの韃靼人は、皆坐つて俯垂れたまゝ永い間黙り込んでゐた。やがて回教僧は頭を擡げて「アラア！（神云）と云つた。みんなは再び俯垂れたまゝ永い間黙り込んでゐた。そして坐つたとき身動きもしなかつた。

再び回教僧は頭を擡げて、「アラア！」と云つた。みんなが彼に隨つて繰返した。

「アラア！」

それから再び沈黙が續いた。

死人は芝生の上にびくりともしないで横たはつてゐた。

一同もまるで死人のやうにじつと坐り込んで、誰一人として動く者はなかつた。たゞ聞えるものは、微風に動かさるるプラタナの樹の葉擦れの音だけであつた。

やがて回教僧が祈禱を捧げた。一同は立上つた。彼等はその腕に死骸を抱へて運び去つた。

彼等はそれを墓穴へ持つて行つた。墓穴はたゞの穴ではなくて、地の下を穴倉のやうに空洞に掘つてあつた。

彼等は死骸の腋下と脚を捕へて、それを二つに折つた。

そして、靜かに死骸を下へ降ろし、坐つた姿勢にして土の下へ押し込んで、兩腕を腹の上で組ませた。

ノガイ人が緑色の蘆を持つて來た。彼等はそれを墓穴に

差込んで、手早く土で墓穴を埋め、死人の頭の上へ墓石を置いた。そして土を踏み固めて、再び墓の前に列を作つて並んだ。永い間、沈黙が續いた。

「アラア！ アラア！ アラア！」

一同は太息をついて立上つた。赤髯の韃靼人は老人たちに金を與へた。それから自分も立上つて、鞭でその額を三度叩いて、家に歸つて行つた。

翌朝ジイリンは赤髯の韃靼人が、村の彼方へ牝馬を引いて行き、その後から三人の韃靼人が隨つて行くのを見た。

彼等は村の外へ出た。カジイ・ムハメットはその半外套を脱ぎ、下着の袖を捲り上げて逞しい兩腕を出し、短刀を引抜いて砥石で磨いた。韃靼人達が牝馬の頭を持ちあげてゐると、カジイ・ムハメットは近づいて行つて、その喉を切つた。そしてその動物を逆さに倒して皮を剥ぎ始め、大きな手で皮を引張つた。

女たちや娘たちが來て、腸や肺臓を洗ひ始めた。それから牝馬を切り刻んで、肉を小屋へ運んだ。そして村中のものが死者を弔ふために、カジイ・ムハメットの家に集まつた。三日の間、彼等は牝馬の肉を食ひ、ブウザを飲んで、死者を弔つた。従つて韃靼人は皆家にゐた。

四日目の午頃に何處かへ出掛ける用意をしてゐるのをジ

イリンは見た。彼等は馬を引出して馬具を着けた。そしてその中の十人が、カジイ・ムハメットの指揮の下に出發した。アブドゥルだけが家に止まつてゐた。新月は出てゐたが、夜はまだ暗かつた。

ジイリンは考へた。「さア、今日こそ愈々逃げなくちやならない。」で、彼はコスツイリンに話した。

「どうして逃げられるかね。吾々は道も知らないんだ。」

「僕は道を知つてゐる。」

「しかし、一晩では行き着けないだらう。」

「行き着けなかつたら、森の中で夜を明すのさ。僕は圓餅を幾らか貯めてゐる。こんなところにぼんやりしてたつて仕様がなげ、みんなが君に金を送つてくれれば、それは結構さ。だが、そんなに澤山は集められないかも知れないよ。それに、韃靼人どもは今怒つてゐるんだよ。ロシヤ人が彼奴等の一人を殺したので、僕たちを殺すつもりだといふことだよ。」

コスツイリンは思案した揚句、愈々決心した。

「宜しい、行かう！」

五

ジイリンは自分の穴の中へ這つて行つて、コスツイリンも入れるやうにそれを擴げた。それから二人は坐つて、部落が靜かになるのを待つた。

部落中の人々が靜まるや否や、ジイリンは壁の下を這つて外側へ出た。そしてコスツイリンに囁いた、「這つて來たまへ。」

コスツイリンも這ひ出した。けれども這つてゐる時に、彼は足を石に打つていたので、音がした。

主人は以前から見張番として一匹の斑犬を飼つてゐた――それは極めて癡猛な犬で、ウリヤンと呼んでゐた。

ジイリンは前からよくこの犬に食物をやりつけてゐた。ウリヤンシンは物音を聞きつけると、吠えて跳び廻り始めた。そして他の犬がそれに加はつた。

ジイリンは微に口笛を吹いて、犬に圓餅の片を與へた。ウリヤンシンはジイリンだと分ると、尾を掉つて、吠えるのを止めた。

アブドゥルはこの騒ぎを聞きつけて、小屋の中から叫んだ。

「ガイト！ ガイト！ ウリヤンシン！」

けれどもジイリンは、犬の耳の後を搔いてゐた。犬はもう聲を立てず、その足をジイリンに擦り附けながら、尾を

掉つた。

二人は暫く片隅に隠れてゐた。

あたりはまた元の沈黙にかへつた。たゞ聞えるものは、追込の中の羊の鳴聲と、ずつと下の方で小石に咽んでゐる水の音だけであつた。

暗かつたが、空は星で飾られてゐた。山の上には、新月が赤くその角を上に向けて懸つてゐた。

谷々には、牛乳のやうに白い霧が立ち昇めてゐた。ジイリンは立上つて友人に云つた。

「さあ、兄弟、アイーダ！」

二人は再び歩き出した。

が、彼等が歩き出すや否や、屋根の上で回教僧が何か叫んで居るのが聞えた——

「アラア！ ベスマイルラア！ イリラフマン！」

それで、村の人達が、回教寺院に集まつて來ることが分つた。

で、二人は壁の蔭へ隠れて、また坐つた。

二人はそこに長い間坐つて、人々が通り過ぎるのを待つてゐた。再びあたりは静かになつた。

「さア、發たう！」二人は十字を切つて出發した。

彼等は庭を横切つて、險しい土手を通つて流れに下り、

それを渡つて、谷に沿うて進んだ。霧は濃く、二人の周圍をすつかり閉ざしてしまつた。が、頭の上には星がまだ見られた。

ジイリンは星によつてどの方向へ行くべきかゞ分つた。霧の中は涼しく、歩きよかつたが、たゞ長靴が邪魔になつた。——それは踵が摩り切れてゐた。ジイリンは長靴を脱ぎ捨て、跣足で歩いた。石から石へ飛びながら、絶えず星に目を配つてゐた。

コスツイリンは遅れ勝ちになつた。「もつと緩り歩いてくれたまへ。」彼は云つた。「長靴が擦れて足ぢうの皮が剝けちまつた。」

「では脱ぎたまへ、その方が歩きいゝぜ。」

コスツイリンは跣足で歩き始めた。けれども、それは猶更いけなかつた。絶えず石で足を引掻いて、始終遅れ勝であつた。

ジイリンは彼に云つた。「君は足ぐらゐ切つたつていゝんだよ、直ぐ癒るんだからね。だが、とつ捕まつたら最後、殺されちまふから、その方が餘程よくないぜ。」

コスツイリンは何も云はずに、呻きながら這つてゐた。

長い間、二人は谷を歩いた。と、不意に右の方で犬の吠えるのを聞いた。ジイリンは立止まつて四周を見廻し兩手

で探りく、土手へ這ひ上つた。

「ヤア！」と彼は云つた。「間違つた、右の方へ來過ぎた。こゝは敵の部落の一つだ。僕は山の上から、それを見て知つてゐる。僕等は左の方へ後戻りして、山の上へ登らなくちやならない。あすこに森がある筈だ。」

けれどもコスツイリンは反對した。「ちよつと待つてくれたまへ。一息ついて行かう。僕の足は血だらけだ。」
「おい、兄弟！ 足は直ぐよくなるよ。君はもつと軽く歩かなくちやいけない。こんな風に。」とジイリンは左の方に振り向いて、森の方へ丘を登つた。

コスツイリンは相變らず遅れ勝で呻いてゐた。ジイリンは「しつ！」と叱りつけて、益々歩を速めた。

山を這ひ上ると、そこに森があつたので、その中へ入つた。二人の着物は茨のためにずた／＼に裂けた。丁度森の中に小徑が見つかったので、それに沿うて歩いた。

「ちよつと待ちたまへ！」

小徑の上に蹄の音が聞えた。二人は立止まつて、耳を傾けた。それは馬が足踏みするやうな音だつたが、それもすぐ止んだ。二人は又前へ進んだ。と、再び足踏の音が聞えた。二人が止まると、その音も止つた。

ジイリンは前の方へ這つて行つて、小徑の上の明るい場

所を檢べて見た。

そこに何か立つてゐた。それは馬のやうでもあり、さうでないやうでもある。そしてその上にはどこから見ても人間らしくない何か奇妙なものが載つてゐる。

それが鼻を鳴らすのが聞えた。「何と云ふ妙な奴だ！」

ジイリンは微に口笛を吹いた。と、忽ち其奴は小徑から森の中へどつと駈け込んで、下生の間に凄じい音を立て、まるで嵐のやうに木の枝を押し碎きながら突進して行つた。

コスツイリンは恐怖の餘り地面へへたばつた。しかしジイリンは笑つてかう云つた。

「あれは牡鹿だよ。君はあれが角で枝を折つて行くのを聞いただらう。僕等は彼奴を怖がらしたんだよ。そして彼奴はまた僕等を怖がらしたんだ。」

二人はどし／＼進んだ。既に大熊星は沈みかけてゐた。夜の明けるのも遠くはなかつたが、彼等は果して正しい道を進んでゐるかどうか疑はしかつた。ジイリンは、韃靼人に連れられて來たのは確かにこの道で、あと十露里ばかり行けば、自分達の要塞に達するだらうと考へてゐた。しかし之れといつて確かな目標はなかつた。それに夜分はなかなか見分けがつかなかつた。

二人はや／＼展げた處へ來た。コスツイリンは坐つて云つ

た。

「君の好きなやうにし給へ。僕はもう一步も歩けない。足が云ふ事を聞かないんだ。」

ジイリンは彼を説き伏せようとした。けれど、コスツイリンは云つた。

「いや僕はもう歩きたくないのだ、歩かうたつて歩けないのだ。」

ジイリンは怒つてコスツイリンを罵つた。

「ぢや、僕一人で行くよ。さやうなら！」

コスツイリンも跳び上つて隨うて行つた。二人は更に四露里行つた。森の中には霧がまた一段と濃く立ち込めて、眼の前は何一つ分らなくなつた。星は最早見えるか見えないう位であつた。

突然前方で、馬の足踏みしてゐる音がした。彼等は蹄鐵が石にぶつかるのを聞くことが出来た。ジイリンは腹這ひになつて、地面に耳をつけて聞いた。さうとした。

「さうだ、あれは——あれは、誰かゞ馬に乗つて僕等の方へやつて来るんだ。」

二人は道の片側に迂り込んで、草叢の中に屈んで待ち受けた。ジイリンは道に近い處に匍ひ出して見た。

彼は馬に乗つた韃靼人が、牝牛を追ひながら進んで行く

のを見た。その男は何か獨り言を云つてゐた。韃靼人が行き過ぎてしまつてから、ジイリンはコスツイリンの處へ歸つた。

「さア、やつと命拾ひした。立ち給へ！ 出掛けよう！」

コスツイリンは立上らうとして倒れた。

「駄目だ、どうしても駄目だ。僕はすつかり力が抜けてしまつた。」

彼は肥つてでぶ／＼してゐるので、體中すつかり汗塗れになつてゐた。それに森の中の冷たい霧に包まれたのと、足を痛めたので、全く元氣を失つてしまつてゐた。ジイリンは力をこめて、彼を起さうとした。するとコスツイリンは叫んだ。「あゝ！ 痛い。」

ジイリンは冷つとした。

「どうしてそんな大きな聲を出すんだ。韃靼人が近くにゐるのを知らないのか。彼奴が聞きつけるよ。」

だが、胸の中ではかう思つた。「さて、この男はほんとに疲れ切つてしまつたんだ。どうしたらいいか。俺は友達を見棄てるわけには行かない。」

彼は云つた。「さア立ち給へ。僕の背中におぶさり給へ。君がちつとも歩けないのなら、僕がおぶつて行かう。」彼はコスツイリンを肩に載せて、その腰の處を手で支へた。そ

してこの重荷を負つて、小徑を辿つて行つた。「どうか手を僕の喉に當てないで呉れ給へ。しつかり僕の肩につかまつてゐるんだ。」彼は云つた。

ジイリンにとつては大變な重荷であつた。彼の足も血だらけになつてゐた。そして疲れてゐた。彼は立止まつてコスタインを下して、少し體を休ませ、それから彼をもつと高く背に載せた。そして前へ進んだ。

さつきの韃靼人は、明らかにコスタインの叫び聲を聞きつけたに違ひなかつた。ジイリンは誰か自分達の後を追うて、韃靼語で叫んでゐるのを聞きつけた。で、彼は藪の中へ身を隠した。韃靼人は銃の狙ひを定めて發砲したが、狙ひは外れた。彼は韃靼語で何やらぶつ／＼云ひ始めた。そして馬を飛ばして小徑を向うの方へ駆けて行つた。

ジイリンは云つた。「さア、もうお終ひだ、兄弟。あの犬め、屹度韃靼人の一隊を連れて、後を追掛けて来るだらう……今のうちに三露里も逃げ延びておかなければ、それこそお終ひだ。」それから彼は心の中で、コスタインの事を考へた。「この丸太と一緒に連れて行かなくちやならないとは、何て情ないことだらう。獨りだつたら、もつとずつと遠くへ逃げ延びてゐるに違ひないのに。」

コスタインが云つた。「獨りで行き給へ。僕の爲に君迄

やられるつて法はないぢやないか。」

「いや、行かない。友達を見棄てられるもんかね。」彼は再びコスタインを肩に載せ上げて出發した。こんな風にして一露里歩いた。何處まで行つても森で、出口らしいところはなかつた。しかしその時、霧は晴れ出して、小さな雲になつて流れて行くやうに見えた。星はもう一つも見えなかつた。ジイリンはすつかり疲れ果てゝしまつた。

だん／＼行くと、路傍に小さな泉があつて、石で圍ひがしてあつた。彼はそこで立止つて、コスタインを下した。

「少し休まう。」と彼は云つた。「水を飲んで、圓餅を喰べよう。もうそんなに遠くはない筈だ。」

彼が水を飲まうとして體を伸ばした途端に、後の方で蹄の音が聞えた。彼等はもう一度、崖の下の右手の藪の中に隠れてうつ伏してゐた。

そのうちに韃靼人どもの聲が聞えた。韃靼人どもは、二人が道路から折れた場所へ来て立止まつた。そして暫く相談したあとで、犬に嗅ぎつかせようとするらしかつた。二人は藪の中で、何か押し碎く音を聞いた。一匹の見知らぬ犬が二人の方へ眞直ぐに飛んで來た。犬は立止まつて吠えた。

韃靼人等は二人を見つけ出した。みんな見知らぬ韃靼人であつた。

彼等は二人を捕へて縛りつけ、馬の上に載せて運んで行つた。

三露里ばかり行くと、二人の轆轤人を連れた主人のアブドゥルに會つた。彼は二人を捕へた轆轤人等に何か云つた。と、二人はアブドゥルの馬に移され、例の部落に連れて行かれることになつた。

アブドゥルは最早笑ひもせず、二人に向つては一言も云はなかつた。

一同は夜明に村へ着いた。二人の捕虜は路傍に坐らせられた。子供達がその周圍に集つて、石や鞭で窘めたり、罵つたりした。

轆轤人等は彼等の周圍になつて集まつた。その中には山の下から來た例の老人も加つてゐた。一同は議論し出した。それは二人をどう處分すべきかを定めてゐるのだといふことが、ジイリンに分つた。

或る者は、二人をもつと遠くの山の中へ送らなくてはならないと云つた。例の老人は、二人を殺してしまへと主張した。アブドゥルはそれに反對して云つた。「俺は彼奴等のために金を出したんだ。だから身代金を取らなくちやならん。」

しかし老人は云つた。「彼奴等は何も拂やしないよ。却つ

て俺達の害にたるだけぢや。それにロシヤ人を養つて置くのは罪悪だ。殺しちまへ、さうすれや、すつかり片づくのぢや。」

一同は解散した。アブドゥルはジイリンのところへ來て、相談の結果を知らせた。

彼は云つた。「若し二週間以内に身代金を送つて來なければ、お前達を鞭でひつぱたくぞ。そして、もう一度逃げ出さうものなら、犬のやうに打ち殺してやるぞ。手紙を書け。しつかり書け！」

紙を持つて來た。二人は手紙を書いた。足には再び足枷が欲められて、向教寺院の後へ連れて行かれた……そこには、深さ十二尺の穴があつた。二人はこの穴へ押し落された。

六

二人の生活は惨めなものになつた。晩になつても足枷を外してくれないし、外へは全然出して呉れなかつた。

まるで犬にでもくれるやうに、焼きもせぬ生麴麩を投げ込み、水は瓶に入れて下して來るのであつた。穴の中は濕つて、息が詰りさうだつた。

コスツイリンは病氣になつた。體全體が痲痺質斯に罹つ

て腫れ上つた。彼は眠つてゐる時の外は絶えず呻いてゐた。

ジイリンでさへも元氣が無くなつた。彼は自分達が二進も三進もならない境遇にゐることを知りながら、どうしたらそこから出られるか分らなかつた。

彼は穴を掘りはじめた。けれども掘つた土を棄てる處がなかつた。アブドルはそれを見つけて、彼を殺すと脅かした。

或る時、彼は穴の中で蹲まつて、自由な生活の事を考へて悲しくなつてゐると、不意に圓餅が一つ眞直ぐに膝の上へ落ちて來た。續いてまた一つ。次に櫻實が降つて來た。見上げるとデイーナがゐた。彼女は下に居るジイリンを覗いて笑つたが、やがて駆け去つてしまつた。ジイリンは、

『デイーナが俺を助けてくれないか知ら？』と考へ始めた。彼は穴の中を僅かばかり片づけ、粘土を少しとつて、それで幾つかの人形を作つた。男だの、女だの、馬だの、犬だのを拵へた。そして『デイーナが來たら、抛り上げてやらう。』と獨り言を云つた。

しかし翌日デイーナは姿を現はさなかつた。そのうちジイリンは馬蹄の音を聞いた。韃靼人どもが馬で上つて來たのだ。彼等は回教寺院に集まつて、議論したり、怒鳴つた

り、ロシヤ人について話し合つたりしてゐた。

例の老人の聲も聞えた。ジイリンにはよく分らなかつたが、ロシヤ人が何處か近くまで來てゐるので、韃靼人等はロシヤ人が村を攻撃するのを怖れ、捕虜をどうしていいかが分らないのだらうと想像した。

彼等は暫く話をして立去つた。不意にジイリンは穴の上の方で、何か衣摺れの音のするのを聞いた。見ると、デイーナが膝頭を頭より高くおつ立て、躡蹠んでゐた。前屈みになつてゐるので頸飾が垂れ下つて、穴の上で揺れ、その小さな眼が星のやうに輝いてゐた。彼女は袖口から二個の乾酪餅を取出して彼に投げ下した。ジイリンは、それを受取つて云つた。「どうしてお前は長いこと來なかつたの。僕はお前にやらうと思つて玩具を拵へて置いたよ。さあ、あげよう。」彼はそれを一つづゝ彼女の方へ抛り上げ始めた。

しかし彼女は頭を振つて、人形には眼もくれなかつた。「人形は要らないの。」と彼女は云つて黙つて坐つてゐた。やがて又かう云つた。「イワン、皆があんたを殺さうとしてゐるのよ。」

彼女は自分の喉を手で横に切る眞似をして見せた。「誰が僕を殺さうとしてゐるんだ。」

「お父さんなのよ。あのお爺さんが、お父さんに云ひつけたの。でも、私はあなたが可哀さうだわ。」

ジイリンは云つた。「宜しい、ぢやア、僕を可哀さうと思ふんなら、長い棒を持つて来ておくれ。」すると、彼女は頭を振つて、そんなことは出来ないといふ意味を示した。

ジイリンは両手を組んで嘆願した。「デイナー、どうぞ！ 棒を持つて来ておくれ、デイナーシユカ！」

「そんなこと出来ないわ。」と彼女は云つた。「みんなに見つかるから。みんな家にゐるんだもの。」かう言つて、彼女は駈け出した。

それからジイリンは晩方までそこに坐つて一體どうなることだらうと考へ込みながら、絶えず眼を上に向けてゐた。星は見えたが、月はまだ上らなかつた。回教僧は例の叫聲を立てた。あたりは静かになつた。

『あの娘は怖がつてゐるんだな。』とジイリンは獨り思ひながら、うと／＼と微睡み始めた。

突然、土の塊りが頭の上に落ちて来た。見上げると、長い竿が穴の縁を這つた。竿はする／＼と彼の方へ降りて来て穴の底に達した。ジイリンは喜んだ。竿を掴んで引寄せた——それは丈夫な竿であつた。彼は前にそれがアブドゥルの屋根の上にあつたのを見たことがある。

上を見上げると空には星が輝いてゐた。そしてデイナーの眼が、穴の上で猫の眼のやうに、暗闇の中で光つてゐた。彼女は顔を穴の縁に寄せかけて、「イワン、イワン。」と囁きながら、『後生だからそつとね。』といふやうに、顔の前で手を振つた。

「どうしたの。」とジイリンが云つた。

「みんな出掛けて行つたの。二人家にゐるだけなの。」

で、ジイリンは云つた。「さア、コスツイリン、行かう、吾々の最後の試みをして見よう。僕、君に手を貸すよ。」けれども、コスツイリンはジイリンの云ふことを聞かうとしなかつた。彼は云つた。

「いや、僕はとて此處から出られさうもないよ。寢返りも打てないのに、どうして行けるもんか。」

「よし、ぢや、さやうなら、僕を悪く思つてくれるな。」彼はコスツイリンに接吻した。

それから竿を掴んで、デイナーにしつかり抑へてゐるやうに云つて、登り始めた。

二度落ちた——それほど足枷が邪魔になつた。コスツイリンは下から押上げた。かうしてどうかかうか上の方まで攀ち登つた。デイナーはいかにも嬉しさに笑ひながら、一生懸命に彼の襟衣の袖を掴んで引上げた。

ジイリンは竿を引上げて云つた。「元の處へ返してお置き、ディーナ。みんなが見つけると、お前を管で打つからね。」

彼女は竿を引摺つて行つた。ジイリンは山を降り始めた。崖の底に達した時に、彼は尖つた石を拾つて、足枷の錠を壊さうとした。が、錠は堅固で、うまく壊すことが出来なかつた。

彼は誰かゝ軽い滑るやうな足取で急いで下りて来るのを聞いた。「多分ディーナが又來たのだらう。」と思つた。

ディーナは彼の傍へ駆け寄つて、石を一つ拾つて云つた。「私がやつて見ませう。」

彼女は膝をついて、ありつたけの力でやつて見た。が、その手は、楊の枝のやうに纖弱く、力も何もなかつた。彼女は石を抛り出してわつと泣きだした。

ジイリンは再び錠を壊さうとした。ディーナはその傍に蹲んで、彼の肩に寄りかゝつてゐた。ジイリンはあたりを見廻すと、山の背後の左の方に、火のやうな赤い輝きが見えた。丁度、月が上らうとするところであつた。

『月が上るまでに、谷を越えて森の中へ入らなくちやならない。』彼はかう獨言を云ひながら立上つて、石を投げ棄てた。足枷には構つてゐられなかつた——それを體に着けた

まゝでも行かなくてはならなかつた。

「さやうなら。」と彼は云つた。「ディー・シカ、僕はいつでももお前を忘れないよ。」

ディーナは彼に纏りついて、持つて來た圓餅をしまひ込む處を兩手で探した。ジイリンはそれを受取つた。

「有りがたう。」と彼は云つた。「お前はよく氣のつく可愛い、娘だ。僕がゐなくなつたら、お前に人形を拵へてくれる人もないだらう。」彼はディーナの髪を撫でた。

ディーナはわつと泣き出した。それから兩手で顔を隠して、山羊の仔のやうに山腹を攀ち上つて行つた。闇の中で、彼女の鬚に下けてゐる金貨の飾りが、背の上でぢやらぢやら鳴つてゐるのが聞えた。

ジイリンは十字を切つて、音がしないやうに足枷の錠を手で抑へ、始終足を引摺つて、月の上る邊りの輝きを見詰めながら進んで行つた。

彼は道を知つてゐた。一筋道を八露里歩かなければならなかつた。そして月がすつかり上り切るまでには、森の中へ逃げ込まなければならなかつた。彼は小川を横切つた。

小山の向うの空はだん／＼白んで來た。

それから谷に沿うて進んだ。だん／＼明るくなりだした。彼は絶えずあたりに眼を配りながら歩いた。しかし月

はまだ見えなかつた。輝きはその時白い明りに變りつゝあつた。そして谷の一方の側は、だん／＼明るくなり、森は次第々々に山際へ近づいて行つて、遂々その麓まで退いて行つた。彼は絶えずその森の處を選びながら、歩いて行つた。彼は出来るだけ急いだ。が、月はそれよりも早く上つた。やがて右の方の山の頂きが明るくなつた。

月が山の上になると同時に、ジイリンは森へ近づいた。晝間のやうに明るく白くなつて、樹の葉が一枚々々見えた。山の中は静かで明るく、何もかもが死んだやうな中に、下の方で小川がさら／＼流れる音だけが聞えた。そして誰にも逢はずに森へついて、一番暗い場所を選んで休んだ。その間に圓餅を一つ喰べた。石を採して、今一度足枷を壊さうとしたが、手を痛めるだけで、錠を壊すことが出来なかつた。

彼は立上つて道を進んだ。一露里歩くと、力が盡きてしまつて、足が痛みだした。更に十歩も進むと、立止まつた。彼は獨言を云つた。『仕方がない。力の續く限り歩いて見よう、坐つたら再び立上ることが出来ないだらうから。明るくなるまでに要塞へ着けなかつたら、森の中に寝轉んで日中を過して、又明日の晩出發しよう。』

彼は終夜歩いた。一度、馬に乗つた二人の韃靼人に會

つたが、かなり遠い所から彼等の來るのを聞きつけたので、樹木の後に隠れた。

もう月が青くなりかけた。露が落ちて、曉が近づいた。彼はまだ森の端に達しなかつた。

彼は又獨言を云つた。『もう三十歩行つて、森の中へ逃げ込んで、坐つてゐよう。』

彼は三十歩進むと、森の盡きたのが分つた。森の端れに出ると、もう一面に明るくなつて、曠野と要塞とが掌を指すやうに見えた。左手には、山の麓の近くで、火が燃えたり消えたりしてゐた。煙が立并つて、人々が歩哨の篝火の周圍を動いてゐた。

彼はじつと目を凝らした。そして小銃の輝くのを見た。カザックであつた。兵卒であつた！

ジイリンは狂喜した。

彼は最後の力を絞りに出して、山の麓へ行つた。そして獨言を云つた。『神様、助けを垂れさせたまへ。騎馬の韃靼人が、この木一本無い野原では私を見附けるかも知れませんが！ 私はこんなに味方に近づいてゐても、その韃靼人から遁れることは出来ないのです。』かう考へてゐる間に、彼は左手の千四百尺足らずの小丘の上に、三人の韃靼人の居るのが分つた。彼等はジイリンを見つけた——彼に向つて

駈け出して来た。彼は驚いた。兩手を振つて、聲を限りに自分の同胞に向つて叫んだ。「兄弟！助けてくれ、兄弟！」

ロシアの兵卒等は彼の聲を聞きつけた——馬上のカザック兵が韃靼人の行手を横切つて、彼の方に突進して来た。が、カザックは遙か遠くにゐて、韃靼人どもは近かつた。

で、ジイリンは最後の力を出して、足枷を手に持ちながらカザック等の方へ駈け出した。そして、無我夢中に十字を切りながら叫んだ。「兄弟、兄弟、兄弟！」

カザック兵は十五騎であつた。

韃靼人等は驚いた。彼等はジイリンの傍へ達しない中に立止まつたので、ジイリンは、カザックの傍へ達することが出来た。

カザックは彼を取り巻いて尋ねた——「お前は誰だ。何をしてゐる。何處から来た？」

けれどもジイリンは殆んど失神してゐた。彼は泣いて、そして叫び続けた。「兄弟！兄弟！」

兵卒達が急いでやつて来て、彼の周圍に集まつた。或者は彼に麵麩を與へ、或者は粥を與へ、或者は火酒を與へ、或者は外套を掛けてやり、又或者は足枷を壊した。

ジイリンを見知つてゐた將校達は、彼を要塞へ連れて行つた。部下の兵卒達は喜んだ。僚友達はジイリンの處へ押

掛けて来た。

ジイリンは自分の出會つた「伍一」を彼等に物語つた。

「それが、家へ歸つて結婚しようといふ途中のことなんだ。して見ると、これは僕の運命では無かつたと見える。」と言つた。

そこで彼はカフカズで勤務するために止まつた。それから一ヶ月経つと、コスタイリンは五千ルーブリの身代金で歸つて来た。殆ど生きた心地もない彼を、人々は家へ連れ歸つたのであつた。

— 了 —